新群書類從

第二

例言

一曩に新群書類從の第一に於て、西澤文庫の中『傳奇作書』と『皇都午睡』との二部を公にし、此卷に於ては『脚色餘錄』と『讃佛乘』の二部を收むる筈なりしが、更に『綺語文草』二卷と『南水漫遊』十五卷とを加へたり。

一『綺語文草』は西澤文庫の書目によるに十五卷あり。こゝに收むる二卷は、其何れの部分なるかを詳にせざれど、上卷は「有馬温泉記」、下卷は「暮秋北山廻り」、「花洛紅葉見記行」の三編なり。原本は關根正直氏の藏本にして、「西澤文庫」、「李叟」等の藏印ありて、一鳳自筆の稿本なりといふ。此書流布本極めて稀少なれば、零本ながら關根氏に請ふてこゝに收むることゝしたり。

一第一の卷に收めたる『皇都午睡』の如き、此卷の『讃佛乘』及び『綺語文草』の如き、寧ろ演劇とは緣遠き書にして、演劇の部に之を加へた

ること稍ゝ穩當ならざるに似たれど、抑ゝ一鳳が記述たる何れも狂言作者の立場より筆を著けたるものにして、たとへ其事柄は演劇に緣なきも、彼の天地一戲場、世事是狂言綺語の主義に基き、讀書は勿論。和歌、俳諧、人情風俗の硏究、卽ち宇宙間の森羅萬象を知るは、恰も狂言作者の資格を作るにありて、其旅行日記も吟詠も隨筆も皆劇詩の材に外ならず。著述の精神既にこゝにありとすれば、强ひて區別を立るの要もなかるべしと、其全部を演劇の部に收めたり。讀者これを諒せよ。

一『南水漫遊』は十五卷本と二十七卷本との二種あり。十五卷本は重に歌舞妓、淨瑠璃に關する事を收め、二十七卷本は其以外の雜事を交ゆるもの頗る多し。蓋し此二種に就て說をなすものは、歌國が隨筆、最初は唯『南水漫遊』と題して、種々の事實を集めたるが、後に至りて二部に分ち、歌舞妓、淨瑠璃等に關したるものは『南水漫

遊』の題下に存し、雜事に關しては別に『攝陽落穗集』に拾ひ集めたるもの丶如く、二十七卷本は未だ其二書に分たれざる以前の稿本の今日に傳はれるなるべしといへり。素より確たる證據あるにあらざるも、十五卷本と二十七卷本とを對照する時は前者は比較的に記事整頓し、後者は雜然統一を缺けるは、或は然ることもあらんかとの感を懷かしむ。兎に角二者の內容には著しき相違ありて、傳寫毎に取捨してこゝに至りしものにはあらで、全く二書の根本を異にすることは疑を容れず。依りてこゝには演劇に關する且誤謬少なく稍統一ある十五卷本を收め、二十七卷本は參考に資したるのみ。たま〳〵二十七卷本を所持せらるゝ人の、本書と比較して或は記事の少きを見て、直ちに脫洩と咎むることなからんことを望む其他校訂の方針に就ては、凡て前例と異なるところなし。

明治三十九年七月

水谷不倒識

濱松歌國小傳

水谷不倒撰

『南水漫遊』の著者濱松歌國は安永五年浪華に生る。通稱布屋氏助、又淸兵衞ともいひ、島の內布袋町に住す。颯々亭南水と號す。戯作を好み、歌舞伎に精通するの故を以て、始め役者評判記を著したるが、或時大谷友右衞門(三代目の友右衞門にして始め中山門三又嵐舍丸と呼びたる人)が評をなしたるに、友右衞門に不利なる言ありしとて、友右衞門より故障を申込みしことありて、爾來評判記を作らざりきとぞ。狂言作者としては文化、文政の間に於る、芝居番附に時々其名を掲げたるものあり、最初は濱松氏助と名乘り、文政四五年より歌國と改稱せり。多くは道頓堀中の芝居に出勤せるものゝ如く、いつも三枚目若くは二枚目の地位に在りて、立作者とはならざり

しが如し。濱松歌國が名の出る所、必ず立作者には奈河晴助あり。これより考ふるに或は奈河晴助が帷幕の作劇家なりしか、はた晴助の知遇によりて芝居へ出勤せしものなるか、兎に角二人は深き關係ありしが如し。其著書の世に知られたるものは、『南水漫遊』と『攝陽落穗集』となり。『南水漫遊』は十五卷ありて劇界の事を記し、『攝陽落穗集』二十卷は大阪の古事來歷を記し。西澤文庫と共に浪華文藝、風俗の記錄として並び稱せらる。著書の上より一鳳と歌國との異點を求むれば、一鳳は一種の批評家にして、頗る諧謔に富みたる人なることを知れど歌國は忠實なる記述家といふの外に何等の特色を見ず。狂言作者としての地位は勿論、雜學涉獵の範圍に於ても。人物に於ても歌國は凡てに於て一鳳には及ばざりしが如し。文政十年二月十九日歿す享年五十二歲なり。

新群書類從第二目次

演劇（一）

西澤文庫 綺語文草

今古參考 南水漫遊初編

新群書類從第二

演劇

西澤文庫脚色餘錄自序

清の康熙帝大千世界を雜劇に見立日月の燈江海の油風雷の鼓板天地間一大戲場堯舜は旦文武は末莽操は丑淨古今來許多脚色と對聯に記されし博識見ぬ唐山の評は扨置吾朝大戲場の濫觴は日本書紀の正本を本讀すれど大八洲の太夫元天照大神戲房(がくや)の確執(もめ)の役不足より石窟に入まして磐戸(いりかはり)を閉て幽居幕曳晝夜の暗(きつ)號(かけ)を失ひ頭取月日の出沒を覺へず世界(よりぞめ)はくろ幕の常闇となりてより五月蠅なす神達初會して神會に會給ひ白髯(はめもの)の趣向を思兼神冠作者(たてつくり)となりて神作りに作りたまへば常世の鳥の長唄獨吟(かりやう)此幕の出語淨瑠璃豐蘆原の中實に賣せ給ひ手力雄尊の荒事猿女君の遠祖天鈿女命の忽然擡出(せりだし)手には茅纏の矟をもち八十萬の神達出囃子に合せて庭燎の神樂所作事の俳優す大神是を細に窺して大日本(やまと)やの太夫さんいよ大明神樣〱と宣ひし是ぞ歌舞妓の本原なりけるしかつしより以降風俗の歌舞或は俗妓何がしの舞などいへる稱呼(よびな)はさま〲かはれども八雲立出雲の阿國名護屋山左と倶にはかりて物眞似狂言盡發りてのち今尙三箇津に櫓を構へ許多の狂言座となれりとは式亭三馬が滑稽なり今更これを追ふとても古狂言の燒直しならぬと一念發起の浮屠氏に倣ひ狂言綺語(こぢつけ)の堂號を幸ひ土間棧敷の看官を棧物場の因と誣附吾狂作書七部を著述しまだ吐たらぬ方便を書集め歌舞の芥の宗門といつば攝都に東西の角中有 東大阪太左衞門 西鹽屋九郎衞門 皇都四條に南北有 南都萬太夫北 早雲長太夫 東都淺草に三座の本寺 一丁目中村勘三郎 二丁目市村羽左衞門 三丁目森田勘彌 今河原崎 都合三都の 七本山瑠璃好物の御本尊筑越二箇寺 竹本筑後掾 豐竹越前掾 の祖師傳記寛永年間の開基以降八宗九宗の寺記緣起一切狂文演劇の脚色餘錄と表號し才の鈍經三部經七拙作に卷を重ね訓讀せんと云爾

于時嘉永辛亥十月上浣　　西澤狂言綺語堂

西澤文庫脚色餘錄初編上の卷

目次

西澤文庫脚色餘錄初編上の巻

西澤綺語堂李叟著

忠臣藏謠曲本の寫

ワキ次第和「遊ぶ祇園の色揃へ〱花にやうつゝぬかすらん詞「是は斧九太夫と申者にて候扨も主君鹽谷殿は去仔細候ひて御生害の上御跡斷絶致され候某も此程より高の師直殿に仕へ申候今日は祇園町へ立越大星由良之助に對面し密事のやうを探り參るべしと師直殿の仰にて候聞只今一力屋方へと赴候急候程に是ははや祇園町の一力屋に著て候如何に此内へ案内申候 狂「案内とは誰にて御入候ぞや九太夫殿の御出にて候 ワキ「只今參る事餘の儀にあらず大星由良之助に對面の爲參りて候早々引合られて給はり候へ 狂「さん候ゆら殿には此二三日已前より酒宴に長じ御遊び候が常の事にては御出あるまじく候いつも鬼目かくしをこゝまどり拍子にうたひ候へば外の遊びを御捨有りて夫を輿に御出候程にこゝまどり拍子をうたひ候べし暫御ひかへ成れ候へ ワキ「さあらば其こゝまどり拍子をはじめられ候へ我らは是にて待ふずるにて候 狂「手の鳴方へ〱とらまよ〱はあはちかさいた シテ「あらわるのこまどりぶしや某頓てうたひ候べし 狂「是は一段と面白からふずるにて候さあらば御うたひ候へ シテ下太鼓「手の鳴方へ 同上「手の鳴方へ シテ下「手の鳴方へ 同上「手の鳴方へ シテ上「とらまよ〱 同上打切頭「とらまよ〱 由良鬼是より返またい〱とらまへて酒呑そふよ シテ下「ヤアのみたふやのまふたと 同上ヤア「誰かはこのまざらん誰かわらはざるべき シテ上「是からかると色狂ひよたれ所か戀草の シテ上「痴話をくるめになまめきて 同「呑とは盡じ シテ「踊りてはうけやせいたくせんさく 同「一度にたわけさわぐ聲はたわむれ遊べど生醉共 ヤヲハ打込切 上「實や餘儀もなき忠義の道にまとはれて〱今此胸も晴やらぬ シテ「浪人の撰殘り 同ヤチ「わづかに四十七猶さんらんして苦しむかや ヤチハ「義士のかための誓立一味をなして置るらん連判濟て シテ「のめやうたへ此騷ぎ 同キア「好みなりおすきなり シテ「實げに大星がしかたは 同「元來

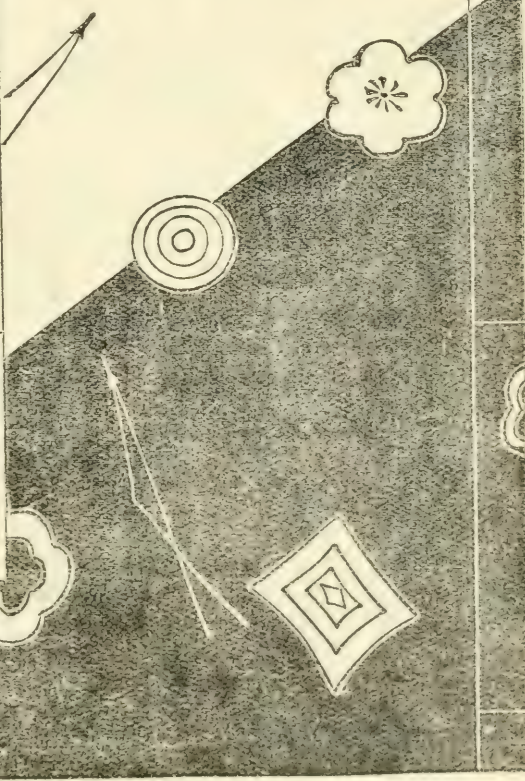
深き工夫にて シテ「思に事を致して 同「馴たる衣紋引替て シテ「又たいこぐるみ交りあひて ヤア 同「盡す心に由良樣を シテ「うかせと人は取はやし 同「思はぬばかをなしぬれば シテ「皆此御荒增を敵に聞せてされにさせ シテ ヤチハ「うそをつかせて敵をはかる 同「うしろまへ シテ「見るとても 同下 ヤチ「遊ぶ心なくて猶酒機嫌して ヤア醉狂を致すも智略をなさん爲なり ワキ「いかに由良殿に申べき事の候 シテ「誰にて渡り候ぞや九太夫殿にて御入候か此所へ御出候は遊樂の爲候な ワキ「いや其儀にてはなし大功は細謹をかへり見ずと申候が世の人口をも打捨給ひかゝる遊里の御戲れは大功を立る大丈夫となんぼう賴もしう存候よ シテ「是は思ひの外なる仰哉誠某が放埒は ワキ「敵討し給ふ術とこそ存候へ シテ「何と某がか樣に放埒致し候を敵討の術と御覽せられ候か ワキ「なか／＼の事 シテ「オヽ嬉し／＼我れ强年に及んでかゝる放埒の有樣を左樣に人々の思ひ給ふ事は何より以て悅ばしうこそ候へ ワキ「扨は古主の讐を報ずる御心にてはなく候か シテ「ノフ案じても御覽候へ貴方も我々も國元を立退候事は鹽谷殿の短氣より事起りたる事なれば恨はあれ共恩はなし

何しに危き事を致候べし ワキ「實是は尤にて候さあらば此九太夫も昔思へば信田の狐姿顯はし由良殿と久し振成酒盛せんと 上「側に有あふ鮹肴はさんで由良に差出せば シテ「何心なく手を出して足を戴く鮹肴と旣にくわんとしける處を ワキ「暫候明日は判官殿の正忌日殊更逮夜は大切成事と申傳へ候御身は精進なされず候や シテ「是は御詞とも覺へぬ物哉最前も申ごとくなか／＼さやうの事にてなし判官殿の鮹に變生のさたも承はらずとて 上「さも心能味はふ風情 ワキ「邪智深かりし九太夫も シテ「あきれて ワキ「詞も シテ「なか／＼に 同上「格別氣散じと舉給ふは我を探る事ぞかし ヤチ 御身は主とり我は浪人の身なればなどかあほうに思さゞらん ヤア かまへて他所にて此噂せさせ給ふな 切上 ヤ 一力で仇討ことにつがもなき／＼鬼目隱しで遊ぶ事は誠なり／＼爰は名におふ祇園町 ヤチ 往來の道は程近し朝の六つから夜明まで ヤア 大星のてんがうも ヤチ 我が下地のとらとぞしろし召れよ 下「いざ／＼酒をすゝめん／＼ 切下「扨お肴は何々鷄しめて鍋燒鱧のつみ入かまぼこ祇園豆腐は名代なりかすにまな鰹は誰が漬し肴ぞ ヤ シテ上ゲ ア「實誠々亂舞亂

酒の騒にて戀の情は取置て好みて此上にャア飲酒は數しれず面ても青ざめてャチ若氣におとるまじきャア親仁と思しぞよャチハおさへ給はで我を猶々うかさば興がる事を致すべし我もそなたの御積り外目にはャチハ〳〵ャアきふくつげなれど氣にもかけぬは九太夫猶々盡す戯のかび臭ければあきつきてャてんと是はたまらぬとャア足元はひよろ〳〵とたゝれねば居さらふか氣もつき果て其儘目の明ぬ程に飲入あらうたて笑止大星は横にたふれてたわいなし〳〵 狂「扨も〳〵由良之助殿には毎日〳〵かやうに正體なく飲明しくらし給ふはさぞや後々に痛にならせらるべき事と存られ候夫につき最前酔狂の折から取落されし一巻の候急ぎ九太夫殿に御目にかけ申さばやと存候いかに申候御覧の通り由良之助殿には毎日〳〵酒狂のうへ前後もしらず寢入申され候事なんぼうにしきに存候夫に附最前懐中より此一巻を取落し申され候急ぎ御披見あれかしと存候ワキ「此方へ渡し候へ汝は輙勝手へ參休候へ 狂「畏て候 ワキ「扨は謀計の一巻ぞと開きて見れば互に國元を去つて必死の雜命を塵芥に輕んず忠臣の義士冥途黄泉の君を忘るゝ事なし神文血判殘りなく一味なしたる四十七人同下「もはや窺ふこともなくいざ訴人してこの方便鼻を明せん妙計色々に邪智を廻らせり〳〵かゝりける處に〳〵勝手に居合す千崎矢ざま寺岡もいかりをなし連判の一巻うばひたる九太夫目がけて飛て出るャア九太夫もふるい恐れてぬけ道立のく思案を廻らししば〳〵うろつき立まはるを何とてゆるさん斧九太夫を手込になしてぞ引すへける下ャチ「かゝりける處に〳〵大星由良之助密事を聞れて叶はじ物をとねむりをさまし太刀振上げて胸打ながらに丁々と切附上には薄衣引かぶせ片附支度になしかけたり打上打切ャチ ワキ下「今は九太夫も運つき弓の〳〵力も失て誠の上戸と油斷して生どられ押へて首をかゝんとせし時大星せいして此處にて命を取など事むつかしや寺岡はからひ加茂川に寺岡はからひ加茂川につれ行て水雜炊をぞくらわせける

右忠臣藏と題せし謠本は年號作者不詳文中に東都の詞多ければ福内鬼外初風來山人平賀源内の作ならんかさして佳作と云にもあらねど趣向のおかしければ爰に出す

けいせいあらし山古番附の寫

名代
亀屋座本中村冨十郎
立役 嵐 三右衛門
立役 大谷廣次
太夫 女形 きの川万菊
立役 春山源七
実悪 嵐 七五郎
立役 中村新五郎
中村冨十郎
嵐 三右衛門
二のかはり大あたり
ふ屋町通
八文字屋
八左衛門

二のかわり
けいせいあらし山　三番續

第一狂言【うたこよる ふり分女夫】
第二譬喩【はなによる うつゝの女夫】
第三𩛰入【ゆきによる さいわい女夫】

役人替名の次第

一女きやうげん師お國　藤田大次郎
一あげやおしま　さの川市松
一けいせい若むらさき　辰岡玉ぎく
一同　たかを　民中いろは
一かぶろもんや　ふじた四郎五郎
一同三彌おぐら山萬四郎　一かぶろたつや中村しな松
一男だて權九郎　市山金十郎
一同でんべ市山傳藏　一たいこ與之助金子吉六
一からはざ主ぜん染川左源太　一から糸岩井甚之助

一つぼねみたらし　おのへげんじ
一かさ井三太夫　松本廣七
一ぜんかうじおしやう松下源八　一せき口ごん平中村長九郎
一でしさいねん大原藤八　一やつこもん平中村源藏
一かぢ川源內　よし澤助七
一けいせい半太夫　岸田京太郎
一けいせい大すみ　民中むめ松
一けいせい歌浦　あらし花松
一かぶろみよしの中村富之助　一かぶろふみの嵐喜代松
一丸屋小右衛門　皆川文六
一よしだ喜八　よし澤四郎七
一あげや妹おつゆ　淺尾若松
一ざとう久市　澤村政五郎
一同じくるり市市川權十郎　一ざとうべん市松本又四郎
一男立べにの庄兵衛　春山源七
一同ちや船の忠吉　上村友次郎
一庄兵衛女房おさく　淺尾元五郎
一黑ぼしの惣八　松本友十郎

是ゟ二役三役の分

一あしかゞよしのり かぶろまさの　玉川みやこ
一くまで彌惣 あげや萬彌助　大谷彥三郎
一南の彌兵衛 まき屋茂次右衛門　かさや又九郎
一ふどう兵部 ぬす人くはんてつ　嵐七五郎
一いなか大盡九郎四郎　坂東助三郎
一細川左京太夫　ばんどう助三郎
一ざとう花市　坂東助三郎
一畠山ます長　大谷廣次
一今川了俊　大谷廣次
一江戸兵衛　大谷ひろ次
一中げん𦾔助 日川久右衛門　中村新五郎
一いよ大じん團　なかむら新五郎
一おゆら　佐野川萬菊
一高松千太郎　嵐三右衛門
一今川仲秋　あらし三右衛門
一茂左衛門娘お三 けいせい道のく　座本中村富十郎
一淨るり京太夫　一中出語り仕候

四十八字藏古番附の寫

寶暦十辰年京都四條南側芝居にて忠臣藏世界の新狂言の番附半切二枚に摺てかたちの珍らしければ爰に出す今年迄九十二年となる古番附也是に限らず忠臣藏の世界による繪番附の類は元祿某の年より後の淨瑠璃歌舞妓とも殘らず集て予が著述假名手本忠臣藏類聚大成四十七冊の附錄一冊に出せば好人見給ふべし

加茂河水滲は計略饗應
山科雪折竹は姝脊謎々

忠臣四十八字藏 七行物

四條通南側大芝居ニ而
布袋屋梅之丞
澤村國太郎
かわりきやうげんのばん附

ワキニ 涼川夜遊の太皷

附り 師直が戀煩ひは後家盛りの顏世花色に匂へど主は未來へ散ぬるを我夫ならぬ仇人に逢夜話ぞ常ならぬかぶとの盗ぞく

并に 義平が義心を不知に恨む初の奥様に登請た戀の山けふ越て行夫の名代契はあさき夢みし廓の色酒に醉もせす

一行目の序文に曰 入交貞女爾夫に誠な隠す 謀長文
二行目の地色に曰 入月の夜もほの〳〵と芥所に集ゐ 兜頭巾
三行目のハルフシに曰 入ければかいる所へ門前にそむ 鶴巣籠
四行目の愁三重に曰 入空の跡見送りて同名な呼ぶ 襠縫紋
五行目のノリ地に曰 入乱れヤアヤア亭主帳面を改む お針働
六行目のチクリに曰 入相の鐘かう〳〵と最期な告る 腹切刀
七行目の段切に曰 入給ふ家名を代々に傳へけり 親子盃

役者替名之次第

おの九太夫 中村喜津右衞門
かうのもろのふ 中村正九郎
いもとはつゆき姫 中村伊三郎
矢間三のせう 三枡德次郎
せんざきゆふや 大和山せん助
やつこ土手平 松もと友十郎

役名	役者
同　杢　平	小ぐら山伊三郎
同　かん平	澤村友ぞう
かほよ御ぜん	しのづか卯之吉
こしもとおかる	せ川きく三郎
さぎさかばんない	あらし七五郎
太田りやうちく	藤川岡右衛門
たつ川には紅葉を長八	あらし三五郎
まづは松ざかこへ八	岡田彦九郎
ざとうはないち	桐島儀右衛門
大ぼしゆらのすけ	今村七三郎
かこ川本藏ごけとなせ	淺尾元五郎

つゞき役者替名の次第

役名	役者
はら　郷右衛門	さわむら高助
よし崎　三郎七	小ぐら山伊三郎
おかざき與三左衛門	藤川岡右衛門
たて川甚兵衛	山下市五郎
大わしでん五	中村正九郎
おのわら十內	坂東萬藏
竹もり喜多八	松屋新十郎
大ぼし力彌	篠塚卯之吉
わかさの妹はなの井	山下六三郎
む　め　が　ゑ	そめ松豐五郎
あさかい六郎	三枡彦五郎
小ばた主水	津川春助
いせや權右衛門	澤むら高助
子　三　之　助	中村十藏
いもとおつゆ	中村伊三郎
手代長九郎	嵐七五郎
同　源次郎	山下市五郎
まつ田いそ八	三枡彦五郎
置主善右衛門	小ぐら山伊三郎
かせや久次郎	中村秀松
でつち岩まつ	大和山せん助
同　伊之助	澤村友藏
中間かくない	笠や吉十郎
同　出來平	三枡彦五郎
五一兵衛ごけおきち	松谷新十郎
むすめおしも	しのづか卯之吉
粟飯原げんば	松もと友十郎
三上藤內	藤川岡右衛門

役	役者
庄や四九郎	平岡まん助
石どう右馬允	中村十藏
いせや手代十五郎	嵐三五郎
もゝ山の藤作	坂東萬藏
みだ右衛門女房おその	あらし和歌野
やくし寺次郎左衛門	桐しま儀左衛門
石切彌陀右衛門	今村七三郎
由良之助女ぼうおいし	中村喜世三郎
もゝの井わかさのすけ	座本 中村喜津右衛門
本藏娘小なみ	澤村國太郎

右之外座本不殘罷出申候

狂言作者　英　露鳥
同　三桝文次
同　近松多助
狂言作者　並木十輔

せんしうばんぜいらく
叶　頭取　中村門十郎
松谷新十郎

寶暦十年辰六月八日ゟ　和泉屋又兵衛板

いろは行列 謡曲黒船の文

寶暦十二午年の春角の芝居にて泰平いろは行列と外題せし新狂言の序に鹽冶判官に座元中山文七、高師直に桐山紋治、勅使饗應に黒船と云新能を保生太夫に勤めさせるに黒船新町橋の出入を作せしものにて判官の誤りとなる仕組の珍らしければ爰に出す 地謡「夜毎に通ふ男作〳〵行衛いつとか定む、ゐん（ト揚門の庄兵衛のこしらへにて武悪の面をかけ次第に合せ出て）詞「抑是は上町茶筌組の親仁分野出の庄兵衛と申にて候我此程の烟草餘りに油くさく候程にのめのよいのを替に參らばやと思ひ候我住家を立出て 地謡「我住家を立出て足に任せて行程に四つ橋過てぐわた〳〵と東口にぞ著にけり〳〵 詞「いかに此内へ案内申 ツレ「たばこやに御用とは何事にて候ぞ ワキ「我等にて候此烟草をかへて給り候へ ツレ「やすき間の事替て進上するにて候しばらく夫に御待候へ ワキ「心得申て候 地謡「長き刀は直なやつはさゝぬあたまくはせいとそつたやろがさす〳〵（トひらき舞にてシテ黒船に出て）シテ「ノフ〳〵夫なる庄兵衛殿に物申そふ暫らくとこそ ワキ「アヽラ笑止や庄兵衛に出入と見へしは誰人ぞ シテ「是は堂島の黒船忠右衛門とは我事也偖

も某出入の親方五郎八殿の紙入を早く歸して給はり候へ ワキ「イ、ヤ戻し候まじ シテ「さあらば手をば突込べし ワキ「アラ仰々しやならば取て見給へ シテ「然らば出入致すべし ワキ「心得たりと言まゝに ワキ「兩人雙方へ立別れ 地「いざや出入をせん物と庄兵衛黒船力士の如く草履下駄ぬぎ韋駄天の如く摑み合敲き合組あふ有樣邊りに近附物ぞなき 下略 右は並木正三の作にて九十年の昔狂言なれど滑稽の新らしみ實に穿ちたる物也是より見れば前に出す方の謠曲は第二義なるべし

古狂言筋書綴物の寫

元文四年未二月目出度春長閑日と與書に有今迄百八年となる右番附繪入筋書ともに七八枚の綴物細字に彫て狂言の替毎に出す事例なりしに安永比より繪本番附とかわり筋書を略して道行本と呼て宮薗宮古路の床本を賣る樣に成たり繪本も長き狂言は上下と分て繪組荒くいと叮嚀に書たるも今段々に細書となり扉に一枚看板を寫一日の狂言前切共に四枚に限りたれば繪本を見ても一日の狂言の條不解やうに成たり

金門五山桐繪本番附の寫

安永七戌年四月八日より角の戯場にて始て金門の狂言成りし時の繪本番附を寫して左に出す番附の役者の並び大名題一枚看板の繪組當時の如く法を亂さず狂言によつて出すべき立者役者も繪面に出さず番附に太細なく行儀よきを見てしるべし

此大名題順禮に梅幸國師眠獅傾城に山吾也新七八藏小川花桐柴崎の五人は名題俳優なれば繪面に出べき筈を狂言によりては出ぬ事にて納まりし事知るべし

割外題は石川五右衛門瀨川釆女とあれば英子眠獅也此比の小川は座元を兼て眠獅に立つぐ役者也今の世五右衛門と並ぶ釆女の役なりとて此役を悦びて納る役者有べくとも覺へず依て端事師は年々にすくなくなり役の位を知りたる者なく一枚看板は皆寄繪にて一場の役にて並ぶ事なき樣になりたるは行儀作法も碎けたる流弊是非なしと云べし

原本役附一枚看板の後に在り順序轉倒…………編者注意

安永七戊の年角の芝居三の替り新狂言中茶屋堺吉板

座本　小川吉太郎

大明宋氏碑銘曰
我は日本第一の大盗人廓通の俳の衣今朝の思ひは夕べの口舌兒と妹が契は二世と三條の斎生塚に仇名を立る茶の湯の會合釜が淵の古跡は大佛餅の根元しやんと召たる傘の亭座舗居ながら計雨が下取て押へた濡の大將凱陣の行列に太夫の道中揚屋入ヤンレふれ〲ふりこめた

石川五右衛門忍術之事
金門五山桐
瀬川采女艶書の事

階級七段

大みんの太子　尾上丑之助
ていしゆ才兵衛　花桐伊三郎
百性七さく　兒島和三郎
宿老太郎作　大谷彥十郎
かぶろはつの　小川八藏
同やちよ　あらし千代藏
同はつせ　小川吉藏
同まんよ　中村萬藏
こしもといくよ　あらし君助
同まつよ　あらし君助
やつこ可內　山下四郎五郎
淺井丹藏　山下四郎五郎
やつこ關內　市山三津藏
別木軍藏　市山三津藏

中川こは助　藤川友藏
町人作兵衛　中村傳九郎
同市右衛門　中村仙助
大阪のはん　中田善右衛門
下ざい黒八　中山三八
まい子おやす　澤村五郎吉
せん頭梶藏　中山東藏
やりてすぎ　山科文三郎
かぶろ富彌　中村富三
傾城六ッ花　あらし萬三
やつこ岩內　あらし權十郎
吉川隼人　あらし權十郎
桐島彌藤二　藤川金十郎
たいこ持友助　中村友十郎

役	役者
やつこ角内	中山乙五郎
稲見藏人	中山乙五郎
こしもとあげは	萩野三代藏
傾城花町	萩野三代藏
おつうひめ	小川千菊
傾城九重	嵐松次郎
じやこつばゝ	桐山紋治
火車小次兵衛	桐山紋治
笹井順慶	桐山紋治
同悴熊太郎	桐山紋治
兵庫之介妹正木	あらし雛治
秀高奥方岩浪	あらし雛治
けいせい花橘	藤川山吾
五右衛門女房おりつ	花桐豐松
奥方そのふの方	花桐豐松
峯田兵庫之介	藤川八藏
やつこ八田平	藤川八藏
此村大炊之助	尾上菊五郎
眞柴久吉	尾上菊五郎
狂言作者	中村阿契
狂言作者	津打亭輔
狂言作者	筒井半二

役	役者
せそんじ中なごん	中村友十郎
仲人藤兵衛	藤川十郎兵衛
傾城萩の戸	あらし雛次郎
小西妹かつら	あらし雛次郎
くろさき喜藤太	山中平十郎
名和内記	山中平十郎
小西奥方唐織	榊山四郎太郎
大炊女房呉竹	榊山四郎太郎
松田勇助	中村重次郎
金吾久秋	中村重次郎
大ぶつ餅惣右衛門	柴崎林左衛門
眞柴久吉	柴崎林左衛門
五右衛門女房おかう	尾上新七
早川高景	尾上新七
石川五右衛門	嵐雛助
瀨川うねめ	小川吉太郎
狂言作者	長谷邑眞七
狂言作者	並木五兵衛
狂言作者	並木新藏
頭取	中山音五郎
世話人	中山百次郎

三のうり
金門五山桐
きんもんごさんのきり
七冊物
石川や
座本　小川吉太郎

七條河原釜淵雙級巴の話（附宜山骨帖の作者を褒）

石川五右衛門の事迹を書たるは聚樂物語（板本寫本）に關白秀次の亂行及五右衛門の出生より後釜煎の罪にあふ迄の事を書其餘小説等にも往々出たり淨瑠璃には元文二巳年秋豐竹座にて釜淵雙級巴と外題して並木宗助始て石川五右衛門の狂言を世話物上中下六段物に作り上の卷は美豆野御牧の街場より島原の廓中の卷は柳馬場當馬の浪宅より大佛前の隱れ家下の卷は藤の森の刀賣道行街の手向草より七條河原釜煎の場まで世話淨瑠璃に作りしは宗助の作功也殊に外題を七條河原釜が淵と置た働き（釜煎の罪の場所は實は三條河原なるを七條に融大臣殿釜の古迹有るが爲としたるな云なり）亦雙級巴は五右衛門親子を眉間尺の故事に當たる作意是等を眞の外題とも云べし此雙巴を舊として歌舞妓に金門五山桐と賦して時代に取組唐船の謠曲を假り宋蘇卿（此村大炊之助の本名）の胤素女唐土より父を慕ふて此土に渡り明智左馬助となり軍用金を集めんが爲石川五右衛門と假名すと脚色瀨川采女傾城花橘の二人は宋蘇卿日本に渡つての落胤にて三人兄弟とするは唐船の條に傚へり采女花橘は兄弟としらず契りて畜生塚の古迹を遺すと斯世界を書ひろげしは五瓶が作功也是より後淨瑠璃には石川五右衛門一代噺、木下蔭狹間合戰歌舞妓には仁王門端歌雜錄、艶競石川染、けいせい忍逢淵、けいせい傳石川、けいせい濱眞砂と種々の增補あれども五山桐以來は皆時代に仕組めり仁王門は河内の五右衛門石川五右衛門とて世話に作る中にも石川染の二つ目幕切石田の局の娘瀧川は明智の胤にて五右衛門大内へ入内の夜盗取て葛籠に入忍術にて姿をけす公家の面々是を笑ふ葛籠負たがおかしいかとの詞は寛政八辰年四月朔日より初日の所三月二十九日總稽古の砌りあらし小六（始嵐雛助後叶雛助事）急死につき五右衛門石田の局二役の替り杵嵐雛助（小眠鄰事）千の利休は山村儀右衛門（五登）替り役にて四月五日より始古今の大入して五月十七日迄興行し雛助は親増りの名人なりと評判せり此狂言の作者は辰岡萬作にてかゝる世話時代の作には妙を得たり聚樂物語に出たる三十餘人の愛妾を遣ひ歌舞妓の華美をしらせ（操狂言には人形數に限り有て是らの狂言をすることなし）金門の此村大炊之助（木村常陸）を女形として石田の局（石田治部少輔）にせしは和らかみを見せんが爲也熊野の能を催ふして久次の奢をきかせ石田の局の本名を四方天但馬の妻とし庚申の夜産落せし男子を河

州石川村の百姓に與ふ是石川五右衞門也との仕組感ずべし因に云此葛籠負たがおかしいかこわい伯父が目に見へぬかと云は石川染を舊也と思ふ人も有べきが釜が淵中の卷岩木當馬が浪宅へ五右衞門盗賊に入て葛籠を脊負ひ歸らんとする時當馬とお律が中に出來たる幼子ふと目を覺してにこ／＼笑ふに五右衞門も思はず愛し何がお氣に參つてうち／＼しやるつゞらおふたがおかしいかこわい伯父が嬉しいかとのせりふ有是を石川染の二つ目の幕に遣ひしもの也宜山骨牌に「忍ぶる事のよわりもぞする」と云札の繪に五右衞門葛籠を脊負ひ側に嬰子遊び居る圖は釜が淵中の卷の繪也此骨牌は元文以後に出來しと見へ「われても末に逢んとぞ思ふ」の句にお千代半兵衞と八百屋の母帶を持居る圖を書たり何人の作かはしらねどかゝる見立繪の働きにも婦女嬰子の弄物とはいへども並々の人の手際には非ず作者の名の遺らぬこそいと本意なしとやいはん

忠義水滸傳脚色の話

忠義水滸傳百八人の豪傑梁山泊に集るは羅貫中の作りもふけし小說也岡島冠山通俗にしてより物しらぬ小兒まで聞覺る事にはなりたり吾朝の伊勢源氏の物語は假名にて書たる物なれど和文の手本となるべき書なれば却つて是を讀人少なくまして小說稗史を作する者は水滸傳に倣ひ皆きりはめに遣はぬ事なし京傳が忠臣水滸傳は忠臣藏の世界に直し滑稽本に粹好傳とか題して宋公と俳名を呼ぶ通人俳諧師呉用角觝九紋龍等を連て深川に遊ぶの洒落は盡せりと云べし建部綾足が作の本朝水滸傳弓削道鏡が事を云は俗耳に遠く曲亭馬琴が水滸畫傳も一二編にて捨しを近來高井蘭山が跡を繼數編出たり馬琴は弓張月鎭西八郎爲朝の傳に遣ひ八犬傳に直し小說讀本の種に碎きて遣ひふるせり戲場の狂言になり來るは水滸傳なり唐土の雜劇には水滸の世界を多く遣ひ譬はゞ我朝の源平か太閤記の世界の如く每度遣ふ事とぞ本朝の淨瑠璃歌舞妓に遣ふには色氣なく皆豪傑の荒事のみなれば也近松が國性爺に武松が虎を討條を遣ひ並木が博多小女郞浪枕を歌舞妓に直して和訓水滸傳と賦したるは海賊毛剃九右衞門等が仲間を梁山泊と見立小女郞の色香にひかされ仲間入する小松屋惣七を宋公明と見立惣と宋との聲も合ば賦したるならんそれさへ素人落のせぬを

案じ四幕目島の小平次が異國に漂著して久々にて家に歸るに唐裝束にて出る庄屋送り出てハア、是で水滸傳の外題のこゝろもわかつたとのせりふ有其餘水滸傳を讀て面白き條は武松が兄の仇討宋公が閻婆惜殺し晁蓋が棗賣などよき條なれども女形に和らぎなく雜劇狂言にならざる筋としるべし

小說棧物語の一話

水滸の棗商人の條を原として上田秋成が作の小說に棧物語（板本五冊）と云有是には若輩の旅人八九人連にて岐蘇の奥山をわけ行に一人の僧にあひ名所古跡を問ひなどする内夕陽に及びければ僧の案内によつて山寺に一夜を明す其僧精進酒ながら客にすゝむ此酒蒙汗藥入有て不殘賊の手に死す一人の壯士辛ふじて其場を遁れ出谷間を越遙向ふに灯火ある孤家にたどり行身の厄難を語る此家の老女も彼山賊の黨にて再び爰にて賊に出合と宋公明が流罪の旅中の艱難に混じて作せし物也寬政十一未年九月角の芝居にて近松德叟此一話を作して紅楓秋葉話二段目に仕組月本始之助李冠（二代目嵐吉）同じ年比の侍七八人連にて山路に迷ふ文五郎の僧（失馬とも云 伴翁美男）山寺へ連歸つて毒酒を飲せ六人の若侍を殺す山賊の張本潭石（本名玉島幸兵衛 奥山爲十郎なり）數多の手下を隨がへ財を奪ふ始之助一人は辛ふじて寺の破風口へ遁れ出蔦葛を傳ひて谷底に落る此道具せり上となり本舞臺へ孤家をせり出す萱屋根一面に蔦かづらまつはらせ枝折戶の下手は谷川にて筧の水反古張の障子正面に古き大佛檀をすへ此家の老女漁江（三桝德次郎）娘桂に巴江（芳澤いろは）にて苧桶糸車を出し宵邊（よなべ）仕事の體花道中程へ始之助亂髪著物も所々破れ谷底へ轉び落たる體にてせり上る寶樹寺の絶頂より落入し此谷底所詮一命はなきと思ひしに滴る雨露に咽を潤し不思議に一命助りしも秋葉權現の加護なるかと刀を杖に孤家にたどりつき一宿を賴む老母快く留て酒を買に行跡に娘始之助に惚て此家も山賊の寄場なれば我を縛りて早く此場を遁るべしと進む始之助も娘の懇志を悅びて末は夫婦と契約して外面へ迯去る老母かへつて旅人は何國へと問ふ娘母に樣子を告て親子其潭石に養はれし恩有ゆへせひなく惡事に組すると愁傷の内佛檀の扉を内よりひらき拔道より忍び入し賊首潭石委細を聞取恩しらずの老婆めと手込にし娘桂を妻とせんと云母諫め兼て自害し娘を谷川の外へ迯す

始之助は始終を鬧蔦葛を切れば藁屋根落て孤家碎くる娘桂と始之助は危うき場所を西東隔てゝ逃れ去るを此一段の幕と仕組めり此狂言大に評よく後京都へ持行けいせい棧物語と外題して小説を潤色せしをしらしぬ棧物語に淺草の孤家石の枕と混じてせしも舊は水滸傳の條より出て小説歌舞妓と變化せし也

水滸傳脚色の追加

著作堂馬琴が水滸畫傳の序に叙る如く誰も始は通俗本を讀て面白みを覺へ後は渡本を見て通俗本の批評をす小説作者にも各好嫌有て我心にはまりし事は幾度も其筋を遣ふ事當也馬琴が弓張月に八郎爲朝野猪を雪中に踏倒すは武松が虎を討に傚ひ蒙汁に當られてはからず白縫姫に會ふは林冲が柴進に逢ふに傚ふ八犬傳に小文吾が野猪を打も是に同じ又朝毛野が對牛樓に馬加を鏖にするは武松鴛鴦樓を血に浸す條に傚ふ朝夷巡島記の初に阿三郎父の仇を討も俠客傳に達の小六箱根の底倉に仇をうつも皆一つ條也又伏姫腹を切裂て八犬士を走らすも美少年錄の發端も水滸に高眞百八の魔星を走らすに傚へり斯の如く同作の物にも我得意とする筋は幾度も出すまして戯作者の心々に遣ふ物から舊の水滸傳のよき筋は二番煎じの茶と同じく花香失たり予兼て楊志が棗商人に會ふ條を歌舞妓狂言に腹稿し世界を石川五右衛門と立て二つ目關白久次石田の局の謀反を顯はし明智の亂瀧川を遠き國へ追やるべしと評議極り岩木當馬之丞に送らせんと云當馬此役を辭退して明智の殘黨少からねば途中に於て奪とられんも計られず是非勤んと有ば横目を隋同勢多く連行んと云尤なりとて敵役一人横目に附（前野但馬）出立す三幕目木曾路とか北國街道とか人倫絶たる雪降りの峠として此中を長櫃の内に姫を入れ荷もつと見せて當馬但馬の兩人宰領して行に水滸は炎暑の旅なれど梨園狂言には雪中の旅行ならでは艱難辛苦見ゆべからず舞臺花道通路まで白木綿を敷雪深く降積し道具にて同勢の人夫手足冰へて歩行れずとつぶやくを當馬怒つて爰は名代の絶處也盜賊に逢てはならずと詈を但馬は人夫と共にかぢけてかく太平の御代に盜賊は出べからず寒氣甚しければ遲滯するも斷りと言ひなだむ當馬はいよ〳〵怒つて人夫を呵り通ひ路より花道へ廻る向ふ雪幕の間へ松柏の梢に雪積りたるを段々引出すとゞ本舞臺へ來る比雪

幕切て落す奥深に雪積りたる岩山の峠絶頂の欄橋懸りと花道中程に雪持樹々梢を見せつゞら折の登り坂奈落より下り登りの道雪の松の釣枝下りる人夫かちけて歩行れぬと本舞臺にて動かぬを當馬はいらつて今一つ峠を越なば里有そこにて寛りと休ますべし此峠は常さへ盗賊追剝など出て不用心なる所也と云人夫一向是を聞ず焚火をせねば身うち冰へて一足も歩まれずと口々いひて柴薪を拾ひくる但馬共々當馬をなだめて焚火にあたる出の唄に成り橋懸りの登り坂より三上百助淺黄頭巾酒商人の拵にて酒桶一荷を荷ひ出てあゝ冷る事じや幸ひの焚火の馳走相伴せふと火にあたる當馬は始終油斷せず。あたりあたつたら行ふと云但馬人夫はなか〳〵此位では温らぬと銘々足投出してあたる此時又唄になり花道の奈落より程よき雪車に蜜柑籠を數多のせ小鮒源五郎、堅田小雀、足柄金藏、筑紫權六、石川五右衛門各頭巾股引脚袢雪持の菅笠をはき蜜柑賣商人の拵にて雪車をひき又押ながら花道より上り本舞臺へ來る當馬は此人聲に耳峙て刀の柄に手をかけ拔こそあれ人聲は山賊共といふに皆々恐れ震ふ商人皆々はャレ焚火じや有難い

はと車を下手へ引すて共に火にあたる當馬はよくよく見てお身達は何者ととふ蜜柑商人どこそこの宿まで蜜柑を持て行く商人と云ふ人夫それこそ誠の商人を宰領が又しても山賊の追剝のと威さるゝには迷惑と口々罵る酒賣蜜柑賣と咄をして酒片荷買んといひて銘々錢を出し蜜柑を肴に冷酒を飲舌打してあたゝまつたと云人夫羨ましげに我々も片荷の酒を買ふて飲んといふを當馬制して得てしびれ藥の入あるもはかられずならぬと云人夫あの蜜柑賣が飲でも中らぬからはぜひ買て飲んといふ當馬はけしてならぬと制す但馬段々挨拶して酒を買んといへど酒屋おれが酒にはしびれ藥が入てあればえゝ賣まいとすねる人夫賣てくれとたのむ此内蜜柑商人の內一人は茶碗にて片荷の酒をすくひのむ當馬はじつと是を見て居る酒やふりかへり見て徇りして茶碗を引取り飲殘りの酒をもとの酒桶へつぶやきながら戻す此時五右衛門の手へ茶碗渡る時藥を入る事有人夫は始終唾を呑込で飲たがる事有但馬挨拶してよふ〳〵片荷の酒を買ふて銘々飲但馬は當馬に追從して。盃のめとすゝむる當馬いやながら附合に　口のむ蜜柑賣和睦をよろこ

び肴に蜜柑をそる是にて但馬始八夫片荷の酒を飲ほすうち當馬そろ〳〵藥の廻るをいぶかる但馬八夫は一時にうんとのる幽に遠寺の鐘鳴酒賣蜜柑賣捨せりふにて立上り是を見て顔見合せ笑壺に入て頭巾を脱ぎ頭と云五右衛門も頭巾をとつてまんまと首尾よふと是より姫のいれたる櫃をもたせいつもの隠れ家へ運ばせ五右衛門殿して花道つゞら折へ下りる雪しきりに降出す當馬息ふき戻し計略に落入しびれ藥を飲されしを悔み但馬八夫を罵り金銀に目をかけず明智の胤を奪取る盗賊仔細ぞ有らん足跡を慕ふて何國までもと山道を傳ふ又せり上にて五右衛門の隠家と成り女房お律は當馬の姉にて石川染大佛前の如く當馬尋來て五右衛門に討てかゝる五右衛門其身の素性を語り明智の胤を主人と崇め大領久吉に仇せんといふ當馬味方に附と脚色しけり水滸の裘商人を歌舞妓に潤色せんと思ふ時はかやふに成なり未腹稿のまゝ荒筋を説しらすもの也

清和源氏十五段の話

御曹子牛若金賣吉次と共に陸奥に下る途にて矢矧の長者の娘淨瑠璃姫に會ふ事は難波土産の發端に出る如く小野お通が長生殿十二段を書てより淨瑠璃といふ曲始る程なれば古るき事限なし後に新十二段源氏十五段など追々に増補あり同じ陸奥下りの折青墓に宿り熊坂長範と云盗賊を討し事は義經記には江州鏡の宿とあるによりて謠曲烏帽子折に出熊坂の謠曲には赤坂と有淨瑠璃には兒源氏道中軍記二の切に出せり延享元子年三月竹田出雲掾の作也此三の切は關原與市（藥田口にて牛若に出あひ蹴上の水の古跡に遺るか）切腹の場にて熊坂は二の切なれば手輕き場也依て文化十三子年中の芝居にて璃寛（嵐二代目）吉の熊坂をせし折も三幕目に此場をし四五には太政入道兵庫岬の三の口切能登守教經の場を繼合せ勝鬨芽源氏と外題しけり熊坂の狂言是より世に出て誰々もする樣にはなりけり爰に豐竹座の當淨瑠璃清和源氏十五段は並木宗助の作にて享保十二未年春より秋迄打通し後毎度出る度毎に大當りせし三の切は熊坂の妻子義經を討んと覗らひ靜御前と卿の君を取違へ江田の源藏に討れ青墓にて熊坂が最期を物語る場也此狂言の大切は山伏攝待とて名高き場にて三の口切は餘り人のしらぬ場也然れば熊坂の狂言の舊にして十八年後兒源氏出て熊坂の狂言とは成ぬ予淸

和源氏十五段の三の口切を種として天保十年亥の五月天滿天神境内新芝居へ奉納狂言に書たる折の外題は物見の松に寄葉越廻月女熊坂謠曲二段として口幕鳥井元場は切幕への仕込にて靜卿の君の落足藥屋源五郎夫婦づれにて出商ひ横須賀軍内のチャリ場なれば略して切幕寢物語の場の正本を爰に記す

女熊坂演劇の正本

其節の役割藥屋源五郎（本名江田源藏）我童、同女房小夜衣に金作、馬士小猿に東藏、庄屋四九郎松右衞門、靜の君大三郎、靜御前に一德、麻生の松若に友三、熊坂妻姥等に壽太郎 也造物正面三間の二重向ふ鼠壁納戸上手折廻り破障子家體下手續きの二重隣家の體向ふ赤壁納戸此前に雨戸しまり有橋懸り切幕の所隣の入口戸しまり是に反魂丹越中富山の張紙を張り留守の體右家の取合ひ一尺計間を透し此前に松の實木上手へうねらし此傍に西は近江東は美濃寢物語の里と記せし傍示杭立正面より上手へかけて見事なる松の釣枝淨瑠璃にて幕明く一東路を二つと三つに追分や茶屋が出ばなは古茶新茶番場醒井柏原今須の間の細溝が美濃と近江の國境寢物語と名も高き藥店反魂丹屋源五郎が五日六日の出商ひ留守は隣の美濃路から預る後家は姥等とて年は五十を越す越さず名うての茶やと旅人が一連店に立止り（ト跡在郷歌に成る上手より仕出し三人旅形りにて出て傍示を見て）仕出し〇何と彌次さん爰が名うての美濃と近江の國境じや□同ハ、ア是がかの寢物語と咄に聞た古跡じやの△同イヤ又こふ並んだ隣同士で國が違ふとは珍らしい〇同見りや爰は茶店と見ゆる一ぷく吸附ていかふか△□同ヲ、そふせふ〳〵ゆるさんせや（トめい〳〵腰かける納戸より馬士小猿口まくの形り煙草盆と茶を持出て）小猿ヲイ〳〵表の茶煙草盆はおれが持て出る合點じや〳〵サア一ぷく上つてござれ〇仕ヤレ〳〵赤坂から一いきにやつたらぐつと草臥た〇同それ〳〵そのかわりに今夜は醒が井泊りじや□同爰で一ぷく吸附たら一里半や二里は丈夫にあるけるて小さるお前方赤坂からずつとごんしたかても達者なお衆達じや〇仕イヤ又此中仙道は長たらしい道しだがてるての松じやの常盤の塚のと名所が多い□同イヤ又名高い物は熊坂の物見の松今みても盜人が出よふかとびく〳〵するて△同イヤ長休みしてごまの蠅にでもつかれてはならぬサア一息に泊り迄おつゝこふ同茶の錢は爰に置ますぞや小さるマアよごんすわいのまつと休んでゆかつしやれ

仕イヤゆるりとしましたサア〳〵ムれ〳〵 ト又東百に成り三
○人向ふへ這入る小猿殘つて 小さる 今の囀しで思ひ出したけふ鳥本で
雲めらがよつてかゝつて自らとぬかす衒妻を剃そふ
と仕をつたをおれが助て馬に乗せ爰の內までつれて
來たが今夜一夜さ泊たうへ手越か大磯へばらしてや
りや欺されてうせるは定何でも福德の三年目姨は自
に飯拵の間店番をしてやるとは人を思ふも身を思ふ
じやてな ト丈六くみ煙草盆引寄る隣垣の木の獄に成り向ふより庄屋四九郎百姓三人羽織にて跡より麻生の松若前髮牢
出の形りわんぼう縄の帯月代延し附出花道にて 庄屋 扱皆の衆今度禁廷樣のおめで
たで國境の姥等の息子の松若も助つて戻つたといふ
物じや ○百姓 イヤまた松若は仕合物今迄そこ爰で小盜
がたび重なつて今度はさし詰首代呂物 □同 所をけさ卯
の刻から庄屋殿始組合殘らず代官樣へ御召で今度計
りは許してやろふとの事 ○同 こんや一晩は勘當しても
親の內でとめ翌は早く山越に隣國へ追拂へとの仰附
△同 門前でうつむけにして槙ざつぱで二三百くらわせ
との過怠 □同 何がてんでに物とられた恨みくらわすま
い事かおれも四五十どやしてのけた ○同 迚もの事にマ
ア二三年も牢へ這入ていてくれゝば盜人がなふてよ
からふに 庄屋 ア、是々あんまりいふまい跡がこわいぞ

扱松若よ代官樣から言附られた事ゆへせふ事なしに
母者が何といふかはしらぬが庄屋始五人組が挨拶を
して見るが是にこりて今からきつと性根を直したが
よいぞや 松若 アイ〳〵 ○同 是松若アイ〳〵と計りではわ
からぬわい何と長々の入牢でちつと性根に △□同 こた
へたかいの 松 いやもこたへた段か是から頓と心も入
かへて眞人間に成りやんす ○百 それ聞たら母者も定め
て勘當をゆるされふ 松 とかくよいよふに頼みます △百
おいらも夫に如才はない 庄屋 サア皆の衆もムれ〳〵 ト本
舞臺へくる小猿は樂ころびいる 庄屋 姥等は內にいやしやるか庄屋の四九
郎でムる 小さる ヲヽ庄屋殿大勢づれで何でごんすぞ今
おば貴は客があるのでめしを焚ていやんす 庄 ヲヽそ
ふか內にいられりや幸じや 百三人 サア松若ゆかんかい
の 松 久しふ戻らんのでどふやらういしいよふな
小 ヨウわりや松若扱は助つて戻つたかい 松 ヲヽ小猿
來てかなつかしかつたわいのふ 小 ヲヽよふ戻つた戻
つた是々伯母貴庄屋殿が來てムるぞや伯母貴〳〵 ト納
戸の內より 姥等 アイ〳〵そこへ行ますやれ〳〵お世話でム
んした「納戸の內より主姥等のれん押上立出て ト合方に成り
納戸より姥等木綿やつし前垂にて手をぬぐひ乍ら出て 小 お庄屋組の衆が ムつたわい

の姥等是は〳〵お庄屋様よふお出被成升たのサアマアア
マアお上りなされませ　ト庄屋は二重へ上る百姓三人小猿は上り口に腰かける松若下手にゆびくはへ
立ている姥等見て　姥等見れば皆様お揃で以前勘當した悪ものめ
を連立てムり升たは又詫言でムり升かな庄サ、取あ
へぬは合點じやがアノ松若はこなさんの秘藏子何か
子供の時から手癖が悪いとやらでもてあましての勘
當と聞所が去年の春から長らく牢へ這入ている内に
手ひどいめに逢て夫から性根を入かへたとの事今度
禁廷様のおめでたで此四九郎始五人組をお呼出しの
上此度は赦すから今夜一よさは親の内で寝させ翌は
夜の内から隣國の近江領へでも山越に追拂らへとの
事そこでこなたも迷惑にはムらふがこちらにめんじ
今夜一よさの所了簡してまあ一度世話してやつて下
され姥夫はマアどなたもお揃で御心切の段はわかつ
てムれど何べんいふても同じ事とんと捨て置て下さ
りませ庄そふで有ふ〳〵が今度はよく〳〵こりたと
見へて牢の内にいる折から神佛を信仰して今迄の心
を入かへ升ふと誓言立したらその利生でやら今度の
おめでた○百お庄屋を始め五人組のこちらに迄世話
してやれと厳しいいひ附□同どふぞ了簡してやつて下
され△同こりや松若よ何をぐず〳〵同三人早ふ爰へ來て
たのまぬかい小なる程おば貴もこりやそふいやらふ
がとめた所が今夜一夜さことにお庄屋始組の衆の挨
さつ潰ぶされもすまいこりや松若よ早ふ爰へ來て皆々
あやまれ〳〵ト皆々寄突出す松わかしほ〳〵と畏り手をつかへて松噂様今迄はた
あんと苦勞をかけ升たもふ〳〵こんどヽいふ今度は
こり上ましたどふぞ了簡して下さりませト泪拭してめなすり
云〳〵姥譬へどなたの御挨拶でも再びよせ附ふとは思
はねど性根さへ直つたら過行た連合の僅捨て置たふ
もないいよ〳〵性根を入かへるかイヤお庄屋様始皆
様の御挨拶といひ今夜は私方にとめまして翌は早々
隣國へつかはし升でムり升ふ皆々それは添い小コリヤ
コリヤ松若悦んだがよい伯母が世話してやらふとい
松アイ〳〵庄此上共に母者のいふ事よふ聞て悪性根
もやめ翌は早々餘所へゆくのじやぞ松アイ〳〵庄又
悪い事して此美濃領へ足踏込と首がとぶぞよ松アイ
〳〵いやもふ是にこりぬ物はごんせぬお前方もちつ
と牢へ這入て見やんせ第一おれが好きの見たははら
れずの小ヤイ〳〵まだそれが悪い其仕舞が皆西向じ
や松イ、やいのばくち打ふじやないこりたといふ事

じや幸ひ牢の内に肴はなし當精進で氣の盡た折は欠呻交りに念佛もやらかしたわいの 小ヲヽ年が藥じや大ぶん夫ではこん性が直つたと見へる大師へなど禮參りせいやい 松大師への禮參りは得手者じや 小そりやなせやい 松ハテ弘法は前髮好れそじや尻むけておがむが勝手じやあろかい トしりもつたてる 小何ぼうお好の大師でも我が樣な前髮は南無大師へんせうまへじや 松何いふやら腰のあたりに牢瘡はあり若衆の本肉じや 皆々やれ情ない 庄コリヤ〳〵松若大師樣計じやない觀音樣へも詣らふぞ 松サアその觀音樣の影で助つたやら脊中がじは〳〵〳〵〳〵といかい事ぶんじさつしやつたそふなて ト身内なかきいろ〳〵思入庄屋思入有て 庄ヤレ氣味の惡いどふやらおれも脊中がうぢ〳〵するよふなイヤ時に思ひ出した最前代官所での言附には梶原樣の名代番場の忠太殿とやらからお觸が有たは此度都を開かれた義經どのゝ思ひ物靜とやらいふ者腹に義經の種をやどしたが迯たとやら生捕ても殺しても褒美の金になる程に見附次第に注進せいとの言附じや何と皆の衆心當りはないかよふ心得ていやつしやれや ト是にて姥等小猿こなし有て 姥ヱヽすりや義經殿のおたねをやどせし靜と

やら 小生捕ても殺しても代官所へ連て行ばほふびの金 ト兩人顏見合ちやつと思入有て 姥小ハテなア 松そんなやつをとらへたらずつしりと褒美のかねこりや一番見出したい物じやがな 庄ヱヽ何をいふやら搜そふにも翌から美濃路はおかまいもの ○百それ〳〵村方へ觸させねばならぬ □同此惡者にかゝつて遲ふなつた □同をくれてはおいらの誤りこちらも早ふ 同三人歸りませふかい 庄いのふいのふコリヤ松若よ隨分おとなしふしませふぞ 姥段々のお世話それあなた方にお禮をいはぬかいの 松何いいのこんな挨拶するはてき樣らの役サア役目はすんだ庄屋始皆のやつらきり〳〵いんで休みやいの 庄コリヤ〳〵松若たつた今心を入かへ升たといふた口も乾かぬにもふその通りじや 小アヽ是々今のお觸が出るじやないかこなん達も早ふいなしやれ ○百あんなやつはよけて通せ □同さわらぬ神に祟りなしじや △同ほつて置ていに升ふ〳〵 庄そんならもういに升ふぞやさりとてはあいその盡たやつじや 百姓三人惡いやつでムるわい 姥皆御苦勞でムり升た ト歎に成り庄屋百姓上手へ這入る姥等松若小猿のこつて思ひ思ひのこなして有て 松今庄屋めの噂には靜とやらいふ衛妻六部のかまつたとやら 小けふ烏井もとから連て來て世話

する顔で爰の内へ迯り込だかのげん妻 松そいつはゑらい迯り込だとはどこの内へ 小しぶり皮のむけた都女郎若やあいつじやあるまいか 姥イヽヤそふではあるまい 小そりや又なぜに 姥静とやらは名に聞へたる白拍子まそつと人馴ていにやならぬにおぼこい所は人が違わふ 小成程らし又外の衒妻なら大磯手越へ賣てくれう 松そりや何よりの耳寄じやそふして其げん妻は 小イヤそりやあの爰に 姥イヤ窮鳥懐に入る時は獵人さへ是をゆるすといふ本文 小ヤア 姥是にゆるつと休んでいやしやれ ト默に成り姥思入奥へはいる小猿こなし合方松わか立かゝり 松是々小猿何じや様子有げな今のしぎシテその衒妻はどこにをるのじや 小ムウ其事を聞たがるからはわりやまだけふのおゆるしにこりずと 松何の性根が直らふぞい今の様に誤つてのけたはかわいそふにと思わして母者めにせわやかそふ爲 小其心ならてふど幸ひ今庄屋めがぬかした衒妻注文の合ふめらふをさつきに爰へ 松そんならその衒妻を 小コリヤ ト松わかに囁く松わかうなづき 松オッとがてんじや呑込だ 小譬へそいつでないところが賣てやつたら大まいの金 松所を母者めがぎしやばつて賣さぬは定の物 小そこで我々は翌まで遠網はつて待ていよふ 松くわしい事は我らが嗅ぎ出し金に成たら二つ山 小かならずぬかるな 松がつてんじや「うなづき兩人はわかれてこそは入相の ト本つりがね暮六つにて松わかは奥へ小さるは上手へわかれはいる 遠寺の鐘のかう〳〵と次の一間に灯もともり都を立ておとゝいときのふも暮てけふの君ならわぬ旅の物うさにしらべる笛の音もさへてほの聞ゆれば一間より主姥等は行燈にともし火うつし立出てしばし聞とれ居たりしが ト此内上手一間に灯の影移り卿の君の影見へて笛の音聞へる姥等角あんど提納戸よりいでゝ笛にきゝ入 姥ハテ艶しき旅の女中やなア筋目正しい育と見へ詞遣ひの雲上さ最前小猿が連て來て獨り旅ゆへ宿へもやられず泊てくれとの平頼み今庄屋殿の詞をきゝ俄にそれかと思案の樣子若又靜でない所が器量勝れた都の上﨟大磯手越へ賣心と思ひしゆへに紛らしてしらず顔にいなした物のもしや義經の思ひ物女子のはる〴〵ひとり旅そこらでなふては叶わぬしぎ「思案の糸口糸車引出す胸にとつおいつ ト床のありあわす糸車取出しつむぎになり 姥もし又靜に極まらばやどせしたねは源氏の血筋うかつによそへ手ばなされずさもあれ慥な證據もなし「どふかこふかと胸の内辛氣辛苦の糸つむぎにて 姥謌「こいとゆたとてゆかるゝ道か道は四

十五里浪の上「歌に哀れやそへぬらん思ひかわれ
ど隣里源五郎が女房はあかぬわかれも親の業誰をた
のみて一夜さを明し凌がん方もなく古巣に迷ふ雛鶴
の戸屋を忘れしごとくにてしほ〳〵として立歸り ト向ふより源五郎女房小夜衣口まくの形にて出て橋懸りの門口しまりあるゆへふと隣の方へ立寄 小夜衣 ホ、お隣
の姥等様こりやお夜なべでムんすかへ 姥 是は扨お隣
のおさよさん戻つてかお連合はまだそふな茶でもわ
かして待しやんせ「常にかはらぬあしらいも今此身
にはしみ渡り さよ ハイ内明て待程ならよけれ共待も待
れもせぬ身の上立乍聞てたべけふ鳥本の出商ひ不慮
な事が起つてなわしや暇が出た去られましたわいな
ア 姥 やれ〳〵笑止やそりやどふして さよ サア仔細を咄
せば長い事差當つてのお頼みは今宵イむ方もなしか
くもふてとは押附ながら行所もない私が事一よさと
めて翌でもお前詫して下さんせぬかどふぞおたのみ
申升わいなア「馴染甲斐にと計りにて又涙にぞくれ
にける姥等が心は思案の最中つけこまれては妨とよ
らず障らず間に合詞 姥 ヲ、夫は安い事詫事もして上
ふ一よさは扨置十日も二十日もとめたいが折惡ふこ
よいは内にお客もあり寝さしますす所もなし さよ すりや

内かたにはまれのお客でもおとり込とな 姥 どこでな
り共今宵を明し翌でもムんせ如才じやない さよ とはい
へ主の腹立をよいわで捨ても置れぬしぎ 姥 ハテ一寸
のびればひろとやら翌は機嫌も直らうぞいの さよ そん
なら必ず詫事をおまへにおたのみ申升たぞへ 姥 ヲ、
そりや氣遣ひさつしやるな女夫喧嘩は寢床の帶が直
すと云わいの さよ エ、じやら〳〵とそんな事 姥 ホ、、ハ
テ笑止な事ではある程にのう「笑止な事と他人むき
たのもしそふで放れ際たつて納戸へ入にけり ト姥等這入る
さよ そんならきつと頼み升たぞへア、是といふても根
が他人人の情も世にある時うつればかわる身の上じ
やなア「獨りかこちて泣けるが思ひ直して立上り さよ
ア、恨むまい歎くまいあきもあかれもせぬ上は機嫌
見合直の詫言しまつた表を明るは我儘夫の詞を立る
爲裏から這入て寢て待ふヲ、そふじや〳〵「そふじ
や〳〵と打うなづき思ひ直して脊戸口の裏手へこそ
は入にける藥賣の源五郎靜御前をいざなひてわざと
道にて日をくらし歸る我家は國境 トさよ衣は上手へ這入る向ふより靜口まくの形り跡より源五郎先の形りにてつれ立出る上るりのあと床の合方花みちに立どまり 源五 もふ是が私め
が假の家嘸御草臥被成升ふ 靜 草臥はしませねど案じ

らるゝはおかもじの身の上源ハテそげめが事にはお案じなくとまづ〳〵「あたり見廻し腰の鍵出して明たる錠まへも心覺への門の戸をそつとひらいて聲をひそめ（ト橋懸り切まくの所の戸を明）源住家と申せば仰山なれどほんの膝を入るだけ今宵の旅宿と思し召せ「いざお這入と伴ふているさの窓の戸障子も明て火打のこつちこちこちらは旅の女中をば一間にすへて主の伽ぶり（ト此内源五郎静をつれ這入り入口の戸をさす内にて火を打音して戸を二枚ひらき下手へ入る角行燈に灯をともし静を上座にすへ源五郎あたりを片附る上手の一間の障子をひらく内に雛の君口まくの形りにて上座にすへ行燈を置姥等下手に茶を前に置るゝ跡合方）姥御縁あればこそ都上臈のお宿も申せ女子でこそあれ私も後家立て十二年男擯りの生れ性頼むとあればどこ迄も頼まれおゝせる心なればかならずおあんじ遊ばすな聞ば源の義經公郡をひらき給ふにつけ静御前といふお女郎あづまへ下り給ふよしもし其方にて侍らはゞ力となつて參らせんつゝまずお聞せ成され升いなア「明させ給へと問かくる女心のはかなきは頼もしそふな詞に附そんならそふと思ひやり 静雛の頼母敷主の詞いかにも自らこそは義經樣のお情をうけたる身陸奥にお下り遊ばした我夫の跡を慕ふてさまよひ出世に便りない自らなれば主をよきに頼むぞや「よきに頼むの挨拶も跡や先やの詞附扱こそそれと思へどもうばらは猶も念おして 姥お女郎の持給ふ錦の袋はそりやマア何でムり升るな「見せさせ給へととらんとす 雛アヽ是は人手に渡されず何を隱そふ自らが戀しき人の手にふれて殘し置れし篋ぞやそなたが見ても詮ない事「隱し給へば詮方なく〳〵 姥アヽ何事も旅の空御用心にしくはなし心を附てサアおやすみどれ〳〵お寢間を敷升ふ「取出す夜具も柵強き木綿蒲團に木枕も夜寒を何と洗濯物著せて障子を引立る源藏は靜御前上座に直し畏り（ト姥等は雛の君を寢さす上手の障子しめる此内にゆる〳〵下の戸を明る也）源馴も被成れぬ旅路の上追手に取卷れお心の驚き殊に御懷妊の御身とあれば猶大事こよひはゆるゆる御休息の遊ばし升ふ「いんぎんに相のぶれば靜も心落附て 静嬉しき人にめぐり合頼母しき心やなさはさりながらいとしいは内室の小夜衣あかぬわかれをさしたるも自ら故と思はれん一氣のどくさよとありければ 源こは心得ぬ御仰重恩受し御主君へ仇する者の娘に連そひつながりいては陸奥に御座ある義經公へも言わけ立ず本田が最期の疑ひも草葉の蔭ではらさせん爲去りこくつて心がさつぱりヤアよしな

き物語に夜も更ゆく次の間に御寢所もしつらひ置ば男女同席は故人の禁めいざ御休息あられ升ふ　源とかくたのみにする上はそなたの詞はそむくまじそんなら次でやすみ升ふ「むすぶ夢路の旅づかれ障子の蔭に臥給ふ源藏は間を隔て思はずホロリと淚をうかめ　ト靜納戸へ這入る源藏行燈を納戸の内へもち這入り出る此内空より月おろす砧入の合方源藏思入有て　源ア、あぢきなき世の中や義經公のお胤とあらば何者の腹にやどり給ふ共和州の雨家祈禱は嚴密の二敎每夜のお伽おもとびと諸大名の折見舞晝夜のかしづき有べきに我外に宿直もなくはにふの小屋を御寢所とは勿體なやいたわしやなア「思へばたまる一雫拂ひ落してひぢ枕立切る雨戸の響にて隣のうばら寢ながらに　ト此內姥等は上手の一間より出てよき所へふとんを敷折戸を下手より引立かける源五郎も下手の戸一枚しめひぢ枕にて寢かけ兩方より　姥誰じや〳〵　源イャおれじや源五郎でごんす　姥ヲ、源五郎殿今戻つてか　源アイ今戻つて今寢升た四五日あはぬが美濃路には變た事もムらぬかな　姥ホ、何のいの近江の衆は金儲けゐようの上のじやら〳〵か女夫の中に少いさかいどふやら聞たがほんかいのウ　源さればいの豆豆殼ににられるたとへ口が過ると口が干上る古ふ成と人中で尻に敷は男と編笠出かはりさしたで胸がはれた　姥ハテもぎどふなあり附てからないと淋しかろぞや　源雨隣に後家やもめこけ込そふであぶない物淋しかいこか其氣はないかな　姥アヽうたてや男の世話にはこりた物獨り寢がきさんじなわいの　源姥ハヽヽヽ「枕取る手も世話ばなし美濃と近江の國境寢物語と傳へたり　ト又本つりがね砧入の合方にて姥の方折戸を入る源藏ふとんかむり寢ころぶ

「夜も既に松吹風の音づれて三更ともなふかねの聲深夜の雲に埋もれて四方の人音靜まつたり宵の約束いかゞぞと盃取眼のぴつか〳〵ひからし出る馬士小猿戸口に身を寄窺へど內にはそれと白川夜船時刻早しとさし足に松の小蔭に忍びゐる　ト小猿はふかむり尻からげ大だち一本差出てうなづき立石より松の梢へかけ登る「人は萬能一心を持崩したる松若は縄目の恥にこりもせず窺ひ出たる戶の隙より卿の君が錦の袋金と心得さぐり足奪ひとらんとねらひより寢入し音を聞すまし時分もよしや目を覺さば只一討と幼氣に胴より膽の懷合口盜みは得手の路銀を目當跡より母が附る共いざ白障子押明てそつと引出す錦の袋心も足も地に附ず火の上氷をふむ心地　ト松わか正面の折戸を明出て合口をさし上手の障子を細めに明け笛の袋を取出す姥等跡より窺ひ居て　姥ヤイ待ふぞ「かけた詞が耳に雷ハッと計りに立すくみ　松ヤア嘆さんか堪

忍して「思はず高き聲に手をあて 姥ヤレうろたへ者人がきく「言ふ事ありとかた脇へ連行く足音聞き聲寢られぬ儘に源藏が耳そば立て聞其知す母は我子を引すへて ト松若逃ふとするを姥等引立て花道際へ引すへもみ合ふ源藏起上つて窺ふ砧入合方 姥姿はうぬ共心は産ぬと世の譬へにもいふ通りやつぱり心は直らぬなアそなたが盗みするにつけなき昔を思ひ出す過行れし連合は平家世盛りの折から大納言家の御家人そなたを産んだ其後にめのこゞ獨りもふけしかど御主人にお子がないゆへ娘にして育ると有て賤しい母が産だ子は大納言家の雛君と成り其後仔細有て夫は勘氣明て四つのそちをつれ親子三人此美濃路迄さまよい來て世渡りの業もなくお羽打からして斬取強盗異見をすれど聞入ず運の窮めか赤坂の長がもとにて討れ給ふその折此身は駈附て相手を聞ば源氏の公達おのれやれ夫の敵そちをもり立讐憤を晴させんと脊丈のばすも心は張弓月日送つて十二年長の日數の憂苦勞盗みさす氣でそだてうか母は手がせの賃仕事その日を送りかぬればとて我子の盗みでくらそふか父の悪事のうんつきてひほうの死をする心かエヽ淺猿しい根性じやなア「せき上〳〵忍び音になきこがるゝこそ哀也松若もくもり聲 松ア、其事は忘れはせねどけふの煙りを立かねて親を殺した敵をば討事よりもくふ事の案じに餘る口おしさ盗人といはれても金さへあれば何事も望は叶ふと思ひ詰かせぎもふける筋はしらず人の錢金見る度にほしや〳〵の盗氣も親の敵が討たいばつかり最前小猿が言附て靜とやらなら訴人の褒美もし又そふでなかつたら手越大磯へ女郎にばらし金になつたら二つ山といふ間にわいた出來心もつておる大事の袋は路用に相違あるまいと盗み出したおれが心もふ此上はたしなみ升ふこらへて下され是かゝ樣「取附なげゝば涙を拭ひ 姥其心なら叫りはしませぬかいしよのない母親ゆへ我子に苦勞をさす事もみんなこつちが身貧な故貧の病の良藥は金銀ならでない物かいのう「ワッと互ひに泣なみだよそにもなみだもよふせり姥等はせきくる胸の内涙乍らに袋を引よせ 松敵といふは源義經その胤をやどせし靜といふおもひ者此海道へ來たとある庄屋の噂奥にとめたが慥に其人くわしい證據は此袋 松そんなら是がアノ證據「ひらひて見んと引ほどきよく〳〵見れば横笛の蟬の折口見るよりいき〳〵

姥ヲヽ聞及びし源氏の蟬をれいよ〳〵靜に極まつた
松ムウあいつが靜に極れば姥義經を殺すかはり胤を
斷て夫に手向ん松其跡の首を持梶原殿へ褒美の代姥
初太刀は松若松かゝさま早ふ姥是ひそかに〳〵「互
ひにうなづき忍び足隔の戸襖さし足も踏違へたる身
の因果落し隔てぞ入にける始終を窺ふ源藏も不審の
晴ぬ薄月夜ト姥松わか這入て内より正面の折戸をしめる始終こなし有てそろ〳〵前へ出る合方源ハテ
がてんのゆかぬ靜御前は我家に有隣にとめしは何者
ぞ人違ひにて討すもよし「討さぬもよし足引の山姥
等源何でも主君へ仇するやつ原生け置ては後日の妨
「討てくれんと身をかため窺ひ入らんとする所ヤレ
悲しやと女の泣聲はや討かけしかをくれたりと驚く
隙に一間よりあけにそみたる卿の君迯さじものと障
子越又も一かせ長刀のするどき刄先を源藏が丁ど拂
ひし刄金の音南無三寶とや思ひけん長刀引て一間の
障子内よりしやんとさしかため切込ばふせがんと勢
ひこんだる小家の城廓ト上手の間より卿の君手負ながら迯て出て倒る源藏刀にてさぐる長刀引込
源シヤア物らしき姥等が振舞だて籠つたとて野中の
灰小屋いで菜がふみつぶさんこそふれ「手負をよそに
飛こむ勢ひ靜ヤレ待てたも江田の源藏靜は爰にいる

わいのふ「いひつゝ一間を走り出さぐりつまづき引
とゞむ源靜樣には御怪我はないな女の大膽只者なら
ず靜ア、是最前からしりながら息を詰てい升たがせ
いては事を仕そんじる自ら故の災難とみすてゝ置ば
道ならず手負の女中の介抱を源げに誠人達はこつち
の重疊去にても此女中は何者なるぞ靜氣をたしかに
持てたべ源靜是旅の女中いのふ「雙方より引起し月に
すかして顏打詠め源ヤヽヤア是こそ大納言時忠卿の
姫君我君の御臺所卿の君樣コリヤどうじや「あきる
る聲に靜も仰天よく〳〵見れば道すがら跡や先やの
山道で互ひに見合す御姿靜扨はあなたが卿の君樣で
あつたかいのう「聞て悔り見てあきれうろたへ給ふ
ぞ道理なる御臺は苦しき息をつぎ卿やれ珍らしや江
田の源藏靜とは我君の思ひ人白拍子の君なるか終に
あい見もせぬゆへに道の間もよそ事に山路にかゝれ
ばふもとからまねいたりまねかれたり旅は道草緣の
はし同じ戀寢の友ながら君をしたふて都を出よるべ
定めぬ旅の空靜といはゞ力にも成つてたもると思ひ
しにかへつて仇となつたるは爰で死ねとの約束か戀
しの我君淺ましの身の果よのう「恨み歎かせ給ふに

ぞおいたわしや理りやと顔を見合せ三人がワッと泣
出す村時雨涙の雨に美濃近江一度にひでりも潤ふら
ん身拵へして源藏つゝ立 源 眼前御臺の仇敵音引提て
おんめにかけん靜樣には御介抱「御臺所を靜に渡し
となりの一間に聲をかけ 源 障子の内にて樣子は聞ん
御臺所を討たる敵かくいふ我は義經公の家來江田の
源藏廣疣也恨みの鑓先受取おらう「いふより早くた
しなみのおうこに仕込みし鑓おつとり一間の内へ障
子越ぐつとつゝこむ恨の鑓先パッと立たる血煙りと
共に姥等が聲高く 姥 ホヽウ其恨みは御尤覺悟極めし
我命最期の一句語りたしマア〳〵待たれうじあるな
と騒がぬ體いかさまこやつしれ者と猶豫する内鎗放
す戸障子ゆるぎ出たる姥等がいでたち頭にちよつぺ
い頭巾を著し身には法被を引結び腹卷しめて小手脛
當弓手に突たる大長刀馬手に疵口しつかとおさへ仁
王立に立つたる有樣凄ごのでこそ見へにける ト此内源藏あふこの鑓を引ぬくと正面の戸障子一面に開く内に姥等いつもし熊坂のこしらへ左に長刀右にて腹をおさへ相引にかゝり居る
姥 かく仰々しき打扮なれ共及むかはぬといふ證據是見
給へ「懐劍取てゆん手に突立さしも苦しき自害の有
さまこそは〳〵いかにと源藏靜あきれて暫らく窺ひき
く始終小蔭に立聞松若一間の内より踊り出 松 ヤアコ
リャ母者人はくたばつたかよし〳〵 靜は此松若が
「飛かゝらんずがむしや物グッと突たる隣の壁越胴
腹かけて一トゑぐりこはそもいかに何者と驚く隙に
妻の小夜衣納戸の内よりかけ出て ト松若をのれんごしに突納戸口より小夜衣長刀にて出て
さよ 是々見給へ源藏殿義經公へ仇する惡者小夜衣
が突とめたり是を功に靜樣御挨拶を願ひ升「せほし
き中の詫言に靜御前も詞をそへ 靜 美濃路の敵を近江
路より突とゞめたる高名手柄忠義の程は見届た是を
功にもとの夫婦「取もつ詞に女房はいき〳〵よぎな
き仰に源藏もともに頭を下にける手負は苦しき息を
繼 姥 善業は汐の滿干惡業は四海の波に趣をそへたる
勢ひは今更千萬悔んで歸らず事のもとを物語らん何
れも聞て下されいのう「長刀杖に聲はりあげ 姥 もと
我夫はそれなる御臺の御父君平大納言時忠卿の家臣
百合の太郎長範と呼れし武士卿の咎により浪人して
親子三人美濃路にかくれ切取強盜をたづきとし姿を
かくさん爲入道して長範の文字をその儘に「熊坂の
長範と名に聞へたる強盜は是皆夫の替名ぞや 姥 過つ
る承安二年の秋源の義經殿まだ牛若と云し時赤坂の

宿にて夫を討し事源氏方にはいはねど御存じ最期の砌自らも断附しに盗賊と見あなどりとゞめもさゞず斬捨しゆへ夫が今はに樣子をとへば 謡「扨も此度吉次信高多くの寶を持奥へ下る奪ひとらんと夜盗のめん／＼松明を投こみ／＼亂れ入 姥牛若殿とは夢にもしらず物々しやその冠者がきるといふ共嘸あらん 謡「熊坂秘術をふるふならばいかなる天魔鬼神なり共宙につかんで微塵になさん 姥とサアまづ此よふに思はれしが身の因果その時の裝束此長刀「及むきになしてしさつてひけばめてへこそ追取直して水車ひらりひら／＼ひらりと飛を丁ときれば宙にて結ぶをかへつて長刀打落され爰よかしこと尋る所に 姥なふ悲しや思ひもよらぬ後から具足の隙を切たか突たか身うちは血まぶれ次第／＼におも手をおひ猛き心も弱り果通ふ息さへ絶々にて 姥コリヤ／＼女房責て敵のゆかりとあらば鳶烏でも討てくれよそれを冥途の思ひ出に待ぞ／＼とくれ／゛＼の遺言最前庄屋殿の噂といひ詞のはしなりそぶり蟬折の笛持たはいよ／＼靜に極りしと思ひ込だが因果の寄合時忠樣は夫のお主其姫君とあるからは幼少の折さし上た長範殿と此母が

中に出來たる妹娘其松若とは種腹かはらぬ實の兄弟神ならぬ身は夫共しらず殺した跡で今のおはなし聞と身もよもあられふか夫ゆへ覺悟の此自害娘了簡してたもこらへてたも早まつた事し升たわいのう「いふも苦しき今はの懺悔聞に靜も源藏もこはそも誠かそら事かと御臺の顏を打守りいたわり申せば卿の君糸より細きこわねにて 卿ヲ、すりやかね／゛＼めのとに聞た自らが誠の父百合の太郎長範は熊坂といふ盗賊にて此家の主は母上か「ヤレなつかしやと身をねぢむき姥等が姿打見やり遙に淚ふり拂ひ 卿今はに見たる母の顏姿は父の俤かやヱ、本望やとはいふものゝ「戀しゆかしの我夫と敵同士の熊坂が胤と聞ては猶更に 卿未來の緣も覺束ない是申し靜殿もし我夫にあふとても必々自らは時忠の胤と傳へてたべ「非業の最期に身をはたし死るがかへつてつみほろぼし 重もふ目が見へぬ何れもさらば「さらば／＼も口の内おしや盛りの花ちりてあへなく息はたへ給ふなふ悲しやと小夜衣靜むなしきからに取附て聲を限りにふし沈む見る母親の氣は半亂取上んにもその身の痛手衣を喰さき身もふるはれ消入計りに歎しが源藏に打

向ひ姥ノフ爭はれぬは人の因縁夫は渡世に盗をする其子は敵を言立に盗するも免れぬ悪縁一日親の慈悲もなふ藥の上から養子にをくり時忠樣の娘御なら夫の爲には大事のお主誠をいへばかわいヽ娘間違ひ事とはいひ乍ら手をおふせたは何事ぞ冥途の夫へ言譯は麁相とも怪我じやとも詫して事が濟そふが牛頭馬頭あほうらせつの前つみが披ふかゆるそふか五百ちんでん無數こう〴〵浮む世更に有ふかいなふ「淺ましの身の果と頭巾も小手もかなぐり捨柱を楯に身を打附消入〳〵泣沈む理りせめて哀也源藏も怒りをしづめ源さほどに思ふ一念力敵の土地には住ずして此美濃路に足をとめしはいかに〳〵姥されば〳〵美濃路は夫の死れし土地輪廻さらねば得もさらぬにその松若は盗みゆへ今宵限りに美濃路を拂へと仰は重き國の掟夫は罪に罪を重ね此身の科に科を重ね國の法迄そむいたる科のいみ名は罪人と呼出してたべ人々「懺悔にあかす心根を少しは不憫と源藏立寄松若が死骸ひんだかへて聲はりあげ源一日くらせど其恩厚し國の掟は破られず美濃路より近江路へ山越の罪是を見よ「持たる死骸その儘に傍示のあなたへ投やれば姥ハア、有難や忝やとてもの事に今はの願ひ娘にあらぬ御臺の死顔一目見せて此世の別れ「お慈悲お慈悲と手を合す靜を始源藏夫婦御臺の死骸抱をこし見するも涙見る涙惜さも忘れ人々も共に哀を催せり始終を木陰に窺ふ小猿何でも靜をしてやらんと搔附松の月影に目早き源藏氣を配り源當盤御前を殺したる熊坂の長範が姿變らぬ一體分身卿の君の當の敵死たる上は陸奥の我君によい手みやげ「てふど打たる小柄の手裏劍上には堪らずでんどう木から落たる小猿がはいもうト松ヽのり小猿飛下りて小さる靜め渡せ「摑みかヽるを源藏が透さず投つけ踏のめらす姥等は御臺の死骸をふりのけ姥今ぞ一日の掟をたて惡を遁れし縁により善にもとづく我子の引導近江の土は黄金の砂我は美濃路の土と成り國はかはれど六道の土に迷はず眞直に此裝束の其ぬしとあの山越の松若と御臺と合して三惡道「偸盜戒をやぶりたる夫の地獄へ諸共に導びき給へ南無あみだ佛姥南無あみだ佛多「我と我手に懐劍を又も咽に突立れば散數紅葉紅ゐの血汐に骸を染なせり源藏夫婦いさみたち靜の手をとり聲鬭まし源敵亡びし上からは是より直に我々夫婦靜御前の

御供し目出たう主君に近江路の我家を立もさいさき
よし「心得たるか女房といさめの詞に小夜衣がかゝ
へ引しめかいぐ〳〵しく さよ 再び結ぶ夫婦の緣是此御恩
は靜樣もし又途中で吟味もあらば此身を直に御身代
り「夫がせめての恩報じといさむ小夜衣しほるゝ靜
靜是々源藏卿の君の御最期も元はといへば此身ゆへ
我君吾妻へお下りを支ん爲に國々へ關所〳〵が有と
の事「かならずゆだんしやんなと敎の詞に小猿が左
平治 小さる ヲ、術妻のよい推量行先々に制符を廻し義
經始家來のやつら自滅じさらすを見る樣な「いひさ
まかゝるを源藏が投のけ〳〵しつかとふまへ 源 その
御案じは御無用〳〵譬へ關所を通さずとも傍には忠
義の武藏坊龜井片岡伊勢駿河附添をれば氣遣ひなし
「殊には熊野の行者に出立笈摺ときんの山伏とやつ
し給へば鰐の口毒蛇ののんども安々と遁れ給ふは案
の内 さよ 我々三人も山伏の姿とやつし行時はかへつて
人もとがめぬ道理「すゝめに源藏打うなづき 源 ホヽ
その謀極てよし無事に彼地へ到著せば出羽奧州にあ
またの味方もし鎌倉より討手來らば「伊達の大木戸
さしかたの 靜 先陣後陣は さよ 其場の駈引 源 奧州駒に鞭
を當「龜割坂にかけのぼり遠く逃るを遠矢に射たて
近くいさむをひづめにかけ 小さる 向ふて來らば 源 一騎
の勝負「敵を殘らず討ふせ〳〵高名手柄は仕勝ぞと
いさみにいさめる有さまにこなたは手負の斷末魔 姥
ヲ、いさましいその門出美濃路の果は親子三人今ぞ
冥途へ此門出 靜 そのお命もけふの君 さよ 墓ない別れに
あをはかの 姥 松に緣ある兒の松若 源 めいどの猿は此
小猿 小さる 何を トかゝるな ポンと切 源 門出の血祭り 姥 おさらば 三人
さらば「さらばと計り立別れはるけき旅の陸奧とか
へらぬ旅へと ト姥等バッタリ落入る源藏の刀を袖にて小夜衣ぬぐふ靜は卿の君に取出なき落す 「別れ
ゆく 三重段切にて宜しく 幕

天保十亥の年五月天滿天神奉納狂言

西澤李叟述

西澤文庫 脚色餘錄初編上の卷 終

西澤文庫脚色餘錄初編中の巻

目次

西澤文庫 脚色餘錄初編中の巻

西澤綺語堂李叟著

古今雜劇書籍の話

俳優五雜俎七書の類ひは皇都八文字屋自笑が作名にて年々三都戲場の藝評も皆其比の見功者の評判にて年々評者は變ると雖板元八文字舍の名前を假れり其餘名高き役者の一代記(嵐小六が玉の光、嵐來芝が桐島臺、市川團藏の一河流、澤村宗十郎の澤村鑑)の類も是におなじ松好齋が樂屋圖會は畫圖を以てしらせ劇場訓蒙圖彙は(羽勘三臺圖會と云小册に倣)式亭三馬が滑稽を書り東都歌舞妓年代記は淡州樓焉馬、歌川豐國に畫せて三座の外題年鑑を擧るのみ俳優似顔の書は流光齋に始り松好蘆國春好に續き東都は勝川春英より豐國迄其時々の俳優の似顔(兒手拍、草の種、雙合鑑抔數本有)生る如く畫きし書有梨園の小冊雙紙物擧るに際限なかるべし淨瑠璃にも亦然り(竹豐故事、東西評林、操年代記、新増外題年鑑、闇の礫、難波土産、瑠璃天狗)數書あれども其時々流布するのみ跡に遺らず予三都歌舞妓外題年鑑及一座の進退改名歿年一世一代等を書集め寛永以來より當時迄を祕藏し兼て梓に鏤めんと思へ共未よき畫工を得ず空しく捨置んも本意なく近來言狂作書と諢附淨瑠璃歌舞妓の雜書を萃り此門の作者の傳、太夫俳優の改名、追善摺物、番附等年代の新古を論せず狂言の人名錄實說虛談の脚色み據出る儘に記せしが傳奇作書の卷を重ね七部二十一卷に及ぶ猶是にもれたるを追加して脚色餘錄と號此卷を繼ものなり先に出す梨園七書の目錄を改て左に記す此書の再評と照らし見給ふべしと云

傳奇作書七部の目錄

(初篇より後集迄六部重復につき略之)

鯛屋貞柳狂歌の話

油烟齋貞柳の狂歌數百首の内「憎まれて世に住甲斐はなけれども可愛がられて死よりは増といふは寳に千載を貫くといふべし嵐小六は前集にも演るごとく元若女形より後立役となりて（寳永五申年父小六の一世一代山姥[illegible]金時）始は手ぬるしなどゝいはれしも後々追々に評よく立役實惡女形所作何にても出來ぬといふ事なく古今の大立者といはるゝに任せ樂屋内にても威をふるひ憎まる

る事甚しく既に寛政元酉の春中にてけいせい北國瞽にて金剛（中働らきの男もどなり）に懲らされし程の事也同秋角にて一世一代をし續いて矢張出勤し寛政六寅年改名（叶雛助改）（嵐小六中村十藏改嵐雛助）せしが昔より玉と稱するは此小六ゝ人也翌七卯年の秋角にて天竺德兵衛聞書往來の世話場にて百姓萬作に嵐三五郎（元祖来芝）天竺德兵衛に嵐小六萬作德兵衛の爲に腹を切諫る所にて「憎まれて世にすむ甲斐はの狂歌を云を小六一直して「可愛がられて下手より增じやと廣言吐し事は普く人口に遺つて並々の藝者の云える詞にあらずと褒あへりしと也近來梅玉歿前此せりふの云たき心有て予に此事を誂らふ幸ひ復讐高音皷の狂言增補の時淺間左衛門照行の役にていはせし事有天竺德兵衛は蛙の術を遣ふのみにて技藝の上手下手に拘はらぬ役也故に作者辰岡も死よりは增と書込しを小六藝道にほこつての手褒なり予が淺間照行にていはせしは舞樂堪能に拘はる役なれば下手より增じやと詞を居しもの也其あら條は次に出す作者の用心爰にあり讀て知るべし笑ふべし

三國一夜物語潤色の話

曲亭馬琴が作の三國一夜物語出てより富士淺間の狂言は是に定まれど謠曲の富士太皷淨瑠璃には享保中に豐竹座作者並木宗助にて秀佾人吾妻雛形あり自笑其磧の作に富士淺間裾野櫻此條に數多作せしものあり三國一夜物語の御座船の內に淺間太皷を打調子變りしをいぶかり何者ぞ舞樂の道をしりたる者窺聞くに相違なしと蘆原へ人を上らせ搜させるに果して一人の漁者に會ふ是富士右門也船中に呼寄舞樂の問答になる條は英雙紙（千里行著作）に蘆原の傘秋琴を彈じて糸の斷しを怪しみ蘆原に閑居る漁夫を船中に呼ばれ琴の故實を問答に及ぶ條をきりはめたり戲作者は舊の筋を隱して遣ふは罪深き者也文化五辰年若太夫芝居にて內百番富士太皷と外題し角の芝居にて復讐高音皷と賦し三國一夜を脚色しが濱芝居の方は謠本の儘也高音皷は奈河七五三助奈河篤助（後に一泉）の作にて淺間照行片岡仁左衛門（八代目南麗舍）富士右門中山新九郎（始中山新七俳名喜樂）富士太郎に嵐三五郎（二代目始松之助）にて評よく大入せり此時片岡荒凌山の石の舞臺にて新九郎を殺し藪原を切拔出ると空より月下り影にて賽の夜半樂の舞樂を奏する片岡懷中より舞樂の祕書の一卷を出して此音樂の譜に合せて足取をまねつゝ向ふへはいるを二幕目

の幕切とす片岡舞樂をしらぬ物から其所作をあやぶみしを來芝伶人何某と親しければ習ひ來べしと謝禮の金子を片岡より取扱天王寺伶人町伶人何某の方へ行て所作の故實を習ひ覺それに歌舞妓の心を交へ片岡に敎けり跡にて樂屋内の評を聞に來芝は贔負先の伶人なれば謝禮には及ぶべからず眞の祕事を覺へて片岡には假寄の事を敎へ禮金は多く來芝の懷へ納るとは如才なき仕方と云を片岡聞て我始より來芝に金子を與へる心也紹介なくば樂人に習ふ事難く眞の譜を習ひ得ても狂言にはなるべからず來芝に給金を與へて別に芝居の舞樂の譜を拵させ歌舞妓の業に仕て見せるは片岡なれば來芝の手柄にはなるべからずと云しと也俳優者流にも又かゝる見識あり感ずべき事なりかし

高音鼓增補の話

天保二卯年九月中の芝居にて高音鼓を增補せし時以前の三幕目（富士右門の内老妓姥等の内）を略して天王寺巫子町黑格子お萬の場を書入額藏（額十郎延若也）女房（松江今の富十郎也）の世話場にて東門邊の離れ家に淺間照行（歌右衛門梅玉也）眼病をやむがゆへ匿ひ有場也額藏夫婦は淺間の親に仕へ照行に恩あるゆへ種々の艱難をして眼病の藥を調へ母お方（中山文七）の育君奥田主殿（中村歌七後四郎兵衞）淺間を詮議に來てお萬を人質に取りて歸る惡者捻兵衞（淺尾國五郎）の手より舞樂の衣裳を額藏もとめて淺間の住家に有世話場返つて葭屋根の小屋となる幽に天王寺の入相鳴る照行眼病を愁ひて獨言の終りに妙藥の血汐を額藏夫婦捻兵衞と爭ひながら持來て淺間に吞す立處に本復す額藏夫婦は淺間が惡事を諫て母の人質を歎き善心になりくれと諫言すれど聞ざれば夫婦共自害するを我强き照行見向もせず遙に夜半樂の舞樂を聞眼病治る上からはと彼衣裳を附て鉾を手に持舞樂を舞ふ捕手大勢出て影なしの立廻りに合せ夜半樂を舞ひ音樂の調子殺伐の音を出すは我を捕らんず結構を藝道鍛錬の德によつて胸に的中するかといぶかる額藏夫婦苦しみ乍ら舞樂の道は上手にもせよ惡事を止ねば其身の破滅何卒夫婦が今はの願ひ善心になつてたべいや惡人ともそしらばそしれいつかな心は飜さぬすりや是程に諫めてもオヽ憎れて「世に住甲斐なけれどもチヱヽと雙方より齒ぎしみして詰よるを足下に蹴のけ脇息を前に置て「可愛がられて下手より猪だャヽこなたはの

ふと雙方より見上る淺間は脇息にもたれてにらみ附る幕也斯藝道の事を前に運ばねば下手よりましの心開へ氣るなりそれさへ相手は延若（梅玉の弟分也）慶子（松江は熊太郎の比よりの弟子也）なれば此せりふを言せれどそこ〳〵の役者には遠慮有ていはせぬ詞也小六は同門とはいへ來芝にむかつて此せりふは豪傑人を欺くともいはんか梅玉も後々は死より増じやといひしは氣恥しと思ひしにやあらん

淨瑠璃歌舞妓俗語注解の事

淨瑠璃の文談に和漢の故事に及び俗耳に遠き言語を注解せし書は難波土産、瑠璃天狗など外題して古くあれど晝夜共常に云ひきたる俗語には注解を加へず國々の方言時々の流行詞などいつとなく云來り通言となるも少からず是を擧る時はなか〳〵際限有べからずふと思ひ出るにまかせ少々爰に演る中にも予が僻考もあるべし後人加筆あらば作者の大幸也別に外題を擧ず共淨瑠璃歌舞妓の文談より移り來て俗家の常の詞となるもの所謂闕を聞すとは（碁の闕より云か）揚句の果て（連俳に花の座有て終を揚句と云）男のかうけ（好嫌といへども當らず高氣なるべし）れつきとした（烈氣とも書來れど歷々としたの略語か）けんもほろゝ（雉子の啼聲を云）破れ冠れじや疊んで仕舞へ（とは笠傘の事を云か）八月のおばれ蚊（とは八月の破れ蚊屋を云か）ぼろなへ（母衣なへ母衣な亂す武者の詞也）わつゝ口說つ（とは割つ碎つ也）打つ勝つ（といへば碁の詞也追つ勝つなるべし）三寸組見拔て置た（是重言なるべしまないた見ぬいた三寸先を見ぬいた也）むちやくちや（はもみくちやより出てもみ草より云）どさ草、いさ草、言草、埋草（みな同意か）繼の繼橋（重言也繼の橋也）迷子の子（迷ひ子の略まいご也重言）後手〳〵（軍中の詞か碁の詞也）鵜の目鷹の目（明礬の色をいふよし）せいさい（願以至功德施一切經の言）ようちんに迷ふ（佛像雙六とて地獄極樂の繪雙六有中に永沈とて爰にいれば落入て出ぬ事也）はてつぼ（半鐵炮とてとゞかぬ事を云かやり放しも鎗放し放やり等也）はすは（蓮葉と書て下さくな女を云）めどが違ふ（とは箸と書て算木の事也周易のことばなり）此類の詞を注解せば盡る期あるべからず亦劇場にかゝはりし詞樂屋の方言通言ともに甚多し予是を集て戲場往來と號て芝居に限り遣ふ詞を小兒の習ふ商賣往來に倣ふて戲作せり猶後々の編に出すべし

狂言に名高き詩歌の辨

詩歌連俳も辨へぬ者にも覺易きは淨瑠璃歌舞妓に使ひたる句ども也朗詠の讃レ沙草只三分計踰レ樹霞纔半段餘といへば手習鑑にて菅公の作としり「さなきだに重きが上の小夜衣は假名手本にて新古今に有としる「急がずは濡ざらましを旅人のといへば道灌の詠とは彥山に出す連歌俳諧などは猶更俗に近くて覺易

し「時は今雨が下しるは光秀の句「傾城の賢なるは其角「起て見つ寢てみつは千代と誰々もしるは皆淨瑠璃歌舞妓にて聞覺ゆるがゆへ也後々は耳新らしき句を出し「手にとるなやはり野におけ蓮華草と播磨の瓢水が句（忍術が池茶や場に有）「折事も高根の花や見たばかり來山（黄金鱐二つ目に有）の句を出し追々に穿て遣へりまして百人一首などの古歌は態と切はめて遣ふ事也日本歌竹取物語に大江の助千里が「月見ればちゞに物こそ悲しけれ和田合戰女舞鶴に鎌倉の實朝が「蜑のをぶねは綱手悲しも抔は狂言によつて誣附（こぢつけ）たり伊勢物語の「風吹ば沖つ白浪安達原の「我國の梅のはなとは菅原の「梅は飛と婦女子も是をしる爰に寛政九巳の春中にて扇矢數四十七本（作者辰岡）の三つ目由良之助（市川團藏）堀部安兵衛（中山文七發附屋也）本國評定の場にて市人の股を潜る韓信の故事を云ふ時「末終に海となるべき谷水もしばし木の葉の下くゞる也と韓信の書讃を吟ず此句は其比歌讀に名高き小澤蘆庵の詠し也といへど實は伏見中書島の隱士學舟の詠なりしを蘆庵四の句を直せしにより（山水も谷のこのはと有し也）世に蘆庵の句也といひ囃せしにより戲場につかひいよ〳〵蘆庵の句となりたり前に云ふ貞柳の「惜まれてなど感ずればこそ戲場に物して世に弘まる風流の上の面目なりけん附て云狂言によりて名所にてもなく古歌もなきものは其時の作者古歌に有そふなる句を拵へて間に合す事有譬はゞ飛馬始の二つ目粟島の館にて尼子の四郎義久寶を紀州名草山の麓に隱し味方の者にしらせる歌に「紀の路なる名草が岡の櫻花落て谷間の雪と見るらん青陽□二つ目に柴田勝家寶を隱せし所を妻小谷にしらせる歌に「越路なる入方村の白雪に降埋みしと人はしらじや（入方寺村と云七ふしぎの一つ也）蹙仇討黑百合の出所をしらせる歌に「越路なる千蛇が池に咲ときく百合はあやなき烏羽玉の色かやうに拵らゆるは古歌の作例なき折の事也大體は古歌を其時候に合せてつかふ物とするべし

北の新地心中の話

當世榮花物語を著述するに浪華の遊所に心中情死の有しは北の新地に多く南の地は陽氣浮氣を喜ぶの地にして自然と薄情なるをなじはせしとするか心中情死甚少なし曾根崎心中と云は天滿屋お初、平野屋手代德兵衛天神の森にて對死す元祿十六未年也（百四十九年に成）今天神をお初天神と云へり此年より四年目寶永三戌

年曾根崎天滿屋お島、長柄村百姓助右衛門悴市郎右衛門天滿屋の二階と長柄堤と所を隔同時に死せり二枚書雙紙とて淨瑠璃に作る（百四十六年に成）同年梅田の心中と云は老松町饅頭津屋彌市、曾根崎萬屋のお高、明石屋と云茶屋より忍び出梅田の墓所にて心中せり又寶永七寅年北の神明の森にて備後町大文字屋利右衛門（鍛冶商賣）の弟子平兵衛、北野鐵槌煎餅屋三郎兵衛の姪曾根崎平野屋小勘和泉屋といふ茶やより忍び出て心中せり（百四十二年に成）此後享保五子年には曾根崎紀の國屋小春、天滿御前町紙屋治兵衛綱島大長寺にて對死しけり（百三十二年に成）十八年が間に五度の情死有しを思へば其頃は此里繁昌せし事勿論也此五つの淨瑠璃の文中に今とは唱の違ふも有場所の少しく替りしもあり思ひ出る儘に一二をいはゞお初德兵衛の上の卷に大坂三十三所觀音巡りの文有此比始りし故淨瑠璃に書入節を附語る物なれば弘まる事速なれば講中世話方より作者に頼て書入もらふ也お初天神記と外題をかへ往昔曾根崎村曉と增補有しより誰いふとなく天神の森をお初天神と呼法華宗の寺號を呼ずしてゝろじ寺と世俗に云寺も此東に有かゝるはかなき最後をとげたる者にも神佛の名をかふむるも此者らの幸なるべし此天滿屋お初もお島も同じ店にて四年めに當り心中する事天滿屋下女のせりふにあり梅田心中道行に曾根崎茶やの名盡し女郎の名盡し有は其比全盛の名高きを擧たるなるべし此翌年心齋橋道具屋內娘お龜、養子與兵衛と梅田の墓所にて心中せしゆへ卯月の紅葉の段切に先だちうせし心中の戀の移の香をとめて梅田橋へとの文有お高彌市の事を云也神明森の心中は六月朔日の事ゆへ心中乃は氷の朔日と外題して六月朔日を正月納めの紋日と唱へ勝曼參を米達が駕に乘て參る近世の十日戎正月初天神の如し又此日町々の子供色色に好たる凧をのぼす事有凉風に乘じていろ〳〵のぼす凧盡の文有は此比のはやり物か珍らしゝ此道行は心中夜の朝顏とて心中盡の文句もいと珍らしければ爰に出す

心中盡道行の文句

（前文略）世の中にたへて心中なかりせば二世のたのみもなからましたれか仕初し此契りをとに聞しは生玉のそれが始のだい市之丞つれて男も名の高き大和の國や三笠山笠や三勝舞の袖つまとつまとを引よせて結

ぶ無常のうすけぶり千日寺のはかなしや別れし跡の寢姿はよなかの鐘に目を覺しかゝよ／＼と乳呑子の歎を捨し修羅の道魂は冥途に至れ共魄となりたる今の世のおつうは母の筐ぞや此曾根崎にうづもれぬ大阪三十三番に名を殘したるふだらくや大慈大悲の誓ひにて終にはとそつ天ま屋のお初も佛仲間かや道具屋おかめ與兵衛とは思へば近き町續き世は何事もなには橋よしとあしとの堺筋なかに立たるしづが身はふびんと思へ備後町それのみならずごふく屋の手代半兵衛はかの池田屋の小菊にたんときん入なれば心どんすなものでもないに身のしゆすごしに氣は縮緬のみせの帳面皆ぬめりんず羅紗もないといはしやりんずのはや人だまもとびざやぬいて共に及のもの羽二重のおなじ枕にふしつむぎかさね井筒の戀の水結び波手は多けれど色はさま／＼紺屋染胸は萠黄に紅ひはださやけき色は是ぞこの木賊に染てさしもげに心中みがくゆかりかや（下略）此作者近松門左衛門にて其比有し心中盡しをならべ書し也始に生玉心中市之丞は解せず（正徳五未年に生玉心中有五年後也）三勝半七、お初德兵衛、お龜與兵衛、小菊半兵衛、おふさ德兵衛と連年たり心中天の網島曾根崎川庄の段にてなまいだ坊主てんがう念佛を唱へくる乞食有是は瓢簞（から）し志道軒の如きの者也歌舞妓狂言のべの書留には此坊主より思ひ附石町の隱居本名傳界坊とて紙屋の內へちよんがれをいひくるに仕組たり此外題の論殁年の相違は傳奇作書の初に出せば爰に略す右北の新地心中の內にもお初德兵衛小春紙治は誰々もよくしりておお島市郎右衛門、お高彌市、小勘平兵衛の名さへしらぬはいと本意なきものなりけり

新町に名高き世話物の話

廓中の太夫天神に往古より心中情死の沙汰すくなく夕霧伊左衛門、椀久松山、吾妻與次兵衛等は心中に非ずたゞ浮名の高きのみ也梅川忠兵衛は作書に述しごとく送り込の女郎を連て駈落せしなれば心中とはいふべからず此餘阿波座吉原の安き場所には心中むり殺しなどまゝ有べし中にも天職にて心中せしは槌屋揚卷萬屋助六なり千日寺心中とて寶永六丑年の事也（是より二十七年後）享保二十卯年に萬屋助六二代彔と云淨瑠璃には長柄提にて心中するよしに作せり今專ら行るゝ大文字屋の場のあるは明和五子年堀江此太夫座にてせ

し（助六上卷）紙子仕立兩面鑑也此二代衾の中の卷野土町の假座敷にて揚卷田舍客に圍はれて爪彈に岩田帶の唱歌を諷ふ段に「萬屋の助六は身より出せる錆浪人親の意見のやれ紙子古編笠のしよげ姿思はず三味に浮されてハヽア彈たり諷ふたりおもしろいはこぞの月見は井筒屋で底意隈なく夜とともに飲明したる大騷ぎ（下略）此せりふを今專ら歌舞妓阿波の鳴戸吉田屋の場にて伊左衛門のせりふと混じて云も有何れを母屋何れを出店としらざるもおかし

地者心中情死の話

瓦屋橋油屋娘お染子飼丁稚久松と對死せしは寶永八卯年の事にて實錄といふ書は難波の蘆といふ寫本有十卷淨瑠璃におそめ久松袂の白絞とて其年正月二十日より紀海音の作にて出す（百四十一年に成）是此狂言のもとにて後に新板歌祭文又染模樣妹脊門松等の增補あれども袂の白絞を題とせし物也又寶永四亥年四月に前に云お龜與兵衛の心中は梅田にてお龜は死し與兵衛は助かり和州平郡谷の庵室へ入て助給法師と改名したれど七々箇日に當つて自害し相果けり故に竹田出雲作にて卯月の梅と外題して四月二十一日より始上の卷に大阪二十二社詣を書入巫子町黑格子にてお龜聟與兵衛の生口を寄る場中の卷心齋橋道具屋の段下の卷道行より梅田の心中迄をして同六月朔日より後日狂言卯月の潤色と唱へて巫子町再び口寄の場より平郡谷庵室幷に助給入道書置を終とす此前日巫子町の芝居噺にお染半九郎心中に（牛四郎四郎五郎）の事を云是鳥邊山の心中也此道行に久太郎町より北濱迄の町盡し有是は竹田出雲の作にて次に近松門左衛門の作に本町より道頓堀迄の町盡しあれば淨瑠璃の前赤壁後赤壁とも稱すべき文ゆへ爰にまづ前赤壁の文談を記すもの也

おかめ與兵衛末期の道行の文

今捨る身にも恐ろし犬の聲辻を隔てヽ見歸ればあれで產れし町どころ家の馴染も十五年其春夏の此月は祝ひ月とて物忌ひしの字をさへも嫌ひしが死で死骸をしる人に其死恥もつヽましくそなたのかもじ亂れずやいや我よりもおの樣の鬢撫附て搔なでヽ死だ跡までよい殿と人にいはせまほし明り今宵の月を月々に待しも終に引かへて冥途の使ひ我々を待らん物とかきくれて淚曇りの十七夜ふたりが袖にやどしけりよしや地獄へ落る共たとへ佛になるとてもかならず

契り米屋町本町筋の軒深く思ひしみたる中なれば埋まばおなじ安土町生れ替りて又いつか婆婆の便りの備後町思へば我も元服しわしも若いに鐵漿(かね)附て逼れし賽のかはら町三途の瀬戸の淡路町こゆれば親の古里の名にもわかる丶平野町明ぼの近き時太鼓どうどう修町是や此修羅の太鼓のひゞきかと共に驚く袖と袖いだきよせつゝ泣ばかり聞けば私もかゝ樣の三十過ての初子とや其讓りかや馴染て一夜離れたこともなくかはす枕に子種のないか是も產ずの數ならば根を堀る竹の伏見町高麗橋の西ひがし床も定めぬ立君は是も世渡る習ひとて浮世小路の細き聲諷ふてかへる其歌の品ある中にもこぬ人をまつほの浦の夕凪に燒や藻鹽の身を焦すそれは吾妻の物語耳に聞たる計りぞやそもじと我は難波津の貴賤群集の見るめかるあまがさき町過書(くわしよ)町にはや北濱や中の島翌は天滿のはし〳〵賣て梅田の〳〵堤を染し紅葉かさやのな女夫の心中男二十一おかめは十五年にあはすりや徒らじやサア繪雙紙ヱよその口のはア、よそ事に買もとめてなぐさみし此身の果を讀賣に誰がふし附て田舍まで諷ひながさん蜆川（下略）前に云お高彌市梅田の心中の翌年にて百四十五年となれり

地者心中續きの話

お千代半兵衞の心中は享保七寅年の事にて既に實說は作書の初に出す（百三十年に成）谷町寺町大佛勸化所の門前にて心中せしは丑年四月五日宵庚申の夜六日の朝の事也寅年四月六日より豐竹座紀海音作にて（おちよ半兵衞）心中二腹帶を出す同四月二十二日より竹本座近松門左衞門作にて（おちよ半兵衞）宵庚申を出す然れば同年同月に淨瑠璃出て十六日違ひ竹豐兩座張合に出せし也二腹帶にはお千代の年二十四と有て宵庚申には二十七と有半兵衞の年は三十八也兩座の狂言上の卷の趣向は變れ共八百屋道行は何れも實說に近かるべし二つ腹帶に於猶彌兵衞が心中の噺あり同時の事なるべし宵庚申に筑後川中島の淨瑠璃より始て山の張貫出來し事をいへりそれ迄は簾に山の書割にて有し也同在所場にて網島心中の床本有といふは小春紙治の心中は此二年前なれば爰に出せし也かゝれば天の網島の享保五子年十二月六日より始めて十月十四日十夜回向の折から死したるが實也網島大長寺に小春治兵衞の書置ありそれに享保七寅の十月十四日と記せしは寺記

の方過てりかゝる事は戯場の方に證とする事多しとしるべし寶永六丑年の秋本町二丁目菱屋四郎右衛門下女おきさ、子飼の手代治郎兵衛と今宮戎の森にて心中せしを翌七寅年春竹本座にて今宮心中と外題し近松作にて始る後に丸腰連理松とも外題替せしも此淨瑠璃にて一名掛鯛心中とも云けり上の巻西横堀へ涼船に別家由兵衛、本家菱屋の内儀、息子、隱居を饗應の船中にて其比のはやり役者を橋々に見立たる文談あり下女お象の親三田村太郎三郎娘を在所へ片附んと暇を取に來るをお象は兼て手代治郎兵衛と懇ろしたれば是を嫌ふ別家由兵衛お象を女房にせんとの望あれば隱居貞法尼へお象の縁談を任すとの證文を親太郎三郎より取る濱納家より手代治郎兵衛是を聞居て身をもがく中の卷菱屋の場にておきさ治郎兵衛此證文をとらん爲四郎右衛門の灸をすへる間に戸棚の鍵を盗み戸棚を明て手形を引やぶる所へ別家由兵衛來るゆへ治郎兵衛は戸棚の中へ逃込象は手早く戸をしめるを由兵衛とくと見屆け鍵をひらふて錠をおろし治郎兵衛は袋の鼠こだてにおきさを口説ど象は泣入聞屆ねば盗賊を戸棚の内へしめ込みしと大音に罵る故家内出あふて詮議になるを主の情に穩便に計らふべしと戸棚は其儘象を親もとへ送らせ由兵衛も歸らせ跡にて貞法戸棚をあけ治郎兵衛に意見して象ばかり女でなし思ひ切て由兵衛にそはせば浪風立ず納る道理任せ證文はとく引破つて仕もふたれば後にはそちらを夫婦にせんと思ひし事も水の泡と呵つおどしつ言聞せ治郎兵衛に得心させ念佛申て奥へ入跡に治郎兵衛うつとりと手形は隱居が破られしを今破つたは何なるぞとつき合せ見れば家質の證文なむ三つぐに繼れぬ命の瀬戸際お象は門へ忍び來て二人一所に心中と手に當つたる日野絹一反今宮の森の木に二人並んで首を釣り掛鯛とも連理の松とも噂の高き心中也年期野郎と下女の痴情をよく穿たる淨瑠璃也此道行は南船場の町盡しにて竹田出雲が北船場町盡しのよき對句なれば爰にしるす

お象治郎兵衛の道行

ひとつとやひとつ涙の瀧の糸落て三途の川となるふたつとや筆もあれかし我心書て後世にとゝめたや三つとや見たや聞きたや故里の親の生顏夢にだに夢さへ見せぬ死手の夢覺てはいつか此婆婆へ歸り今度の

數入は女夫連でと約束の盆正月の十六日を待樂しみし我々が哀れ地獄の釜の蓋あくを待べき罪人と呵責の責はよもや其いとしいそなたかはいゝそなたのがすまいぞや遁さじとすがり抱よせ泣く姿とがめてほゆる犬のせぬ此世に地獄見せけらし是を思へば親の罰わしは親よりお主の報ひ育られたるお情や後生願ひの親方の宵にや和讃夜半にや念佛はやまよなかの月代の空を力に東堀すみゆく水に影移る我身のにごり恥かしや恥は暫しの浮世なり其戀をする身の手本町とはふたりが心ひとつに米屋町其思ひ計りて後生七生たすかるおれが殿御は日本おろかよ唐物町にも稀な男のちよきりこきり小女房花の樣なる和子をもふけて久太郎町とてやがて寺入久寶寺町其かね事もいつしかに仇寢の夢のばくろ町誠に私もこなさんも跡には親の枯殘る老木の老の世は逆さまに順慶町も空ごとや安堂寺町も子ゆへの闇に迷はせません不孝のつみ何とのがれん淺ましと又引よせてなく涙袖にさしくる鹽町や長からぬ世に長堀の樂な世界を心から九の助橋や是や此死屋橋とや油屋の油しめ木の音に聞お染に染し久松はいつの晴雨の一雫洗へど落ぬ戀衣世に廣がりし仇し名をよそに譏ひしことのはや其油屋のひとふしも師走油か身の上にかゝる涙とこぼれそひ翌より同じ三味線に法の灯火油屋の回向をなすこそ哀なれひとつ有さへおしき世に今宵限りと堀づめや命二つを二つ井戸ふかい緣とて死たいも皆罪消の大和橋あめ千日に立煙り無常の雲の五月雨降らぬ先にと死場尋ねて下略百四十二年となる昔話也

江南心中情死の話

島の內坂町難波新地は道頓堀の南岸を圍み繁昌の土地なれば自然と人氣浮氣にて心中情死は稀々にて所謂むり殺しの方多かるべし今歌舞妓にて專ら出す古手や八郎兵衛丹波屋お妻を殺すとは實は坂町の女郎若野殺しにて舊複重古手帷子と云鰻谷古手屋八郎兵衛女房お妻を殺せし名を假て若野をお妻とせしもの也岩井風呂の人殺しは作書に出せば爰に略す多くは此類にて心中情死とするは笠屋町額風呂の小三金屋金五郎と對死（元祿十五年午にて赤穗四十七士夜討同年也）淨瑠璃に浮名の額歌舞妓に妹脊掛行燈南詠戀抄書などとて種々に作れり笠屋三勝茜屋半七千日寺の心中は（元祿八亥年也）作書の續編に出れば略す万年町紺屋德兵衛、六軒町（今のぬしや町）重井

筒おふさとの心中は大佛掛所にて也（寶永元申年にて百四十八年となる）重井筒の場に火廻しの戯れ有いと古きより弄物とせらる又此頃今の相生橋を始て架せしと見へ道頓堀の中橋と唱し也屋根傳ひに忍び出樽屋町へ下る（樽屋町は今の酒邊町の古名也）文有上の巻四つ辻にて古く人形にも遣ひ來ると見へ歌舞妓にても德兵衛羽織を落ししらずとはいる是濡事師の現になり羽織さへ脱落すとの好なるべし寛政中に中山文七（髮附屋の事也）焦茶眞岡木綿丸に桐の紋染たる羽織を落し這入る幕外にてそれを鬮にて見物に當日に羽織一枚宛日數三十日計りの興行の內浪華市中の羽織殘らず桐の紋の茶の羽織になりし程はやりし事有しとぞお房の入用銀四百目などゝ今時の狂言とかはり質素なる事實說に近かるべし重井筒より十六箇年後天の網島紙治の內にて小春が命は新銀七百五十目今の治兵衛が四つ三貫目の才覺打みしやいでもどこから出ると詞有然らば重井筒の四百目も新銀にて一貫六百目の事を云か考べし始德兵衛鎗屋町舅の方へ行には一刀を差ゆかん筈なし重井筒の二階にて早脇差を取出せしは治右衛門の刀にても取出せしか此段すこし不分明ながら所謂狂言事か不知正德五未年五月五日の夜生玉の心中は九之助橋松屋町角一つ屋五兵衛（茶碗商賣）の悴嘉平治下大和橋の出店より伏見坂町柏屋のさがと云女郎を連出ての情死也同八月朔日より生玉心中と題して近松の作也國性爺は此冬近松の作にて百三十七年となれり文中に柏屋は坂町南側と見へ裏通りは畑にて三勝半七心中より十四年後也坂町を此比は伏見坂と唱へし也上の巻天滿天神社內小山屋にて北の新地芝居嵐座にて曾根崎心中を歌舞妓にせしを見物に行たるを云（曾根崎心中より十三年後也）事有此餘に（大阪屋銭木　三文字やおもと　池田屋小菊　福島屋お園　鶴屋禮三郎　山下かめ松　手代半兵衛　大工六三郎）など心中情死は次々の巻に出す好人是を見給ふべし

本陣宿鎗間違の話

文化十三四年比東海道品川宿にて參勤交代の諸侯の泊り一時なり鎗持宿を取違ひ爭論となりし噂高かり文政元寅年江戸中村座に於て其比の大座狂言敵討達者揃と外題して彥山の增補をせし事有此三幕目に箱根山中宿の本陣の場へ此鎗の間違の場を書入奈河一洗作にて奴佐五平に坂東三津五郎、渡邊勘解由に市川友藏、絹川彌惣左衛門に中村芝翫（中村歌右衛門也再び江戸行の折）にて佐五平鎗を持て供にをくれ脇本陣渡邊勘解由の宿へ

持行（部の家臣絹川の鍛部の分家渡邊へ持行也）心附て詫れど歸さず主人絹川に俺忽を詫て切腹す彌三左衛門奴の首を持て勘解由に會ひ勘解由を始歒侍を皆々討取仕組也其節の役割毛谷村六助絹川彌三左衛門二役芝翫、娘お園岩井半四郎、絹川彌三郎市川團十郎（當時の海老藏）娘お菊に瀬川菊之丞、京極内匠に松本幸四郎、吉岡一味齋榊斧右衛門二役關三十郎、奴佐五平轟傳五右衛門二役坂東三津五郎、三十四箇年たち今存命なるは海老藏計り也達者揃と賦せしも尤也其後芝翫（梅玉）一洗絶交して一泉と文字をかへ浪華に歸つて平井權八吉原讎と云濆芝居狂言の中へきりはめ奴定助と水尾十郎左衛門此良正左衛門の名に仕かへ平井權八網乘物を破つて本陣宿を遁れ出鈴が森へ行と續けり嵐德三郎（日德璃寛）仕始てより今誰々も權八と奴定助の二役をする事とはなりけり是らは何の狂言にもさしこめるがゆへ一日の狂言とははだ〳〵になりて續狂言には成兼る也近來赤穗の義士銘々傳に潮田政之丞の父江州水口宿にて家來八助が敵を討一話に專ら此事を作りもふけて講釋に云へり是らは後々何れを舊（もと）何れを後に作りし話と解がたかるべし

伊賀越古番附の寫

其掛合羽の事は前々の編に遁れど安永六酉年に初て歌舞妓に仕組し時より今嘉永四亥年迄七十有五年となる番附なれば摸寫して左にあらはす歌舞妓狂言も安永に一變して寛政の末迄を盛んとする宮古路の道行も珍らしければ綴ものゝ儘を寫しぬ

（番附板組の都合により
次頁に出す……編者）

（しづ馬おそで）道行會稽の初雪　宮古路大隅事常盤直

前途程遠思於雁山之暮雲後會期遙と此詩もしづまが身に大阪の地を辞わび又上がたへいく町かいつか晴さんちゝの仇倶に天をいたゞかぬ身も天蓋をいたゞいて討んと思ひこも僧の姿になるや尺八の是ぞ生死の境獅子音色もさゆる初冬の空定めなき行末は行かふ人の跡やさきちらつく雪氣神無川同じ道筋一筋に主を思ひの孫八がそれと合圖の念佛に笛も高ねを吹そらし「なむあみだぶつなまいだ〳〵なまいだぶなまいだ「なむあみ島を見渡せば櫻の宮居たうとくも又くる春に我身の花も再びさかせたび給へとおがむかた町坂ぐちもはや打すぎてゆく〳〵のべに吹木枯

安永六酉年二の替り道頓堀中の芝居に而極月二日より新狂言

座本　嵐七三郎

時に永正五年十二月上旬の事なりし武將足利義尚公の仰によつて女雛男雛の三々九度に跡な繼めの陶器と持こんだ紋日の血判約束しつかり癲病の療治明て云れぬ隱家の賴み狀に近來達者の鎚玉は鎌倉の浪人澤井股五郎

讀切講釋　**伊賀越乘掛合羽**　全部十五冊

斯て其年も暮明れば正月二日の早朝より管領細川政元の下知として仇と情の願人宿に未なかための羽觴と請込だ遊所の印可早速きいたり眼病の妙藥尋ね當つた敵討の願書に日本無雙の助太刀は勢州の住人唐木政右衛門

役	役者
政右衛門子巳之助	市山太次郎
こしもと小梅	あらし市まつ
同　わかば	あらし若さう
同　山吹	萩野千藏
同　もみじ	あらしきく助
同　小ゆき	あらし辰藏
禿いがの	中山富三郎
げいこうへの	萩野三代藏
こしもとしがゆみ	あらし森藏
安立千兵衛	尾上喜十郎
出づかひ盃三	坂東久五郎
そばや久兵衛	坂東久五郎
星合段五郎	姉川音藏
ごふくや十兵衛	藤川金十郎
ぎをん町一德	あらし三藏
山岡藝藏	あらし三藏
八ツ島義平	岩村かめ藏
九佐美五右衛門	中村瀧五郎
春日や甚九郎	中村瀧五郎
仲居おはる	嵐五六八
湊江善平	江戸坂正藏
獨り角力鬼ケ島	江戸坂正藏
けいせい大ぼし	嵐松次郎
荒巻伴さく	桐山紋治
川角源內	桐山紋治
舟べんけい	桐山紋治

役名	役者
神田茂右衛門	藤川金十郎
竹の内せいたく	松本次郎三
でんぼうや妙貞	松本次郎三
やよひひめ	市川吉太郎
娘あんまおかな	市川吉太郎
茂右衛門娘おそで	中村槌五郎
細川奥方濱まち	花桐豐松
政右衛門女房おたね	花桐豐松
さくら田林左衛門	中村治郎三
近藤のぼりの助	中村治郎三
はだか神子はやし	中村治郎三
和田しづま	澤村宗十郎
佐々木丹右衛門	中山來助
饗田内記	中山來助
松野金助	中山來助
澤井城五郎	中村歌右衛門
馬かた大八	中村歌右衛門

道行會稽の初雪

三絃	玉川三平
太夫	宮古路大隅事常盤
ワキ	宮古路隼太夫

千穐萬歳樂叶

役名	役者
上杉右内の助秋定	嵐三十郎
大芝居舍利九郎	嵐三十郎
池添孫八	嵐三十郎
股五郎女房お園	尾上粂助
けいせい小里	尾上粂助
和田行家	嵐文五郎
石留武助	嵐文五郎
丹右衛門女房笹尾	姉川大吉
股五郎母鳴見	淺尾爲十郎
澤井股五郎	淺尾爲十郎
唐木政右衛門	中山文七
石森鷄庵	嵐七三郎
上杉春太郎定政	嵐七三郎

狂言作者	五十五十輔
同	松谷宗助
同	小西庄助
同	奈河丈助
同	並木源藏
狂言作者	奈河龜助

頭取　中川正五郎

讀切講釋
伊賀越乘掛合羽
二の替り
新きやうげん
座本 嵐七三郎
嵐三十郎
中村雛五郎
沢村宗十郎
嵐文五郎
中村治三
桐山紋治
松本治郎三
嵐七三郎
大坂
西口
三弦 玉川三平
ワキ 宮古路歳太夫

も身にしみてセリフ「過にしことを思ひにしづまともにしほるゝ隱し泣かくてはいかゞ孫八がめいる心をいさめんととかく時節を松が鼻登り下りの船よばひ牧方もはや日もちりぐ\に詞「だんな衆くらはんかい〳〵いもじる酒、よもちよめしくらはんかいもし乘合の其中に尋る敵の有やせん手がゝりもやと岸傳ひ堤づたひにそこ爰と尋ねさまよひ二世かけてかはす誓紙の契してしばし別れも有そ海戀し床しは日に千たび人のめたつも何の其思ひおそでは身に餘り花の都を爰までは落くる水や流れの身心のよどみ淀もすぎ忍ぶとすれど風俗は朱の玉垣かう〳〵とあふて喘の數限り願ふはいとし男山しんぞ八幡さまぐ〳〵に里の諸わけはつい聞しれど行道しらぬ玉ぼこのあゆみつかれてゆきなやむこゝにひごろ名高ふない五人組と聞へしは女子さへ見りや仕かけて見る惡がねの文五郎を頭とし在所中をかきさがす熊手の五茂九郎こもだれ作りのむさ男とんこ平兵衛つゞいて雜炊伴右衛門跡は水かきいち右衛門とて男だてこそや惣嫁を買あるき五人が中のなぐさみに在所休みの打つれてぞべら〳〵と引ずりも皆一様に尺八をさす才覺もならずもの牧方通ひの戻り足人の惡まれぬ格好

なり堤の原に立はだかりセリフ「打つれ立てそらさぬ氣野でも山でもぞめき歌「まゝにならねどほれたが因果どふぞするゑをと二世かけてそうたんべい〳〵たのみんす戀中をほんにほんぼに日親さんいとしやそなたはなはれ座敷の尻きれ草履で主がないといふ心サ、それはへあふていはふと思ふてゐれどとかく見ぬ顏ゆかしさにそうだんべい〳〵頼みんす戀中をほんに結ぶの神様いとしやそなたは月の兎のあもつきでサア下から見ているばかりじやへサ、ソレワへうたひつれだち行過るセリフ「どふじや〳〵とつきつけくどき牧方へんの男だてひらたにいきつてじなつく內それと見つけて孫八がうむをいはせず投のけ〳〵打附られてもひるまぬ我武者とりつく熊手雜炊がしめあげられてぐつ〳〵飯できかゝつてあるいろ事を邪魔する六部めゆるすなと無用の腕立在所の士どもうつてきせるの雁首筋つかんでねぢなげ六部のおひ投ふみのめされて逃さる引ずりかたしだ\片はしからなぐり立てぞ追ふて行跡見送つてこかげより出るしづまが見合す顏セリフ「逢たかつた〳〵と取縋り嬉しなつかし一時にわけも泣より外ぞなきお袖で濡る袖袂いかに侍のたねじやと

て逢たい見たいにかはらふかお前の爲の勤じや物何のと思ふは一日かふた日行とそのまゝ屋敷出の新造とやらいひふらしあそこのざしき爰の床夜晝わかぬ戀しさは過こしかたの馴そめを思ひ出すのが樂しみで又苦しみは儘ならぬ勤する間にひよつとマア外の女中が惚ふかと案じもむりか御家中で二人ともない殿御ぶり冥加にかなふた言號口から口へ約束のその嬉しさを引かへて夜毎にかはる蒲團のうへお前の事のみ案じられいつそお客のあひへん答うはの空だきうつとりと相手にならぬ物思ひどこぞ悪いかコレ藥やろかとうき世に鬼もなきあかし明方告るかごの鳥空飛鳥の身と成て飛で行たい逢たいと見たいこいしいゆかしいが積り積つて此やうにあふて爰からいなれふか一所につれて給はれともつれ結んでうちとけて離れぬ岸の川柳みかさも増る涙川せつなる心くみ取て道理〳〵と打しほれめにもる涙堤の原セリフ「づたひに孫八が中をへだてのかねごともちやんと爰までお袖様しゆびよふ本望とげ給ひするゑはめでたふ御夫婦といさめすかしてやがて又いとしかはいにめぐりあふ辻占よしと夕日影いざと人めに笠深く袈裟打かけて煩惱の絆ふ妻乞笛の音も追附敵を歌口とたづぬる足もいそがれてせめてこよひの一夜切セリフ「ハテみれんなのふそれでもこゝでわかれてあすの夜は誰とふし見のふなばたへしたひゆくこそ「びんなけれ此伊賀越乗掛合羽は古今の大あたりせしかば筋がきとていたつてさい字に書たる綴物つぎに讀本淨瑠璃ととなへ院本出しを後に淨瑠璃に取立し也宮古路の道行は右の書をはじめ正本にも書もらして珍らしければ其比宮古路世に行なはれしをしらせん爲に爰に寫すものなり

西澤文庫脚色餘錄初編中の巻終

西澤文庫脚色餘錄初編下の卷

目次

西澤文庫 脚色餘録初編下の巻

西澤綺語堂李叟著

清水清玄演劇の話

洛東音羽山清水寺の僧清玄墮落せしといふ事寺記及實說といふ書見當らず是は彼志賀寺の上人京極の御息所に懸想せしを今樣に作りもふけし物か寬保元酉年に文耕堂の作せし新薄雪物語の清水の場へ清玄をさしこみ作れるものか歌舞妓に寶曆十二午年中の芝居にて始て清水清玄六道巡と外題して竹田治藏の作にて清玄に中村歌右衛門（かゞや歌七）大に當りを取しとぞ是より四年後明和二酉年淨瑠璃に取組姻袖鏡と呼て近松半二岩倉宗玄折琴姬に墮落すと作れり宗玄清玄仕組は替れど趣は同じされば清玄は加賀屋歌七に限るやうに思ひ京都にて清水清玄行力櫻とも外題しけり文化に坂東彥三郎清玄をせし時戀詣清水櫻と賦し市川團藏せし時は清水清玄契約櫻とよぶ故歌七二十五回忌追善に三代目歌右衛門（梅玉）せし折は傾城釣鐘櫻天保に四代目歌右衛門（此時は芝翫駒屋の事也）のせし時はけいせい入相櫻と賦しけり總體清玄は清水場と庵室の場より外に狂言なく跡は執着の所作事となれば一日の趣向にたらずゆへにいつも抱合せの狂言は變るとしるべし

天滿宮古番附の寫

委しくは作書の續編に記せど八百七十五年忌に菜種の御供出てより又七十五年に及び今年九百五十年忌に當れば左に出す也

（番附板組の都合により五十八頁に出す……編者）

劇場評判得手勝手

醋吸の三聖は儒佛道の三を味へ比喩していへる物かそれはさしをき今世の中にスイといふ事有惟ふに人情世態によく通じて純粹せるものをいへるや又は當時の流行に速く移り萬に稽古の境を辨へるをいへるや或は短襦長劒細袪長髫もつぱら隱語をもて靑樓劇場の玄を說話すものありされどスイのスイ臭きは野蠻の愚なるには不レ如とかや爰に歌舞妓好事の三スイ

彼業三家の討論をなすを見るに粋は半面に微笑して掌を葦擧人の教を守り推は扇を手まさぐり總身を震はし佛の方便をとき酔は黒く逞しき尻を人前に突出し風に跨雲に鞭て天に昇らんと欲す其酸といひ甘といひ苦と云ふ據は異なれども好む所は三形一面の如しまた劇場の清淡ならずや此事既に耳鳥齋が諸篇に顯たり所謂素意不粋も此書を見て依最の議に寄すとなかれと卷の端に筆を採ものは浪華散人魯佛書安永九庚子春と序せし一小册今まで七十二年となる昔も變らぬ贔負〳〵の得手勝手おかしければ爰に出す」芝居を好みて吾通也と思ふ者三人有一人を推といひ今一人をば酔と呼び今一人を粋といふ春雨の徒然一つ所にまどゐして酒盃をかたむけやゝ興に入て例の好事にへ推席を正して曰今役者あまたある内に獨梅幸に及ぶ者有まじ其人柄位有て藝幽玄にして巨細なり先大石が精忠月本が節義菅公が温厚又女形になりてとなせのうるはしき訥子薪水がかたをとり或は柏莚路考が俤をうつすゆへ是古來上手名人をまね一つとして堪能ならずと云事なしなか〳〵他の及ぶべき處と見へず名人と云べきか△酔眉を張り高慢らしく

居直りて曰貴樣はしりもせぬ昔咄老込かゝつた梅幸をほむるは云人迄が古味に落る夫より眠獅が事まだ女形の内から濡髪長五郎を由男と張合せ元服して伴左衞門、山姥の公時、由良之助、非人、敵討、戀女房と千本櫻は何でもこざれに大役を出かし別して時平は雲上なる主悪師直に執事の威權を見せ力彌に若冠の勇を隱す其外石川五右衞門の强惡、朝比奈義秀が義氣、土佐の又平律義など凡今の世にての一枚花形の大立者外にいらひ人なしと云のじや梅幸も老功故折節はよい事も有が近比はよりが戻つて小刀細工多し薄雪の兵衞は腹切たをば隱すが趣向なるを見物へしらせ顏に度々よろ〳〵するゆへ相手の女房役がよつ程のあほうでなければハア御腹めしたかとはいひにくし菅原の松王千本櫻の梶原みな趣向が亂れて狂言が戻るあこの鹽竈の由良之助あんまりあたらしくせふとてか又うろたへた御家老未然の凶を心にふくみ氣の澄ぬ位にて置たい物じや麒麟も老ぬればの譬への通りかしらぬ、推肩腕をさゞり皺面を作りて曰ヤヲレ貴殿過當の悪口さいふ眠獅が早野勘平鷹をすへたら大津へやりたいと云た又雷神上人や熊谷の次郎

安永六酉年四月二十七日より道頓堀角の芝居三の替新狂言

座本　小川吉太郎

（三）

留別の御詠歌に
八百七十五年忌

天滿宮菜種御供

懷舊の御一首に

筑紫飛梅の奇瑞

流れ行我はもくずとなりぬとも
君しがらみとなりてとゞめよ

世につれてなには入江も登るなり
道明らけき寺ぞこひしき

役	役者
菅秀才	尾上丑之助
こしもときさらぎ	小川八藏
同やよひ	三枡若松
同さつき	あらし八重八
同みなせ	花桐淺二郎
官女松の局	澤村雛鳥
下役太助	三名川庄藏
官女花の局	あらし萬三郎
やつこ早助	中田善右衛門
やつこ宅内	花桐伊三郎
百性太郎兵衛	山科文三郎
藤の定國	山下東九郎
小性もとめ	中村萬藏
物かはさいしやう	あらし十五郎
わかとう良助	あらし十五郎
百性頓兵衛	三枡傳藏
舍人たくら丸	三枡傳藏
藤はらすくね	芳川乙五郎
笠見くらんど	芳川乙五郎
辨のさいしやう	豊松半三郎
こしもと青柳	豊松半三郎
つるしや又右衛門	藤川十郎兵衛
唐使天蘭慶	藤川十郎兵衛
伴の仲友	中村友十郎

役	役者
ねぶかの九助	山下東九郎
そねむらみどり	三枡松之丞
官女柳の局	あらし雛二郎
こしもとあやめ	あらし雛二郎
ざい所娘お口せ	小川千菊
みよし清つら	三枡他人
白太夫悴荒藤太	三枡他人
こしもとかつの	あらし雛治
左中辨まれよ	坂東岩五郎
松月尼	澤村國太郎
こしもといざよひ	澤村國太郎
源藏女房戸浪	澤村國太郎
土師の兵衞	三枡大五郎
白太夫	三枡大五郎
法性坊	三枡大五郎
紀ノ長谷雄	三枡大五郎
狂言作者	並木吾八
淨瑠璃	豐竹初太夫
淨瑠璃	竹本今太夫
三味線	鶴澤清藏

千穐萬歳樂叶

役	役者
安樂寺住持	中村友十郎
齋世親王	澤村千鳥
御臺久かた御前	中村玉柏
らんの中將	三枡松五郎
春藤玄蕃	三枡松五郎
白太夫娘小いそ	山科甚吉
紅梅ひめ	山科甚吉
直禰女房小櫻	三枡德治郎
長谷雄女房渚	三枡德治郎
判官代てる國	藤川柳藏
伯母御覺じゆ	あらし雛助
左大臣時平	あらし雛助
武部源藏	尾上菊五郎
菅丞相	尾上菊五郎
直禰太郎	小川吉太郎
舍人造酒王丸	小川吉太郎
狂言作者	中邑阿契
同	長谷村新七
同	青木善二
同	小川新藏
狂言作者	辰岡萬作

頭取 中山百次郎

はよかつたが安藝の宮島では大はたき積物に蒟蒻と豆腐と境重に入てやつたと聞た其樣な恥が梅幸にはない宮島ござれ京大阪江戸は勿論一方の座頭今成上りの眠獅とは勿體ない何でもござれといやつても今年の二替り慶子の夫良助にて娘の心血をとる樣な地事にかゝるとはや藝が碎ける△ムウ地に成と碎けるとどふじや○マアいふて見やふなれば淸兵衞や由男がこれ迄かやふな役廻りを勤めたをくらべて見やれ又梅幸などは端藝の米屋の同行又仁木の役にて花道の眞中にすわつて鹽谷に言葉を懸又諸大名を制する事何でもない所にきつう味が有さこんな處を地と云わいのもそつと地を修行してから梅幸と並べて見やれ今では位が違ふてゐるわいのふ△位は違ふて有かしらぬが梅先生も大阪勤のうち何をおあてなされたの天神の由良之助のと箱の掃除を召れても格別の事もなかつた眠獅が佗助、千本櫻、又あこの鹽竈の時でも大入の衆中に眠獅が病氣で退たあとの入が落たが證據すもふは勝が强いの役者は入をとるが上手かと思はれるわいのと兩人我を忘れて互に角目立てあらそへば口粹片頰に笑窪をなしやに下りに煙管をくわへ顋を突出し貴樣達は役にもたゝぬ事ども計り假令あたりに聞人がなければこそアヽたしなめやれ〳〵此方の由男と申は其骨柄肥大淸白にして調子並ぶ者なく第一古人の糟を甞ず一家一流の達人先熊谷が武勇、利休が風雅、團七の男作、蒲髮が立引、雷電の侠氣、蘭平の洒落、太郎七が愚昧、横山太郎が贋阿房、後藤が醉狂、唐木が劍術、鐵之助の豪壯、淺利が恩愛、逸平が孝心、愁ひになつては見物の鼻紙をたふし立に成ては影の拍子も消る計り酉の年冬京の顏見世より二の替り伊賀越、仙代萩扮は雷電、絹川、與右衞門など近年の大當り座中の出來も座頭がよいから全く由男一人の手柄別て船頭小平次弟に意見の處當夏の雷電源八にて八十島とのせりふなどはいかなる山家の親仁も又棧敷の見功者の惡口いひもおし默つて感心する第一小手利で愛が有てアヽ一日や二日では褒盡されぬいかに御兩所無益の贔負なされふより大丈夫いらひ人なし何でもござれの御本家と云宇治屋の由男樣に珠數を切りやな（舌を巻き頭を跡へ引き）イヤモ頓と大船に乘つたと思はんせと聲色交て肩から首をひねりて笑ふ○△兩人せいて膝つめ寄コレ中山のよい事盡しなら

まだ殘つた云て聞そふ〇夫大阪で盛衰記の梶原源太が大盡姿は槌もたぬ大黑樣藤彌太が屛風のたてはかしらが奴、からだは團七、顏が公時、なく聲がア、何とやら信仰記の三段目は閻魔王が親類の葬禮に出た樣な物じやわいの口粹腕まくりしてコレさう云やりや梅幸が常悅は供つれぬ外科醫者定之進が淨瑠璃の三重に合す處は張拔の虎がしやくりするごとくお三輪が振袖は英子に竹の鞭が持せたかつたわいのふ〇コレ由男はの兎角衣裳好み顏の作りが下手じや家老に成ても髮附がやつぱり鰐金文七じやまだ有小竹紫五郎が酒に醉たを見れば由男の由良之助其儘じやといふたぞやおらが眼獅はそれ〳〵に姿のかはるを見ておきやれ〇由男が仕うちは爪先から牆の先まで皆我物でするのじや眼獅がのは寄もの也實惡は三升のはへぬき平敵は逸風金鱗は由男をとる事違なし近比力彌の仕打が生得の持前也かやうに舞臺が煩はしい既に濡髮にもお關が弟に意見の場由男が仕打と比べてみやれ煙管をさいたり肩を入たり俵を脇へよせたり見へ計りで心の信伏が甲斐ない由男が仕たはいつともなしにしよげ〳〵とみすぼらしく誠に心に聞て恥入たのじや有た仕打を替てせふと思ふのかしらぬが夫は心得違ひむかし淺間が嶽の狂言に巨燵に縞の羽織をかけて碁を打つ仕打を其後の役者が縞でない羽織に仕かへたと笑ふた眼獅も忠信の仕打あたらしくて人が取たによつてか近比の濡髮の仕打に心の置所が違ふてあし〻女形で勤た時は夫でもよいがもはや立者仲間へ入ては是では濟ぬ時代はみへをおもにし世話事は仕打を以てすると古人の格言何でもござれといやつても太刀打立入が手に入ぬもちつと刀の拔樣を修行めされと云ておやり惡右衞門の時の長大小も惡ちやりめかしてひつけうは太刀打が出來ぬからであらふ〇時代事が見へならば御ひいきの由男が西のとしの顏見世賴政の死靈附又太郎の出端衣裳が古うて見苦しい其上能の自慢か今歲の二の替りにも海士の玉取の段を出されたが亂舞仲間のさたを聞ばてきに似合ぬ事が有といはれた〇能役者は能の事を知て居よふ狂言の立入の難解は何がしらふ既に能役者同士にても互ひにそしり合じやないか狂言と解つて有事を實に落して笑ふな〇雛助が力彌自己の大出來それに元服の剃刀が當つて拜領の御紋に血が附た

是未然の凶じやと云狂言第一の趣向じやが是も惡口云て見よふなら力彌はいまだ部屋住御目見へをせぬ故御位牌を出して斷申て敵討の列に入るは尤じやが此拜領は由良之助が拜領と見へるが元服に著せるならば前髪を取て上下に著かゆる時きせたい物髪月代する時に著せたのは麁忽なる仕打とやいはん又此まへ梅幸が自慢の三曲はよかつたが眠獅も女形から出てめき／＼と出世膽のゑらいに取ては蜀の姜維も樽肴持て弟子入をする位じや今人の褒るに乘らず人の眞似をせぬ樣に眠獅が風といふ樣に一家を立てせねば本立者上手とはいはれぬマア白大で見合たい物それに何じや㊅をくはへたり衰へかゝつた梅幸をやはり半極でほめて居るは京大阪の評判司にからすがたんと積物にやりたい又當時あたりの見へて有由男を久々眞の字で見合せ漸白極に戻すなどはかの毛延壽に惡まれておた福に畵れた格で有まいか後家の質屋へ持て行ても極上々吉は憶な由男じやサアすつともいふて見やれ○△イヤいふて見せうと眞黒に成てせり合ふ所に寢鳥の笛耳をすまし練絹の白雲さつと上れば忽然として一人の異人かしらに蜀錦の手打頭巾を冠り身には蝦夷紛ひの衣をまとひ手には梵天の麈を引さげ張貫の赤馬に紙くら留て打跨り影の拍子にあはせて眞中にわつて入り東西／＼汝等三人いふ事が皆すかん人の非をいはんとて我非をあらはす畵蛇添足是俗にいふ手みそのすこたへ己と號る三字の解推は推量の義理にして尻馬座なりの輕薄より起る醉はゑゝると訓じて當分の一興目うつりの好言粹はしらげるとよみて不進不止かたならず片よらず今日の眞法ながら得とは自己慢の道に迷ふてすとんと川へはまるなりそれ上手名人の境は聖賢の如く金銀の如しよきと思へばあしきに譏る名人はよく此所を打こして譬へば飯のいつ喰ふても飽ぬごとく無味の所に高上の味ひ有を聖人ともこがね共則名人の境界ならん昔の坂田氏は夕霧の狂言一年の内に四度まで出し三右衛門は六法にて每度のあたりを取ついに久しい物じやといはれた事を傳へず最前より無益のあらそひあたら酒もさめたで有ふ我汝達に一物を與へん早く歌舞妓世界の上棧敷に太平樂をかなづべしといふかと思へば樂屋のどろ／＼姿は見へず消失けり各頭上に汗をなしあたりを見れば一つの箱こはふしぎと

蓋をとれば娘道成寺の錦畵有○△□（推醉粹）ハツといふて見たが小聲になり一人云合點がいたか成程昔は〳〵何ぼ名人でも今時同じ事を二度三度出したらのふ予時安永九年子春得手勝手終

劇場樂屋捜の序

抑此雙紙は劇場一遍の事を擧るといへ共いさゝかも劇子の佳批を許せずかの八文舍が家に傳る雙紙に類せざる所也啻狂言綺語の説をいふのみ古しといへば陳し新とおもへばあたらし予其新古はしらず今の世の歌舞妓は作者が下手歟役者が大根か狂言をせぬが上手歟人の譽る物を譏るが粹歟人のおもしろがらぬ事を褒美するが通かどぎまぎまぎどぎ紛らはしの浮世や扮顔見世は霜月の物二の替りは二月の物と思ひしも四季混雜してわきがたし葺屋町堺町中の芝居角の芝居或は北側南側と競ひ合しも今は難波も都も其大劇場を定めず何處やらから二軒目の芝居に漂々泊々となれるこそ遺恨なれ夫天地者萬物之逆路光陰者百代之過客浮生如夢といへりしも今の芝居の有様ならんと考へ妓の虚歎より大なる聲をあげて平仲文がうそに傚ひ顔を墨だらけにして筆を投ずる者は十五の涎繰が三世の孫丁松居士也天明ひのへむまの年と序せり是天明元年にて今迄七十一年となる昔の酒落の小冊を爰に記すもの也四海納りて劇場盛ん也櫓太鼓の音喧しく木戸口喚々として見物競ひ入五歩に札取十歩に帳附有て横の口または見附の幕に座元名代の紋所日に映じ贔負役者に進上の文字斜也東西の棧敷に毛氈の紅を見すれば茶屋の女前垂をひらめかして共に色を爭ひ棧敷よりは下を見下して男女の美醜衣裳のよしあしを評すれば平場は足を延すの地を爭ふて己が場のよしあしを論ず扮樂屋の鉦太鼓鳴をしづめ三味線の撥音ほのかに空拍子木を相圖とし幕の眞中上させ口上いひまかり出東西〳〵今日は大勢様早朝より御出下されまして座中名代は申に及ばず總芝居の面目大慶至極有難ふ存まする扮外題其外役者の替名だん〳〵よみ上御神妙に御一覧の程もおけやい〳〵の聲とともに拍子木チヨン〳〵と打やいな幕引明ると樂屋は譯もなき責皷が久しく御殿作り總襖黒幕などの見つけ物淋しく扮立役の鉈は去たく敵役のしつこみはしたゝるく女形の嫌味は置てほしいもの也作者の古み役者の癖を評すればどきまぎと紛ら

はし奴にて扇を手まさぐる癖あれば上下著て尻からげするやうな仕打をする骨おしみなる仕打を玄に用られ當世の流行詞をあしらふて素人の笑を心掛る皆己が癖より出て古みに落る者ならん歟まづ實役に附る役いろ〳〵あるが中に武道の權柄過ざるやつしのさつぱりとしたは見よき物或は餝賣上燗屋などの姿にて花道の中ほどにて主人の成行勘當の身の上の獨言歸參の種は寶物の詮議が大かた御定り主人が手詰の場へ來合せトッテンカタリに投て仕舞何にも御氣遣ひ被成ますなといふは古い事ながら見物まで嬉しい物也扨邪魔になる敵役を當日の働き扨々當日も古い天井あてめ覺へぬ立役もなければ當目をうけぬ敵役もなし扨主人相守の頭被をかくまひ置仕打とかく屋舗などの場に下屋ほどな物なれど人をかくまふ內には二階と下屋がなげねばすまぬいつでもメリヤスに場をくろめ表の潛戶ひそかにしめ奥に心を配りなどして嘸御氣詰りにござりませうとだつた・疊の疊を上るとよい著物きた人が下屋から出て段々の世話添いと禮いふも久しいものめんよう世話事の立役借錢してせがまれ四百四病の病などゝ兩手を組でと

つおいつの思案女房を勤奉公に出す仕打それとはいはで謎々が暇乞愁ひ過たは見にくけれど大方しつほりと有たき物其借錢に來るはいつでも惡男終に借錢乞に實役はこぬかと思ふ也其借錢なこさずば娘を連れていのふなどゝ言さま天窓の一つも叩かれながらやう〳〵夜半の鐘を相圖の約束催促の刻限にあまり取に來た事なくたま〳〵出て來る夜半の比いつでも月夜ばかりかして挑灯持て出る事なし御主人の色遣ひに質屋に有る寶物を請出したがる立役に金の有た事なく、立役に金のなきのが作お定り又義理に詰り切腹する男刀突込んで本心を明すなど今まで他人かと思ふ者を娘久しかつたヱヱ、扨はちいさいとき別れた爺樣でござんしたかと悔りせぬさきから見物がよふ知つてゐる程古い事扨御上使のお入りを横の口からふれた事なくいつでも花道にてにらみ詰上使の役目なれば罷り通るとのつし〳〵と長上下供連た事あまり見ぬ也總體一場の內衣裳著かへるも有事なれど上使などの著かへて出るは又詰らぬ事奥の一間に休息の內と見ゆるが著かへずとも隨分よささふな事序の幕にて主人を殺し寶物を奪ひ立のく曲者に出合ふ

てのドンチャンいつでも取逃して跡でじだんだ證據の手紙手がゝりの小柄も古くそれを懐中して敵の詮議しつくり出合ふたは四段目の切爰に貧家の住居に似合ぬ奥が幾間も有やらしてはるゞ來たお侍も現在主人の敵も女房の這入所も皆奥の一間へとの口上奥が一間なら中で突合そふなもの氣の附ぬ事かやこれらは合點のいかぬ事じやといふ片腸から顔の赤いりくんだ男見かけから敵役が好じやといひそふなかつほく進み出て成程〳〵立役の古みあれば又敵役に附る久しみ有すべて敵役ほどうきものはあらじ出ては投られ終ひは殺され戀の叶ふた事もなくふられ通しのあほらしみ姿の荒くれなる心の愚鈍いふも更也あるは顔に丹のうきをいとはず立敵のつよみにかたくな親父の受をとりちやり惡はたま〳〵娘子供の笑をとるまづ藝の仕打敵役の癖として大金持の大欲男それに似合ぬよくも實役に金を借た事あまり利合のさたも聞ぬ也されば其金を理不盡の催促その家にかくまひある者を注進褒美の金をしてやるべしとの工み事注進した者當座の褒美とて包金をもらふたはたま〳〵見たれど本眞の褒美とて出した事は見ず扨注進せられてのつぴきならず大かた身替は一人娘本人を傍に置ながら身替りせし娘の事言出しての愁歎いかにお主の爲なればなどゝいはれては主にもせよ誰にもせよ聞て居てそのせつなさたまつた物では有まい爰に偏屈なる人の噂にお姫さまなどゝ色事仕のうつかりに寶物は紛失し親は切腹其身はあほう拂のうつけやつしと同じやうに世話する實役は惡のやうでそれを見附て兎や角いふ赤顔の敵役は結句實のやうに思ふたといはれしも理屈也又假初にも刀に手をかけ理屈詰にギックリ耳に口かう〳〵合點か抔も見古したりされ其敵役の猿智惠大殿を殺し寶をうばひ又一つ國天下を丸呑がお定り時代の仕打いろ〳〵作し有また榮耀が仕たいといふ惡もあり番頭は大かたちやり惡お定りの娘にさい〳〵の戀狀手代の色事をしくじらす工夫此金は拙者がちやくぶく息子はほり出すお娘はせしめる甘いは〳〵といふ下からサアそれは〳〵で投られて仕舞も久しい物或は幻術遣ふ謀叛人指で蜘蛛の巣かくやうな事するとドロ〳〵にて姿を顯はしたり消へたりも今時は見古したり始の工みは下番ひよく戀と欲との摑み取工みに工んだ事ども

水の泡五段目のドンチャンが生死のさかひ寶は取かへされ惜しと思ふ若殿は歸參めつたやたらにめでたい／＼がおいとま乞扨敵役のほしがる物は三種の神器、名劍、色紙、一卷等なりこれらをほしがらぬは敵役では有まいとかく敵役に寶物はさし合成べしといふ傍からまた一人顏を出して芝居の評をなしていふにはいづれ見出せば替らぬ穴の狐とや爰に女形ほど色よく仕うちも別なものはあるまじやう／＼子役を出かしそろ／＼振袖の娘役こしもとなどの役なしから道行を閨に合しうれひにかゝり所作事に手柄をなすまでは上りにくいもの作の古みにより己が癖などあり先娘女房傾城いろ／＼かはれども大かたはお定りの色事ほれて見せるはいつでもこつちからとかく娘などは恥かしそふなが見よき物傾城に成ての古み有ゑび舞臺に居る揚詰の大盡いつでも大盃を引うけたるしかみづら寒い時分の揚遣ひに其身を高ぶり此太夫は身が手に入れる身受の金はこよひ限りとさきも得心せぬ事をいらちかけるあほらしみも古く無細工な仲居又あほらしき亭主が大聲ソレ太夫さんが見へるは／＼といふと花道から出て中程にて勤のまゝならぬ事をぼやきちらし舞臺へかゝれば己がすかぬ男が客ふしやうぶしやう側へ來ても顏そむけて物いはずわしが帶解く男は廣い世界に一人よりないなどゝいふがお定り其打こんでゐる男はいはずともしれた勘當者也揚屋の大盡を振て仕舞へばつかれ仕舞に奥で呑直そと二上りの影歌花やかに彈くなど芝居の揚屋場になき事なし殊に思ひ詰た戀でどこの馬の骨やらしれぬものに命を捨るやうな作もあまりとんだ事それを貞女と愁歎の場今時心中する徒ら女なるべしツイ一目見た男にちやんと云かはして有やうな外の男はもたぬなどゝいひいつそ殺してなどゝ思ふ男に命をつき附るお定りの不孝娘其道行して死だをやれかわいやとほむる仕打のたわけ親芝居なればこそおもしろいわのイヤふびんななどゝ見物が鼻紙をしぼるは是見物の戲氣とやいふべし又は折々古歌を言出しての謎古歌をもて貞心をあかす仕打今の作者は何と心得てゐるやらいかに生としいけるものゝ歌をよまぬはなきとて奴のちよち内まで手詰には歌をいひ出すなどはちと工夫有たきもの又女形は隨分弱そふに見ゆるものゝ或は娘家老の女房などにて不相

應なる大切ドンチャンにきついつよみ大勢を相手にはたらきだてはあまり出來過た事まづ古い物の棚さがしには道行の跡は夢死人の行衛は毛氈にとゞまり寶物のかくし所大かた手水鉢松の枝の曲者手裏劍で落るが幕切窓井戸から出た忍びの者頭巾ぬいだ事なく捕手はいつでも黒い著物に鉢卷申上ますは舞臺の際川口の潜戸も仕廻口には片附てしまひ首切たあとの死骸見せた事なく揚屋の大盡あたまに手拭太夫はいつでも身受の貫論二階の梯子はたつた三段鶯界のかけ聲息杖なしのすつた〳〵是らは古い上の古みなればまづ初卷の始り猜子役、影武、木戸口、總芝居作の古みは後の卷に評じませふとぞぶかと思へば夢さめて枝喫の夕日影さつても君の永い事といふ間に果太皷の音はとうから〳〵續編闕出

伽羅先代萩世界の追加

傳奇作書殘編中の卷に先代萩の傳狂言の事くはしく演たり此番附もまた七十五年となれば爰に出す梶原景時酒井秩父重忠坂倉常陸海尊原田伊達秋衛安藝泉親衡片倉乳母政岡淺岡松枝的之助前松と名を假たるがゆへ奥州秀衡遺跡爭論と角外題に賦したるもの也それより以來増補の外題世界の分ち類聚狂言に地名と世界の齟齬せし事は皆殘編に述たれば爰に略す近來中の芝居にて此世界をよせ伊達姿萩燕都褚第三幕目御殿飯焚の場の裏鹽澤丹三郎の場を脚色し事有かの伊賀越の籏本騒動の折柄典藥半井通仙の贅論を書入などして始めしが評よかりし其節の正本を爰に出す其場の役人附に

（此繪原本の約四分の一縮圖也）

安永六丙年四月十日より道頓堀中の芝居三の替り新狂言

座本　嵐七三郎

鎌倉の評定に聟は暗闇男とた名取おとゝ幻とは角力の手合引よせた睦言に連の重衛は高尾の身請

奥州秀衡
遺跡爭論

伽羅先代萩　五だんつゞき

高館の陣取に兄は家老妹は乳母忠か不忠か見の歯を引ぬためた言號に合ふ的矢は愛宕の神請

役	役者
源のつるきよ	市山太次郎
政岡子千松	坂東名嘉吉
こしもとかめ澤	あらし辰藏
けいせいあづまぢ	萩野三代藏
かぶろさつき	あらしきく助
同　力野	萩野千藏
同　ふじの	あらし市松
同　ゐにし	中山藤三郎
やりておため	嵐五六八
婢おはぎ	嵐五六八
けいせい長門	嵐森藏
雀の忠八	中村瀧五郎
梶田兵衛	中村瀧五郎
園田傳兵衛	嵐三藏
きくや新助	嵐三藏
こしもとしみづ	あらし若藏
江間の小太郎	おのへ喜十郎
谷澤庄九郎	おのへ喜十郎
枡元加右衛門	岩井かめ十郎
嶋むら源太夫	あね川乙藏
ましだ九兵衛	あね川乙藏
鹽澤丹藏	藤川金十郎
青貝ゆきへ	藤川金十郎
渡會銀兵衛	江戸坂正藏
和田新左衛門	江戸坂正藏
餘所山矢右衛門	江戸坂正藏
荒浪梶之助	松本次郎三
志賀武右衛門	松本次郎三
道益女房小まき	松本次郎三
うきよ渡平	桐山紋治

役	役者
鎌田屯兵衛	岩村かめ藏
柳一角	岩村かめ藏
田みや彌五郎	中川正五郎
小次郎娘白石	嵐松次郎
中居おこと	嵐松次郎
けいせいみちのく	市川吉太郎
刑部一子兵吾	市川吉太郎
平八妹おくら	中村槌五郎
こしもとおくれは	中村槌五郎
庄司奥方沖の井	花桐豐吉
錦戸刑部太郎	中村次郎三
同一子三木三郎	中村次郎三
梶原おく方榮御前	中村次郎三
鳴川岸右衛門	中村次郎三
志太十三郎	澤村宗十郎
伊達の次郎	中山來助
めのとの政岡	中山來助
梶はらかげ時	中村歌右衛門

淨瑠璃

豐竹岩太夫
竹本い太夫
竹本豐太夫
竹本曾和太夫

三絃

鶴澤喜藏
鶴澤甚藏

千穐萬歳樂叶吉祥日

役	役者
浪人佐藤兵衛	桐山紋治
銀兵衛女房八汐	桐山紋治
いしや養せん	桐山紋治
さめがゐ兵太	桐山紋治
塚ぬま小助	桐山紋治
志形下記	嵐三十郎
信夫庄司	嵐三十郎
けいせい高尾	尾上粂助
平八女房おしげ	尾上粂助
熊井源吾	嵐文五郎
勝矢六左衛門	嵐文五郎
でんがくや平八	嵐文五郎
定九郎女房宮城の	姉川大吉
常陸之介海尊	淺尾爲十郎
山ぶし眼つうぼう	淺尾爲十郎
泉の小次郎	中山文七
松がへ節之助	中山文七
ちゝぶの重忠	中山文七
かばのくはんじや太郎	嵐七三郎
平八母小しゆん	座本 嵐七三郎

狂言作者 五十五十輔
同 小西庄助
同 奈河丈助
同 並木太吉
狂言作者 奈河龜助
頭取 中川正五郎

曰、一仁木彈正妹八汐與六、一大場道益鬼雀、一今川女之助雛助、一渡會銀兵衛桂車、一園田吉兵衛關駄、一松本太左衛門友藏、一召使於睦路之助、一母宮城文七、一鹽澤丹三郎海老藏、

此外諸士四人姓名略之

同勝部毒藥調合の齣

造物平舞臺向ふ一面の金襖上手杉戸橋懸り切幕の所同じく杉戸口並開有よき所に見事なる花籠に菊の花澤山に生けあり近習四人各上下並び居る序の舞にて幕ひらく

十平 何れも今日は重陽の御祝儀を申述んが爲相詰る我々短日とは申せ共箇樣に致しをれば餘程積欝にムるての

勇藏 左樣でムる足利の御世繼鶴喜代樣の御座なさるゝ當松が岡のお館御前勤めは女中衆ばかり我々は此お錠口に時代りの勤番

小彌太 若君樣には御病氣によつてお諫めの爲の打囃子屋敷と申せば物堅い樣なが女中の御殿はどこやらが物やわらかにムる

半助 左樣でムる時に辰の刻よりは今川女之助殿の御勤番もはや詰られそふな物でムるがどふか引入る樣にねむくなりました

ト捨ぜりふ有て四人ふらふらと眠るこなし此內襖の間よりちいさき鼠さしあしにてあちこちして勇藏小彌太のひざもとへ來る兩人めさましきせるにて追ふ鼠逃こむ

十平 半助 御兩所何事でムる

勇藏 イヤ鼠めでムる朝の間からうそうそと出ましてなりませぬて

小彌太 かう寂寞と靜にムるから侮つて出まするか存せぬ

十平 拙者はどふ致した事かねむたくてねむたくてなりませぬ

半助 いかに未明より相詰るとてかよふにねむたいと申はいかな事

トいご作ら又ねむり出す勇藏小彌太も是を見て

勇藏 是はいかな事御番を致しながら眠るとはどふ致した事じや

小彌太 さやうさやうちとおたしなみ被成いと申拙者もア、ねむたく成つたら

トいご作ら兩人も共にねむり出すと又鼠出てあちこちとする序の舞やんで悽き相方に成り此時五つの時計チンチンと鳴る向ふより今川女之助着附上下にて刀を提出て來る鼠四人を伺ふていい女之助花道より是を見附きつと立どまるすこしどろどろにて鼠上手杉戸口へ行女之助きつと成てツカツカと本舞臺へ來て是を拂ふ鼠逃て消失る四人ふとめさまして

四人 女之助殿只今御出仕でムるか

女之助 何れも只今鳴りしは辰の上刻お錠口迄參りし所御殿をめがくる數多の鼠ハテ怪しい

四人 扨は又候鼠めが

ト四人一時に氣色するを宜しくおさへ

女 イヤイヤ詰所を出しぬきいかなる變のあらんもしれず箇樣なる時節には猶更銘々役目が大せつまづお下にムり升ふ

トよき所へすわる四人も下にいる

今日は重陽の佳儀お家長久御武運を祈願の爲鶴が岡へ參詣いたし思はざる出仕延引何れもには未明よりのお役目御苦勞に存ます

十平 是は御挨拶でムる只今の樣に怪しき儀を見升るに附升ても當館の殿頼兼公吉原に於てお身持御放埒何かとよからぬ下々の

取ざた各にもお聞被成たでムらふ 勇藏 承つた段か彼吉原よりかへるさ日本堤にて狼藉者にお出合被成口論に及びしとやら是もつてお身柄に似合ぬ御大膽かと存られ升る 小彌太 殊に三浦屋の高尾とやら申傾城を身受有て心に隨がはぬゆへ三つ股川にて提切に被成し故此程は袖が浦の御下館へ押こめ隱居同前のお身 半助 後見たる伯父君鬼貫樣仁木彈正殿など御諫言に御如才も有まいがお國にムる外記左衛門殿民部殿など如何成さるゝ御所存かアゝ心もとなふ存じられ升る 女 イヤ〳〵何れも浮世の雜談は格別下としてお上の取沙汰譬へ有事にもせよ左樣な惡説は仰せられぬがよくムる 四人 御意ではムれどお家の安危を存るから 女 さればさ賴兼公の惡説はお國家老の思し召しも有各を始拙者などは當松が岡のお館に有て幼君の守護の役目さすれば鶴喜代樣を大切に致すより外はムらぬすでに以て幼君のお傍附たる荒獅子男之助殿伯父君鬼貫公の御機嫌をそんじ此程よりお目通を遠ざけられし程の事兎角善惡に限らずお上の非法は申さぬにしくはムらぬ十平次殿半助殿は御若年とも申そふが勇藏殿小彌太殿はおとしし柄にもお似合被成ぬちと御多辯かと存じ升る 勇藏小彌太 何さま御尤の御意イヤ以後は相心得るでムらふ 辰の刻も過たとあれば我々はお次へ 十平 御用あらば何時でもお呼び下されい 半助 女之助殿後刻御意得るでムらふ 女 何れも御苦勞にムる ト序の舞キンパリと成り四人橋懸りへ這入る跡を見て 女 只今の如く近習の銘々でさへ上の取ざた賴兼公には袖が浦のお下館へ押こめ同前お世繼の鶴喜代君御果報いみじきとは申し乍ら下々と違ひお身持が御大切なればお食事とてもうかつにはあし上られず苦がなくばあたよふとはハテよく云つた譬へじやなア ト煙草盆を控へ思入向ふより侍一人走り出て花道にて 侍 ハッ申上升仁木樣の御妹御八汐樣大場道益殿を御同道にて只今お入でムり升る 女 扨は重陽の御祝儀を申されにか是へお通し申しそれ 侍 提つてムり升る ト向ふへ引かへして這入る女之助出迎ふと三味せん入の下りばに成り向ふより八汐御殿女中の拵へに大場道益醫者の拵へに渡邊銀兵衛上下大小にて附添ひ本舞臺へ通り八汐道益に上手銀兵衛は下座す 女 是は彈正殿の御妹御八汐殿には重陽の佳儀お目出たふ存升る 八汐 今川女之助殿にはお出迎ひ御太儀今日は重陽の御祝儀を申述ん爲罷り上り升たが鶴喜代君には御所勞と有て男たいした者はお傍までよせ升給はぬとの事いよ〳〵其通りでムり升かな 女 いかにもお傍のお伽には乳人政岡殿を始女中

達のみにてお錠口より外へとてはお出ましも是なく男子たる者は一人もお寄附は厶り升ぬ八此度賴兼公の御跡目は鶴喜代君をもつて相續の願ひ叶ひ則伯父君たる大江の鬼貫公に後見と相定まる所幼君には御所勞と有て御對面を遊ばさぬはハテ何共はや道益御容體を伺ひの爲鬼貫公よりかく申大場道益を遣はされても男子たるものをお傍へ召寄給はねば折角參れど徒ら事銀兵衛しかし常は格別今日は重陽のお禮なれば幼君よりおゆるしなく共お傍に附そふ方々よりお勸め有ても御對面なくては叶はぬそれに何ぞやお錠口より奥殿へ通る事叶はぬとはちと鶴喜代君もわんぱくの樣に存られ升る八ア丶是々に銀兵衛殿おだまりお跡目叶ひし上からは御大切のお身かよふな時には家國に望みをかけいかなる凶事のあらんもしれずと夫ゆへめのと政岡殿の計らひにて所勞をいひたて御たい面なきも尤な事そこを察して兄彈正が名代に此八汐が參つたからはわらはばかりは奥殿へ通つてゆる／＼と御對面ノフ女之助殿女御意の通り八汐殿には女儀の事何しに違變が厶り升ふ八それ見さつしやれ銀兵衛殿女之助殿は忠義の武士兎角御前の守護怠りない樣見習らふたがよふ厶る銀畏り升て厶り升るが八汐殿此所へお詰あらば女之助殿にはしばらく詰所へお控へ被成い女イヤお錠口に直宿致すは拙者が役目で厶れば銀イヤ／＼女之助殿女儀ながらも八汐殿には彈正殿のお妹御數ならねど渡邊銀兵衛是に詰るが心元なふ思はつしやるか女イヤ全く左樣では厶らねど然らば暫時差控へるで厶り升ふト合方に成り女之助橋懸りへ這入るは八汐此内こなし有て跡見送り八渡邊銀兵衛殿今日の御膳番掛りの者は誰々で厶るぞ銀ハッ御膳番は園田吉兵衛、御料理見分は松本太左衛門八何園田吉兵衛、松本太左衛門シテ／＼お煮番の御毒見は銀御膳番頭鷺澤丹三郎で厶り升る八それは幸ひ園田、松本は兄彈正が組下鷺澤丹三郎がお毒見とあれば是へつ竟その方次へいて此所へ丹三郎を同道召れ銀ハッ畏つて厶り升るト立ふとする八是々銀兵衛殿自らは道益殿とすこし密談もあればこなたはお次にひかへ丹三郎一人通してよからふ銀承知仕つて厶り升るト橋懸りの杉戸へ這入る八サア道益殿には御退屈サ丶御安座なされ道イヤ／＼愚老儀は幼君のお脉をと存たに御對面なくて殘念に存升る八されば其儀に附て密談申たいがマア承りたいは今朝伯父御鬼

貫様の御病氣を御診察被成升たか 道イヤ／＼八汐殿のお詞では厶れど今朝鬼貫公の御容體を伺ひし所御不快の體も見へず御平脉で厶り升るが 八イヤお前は御平脉と思召してもありやなか／＼の御大病 道へエすりやあのお脉で御大病とな 八サアそれゆへにこそ兄彈正殿もいろ／＼苦勞を被成るわいのふ （ト道益がてんのゆかぬこなし此時橋懸りより杉戸をひらき鹽澤丹三郎上下大小にて出て直に跡をさし杉戸の際にて八汐を見てよろしく辭宜をして） 丹三郎ハツ仁木様よりおめしと有て渡邊銀兵衛殿お使者ゆへ罷出升て厶り升る （ト八汐丹三郎を見て思入有て） 八ヲ、鹽澤丹三郎こなたに申附る用事もあれば暫らく夫にひかへてゐや 丹ハツ左様ならばお次にて （ト立ふとするを） 八イヤその儘そこにひかへてゐや 丹ハツ畏つて厶り升る （ト小鼓つ入たる好みの合方に成り丹三郎杉戸の傍に控へる道益いろ／＼こなしあつて） 道今こなた様のお詞に鬼貫公の御大病とは此道益一向その意を會得致さぬ 八すべて六脉に通ずる病は常ていのお醫者でも直そうが鬼貫様の御病氣を直すには耆婆扁鵲たりともいつかないかな貴老ならでは外にあるまい 道總じて病を療するには六脉あうんの息を伺ひ面部の血色を見て是を治す鬼貫公の容體は常ていに變る事なし是をあながち御病氣とは 八醫は意也仁術也と聞及べば兄彈正が一つの願ひ道益老の配劑にて草根木皮のちからをからず鬼貫公の御快氣ある様國家の病が直してほしい 道何國家の病をいやせと （ト八汐の顏を詠る丹三郎じつとこなし有て是をきく） 八さればいなア先殿頼兼様御身持御放埒によつてよん所なふ袖が浦に御隱居させまし幼君鶴喜代君御家督には定まるといへ共いまだ御幼稚の若君にて此國家を治める事は心もとない夫ゆへ御大老山名宗全様ひそかに鬼貫公を召れ鶴喜代幼年にて國家の政事覺束なし鬼貫家督相續せよとの御内意さり乍ら國家老渡邊外記左衛門民部など容易に得心致すまじ又家中の内にも心々幼君を輔佐するもの又鬼貫公に隨ふ者一家中の内にさへ二つにわかればお家の騒動まのあたり天に二つの日輪なく國に二人の王なき道理家に二人の主有ては治りがたき天下の大法兄彈正殿にもいろ／＼との心遣ひ國家の病鬼貫様の御大病とは則此事此病の發せぬ内何卒貴老の配劑にて一物の鷹をもつて一羽の鶴を害する時は國家は安泰何と此病症に用ゆる良藥をひとへに頼む道益殿 道成程御尤なる病氣の根ざしいち／＼承知は仕れ共此藥を調進致すは醫道の法度神農の禁しめ此儀ばかりは 八サ、一た

んの不承知は有べき事さり乍ら醫を仁術ととなふれば國家萬民の病を治すと醫道の祖神も說し給はんしかし兄彈正が爲にも三代相恩の主家の若君何しに害する心あらんが今いふ通りの國家の煩ひせひに及ばず此おたのみ何卒調進の程たのみ存る道益殿 道すりやどふ有ても鶴喜代君を入空恐し共存ずれどひそかに弑し奉らねば國家の亂れ近きに有その時千萬悔むとも益なききこその上大老山名公の御內意もし宗全樣のお心に背きなばこしも名家のお家もはめつ足利家の大事にはかへられ升ぬわいのふ ト愁ひのこなしにていふ丹三郎こなし 道成程醫道の法には背くとも聞すてならぬ國家のわづらひ小の虫より大事のお家いかにも御療治仕り升ふ入すりやあの得心あつてその良藥を 道忠心の聞へある彈正殿のお頼みいかにも調進仕り升ふ入早速の承知嬉しふムる銀兵衞殿道益老の藥籠を持つしやれ 銀ハア心得ました ト杉戸口より結構なる藥籠をもち出跡をさいて道益の前に置もとの杉戸口へ這入る道益覆面をとり出し藥籠より藥を取出し調合にかゝる此內丹三郎じつとひかへてこなし入汐丹三郎を見て 入鹽澤丹三郎近ふ〳〵 丹ハツ〳〵 ト膝行して少し向ふへ出る 入その方に申附る大せつの用事ありサヽ是へ〳〵 丹然らば御めん下さり升ふ ト合方かはつてきつぱりとなる 何丹三郎改ためいふには及ばね

ど其方が父丹左衞門は兄彈正殿の組下ゆへ腹心とも思ふゆへ他聞を憚る一大事も傍近ふ呼よせ置たがよもや他言はしやるまいの 丹こは改つたる入汐樣のお詞亡父丹左衞門存生の內段々仁木樣の御厚志に預りあまつさへ酒興に乘じ武術の口論より同家中の方々一兩輩に手疵を負せその誤りにて扶持にもはなれ何房挪ひにも成べき所を彈正樣のお取なしにて狂亂の病氣といひ立役目をひかせまだその比は若年の拙者めに名跡を立させ今當上館にてお臺所役人に取立給ひ段々との立身出世そのゝち無事に父も見送り當時御膳番懸りの上席を相勤升るも全く仁木樣の御高恩といさゝか忘却は仕りませぬ入ヲヽそふ有ふ兄彈正にも外ならず思はれる故今きく通り大切の密談も聞し置がそなたは何と思やるぞ 丹なか〳〵若輩の我々御批判申上る迄も候はず國家の病を療さんと道益老との御密談げに御家老は國家の柱礎御尤なるお詞と承る內にも感淚を催ふし恐ながら感心仕つてムり升る入そんなら兄彈正殿の心底あしからず聞取てたもつたか丹三郎推量してたもいのふ 丹足利の御家來にも仁木渡邊は格別のお家柄御心勞の程推察仕つてム

り升る八兒彈正よりそなたへの頼みの一條善惡に拘はらず頼れてたもるじやまで　丹大切なるお家のお爲殊には御恩ある仁木樣のおたのみ必仁木樣の御恩を忘るゝなと父の遺言もムり升れば一命にかけ升ても　八しかと承知か　丹神持まして　八そんなら是にて誓紙を書きや　ト料紙硯を出す　丹ハッ承知仕りました　ト書內道益藥を合して　道闔家の病を治す一藥則調合いたしてムる　丹他言すまじき此誓紙御受取下さり升ふ　ト雙方より藥と誓紙を出す八汐兩手に取て　八大切な此一毒差圖にもれまじき此誓紙兒彈正殿にかはつて此八汐が慥に落手　丹三郎けふの御煮番毒見の役はそなたじやないか　丹いかにもお意の通りでムり升る　丹今聞通り國家の病を直す妙藥今日の膳部に仕込がてんかや　ト藥包を丹三郎に渡す受とつて　丹すりや鶴喜代君の御膳部に　八仕込は膳番煮役の者共園田松本に手渡ししてそなたは毒のなき方をお毒見しや　道假初ならぬ大事の役目かならず共に仕そんじ召れな　丹ハッ畏り奉るきつと仕おゝせとは言ひ乍ら御幼少なる若君を　ト藥を手にもつた俤思入八汐道益顔見合せ方より引きつと見、　八サヽわいはとてもお猶はしふは思へ共よはる心を鬼となし道調合したるその毒藥　八國家の爲にはかへられぬわいのふ　ト戀ひのこなしにてきつといふ丹三郎いろ／＼思入有て胸を定めし心にて　丹とればうしとらねば物の數ならずすつべき物は弓矢なりけり　八違變はあるまい丹三郎　道首尾よふ役目つとめさつしやれ　丹ハッ承知仕りましてムり升る　ト頭を下る八汐道益顔見合せ一寸こなし序の舞の頃打込み此見へ宜しく返し

鹽澤丹三郎屋敷の場

造物三間の二重上手一間は佛間前側緞子張障子にて向ふ淨土宗の佛檀を餝跡二間は石摺襖此下手に世帶道具上手下手共落間跡へ寄て家中長屋屋敷の內裏のもやふ塀の窓口兩方に有上手は塀の前より外へ紅葉の立樹蔦かづら此前に菊いうね下手はかなめの生垣此上に媽部屋いつもの所門口鹽澤丹三郎と小さき表札を張ざつなる手水鉢抔のあしらひすべて屋敷長屋の體好み有べし爰に丹宮城白髮の鬘にて老女の拵へ數珠をつまぐり傍に寢見臺に本二三冊をき平舞臺に召使女お睦著流し風呂敷を前垂にかけ菊の枝を竹花生へ活て居る此見へ宜しく序の舞打上琴唄にて道具納り　おむつ　モウシ御隱居樣今日は菊のお節句夫でお庭に咲た此菊を二三本とつて參じていけましたが是でよふムり升かごろじやつて下さりませ　ト花生をさし出す　宮城ヲヽよふ氣が附升たヽ菊咲てけふ迄の世話忘れけり　一

と古人の發句にもよんだ通り長らくわらはが傍に遣ふたそなたなればよふしつてもゐやらふが連合丹左衞門殿が過られても悴丹三郎が跡目にたち連合のムつた時分より家中内の受もよく廉直な氣性ゆへ朋友衆ともせり合ず此母へもそれは／＼孝行にしてたもる故いはゞ此菊の盛りも同前春の彼岸の根分から日毎／＼に肥しをして虫をとつたり水をかけたり世話やいたは丹三郎が幼少な時分から爰まで育てしと同じ事さま／＼心を盡したもけふ重陽の祝儀の花に詠めふ爲けふ迄の世話忘れけりとはてもよふ叶ふた句ではないかいのふ 睦ほんに御隱居様のおつしやる通り當旦那の御出世はてふど今日の菊の花同前是までのお世話甲斐があるといふ物併しどふやらするとあなたはマア旦那様をいつ迄もおちいさいか何ぞの様におつしやり升ヲホヽヽ ト笑ふ宮城も笑ふて 宮イヤもふ年寄といふ物はいつまでも子供の様に思ひ升わいのふ

上「我子に譬へし菊の花老の餘念／＼詠めいる折から ト上るりにて橋懸りより園田吉兵衞袴羽織大小にて出て來て 相役園田吉兵衞門口より差覗き 吉兵衞 丹三郎殿は御在宿かな「をとなふ聲にお睦は立より 睦ヲヽどなたかと存升たら御同役の園田吉兵衞様旦那は仁木様より御用にて先刻詰所へ參られ升てまだお歸りはムり升ぬ 吉ムヽ成程／＼仁木様の御用で今日は松本太左衞門殿と此吉兵衞お煮役は丹三郎殿御料理の相談もありお歸りを相待ふか 宮マア／＼是へお通り被成ませ 吉御隱居然らば御めん下されふ「通るも狹き竹簀の子 宮イヤモ間せまい内で嘸お氣詰り庭の菊など御覧被成升い 吉ハヽアお庭の菊はお手入がよいかしてなか／＼見事に咲升た 睦マアおたばこなりとめし上りませ 吉是は／＼かならずお構ひ下さるな「挨拶とり／＼する所へその日の役目大切に幸き世を經る鹽澤丹三郎膳番煮役の時刻には暫しのひまも藍鮫の袴のひだも折目高歸りかゝりし軒の口子を呼鳩の聲に耳立 ト此上るりの内向ふより丹三郎袴羽織大小にて思案し乍出て本舞臺へかゝる上るりの跡皷計りにはり扇の入し合方鳩の聲丹三郎ふと戸屋を見て 丹鳩に三枝の禮あり鳥に反哺の孝ありと世の諺にいふ如く心なき鳥類すら主の身共が歸りしと知り子を呼びかはし出迎ふ有様ハテしほらしい物じやなア「おのが戸口にさしかゝり 丹母人只今歸宅仕り升てムり升る 睦ヲヽ旦那のおかへりでムり升る 吉丹三郎殿但今御歸宅被成たか 丹ヲヽ何人かと存たれば御同役園田氏よふこそ／＼

宮ヲ丶丹三郎最前から吉兵衛樣がお待兼 丹左樣存たらば急いで詰所を下り升ふものてト始終右の合方によき所へすわる 吉イヤ何丹三郎殿今日は重陽の御祝ひ日なれば御膳部のお獻立にも定めて例式がムらふと存て承りに上り升てムるて 丹なる程重陽の御膳部は例年の定まり則書寫し取て是にムるいざ御覽被成いト懷中より書附を出して見せる 吉いかさまこふでムらふいさい承知仕り升た見分の役は松本太左衛門殿此書附を見せ升ふ 丹此程は若君御不快に附正未の刻ならでは召上られず今少しお間もムり升ふ 吉さやう〳〵御上にも隨分御空腹の時がこつちのつけめ兼て仁木樣の仰の通りかの一藥をトいはふとするを 丹ア丶是ト顔にておさへる吉兵衛もこなし有て 吉すりや貴殿にも御承知かム丶成程〳〵しかし此お獻立首尾よふ參らば貴殿を始め松本氏にも拙者にもいつかどの立身出世何と甘ひイヤサ何と甘ひてふた御膳部ではムらぬかト丹三郎吉兵衛の方へこなし有て 丹ア丶其跡は申さぬ事御がてんか 吉いかにも〳〵合點所かとくより聞取松本氏にも一つ釜もし此事が露顯いたすと御互ひに身の上なれど誰しも欲に迷はぬ物はムらぬて 丹ア丶是々吉兵衛殿詞多きは品少なし則かの一藥はト懷より藥包を大事に出して吉兵衛に渡す 吉すりや此一藥がコリヤうかつにもつらぬ氣味の惡いト片手にて口をおさへこには よいかみ入にいれる 丹慥に貴公へお渡し申すお受取下されい 吉然らば丹三郎殿 丹吉兵衛殿後刻 兩人御意得るでムらふ

「同輩中のたれそれも小腰屈めて出て行ト此上るりにて吉兵衛向ふへ這入る跡又右の合方丹三郎羽織をぬき自身にたゝむ宮城は珠數をつまぐりながらよみさしたる本に枝折をはさんで脇へなくおむつはこんろにて煎茶をわかし茶をほうじる拵あり 丹隣屋敷の小松原には相も變らず小鼓の稽古と見へるヤアコリヤ重陽の菊を生たは母人コリヤ誰が入ましたな 宮そりやむつが庭の菊を手折て今のさき祝儀に入てたもつたのじやわいのふ 睦ホ丶流儀もたゝぬ私が我流旦那樣の手前お恥かしふ存ますわいなア 丹イヤなか〳〵甘ひ物じやむつもなか〳〵小しやく物コリヤ一かどの手際じやはへ 宮それ〳〵その菊の香をきゝ乍ら讀さいた此本をまつそつと見ませふわいのトめがねをかけて又本をよむ此内茶をくんで 睦ハイ旦那樣お煮花が出來升ためし上り升い 丹ヲ丶にばなが出來たか母人召上り升ぬか 宮イヤ〳〵爰はさつきにからよふたべ升た搆はずとそなたのみやいの 丹然らば下さり升ふかト取上呑かけて中を見て 是むつ此茶は今煮立たのではないか但し是は二番煎じか 睦イヱ今きびしよを改めまして此鐵瓶のお茶湯をさいて煮たてましたのでムり

升る 丹ハテそれにしては是茶を見やれ茶碗の中に蠅
が一疋は入てをるわへ 睦でムり升か是はマアめつそ
ふな心の附ぬ御めん被成て下さり升いなア 丹ヱ、心
の附ぬ汲かへて持て來やれ 睦ハイ／＼畏り升たどふ
いたしてマア此中へ蠅がは入ましたやら ト茶わんを持て下手へ明に
行宮城是を聞て本を傍になき 宮何茶の中へ蠅が落てゐたとか 丹いか
にもさやふでムり升る 宮夫はマアいかな事むつそこ
へ出や 睦ハイ／＼御用でムり升る ト舞臺前へ出る 宮是御用
所かそなたやマア何と心得てゐやるぞ是蠅といふ虫は
の不斷そこらを飛あるき人の骸にもたかる物じやが
もし食物の中へは入た時は人間には大毒で當る物じ
やといのふ是爰に居る丹三郎はのそなたの爲には主
人じやないかその主人にマア毒をのますといふ事が
ある物かいのふヱ、マア爰な不忠者めが ト腹立のこなしにてきつと
いふおむつはつとうつむく丹三郎ギツクリするこなしにて氣をかへて 丹イヤ／＼母人左様に
お呵り被下升るな何のむつじやと申てそれをしつて
致し升た事ではムりませぬ 宮ハテしつて又毒な物を
主人に飲せてたまる物かいのふ是今わらはが讀で居
る此本はコリヤ雨月物語といふかな本此中にもむつ
の玉川の歌の 內高野 の玉川を空海がよまれた歌に
「忘れても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水」
と是程の毒水になせ玉川の玉といふ文字を冠らした
といふ論を書た物語あらおもしろいと讀返してゐる
その矢先に茶の中へ毒な虫のは入たもしらずに丹三
郎にのまそふとはあまりといへば心ないそそう者 睦
御隱居様よふ心得ながら只今の麁相眞平御めん被成
て下さりませ 宮麁相と云ても程のある物主人大事と
思はぬゆへ其麁相大きふいへば不忠者といはるゝぞ
よ 丹イヤ／＼母人拙者も又とくと申開ふ間今日の
所はもふゆるしてつかはされませ 宮畢竟丹三郎が申
を見たればこそ此後共に氣を附ませふぞ 睦ハイ／＼
有難ふ存升る 丹母人の御機嫌も直ればもふよいはサ
、次へたちやれ／＼ 睦ハイ／＼左様ならどりや御膳
の拵をして參りませふ「麁相を何と納戸口畢附惡く
入にけり 跡打見やり母親は我子の傍へにじり寄り
ト跡しつぼりとした合方宮城こなし有て 宮丹三郎 今此母が呵つたを尤じや
とおもやるか 丹イヤモ御老人の仰らるゝ事に何の御
無理がムり升ふぞ 宮ヲ、そふいやれば母も嬉しい是
丹三郎今改て云ふではなけれど連合ひ丹左衛門殿存
生のうち麁忽の罪で此鹽澤の家名は沒收にもなるべ

き所組頭といひ御家老の仁木彈正樣の御執成で隱居をさせまだ十三四のそなたをば元服させ鹽澤の跡目にたて今大切な御幼君の鶴喜代樣の御膳番お毒見役とまで立身したは皆是仁木樣のとりなしとはいひ乍ら御扶持を下さる御主人樣の御影なりや御奉公を大切に束の間も油斷をするは大不忠今の樣にむつをわらはが呵るのもあればかりじやないそなたにも心得に聞そふ爲連合が死れても我々親子が安穩にくらすのも是皆御奉公を影日向なしに勤めるゆへそふした時にはそなたの命はそなたの物じやと思ふは不覺今いふた本にも書てある通り忘れて汲やしつらんと高野の玉川には毒氣があればかならずのますなと佛の敎へ蠅のは入た茶など呑んでもし當られやなどして見たがよいどの命を持て御主人の若君にさし上る御膳部の毒見役は誰がするそりやもふ侍の身の上は義によつては命もすてねばならぬ事もあれば一口にいふではないおなじ毒に當つて死る命なれば私事に捨るは不忠御主人の爲ならば毒としりつゝ呑もせよすゝりもするが是奉公かならず〳〵その身を大切にせねばならぬぞやおいとし寄たわらはの事此世に居るももふ長ふはあるまいそなたの身の上にもしもの事が有たらば此母は何とせふけふもけふとてふと此本をよんでから案じ出すと勿體ない事ながら終に一時をこたらぬ佛樣への御看經も母の手には附升ぬわいのふ「意見と珠數とくりかへし我子を思ふ母親のしんみの詞いち〳〵に胸にこたへて丹三郎 丹ハヽア有難き母のおしめし仇おろそかには承りませぬ 宮けふは殊更重陽の御膳部獻立の取合せにも心を附やわらはゝ佛間でお看經 丹成程母人には今のお身ではそれが御役目 宮イヤモ佛に願ふも後世の事より御家の御武運長久とそなたの身の上息災延命 丹ムヽすりや夫程迄に 宮どりやかんきんにかゝりませふか「南無と唱へて母親は佛間へとこそ入にける跡見送りて小ゆるぎの磯にたゞよふ汐ならでとつゝおいつに鹽澤が胸も苦しき一思案 ト此内宮城珠數をつまぐり作の上手もじ張の間へ這入後向ふにすわり看經にかゝる是にてもじの障子をしめる靜に木魚入鳩の鉦床の合方 丹ハテ心有げな母の敎訓むつが煮たてし茶の内へさゝいな虫の入たるさへ子を思ふ母の御立腹それも此身へかけての御意見思ひ當るはけふの御膳部御毒見役を幸ひに仁木殿よりのおたのみ典藥大場道益老と八汐殿國家の爲に病を治する

の一藥を幼君へすゝめ參らす高論はげに尤なる金玉論忠義ゆへには主君も害すあつぱれの大忠臣と感せ。しゆへ親共よりの恩義は有口外ならぬ秘藥の一條他言すまじき誓紙を認め受合ひごとは請合しが最前園田吉兵衛がふと口走つたる詞のはし〳〵事成就する時は貴殿をはじめ我々も出世の足代鬼貫公の世とならば是に一味の者共は立身するは是必定そふきく時は皆欲心口には忠義ととなへてもはかり難きは人心もし仁木殿の悪心にて鬼貫公にかたんなし足利の家國を奪はん爲忠義ごがしに此身をたばかり鶴喜代君を毒殺なしトいはふとしてあたりを見てちやつと氣をかへ丹こら恐しき工みの罠鹿追ふ猟師は山を見ずと忠義〳〵と心得しが今母人の意見にも純成有し恩義はあれど御扶持を賜はる主家の御恩は身を粉に碎けど報じがたし我々命を我物と思ふは不覺朝夕の食事にも心をつけお馬の先の働きこそ誠の武士の願ふ所と聞たる時の苦しさは胸に盤石おかれし心地思へば母の詞ならずお家を守る鶴が岡の正八幡宮先祖に祭る持佛の佛母の影身に附そひ給ひ此丹三郎にあやまつて不忠の汚名をとらすまじと神明佛陀の御意見なるかハヽア恐るべし〳〵

あの御教授を聞ずんばまだいたいけの御幼君鶴喜代君をうか〳〵と膳部の毒に害せし時は仁木への恩義は報ふとも三代相恩の主殺しハテよく心の附しよの「假にかはる忠義心身繕ひして立上り丹ヲヽそれけふの御膳は未の上刻夫迄に奥向へ駈入幼君の御乳人政岡殿迄此事をトかけ出せしがまて暫し丹イヤ〳〵もし此事を注進せば鶴喜代君は御安泰にもムらふが事露顯する時は鬼貫公はもとより恩義を受し仁木殿の御身の上神文誓紙まで認めし身共が口より何とおめ〳〵言ひ出されふ夫のみならず國家の騒動コリヤうかつにも口外ならずト又座に附て諸手を組悶ふも答へも口の内佛間の内には母宮城りん打鳴らし老の與齒もれくる讀經の聲トもじはり障子の内二重せうじ引ぬく内に宮城うしろ向きにてぶつだんにむかひりんならし居て宮なむ足利のお屋形先君幼君御武運長久附ては悴丹三郎息災延命先祖代々二世安樂南無あみだ佛〳〵ト彌陀へ願ひの殊勝なる丹三郎もともト〻佛間の方を伏拜みト鶴又右の合方丹ありや母人のお看經御自分の後世は打捨お屋形樣の御運長久丹三郎が息災を佛へ賴みのあのお詞思へば〳〵勿體なやアレ外面には子を呼びかはす鳩の聲忠孝の二つには仁義五

常も是にこもれり親の子をいつくしむも子の親を敬するも主君へ忠義をはげみしうへなりや孝よりは忠義が抜群仁木殿への恩義はあれど現在主君の若殿へ鴆毒としり乍らどふマアすゝめ参らされふぞといふて口外なさば恩人はたちまち窮命こちらを思へばこちらが缺ると翅鳥にかゝつた我身の上所詮永らへぬ我一命切腹して相果なば御膳毒見の役人もかはり折角工んだ鴆毒も鶍の觜と喰ひ違ひ自然と幼君のお命延はり波風立ずお家は安穏ヲヽ此思案が屈竟一そふじや〳〵「ひとりうなづき立上り死出の門出の曠著ぞと取出すむろちの黒小袖やみの鳥の聲ならで父の筐の定紋も心たゞしき行儀鮫うろ路に迷ふ心の屈托衣紋つくらひかたへなる硯引よせ書筆の文字もまがらぬ諌の狀それとしらねば下女おむつ膳拵して勝手を出（ト此上るりの内丹三郎葛籠より著附裃上下を取出し又袋入の大小を取出し著附を著かへ硯を引よせ手紙を書にかゝる此内奥よりおむつたすきがけにて膳をもち出て丹三郎の傍へていねいに直して）睦モウシ旦那様御膳が出來升てムり升る此度はもふ念に念を入させしたればお心置なふめし上つて下さりませいつも御自身に遊ばす樣に致し升たお露のおかはりはおよび被成て下さりませ「口も輕々身も輕々お睦は勝手へ入る跡に丹三郎は膳部に目をつけ（トおむつ納戸へ這入る又合方）丹以前の龜相が身にしみてか膳部に念を入れし由我今切腹なすとてもまつこの如く御膳のとき同腹中の役人共鴆毒入しを差上なば我身の最期もむだと成り御幼君の御身の上危ふし〳〵コリヤ切腹を止まつて後刻御膳の毒見の折鴆毒入りし膳部を食し狂氣なしたる體を見せ惡事にかたんの關田松本我手にかけて相果なば毒の工みも水の泡御幼君には御安泰仁木殿へはいさゝめの此狀忠孝恩義三方に此身一つを捨るならば汲やしつらん玉川の古歌によそへし母のお示し是が誠の忠義じやわへ「母の恩義も高野なるむめふの橋の夢覺めて忠義の誠ぞ健氣なるかくとは何氣納戸より睦は小櫃を持出て（ト納戸よりおむつひつをもち出て）睦是はまだめし上りませぬかおつゆがさめ升てムり升ふ一寸盛かへて參じませふ（ト立ふとするをとめて）丹イヤ〳〵飯はまだほしふないムムそふだむつその方の事をはたと失念いたしをつたわへ睦ヱヽ私の事をそりや何をでムり升るへ丹イヤサその失念をしてをつたはア、何だわへ睦ヱヽ御膳の事でムり升ふけふは菊のおせつ句いつも祝ひ日にはお内でお箸をお取遊ばすゆへ早ふ差上ませふとさ

つきにからいそいで揃まして厶り升る 丹ア、イヤイヤ何のそふではない トいひかれるこなし 睦へヱ、さやふならさつき御隱居樣のお呵りのお詫事で厶り升るか誠に私が不調法を仕り升た 丹ヲ、そふじや／＼その不調法母人には殊ない立腹そこで身共も段々と詫れ共・向一圖におほせられてお聞入はないわへ 睦で厶り升ふともよく／＼のお腹だちで厶り升る 丹サアそこで手前も致方がないからふと存附たは母人のお氣の納まる樣その方に暇を呉るから左樣に相心得たがよい 睦ヱ、アノ私にお暇をそりやマアどふ致しまして 丹イヤサ何も驚く事はない先達てその方の國もとより奉公を退て內へ歸れと手紙の參つた事も有たがその比は母人にも疝癪にておなやみありし故人手はたらずマア半年も待たがよいと段々をくれにをくれたが見やれ此比はあの通り御そうけんにもあり身共は又知る通りたまでなくては內にては食せず大方御前の詰所にて食事はする母人御一人の事なれば老の身のお氣なぐさめに御自身一人煮焚を被成て上るもよいからてふど幸ひ一たん中宿へ退たがよからふ 睦へヱそんなら私にアノお暇を 丹サ、嘸思ひがけもあるまいがそちが兼ての願ひといひ是國もとより附て參り長々母人の介抱も致しくれた物故どふぞ似合ひの緣もあらば片附たふも存をつたが何を申も肝心お遣ひ被成るゝ母人の不機嫌そこで今も申通り彼是と取なしを致そふよりあゝいひ出されしこそ物怪の幸ひ奉公をひくもよからふ何卒母人の氣の納る樣ではない身共の心も納るやうに今いひ出して今すぐにとは身も少し言憎けれど心やすめの爲なればサ、ちつとも早く中宿までひいてくりやれ 睦モウシ／＼旦那樣そりやマアあなた眞實で厶り升かいなアテモマア思ひがけのない藪から棒といはふか常々からじやらけた事はおつしやらぬ御氣性御隱居樣のお腹立を休める樣今此むつに奉公ひけとおつしやるには何ぞふかい御樣子も厶り升ふが 丹是々深い淺いと樣子の有ふ筈もない主從の緣を切り暇をくれたれば仔細はない筈右いふ通り身共が氣ざはりきり／＼早く立ていきやれさ「さりとはいつかぬ過急の詞お睦はむつとしながらも樣子あらんと胸撫をろし 睦すりや是非ともにアノわたしは ト思入有て立上り門口へ出よふとするを 丹コリヤむつまて／＼ 睦へイ御用で厶り升か 丹今暇をやつたその方

じやが丹三郎が申附る用事が有が聞てくれふか 睦ハイ何なりとも仰附られて下さりませ 丹然らばこの手紙を持て八汐殿の部屋まで參り申そふには丹三郎が母より内々申上たき文でムればひそかに御覽下さる樣にと申憐にお手渡し致してくりやれ 睦ハイ左樣ならば八汐樣へのお使でムり升るか畏り升てムり升るお案じ遊ばし升なすぐさま持て參り升ふ旦那樣ではない丹三郎樣 丹ハテひまとらずと早くゆけといふに 睦ヘヱイ「心のこれど仕かたなく戸口ひつたて出て行跡見をくつて丹三郎兼てたしなむ二腰をさしも立派に立上り トおもつ心のすまぬこなしにて門口へ出てそふじやといふ心にてせわしく向ふへ走りはいる丹三郎大小をさして 丹母人にのみ心置れ下女のむつが事をはたと失念致せしが幸ひ先刻の麁忽をいひたて暇をくれゝば障もなし又今八汐殿まで持せし狀には彈正殿へ誓紙をしながら毒殺變して此身を殺し忠と恩義に命を捨るいさめの條々お聞入ある時は彈正殿にもお命全く無難に納まる足利のお家母人にも此事をくわしく申上たけれど事もらしなば神文の手前も立ず一心不亂に看經を被成るゝこそ幸ひ申分は冥途でゆる〳〵老たる親をのこし置先だつ不孝のつみ科は主君の爲とおゆるしあれかれ是いふうち御膳の時刻ヲヽそふじや「心せわしく立出る一間の内より母の聲ヤレまて悴丹三郎「呼とめられて思はずも名殘に拜む母の顏 トツカノヽと本舞臺へ戻る此内佛間より宮城自害し乍ら正面へ這出る丹三郎大恂りにて 丹ヤヽコリヤ母人には御生害か「こは〳〵いかにと駈よつて仰天するこそ道理なれ母はくるしき息をつぎ宮さつきによんだ玉川の古歌よふ判斷しやつたのふ 丹すりや母人には拙者が心を 宮最前むつが麁相の時たゞならぬそなたの顏いろ高野の奧の底深き惡事としらず忘れても汲やしつらん玉川の毒を樂と古歌の添削ヲヽそれでこそ我子なれ出かしやつたのふ〳〵 丹サヽ夫ゆへ仁木殿を諫めの一書むつにもたせて惡事をこらしすゝむる善は御膳の時此身を殺して波風立ず雙方全き拙者が寸志 宮主家の大事そなたの命にはかへられぬとはいひ乍ら親は我子に毒な物喰ふなといふが世上の習ひ毒としりつゝ喰へといふ母が心はどふ有ふ推量せよ丹三郎ー忠義にこりし老の身も深手によわる斷末魔 丹母が自害は誓紙の手前かの王陵が母にならひ 宮我子をいさめし此自害かならず共に心のこすな 丹チヱヽ有難き母の慈悲思へば冥加が恐ろしいー御

ゆるされてといふひまに早音づるゝ八つの時 ト此時ドン〳〵と太鼓にて八つをうつ 丹ありやもふ八つ 宮居所のあゆみの 丹未の刻 宮丹三郎早ふゆけ 丹ハッ 宮ゆけ 丹ハッ 宮ゆけゆけ〳〵 丹ハア、「あはれはかなや ト三重にて宮城落入る丹三郎は向ふへ走り這入る此見へ太鼓ドン〳〵と打ながらチヨン〳〵 返し

膳番煮役自毒害の齣

道具元のお錠口へ戻る爰に渡邊銀兵衛、今川女之助、十平、勇藏、平助、小彌太以前の形りにて控へ居る八つの太鼓打上序の舞にて道具納る ト上手の杉戸口にて騒路の音がら〳〵として八汐以前の形りにていで 八何れも重陽の御膳延引とて御前樣のおむつかり膳番お煮役へ申附さつしやれ 女誠に今鳴し時計は未の上刻 銀御膳番の方々用意よくば持つしやれ 三ハア、 ト下り葉になる橋懸り杉戸口を開き園田吉兵衛上下にて金のかけ盤に羽二重のきれを覆にかけ顔に覆面をあて次に松本太左衛門同じく上下にて銀のかけ盤に羽二重の覆をかけ是も顔にふく面をあて次に丹三郎同じく上下にて膳の上に飯櫃をのせ持出てよき所に直して 吉ハッ御膳延引の段恐入ましてムる 太左各いざお取次下さりませふ 八若君樣にはお待兼丹三郎はお毒見役か早ふ〳〵 丹ハッお見届下さり升ふ ト辭儀して前へ直る八汐は上手次に女之助銀兵衛各こなし有て是を見てゐる丹三郎こなし有て銀のかけ盤をさしなき金のかけ盤の方を前へ引よせる吉兵衛太郎左衛門悔りして 吉ア、是さ〳〵丹三郎殿そりや違ひ申す〳〵 太金の懸盤は御前樣銀の方がお毒見でこざる 銀誠にお式日には極りし御膳を取違るとは俺相千萬 吉太丹三郎殿お嗜み被成い 丹イヤ〳〵常は格別今日の御膳お毒見致すは此御膳でムる ト搆はず箸を取ふとする吉兵衛太左衛門悔りして雙方より丹三郎に取附とめて 吉ア、是は拗堅意地千萬その方ではムらぬと申に 太是此方には毒イヤサ毒見役の御膳ではないといふに 八両 俺相千萬お待被成い 丹イヤ俺相でムらぬそれ膳番煮役は格別お毒見役と申せば御前の召上ると同じ加減おなじ御料理にてすわる事は是定例なりや金のかけ盤銀のかけ盤とて隔はムらぬ毎しう存る方を取上るが役目でムれば是非此かけ盤は此丹三郎がお毒見を致すのでムる 太吉じやと申てその方は御前のなれば 丹ハテお毒見役は此丹三郎御膳番お煮役にはお搆ひない儀夫ゆへ拙者がお箸をとります ト搆はずふたを取て汁を吸にかゝる吉兵衛太左衛門は身をもがく銀兵衛はしじう八汐の方を見てこなし八汐は顔にておさへる銀兵衛たまり兼て 銀コリヤ〳〵丹三郎そりやお手前無禮で有ふぞ 丹イ、ヤ決して無禮でムらぬ 太吉じやと申て 丹お毒見致すが役目でムる但し役をかはつてお毒見召るか 吉太サ夫は丹さやふでなくばおひかへ成され ト膳を引よせ心靜にくふ銀兵衛いろ〳〵あせつて 銀何ぼうお役目なればとてあまりの無法何事もよく心得る丹三郎殊には一味イヤ一味もか

はらぬ此御膳部を ト立かゝるを女之助よろしくとめて 女是サア〳〵銀兵衛殿丹三郎がお毒見致すに貴殿にはお構ひあるな立騒ずとおひかへ成されい ト是にて銀兵衛跡へよつて八しほの顔を見る八汐大事ないひかへていゝとするゆへじつと下にいる吉兵衛太左衛門はたまりかねて雙方よりかゝるをさゝへ乍ら丹三郎外の料理なくご汁椀を取一口にグツと吸ふ此汁わんに仕かけ有り女之助始終めを附けて 女丹三郎御膳部に仔細はないか ト丹三郎毒の廻りしなかくすこなしにて 丹御膳部に俺忽はムらぬ仔細はムらぬ トいふ内血をはき縁にて受る吉兵衛太左衛門は始終さゝへる女之助ツカ〳〵と立より丹三郎の顔を詠て 女面色變じて吐血したるはまさしく毒氣 丹イヤ吐血いたすは拙者が持病 皆々ナ、なんと 丹御膳部に仔細はムらぬ 女それに又此兩人は 吉太コリヤもふお座には ト迯ふとする丹三郎苦しみながら立廻つて上手へ突やる八汐すつと立て兩人をボンと切る皆々見て恟りして 皆々ヤア是は 八膳部違刻の科は兩人此八汐が即座の成敗 銀御尤イデ丹三郎 さもらふトよらふとするを丹三郎さゝへて刀をとりあげ 丹此身も同罪切腹御免 ト拔て我腹へ突込む女之助に銀のかけ盤の汁椀を菊の花籠へかけて仔細なきゆへ 女膳部にいよ〳〵仔細はなく 丹吐血で死せしは此身の本望 ト刀を引廻す銀兵衛よらふとするを八汐とめてやれ嬉しやといふ心立役四人立かゝるを女之助とめて感ずるこなし 丹重陽の御祝儀申上升す ト辭儀し乍らカツクリとなる各こなし此見へ序の舞早笛 ひやうし幕

右一場は弘化元辰の九月中の芝居にて興行の時予が著述にして婢女おむつ瀬川路之助役は此時舞臺を辭せし時ゆへ暇を出すの時名殘の口上有けり幕明道益と醫論の内は仁木にて仕組たれど女形獨はなくては堅きばかりにて和らぎなく是非なく女形八汐とせり母宮城を政岡と見て丹三郎に千松の役をさせるを一齣の趣向とせし物にて雨月物語の小說は上田秋成の作なり高野にて俳諧行脚女人堂に宿り關白秀次の靈にあふ時連歌師紹巴玉川に毒の有無を說く條有曲亭馬琴賴豪阿闍梨怪鼠傳に西行鎌倉にて右幕下賴朝に軍法を問はるれども法師の身なればしらずと答ふ秩父重忠歌道の故實より問出して後々軍法の祕事を聞條に此雨月の玉川の古歌及菅公筑紫にて宵の間は都の空に住もせでの古歌を評するは皆雨月物語を假りたる物なり此狂言にかゝはらぬ事ながら小說戲作者にも此きりはめはまゝ有べし右の二書を閱して考ふべし是らに似たる事共追々二編三編に卷を繼て記さんとしか云

時嘉永四辛亥綺語堂に冬籠して

西澤一鳳軒述之

西澤文庫 脚色餘錄初編下の卷終

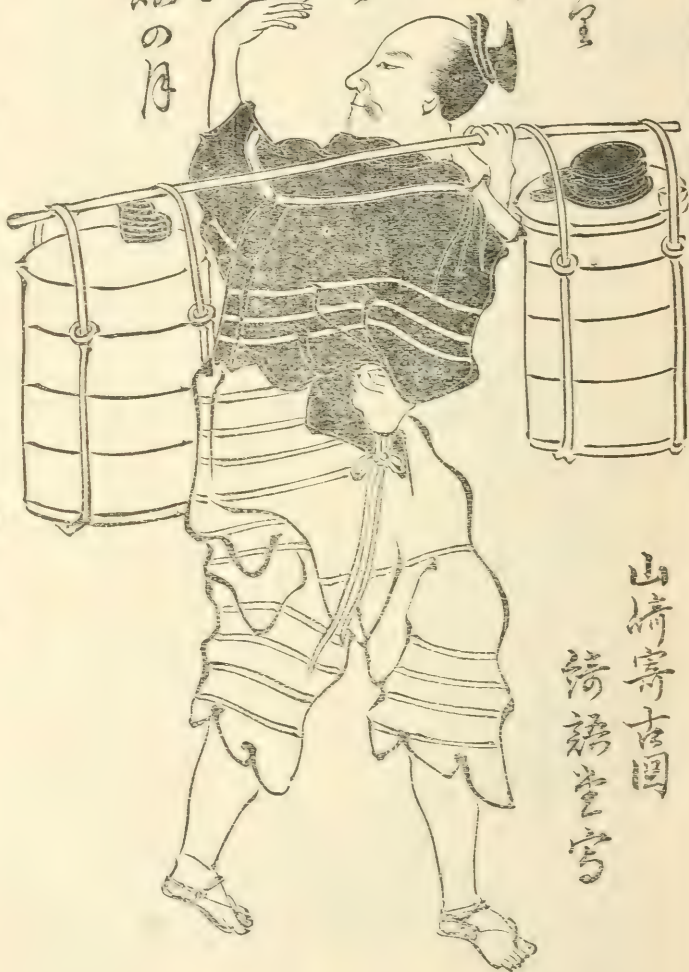
笠翁前無笠翁笠

翁後有笠翁爲有

者誰乎

李叟大先生

梔花園

職人歌合

西澤文庫脚色餘錄二編上の卷

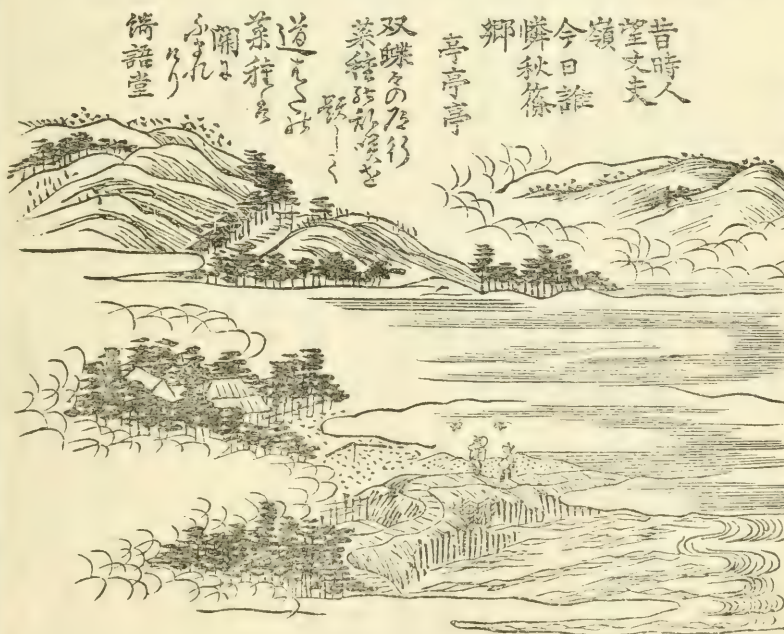
目次

西澤文庫脚色餘錄二編上の卷

西澤綺語堂李叟著

壽門松道行の文

竹本座當淨瑠璃山崎與次兵衛壽門松は近松平安堂の作にて享保三戌年正月二日より始八年後昔米萬石通し濡髮、放駒の名前を出し又二十五年たちて後雙蝶蝶曲輪日記出る壽門松と萬石通を一つ狂言に取組し事は前々の編に述る所なれ其後に明和八卯年十二月に出板なりし才子刊書四鳴蟬と云書は亭々亭逸人譯堂々堂主人訓と有雅樂情花記（謡曲熊野）同扇芝記（謡曲頼政）俗劇移松記（壽門松道行）使價嚎鐵記（大塔宮三身替り音頭）此四齣を漢文にて書たるもの也依て本文を先に出し次に飜譯を略出して笑に備ふ也春に育も花をそふ蝶は菜種の味しらず菜種の蝶は花しらずしらずしられぬ中なれば浮れそめまいくるふまい物あぢきなや吾妻立よりヲヽ嬉しやお心も靜つたかアレ御らんせよ虫でさへ番(つがひ)はなれぬ揚羽のてふ我々も二人連好たどふしのなか／＼にお心よわやといさむれば吾妻請出せ山崎與次兵衛請出せ／＼山崎與次兵衛いつか思ひのな下紐とけて昔おもへばうやつらやつらや忍ぶむかしもうやつらや情なや誰あらふ山崎與次兵衛さまとて人々におくれぬ髮の亂れ心吾妻が顏も見忘れてこつゝなやとせいすればそなたは藤やの吾妻かの與次兵衛にもまれて色のわるさよいとしさよ近い内にはかならずと請けて樂させよ世帶して子供もふけてふたりが連てお乳が肩くまおてゝが日傘肩で風切る山崎に親の御恩をふり捨てそなたの世話に形ふりも昔には似ぬ男やま今では人も秋篠や外山の松よ事とはんまつがつらいか別れがういか待も別れもせぬように親のゆるした女房は義理と情の二面かけて思へどかひもなく今は野末の放れ駒きのふは吾妻に戀をのせけふは故郷のこがれ泣我から狂ふ秋の葉の亂れて袖に置もせず寢もせで露のたま／＼も待るゝとも待身になるな親と子の便りをしのぐ山崎の妻もきこそはみたれがみいふた詞が力ぞやわしが馴染は三重の帶ながい夜すがら引しめて妬み悋氣の心なく預る物は半ぶんの主は

忘れていさんすか過し月見は井筒屋で底意隈なき夜と共におどり明した面白さ私は百迄も忘れやせぬものよ見あかぬ君が外八文字の道中姿目附で殺す所體になづむけいせいこまめにたらいが女房請出し盥の底抜て影も宿さぬきぬ〳〵の親を悲しみ妻を戀心一つを二た品に名乘りて過る時鳥じやが父に似て似ず子は色里に初音ふる冠はきねど大盞と花車が轟く口說の門やりてがたゝく禿がねぶり皆夢の間の境界とやぶればぐちもなかりけりかくはしれ共柳の糸のおどろを亂す山颪はげしき親のいさめの詞妻が別れの一ことは身にしみ〴〵と戀しやと互に手に手を取りかはし聲もおしまず泣ゐたる夕陽告る程もなく西北に風起り東南にむかふ空の足楷木の間もはら〳〵〳〵小川の水音さら〳〵〳〵雲の羽袖もひら〳〵とあなたへなびきこなたへなびきくるり〳〵くる〳〵くるりと巡りめぐるや月は行けどもはてしなき思ひは目前親のばちあたつて碎る男のすがた走ればはしりとまればとまる狂はぬ袖もみだれ心命つれなき流れの身流れ渡りの世の中にしばしとゞまる賤が家の軒を尋ねてなやみけり

移松記

院本題曰山崎與二壽門松。壽當譯移場。相傳當時有山本余某者。攝北之人也。標名時高矣。傳奇因而生。老實莫向山崎而求。故題云

失心吟行　零踏宮一中譜

淨扮農家上　刈穗莩積已登囷。年貢納來。額暢皺麥飯飽時。春到腹。大根今尙不離壥。在下是山崎余一平。我以庶子早出爲農。使余嗣宗家。他生得百伶百悧。四藝六能。無所不通。又穩柔體面。十個九個喜歡著他。奈至中年。張東山之遊。被世嫖人之號。論來嫖也何害。只爲專情於他斷人忽業。災乘而起。今遂至受寃被屈。吃官司在方保監囚。幸縣公明鑑。父親慈計。剛得脫監。但他耽憂驚不一日矣。遂害心恙起來。時時發狂。東走西跑。時或不知向方。使合家干係不下。誰道頑仙不如才鬼。窘了窘了。世上守世之君。奇楠不焚竈下亦不燒。是本分事體呀。只見西莊畦徑。笑號走得緊。他便余一了。後面有一艷婦追及。想是那表子。我知趣躲避邊看他如何看那邊。狂得揚猖一遲一快。苦只苦只。淨向台後下

二宮上寄詞　樂隊唱　生上阿妻可贖山崎余一平。贖之哉。贖之哉。山崎余一平。當恨何日遂情願。相偕暢繾綣。往事懷來却亦可恨。既慕往時亦復可恨。旦後上云嗟。是爲誰。山崎余一平。名馳風流身不後人。豈想發狂被髮見妾之面。不認出。如醉夢裏一般。請快醒來則個。生唯。儞是藤家東姐麼唯。唯。唯。實可悅也哉。

生旦互跑雨處再撲蝶科　甲乙春野雉君不見兀的昆蟲猶雙飛。鳳蝶上下不失偶。才貌相攜俱有情。飛蟲不分花好醜。菜花布金褰春花。亦何得解蝶採取。蝶也亦何知菜有味。嗚呼俺不知趣。他沒深情。何至攝魂魄。不攝何失心。棄擲親恩重。斷煩愛姐整儀容。舊日俊俏丈夫嶺。今被人厭。秋篠鄉山外孤松欲問儞。熟思後日不羈騶。心似秋葉逐風飄揚。亂心也乎。噫自戒。寧令人遲勿令我後。骨肉相惹。自有情分。想像山崎婦。悽常守空房。蓬頭也不理。是怙舊日盟。旦生悄。奴識良人非淺淺。錦帶繞腰再欲三。歡卓長夜。昵鴛被溫。諺道倚財主人半。雖有正妻欲分情。儂能記得可不失。往秋賞月井垣樓。淸光照兩意。徹底隱曲無。飲燕有興。夜以續日。今覩良人。酸鼻難禁。濕襟血淚。吞聲而啼。生執小聲歡笑態　歌念傳我夢寐間不舍儞。親論妻諫風吹耳。砰湃響去洛山邊。標大夫松日相比。雖無弁童大臣名。鴇兒

聲轟口吾市。老妓拳擧梅香顋。俱是南柯一夢裏。看破世上無頑愚。雖則如此奈山風。搖揚線飛轉蓬。又吹諫聲砭肌骨。旦若幸莫忘。（生牢記了。）（生旦交執）雙手。相泣秋天。金烏西落。銀蟾東升。幾回晦望。憂愁無期。方知違親有冥報。男兒意氣碎如沙。已逐己影認做別人。我走影亦相從。呀。呀。呀呀。我止影亦停。哀哉亂想至生多岐。（旦媚）（同旋）嗟是烟花何愛護。命絲應絶仍猶舒。（生旦同唱）遂流世事無常處。且息待篭野老居。

劇博士曰。此齣之詞。多秋景。咏葵花者。舊詞中追思春光也。近有優新者。抱三絃彈春野雉。以換撲蝶之科。冷然掃興。又不似狂情。後扮者須致思焉。

大塔宮身替音頭の場

竹本座淨瑠璃（太平記綱目）大塔の宮曦鎧は竹田出雲掾の作にして享保八卯年二月十七日より始是また古今の當り狂言なり先に云四鳴蟬に三齣永井右馬頭宣明の屋敷一段を漢文にせし有餘り長編なれば略して身替り音頭の内を拔て爰に出すしれたる物ながら本文と照らし見るべし爲に先本文を記すもの也（前略）サア〳〵宮さゝ鶴千代おどり〳〵と子をよぶ善知鳥安方のやすき聞もなき親心庭に入來る踊子に立まじりても此ふたり砂の中の金かや母は今宵ぞ名殘りの音頭是やこの七月の十六日は佛のじひ奈落の底の罪人の呵責の炎やすませて充滿其願如清涼地とうたひおどりてあそべども十七日の曙は元のならくに苦しむと宇蘭盆經にとかれたり我子は罪人ならねども踊は宵の夢の中此曙は死手の山さぞ父戀し母戀し戀し〳〵と泣は冥途の鳥かエめいどの旅の行鳥と娑婆に殘れる親鳥の涙にしぼる袖の露消し昔の物がたり踊子衆も父上も聞てあきらめ給へとて語るもおなじ淚ぞやいにしへ多田の滿仲の夢まぼろしの世をかんじ乙のわが君美女御前すみの衣にそめてそまらぬ御いかり美女が首うて仲光と主命のがるゝ方もなしむざんなるかな仲光はきれと有もお主也切奉るも御主也とかく我子の幸壽丸御身がはりと思ひこむ親の心を子はしらず手ふり袖ふり見るにきえ〴〵よわる心を取直し切てかへたる末世の手本武士の鏡の露ちり程も心殘すな我も殘らぬ今が思ひのきり所思ひのな切所さ（下略）

曦鎧記

全本名。曰大塔宮曦鎧。傳說其琰鎧者。今藏在於山門長府云。又大塔宮之戎粧。新札已刻。云云。或是義與。又當時而稱尊論。俱出太平記吉野落城之卷。可莫論傳奇之焉

替身踊場　浪花義倡譜（傀儡家稱著者書儒之義也）詞中。吃巧。與二斬兒一和語通。

花園来來。靑宮鶴千代。早開二踊戯一。」叫レ雛乳鳥應二安洲一。親意懸懸常不レ置。（安孩偶斎上躍科）早進二庭間一衆踊兒。隊裡混列此兩稱。眞是砂中有レ見レ金。」母也今夜。決別之號頭歌。是也此也。七月之十六日。佛垂二慈悲一。奈落底下罪科。免二呵嘖一談一歌唱充滿吾願。如淸涼池。踊躍喜遊如何。十七將レ曉依レ舊受二奈落苦一。盆經有レ説。我兒何論二罪科一。踊一宵夢。此曉死手山客。想。戀レ父戀レ母。戀戀子規鳴過慶（音頭歌）（花園之偶唱科）孤雛冥途之行。雙鳥現世引レ生。涙濕兩袖露盈。既消古昔談評。爺併衆躍孩嬰。聽發二明悟一覺醒。」此話同是可レ悲。多田滿仲所レ爲。觀二世態夢幻移一。季男名美女兒。剃髪欲レ染二衣緇一。恚二怒於其有一差殺二戮命一。仲光二治。君命無レ所レ可レ辭。」可レ悲仲光。命也君矣。殺也君郎。究竟豚子。幸壽代命。替身任當。」親意無レ知。稚子躍嬉。擺レ手翻レ袖婆娑弄レ姿。傍觀消レ魂。弱心強持。斷既彼代。後代二規摸明鑑武士一。露塵微軀。莫レ遺二懷憾一。我亦恨無。今也絶念期也。絶念那期也乎。」

四鳴蟬出板の年迄壽門松は五十四年になり身替音頭は四十九年になる也亭々亭は岡白駒の狂號也と云り

忠臣藏與市兵衞の考

寬延元年辰假名手本忠臣藏を竹田出雲椽の作せしは元祿十五年年義士夜討の折より四十七年に當つて假名手本の世界定りし事は予が著述忠臣藏類聚大成にも演べたれ共義士のあふも又奇ならずや又前々の編にもいふ茶屋場にて丹波與作が歌には淨瑠璃丹波與作の外題にて寶永四年より四十二年に當れり姚輕が父を山崎村の百姓與市兵衞と附しは壽門松の山崎與次兵衞より思ひ附て山崎村與市兵衞と呼是作者の出雲椽が一時の戯より附たる名也其比は此役者を言ば噱一笑しつらん壽門松より三十一年後の忠臣藏なれば有べき事也扨忠臣藏の明年（寬延二巳年）出雲椽雙蝶々曲輪日記を作せしに去年山崎與市兵衞の名をつかひ與次兵衞の名を呼も何とやらおかしく思ひて扨こそ與五郎とは呼かへし物なるべし依て父の淨閑を與次兵衞とし嫁のお菊をお照とかへ難波屋與兵衞なん與平を南方十次兵衞の悴南與兵衞と呼替しなるべし雙蝶蝶の道行にも壽門松の道行の文句の通吾妻受出せし山崎與次兵衞と置て後少し文句を替たるのみ也萬石通の長吉長五郎を蝶々と呼に語路よきゆへ雛子の歌に

合せいよ〳〵春の季とはなれど壽門松にも秋の氣色をのべ菜種に蝶のあしらひ有ば春とも秋とも定がたし雙蝶々には次幕八幡村を放生會としたればますます春秋混雜して穴捜といへる番附にも是を難せり然れども近松竹田の名人達是らの論に拘はらず筆の走るにまかせ述たるこそ名狂言とて今にのこれり道理にかなふ計りにて見て面白からず一部の趣向立かねる作者の口より批判言は五十歩を以て百歩を笑ふと云べし

松本岩井乘込騷動の話

天明四辰年十一月中旬浪華道頓堀中の芝居顏見世の乘込とて迎ひ船に華を餝り贔負連中江南の藝者等御座船網船數艘に取乘大川より東堀長堀道頓堀の間にみち〳〵江戸表より登り役者松本幸四郎岩井半四郎兩人を今や〳〵と待ゐたり扨兩人は網島の料理屋觧宇方を暮前に乘いたじ大川を東堀農人橋の下へ漕來る時橋の上より聲をかけ幸四郎半四郎是へ出て目見得すべしと大勢詈りける兩人とも大阪の風儀はしらずいかゞ致してよかるべしと猶豫の内に藝者の迎ひ船より幸四郎半四郎は追附芝居にて御目見得を申上ん先夫迄は兩人の物まねをお聞せ申さんといまだ兩人の聲も聞しらぬ事なれば藝者共いろ〳〵の物眞似に紛らす内はや久寶寺橋へ來れば始の人數橋へかけ附牽頭持共此方を嘲弄する段奇怪也といふ程こそあれ兩人が乘たる船を目當として礫を打込泥沙を撒懸ること雨霰の如くなれば猶も頻に呼はりて安堂寺橋へ來れば船の舳先へ小便擔桶を打込ければこは狼藉といふ内にはや其人影も見へざりければ誰所爲共しれざれ共猶行先も氣遣はしと長堀迄の内に牽頭持の船へ幸四郎半四郎を手取早にのせ密に長堀を西横堀へ廻し御座船にはやはり兩人の居る如くに見せ道頓堀へ漕行其内も九之助橋までには溝板を落し薹の重石程の大石を投込などして一向船もやられぬ程に兩岸より大勢聲々に詈りける其内兩人の役者は何事なく西横堀より道頓堀を東へ廻り中の芝居の濱へ著て夜五つ時頃辛うじて乘込の規式を初ける往古道頓堀に名代櫓を頂戴して芝居興行せしより以來かゝる騷動ありし事を聞ずと也幸四郎半四郎兩人共此度始て上方へ來し事なれば斯迄意趣のあるべき筈はなけれ共六箇年已前江戸葺屋町市村座にて尾上菊五郎と松

本幸四郎と口論有りし事大阪迄かくれなく元來大阪に古き馴染の菊五郎を右の口論より半季餘り休座させしは全く幸四郎が所爲也と其節の間違は手代彌兵衞といふもの悪心より事起りしとはしらず幸四郎一人目廉にとられて今宵の騷動におよびしは其身の災難とやいはん其上角の芝居は菊五郎忰丑之助今年の座元にて軒並びの中の芝居へ幸四郎登り來るよしを聞より芝居方のもの幼少なる丑之助にいひ含めて彼が座元座附の口上の節中の芝居へは追附こわい伯父さまがござるとの事故夫がこわさに此芝居へ迯て參りました何卒いづれも樣の御憐愍をもつて孤の私今年は別してお取立下さりませと顔見世の口上にいひたるにより弱きを助る大阪の氣風にて扨こそ幸四郎に十分憎みの附たるなるべし

菊五郎幸四郎確執の話

安永九子年四月二十二日江戸葺屋町市村座にて狂言半に兩人より口論有此儀何故ぞと尋ぬるに去亥霜月大谷廣次尾上菊五郎松本幸四郎抔にて芝居相始し所顔見世不當りに附子の春狂言より段々損金打續きける故幸四郎仕切場手代彌兵衞といへる者に掛合所詮座拂極の通りにしては芝居相成難く給金を遣はさねば出勤も成まじ兎角極め通りを取切ずば出られずと有衆中は是非なし芝居相續の爲なれば少々にても請取ば勤んとある仁計りにて相始候へど廣次民藏抔不承知の人々を除きて四月上旬より芝居興行に附菊五郎も二十日迄に給金相渡すべき約束にて狂言は容競出入の湊の淨瑠璃狂言にて殊の外大入せしかど菊五郎へは拂もせず二十二日に相成ても何の沙汰なく始めける故平生物堅き菊五郎殊に幸四郎が其昔市川武十郎と云し時の衆道の意氣地も根にありてや今年の芝居は不當とのみ此方へ云聞せど勘定はしらず春よりの揚り金不足と計りにも見へず察する所仕切場の手代彌兵衞幸四郎一つになり是迄の損金を埋ん爲不當りと言觸すはきやつら兩人が拵事と以の外に立腹なし右の狂言五幕目黒船内の場忠右衞門に幸四郎、八木孫三郎菊五郎にて來り獄門正兵衞の前にて態と孫三郎忠右衞門に悪口をいふ狂言を幸ひとや思ひけん菊五郎膝立直し幸四郎をはつたと睨みいかに人非人の幸四郎よつくきけおのれ仕切場の彌兵衞と馴合顔見世以來相應に入たる芝居を不當りと吹聽なし役者

の給金をひづめたれ共斯いふ菊五郎其外高給の者共はたとへ今年中の給分を取ず共勤べし中分より下の小詰役者囃子方の者共は其日過も同前の事なれば妻子を始幾ばくの困窮ぞや既に以て大谷氏身共が弟子の者共迄身を退かねば世間へ立ず勤居ては世業にならずさるによつておのづと身を引やうに成たるも皆その方と彌兵衛めが所爲也夫故今日此座切にて菊五郎は出勤いたさぬ心を定めて今此席にていひ破り立歸る也返答ならば表の彌兵衛を初めとして幸四郎も一言の詞をなせいださぬ身共は妻子にも暇を告帶せし大小の内脇差は眞劔にて篤と寢た刄も合せたり返答あらば相手に成切味を振舞申んと大に聲をあらゝげ呼はり扨見物に向ひ手をつき大切の舞臺狂言の半にて私の宿意をもつて各樣の御聞も憚らず箇樣に詞を荒せしうへは最早御當地にて相勤る所存も無御座候へば乘物町に住居仕候破家も外へゆづり上方へ參る所存しかし幼少の丑之助と申悴も持たる私殊に御馴染を重ねし御當地たとへ此後死去仕候共跡々迄も悴を御贔負御取立ひとへに願奉りまするとゝ懇ろに暇をつげ舞臺を立て悠々と這入ければ舞臺はしんと澄

切て幸四郎を初め殘りの役者もしらけて見えければ見物もそは／＼と成りけるにぞ俄に氣をかへ孫三郎殿の立腹併しあの如く思はれなば憤りも道理成ども是には心得違間違のありさうな事どもゝ全く役者の我等表の勘定損德を委細に存せず何事も仕切場の彌兵衛に預置たれば明い暗いは追ての儀今あら立てあの仁と舞臺にて彼是論ずるは御見物樣へ無禮といひ大切の家業の場所サア庄兵衛此黑船に言分は有まいがなアと直に舞臺の狂言に取なせし頓智功者の仕打に役者も心附て跡の狂言首尾能く勤樂屋へ入ければ見物も思ひもよらぬ狂言半へ菊五郎が日比の欝憤あの如くいはれては幸四郎も免すまじ今日の芝居も是切にて果すべし扨々惡い日に參り合せしと力を落しゐたりけるが幸四郎が狂言に取なして舞臺を初めたる即妙に見物はしほれし花に水を灌ぎたる如くにてコイヤ幸四郎名人の仕方よく出來たりと悦びける幸四郎始め武十郎家高麗屋號先三升市川海老藏が元の名を讓り受堺町にて高麗屋とて芝居茶やいだし難波町にては松本香といふ油店を出し中々欲心非道の者ならねど手代彌兵衛幸四郎が差圖也といひしより篤實なる菊五郎

識と思ひ扨こそ確執に及たり菊五郎病氣に附休みゐる内京都より相談に來り秋の末本復して直樣上方へ發足せしなり子の春より京都に兩年勤め當を取寅の暮より大阪へ下り忠臣藏の大當り其秋非人敵討ち評判能く卯の暮迄中の芝居を勤めしに極月中旬より病氣に取合終に卯の暮黄泉の客となりたり扨又幸四郎は侫惡の手代彌兵衛には暇を遣はし其身はいよ／＼評判能く年を重ね辰の年の暮に若女形岩井半四郎同道にて大阪へ登り此災難に逢ひけれ共後には何事もなき樣に成けるなり

艶狩劔の本地艾屋の話

寳永六丑年竹田座淨瑠璃に艶狩劔本地は近松門左衛門の作にて余吾將軍惟茂信州戸隱山に紅葉狩して鬼神を退治せしを趣向とし三の切江州伊吹山の麓艾屋久作住家の段は別て珍しき趣向にて大内の侍所鷺巣の帶刀の北の方、子房若流浪して己前の家來久作の方へたよる久作舊恩を忘れ大宰の大貳諸任が惡事に組し帶刀の妻子を殺し平國の御劔を奪はんとす久作の妻夫を諫兼ね愛子萬虎を殺す久作怒つて妻を殺し終に主人の北の方と房若の手に討たるゝ場也久作後に立役とならば在來の仕組也強惡にて妻子を手に懸己も非業の死を遂る惡事報の早き事を示すが此一齣の趣向也淨瑠璃は是にてすめ共歌舞妓狂言にする時は久作敵役なりにて果せば仕手なかるべしされ共此場以前は淨瑠璃にて大にもてはやしサノヤレ／＼と伊吹艾の功能又女房の愁ひに持佛にござる如來樣つい木の切と思ふてかとの文句は誰々も一口は語し物也文化の始め近松徳叟増補して李冠（二代目嵐吉）巴丈（中村大吉）久作夫婦として舅百足百兵衛（奥山淺友也）といふ敵役を加へ久作後に立役となるに仕組たり是にて歌舞妓狂言とはなれ共舊趣向に背き唯有ふれし世話場となる故此儘にて後歌舞妓にもする事なかりし此時の李冠は能辯なる上巴丈淨瑠璃三味線を善し艾屋のつらね妙也後意見の内拔刀の久作を女房支へながら花道中程まで引摺轉び摑合ながら聲をひそめて諫むる女房の口へ手を當シイ／＼と叩り附る久作の仕打狂言を捨て眞實夫婦の情合前後に此夫婦の仕手有まじくと思ひ毎度いひ出し感ずる所也今の慶子（元濱華今堺住人）是を覺居て仕て見たきよしをいふ折節千本櫻納りし時なれば三の切に是を用ひ艾やを鮓やとし釣瓶鮓屋彌助本

名監物太郎と替へ女房をお里と呼替へ芝屋を嚙こなし腹に納め投千本櫻の鮓屋の增補を作せしなり監物太郎は知章（新中納言知盛の一子）の家來なれ共惟盛の家來とするは狂言道の常なれば論の外也其節の外題役割および三の口椎の木場を略し三の切鮓屋場の正本を爰に出す天保六未の年五月中の劇場前狂言

押てしめて驅さする早鮓の賣聲に内や床しき釣瓶の首桶
　鸚鵡返しのことの葉も情に迯る錦の直垂
靜が舞の一さしも去年の栞の道かへて　花櫓詠吉野山路　七曲
　御思賜しの昔ことに重て賜る狐皮衣
しめつゆるめつ調見る小鼓の手柏子に音や葉ひし筐の著長

釣瓶鮓屋彌助　中村芝翫
主馬小金吾　中村鶴助
若葉内侍（權太妻小よし）　山下金作
いがみの權太　淺尾與六
彌助女房於里　中村富十郎
梶原平三景時　片岡仁左衞門
彌助の子善太郎
六代御前
洲股運平
番場忠太　（以下略す）

詠吉野三齣の正本

造物三間の間二重舞臺向ふ赤壁納戸口重戸棚上手折廻りの中二階反古張の障子をはめ此取合佛檀橋懸り一間の店上おろし釣瓶鮓の看板後の方板間に鮓桶大分並べ棚にも鮓桶澤山並べ有此脇に藪垣いつもの所入口藁葺屋根舞臺前に小さき店の上に鮓の〆木葉苞竹の皮包小桶並べ入口の店先に手桶に蓼四五把漬け有よき所に彌助世話形頭に手拭を卷き傍にお里世話女房の形襷前垂にて鮓を附居る見へ淨瑠璃にて幕明

「風味も吉野下市に賣弘めたる所の名物主彌助も友稼ぎ二人りが中の子鮎鮓愛にあいもつわんはく盛り茄子はならぬあさ爪の釣瓶鮓とはこのもし丶（ト此内橋懸りより子役四五人善太郎もまじり草花龜抔を持出門口にて）（善太）皆こちへ來て遊ばぬか（子役）イヤ／＼いちへいて魚釣て遊ばふ善太も跡からおじやサア皆こい／＼「誘ひ連てぞ行過る夫婦は〆木の手を休め（彌助）先一ぷく仕らふそなたもちと休みや／＼（お里）アイ／＼善太郎又遊に出やつたか今朝の清書を爺樣になぜ見しやらぬぞいのう（善太）と丶樣是を見て下され（彌助）どれ／＼ム丶あさきゆめみし嗅見や此頃はめつきりと手が上つたさらば清書の褒美をやらふか「褒

美やらふと取出饅頭里ソレ父樣がほめてじや隨分精出して習ふのじやぞやさあ奥へいて遊びや〳〵善嬉しい〳〵獨り遊ばふ「いふも愛敬愛盛り走つて奥へ入にける里ノヽ彌助殿お前獨りは何をしても過象ぬ身を持た女房子故にさま〳〵の憂苦勞作レ去夫もマア四五年あの善太郎が十三四に成たれば持て産れた果報で何萬両儲きそうやら金といふては持たぬけれどあの子が有ばこちや金持も同前併あんまり身代に氣をもんで患らふてなぞ下さんすなへ彌ハテ扨こふなれば苦勞は互しや年より器用なア坊主めあんな子を産附たは金を産むと同じ事そなたの釣瓶が上補故おれが漬加減もよいといふもの是からは又夜なべ仕事も精にして一桶潰よふわいの里エヽひる中からそんな事たしなましやんせいなア「じやらくらまじりの女夫中さすが鮓屋の女房とて味ひ馴とをしられけり里コレじやらくらもよい加減アレ〳〵旅人衆が大勢見えるわいなア一チヅと合點と店先に進出釣瓶鮓の口上を商賣口にぞのべにける（ヽ在郷になり花道と橋懸りより旅人の仕出し拵ざりふにて大勢出るゼ先に立書てうの噂物に做え）彌凡諸國に鮓の數多しと申せど見ぬ唐土の事の鮓はたんぶれかん物我日の本では江州の鮒の鮓源五郎鮒とは申せども夏百日が其間此魚の味よき故に夏比鮒とも號けたり里沖の鷗の飛巡り長閑な海に浮上る魚を蹴爪に引かけて苔むす岩に藻を著て押て馴さすみさごすし彌竹の皮はなすやいなや咽へ飛ぶ夫は紀の國雀鮓里つかり加減の若い若狹の鹽や鯖の鮓彌味のよしあし得もいへぬ筆捨山の鮎鮓里神世の昔さばへなす神を鎮めし今井鮓彌夫は世間のこけら鮓此大和路の櫻鮓里お子樣達にはよふ馴鮓吞登鮓の酒きげん彌ドッコイおさへて鮎の鮓もひとつ呑で鳥貝の宵寝さどひを起鮓里短い夏の一夜ずしつい明易い早鮓に〆てからみし杜鮓彌甘い加減の釣瓶さあおみやげに芳野鮓あがつて風味をごろうじませ（兩人お求なされ〳〵とあしこて御座れと賣立る）旅イヤもう口上計りでも直打は有まい一桶買ひ升旅これは三包もらふぞや一離言がらに上下の旅人思ひ〳〵に鮓のあたゑ煙草吸附遠近へ行も歸るも旅路成此家の小男いがみの權太（在郷にて仕出し雙方へわかれ道入向ふより權太引返し合羽にて出數にれた包持出て）權太どふじや女夫なかも精が出るのう一ツでつと這入ればは仕事の手をとめ彌是は小男殿よふこそお出里兄樣此間は御座んせぬがどこも悪ふはないか

へ（ト煙草盆持行權太上へ通つて）ごんイヤモ悪い〳〵始よし後悪しじや彌助聞てたも上市の胴に三十貫の勝は有ても盆の上に錢はなし形に取つたは此だんびらじや（ト風呂敷より出して見せ）扱是からが下り坂三十貫目ばいを打つて十兩計りのどかおちれき樣をばらしてま一軍と思ふても早速に買手がないそこで爰へ出掛て來たのじや度々の無心で鬱陶しふは思やろふが又二三兩才覺して貰はご成まい（彌）どふでそんな事で有ふと思ふた勝ば御無沙汰負るとお見舞ハテ現銀なお人では有ぞ（里）そふでござんすこんなさもしい商賣して親子三人がかすかな身過ぎ五度七度の無心も小舅と云名が有ばこそ彌助殿の心遣ひ兄甲斐いふも程の有物お前にかゝつて私しやあの善太は飢つよふもしれませぬちつとは又妹の心も思遣つたがよいわいのごんヱヽベラ〳〵〳〵とやかましいおのれにはいはぬ彌助小舅御の頼じや聞入れて貰はふかい（彌）夫は安い事じやと申たいが先此度は出來ませぬごん不承知じやといふのか（彌）嘆灘茶抔進せませいの（里）ヱヽ捨てをかしやんせいなア（トつんとする權太彌助の傍へ膝な詰かけ）ごんわりや元京の者で此妹が主人と一つ屋敷に奉公いつの間にやらちる〳〵くつてあげくの果には腹の内に申分その事が露顯して成敗に逢所を連強ふ助かつてお暇貰ひ此下市へ來たは七年以前その砌親仁は死るゝ妹めがとこほへ廻つてどふぞ世話を頼み升るといひをる懸りやつながる縁といひ此家をから請鮓屋の取附世帶道具から米から味噌から薪迄買調て世話やいたも盜人の晝寢當てがなふて骨折ふかいコリヤ兄は親兄親樣じやぞよ養ひ料から博奕の元手つゞけたら何じや（彌）ハヽヽヽ彌助が身の上の棚おろし今の今迄とんと存升なんだごんとぼけない〳〵かう云ひ出すからは邪が非に成つても取むくつていぬるのじやぞ（里）ヱヽ佗惜てらしいその云ひ樣そふいふ邪見なおまへ故其年に成ても三日にあげず女房を仕替へ聞や前方のお内儀樣に子迄産さしやんしたじやないかいな夫も夫なりじやげな子の親に成つてもまだ其悪とふは直らぬかいなア（權）よふつべこべと理屈ばるめらふの女房がいくたり變ろが小悴が何匹出來ふが勝手でおれがする事うぬらが指圖はマア請ぬ兎角れき樣の元手が入用否でも應でも持ていぬのじやそふ思へわりや親といふ字は削られまいぞよ忝くも舅樣じやぞ「舅々と平押は居催促とぞ見へに

ける歩みほつれしわらんづや六代君はすご〳〵とお
ちよぼからげに破れ笠店先に立やすらひ蓼取上れば
善太郎ははしたなくト六代も前口まくの形りにて出でたでをとらふとする善あれと
つ様蓼を乞食が盗むぞや「いふに彌助は立上り摑ん
だ蓼を取返し彌近所には見馴ぬ子じやがほしがる物
に事かいて蓼を取て何にするのじや鹿相者では有わ
いの「ても鹿相なといひながらつく〴〵と見る形り
格好六代君は涙ぐみ六代イヤ盗はせぬ母様が暑氣のお
なやみ一足も歩行れぬとおつしやる故蓼とやらを
貰ひに來たのじやわやい「こちらへてくれと、つらわ
ぬ詞に素性あらはれし里ヲヽいとしや參宮をする子
じやこうなお袋はどこにぞや暑氣に當られたとは
氣の毒なたでがほしくばやらふぞや「いたわる妻は
佛性角を隠していがみの權太ごんヲヽ妹そうじや嘘に
も親の事といふはきどく〳〵コリヤ坊主よそふして
母親計かまだ外に連ても有か六代ヲヽ家來にはぐれて
母様獨りあの向ふの辻堂にごんスリヤ向ふの辻堂にト懐
より日暮の人相書を出して正しくこいつは御嫡の有六代彌ヤアト向り權
太ちやつと人相書をかくしてごんサア六々にしらぬ道を親子の旅人そ
れはいかい難儀であらふおれが内へ連て養生もさし

てやらふ藥ものまそヲヽか愛ひやつじやなアさあ坊
よこい〳〵「猫撫聲に立よるを彌助はわざとおし隔
彌ハテ扨店の物に手を懸て道中の小とんびめふびん
かけるも人によるコリヤ重てうせるとひどいぞよさ
あきり〳〵うせいヱヽきり〳〵とうせふてやとこぼ
へるか見せしめに是をくらへト一傍なるきせるふり
あげるごんコリヤまて彌イヤ〳〵退つしやれごんハテ扨
まてとお里と兩人してよろしく留マア〳〵まてといふならまていや
いよたけもないものを是で叩いてたまる物かコリヤ
妹そのたでちつとおれにくれ里アイ〳〵ト持て行權太六代に渡して
ごんコリヤたでをやる程にはやふ呑してやりやよふな
る迄は母親の傍に附ていて辻堂の内より外どつこへ
も行なよ「やれば六代おふへいらしくいたさこらへ
て泣た顔せまいとすれどないじやくり笠傾けてた
ち歸へるト六代向ふへはいる小男殿の挨拶で仕合なこびつちよ
めイヤ〳〵よその事じやないコリヤ善太よ箸片しす
べ一本よそのもの取てくるなよ里そふでムんす夫が
くせになると後にはいがみのトいはふとして權太を見てちやつと口を押へヲヽ
兄様お前もういなしやんせぬかいな彌イヤ〳〵折
角のむしん出來ぬといふも餘所〳〵しい捨よといひ

たいが手元にはなしマア才覺の出來る迄ゆつくりとこつちで滯留ごんイヤもふ行附次第の寢泊りは叩人のないやもめの氣さんじ彌今朝買ふて置たあぶりゑそが有ふ酒など一つしんぜましやごんすとはよかろふ拵の出來る迄どりやとろ〳〵とやり掛ふか　ト歎に成り權太向ふへ心なのこして彌助と顔見合奥へ這入る此合方　里是こちの人今の子供に氣が附ずか何ぼうよごれ破れてもどこやらに見所ある物のいひようのおふへいさ目もと口もとこれ盛樣に生寫し疑ひもない六代樣にまがひはないおいとしや惟盛樣御一門始西海の波にたゞよひ給ひ若葉の内侍樣にも御流浪との事親子御のお目にかゝり御先途を見屆るが古主への恩報じ向ふの辻堂に厶るげなわしや一走りいてよび升て來升ふ　ト立かけるを彌助思ひ入有てとめて　イヤ〳〵ありやそふでは有まい六代樣があの樣な形りをして厶ふか此下市におれのゐるといふ事をお聞被成たら始から親子御連立で尋ねて厶るはあたりまへ何ぼふ世を忍ぶお身じやとてあのなむさい形りをして厶らふかい何をきよろ〳〵いふのじやぞいの　ト奥へ聞へる樣にもみけすお里は氣のつかぬこなしにて　里サア夫もそふで厶んせうがどふやら氣にかゝつて兩あれまだいのざわ〳〵とヱ、是もふ旅人はなし日は暮るどりや店を片附ふか　里さあさあ私も手傳ひませふ「暖簾はづし看板しまひ店片附て蔀をおろし　彌此間から今だにぬけぬはやり風味にけさからせわしふて頭痛がする今夜は宵寢と出かけにや成まい　里又風をひきそへさしやんしたので厶んせう藥は嫌ひなり粥でも焚ふかへ　彌イヤ〳〵一寢入して汗をしたら直るで有ふ坊主めもいねむつてをるどりやとゝが寢さしてやりませふ女房共門口しめて用心しや「善太いだいて一間の内うん〳〵うめいて引かぶる木綿蒲團の裏表行燈に灯はともしても心は暗く氣も細く胸にあまつてとつおいつ　里いよ〳〵それに極まれば捨て置れぬお主の難儀どふ思ふても心懸りこふして居て案ぜふより辻堂迄は二三丁つい一走りそふじや〳〵　此間に一寸すべ草履はく間もせはし門の口戸をさしよせてとつかはと辻堂さしていそぎ行納戸をそつといがみの權太胸算用もしつくりと合はせて置た金のつるしてこいまかせと出ゆくを起る間早く主の彌助　ト權太刀をぼつこみ出よふとする中二階より彌助つか〳〵と出て　彌ア、是小男殿どこへ　權イヤおりやあのつい一寸　彌ハアテマアゆつくりときつしやれいのふ　ト入口びつしやり合方　權イヤ

彌助思ひ出した用があるよつて一歸りいんでこふと思ふて 彌ハテなア無心をきくまでは居ざいそくじやといふた舌の根もひかぬうちにいんでこふとはどふやら胸に一物が 權イヤ一物も二物もないが彌助此春わがみが熊野參り仕やつた時古主惟盛様に逢ふたと聞たが惟盛様の在家は貴様がよふしつてゐよふがのハテ隱しやんなしる筋が有てしつてゐる其惟盛様を始め若葉の内侍や六代御前をからめ取てなりと又は首にして成共梶原様へ持て行と一かどのほうびを下されんとの事憶なせうこは是此人相書に引合せとの事じや定めて様子は聞やつたで有ふ（ト懷より繪姿を出して見せる思入有て）彌いかにも夕べ六田からの戻り道村の衆の噺にも惟盛様初め御臺若君此三人の内を捕へなば褒美をやらふと書姿を以て嚴しい詮議とサア爰までは聞たれど此春惟盛様におめにかゝつた覺もなし又もとよりお二方の行衛は猶しれずそれに又權太殿根ほり葉ほり様子を尋ねてどふせふと思はつすやるぞ 權サアそりやあのそふじやそなたや妹の縁につながる古主の御難儀惟盛様はともかくも御臺様御親子を尋ね出し金輪奈落の底迄もお力となる心じや 彌スリヤお二方をかくもふ心か 權我身の腹と同腹中じや 彌イヤ此彌助は訴人する氣じや 權あの古主のゆかりを 彌昔はともあれ今は此通りの鮓屋商賣内侍六代二人の首を梶原殿へ送るとほうびと釣がへ金のつるに取附といふ物何とマア甘(うま)い事ではないかいの 權スリヤ訴人してほうびのかねを貰はふといふのか 彌名を取ふより德をとれと遠い忠義を立ふより目の前のかねもふけがマア當世で有ふかい 權ふ、是も尤時におりや件の用を 彌こなたの用とは出口の辻堂 權ヤア 彌獨ほうびをせしめにとは手の悪い小舅どの底意をわつて談合さつしやれ 權ハ、、、イヤその氣なら落附た最前のちつさを憶に六代とにらんだ故 彌サア此彌助が此下市村にゐるといふ事家來の内がしらしたら尋ねて見へるは定の物貰乘と見せて此家にかくまひ寢込のゆだんを一討 權道ではぐれた家來とやらが尋ねてうせたらおれが加勢 彌その場のしざは氣轉と駈引 權しゆびよふいたら 彌ほうびは梨子割 權さいさきいはふて 彌奥で一獻 權馳走にあはふか 彌小舅殿 權聟殿（ト又出よふとするを突廻して）彌案内しませふ 權ても時代なやつの 兩人ハ、、、、一善か悪かを一道に胸のかけごやれ畢伴

ひてこそ彌サアいかつしやりませ「入にける神ならぬ佛ならねばそれぞともしらぬ夜道を內侍六代古主の恩を忘れじと女房が案內に打つれ立いそいできたる藁屋の軒ト向ふよりお里六代をおひ風呂敷包を持內侍口まくに著かへしなりにていで里やれ〳〵お久しや御臺樣則あれが私が住居さあお越遊ばしませ「まあ〳〵內へと正座に伴ひ里マヽ何から申升ふやられ〳〵お久しやお聞及びもムり升ふ噐物太郎が只今の名は釣瓶ずしやい彌助と申て見苦しふはムり升れどまあ〳〵御ゆるりと被成ませ「いふに內侍は落附給ひ內侍むかし忘れぬそなたの深切忘れは置ぬ嬉しいぞや里是は〳〵御勿體ない今宵は取わけあなたの事思ひくらしてをりましたがよふマアお二方共御そくさいでふしぎのおめもじさり乍ら此所に居ります事何者にお聞被成殊にはる〴〵旅の姿見れば外にお供もなくかちやはだしの此お姿は心得ず「お聞せあれとありければ內侍は涙の御聲くもり內成程ふしんに思やるは尤我夫惟盛樣に都でおわかれ申してよりすまや八島の軍を案じ御一門殘らず討死遊ばしたと聞かなしさも嵯峨の奥「泣てばつかり過つる夕方風の便りに聞たれば高野とやらにおはすよし幸ひそなたらも尋ねたし小金吾をめしつれて此大和路へ、心ざす途中に於て追手に出合ひ小金吾も見うしなひ難儀の所茶店の亭主が情にて二人を賤い姿にかへよふ〳〵その場をのがれしがそなたに逢ふたは盡せぬ緣自らはともかくも此六代が行衞をたのむはそなた衆夫婦かならず見すてゝたもるなや「身のうき時の人賴み恥かしさよと計りにて涙にくれておはします里おいとしや最前も若君樣と存ませず慮外いたした勿體なさそふでも有ふか昔にかはるそのお姿いかに時代なればとて三位中將惟盛樣の御臺若君樣とかしづかれ給ふお身でおり乍ら召しも習はぬ賤の小袖此あり樣はと取附てむせび歎けば若葉の君ひとへに手をあて袖をあて伏しづみてぞおはしますお里はなみだ打拂らひ里アヽ私とした事が色々の事を申出しおゆるし被成て下さりませしたがかうお供いたし歸りますからは來しかたの御厚恩夫彌助もいひがひなき土民にて暮せども昔に變らぬ男氣夫婦が命擲出ましてもお世に立いで置ませふかお館を出ました時身に持た子も成人いたし六代樣のよい御伽お世にお立被成れたら御家來にして下さりませおとなし樣におめ

がかたい何もほしふはムり升ぬか「毒ねに六代おと
なしく六イヤ〳〵何もほしふはない母様あんばいは
たふムり升か内さいのふお里に逢ふたで氣も落附賴
の惱も忘れました彌助はどこにぞ逢ふて何かゝ賴み
とふムるわいの里ハイ〳〵早速出られ升で御挨拶を
いたす筈折あしふ風の心地したが一寸お目見へを致
させ升ふ「いひつゝ立て一間の内のぞけば善太の寢
入し儘夫の影の見へざれば里めんよふなどこへいか
しやんしたぞヱ、聞へた頭痛を直そふと藥の手煎じ
時も時とて何ぞいな「辛氣な事やとたつ汐に出ばな
ひとつと茶をくんで勝手へ出れば若葉内侍内彌助が
病氣とは嘸そもじの氣扱ひ高いも低いも女の習ひ夫
子の上には我身にもかへて心を痛めるぞや世が世な
らそなた衆にうき身のさがを賴まるゝこそ道ならめ
かへつて賴む身と成しを「あはれと思ふてたもいの
とさめ〴〵とこそ泣給ふ里ア、冥加ない事おつしや
りませどの樣に致ましても御恩はなか〳〵歸されま
せぬ何を申も爰は端近人目にたゝぬあの二階つゞき
の奥座敷へお供いたしませふ次の間は私共のふしど
御用があらばお呼被成ませヲ、此包は慥にお著がへ

夜風があたらばお身の毒さあ上へ引はつてムりま
せトふろしきより着衣裳を出して兩人に引はらせさあ〳〵奥へムつて御草臥
休めにおやすみ遊ばせ内そんならお里六代おじや
里どれ御案内申升ふ「恥ぬ心の奥底を明て芳野の山
颪落くる軒の月ふけて六代君はふら〳〵と居ねむ
りこけしあぢなき若葉の内侍も旅勞れ暫寢入の袖
枕前後もしらずふし給ふお里はあたふた押入より
夜具持運び我身は常の間に出てト中二階の上手へ連て這入りふとん枕を運び
善太郎の傍へいて里ア、時代とてすき間の風もおいとひ有し
においとしやなア「夜寒を何と洗濯物我子の裾へも
打きせて里此彌助殿はどこへいてぞどりやちよつと
しらせて來ませふか「納戸の内へぞ入にける旣に燈
し火半點じて三更ともなふ鐘の聲ト本つりがね「深夜の雲に
埋もれて四方の人音靜つたる彌助はそつと納戸を
出そろり〳〵と邊りを見廻し奥を窺ひさし足に鼻息
窺ふ胡椒の粉藥研鍔の二尺一寸するりと拔て手鋪の
水音な聞へぞ軒端もる月には凄き砥石のひゞき秋
の調子もさつばつたる胸はするどき三惡道上る計
りにとぎすましさあしてやつたと獨りゑみ奥をさし
て入る所を向ふに立て女房お里里まつたこりやどこ

へゆかしやんす彌コリヤ姦しいおどぼね立な里イヤ〳〵やらぬお二方のお越の樣子彌ヲヽ納戸から聞てゐたそこはなせ里イヽヤはなさぬ彌ヱヽ面どふな「とゞむる女房突のけ〳〵ふつても引ても放さばこそ片足飛に家の内を引摺廻れば附て廻り戸棚の隅にどふと引すへ里是此拔身は何じや是彌助殿ト思はず高聲にていふ彌助口に手をあてだまれとあせるこなしお里もひそめいて熱にをかされ物に狂ふ體でもないがお主樣の臥戶をめがけ誰を切る刀じやぞいなア彌ヤイ〳〵だまれ大事の思案が後手になる物數いふな里イヤだまつてはゐますまいヱヽマアこなた樣はのふト下へ突すへる粘入の合方になる情なやいつの間に魂が入かはつたぞマア有ふ事か大事の〳〵お主樣の御厚恩七年はまだきのふけふ二人が不義の忍び逢ひあの善太郎がおなかにやどり身は重ふなるといひお主の法度を背くといひ子はおろそふか流そふかと途方にくれて旣に死ふといひ合した事よもはや忘れはさんすまいあの内侍樣のお情でお袖の下よりおかねをいたゞき夫婦づれでお家を走り程なふあの子をよろこんで三人が命永らへたは誰か影じやとおもはしやんすわたしやけふ迄お主の方へ足をむけてもえ寢ぬわいの互に性根を見屆ていひかはした樣にもない眞(ほん)に〳〵世に落ぶれては心迄その樣に成る物か女房子可愛が定ならば分別しかへて下さんせいなア是彌助殿「夫の膝にもたれふし聲を立じと我袖を口にくはへてしめ泣にかこち口說ぞ不便なる彌ハテ拗とゞまる思案があるにもせよ留らぬも又思案がある何を女の小ざし出たうぬらに智惠をからふかい邪魔さらすな里よい〳〵そつちの分別がきはまればいつそ思案をきはめてヲヽそうじや「傍なる庖丁おつとつて一間の内に走り入る我子の善太引起し心もとにさしあてれば彌ヤイ〳〵どふ氣違ひめ恨があらば口でぬかせ科もない忰をどうするのじや「堪忍せぬとねめ附る女房淚にせきくれて里是いなア科ない物は殺さぬとは邪見なお前の心でもよふマアしつてゐやしやんすなア我子を大事と思ふほど他の子は猶大事殊に御恩あるお主と若ぎみ殺してそもやその報ひが我子にあたらいで何とせふ此子の行すへお主のばちういつらい報ひを見せふより一思ひに殺すは皆おまへの惡心からお主と我子を右左りの兩手で殺すも同じ事是庖丁やと思ふてかおまへの心の劔じやわいなアさあ

六代樣から殺すのか 彌ムヽサそれは 里此子から殺そふか 彌コリヤまて 人兩サア〳〵〳〵 里生としいける身の上に命を大事とおしめばこそあついやいとも堪忍するいたいとしりつゝ針もするよふわきまへたこな樣に惡鬼惡魔が入かはつたか地獄の迎ひがゆかしいか淺間しい心になせ成下つて下さんしたぞいなア「むごい悲しい心中と聲を立ねば眼でうらみ恨は夫思ふは主人なげき一つを二筋にこぼす涙は組糸をたぐり出すが如く也彌助は始終とつおいつ見まはすうしろの納戸より手管のいかにと窺ふ權太せくまい早いと目まぜと仕方顏でうなづきひつこゐばなつとく顏を打うなづき 彌ヲヽそふじや〳〵誤つた〳〵お主は根本こちとらは枝葉根さへ枯ねば枝葉はたつお主がもとゝいふ事をしつてゐながら欲の道に迷ふたは此善太郎がふびんなからしたが女房共今の意見でよふ合點がいた天道は恐しいすつての事に惡魔にさそはれ、生不忠の名を殘す所今の意見で眞人間かならぬ疑ふてたもんなや 里何といはしやんするそんなら心をイヤ〳〵〳〵あんまり急な折よふ眞實の發起と思はれぬ 彌ハテ扨疑ひ深い木石ならぬ此彌助てきめんの道理を聞て得心せいでよい物か惡事の病を助かつたはそなたの配劑女房とは思はぬ忝い是じや〳〵「手合せすれば嬉しさの猶も涙に咽びしが 里夫でこそ私しも落附たかんまへて其心を違へてばし下さんすなへ 彌何の違はふかういふからは變せぬ魂此春熊野參りに惟盛樣のお目に掛り戻つてから御主人達の御先途を見屆るには少しのたくわへもなければとつめに火を灯す樣にして喰ためた三貫目の金是見てたも「佛檀の抽出しより取出すは財布の金女房の手に渡し 彌此かねは路銀にして一まづ高雄へお見送り申す思案お兩方の駕籠二挺今夜からやとふてをこふそなたも休んで七つに出立の用意しや 里それは太儀でムんすなアしかし此比は用心も惡いそふな幸ひかねは此店の鮓桶へ入て置たらかへつて人の氣が附まい下すしおけへ入もとの所に直し是早ふ戻つて下さんせへ 彌そりやがつてんじやどりやいてこふ「門の戸明て出かゝりしが 彌ホウよつ程ふけた幸ひの犬おどし女房共その刀おこしや 里アイ〳〵したが刀はいるまいがな 彌ヱヽ夜道をあるくに不用心なわい 里さあ〳〵そんなら持てゆかしやんせ 彌家內に氣を附いよ一刀おつと

り腰にぼつこみ心の一物お里は見送る門の口權太郎は納戶より先へ廻つて椽の下くつしやりいはすが近道とさし當つたる思案の銹ぎは（ト彌助花道中程お里は門口に見送る權太納戶より出て中二階の椽の下を切やぶるお里は門を入る彌助そろ〳〵戻り藪垣を切やぶる床のめりやす）「權太郎は簀の子の下彌助は門の藪垣を破るも忍ぶも一時の身をひそめてぞ（トサクリに成り兩人兩方にて見へ忍込む）「忍びいるとはしらずして女房はごそつく音と人影を見るよりぞつと身もふるはれ（トお里始終心得ぬこなしにて入口を明て詠め入口なしいかとしあて下屋を窺ひ）里そんなら今のは僞りであつたか出てゆくふりでゆだんさせ簀の子の下からさし殺そふといふ工み事「ても扨も恐ろしや情なや 里あゝいふ邪見な惡人に永の年月連そふたは此身の業か「たゞしは何ぞの報ひかや 里此上は內侍樣へおしらせ申お供するより外はないヲヽそふじや「ゆかんとせしがイヤ〳〵假にも夫と名のつた人そもつみに落されふかいふが誠かいはぬが道か 里こりやマアどふせふ〳〵ぞいなア「立たり居たり氣も亂れやる方もなき我身やと思ひなやみて居たりしがかくては果じと女房は思ひ定めて我子の善太寢さしながらにいだきしめ千年も萬年もと祝ふたも定る業は是非もなし若君のお身がはりに命は母にたもいのう 里我手で我子を殺したかとてゝ御の心もひるがへり御主人樣への御奉公未來ではのゝ樣にほめらるゝ身の果報じやわいのふ「譽らるゝぞと身をそへてせぐりあげて歎きしがおこそなはつては詮なしとそつと立てさし足に疊も薄き竹簀の子下へしらせじ聞せじと火炎の淵の薄氷ふむかと計りわな〳〵〳〵（ト床のめりやすお里善太郎を抱乍ら中二階へ上りかゝるチヨン〳〵にて上手より中二階を段々下手へ引出す此屋體三間を二間に仕きり中に柱有上手はすきや障子をはめ石摺襖二階座敷の心此まん中に上り段有上手藪垣下手は緣子のにて兩方共に有べし）「ふるふ足もとおししづめ下家へ心奥の間の隔の障子引明れば音に驚き起たつ內侍おさへながらに有合ふ小袖あんどにかぶせてこふ〳〵と呵き〳〵次の間へ二人りを寢させその跡へ入かはるとも白川夜船時分はよしと下家の二人り氷の刄拔放し一度にぐつと突立れば雙方ワツと聲をたてつらぬかれたる內侍と善太胸板かけて突通されうんと計りにそりかへればサアしてやつたと下家の二人り雙方一度に駈上りお里がさし出す行燈の明り三人一度に顏見合せ 彌ヤアそちや權太か 權ヨウわりや彌助か 里お前へ兄樣こちの人（と雙方われしがいな故めて）權こりや〳〵是善太め 彌こりや〳〵是內侍 三人ヤア〳〵〳〵（と思ひ〳〵に惘りして）彌どれ（ト彌助は上手へ權太は下手へ入れかわるなお里支

へろ突たほされて お里は六代を抱取る 彌悴善太は相果たか 權ヲ、內侍め
は此通り トポンときろ首前へ とぶ彌助悔りして 彌此上は主人の敵 權何をこ
しやくな トヽ兩人飛下り切むすぶお里が中へ這入り るバタ〳〵にてあろき走り出て花道際にて さ、へア、是
々今爰へ梶原樣がお見へ被成る內を綺麗にして置
つしやれや トいひ捨て元へ這入る 三人乍ら悔りして 彌何梶原が此所へ
「聞て驚く三人が心のたるみ一もつの彌助は一間
へ駈り行いがみの權太はしたり顏 權へ、內侍をばら
したは彌助が科ちつぺいぬを殺さしたはうぬがちよ
こ才此上は內侍の首諸共肉附の六代を梶原へ手渡し
てほうびの金にするのじやこつちへわたせ 里イ、ヤ
ならぬ今の今まで夫を疑ひおまへの惡事の罠にのつ
たりよふマア內侍樣始め我子の善太をむごらしふ
殺しやつたの 權ヱ、邪魔さらさずとこつちへわたせ
里イ、ヤわたさぬ 權ヱ、めんどふな「跳り上つて六
代が首筋取て引摑むイヤ渡さぬと取つくお里雙方互
につかみあひ トチョン〳〵にて もとの道具になる 「又よるおさとのひばら
をあて ト跡ありやすにて內侍の首の入物がないゆ へすしおけを取てえに六代をひんだかへて 「尻ひつか
らげ駈出せしが ト小脇りしてすし桶を 持六代を背中におふて 權是忘れては叶
はぬわへ「飛がごとくにかけり行跡によう〳〵氣の
つくお里 里ヤア〳〵扨は六代樣を追附て取かへそふ

ヲ、そうじや「帶引しめてかけ出す向ふへ ト內侍の持し懷劍を腰 にさし向ふへ行 軍兵大せい ホ、イ〳〵「矢筈の挑灯梶原平三景時
家來數多に十手もたせ道をふさいでおつとり廻し
ト向ふより高挑灯一つい次に運平忠太陣立次に梶原平三陣羽織次に 權太やはり六代を背中におひすし桶を持跡より軍兵大ぜい挑灯十手 をもち附出るお里はさいへる運平忠太と入 かはり梶原の前へ行く此時きつと留つて 梶原ヤア科人めうぬ
何國へゆく梶原がかく下知をなすからは迯るとて迯
そふか 軍みな〳〵すさりおらふぞ「追取まかれてハツと
とむねさきも氣づかひ爰ものがれず七轉八倒心は早
がね時に時つく如く也 梶ヤアこいつ橫道ものおのれ
古主のよしみありとて惟盛をかくまい置事所の者よ
り訴へしゆへ是なるいがみの權太とやらんに申附詮
議なす所今日又候や內侍六代來りしと聞兩人の者は
あの通り此上は惟盛を何方にかくまひあるぞ眞直に
白狀せよど〻どふじや「せめ附られて覺期の前 里な
る程御推量の上は是非に及ばぬ內侍六代樣はかくま
い升たれど惟盛樣はかくもふた覺はムり升ぬ 權ア、
コリヤ〳〵妹あらごふな氣て梶原樣の仰を受何も角
も嗅出したてあるマア夫よりはさしあたつて內侍六
代一人は首打一人りは生捕唯今お渡し申升うマアあ
れへお通り被成升ふ「お里を前後に引はさみしづし

づ通り座につけば 運平ヤア此場に主の居らぬはくせ者
忠太 者共彌助めを是へ引出せ 軍兵ハア、「ハツと計りに
家來共納戸の内へかけ入たり 里チエ、こな樣は〱
よふマア六代樣をとりこにし大事の〱内侍樣を手
にかけやつたの 權ヲ、首討たらどふする殺し手は彌
助の馬鹿者苦痛をさゝぬはおれがお慈悲じやコリヤ
そればかりじやない大事がる六代めも今めの前で此
通りじや「腰にさいたるだんびらをぬくより早く六
代が細首てうと討はたせば トイエイ 里ヤア六代樣を
軍兵ハツ殘らず家さがしいたせ共 軍兵あるじ彌助は相見
へませぬ 梶ム、すりや風を喰ふて逃げうせしとなハ
テなア「思案のまなじりいがみの權太はいかめしく
二つの首をさし出し 權モウシお聞なされませ是にを
る女子は私が妹めイヤハヤ小癪な忠義立妹聟の彌助
めとの中に出來た小悴を身代りに立ふと思ひ我子を
殺させ跡での後悔内侍はもとより六代首にしてさし
上升からは御ほうびは贔負ぶりにずつしりとヘイ
〱〱仰附られ下さりませ 梶ム、二人の首實撿せ
ん 權見ぬ商ひは出來ませぬいざ御らん下さりませ
忠太運平 それもい共おかしをもて 軍みな〱 ハア、、、

「ハツとてんでにさし出すたいまつ景時は故實をた
ゞし鮓桶の蓋取のくれば傍にお里は詮方涙權太はひ
とりしたり顏梶原は二人が首ためつすがめつ打詠め
首桶に取納め ト運平忠太首桶にうつす ヲ、内侍六代の首級相違
ない實撿すんだハテ小氣味の能い討とつたなアいが
みの權太とは惡者とは承はつたがなか〱お上へ對
して大忠義者此功によつて惟盛が詮議もその方に申
附るぞ 權ヘエスリヤ惟盛が詮議もあの私に 梶いかに
も鎌倉殿への奉公序で夢野の鹿で思はずも女鹿子鹿
の手に入たもそちが働き 權イヤもふそふいふ筋の御
用なら隨分やらかして見ませふがマア私への御ほう
びが來そふな物もしそれもかならずあいら夫婦が命
を助けてやらふ抔といふやつは一向不承知定めてお
金を澤山に下され升ふな 梶イヤほうびの金子は惟盛
が首見屆けし上の事當座のほうびは何をがなム、そ
れその著がへを是へもて 軍皆ハツ「ハツとこたへてめ
しがへの羽織わたせばぶつちやうづら 權何の事じや
當座のほうびといふは此紬のない羽おりかな 梶コリ
〱何の事じやその陣羽織は忝くも賴朝公のお召が
へ某が拜領の品 運平其陣羽おりを持參せば御ほうびの

金子と釣がへ大忠てゝ、たく〳〵の合紋なれば随分大切にいたせ權成程銀札替りの此手形こいつはくらが出來ぬわへ梶コリヤ權太郎彌助夫婦は汝に預ける惟盛が首受取までは出口〳〵は遠卷の致しあれば心を附よ權首尾よふ惟盛の首討てあなたの陣所へもつていたら梶かこみをひらかせほうびをくれう權そりや有難いお氣づかひ被成升な權太が引受たらびんぼゆるぎもさす事じやごんせぬ梶ハテ拗けなげな男めじやわへ忠運いざ御主人樣梶者共參れ軍皆々ハア、「ほめそやしてぞ梶原平三家來引つれ立歸る、忠太うん平首桶二つをもち梶原家來皆々這入權ヲイ〳〵追附吉左右しらすぞやその替りに褒美をずつしり必ず忘れまいぞやさあ是からは惟盛めの一詮議よもや内にはとめてはあるまい彌助めを引とらへて白狀さそふぞふじや「駈入る權太がだんびらぬき取憎さも憎しとひんだかへぐつと突こむ恨の刄うんとのつけに反かへればお里は無念の聲ふるはし里ヱ、情ないおまへの樣な惡人が又と世界に有ふかいなアよふも〳〵善太郎をむだ死させ六代君の首討て渡さんしたないはふよふない大悪人もふ〳〵腹が立て〳〵此胸がはりさける樣なわいのたつたひとりの兄樣を殺すといふはあつぱれな因果者によふして下さんしたのふ「ぬき身の柄の碎くる計り握りゐぐり乍らも心に泪ゆるむ所をはねのけ蹴のけた打廻れば納戸より彌助は二人が中にわけ入りト彌助腹帶にて刀を提ずつと出て彌ヤレ出かした女房善太を始若君の敵は此權太めうぬ思ひしつたか獄卒めさりながら内侍樣を手に掛しは此彌助その言譯はまつ此通り「肌くつろげばこはいかに腹十文字に切りあばきひつしと定めしあり樣を見るに悲しき夫の最期こは何ゆへと駈よつて里チヱ、情ないこちの人かはいひ我子を死なしたもおまへを善心にしたいばかりお身替りにもたつ事かむだ事となつた上おまへにわかれてどふならふ是といふも皆兄樣の心から思へば〳〵ヱヽこんな樣はのふ「夫にかこち兄にいひ恨の泪一時にたくし掛てぞ泣居たる彌助無念の聲ふるはし彌ヤアなげ〳〵な女房内侍樣を手にかけ六代樣は殺されて何面目に生永らへん切腹するが身の言譯かつはお二方への是追腹里スリヤ惡心じやと疑ふたもやつぱり善心で有たかいなア彌ヲヽ、此場になつて言譯は逆ら詮なき事なれど高野にムる惟盛公又冥途にムるお二方魂魄此土にム

るならば監物太郎が身の因果申わけの一通りコリヤ權太郎序でにうぬも承りをらふ「溜息ついてどつかと座し彌當春熊野浦にて惟盛樣にお出合ひ申父御小松の重盛公の御遺言までくはしふ承しゆへなく／＼高野の麓までお見送り申上お行衛しれぬお二方を尋出し惟盛公の仰も傳へおちからにもならんずと心を配るその內にはからずも夕べ六田からの戻り道不思議に手に入る御二方の繪姿南無三寶と心の當惑もし此所へ御座あらばさしあたつての身替りには女房悴の首を討恐れ乍ら我面體惟盛公に似たるゆへ御身がはりと日外よりいつわり月代を剃ぬもまさかの身のかくまひ然るに最前此所へ六代樣がお越し被成れ扨はと胸にさつし乍ら傍にはめしろと思ひしゆへ悟られまじと邪見なあしらひ又女房は忠義一圖お供して歸りしもしつて居ながらお目見へのならぬ仔細は此惡もの梶原が犬となり入こみし事しつたるゆへいつそこいつを手に掛ふか妻子を先へ殺そふかと心はちゞに亂れ燒とゞを主人へ敵とふと思ひ違ひし女房の意見は身ぶしにこたへ此惡者に氣をかへて出てゆくふりで我內へ忍んで下家に窺ひゐたはなま中顏を見合せてはもしや未練もおこらうかと思ひ濟したひとかたな女房ならぬ內侍樣間違ひ事とはいひ乍ら妻子を討んとあやまつて主を殺したそのばちはたちまち報ふ悴が犬死「淚はら／＼善太郎があへなき死骸をいだきあげ彌六つや七つで死る子は賽の河原で迷ふときくコリヤそち計りやりはせぬてゝも一所にゆくわいやい「お主の爲親の爲刄にかゝつて死ましたと地藏樣へことわつて彌六代樣のお供申未來の呵責を逃れてくれ「かはいの物やといだきしめ身も浮計りなげくにぞ女房あるにもあられぬ思ひ里ヲヽ扨はそふいふ心でムんしたかいなア女の淺い心からあんまりお前を疑ひ過し恨んだり恥しめたりしたが恥かしいそふしたお前の心じやと夢にもしつたら自害してお身替りに立ふものきれいにそだつた此善太郎六代樣のお役に立ふが雲井に近き內侍樣のお身替りに鮓屋の女房がなられふかと思ひ詰てゐた故に死をくれたは此身の誤り是了簡して下さんせ事のおこりは此惡者殿チヱヽ情ない兄弟を持た事でムんすなア「身をふるはして縋附き泣くどく／＼こそ道理なり彌助は內侍の死骸にむかひ彌モウシ內侍樣六代樣御ゆるさ

れて下さりませ委しい事は冥途にておめにかゝつて
申譯是に附ても權太郎ゐ惡には報ひのある物と思ひ
しつたかチヱ、己はなア「苦しみながらにじりより
手負のたぶさ引摑み恨のこぶしのしびるゝ計りたゝ
きつふみつさいなむればいがみにいがみし權太郎く
るしき息をほつとつき權是彌助妹なげくまい善太が
死だもむだ死ではないあいつが死だ計りで彌助が忠
義もたつといふ物彌ヤ、なんと權合點が行まいくは
しいわけをいひとふてもくるしいマア氣をしづめて
聞てくれ里ヱ、よい口な事いはしやんすなお二方を
討て渡し善太が死だも夫の最期も皆こな樣からおこ
つた事權イヤ氣遣ひせまい二人共にこふ計りではわ
からぬはづマアお二方にあはそふ程にくはしふわけ
を聞て下され「袖より出す一文笛吹立れば折よしと
六代君内侍は賤の姿と成り小金吾つれて駈より給ひ
ト内侍六代小金吾出て　内彌助夫婦の此ありさまは彌ヤアあなた
はお二方里ほんに御無事でおかはりないか小金吾彌助
殿權太殿此體は皆コリヤどふじや「一度に興をぞさ
ましける權太は苦しきこわねにて權サ、恂りは尤高
で今迄夫婦にいはね共おれが親仁彌左衞門といふわ

ろは船のり商賣前方平家世ざかりの時分に唐土いは
ふ山の祠堂金を預つた重船頭おんどの瀨戸で船を乘
かへ三千兩の黃金を分取にした事顯れ縛首にもなる
所を重盛樣のお情で命助り此大和路へ來ての百姓業
平家の恩をかならず忘れなとくれ〴〵との遺言其恩
を思ひくらす内忠者と聞傳へ梶原よりの此繪姿わざ
はひも三年と最前たでを取た子供の顏人相書の六代
君シヤア御恩がへしは此時とお二方の事相談かけて
も常が常ゆへ彌助がおれを疑ふて誠をあかさず誰ぞ
頃合な身替りと思ひ當つたはおれが女房子こいつを
てうど替玉にといのふとすれば彌助がいなさずせふ
事なしに裏から廻つて女房に相談したれば女房めが
いひをるには親御の遺言二つには妹御のお主の事也
何うろたへる事があるわしと此子を是かふといひを
るし悴めも嚊と一所になら死る程にそのかはりにち
いさい石塔を立て下されといひかへたその時に始て
淚がこぼれやんした南むあみだ佛と悴とかゝ最前夫
婦が喧嘩の内裏から廻つて入かへ置き著物をきせか
へうま〳〵とそつちの身代りひねにして見せたゆへ
かぢ原程の侍がまうけに受てほうびは賴朝が著替の

羽織是お二人りと見せたのは喰やくはずにくらさした女房悴でごんすわいのう死をくれた悴をば梶原のめのまへで首ちよち切たその時はいかな鬼でも化物でもこたへられた物じやない彌助とをれは覺期の前髪さん何にもしらぬ子供ら二人り一番ほめてやつて下さり升いのふ「いふも苦しきひつ死のあり樣内侍は涙にくれ給ひ内最前お里が案内にて此一間にやすみし所夫なる權太が計らひにて討手のきたる事もあらんと裏より親子の衆を呼入我にかはりし此場の危難助かつたるも權太郎が情小金吾とはしらずして菜はきのふお二方を見失ひ夜道といひ勝手はしらず尋ね〳〵て來て見れば今宵につゞまる御身の御危難權太殿の妻子を手にかけ彌助殿親子の最期もいひ合さねど忠義の割符しつくり合たる此場のしぎ内感じても猶餘りありさはさり乍ら權太が最期三人五人の命を捨しも自ら親子より起りし事不便の最期を見る事よのふ「もつたいなくも御涙きくにお里はむせかへり兄と夫にすがりつき里けふはいかなる悪日ぞやついにあはねど兄嫁と甥子の身がはり誠に御臺若君を討たとぬしの思ひ詰あへない最期現在兄を手に掛しも

忠義ゆへとはいひ乍ら此身一つにうき事を見よとの事か胴欲な「神も佛もない世かとなげく泪は芳野川水かさ増るごとく也彌助は苦るしき顔をあげ彌女房の歎きさる事なれど三人五人が一時にかくなり果るも平家の怨敵右大將頼朝がなせる業「よろぼひよつて以前の羽織取りよせ引よせ彌此陣羽織は頼朝が著替ときく晋の豫讓がためしをひき御一門の恨をはらさん思ひしれ「切裂すてんと引ひろげば裏にあやしき對句の和歌彌ム、合點ゆかざる此文字は「きくに内侍は御覽じ給ひ内ハテふしぎや裏にあるは模樣ならで和歌の下の句内やゆかしき内ぞゆかしきと二つ並べて書たる樣子ぞあらんそれ小金吾「仰にハッと武里は羽織取上げ小首を傾け小雲の上はありし昔に替らねど見し玉垂の内ぞゆかしきとこりや是小野の小町が詠歌人もしつたる此下の句物々しく二つ並べて書たるは「仔細ぞあらんとふくろびより探出せしけさ衣小こりや是三衣珠數まで添て入置しは「こは〳〵いかにとあきれる人々内侍はつく〴〵御らんじ給ひ内ホ、ウさもあらんその昔小松重盛樣の計らひにて池殿と心を合され死罪に極まる頼朝を助命さし

たる恩報じ我夫始め我々に出家とげよとの謎ならん小あふむ返しの恩報じ見し玉垂の内よりもゆかしきは頼朝の志内是とても皆重盛様のお影仇に思ふな是六代「互ひに貌を見合していたゞき給ふぞ道理なる手負の権太ははいよりすりより権ア、及ばぬ智惠で梶原をまんまと一ぱいやつたと思へばあつちが何もよふがつてん「果は此身をかたらるゝ種としらざる淺猿しやと悔に近き終り際権此上は御二方を落すが肝要是彌助梶原が圍みをひらかす思案があるか彌ホヽ夫ゆへにこそ我切腹勿體ないが面體の似たを幸ひ此身の言譯お役にたつは今はの本懐コリャ此彌助が首を持て梶原の手に渡し此家の圍みを開かしてお二方を高雄にムる文覺殿へお供申せ又小金吾殿には御苦勞ながら某が介錯して高野にムる惟盛卿へ此場の様子傳へてたべ頼むは此事サヽ早ふ〳〵「早ふ〳〵と夫の詞きく悲しさに女房は自害と見ゆればおしとゞめ彌ヤア聞わけない女房共此家のかこみをひらかねば兄や夫の忠義も無になりお主大事を忘れたか里夫じやといふて是がマア権兄や夫の最期せめてそなたは生殘り未來の供養たのむぞや「心得たるかと兄夫せひなく〳〵も女房はハッと心を取直し里唯此上は御さしづにもれじ迷はじ泣もせまい「傍へに置し鮓桶の中にこめたる三貫目里此たくはへを路用とし是より直にお二方のお供して高雄へ行お身納り見屆ませふ小ホヽウ我も二人の介錯すまば是より直に高野へおもむき惟盛卿のお目にかゝりくはしく演説仕らん里首尾よふ御先途見屆たらやがて此身も死出三途蓮の臺に待てたゞ「盡ぬ名殘を得もいはで杖よ小笠よ取々に出てゆく旅と死出の旅小思へば生者有爲轉變内せめて未來は成佛得脱「ともに合掌唱名の聲も八聲の鷄の音や権夜明もちかし彌何れもはやふ「いざとすゝめて権太と彌助刀きりゝと引廻す哀別離苦を今爰に高野高雄とひきわかれ内類ひまれなる忠臣忠士小美名はよしやよしの路に里殘るは此身下市の一惟盛彌助といふは鮓屋今にその名を権死出の道連彌サヽ介錯「両人首さしのべ合掌する小金吾刀を持後へたつお里ハ[illegible]といて二人の貌を見上る内侍六代も愁ひのこなし「殘しけるト段切幕ト幕の内にてヱイとかけ打女二人ワッとなく

西澤文庫脚色餘録二編上の巻終

西澤文庫脚色餘錄二編中の卷

目次

西澤文庫 脚色餘錄二編中の巻

西澤綺語堂李叟著

歌舞妓事始の拔書

劇場七書の內歌舞妓事始五巻は寶暦十二年出板して板元は皇都八文字舍作者は爲永一蝶なり此一蝶の師千蝶と云は爲永太郎兵衞とて豐竹座淨瑠璃の作者にて數十番の作を遺す所謂武烈天皇艤、本朝班女扇、播州皿屋敷、百合稚高麗軍記、鎌倉大系圖、風俗太平記、久米仙人吉野櫻、潤色江戸紫、柿本記僧正旭車、詩近江八景、浦島太郎倭物語等なり元文寛保延享中の作者にて弟子一蝶は歌舞妓に委しく室町殿以降芝居の來歴矢倉の免許名代、芝居主操機關の名代古今役者の名寄は寛永より寶暦迄苗字を呼ばず名計呼ぶ古役者までを集め附錄作者道の一二話を記す傳奇作書脚色餘錄に因あれば爰に擧る

古人小歌の作者附

富士太皷歌占(榊山小四郎作)山姥所作、仇浪(澤野九郎兵衞作)安藝宮島(山田兵助作)雛子、戀すてふ草盡(島野勘七 若村藤四郎 兩人作)烏の所作(島野勘七 蔦山四郎兵衞 兩人作)傾城花いかだ(葉山岡右衞門 蔦山四郎兵衞 兩人作)四季の所作放下僧、あさま、三つ車、かやの所作、近江八景、唐人歌(世間にては杵屋長右衞門作ならんといふ)松風青葉(杵屋長右衞門 蔦山四郎兵衞 兩人作)起請の所作、龜の所作、鷺の所作(知原藤四郎作)有馬の富士(木呈三左衞門作)沖の石萬菊(永島庄右衞門作)近江八景(永島庄左衞門 和歌村藤四郎 兩人作)きぬぐ〵筑波山、唐金茂右衞門(柴崎勘六作)とけつ(親杵屋長五郎作)高瀬舟(辻甚右衞門作)花かづら(大和屋傳十郎作)因幡の森(三杉三右衞門作)鳥部山、十三鐘(小出金四郎作)花の香(坂田兵四郎作)井筒(坂田兵四郎 山本喜市 兩人作)松虫の所作(坂田兵四郎 嵐三五郎 兩人作)善知鳥、猩々、松風、道成寺、入間川吼噲、桶ぶせ六段、戀慕、里景色、敷蒲團(このかはりの歌は是より始れり)(岸野治郎三作)きつね火(岸野治郎三 澤村長十郎 萩野八重桐 三人作)けいせい男山、明がらす(二代目杵屋長五郎作)がくや道心、新道成寺(同人作)春の雪(杵屋長五郎 青木半兵衞 兩人作)海人、新道成寺(芳澤金七作)石橋(芳澤金七 若村藤四郎 兩人作)庭鳥所作心中盡し、名古屋帶、相の山、突出

し、かぶろまつ、十三がね、關の小萬、お初德兵衞、白小袖、(山本喜市作) 無間の鐘(山本喜市 若村藤四郎 兩人作) 初櫻、白糸、雪見酒、(同人作) 其外古來より殘る處の歌の目錄あまたあれども松の葉又は松の落葉等にあるゆへ略す

狂言作者古名人の話

歌舞妓事始に曰江戸根生の狂言作者津打治兵衞いへるは今時の作者趣向の案方合點ゆかず立役を女形に直し或は御家の後室を奴になしいろ〳〵變化する故狂言そぎつぎにして混雜し山の奥に騷ぎの三絃を鳴らすやら或は庭などの井戸よりいつのまにやら敵がたよりぬけ穴を堀姿を隱さんとて井戸へはいり或は井戸へはまりて濡たるけしきもなく工あらはれヱヽ無念やなどいふやうなる趣向多し歌舞妓の案方はさにあらずたとへば當り役者にて時の人ほむるといへども一體の藝こみなきは金取にてはなし是らは立消するなり是を以て金取の役者の身上をば案じ其金取を仕損じさすは作者の誤なり其役者の氣ごんをさつし其體を以て狂言一部に取組なりといひけり又或時市川海老藏と狂言を論じけるとぞ市川氏は世にえれたる名人也津打氏狂言にて首引せんとて是を出すに勝利を得たる山にて淺草觀音の繪馬にも市川と津打と首引する繪に津打氏勝たる所を畫たり又作者に名高きは近松門左衞門、其外杉三安、近江屋久四郎、彌五右衞門、富永平兵衞、安達三郎左衞門、金子吉右衞門、中田嘉右衞門、岡淸兵衞、岩井伊左衞門、紀海音、中山金藏、其外歌舞妓作者擧て數へ難し又東三八といへる者此作者の案方は他へ行んとて駕籠に乘る駕の者其何れへ御越候哉と尋ねけるに面白からん方へ連て行といひて駕籠賃悅ぶ程やるべしといふ扨も異風なる人やとて利欲にかゝはるら有或は四季のけしきをいひて慰るもあり又は茶屋遊女の與を勸るもありける三八かれらに從がつて共に戲れ終り我家に歸り狂言出來たりとて役者を揃へ稽古させしとなり或人此案方を尋ねけるに三八曰時々移り氣に成が人情なりされぱはやり歌といふもの一人より二人へ移り段々弘まるなりかごの者が勸めし遊女といふ者は諸方の人と交り多き故時の氣をよくしれるもの也ゆへに隨がひて其氣を案じて一部の狂言となすといへるよし語けると也又或時の替り狂言六度役者に

つかれたり七度目にあたり役者子ども手を打て悦ご天晴御器量驚入たり六度狂言をつき御席に珍らしき御趣向御咄しなされ候事よと申ければ三八曰然らば何も氣に入しやと役者此上御無體申事なし此狂言出し候はゞ大當りなるべしと口を揃へていへば三八かぶりをふつて何れもの氣に叶ふても我胸に濟ず此狂言に景物有て見物は悦ばんなれど重ねて出す狂言に見物の氣もそれて年中芝居相續叶はず然る時は此狂言不吉を招くに似たりとて又一組咄しければ人々其趣向に服し稽古をなし初日より大入せし事古今の繁昌なりしと也是を以て見れば三八といふ人は近松門左衞門にも並ぶ程の人なるべし」又「正德享保の頃江戸狂言作者に中村傳七といふもの有此人の作は木に竹を接たるやうなる事を取組て始終理屈詰り見物よく取やうに作る名人なり取分引道具せり出し押出しぶん廻し引返し等珍らしき大道具仕出し見物の目を驚かせしなり有が中にも先年中村座にて嫁入角田川といふ狂言に兩國橋より三圍の堤まで一里程ある川岸の大引道具大形成事古今の珍景にて大入せしと也

爲永太郎兵衛の遺書

同書に曰竹田出雲存生の時弟子爲永千蝶作者の祕事を尋ねければ机一脚讓られき千蝶病死の節一紙を添へ予に又是を讓られたる其文に曰

木の葉落てめぐむに非ず下よりつはりめぐむによつて落る也作者の趣向も其時に望て出るにあらず多年心がくるを以て趣向も出來る也十月は小春とて暖に花も咲狂言一かはり二替り優曇華の花さくといへども下よりつはる惠みなければ春の盛りに身を恨む學問せよ學問すな才智になれ利口になるな阿房になれあはうすな恥をかけ笑らはるゝな色に迷へ我色に迷ふな長生せい長生すな

と書り今我拙くして實生の土氣を恨みよそに開く花を見て初て昔を慕ひ日蔭の埋れ木なりとも接木をなさんものを徒らに過る月日は多けれど心の曇りあるゆへに磨き出す力もなし此書は故人の說を用ひ書つゞけぬ夫人は水の變るを以て土地の氣に移り心を附れば詞の訛もぬけ言葉も和らぎ猛き心も柔和になる也ぬくめ鳥といふは極寒に鷹の足をあたゝめ恐しと恐りながら和らぐ心は則神なり其鷹ぬくめ鳥の飛去し方へ羽をのさず和俗にも杖の下よりも廻れば可愛

ひといふも和を以ていふその和を本として歌舞妓の業をつとむる也」寶暦十二年の初爲永一蝶述る」と有是今迄九十一年と成り述る所の話は七八十年前の事なればます／＼古風なりといへども作道に限らず諸藝に通ずる故人の詞感ずる事多し

竹田出雲掾名言の話

前に云爲永千蝶の師竹田出雲掾は舊機關物眞似子供芝居の名代竹田近江萬治元戌年十二月朔日口宣頂戴して竹田出雲掾となり寛文寅年大阪道頓堀にて竹田芝居始たり享保中悴に出雲の名を讓り近江と改享保十四酉年閏九月十九日病死して悴三四郎に近江の名を讓れり（此三四郎小出雲なり）二代目出雲は竹本筑後掾の興行人となつて近松門左衞門を作者とし我々後々は作者となれり正德五未年十一月朔日より國性爺合戰を始しに古今の大當りして三年越十七箇月勤けり享保二酉年二月十五日より（種は日本産は唐土）國性爺後日合戰とて近松作にて始けれども前々と違ひはかゞ／＼しからず日數僅の興行にて止けり近松は猶おもしろき趣向もがなと枕を割し工夫にわたる其時出雲の云作者の心にはさこそ存らるべきが大當りの跡はすら／＼としたる事をなしてをかるべし國性爺にて餘程の德分あれば一二年不當りしたりとも我等式が給る程は澤山也其間は古き物にても出しゐる內には自然とよき狂言も出候はん夫より上夫より上と趣向に趣向を重ねたらん時は我家業を盡果申さん唯天然にまかされよと申したるは一道に秀たる者の詞諸道に通じて感深かり文化中道頓堀芝居側失火の時今の若太夫の芝居裏に見事なる土藏の臺石遺り瓦等堀出し所の古老が尋ねし所是なん豐竹の北條藏の跡也と云享保十一午年四月八日より來未閏正月の末まで年越十一箇月興行大入せし德分にて芝居の隣に大土藏を建北條時賴記の外題を呼んで北條藏と呼びしも其後度々の類燒にて亡びたる遺なりと云予が家に因あれば古瓦一枚を何某より送れり實に國性爺と時賴記は竹豐兩座の大關と居たる筈なり今芝居者流座拂の元金上れば是より藏入なりと云は此北條藏よりいひ初めし事にやあらん

俳優者傳奇を作りし話

天明二寅年東都萬里亭夫古土と云者の書たる名物袖日記といへる小册に江戶三座芝居の起原役者の心得等を記せし中に役者の狂言を作る事を論じたり其の

文に曰く此事は我等ごときの素人からは樂屋の事は知らざれ共云作者に聞しなりついては時々今度は誰々が作りしなど丶云折々あるゆへ爰に書載る總體今時の役者智惠文作もなくして義太夫本を撰出し我一分の狂言を作る事作者などの邪魔にて疵也尤故訥子專ら狂言を作りしが此人は元より上方澤村長十郎丶大和屋甚兵衛門などが狂言作りし時傍に執筆をせし由數年の功有て作りたり故訥子の作りし狂言を見しに自分の仕打をおもとせし事は決してなかりしと。也とかく人の役をおもと案じて一體の趣向を作りしなり柏莚名人なれ共狂言作りし事を聞ず其替に我一分のせりふみへなる事は自身の才智を以て作り當りを取矢の根五郎外郎賣其外あげて數へがたし市川家の名物は今以て役者作者の助ともなる今の役しやは腹にすこしの文作もなく淨瑠璃本の中より採り出し己が仕て見たいと思ふ計に屈托して外々の役者に構はず我體に不相應なる事をして我ばかりよいと思ふゆへ見物は面白ふなく不興にてあげくには其時々の作者にまかせて置事しかるべきなり云々此事予が傳奇作書初編梅玉の傳にて云におなじ七十年前にも此論有てしれたる事乍ら近年の立者役者に益此疾多し愼しむべき事なり

役者作者位高下の辨

同書に曰誠に役者の上を一段飛越て心魂を勞する物は作者なるべし大勢の役者の心々を一人の肺肝を以て沒分百々萬騎の剛敵に等しき諸見物を引受ての軍術狂言の趣向を引幕の內に廻らし勝事八百八町の外に決す軍師ともいふべきか然れど折々高慢出で役者作者互ひに誇をあげて己々が心を樂しむ八百はおれが手にて上手にした高麗はお上が今度の狂言から出世したなど丶いひ役者はおれが今度の狂言をでかさせたなど丶てんでんに誇る是を中からいへば兩方相持と云てよき事なり然れど其內作者が七分上に立べし譬へば大工が家を立るに主じの好みの通りに住居の趣家造りの材木迄我心に布置すれ共牛梁に杉丸太もならぬ物なり床板にぬきをしても間尺に合まじ又良材木夥しくありても大工といふ者がなければ柱にも梁にもならず木場の川びたしとなる也然れば兩方相合也其內に此木は梁につかふ此角物を床と夫々の恰好を見分ける所は工みの業でなくては行ぬゆへ一

倍の利有事なり過し比斗文と言る作者古人廣次、助五郎を河津、俣野にして相撲をとらせし處に殊の外當り大入をなしたり此時斗文いへるは廣次も助五郎もおれが案じにて大手柄をさせて金取にもせしといひしを兩人はおれが持前の體で魂膽しひいきを以て狂言に當りしといひし也是を中からいへば廣次、助五郎を見立角力を取せたらよからふとの案じは作者でなければ行ぬ所なれ共廣次、助五郎と云よい恰好の男がなければならずよい恰好と云ても春右衞門、善五郎などゝ云大がらな詰役者に角力をとらせたら三文にもなるまいさすれば男の恰好にもよらず贔負、恰好合體した者がなければ成就せぬ也よい役者じや有ても案じがなければ見物がみる事もなるまい爰に材木と大工の處にてすべて物事一騎にてはなりがたき故互に高慢も無益なること成べし其上にあらざれば行ぬ事也然れども河津はこう〳〵俣野はこういへとせりふをさづけ師範するなれば作者は上に立べし遣ふてもらふは人の心に任するゆへに無智の方なれば隨ふべき事なり云々故糸河一洗は役者を魚鳥野菜と見立作者は料理人と見甘ふ喰せんと淡く喰せんと料理人次第なりといひ予は又日々の見物を病ひと見立役者共を藥種と見て作者は醫者なり藥種の遣ひ樣によりて諸見物の病氣も本復させる戯場道の醫なれば其見識なくんば藥種計り撰んでも療治は配劑に有案と筆の匕加減が第一なりと一洗と語り合ひ笑ひし事有

江戸古作者連名附

同書に歌舞妓古狂言作者を擧たり生立の順を記て功拙を論せずと有光島勘右衞門、藤井斗文、金井三笑中村傳七、津打九平治、錦通與三兵衞、津打治兵衞津打管竹、櫻田治助、村瀨源三、中村淸三郞、門田候兵衞、枝彌市、早川傳四郎、中村重助、中村太郎右衞門、堀越二三治以上右は天明以前江戸歌舞妓作者連名附なり

流行唄は昔に歸るの話

昔後醍醐帝の御宇豐原兼秋は鳳管の音を聞て國の盛衰を知り荒陵山の樂人大和介は樂の音を聽て世の有樣を知れりと云元祿年中京祇園町に岸野治郎三といふは歌三味線に名高き者にて古き唱歌を好み古律の正しきことを尋ね探りて自然と三絃の妙を得たりいか

に早めて彈といへども撥を持たる手の小指三絃の駒にひた／＼と附しとなり藝に至る人ならではなき事なり或時榊山小四郎（元祿中立役者）ぬめりといふ物を望まれければ治郎三是を十七段に彈分たり是けいせいの出端にして其太夫の位々を音色にて十七段に彈分たるよし奇妙の術を得たりさるによつて諸方の法師も此人に習ひしとぞ常に四條の芝居を勤め彼大石內藏助良雄の閑間にて里景色といへる端歌は歌系圖にも浮の作（大石の作名なり）調治郎三と記し當時祇園町井筒は其治郎三の子孫なるべし此人の所持したる三絃は鳴神といふて日本に二挺の名作なり今一挺は先榊山小四郎所持して常に此三味線を以て音律の事を論じたり又其身芝居に行ずして三絃をならし其日々の見物の人數の多少をしる是音を聞てしれるなり又小四郎宮商角徵羽の常理を能辨へたれば道成寺の舞を拵らへ節附は則治郎三なり又山本喜市といふ者妙手にして治郎三に劣らぬ三絃にて或秋の比聲々に啼虫の音を聞調子を細めて是に隨がひ曲節を作りしに忽虫の音止たり暫らく有て虫又啼出せるに心づき調子高く／＼彈けれ共更に止ず又調子を細めて彈ければ又虫の音やみぬ

是より工夫し種々曲節を作るに心の如し聞人感じけるとなり是に附て世に諷ひはやらせる流行唄と云物其節に伸ちゞみ有て文句に其時々のはやり物を作れども三絃の手は故人の彈來りし外に新奇の手とては有べからず唄も又古きを慕ふて作るが故古に歸り／＼て節は其時々に少しの變化する事と思はる前に云小歌作者附に柴崎勘六作と云唐金茂右衛門の唱歌は「唐がねの茂右衛門が女房はよい嫁御あれ見さいな筑波山の横雲よと雲の下こそわしが親里」又其比のはやり歌に「齋藤太郎左衛門ちよと／＼逢たい事じやいのるすか／＼どつこにじや隣にか呼でたもあいたい事じやいのほんにゑ」此二つのはやり歌は享保八卯年秋京五條橋詰御影堂寺中其阿彌と云扇屋に心中有しを豐竹座の淨瑠璃に西澤・風作井筒屋源六戀寒晒下の卷甚阿彌の場にて奥の間の騷ぎに諷ふ事有かゝれば享保前のはやり歌なる事明らけし文化に中村歌右衛門ちよと七化の內に此歌然も二つ共出たり尤文句に少しの變りあれば節も變りはありし近比專ら流行りたるトッチリトンといふ唄のもとは「もしや此子が船頭衆の子なら揖が三年櫓が三月」とい

へるより段々替り歌出來たり是れも彼の兜軍記の琴責の淨瑠璃岩永のせりふにもしや此子が女の子ならといへるは其比のはやり歌なるべしもとトチリトンの節は古しへの潮來節より出たるなるべし寛政に楊柳櫻といへる歌舞妓狂言の大切淀屋辰五郎融大臣の鹽竈に准へ三津の汐汲の景事に「潮來出島は拗色處客は立派に氣はざつぱ」といへる節是なり文政に梅玉九化の內鳥羽繪の文句に「夜明鴉の四つ手駕且那は中で空寢入おつこちた」と云も節相似たり是らに限らず皆古き唱歌を少し添削し三絃の手は餘の手を彈ていつとなく曲節一變すると見へたり近來流行歌鄙陋猥雜にして聞もうるさし

三組譽景清の番附

(番附板組の都合により

百二十六頁に出す……編者)

兜軍記鯉の場の話

此三組譽景清は寶曆十四申年京都の淨瑠璃契情阿古屋の松の大序二の口切を序二三幕目として享保十七子年竹木座檀浦兜軍記の序切(大佛供養)二の口(菊水の辻)三の口(は六ら琴責)三の切(岡崎鯉の場)を四五六七幕目と續け明和元申年豐竹座娘景清八島日記の三の口切(手越里日向島)を八幕目九幕目と所々を縮め一部の趣向と建し物なり此三つの當り狂言の內にて眼目とせる場のみ類聚(よせもの)にしたる物ゆへ一場として面白からぬ場もなくその上其比の名人役者集りてする事なれば嘸かし大當りなるべしと思へ共冬の相替りにてさ迄の大入もなく跡北の新地芝居へ狂言其儘に引越たりと云此兜軍記は文耕堂と長谷川千四兩人の作にて三の切岡崎の貧家阿古屋の兄井場の十藏一幸母親と鯉の肴に誕生を祝し景清の替りにならんと親子愁ひの段は道理にかなひ面白き事限りなき場なれども長き一段の內十藏親子阿古屋箕尾谷榛澤と五人より木偶出ず至極淋しく語りにくき場ゆへ誰々も淨瑠璃に語らず此場をしりたる者いと少し琴責の場は三絃に三曲の彈物あれば操にても歌舞妓にても仕流行せ誰しらぬ者もなけれど舊三の口なるゆへ場に輕き所あり其上二の切花菱やの場(五條坂女郎屋にてあこや親方の內也)にて阿古屋召捕られ兄の十藏景清の在家を聢かんとするを阿古屋は耳をふさぎて聞ず行ゆへいかなる拷問にも問狀に落ぬと云事を不知琴責計聞時は阿古屋は景清の行衞しりながら强情を張白狀

せぬかとも思ひ重忠も情をかけて問はぬかとも思ふ者多からん三曲の調子狂はず眞實にしらぬが故四相を悟る重忠も是を発すと作せり狂言の前後をしらず語る太夫歌舞妓にする役者諸人の感ずる事あらんや予幼き比亡父の話にて此譽景清の事を聞しに琴責の段切岩永に小六重忠に文七二重に遺りあこやに國太郎榛澤八藏附下手へ引込撥利生ある糸捌直なる道のと淨瑠璃の切にチヨン〳〵所返しにて式臺を二重の下へ引こむ向ふの飾鐵炮の書割襖返つて小六文七の姿を消す裏破れ壁貧家の道具と成り藁屋根破れ鴨居下しいつもの所へ門口下より突上る美々しき道具より貧家となり文七早拵にて向ふより浪人者の十藏に出小六二枚折の古屏風の內にて早拵にて母親となる氣の替り目いとよかりしと聞居て後此三の切の淨瑠璃聞たく思ひしに絕て語人なくよふ〳〵北の吹松（素人淨瑠璃の親玉）に一度聞又後に藍玉組太夫（素人の聞）一度聞たり誠に淋しく面白く天狗物（淨瑠璃にて語りにくき物なり）の最上なるべし天保の始に梅玉にすゝめて景清の三組を出し岩永と十藏母に梅玉重忠と十藏に團藏あこやに松江箕尾谷に片岡にさせしが歌舞妓にては餘りに淋しく持兼興行の日數僅にて大塔宮と出し替へたり是を思へば此狂言をしたらよからうと計にてせぬ方故作者文耕堂も歎びなるべし予此場を種として大石摺義士法帖六つ目七つ目に脚色はして有り三編四編の內に說べし

菊水辻講釋場の話

予が著述綺語文草四編目京都下河原菊水の辻の條に出せども兜軍記の因あれば爰には壇浦の淨瑠璃二の口下河原菊水の辻にて講釋場を葮簀に圍ひ講師闕原甚內と假名して五條坂の遊君阿古屋の兄井場の十藏老母飛鳥を養はんが爲辻講釋を業とし其日を送る面體恰好惡七兵衛景清に似たるがゆへ榛澤六郎組子をもつて召捕晝姿に改めたるに景清に非ずよつて榛澤俺忽を詫て繩をとき母を孝養の爲辻講釋をすと聞て感じ商賣の妨せしを氣の毒と金子を惠む十藏これをいなみて景清に似たるは此身の不幸なり何ぞ金子を受んやと返す榛澤いよ〳〵感じて老母への志なりと云十藏志を無足にするもいかゞとけふ清水觀音の緣日なれば母の無病息災を祈の爲に奉納せんとて傍なる賽錢箱へ打込事故是に似たる一話有大雅堂霞樵は嘉右衛門とて舊貨殖家なるが其業を惡み避て畫工

寛政七卯年十一月二十二日より間替り狂言道頓堀角の芝居

座本　藤川八藏

去程に壽永の秋の唐錦紅葉染る紅ゐは京家のはた色ヱイ〳〵チヤ鬨の聲を揚羽の蝶の紋所是一の谷の事

阿古屋松
兜軍記
八島日記

三組譽景清

筑紫潟
九箇國

扨其後元暦の春の朝霞匂ひを含む白梅源氏のはた色はひやうし揃へてヱイとサツサ笹輪膽の紋所是鎌倉の勝鬨

もみぢやお圓
きりやおいの
さくらやおかね
花びしや清吉
かぶろふでの
同そめの井
やりてお玉
川越太郎
かしま六郎
かひの次郎
しやみ法ぞう坊
同はんにや坊
御所の黒彌吾
かまだ七郎
はぬきや賀鳥
のざきや吉次

よし澤圓二郎
中山猪之吉
中むら金藏
三ます氏之助
中山よね吉
三ますつる吉
澤むらとく三郎
あらし卯ぞう
中山平一三郎
ばん東金ぞう
山むらきく四郎
中むらたきぞう
澤むら園八
しばさき多人
みますかめ三郎

たゞ常妹ちぐさ
けいせいはつせ
しづのめおとみ
源のよしつね
もり山十郎
さと人與三治
藤太妹おこと
ちば娘白たへ
わしの大六
三上人
まゝたきおたけ
かじはら平三
岩永おくがた熊笹
花びしや長
さつま五郎
花びし女房おくま

花桐富松
花桐富松
花桐富松
中山文藏
中山文藏
中山文藏
淺尾仙之助
淺尾仙之助
中山文五郎
中山文五郎
中山文五郎
山村友右衛門
山村友右衛門
山村友右衛門
三枡松五郎
三枡松五郎

役名	役者
高しまや小彌太	みますかめ三郎
せんもんどうてつ	あさを爲右衛門
客かせぎ	あさを爲右衛門
さゝきひでよし	みをき吉三郎
本田の次郎	みをき吉三郎
忠つね妹あや絹	山下陸二郎
けいせい萩の戸	山下陸二郎
すけのつぼね	萩野仙二郎
けいせいしら菊	萩野仙二郎
ひろもと妹立なみ	萩野仙二郎
玉ぶさ妹初しも	さかき山雛松
けいせいよしの	さかき山雛松
しづのめおひな	さかき山雛松
かぢはら平三	嵐傳五郎
大日ぼう	嵐傳五郎
きぬがさ	あらし若松
かぢはら娘きぶね	あらし若松
けいせいあやむめ	あらし若松

淨瑠璃

竹本富太夫
竹本道太夫
竹本音太夫

三味線

つる澤源次郎
つる澤源治

千穐萬歳樂大入大々叶

役名	役者
佐々木もり綱	嵐雛助
里人四郎作	嵐雛助
重忠奥方玉房	芳澤いろは
娘小いと	芳澤いろは
井場の十藏	中山文七
ちゝぶの重忠	中山文七
しゆめの判官	中山文七
みをのや四郎	山村儀右衛門
きもいり左次兵衛	山村儀右衛門
けいせいあこや	澤村國太郎
惡七兵衛かげ清	嵐小六
岩永左衛門	嵐小六
十藏母あすか	嵐小六
はん澤六郎	藤川八藏
社木みつぎ	藤川八藏

狂言作者

近松徳三
田邊彌七
並木正三
並木半藏
辰岡萬作

頭取　三桝松五郎

となり池野秋平（霞樵無名貨成大雅堂數名有）の傳は近世畸人傳にあれ共もれたる一話に其質雅にして聊も利にはしらず書もまめやかに殊に象を得たり一日書林の許にて年比望みし一書を見欣然として其價を問ふに價最貴し大堂云我にたくはへなし故に望を空しふす希は是が爲に今より勉て金を積ん積て後此價に足りなば我にたびなん去ながら賣物の事なれば其間に他に望む人もあるべし若さあらば我にしらせよと云書林云此書は高價なる物ゆへ容易に望む人も有まじ若あらば其よし告申べしと約してそれより大雅は日比に變り儉に物事約にして年を經て望の通り金を溜已に價調ひぬれば彼書林方へ走り行年比の望たりぬとて價を出し其書を我に賜へと云書林大に當惑して實も先年足下に約せし事只今存出せり其書は其後望人有て賣遣しぬ其の時足下に約せし事を忘却して告ず罪多く今更如何ともする事能はずと悲愧す大雅案に相違して愁然として申けるは我かく迄貧しき中にて金を拵へしは此書の爲なり既に價調ひて望を果ざるは天なり苟も此金を他用につかはん樣なし不如祇園の地に住て居るからは恩謝の爲に御社へ奉納せんにはと右の金を殘らず束ねて祇園へ奉納す是を世に傳へて大雅の廉潔を稱し益此人の書畵を世に翫ぶ事とはなりぬ此一話兒軍記に潤色せし物かと思ふ計り似よりたる話也大雅は眞葛原に栖で祇園の社地へ出し店して書畵を認め井場十藏は菊水に辻講釋を業とし是は觀世音へ金子を納め是は祇園の社に上る祇園清水と並び菊水下河原尤續り然るに船岡の南淨光寺に在墓碑の銘には大雅の歿年は安永五申年四月十三日行年五十四歲にて生年は享保八卯年五月四日と有兒軍記は享保十七年に成て大雅がよふやく十歲時なりされば自然と相似たる話なるべし

佐々木盛綱藤戸の話

盛綱小島の鹽燒に淺瀨を聞重ねて餘人に語らん事を恐れ褒美くれんと欺り殺して海の深みへ捨しと云は韓信蜀の閑道を樵夫に聞て其者を殺す和漢同日の論にして謠曲藤戸にて出て淨瑠璃には佐々木藤戸先陣（井上播磨の古本）傾城浮州岩（宇治嘉太夫古本）先陣浮州巖（淺田一鳥作）等なり藤戸合戰を歌舞妓に直し文政に先陣藤戸磐と外題して奈河晴助用ひけり是は盛綱鹽燒に欺かれて多くの軍兵を千尋の海に流され不覺を取天城寺の觀音へ通夜

して計らず醜やきの翁に逢ふ醜燒傾く平家の運命をしつて誠の淺瀨を語ると仕組り阿古屋の松は是らに反し藤太は名にあふ惡者にて妹に茶店を出させ色仕かけにて金をむさぼる盛綱は濡事師にて惚られ下人と成つて入込居る主馬の判官盛久は佐々木盛綱と名乘り金銀を遣つて心をとらかし淺瀨をきく藤太後藤盛長の忰にて平家にかとふどして深みを淺瀨なりと敎る梶原平次蔭より聞居て拔がけす盛久藤太に褒美くれんと僞りて手にかくる門口へ注進來て梶原の軍勢深みに沈み不覺をとると云藤太手負にて身の上の懺悔し妹聟の盛綱に誠の淺瀨を敎ふる此時のせりふに譬へていはば攝州住吉三月三日の汐干にはとの淨瑠璃は予幼き比は誰もよく語りし物也當時大に廢りて語る者なし主馬の判官盛久の狂言は宇治嘉太夫の古本に淸水觀世音の靈驗を崇り太刀取の刀段々に折るを仕組賴政追善芝二の切傘法橋搦捕る役に遣ひ阿古屋の松醜燒の場につかひあるのみ也景淸盛久相並びたる平家の忠臣ながら景淸のみ種々に脚色み盛久に脚色なきこそ恨なれ予文政の末景淸箕尾谷を對の役とし東大寺大佛供養の場を口とし奥に箕尾谷立役として一傳奇を脚色めりさすべき役者揃はぬが故捨置たり紙虱の栖とせんも口惜しく正本の儘爰に出す則外題八島日記の略解阿古屋松の註釋源平鎹曳競と賦して口幕の役人は○大工七兵衞本名惡七兵衞景淸○六代御前○祐經娘白妙○岩永娘貫船○千葉娘千草○仁田娘濱遊○廣元娘立浪○玉房娘糸萩○本田妻唐綾○衆徒法藏坊○同大日坊○同玄海坊○同岩倉坊○東大寺住僧○御所の黑彌吾○衆徒般若坊○梶原與方幾船○景淸妻衣笠○重忠奥方玉房○箕尾谷四郎國時○姚四人○大工大勢○侍大勢何れも役名略之

東大寺大佛供養の齣

造物上の方見事なる山門橋懸り迄續の筋塀よき所に葭簀圍ひの饅頭店十一屋と染込みたる暖簾かけ右正面に般若坊緋の衣ちよつぺい頭巾にて床几にかゝり岩倉坊、玄海坊、大日坊、法藏坊各衆徒の拵へにて兩方に並び居る橋懸りに大工大勢躋り居る本釣鐘淨瑠璃にて幕ひらく「立隔つ唐土人も仲麿の歌を忘るべかふりさけて今や見るらん春日なる三笠の山に出る月容も五に鳴鐘の世上に響く東大寺大佛供養と忘られたり 般若坊 衆徒の面々大工共が不念きつと申附召

れ（岩倉坊）心得てムるヤイ大工めら我々が申事を篤と承りをらふ此東大寺の大佛殿と申は聖武帝の御時より動きなき伽藍なりしを（玄海）平家積惡の餘り燒亡し奉るさるによつて佛罰遁るゝ所なく終に平家は西海の浪と消る（大日）右幕下源の賴朝公より改て伽藍再興遊ばさるゝに御普請も大半成就（法藏）夫ゆへ諸大名奥方は早此間より御到著賴朝公にも明日御出駕の筈（般）夜を日に繼でも賴朝公のお假家萬端今日七つ時迄と申附しにまだぐつ〳〵と手放れせぬは此般若坊が指圖を受ぬ不屆者め（四人衆徒）につくい奴等の（大工）ア、モウシ〳〵お假家の御普請も今日中に仕上げよとのお指圖ゆへまだ四五日も掛る程仕事は丈夫にムり升れど（△同）何が大勢が汗水になつて隅の隅迄殘らず出來（□同）どこに一つも申ぶんのない樣に致して置ましたれば（◎同）定めて結構な御褒美がムり升ふと最前から首を長ふして待てをります（△同）あなた樣方のおとりなしでどふぞ結構な御褒美を（○同）御拜領被成て下さり升れば（皆同）ハイ〳〵有難ふ存升る（般）ヤアほうびとは何をほうびうぬらがべん〳〵さらすゆへお假家普請おそなわり我々が不調法に相成る事を褒美などゝはふとい奴の（△大工）ア、モウシ〳〵全くのらはかはき升ぬ天下樣の御ゐせいといひ殊に結構な佛樣の御供養我一とせい出しましてムり升るノウ皆の衆（○同）ヲ、そふとも〳〵平家の清盛入道が燒亡した佛樣をもとの樣に遊ばさるゝ御善根（◎同）大工計りも何萬人大佛樣の大きさは則賴朝樣のお首に合して作つた物じやげな（□同）それいの天下取はあたま迄仰山なこちとらにあのあたまが有たら四條の涼でよい見せ物ほん（○同）ほんにのふ佛樣にむごふあたる淸盛入道といふ奴はどんな奴じや見たいわい（△同）そんなら貴樣は知らぬかおいらは前かた京で見たが夫は〳〵にくいづらな大坊主（○同）ハ、アそんならてふどあなた見る樣な大坊主か（とはん若坊をゆびさす）（般）ヤイ〳〵だまりをろふ佗口きかずと立て失ふ（△大）それでもあんまりよう似たゆへ（四人衆）早ふうせぬかいち〳〵にぶちすへるぞ（大工皆）ハイ〳〵さんじ升る〳〵（四人衆）さあ早くうせふ（○大）どれ〳〵又にらまれぬ内休みませふ（皆同）さあムれ〳〵「玄から附られ大工共皆こそ〳〵と逃てゆくかたへの軒は饅頭屋が比さへ十一屋まだ手いらずと見へにける（ト蔭實の内より糸萩世話娘にて出て）（糸萩）結構な御供養で御出家樣方にはいかい御苦勞でムり升なア（般）ヲ、門前の饅頭

や其方も大佛供養が拜たからふなア糸たゞさへ女子
は罪の深い者とやら承り升れば慈悲萬行の御供養に
逢まして先の世が助りたふ存升る般ハテ若輩者には
奇特〳〵岩イヤ何般若坊殿明日武將の御到著でムれ
ば　玄諸大名の假家〳〵も下見分致さすば成升まい大日
殊に梶原殿より貴僧への內意もムれば法假家へ參つ
て何角の手つがひ申談せふ人四いざ般若坊殿般いかに
も〳〵同道いたすでムらふが愚僧は彼山門の掃除ふ
れを申しつけ追附夫へ參るでムらふ人三然らばお先へ
般後刻逢申そふ「後刻〳〵と衆徒の面々寺內をさし
て入にけり跡見送つて般若坊般邪魔は拂らふたさら
ば供養を拜ましてやらふかト糸蔵に抱附此內橋懸りより玉房せゐ形り前垂がけにて出か
けゐるふりはなして糸是悪い事被成升るなアレヱ〳〵般ハテこ
はがる事はない高で供養が拜みたいといふによつて
供養を拜してやるのじや糸あた否らしい否じや〳〵
トいふ〳〵してもはなさぬゆへかいなへくひつく般アイタヽヽヽコリヤひどいめ
にあはしたぞよ糸形にこそよれ嗜ましやんせいな
ア般イヤ嗜むまい愚僧是迄に娘の水上に掛つて終に
一度仇矢のあつたためしがない持合せのしろ物はせ
う〳〵大佛なれどあしらふてとく〳〵と供養をして

やらふさあ爰へ〳〵糸ヱヽあほうらしい般どつこい
逃す事はならぬ〳〵「むりに引つけ無體の頰摺戾り
かゝつて饅頭屋が支へる拍子に取違へほうど抱つ
き般ヤア饅頭屋の亭主房玉アイ亭主でムんす妹をとら
へて今のはへ般イヤサ今のは何じやヲヽそれそれ饅
頭を買はふと思ふて糸饅頭所か色々のいやらしい玉
サア〳〵何もかも聞てゐる糸それでも玉ハテ饅頭の
御用なら私しが店の商ひ世間に類は多けれど歌には
靑によしとよみ奈良饅頭の餡もよし殊更佛の御誓ひ
慈悲萬ちうの蒸々は三笠の山に脳が鳴り五重甍にた
つ湯氣は春日の里の名物饅頭サア買はしやんせ〳〵
「云ひ並べたる饅頭屋が風味も無と志られけり般饅
頭盡しの口上なか〳〵昔そふな事じやとてもの事に
きづが饅頭玉ヱヽ般饅頭の噺で殊の外じうまんした
亭主是におゐやれ「喰ひ違ふてもへらず口そらさぬ
體に行過るト山門の方へ這入る糸姉樣夜に入たれば買手もなさ
そふなちつと休ましやんせいなア玉伽藍供養の內は
晝夜いとはぬ人群集その往來の中にも是トさゝやく糸が
てんでムんす玉早ふさきや糸アヽ一アイの返事も爰
をもつ松屋町筋急ぎ行ば庭の玉帶浮世の塵に交ら

で爰にも平家譜代の忠臣上總の景清が女房衣笠今度大佛供養の爲頼朝上洛とほの聞き仇をなさんと附覗ふ夫に力をそへんずと女心の甲斐〴〵しく郎等御所の黒彌吾を供につれ人目忍びて隱れ家を井手の玉水日はくれて急げど初夜になら坂や饅頭屋の床几のはし暫らく御めんとイめば　ト向ふより衣笠著流し抱へ帶杖笠もち黒彌吾旅形り大小にて供して出て　黒ごや幸ひの床几暫く休息被成ませぬか　衣笠そふしませふわいの　ト兩人共腰かける　玉見れば女中樣の旅がけて夜に入ての御參詣は御信心なと申せふかしたが晝は人せり夜夜中でもまがいのない大佛樣おからだのいつかい程御利益も有でムりませふ見受ますればお二人共さゝの成りそふな御風俗お否かは存ませねど所の名物おなぐさみにさし上ませふ「お歷々にと差出す饅頭より先女房の笑顏ぞ一口くはまほし衣笠は唯一心兎や角案じて返事せず黒彌吾店かる追從に　黒イヤモ尊い寺は門から見へるとお身がその風俗で饅頭の味も思ひやられた見れば暖簾にも行燈にも書附た家名は十一屋ヱ、此心を推量した饅頭を十かへば一つ添へると云心でそこで家名の十一屋かそふか〳〵　玉ほんに是はよい御推量でムんす成程さやう申たいがこつちの心はそふではムんせぬ朝七つから店出して夜の四つに店終ふまで七つと四つの時を合せて　黒ヱヽそれで家名の十一屋か是も尤　玉サイ大佛供養で南都の賑ひ諸職人の繁昌は引もちぎらぬ櫛の齒の髮ゆふ間さへない仕合せ私らがいそがしさを推量被成て下さりませ　黒成程〳〵供養に附て頼朝上洛を召るれば附々も嘸あらん其外の參詣諸國の入込みさほど精出さいではなか〳〵賣捌く事ではあるまい何と箇程結搆に諸堂囘廊以下までを再興しながら肝心の此山門計り修覆もせずその儘に殘し置たは心有ての事かたゞしは始末か音に聞た程にもない頼朝は去はいやつだな　玉イヱ〳〵そりやあなたの御了簡が違ひまする　黒何了簡が違つたとは　玉サア深い樣子は存せねど王樣の御建立でムんすげな平家の惡者清盛入道が此大佛樣を燒た時遺つたるは此山門ばかり能登守教經といふ大惡人大佛樣へ射かけた矢がそれて此山門の垂木に當つて矢の根矢殼が今にあれば晝に成たら見やしやんせいかにこわい者がない惡さがしたいといふたとて日本第一の佛樣を燒くづすといふ樣な惡人魔王がまひとりと有ふか佛計りが堂では五百人八百

人此堂では千人二千人人ばかりでも四五千人程やき殺したその報ひ火附の大將頭の中將重衡は京鎌倉を引渡され果は衆徒の手にかゝつて七日曝され首切られた其跡が山門の脇にあれば是も翌見やしやんせこふ云ふ惡行の積りつもつた身の果は見る影のない平家のざまその上惟盛が子の六代とやらも先達てからめ取て此お寺の假家にとらはれ死罪にもなるのをば賴朝樣のお慈悲でけふよ翌よと命を延してその儘にとらへてあるげな平家にたんと家來もあれど是を助る者もなく此山門に手もかけず其儘殘し置るゝは末代平家の惡逆を人にしらせてたしなますみせしめじやとサア人の噺に聞はづり私らが樣な何もしらぬ者でさへ尤そふに存られ升る何とマア平家の奴らは憎い奴ではムり升ぬかいなア「夫としらねば女の口歯に布きせぬ長噺よそに聞なす衣笠がほいなき悲しさ口おしさ胸も碎くる計りにて忍涙にくれければなま中の事問出して黒彌吾返答あぐみはて黒サアそれも一概には云はれぬ有て過た事にはかならず附つそへつがある物何の平家計りそふ一がいに惡ふも有まい玉イヱ／＼こんな事ではムんせぬまだマア大それた

惡事があるマア第一の惡いやつと申升るは黒ア、是さ／＼問もせぬ長ばなし聞たくない置やれ／＼「聞ぬ先から耳驚かす四つの鐘ト四つの半鐘打玉あれ／＼寺中に聞へる四つの鐘はわたしらが店さし時あなた方もよい宿をおとり被成れ御參詣は翌に被成たがよふムんすどりや片附ていに升ふか「かどに水打行燈しめし道具一つも取て直さずかたへの葭簀さら／＼と引廻せば黒彌吾見かねて黒是さ亭主藏へ入た物でさへ盜たがる今の世の中夫に店を明はなして置といふはあまり不用心でないか表もさしよせて歸つたがよい玉イヱ／＼盜人の徘徊したは平家の世の時今の源氏の慈悲深い靜謐な世の中そんな氣遣ひはちつともない事よるひる表を明てをけば戸ざゝぬ御代とは今の時代でムんすわいなア「口も手元もしやん／＼と仕もふて別れ立歸ればよしない事を又いふて一度の恥に二度の口黒ヱ、忌々しい「ふさぎ兼てぞ見へにける衣笠は最前より口惜涙にくれゐしが黒彌吾をかたへにまねき衣賤しき女の口でさへ今の樣な惡口雜言御一門の御身の上世上のさがない嘲弄をじつとこらへる我夫のお心まで思ひやられて主君の仇を報ぜん爲

死する命を永らへば死に増つたる今の恥ハテ是非もない成行じやなア黒サアそこを存て平家の侍上總の景清ともいはる丶武士が西海に於て討死の場所を逃れ山林に身をかくさる丶御主人かくいふ御所の黒彌吾迄共に命を永らへをるも命おしいではない身に大望のあるゆへに衣サア其大望をはたさん爲に我夫は此間より大工日雇と姿をやつし今にもあれ頼朝が上洛なさば仇を報ふはやすけれど大切ない惟盛卿の御公達六代樣虜と成つて此寺に御座あるゆへ何卒これを奪返して恨の初太刀をさせ升たさに心を盡す景清殿黒夫ゆへにこそ主人景清まんまと大工日雇の人數に衣サア紛れ込はしながらも日雇の者は勝手ばかり六代樣を奪かへす手だてもなく仇に月日を過すうちもし六代樣のお身の上に怪我あやまちのあらんかと思へばちつ共手延にならず女は人の油斷もあれば自ら忍込み六代樣奪とらんと心をかためた今宵の思案こなたは夫と力を合せ山門に射附たる能登殿の矢がらの跡その備置ては世のそしり人の見ぬ内取捨さしやんせ黒いかにも／＼口で申事は中絶する折もムらふ眼前見するはそしりの種を蒔といふ物といふて

夜夜中御主人に申さんにもどこを尋ねん勝手もしれねばコリヤ晝の事に致そふかい衣イヤ其思案は廻り遠い一心をこらして捜しなばしんのやみとて晝同前自らは忍込み六代樣を盜む内夫を捜して取捨さつしやれ幸ひ人も靜まれば見越の松を傳ふてなりと黒ア、是さ／＼その儀計りは御免あれ御存の通り我等生れ附てげんうんやみ高い所へ上れば忽に起る病氣やれ恐ろしや聞てさへ眼が舞よふな衣ホ、、、又いつもの臆病風姫ごぜの自らさへ命を捨ての此思案夫程こはい事ならばそこに控へてゐやしやんせわしから先へ忍びこまん「そふじや／＼と身をかため松が枝傳ひ上らんと立寄所に人聲足音高挑灯(トハイ／＼と聲する)黒アレ／＼何者やら參り升ぞや衣とがめられては大事の妨行過さして跡の事黒さやふムるいざこなたへ衣黒彌吾おじや打連木陰へ忍びける挑灯に先を拂はせ梶原平三景時の奥方鬼の女房の幾船御前いはねど愛の夏化粧こなたよりは般若坊雙方行合ひそれと見るより(ト橋懸りより幾船磯の上へかゝへ帶にて家來大勢にかけ聲させ高でうちんもたせ附出る臆病口より般若坊出て行合)般是は梶原氏の奥方御家來にも仰られず御自分の夜廻り女儀のお勤近比お御苦勞に存る幾船是は／＼般若坊

殿こなた事は當寺に衆徒も多い中に心を志つた夫梶原兼て自らより御內意を言聞しあれば平家の餘類を尋出し一手柄被成たら連合が受あふて武士に取立出世のつる隨分心を掛たがよふムんすぞへ 般 成程〳〵一手柄致そふと存ずるに附て愚僧が徒弟御所の黑彌吾と申者もと平家方の郞等なりしを幸ひ某が密意を志めし惡七兵衞景淸に從がはせ賴朝公御上洛につけ此所へおびきよせからめとつて差上たらば是ばかりでも梶原殿のお手柄に成そうな物でムるぞや 幾 いか樣こりや尤な存より平家沒落以後夫景時殿も何卒してよい手柄をと心掛しが幸ひと家來番場の忠太は六代御前を虜とし御褒美に預らんとは思へ共その形りかたち男仕立にしてあれば六代ではあるまいと重忠の奥方がさゝへこさへ折角の手柄もはれ立ずその儘の客あしらひにどゞめてあれば此序でに其景淸もし此所へ尋參らば討てなりと搦てなりとかならず油斷をせまいぞへ 般 ハテ御意には及び申さぬ黑彌吾よりの密意の一書梶原殿へ御見せ置下され 一懷中より一通取出し手に渡せば挑灯もて灯影にてらし逐一に讀渡し 幾 よし〳〵互ひの手筈も上々吉粹此一通は夫へ手渡しいさいは追て何かの相談 般 然らば此まゝ 幾 船さま 幾 般若坊殿 兩人 お別れ申す「志めし合して欲惡の火影をてらし入にける跡に殘つて般若坊 般 何にもせよ手柄は此時甘(うま)い〳〵今にも黑彌吾が手引にて景淸が參つたならばつかまへて立身出世まだ〳〵その上に褒美のかねイヤ〳〵武勇に秀でし景淸め手捕には叶ふまい不意を見すまし欺すに手なし今にもあれ參つたならば ト此時後より黑彌吾衣笠を引ずり出てきて 黑 イヤその景淸は是にをるぞ 般 ヤアそちは御所の黑彌吾してその女は 衣 コリヤ自らを何とするのじや 黑 何とするとは生ぬるこし般若坊殿兼て言ひ合した通り此女こそ景淸が女房衣笠こいつからまづひつくゝり多勢をもつて景淸めを 般 ヤア出來た〳〵愚僧もそれを案じてゐたして又其景淸めは 黑 景淸こそ此間より大工日雇の中に交はり賴朝公を待てをるのさ 般 ヲヽよし〳〵夫も出來た先づ手始に此女子を 黑 女乍らも手ごはい奴力を合せてかゝらつしやれ 般 オッと合點 皆までいふまい 黑 衣笠サア尋常に繩かゝれ「雙方より打かゝれば衣笠笑らふて身をかため 衣 フヽウスリヤ我夫を虜にせんとそちら二人が計略で 黑 ヲヽ黑彌吾が此體がてん

が行まい般若坊と某とは徒弟どし書狀を以て玄めし合せ　般　景清めを此所へそびき出し搦とつて梶原殿へさし上てきやつも我等も立身出世　黒　かく計らはん我々が計り事何と骨身にこたへたか　般　かの書狀も幾艘殿へたつた今渡して置た目見への印は幸ひなよい手土産引く丶つて連行ふ　黒　いかにも／＼さあ衣笠うでまはせ「一度にかゝるを振拂らひ又取掛るを忠義の一心ぬからぬ衣笠左右一度に腕がへしころ／＼轉び打たりけり（ト兩人むごふ投られふらく／＼したこなしにて）　般　あらいぶかしや女をとるは我等が得ものと衣笠を手の下に引敷たと思ひの外ずんでんころりと取てほられたハハヽツ天なるかな命なるかな　黒　所詮生捕は面倒な首にして連行んぬからつしやるな般若坊　般　ヲヽ合點じや「はさみ立て切かけるをえたりや應と渡り合互ひにみがきし刄の光り月にうそぶく春日野の飛火をちらして切結ぶ二人に一人の女の手業すでにあやうきその所へ大工姿に出たちし大のおのこ走り出さゝへる黒彌吾一太刀にばつさりいはせば般若坊こりや叶はじと駈出し跡をも見ずして迯失ける何國までもと追行衣笠やれまて暫しと呼とゞめ（トあやふき所へ景清下座より淺黄頭巾手おひ脚袢上張にて走り出て黒彌吾をポンときり）　景　やれまて女房長追ひ無用　衣　ヤアおまへは夫景清殿　景　シイ（トおさへる床のめりやす）女房密書を以てしらせし如く我此程より大工日雇となつて入こめど情なや衆徒の奴原にさまたげられ眼前虜となり給ふ六代君もえゝすくはずその方我になりかはりちつとも早く奪かへせよ　衣　サアその密書を見るや否飛立つ如く來たりしを恩義を忘れし家來の黒彌吾般若坊と心を合せ事妨げて此隙どり　景　ホヽウ惡の報ひは今此ざま我は幸ひ山門に駈登り矢の根矢殼を取すてゝ能登殿のそしりをさけん其方は公達を　衣　首尾よふ奪返して見ませふ　景　ヲヽ出かした是まさかの時は（ト一寸叫き）合點か　衣　心得ました　景　忍べ（ト顏にておしへる衣笠松が枝に取附忍びこむ黒彌吾よろぼひ起て景清にしがみつき）　黒　うぬ景清め　景　うぬまだ業を果さぬかきり／＼とくたばりをらふ「笛のくさりをぐつ／＼と突ならす鐘の聲　景　ありやもふ七つ「八つ九つも我耳へはいらざりしやがて店出す饅頭屋が葭簀の陰に開く共玄らず（ト鐘をかぞへ乍ら死がいをけたなす床のめりやす玉房やはり世話なりにて出かけうかがひゐる）　景　六代君を奪返し能登殿の矢がらの跡を捨し上平家の欝憤おのれ頼朝（トきつと見へあつて松が枝へ登りける玉房さぐりよつてさゝへる一寸玉房をあて松が枝に取附忍びこむ玉房心附印籠をひらひ空にすかして）　玉　夜目にかゞやく小蝶の蒔繪まさしく小松の（ト上を見）

こんハテなアで　トこなし此見へ管絃にて　幕
此幕回廊の書割音樂入の鳴物に成り向ふより糸萩、
千草、白妙、貴船各衣裳振袖襠にて濱遊、立浪衣裳詰
の襠皆々手に紅梅櫻など折枝をもち並よく並び出る
臆病口より唐綾襠にて上下侍一人連出て 唐 おや是は
〳〵諸大名の御息女樣たちお早い御出仕でムり升る
女皆々 本田殿の御內證今日は御苦勞に存升る 唐 是は御
挨拶見受升ればゑほらしい御銘々のおさゝげもの賴
朝公にも今朝のお到著遊す筈夫近經は陪臣ながら此
度の御供仰附られ此唐綾までかよふな悅ばしい儀は
ムり升ぬ 立浪 今度の御供養に附て御臺樣のお供申先へ
參つた此立浪は父廣元が名代役 白たへ 工藤祐經が名代
は此白妙 糸萩 姉上玉房樣のかはり役は妹糸萩 貴船 父上岩
永樣の名代は此貴船 濱ゆふ 仁田忠常が替りは妹の濱ゆ
ふ 千草 千葉の助常胤が娘の千草 立浪 皆一統にお供申 皆々 御
臺樣へのお側づかへ 立浪 けふの供養にお備へ申一もと
は谷の戶渡る鶯の法華經ならぬ囀りに宿はと問はゞ
梅がえの 白妙 その紅梅に劣らじと匂ひいやますゑら梅
は東大寺の名香にまつさきかけて咲出る 糸萩 彼岸櫻の
御利益に罪を忘れし入相のかね事ならぬお誓ひ 貴船 問
へど答へも口なしの咲亂れたる山吹は井出の玉川流
淸く 濱遊 その水上を尋ぬれば葎が宿に咲出し此家櫻 千草
深山櫻も一樣に皆樣といひ合せ 皆々 おそなへ物 唐 どれ
も〳〵打揃ふて何れをとらぬ花の御供養そふいふ事
と存じ升たら及ばずながら私も一もと用意仕りませ
ふ物ハテお羨ましい　ト橋懸りより東大寺住職同宿一人つれ出て　住職 是は諸侯の
御息女達供養の時刻も最早追附假家〳〵へお入有て
暫らくの休息あれ然るべう存升る 唐 是は〳〵當寺の
御坊には御出迎ひ御苦勞に存升る 住職 此度の再建王者
の安危は佛法の盛衰に有と申せば百王の末まで四海
泰平たな心をさすがごとく箇樣なよろこばしい儀は
ムり升ぬ 唐 いざ御息女樣達には假家の內へお越あら
れ升ふ 立なみ さやふなら唐綾さんにも御一所に 唐 サ、
何れも樣 糸立 いざ御一所に 皆々 連立升ふわいなア 住職 こふ
御入あられませふ　ト始終音樂にて女形皆々唐綾住しよく同宿附そひ上手へ這入る此幕切て落す　造り
物向ふ奧深ふ二重の假御殿上手續きの二重殘らず御
簾おろし紫の幕絞りあげ橋懸り回廊にて音樂止んで
直に下りばになる右の人數橋懸りより出て來る上手
より幾船出て 幾 諸大名の息女達お早ふムんした 糸立 梶
原樣の御內室幾船樣 女皆 今日は御苦勞に存升る 幾 夫梶

原景時に成替り假家の夜廻り普請方一から十迄切て
廻る此幾ふね 唐 サア夫ゆへにこそ女中様方の紀奉行
此度の大役大體では厶り升まい 皆女 御推量申てをり升
わいなア 幾 いやもふ何ぼうほめられても腹のこへぬ
此大役見ればめい／＼花を持てゐやしやんすは今日
の御供養かな佛様へ追從さしやんすと云つたら三文
花の立がらなと持參せふもの表向の御用に取込んで
佛なぶりをとんと忘れてゐたわいなア 立浪 何とマアか
あいらしい幾船様の御詞ではないかいなア 濱ゆふ ほん
に梶原様にはよふ似合た御夫婦じやわいなア 千草 えて
あんな顏で寢所へ這入ると夫は／＼云みしつこい物
じやげな 幾 こな様達はさまざまの事をいはしやんす
がの 皆々女 でも噓じやなし 幾 コリヤ聞てはゐられぬ
トおこるを唐あやとめる 唐 マア／＼お待あそばせ今のはほんの座
興もふ御了簡遊ばせいなア 立 今のがお心にさはつた
ら 糸皆 一統に 皆々 誤つたわいなア 幾 いはしてをけばさ
ま／＼の事 トむつとしたこなし上手より姫四人附六代の子役前髮羽おり丸ごしにて連出て 姫四人 幾船
様始何れもさま □同 お揃ひ被成てお早い御出仕 △同 先達
てよりとり子と成たる此お子 ◎同 お心のむすぼれぬ様
○同 なぐさめ申せと御臺様の 四人 仰附で厶り升る 立 ヲヽ

お情深い御臺様の御仁心何國の誰が子か云らね其平
家の若君六代御前と疑ひかゝり 糸 先だつてから此御
假家に賓同前ほんに思へばいとしい事 幾 六代御前は
平家の嫡々敵の末は根をたつて葉をからすと家來番
場の忠太が召とつて參つたを早速縛り首にも被成そ
うな所今にその儘助け置あまつさへお膝元に御飼ふ
よふに遊ばす政子様の御心底一圓わたしは呑込ぬ夫
平三殿が聞れたら宜しいとは申されまいよ 立 そりや
幾船様の御了簡違ひ六代御前は姫ごぜの筈なるに召
捕たあの子は男尤髮のゆひよふ衣裳附は女子に似せ
て誠は男の紛れ者 糸 立浪様のおつしやる通り姉上様
のお詞にも誠の六代やらにせ物やら云れぬ物をうか
／＼と殺しては世上の嘲り 白 天下の武將の御眼力が
違ふたと有ては末代迄の誤りとなる 貴 夫ゆへ正體の
しれる迄は北の方様のお預りおとなの囚人同前に嚴
しふ縛り 千草 もし死だその時に六代でなかつたらまん
ざらの無成敗 濱ゆふ 夫ゆへに詮議の間お側にいたはり
置給ふはさすがは公の御政道御尤な事じやと 六人 私ら
は存升る 幾 ホヽヽヽそれはあんまりお前方の先ぐり
其男の子が六代といふ證據は敵の末でも女はゆるす

とわざと女子の子に仕立て置た惟盛が計略のお氣の附ぬ北の方樣ではないがム、聞へた日比から仁義ばつた重忠殿の御内讃政子樣へ勸めこみ六代を助けふと思はしやるに極つた 唐イヤモウシ幾船樣玉房樣が此所にお出ないとてその樣におつしやらず共宜しい事ゆる〳〵と詮議してもし六代に極つたらば何時どふせふと儘の事こりや政子樣にも玉房樣にも深い御了簡あつての事とサア私共は存升る 幾唐綾だまりやまたもの丶女房に批判は受ぬだまつてゐや 唐おつしやるに及ばぬ陪者の本田が女房お前は又梶原樣のお姚にお手の掛つた幾ふね樣奥方がお果被成ると引上げられて仔細らしい後連のおかもじ顏 幾ヲ、せいでわいのひの臓の強い平三殿わしが色香に迷ふての附ゐ年よりの男程猶かはいひイヤ又夫の氣立のよさほんに虫一疋もえ丶殺さぬ 唐ヲ、取わけげぢげぢは猶大事に被成てゞ有ふ 幾何が何といやる今ひとことといふて見や 唐ハイげぢ〳〵に連そふ百足御察 幾いや推參な口答へ（ト兩人きつとなる）立足は忘たりはしたない 五人もふ了簡遊ばせいなア（ト皆々雙方をしづめる幾船びんと顏をそむける向より上下侍走り出て）侍申上升る相州の住人箕尾の谷四郎國時殿北の方樣には御訴訟の筋有て御門前にひかへられしが是へ通し升ふかいかゞ計ひませふな 幾ハテ心得ぬその箕尾の谷は八島の軍に不覺をとりおめ〳〵と顏出しもならぬかして軍場より直に逃て鎌倉へもよふ歸らず何を功に北の方樣へ訴訟だて 立然しながら又いかよふなる事ともしれず自らと幾船樣是に殘つて仔細を聞升ふ皆樣は奥殿へ 糸そんなら立浪樣 白貴幾船樣にも後程 皆々おめにかゝりませふ（ト歌に成り五人に六人姚四人附そひ上手へはいる跡に唐綾幾船立浪のこつて）唐それみをのや殿を是へ 侍ハツ箕尾の谷國時是へお通り被成い（ト言すて遣入る）箕尾の谷ハ、ア「武士の取傳へたる梓弓弦をはなれし箕尾の谷國時浪人せねど心からおづ〳〵庭に打通り（ト花道より箕尾の谷上下大小にておづ〳〵と出て花道にて目禮し本舞臺へ來りて）三ハツ是は〳〵大江の息女梶原の奥方久々の對面先以て御健勝にて珍重至極に存升る「いへど目禮忘たばかり誰が挨拶をする物なければ 三イヤ夫にムるは本田の内證唐綾殿先々こなたにも御けんしやうにて珍重に存る今日某推參のいたしたは御訴訟のむね有ての儀何卒北の方へ御苦勞ながらお取次たのみ入る「もみ手をすれば氣の毒顏 唐ても扱もよく〳〵の事なりやこそ陪臣の女房づれにおたのみあつと申たいがヱ、申

さぬ壇の浦にて平家の侍惡七兵衛景清に出合ひさん〴〵に打負源氏の勢にひけをとらせし箕尾の谷四郎殿のお取次はえゝ申さぬ餘人をおたのみ遊ばしませ「すげなく立て入ければ返答一句も上らぬかしら面目なげに見へけるが 三さこそ〳〵臆病武士と侍の中に嘲らるゝは覺悟の前その言譯にはあらね共一旦鎌倉へも立歸らず戰場より直さま出奔せし麁忽の段々我君の御いきどほりお詫申上んため恥をすてゝ參つたり一寸なり共北の方のお詞を掛らるゝよふ武士の情立浪殿幾船殿何卒北の方へおとりなしを賴存ずる「思ひ入たる風情にもむごい幾船けら〳〵笑ひ 幾ヲヽ笑止や箕尾の谷殿尤今出頭第一の景時取なしを致されたら御機嫌も直らふけれどマアならぬ聞ば八島で景清にむげつせうに投附られ首の骨折つたげながよふ爰までムんした侍の風上にも置かれぬ人此場に平三殿がゐらるゝなら大小もいであほう拂ひ手よふ町人になつた方がよかりそふな事まじくじせずといなしやんせ誰がマアそんな人のとりなしをアヽあたなめた「ぴんしやんとして奥へ行跡の無念はいかばかり涙はむねにせまれども身の誤りにせひもなき

三此恥辱を雪がんには景清が首取て上覽に入れんと晝夜心を碎け共行衞しれねば詮方なし此うへたのむは立浪殿何卒武士ゝ人助けると思し召御取次賴み奉る「くやむ心を思ひやり立まくるも引も軍の習らひ景清と箕尾の谷殿まさりおとりのない勇士すこし汀へ引しりぞきしをはや臆病と人のいひなし何事も運次第政子樣へは玉房樣諸共ひそかに宜しふ申上ふ只今はおひかへ被成とにかく時をまたねばならぬ追附お手柄遊ばして再び歸る國時殿サアとくと御合點が「心をやぶらぬ廣元が娘はさすが利發なり四郎もすこし力を得 三然らば何か御前宜しく立いさい心得ました 三おさらばでムり升る「別れて歸る御假家の夜はしん〳〵と トチクリにて箕尾の谷橋懸りへ立浪に上手へ這入る本謠つりがねに一せい 更行鐘の聲立て音も烈しき嵐かな「あらしを防ぐ笠ならで人目をしのぶ薄絹に女姿の腰細く肝ふとざやの太刀脇ばさみ 假家をめがけ忍びよる怪しと兼て氣を附る宿直の女中の見るぞともいさ白鷺のさし足に駈入らんとする後より ト此内衣笠著流し一腰さしかつぎ著伺ひ來て假家へ行ふとする雙方より幾船廣綾長刀を持婢二人づゝ連出てきつととめる 唐マア〳〵待た何者なるぞ「聲かけられて返答なく引歸さんとする所を同じく幾船あまた

の姥 幾御假家まぢかふ窺ふ曲もの 皆姥マア／＼まつた
待やいのう「立ふさがればふり拂ふよは腰ゑつかと
いだきとめ 唐待た／＼本田が女房唐あやがこふ抱留
た名をなのりや「留たやらぬをふり放し又引返すつ
まさきにすつくと立たる幾船が手取にせんと附廻し
幾待たやらぬ梶原が妻の幾船こふ抱留たが動いて見
や「邪魔しやんなとふり拂ふはぎもあらはのふとり
じし矢筈に組は梶原ふうこなたはゑつかと本田に組
あまたの姥おくれじとかゝるをすかさず切拂らひ御
殿間近く駈よる所に ト立廻り有て皆々切拂ひつか／＼と正面の二重へ行かけるみすの內より 玉景
きよき月にかざすや三笠山 衣ヤヽなんと玉供養に參
りし旅の女最前顏を見ゑつたる下賤の女改て對面せ
ん ト天皇立に成てみすを一面に卷上る正面に玉房衣裳襠にて兩方に糸萩立なみ濱ゆふ千草貴婦白妙長刀たばさみ片手に手燭さし出し燭臺に灯ともし澤山有 衣ヤアこなたは 玉山門のほとりにて下賤
の女と見せたるは兼て自らがはかり事忍びこむ曲者
も有んかと御寢所を守護の役 唐さあ女の身にて太刀
を佩人なき夜を窺ふは 幾必定盜人の引入り眞直に名
をなのりや 皆々さあ有體に白狀しやなんと／＼ トきつと詰よる
衣イヤ全く盜賊ではムりませぬぞ 幾夫でなくば平家
の餘類 唐源氏の御家に仇せん爲か 衣イヤ全くもつ
て 幾唐さなくば何もの 衣サアそれは 唐忝なくも賴朝公
の北の方の御座ある御殿へ 幾見れば女子の分として
大膽不敵な曲者め 女六人さあ有體に白狀しや 姥四人返答
は何と／＼「詰かけられてハヽハツト白洲にどふと
打ふして 衣名のるまじとは思へ共かう成からはせひ
に及ばぬ恥かしながら自らは賴朝公いまだ流人にて
おはせし比假のお情を受ました者でムり升る「聞て
一度に驚く女中玉房御ぜん詞を改め 玉ムウすりやそ
なたハア我君樣がいまだ伊豆の國に御流人の折から
衣アイいやしい此身を勿體ない賴朝樣の假の契り一
夜を二夜と重なつてお情をかふむつた者でムり升る
幾すりや此女子を我君樣ががをれ 玉ハテお情を受た
女子よのふして又その女中が何故爰へ 衣サア忍び入
たは面目なやたしなまれぬは女子の淺はか悋氣嫉妬
の心から政子の方のおはさねば我も君の北の方と敬
まはれ御寵愛を蒙りて數多の人にもかしづかれんに
とふと思ふよりいやます無念さ妬しさとてもそはれ
ぬ此身ならばせめて政子の御かたを一太刀なり共恨
の刄報ふて我も死ん物と及ばぬながらも女子の念力
我身乍らも內心如夜叉佛の罰も恐ろしや赦してたべ

何れも様「赦してたべといふ聲も涙にくれ〴〵ゑみ〳〵と思ひこんでぞのべにける幾船は高笑ひ幾ハ、ヽあの爰ないつはり物我君様が此所にお出ないとてあんまりな出る儘何でもあやしいその女「縄かけんずと飛つくを玉房暫しとおしとゞめ玉マア〳〵まつた幾船様我君御浪々の折からお手かけられた女中は數多成程そふいふ事も有ふお情受し人とあれば政子様とても同じ身の上畠山重忠が奥玉房が聞とゞけん幾ア、是夫ではあまり玉ハテマア自らにおまかせあれサ、女中爰へ〳〵「サア〳〵近ふと和らかに打てかはりし詞附女皆玉房様がおめし被成る近ふよりや衣ノウ恥かしやお前達のそのお詞に恥入て何とお傍へ行れふぞ「逃んとすればおつとりまき唐くはしふ様子をきく迄はめつたに爰は逃しませぬぞトきつとかこふ衣笠油断せぬこなし玉イヤ女中逃るに及ばぬ悋氣嫉妬は政子様でも同じ事女の身には相互ひ政子様にも申あげ爲あしふははからはぬ衣夫でもあまり恥かしい幾そんなら夫はいつはり事か衣イヤ全くそふでは唐但しは平家の餘類の者か衣イニ何のマア女皆々そんなら下に居やいのふト是にて衣笠下にゐる玉戀を寢取られ腹立は道理〳〵その腹立を納るよふに仕様がある政子様になりかはり北の方と我君の中に生れし若君あら御寵愛の御子なれど今すつぱりとそなたに渡そう幾ア、是夫では玉サア政子様の祕藏の若君あの女中に渡すが計略イヤ渡すが潔白其若君をそなたにやれば悋氣嫉妬の一念も晴そふな物じやぞやそれ唐綾唐ハッ畏りました「一間の内より六代御前手を取て誘ひ出衣笠が前にすへ唐サア玉房様のおつしやる通り大切な若君なれど幾そなたの心の納るやふ性根をすへて受とりやいのふ眼の先へ突附れば顏見て悔り衣ヤアおまへは六サアろく〳〵に夜目では見へかねど頼朝様の御公達を此様にかる〴〵しふ玉サア政子様の御子なれば御世繼にもなる時はいよ〳〵そもじがほむらの種悋氣の根をたつ潔白にそもじ手にかけ若君を目の前で殺してしまや衣ヱ、ヱイ玉ハテ夫で悋氣が納らふがな衣ヱ、めつそふな勿體ない玉もつたいないとは何の事唐惜しとおもふ御臺の若君幾すつぱりと殺しやいのふ皆々サア〳〵早ふころしやいのふ「サア〳〵早ふと口々に突附られて衣笠は衣イヱ〳〵〳〵此お子を政子様の若君とは大きないつはり唐そんなら誰が子ぞ

衣サア此お子は・幾平家の公達六代御前か衣サアそれは「ハツと計りに俄の轉動すは曲者とそふ〴〵が中に取こみ詰かくる玉ヲヽ是で大方様子は志れたさり乍ら假にも我君の忍び妻と名のるからは疎略にならぬ大事の珍客そふかそふでないかは今宵の内我君様が御到著遊ばしたら志れる事衣すりや私を此儘で玉君のお妾其若君と御一所にあの一間で休息さつしやれ皆々イヱそれではモウシ玉ハテ隨分いたはり御馳走申しや「仰せは情の貴道具衣さやうなればは玉房様玉それ客人をともなや幾唐さあ尋常にト六代と衣笠を唐綾幾船越四人かこふ玉房顔にておさへるこふお出被成ませふ「詞はゆるせどゆるさぬ心逆ばきらんず居合腰毒蛇の口の假家の中臆せず奥へ入姿とつくと見送り玉房御前ヽ女形六人玉房跡にのこつて玉誰ぞあるか衆徒達を是へ呼びや女六人衆徒の面々是へ詰さつしやれ「御めしあれば衆徒の面々何事やらんと駈出てト橋懸りより四人の衆徒走り出て岩くら描僧始一山の者共同三人罷出升たが御用ばしムり升かな玉ホヽウ衆徒達を呼よせしは餘の儀にあらず此頃大工の中に人にすぐれし丈夫の男心得ずとめを附しに最前あの回廊へ忍びこみしを見屆け置た法師に似合ぬ役乍ら疵附ぬよう搦取高名あれ

玄界ハツ心得ました何れも回廊の裏手へ廻り法幾曲者をからめとり大日御ほうびに預らん岩くら何れもムれ「得物〳〵の道具を引さげ裏手をさしてぞ走り行玉房始女中達長刀そばめ立たる所へ駈つて來る箕尾の谷國時すは曲者と數多の女中おつ取まくをふり拂ひトバタバタにて箕尾の谷上なもはれもヽ立取て走り出る女形六人さヽへるふり拂らへ三こりや何れも此國時を何としめさる女六人ヤアこなたは箕尾の谷殿三ヤアそれにムるは重忠公の奥方玉房様ハヽハツ「平伏したるその中へ追々女中があはたゞしくト上手より以前の六人出て幾唯今の女一間に押こめ置たる所唐椽の下に穴有て六代御前奪ひとり女四人一向行衛は相知れ升ぬ玉何はや拔道より逃しとやヱヽ殘り多い一間より箕尾の谷國がみをなし三扨こそ〳〵相ずりの大工めが拵へ置たるその拔あな惡七兵衞景淸此邊に徘徊なすよし聞たるゆへ召取て身の言譯仕らんと今宵此所へ推參せしにその大工とやらんは察する所景淸めに相違あるまじうぬひつとらへて我君へ御勘氣の御詫願はんそれ「のがしはせじと勢ひこんで駈出すを玉ヤレまて箕尾の谷國時殿自らそれと志つたは最前大工が回廊へ駈登りしその時我手に入りし此印籠以前の印籠をほふる三こりや

是小蝶の蒔繪蝶は平家の紋所すりやいよ〳〵景清に相違はないわへ玉サァ自らも始より景清夫婦と玄つたれ其大佛供養の靈場にて人を殺すは我君樣の御本意ならず三成程是も御尤玉一まづ此場を助け歸すも御臺樣の御內意我君の御仁心を玄らさん爲今宵の時宜でくはしくしれた誠の六代景清と二つの首は餘人が討てはこなたが武士が立升まいぞや三夫ゆへにこそ此身のかんなん玉サ、そこを思ふて此役目は箕尾の谷殿こなたに申附よと御臺樣の御內意隨分共に心をつけ二つの首を討とつて賴朝公へ御對面申上る家づとにする大事の役目三すりや此國時にそのお役目を幾イ、ヤそふはなるまい景清をめしとるは夫の役目箕尾の谷にはゆるされますまい玉是は又聞わけない國時殿にはなぜなりませぬ幾八島の浦で出合ふた時赤恥かいた箕尾の谷が玉さればいなその恥辱を雪がふ爲幾そりやあんまりな依怙ひいき玉私の計らひならず御臺樣よりの御詞を背ひてもくるしふないかな幾サアそれは玉幾サア〳〵〳〵玉何とでムんす幾船樣幾エ、いま〳〵しい玉こふいひ渡す上からは心得たるか箕尾の谷殿「仰はおもき大將に成かはつたる女中の嚴命三ハ、ハッ〳〵有難き玉房樣の嚴命時日を移さず六代景清追附討とりお目見へ申さん女皆ちつとも早く出立あれ三心得ました何れもおさらば「打立上れば箕尾の谷にちからを附るも武士の妻錆浪人の討手の大將追附恥辱をすゝぎなばめでたく凱陣〳〵と別れ〳〵にト三重にて幾船きせん玉房とめる此見へチヨン〳〵かへし造り物一面に朱の回廊上より一面に松の釣枝下るドン〳〵太鼓にて直に般若坊衆徒四人共各覆面にて太刀を佩長刀をもち出て行合ひ玄是は般若坊殿貴僧は先程より何れにムつた一遍とさがし升た般いやもふ既の事に冥途へ走らふと致したがよふ〳〵足にまかして此世へ又引返してムる法そりや何ゆへでムる般何ゆへ所ではムらぬ此間より計略を廻らし置た景清め大工の中にまざつて女房衣笠めを手取にせんと致した所をすつてんころりと死ずかめに逢升た岩よふ〳〵すりや女中方より言出されし大工といふは惡七兵衛景清めで有たか般何すりやはや女中方より言出しがムつたか日大いかにも山門の饅頭屋をしてゐた女は重忠殿の奥方玉房殿でござつたはいの般ヨウ〳〵〳〵あの嚊が玉房御前であつたかァ、終ひ〳〵玄此上は景清め

をかり出し我々より搦め取て褒美に預らふではムらぬか般若坊殿 般イヤ〳〵拙者はまだ先刻の虫が納りませぬ愚僧に構ずと我一に働かつしやれ 岩然らば一山の者共に申附かり出しませふ 大日さやふ致そふ何れもムれ ト又ドン〳〵太鼓になり般若坊と両人わかれて東西へ這入る太鼓かすめる音樂入の鳴物に成り回廊の上より景清以前の形りを脱かけ下好みのなりにて松のつり枝をつたひ一寸額を出す岩倉坊玄界坊出でゝ窺ふ景清ずつと下りてあたりを窺ふ衆徒兩人長刀と棒にてきつとかこふ立廻りあつてポン〳〵と投きつと見へ此時下手ゟ回廊を切りぬき衣笠是もぬきかけぬき刀にて片手に六代の手を引ずつと出る大日坊法藏坊是に詰て出てかゝる景清ポン〳〵と切る玄界坊岩くら坊又かゝるを景清はげしく立まはつて四人共殺し互ひにさぐり乍衣笠六代にほふかむりさせて抱上る景清よく〳〵すかし見て 衣おまへは我夫 景して六代君は 衣則是に 景ヲ、出かした早ふ 衣がつてんでムんす ト下手の切やぶりより箕尾の谷好の形りにて窺ひ出て衣笠にかゝる衣笠ふり拂ふ直に景清にかゝり鑄をぐつととる是より兩人面白き立廻りの内衣笠六代を抱たまゝ花道中程迄行大日坊此中へ起上つてかゝるを突やり景清花道へツカ〳〵と行箕尾の谷すかし見て 三正しくかげ清 景ヱイ ト手裏劔を打箕尾の谷程よく大日にて受とめるおの〳〵宜しくひやふし幕

幕外景清手にてゆけとする衣笠六代を抱向ふへ這入る鳴り物打上る

右東大寺の齣は所謂口幕にして次幕への仕込なり次幕にて景清いつもの大佛供養の容となる齣いと長ければ下の巻終に出す好人かならず次幕を讀て佳境に入給ふべしと云々

西澤文庫脚色餘錄二編中の巻 終

西澤文庫 脚色餘錄二編下の卷

目次

西澤文庫 脚色餘録二編下の巻

西澤綺語堂李叟著

濡髪長五郎の事實

上州沼田の城主土岐丹後守の家士岩村長右衛門といふ者故有て浪人して城州八幡に蟄居し鄙倉與惣兵衛と改名し手跡の指南を業とす其子長五郎生得角力を好み同所荒石斧右衛門と云角力取の養子と成り荒石長五郎と名乘けり（八幡の荒石斧右衛門は其比角力の親仁分なり）と此長五郎若氣の血氣に任せ喧嘩口論を好み常に水にて浸し頭を手拭にて捲く尤是用意の爲也濡たる紙は及物とても通る事なし異國にては紙具足とて水にて數枚の紙を身に張けるよし此理を以て長五郎も常に濡紙を額にあつる故に荒石といふ名乘はあれども諸人濡紙々々とて呼にける土岐丹後侯大阪御城代の節此濡紙長五郎難波浦にて服部惣左衛門といへる侍と喧嘩をなし終に右惣左衛門殺して親里八幡に身を潜みけれ共天網のがれがたく入牢に及ぶ相撲大全に攝州出産名高き關取の部に濡髪といふ名乘も見ゆれど是は別人にて長五郎の角力名乘は荒石と言とぞ一說に河州觀心寺にて召捕るとも云り享保十巳年豐竹座淨瑠璃昔米萬石通に出し後雙蝶々曲輪日記と增補せり又云濡紙助命して城州鞍馬にて大阪屋長右衛門と改め宿屋商賣をし晩年に終ると說有ゆへに寛政花洛清水夜開帳といふ狂言に八岩源五郎は此濡髪の悴なりと脚色めり實なりや不知

茨木屋幸齋の事迹

翁草に曰浪華新町茨木屋幸齋事身の程をもしらぬ奢を極め己が居間は金襖水晶の障子輝きわたり恰も宮殿の如く朝夕掛盤にて饗膳の式に等しく日々に献立を以て料理を伺ひ庖丁人山海の珍味を整て是を饗す數多抱への傾城禿妾にて配膳給仕すおのが心に叶はざる料理をば足を以て膳を蹴返し身には錦繡を衣とし豹虎の敷皮梨子地の曲彔其過奢高位の人にも越其比八文字屋自笑が出せし草紙にも傾城寵將軍と題して五冊物にて其侈りを書り我家の内に公儀地の有しに夫へ能舞臺を建て常に猿樂を翫ぶ斯樣の類重々超

過して享保三年に廳所へ召呼るゝ處虚病を構へて出ず仍て先手錠をかけ所へお預けに成幸齋家内を改めらるゝ處金銀財寶の高は未考傾城の抱へ太夫三十七人引舟三十七人禿三十七人轉人四十二人禿四十二人其外局女郎など大勢有之凡家内人數五百人計也同九月三日幸齋幷悴多助牢舍仰附られ御詮議の上大阪三鄕御構に成り而して幸齋は京都島原に來て娘の名前にて暫らく潜居しけるが大阪にての奢の事喧く人口に在て京にても粗御沙汰有くらゐなりければ島原にも住がたく跡を隱して去りぬ悴治助は親の奢に懲りて自らを愼み島原へ來て揚屋町の者共に是を歎きおのがたづきを此地にて始ん事を賴む彼が生質心ざま優にして風月を翫び俳名呑鯨と號す又諸業の道にかしこく一廓の者に睦ぶ事類ひなし故に廓中一統に贔負して桔梗屋といふ潰株を與させ渡世を初させけるに日を追て繁昌し島原にて名を得し上林一文字屋の類ひの女郎屋は皆衰へ絶果て桔梗屋のみ榮へ呑鯨は寛政の始に世を去り躮呑鯨是を嗣で今にては一廓凡呑鯨が有となるが如く家內二百人暮して時めきける呑鯨兄弟是又後年に至り家號を改め大阪屋彦三郞とて新町にて傾城屋を再興し今に彼の地に在り又浪華青樓志に幸齋の宅地は吉原町大西佐渡島町茨木屋四郞三郞十字街吉原町行當入口有に有能舞臺は少々東に有別に入口あり是より西行當り迄築山なるが故に山屋敷と呼ぶ庭中の佳景任レ侵二康樂巖一不レ及レ談日不レ及レ瞬築山の景最美なり其比戲作に幸齋一件を能の番組とす

能番組　大きなせんざいさんじそう　身代上るにきはまる　難波一もんの異見を　開す座頭　身のはてなんと　正尊　初めは手錠今は　縄なひ　行末御意な　松風屋　終に籠へ　入間川所跡は闕に　あふひの上　惡事は四方に　名取川　流罪なら　ば浮舟　家内の者は　ゐぐひ　いばら木や　みだれ　以上　享保五年

豐竹座淨瑠璃に山枡太夫吉原雀といふ戲文は幸齋が奢侈を山枡太夫が擬して作れり作者は紀海音也歌舞妓は寛政中にけいせい靑陽鶴三つ目入方村與惣太夫の奢もけいせい遊山櫻三つ目小西如淸の奢の場も此茨木屋幸齋が奢侈を脚色したる物也前々の編にとく木津屋吉兵衛、淀屋辰五郎が奢侈も後々は人々に混じ思ふものも多かるべし

五人男雁金の追考

前にも云雁金文七、極印千右衛門の墓は高津正法寺俗に日親法華宗なり境内に有碑面に元祿十五壬午八月二十六日法受院順亮日隨臺石に雁金屋と有是に並びて元祿十五壬午八月二十六日妙法經力即身成佛薩達

摩圍志靈俗名極印屋千右衛門と有又千日の墓所雷神木の東手に五人男の石碑墓の中に有しが近來置變しか見えずなりけり天王寺の境內藥師堂に雁金文七が奉納せし八島合戰の繪馬有しが享和中伽藍回錄の時燒亡したりと古老の曰此繪馬は貞享五年奉納と書記し有て文七が十三四の比也と廓中一覽に云佐渡島町備前屋菜抱へ女郎清川は五人男魁主雁金文七より名を發す實は清瀧とて卑品の妓也名を替狂言に用ゆる事勿論にて元祿中の妓也宇治加賀掾の院本雁金文七に清川と書けり其文に云「戀の山情の海の深うして全盛の船漕寄する浮氣の湊婆の市智あるも愚なりけるも色の手習らひいきかたをよねの指南による糸の結びとゞめて其人の粹となさぬはなかりけりほだしの里や四筋町夜店の灯火暗らくとも心の光り清川とて流れにしつをかけ渡す端女郎の中にても戀と云字は有明のつき出しよりも文七とかはるまいとの誓紙まで書たる文も徒らに下略是清川とせし始也亦晋子其角が句に「文七にふまるな庭の蝸牛」と云句は寂蓮の歌に「牛の子にふまれな庭のかたつぶり角あるとても身をばたのまじ」と此上の五文字をかへたるものなり此句は俠夫雁金文七が事と思ふは違へり是は文七元結をよみたる句にて元結屋文七が製は強くして切るゝ事なし其角が著せし北の窓といふ書に茅場町に角が棲し北隣の空地は元結をこく場所といふ事見ゆ文七は大阪奈良屋町雁金屋七兵衛の忰にて市中をあばれ步行往來の人に手疵を負せしゆへ元祿十二卯年四月二十三日父母より願ひて牢舍中に父大病に煩ひて五月十五日空しくなる母愛情ふかく六月二十七日救免を願ひ出牢す然るに惡事益つのりて遂に刑罰に當りて死せり世俗五人男新町にて召捕るゝ時端午の節句にて門々に幟竿立有しゆへ其竿に登りしゆへ今通筋に幟を立ざるよし云是也廓中は御用地ゆへ通筋に正月の門松端午の幟を立る事なし

小栗判官車街道の話

小栗判官兼氏横山何某に毒酒を飲され死すべき所を照手といへる留女の情にて其場を遁れ鬼鹿毛といふ名馬に鞭打て上方まで來たれ共毒骨身に通つて癩病となり紀の國熊野の湯に浴せんと車に乘つて行しと云は古くいひ來る事と見へ小說稗史にさまぐ\と出し有共時代をもつて定めず眞僞詳ならずといへ共浪

華下寺町の西田圃の中に小栗が車捨場といふ跡遺り又四天王寺の南阿部野道を車街道ともいふ元文三年年竹本浄瑠璃に作者（千前軒文耕堂）小栗判官車街道と外題して道行魂の緒綱に「天神橋を一筋にたのむ未來の寺町や口縄坂の邊りにて暫らく車をやすめける（中略）不慮の難儀に思はずも爰にとゞまる小栗の古跡車とゞめと名に響く（下略）然れば是迄にも俊徳街道（小橋天王寺邊の東の道なり）小栗街道と古人はいひ來りたれど此浄瑠璃後に古跡と定めたるなるべし縄手車と云東都の諷ひ物には藤澤寺の門前に暫らく車をとゞめけりと直したるも此車街道の道行より出したるなり後俊徳丸は河内の高安の左衞門の愛子癩病にて父に捨られ天王寺の西門にイむとは謠曲の弱法師に有より浄瑠璃には（享保十八丑年）莠伶人吾妻雛形並木宗助作（安永二巳）攝州合邦の辻近松半二作れり是もいつの時代か眞僞詳ならず兼氏も俊徳も癩病にて車に乘り故迹を遺せど何れか一人の事なるべし俊徳街道も實は中興開きし道なれば新徳なるべしとも思ふ因に云下寺町より谷町寺町へ行通路に口縄坂とは往古坂路あしく縄をつなぎあるを往來人たぐりて登りし故寺町口の縄坂と呼しが蛇坂と稱誤りたり俳諧梅の都に「雲を得て脱やくちなは坂の衣と伊豫天曲の句あり世に古迹を遺すは浄瑠璃作者に限れりと思ふ

白石噺金江の話

虚實不分明也といへ共慶安太平記と云書に慶安四卯年八月三日天王寺の東門にて切腹の者有則檢使改る所に黒縮緬の單羽織を敷物として黒羽二重の袷に梶の葉の紋附たるを著せし男指添にて腹を切其刀を首にかけて搔落し我首のたぶさを摑み刀を土邊に突立て死したる有樣前代未聞の切腹也則傍に書置一通有其文に曰

此度由井正雪丸橋忠彌が叛逆に組し大阪方の大將を承りたる者にて候正雪が身の上心元なく存山崎口へ駿府之趣正雪より成行も聞又吉田初右衞門が事も心元なく早速駈登り候所其當座に召捕られ候條殘念に存候て切腹仕るものなり此趣宜敷御披露を願上候以上

慶安四年八月三日　　金井半兵衞政敎在判

百三十年後安永九子年爲馬と紀上太郎が作の江戸浄瑠璃碁太平記白石噺逆井村にて金江谷五郎のせりふ

に我はいよ／＼此程の貴殿の指麾に隨ひて難波の浦の總大將四天王寺の東門に陣所を搆へ（中略）詞はまさにあたれるかな反逆露顯の時至り四天王寺の東門に骸をさらせど名は朽ぬ金江が義心ぞいさぎよき（下略）此文句にて金井が名も人にしらる猶金井が傳慶安太平記と云書に異説あれ共追つて說べし

曾根崎新地發端の話

前に出す曾根崎新地心中情死の續きし話に附て元祿九丙子年西成郡曾根崎村より上福島迄片原町の新地と成り其比俗新色里といひて大に繁榮の地となり色茶屋の光景又は茶代物日身上などいふ事あり元祿の末に出板せし色茶屋諸分車と云書にくはしく書たり又貞享年中迄曾根崎村の田圃に北野の火葬場有て大阪の市中に火葬の餘烟匂ひて其穢れを忌て浦江村の東今の梅田の地へ移す古老云曾根崎新地二丁目往古の墓地跡にて今も折節石塔五輪などの舊きを堀出す事ありとぞ又浦江の東を墓地として田圃を埋しゆへ埋田と云よし元祿後寶永年中は梅田橋南北の岸に茶店列なり夏より秋に至る迄諸人群をなして都四條河原の納涼を移し北野不動寺參詣人夥しく御緣日十六日を堂島米市濱方の休日と定む近世不動寺は淋しくなれ共毎月十六日は濱方の休日となれりとぞ初編心中情死を說中に（お高彌市）梅田の心中（小勘平兵衛）水の朔日の文中に梅田橋の凉に爪をあげ不動參りなど有て符合する事數多あり至て古き事は人よくしれ共中比の事は確とせし書に遺らねばかへつて珍しき心地せらるゝ也以前は繁榮せし土地と見へたり

朝比奈宗兵衛の事實

浪華雜傑集に元文の比大阪新靱に朝日奈宗兵衛と云者有しがいか成宿業にや若き時濕を煩らひ長病のうへ聾となりけれ共筆談仕方等にて事を辨ずる事速也生質俠氣有て義を立る事俗に珍らし爰を以ていかなる無賴の者も恐怖なして隨ひける此宗兵衛實子六七歲の比近所の子供遊びけるが干鰯俵高く積重ねありし上へ子供二三人登りしに八歲になりし者宗兵衛が一子を突落しけるが急處を打たるにや氣絕なしける爰に於て宗兵衛夫婦並に突落せし者の兩親も大きに驚き先呼生氣附など吹こみければ漸く人心地は附けれ共かよはき小兒の事なれば程なく死たり母親は大きに悲しみ泣口說ければ宗兵衛申やう歎は更々無理

ならね共過去の宿縁にて是迄の定業なるべし逆さまなる事乍ら香花を採て得させよと計りいひて頓て野送りをなしにける然るに突落せし小兒の父母其子を連來りて申樣子供の所爲とは申ながら其許の子息の敵は此悴也解死人に取て御存分に被成べし打殺し叩殺しなぶり殺しに被成候共我々夫婦すこしも恨みはなし御夫婦の歎き嘸かしと思ひやられて骨身も碎ける苦しみも此悴を解死人となし給はゞすこしは心のくつろぎならんと眞實見へて申ける宗兵衛は先刻より手をこまぬき默然として居たりしが莞爾と笑らひて申やういかにも御尤の言分には候へ共其小兒を解死人となしたればとて此方の悴が蘇生も致すまじ殊に何の辨もなき小兒なれば元來巧みたる事にもなくさのみ恨とも存せずしかし此方も俄に淋しく成たる事なれば我等は厭ひ申さねども女房共は女心にくよ〳〵と思ふべし所詮解死人となしても恨みもなく申ぶんもなしとて連來られし事なれば其子は有てなき物也悴が代りに此方へ申受夫婦の中の子とすべし實子よりも猶々大切に致し成長なさば我々が老の樂み此儀いかゞと申ければ彼夫婦天にも昇る心地して大によろこび嬉し涙にむせび暫らく言句も出ざりしが稍有て爺親は手を合せ此上は何事も申まじ則是まで預り置し子を御受取下されよと差出し證文の儀は如何樣共御好みに任すべしといそ〳〵として立歸りける誠に俠夫に連添ふ女房なれば斬さつぱり思ひあきらめ死せし子よりもいつくしみ深く大切に育てけると也此朝比奈宗兵衛延享三丙寅年八月八日死し法名釋玄俊と云けり此宗兵衛の俠氣の一話は赤穗精義內侍所と云書の中に神崎與五郎の傳に彷彿たり狂言には忠臣雙葉藏及淨瑠璃忠臣一力祇園曙にも大星宮內の悴と寺岡與一兵衛の悴と取かへ育ると脚色たり寶曆年間新清水增井の邊にて盲人の殺されたる事有是と宗兵衛が生得端手なる形りを好みしを混じ合せ寶曆十辰年七月竹本座淨瑠璃とし作者二歩堂三好松洛朝比奈藤兵衛喧嘩屋五郎右衛門難波橋にて子供同士のせり合より立引となると仕組お夏淸十郎の色世界を借寺子屋兵助と云盲人と朝比奈の聟と畸の寄合因果の仕組に大當りを取けり朝比奈宗兵衛釋玄俊の墓は千日竹林寺に建あるは竹本淨瑠璃座中より狂言繁昌の報恩の爲建しと云り予傳奇作書に朝比奈藤兵衛は攝州尼

が崎青山の家老に同名あるゆへ不審なりしが此雜傑集を見て宗兵衛藤兵衛の相違せる事知り再評して爰に云靭の段の淨瑠璃文句に「靭中の立者といはねどしれた男ぶり江戸流のかぶせの卷たて當世茶の帷子に髮も形も一樣の我子を先に押立て單羽織を肩に引かけ我家へ歸る朝比奈藤兵衛 下略

赤穗義臣傳作者の話

拾遺遠見錄に云大阪籠屋町に片山深淵子といへる者享保四亥年播州赤穗淺野家の事跡義臣傳といふ書を著し板行に出せしを御町奉行北條安房守殿御聞に達し近世の儀を板行に致せし段御咎有て片山氏御前にて一々申開きけれども御上意を辭せしと有て家内闕所に召上られける夫より片山氏は南谷町若狹屋何某の貸座敷を借て寓居し大野宇右衛門と改名せり一年京都北嵯峨に暫らく逗留して名所舊跡を遊覽し嵐山の風景大井川の流れを臨む折しも此川にて鵜飼船を見て總じて鵜船は闇の夜ならでは出ざる物と聞しが月の夜も鵜をつかひけるとて取あへず「大堰川月の夜も出る鵜飼船嵐の山の影やたのまむと吟じける嵐山の影大堰川へ移りて月の夜も暗き處ありて鵜飼船の出たるさまをよめり此歌に大覺寺宮樣聞し召れ大内にても叡感有しと也夫より程經て江戸へ下り相州鎌倉にて大炮を打て名を發し博學多才の者なればとて御與力の組に召出されしと也義臣傳に數多類書あれども大約板本の義臣傳によらざるはなし元祿某の年より十五六箇年を經て出板なりしゆへ一たん罪を得るといへども後に立身せしは全く義士の苦心を世にしらせし應報なるべし

長歌無間鐘の詩歌

冷泉爲村卿東都に御滯留の徒然に無間の鐘の長唄 京攝にて笠の段とも又時雨笠とも云 御覽じて詠せ給へる御歌に

思ひにはどうした花のさくとよ
いかなれは皆仇花と散失て
みのらぬ枕に秋風ぞ吹
身にぞしらるゝうやつらや
流れ行く身は浮船の瀬をはやみ
つれなくかはるおのか係
やぼならかうした憂目はせまい
戀しらぬ人は恨みも海人ならて
情の海に見るめかるてふ

いとし男はあゝ儘ならぬ
身にかへて思ふ君には幾度か
あはぬつらさも增る戀かな
首尾の相圖や手管の枕
夜半淋しをしかの笛の忍ひ音に
ことの葉殘る夏の手枕
無理な事でもとうやらいとし
くたかけの共ふしたらぬむつことに
いつはりなから惜からぬかは
なしみかさなりたのしむ中に
おし鳥のうき世をわけて契る身は
流れの末もたのもしき哉
あはぬつらさはこがれしよりも
逢ぬまはこかれしよりも待佗ぬ
別れし夜半のつれなかりけり
逢ふて別るゝ鐘の聲
あふことの嬉しきよはの間もなくて
わかれかなしき鐘の聲々
いつかくるわをはなれてほんに
はてしなくかはる枕のくるしきに

ぬるゝ袂をほすよしもかな
ほんの夫婦といはるゝならば
誓ひてしとのは草もかひありて
ふたつの星のちきりとめなん
今はむかしのかたり草
とふ人も思ひし人もあたし野の
露とや消ん昔かたりて
又浪華の桂井蒼八も此句に因て戯の詩有古文鐵炮に出る
おもひにはどうした花のさく事と
飛花更片々、片々任春風、想像君所在、時々仰彼空、
身にはしらるゝうやつらや
一葉風波上、思君夜々情、徒然年月盡、水鏡二毛生、
やぼならかうした憂目はせまい
嫣然枝上花、帶雨忽傾斜、誰豈無艶道、深山木石家、
いとし男はあゝ儘ならぬ
難哉池上月、水盡有若夫、不識來風雨、忽破桂子姸、
首尾の相圖や手管の枕
春閨只私語、深夜荷君恩、何處鹿聲急、哀情滿書樓。
無理な事でもどうやらいとし

語々可成非、言々又不非、語言二非是、蒼曉鳥參差、
なじみかさなりたのしむ中に
香閨玉露秋、今夜笑牽牛、臥見鴛鴦被、水頭非白鷗、
あはぬつらさはこがれしよりも
幽閨明月前、隔夜似經年、眞僞可疑否、唯悕促玉莚、
逢て別るゝ鐘のこゑ
涙雨滿雙袖、一葦淩遠江、逢君言未解、殘月入斜窓、
いつかくるわをはなれてほんに
枕上幾蒼曉、憂心豈不少、何時待孫朋、出廓白鷴鳥、
ほんの女夫といはるゝならば
一言更不非、豁乎鐵心閉、比翼連理契、死生同一歸、
今はむかしのかたり草
雙魚游水戲、寄語浮萍不、今日成思古、千秋萬歲龜

無間鐘は瀨川路考が一世の名譽なれば其比大ひに此歌の流行せしゆへかゝる風流も有けり此桂川蒼八は儒をもて業とし滑稽甚多き人也當世痴人傳に委しければ爰に略す

生瀨川舸筏狂言の話

貞享年中に攝州有馬郡生瀨川にて女僧一人殺害有しとの風說高かりければ其節道頓堀大西芝居嵐三右衞門座にて生瀨川舸筏といふ外題にて狂言に取組大當りし其後寬保三亥年五月大西芝居中村座にて再び此狂言を出しけり男色今鑑に云また遊地の數々新町はさら也其外端々裏々わきて野君の藪鶯道頓堀と申は前に泊船岸にかゝり船より來る人もあり陸にて來る人もあり中にも淺尾吉次郎は嵐三右衞門が座に有て器量殊に勝れ藝能時を得てしたゝるげなく初て都に登り古今新在が方に勤めそれより年々大當り終に都人の評判に上々吉の列に入れり殊更此君一家の風として抱への子供らはつかず皆々心中をみがゝれるは是野州の鴻鵠燕雀の子供の及ばぬ所也夫ゆへ淺尾淺尾とて對客日を追てつのりけり中にも安見平助といふ者日々是に因て茶屋の出入も隔心がましとてひたすら局入をして今は心も打解たりしが或時に相風呂に入るとて肌衣を脫しに淺尾指の如くなる物を金襴の袋に入て首に懸たるを見附てそのいはれを問ふにちつと譯ある事也とて是を包み語らず安見達て望めども淺尾あへて取合ず安見はひそかに金剛を近づけて樣々の次第にて不思議の物を見附たり正體いかなる物ぞや其方は知りたるらんと尋しに金剛聞て主

人はつゝみ申さるれ共既に人のしれる事なれば語つてきけ申べし先年つの國生瀨と申川原にて法師比丘尼を殺しその沙汰四方に聞へしに嵐殿是を仕組れ則法師も嵐殿比丘尼に主人なされし其時大あたり大阪うつしての見物木戸口までの大入淺尾殿出端には白無垢に花の帽子珠數手にかけ笠傾け切幕きつと出らるゝ見物大に喜びヱイ／＼御出やつた御器量今の世の希物大阪中の命とりどうも／＼とどよめきしも其中より暫らく／＼と聲をたてゝ編笠被り長脇差よはひ二十計りなるが舞臺にのつしりと上り先見物に向つて近比御見物の妨げ御免下さるべし扨淺尾殿へ申ます誠に妙なる御容ふとなづみ參らせ寢ても覺ても忘れがたしあはれ一夜の情思ひいれ是なりとて脇差すらりと拔ゆびふつゝと切て投出せり淺尾は面目身に餘り此方へとて樂屋へいれあたりまへなる藝を終ひ其後宿屋へ伴ひ歸り扨々有がたき御心底扨先御住家は何方のいかなる御身にて御座候と問ければかのお人私は天滿のあたりに居住いたし世渡りに米問屋の手代何某といふ者也と繕はぬ心中いよ／＼淺尾殿滿足にして夫より深き中となれりされ共會者定離は人間の常無常の惡風來つてかの人時疫を病で終にはかなく失給へり淺尾殿忘れ難くせめての事にと存られかの人の筐とて切て送られたりし指のさきを肌身に添へて持べしとてかの金襴の袋にいれて首にかけられて候とぞ申ける時に淺尾は其言を聞居たりしが此上はつゝみ申もよしなしとて俱に淚にむせびたり扨世の中の有樣を語り扨々淺猿しき境界士農工商の家にも生れず琴棊書畫を弄ぶとは雖も男ながらも川竹の流れの身夜ごとにかはる枕の數世渡りの爲是是非もなしされ共心はかはらめや勤めの中にも心入有べき事と存心を心にて料見いたし一分を相守れり尤抱への子供にも屹度是を申渡し斯樣にかためを仕しを置て候とて金襴表紙らでんの軸の卷物紐解かけて取出せり是を披らき見るに

起請文前書の事

一たま／＼受難き人身は受たれ共男ながらも川竹の流れの身とは生れたりされどもおなじ人心さもしき心中持まじき事

一日毎に變る枕の數々たとへ金銀を撒ちらすとも心にあはぬ客方はふつて振つけて可申事

一仲間の中にて兄弟の約束致すべからず人々いかやうにのたまふ共一人の外に誓詞書申べからざる事
一藝能は申に及ばず酒あひ座附挨拶等に心を附幷に手跡たしなみ可申事
右の條々相背き申まじもし破り申に於ては此世にては後の病を受死しては尺蠖(きむし)の虫となるべし
とぞ書たりけり安見是を見て扨々恥入たりし御心中とて倶にしめりて居たりしに金剛が心附にて吸物取肴の用意しきこんに盃をかはして夜終物語して終にその日は歸りにけり往古はかくのごとく若衆の宅へ行客の遊ぶを局入と云し也又遊女の置屋にて遊ぶも然いふ又寶永三戌年錦文流の作淨瑠璃に男色加茂侍と云有今鑑に似たる仕組也委しくは三編目に説く男色の意氣地昔は專ら流行たる事しるべし

源平鐙曳競の正本

○惡七兵衛景清 同子小七郎本名六代御前 ○箕尾谷時松○雑兵早苦逆内○同岡部亮助 ○衆徒般若坊 ○榛澤六郎 ○薩摩五郎本名本田治郎 ○娘おきせ○景清妻衣笠○秩父庄司重忠○具足屋の幸作○箕尾谷四郎國時造り物三間の間二重舞臺向ふ赤壁納戸口上手折廻り障子家體此前に小店附有此上に門口橋懸り坂塀切戸口此前に般若坂と印たる立石いつもの所門口右二重に鎧櫃三具計餝鴨居に竹の胴丸雑なる兜など大分釣下有納戸の上に鑓長刀を懸刀懸に鎧通し太刀四五本計りかけ有都て具足屋の店がゝり宜しく淨瑠璃にて幕開く昔の京と奈良坂や般若坂の片邊に明珍の幸作とて平家盛んの時よりも御免の鎧師武具商賣武家附合も物馴て六具しめたる唐びつ親仁娘おきせが商ひ上手色には武士も内甲店の繁昌時松がわやくも役に龍頭人絶なきぞ賑はしき

ト跡在郷に成り花道よりから助逆内雑兵の形にて出

から助 こりやたぞたのもふぞよ

逆助 誰も内にをらぬか

兩人 たのもふぞ〳〵

おきせ アイアイどなた樣でムり升る

ト納戸よりおきせ前垂世話女房のこしらへにて出

から助 イヤ身共は土肥の治郎樣からのお使だ

おきせ 是は〳〵よふお出被成升たまあ〳〵おかけ被成ませ

逆 イヤ構やるな〳〵身共參つたは外の用ではない御主人が桶皮の胴丸が急にお入用だ明日旅宿へいろ〳〵取揃へて持參せよとの仰だ

おきせ ハイ〳〵夫はマア御苦勞樣でムり升た

から助 何と逆内一寸見ろさすが具足屋の娘だけで夜軍が功者らしい屈覚の若武者

逆 そふ共〳〵顏の色の白糸威といひ花々しい武者振一寸見ても草摺も

とからぞつとふるい附よふなわい（から）こふいふお敵と一騎打が仕たい物だて（おきせ）ホヽヽヽ何をじやら〱とおつしやり升やら（から）何のじやら〱でない八寸胴返しの此鎧通しでぐつととゞめがさしたい事だ逖コリヤ〱から助其武者盡しの序でに思ひ出した身共ら二人が黒皮おどしはどふする（から）ヲヽほんに思出したコリヤ〱女性此男とおらとに合そふな黒皮威の鎧が所望だ代物は手柄してから相違なふ拂ふ程に逖随ぶん直段を働いて身共ら二人りに賣てくりやれさ（おきせ）ハイ〱お安い御用で厶り升る此内どれ成とお好のをお取なされませ（ト店に釣たを見せる兩人よつて一つ宛とり上）（から）是々是でちやうど身たけもよし逖追附高名手柄をしたら此代物は望次第じや（きせ）ほんにあなた方も先達ての八島の軍にお出なされ定めてよい手柄を被成たで厶り升ふなア（から）ムヽ何か身共らが手柄をまだ聞ぬか逖ヱヽ夫を聞ぬと云事がある物かイヤモ餘り手柄の數が多くてなふ売助（から）イヤモ口へほうばつて言盡されないが先かいつまみて語つて聞そふ手前が手柄の花々しさをヲヽそふだ思ひぞ出る壇の浦（ト上るりの様にいふ）逖コリヤ〱おらが手柄からまづいはふ何が一の谷の逆落

しに敦盛の首を打夫から藤戸の先陣をして扇の的を射て落すその勇力の甚しさそこで我名をはやく逖内（から）おらが手柄は又格別薩摩の守忠教を討とつた岡部の売助とは身共が事だ其上手柄と云は能登守教經が矢面にたち八艘飛（きせ）それはマアいさましいしたが能登守が矢面に當つてよふお怪我をなされませなんだなア（から）ヲヽサ既の事に討死する所を逖旦那が練つた膏藥で「達者でかへつたもふ歸る（兩人）おむすさらば「聞はづゝたる軍場の鐵砲放して立歸る（ト兩人鎧を持ちて橋懸りへ這入る）（きせ）やれ〱まゝの拵へ最中へ折悪い店買ひそれはそふとつ様は時松を寢さすてゝ最前からまだおめがさめぬがとつさンヽヽ（幸作）ライ〱起てゐるぞサア孫もこい〱（ト合方になり納戸より幸作堅親仁のこしらへ時松の手を引出て來て）やれ〱孫めと二人りよふ寢てゐる物を今の物買がやかましふぬかして扨もみしり越にむごいめにあはせをつた（きせ）さいなアその上手柄噺するで出たらめな事計り（幸作）今言ひをつた忠度卿を打たは岡部の六彌太又教經殿の矢面に立て討死したは佐藤繼信ア、あつたら忠臣をおしい事じや（きせ）とつ様それに附ても氣にかゝるは夫箕尾の谷四郎殿此子と私をお前に預け軍に立てからも

ふ二年もふ八島の軍も靜まつて大名衆も追々鎌倉へお歸りとの噂それに夫箕尾の谷殿計り今にたよりのムんせぬはもしや織信殿の樣に討死でもなさりやせんかとそればつかりが案じらるゝわいなア 幸ハテわつけもない箕尾の谷程の侍が討死したら矢より早ふ聞へる筈氣遣ひしやんな追附手柄してどつと大勢の家來をつれそちと孫めを乘物や馬で迎ひにくるで有ふ何も案じる事はないノフ孫よ嗅樣に何にも案じさつしやるなといへ 時松是かゝ樣おつゝけとゝ樣が戻てじや程に戻らしやつたらよい物買てもろて下されや 幸ヲヽそふじや／＼イヤ又緣といふ物は味な物前方箕尾の谷殿がこちの内へ具足を誂へに毎度見へてふとそなたを見てもよい娘じやと思やしやつたが爰の娘をおれにくれといはしやつたれどおれも獨り娘の事なりや遠いへはやりとむなし段々と斷いふたれど又われもみをの殿に惚たかして遠いでも大事ないたつて行たいやつて呉とたのむゆへ其時分にはまだ母親も生てゐたれば娘があの樣に賴む事也やつて呉とお婆々の賴み夫から國へ連ていなれてコヽ此時松といふ子まで產だれどさすが侍だけで町人の娘とは

緣組も出來ず妾がはりの姒同前去年の春平家追討の供して登つてムるに附そちも久しぶりで戻りたがる孫を連てこちの内へ預け直に軍場へ行れたみをのや殿緣あればこそ町人のおれが箕尾の谷といふ侍を聟に持追附又大名になる孫の時松おりやもふ夫が嬉しふてならぬわいの 時是々祖父樣とゝ樣のゐやしやる八島へいてわしも軍がして見たい連ていて下されいのう 幸ヲヽ出かす／＼イヤ又侍の子とて朝から晩まで切合事計りしてゐるがコリヤ孫よ八島へいてももふ軍は終ひじやそれよりやつぱりいつもの樣に内でせい きせそふとも／＼内で近所の子をよせて軍するのがやつとおもしろいなアとつさん 幸そふじや／＼坊主よよふいふ事をきく物じやぞ 時そんならとつ樣を爰へよんできて下されいのふ きせサアそのとゝ樣が戻らしやらぬゆへ母も案じてゐるわいのふ「夫思ひに胸痛表へ又も來る侍 ト西の通ひ道より榛澤六郎野袴ぶつ裂にて家來一人連出て門口より はん澤妙珍の幸作は在宿か案內いたせ 家來ネイ／＼幸作は內に居召るか賴もふぞよ 幸是は／＼よふお出被成升たまあ／＼是へコリヤ娘茶をくめよ きせアイ／＼ 牛澤ずつと通るおきせ茶を出す 牛イヤかまやるな／＼まだ急なる御用も

あれば心せきな身は畠山重忠が家來然るべき具足が
求めたいが 幸 へイ〳〵鎧の儀ならば御好次第甲は桃
なり烏帽子形しころは饅頭わりじころ立物にも前立
脇立流儀によつて忍びの緒の結びよふはいろ〳〵箕
尾の谷結びもムり升る 半 ア、是々その箕尾の谷はい
はぬ事武士の家にはずんど忌る事さ 幸 へヱ、そりや
又なぜでムり升な 半 されば〳〵今度八島の合戰に不
覺をとつたみをのや四郎といふ大腰拔の臆病者それ
ゆへに軍中では箕尾の谷といふ事は大に嫌らふ事さ
「聞て恂りせきたつ娘 きせ なゝ何とおつしやりますあ
の箕尾の谷が不覺を取たとはそゝそりやマアどふし
て「いふもおろ〳〵なみだごへ 半 イヤモ不覺の段か
何か平家の侍惡七兵衛景清といふ大力に出合赤恥か
いて逃た〳〵その身もさながら恥しさに軍場より直
に駈落鎌倉中の物笑らひイヤ噺にかゝつて思はぬ隙
取具足はいろ〳〵取揃へ明日旅宿へ持參しやれ 幸 ハ
イ〳〵畏り升てムり升る 半 お暇申家來供せい 幸 よふ
お出被成升た「挨拶そこ〳〵立歸れば押かへしてと
う事もたゞうぢとりとあきれ果暫し詞もなかりしが
ずんど立て身ごしらへ 卜榛澤家來連西の通ひ道へ這入るおきせつまをかゝげ刀かけの刀を取て

そふじや 卜門口へかけ出す 幸 コリヤ娘わりやどこへゆく きせ し
れた事夫箕尾の谷殿に恥辱をとらした景清め喰附て
なりと夫の腹いせ 幸 コリヤあほうめたしなめその景
清がどこぞ爰らにゐるといふ便りでも有たか きせ ヱ、
幸 どこをあてに駈出すぞよし又爰らにゐるにもせよ
箕尾の谷程の侍に不覺をとらせた景清が女の力で
ゆかふと思ふか きせ それでもあんまりはがいゝゆへ 幸
何ぼうわれがその樣にかたふなつても軍のあつた八
島は遠い爰から何ぼうりきんだとて椽の下のちから
もちハテマア氣をしづめたがよいわいやい きせ とつ樣
無念にムんすわいなア 幸 マ、氣をしづめや〳〵今の
侍がいふたとて嘘やら誠やら近所の事さへ嘘いふ
時節まして八島と爰の事何が何やらしれた事かサ、
茶などのんで氣をしづめや「氣をしづみやいのとい
ひながら聟の身の上氣にかゝる幼心の 時松 時と
つ樣がまけさつしやつたらおりや口おしい否じや
〳〵「おりや口惜しいと泣子より母の心のやるせな
き 幸 ハ、、、ヱ、何をきな〳〵思ふぞいのコリヤ坊
よかゝに最前の火打燒など出して貰ふてまゝ事など
して奥であそべサ、娘よ孫を連て奥で機嫌をとつて

やりやせきアイ〳〵 幸ヱヽ早ふつれてゆきをれと云に ト きつといふ歌に成りおきせ時松をつれ納戸へ這入る 「折から爰に風俗も屋敷めいたる女房の一腰さいた子を連て來かゝる跡より聞ゆる人音暫しと小影へイむ所へ家來引連ざごつの侍門口よりこわ高に ト此内向ふより衣笠著流し懐劔さし六代にも一腰さゝせ出て跡を見て立石の影へかくれる向ふよりさつまの五郎野袴ぶつさきにて家來一人連出て 薩摩亭主幸作は内に居るか幸作にあはふてい主〳〵 トやかましふいひ這入る 幸是は扨けたゝましい幸作は私でムり升が何の御用でムり升なさつイャ身共は忝なくも鎌倉將軍頼朝公にちつきんの武士先達て八島の戰ひ後平家の落人そこ爰に隱れゐるよし某頼朝公の仰を受平家の殘黨草をわかつて詮議なす所その方事は平家さかんの折から一門の用をきく出入の具足師そのよしみを思ひ平家の落人を匿ひ置くよし町人にいらざる義理立もし外より訴人あつてあらはれなば重き罪科に行ふやつ自身の口から白狀すれば命は助くる頼朝公の御仁心さあかくもふたらばかくもふたと有體に白狀せい何とだ「權柄見せてきめ附れば幸作は思案顔 幸ハヽヽヽ是は又思掛もない御詮議微塵も覺のない災難さつイャこいつが〳〵まが〳〵しいあらそひ立 幸是は又何の私が僞りを申升ふぞさつ

僞ないとはぬけさせぬ匿ひある事黒い眼で睨んで置た 幸ハヽヽ是は又迷惑な猫の子一疋よそからかくもふた覺はムり升ぬさつムヽ誠覺なくば身が面晴に家内いち〳〵家捜させよそれでもうぬはかくまはぬな 幸ヱヽさりとてはひつこい事じや家内と云たら娘と孫夫より外にはをりませぬと云にさつムヽよい〳〵身共が家捜して改くれふ ト一間へ行ふとする幸作つき廻して 幸イャ家捜はなり升ぬさつなぜならぬ 幸ハテかくもふた覺はしんもつてなけれ共私も町人でこそあれ妙珍の幸作とて御免を受た武具鎧師なりや武家に附合ひマア侍同前さつだまれ 幸その幸作が覺もない事いひかけられ家捜しさせたといはれてはヲヽ幸作のつらがよごれ升よつて家さがしは金輪際さつヤアだまりをらふぞ老耄の前後揃はぬ先程よりの詞かくまはぬが定ならば家さがしさせても搆はぬ事又かくもふたにせよ某が先刻よりもいふ通り當家に難儀はかけさせぬ頼朝公の御仁心是程わけのわかつた事を 幸スリャどふ有ても家さがしせふといはつしやるのかさつヲヽこふいふからはせひとも家さがしせにや置ぬ 幸そふいやこつちも金輪際ふんごます事はなりませぬさつヤア 幸ならぬとい

やどふさつしやるさつこいつどふいへばこふ云と忌々しい老耄めいかにしても物ぐさいいよ〳〵うぬかくもふたな幸かくもふた覺はなけねどかくもふたらどふさつしやるさ程御慈悲な賴朝樣の仰には似合ぬ町人のいらざる義理とは何事町人でも武家相手の商賣なれば魂は侍いはつしやる通り平家の影で育つた此幸作その恩はヱヽ忘れ升ぬ平家の落人が迯て來たら卑怯未練に命はおしまぬヲヽかくまひ升がこなたどふするさつイヤ推參な素町人め鎌倉武士に向つて舌長な申ぶんうぬ惡くぎしやばると切て〳〵切下るぞ幸そりやお前の短氣といふ物わたしも商賣冥利で武家一通りの事はしつてゐるがお侍の刀脇差は人を切る物じやない其二腰は身の要害又狼籍をふせぐが爲じやかれ是いはずとゝつとゝお歸り被成ませさつヤアこしやくなやつコリヤ身共をあざけるのか家來共老耄のほうげたを切て〳〵切下い家來心得ました「掛るをはづしてぶち投ればうぬ老ぼれと切かゝる利腕しつかととらまへて幸ヱヽ何てんがうするのじやぞいの年こそ寄たれ具足屋幸作その手でゆくのじやないわいの「突はなされてむしやくしや腹さつうぬもう了簡がならぬわい「又切かけるを戸口より以前の女房聲をかけ衣ヤレまつた五郎殿幸作殿のたのもしい心底聞て落附ましたト六代の手を引内へ這入幸作見て幸ヤアこなた樣はさつ身共が主人の奥方若君幸ムヽして最前からの此樣子は衣成程嘸ふしぎに思はしやらふ誠我々は平家の落人幸その平家のお方々が何ゆへ最前からのいさかひはさつさればさ木にも萱にも心をく御主人達の身なればこなたの心底ためし見て暫時お二方をかくもふてもらはん爲衣具足屋の幸作殿賴もしき心底は我夫の御噺に承りはしながら再三ためすは家來の念さつ先刻より無禮の段々はお許し下され衣何卒我ら親子をば兩人おかくまひ下されまいか幸よふムり升お氣遣ひ被成升るなおかくまひ申升ふさつスリヤ老人には御承知有て衣おかくまひ下されふか幸ハテあたまのぎり〳〵から足の爪先まで平家の恩をせたらおふた此幸作命を上てからがもと〳〵心をきなふゆるりつと滯留さつしやりませ衣さつチヱヽ忝い衣してマア平家ではどなたの奥樣でござりますな衣イヤ自は衣笠と申て夫は上總の國の住人惡七兵衞景清さつ是なる若君は小七郎樣てゝ御主人の御子息かくいふ拙者は譜代の郎等

薩摩五郎と申者 幸ム、スリヤあの景清殿のよふマア尋ねてムり升たして景清様の御在所はな 衣夫にも西國の軍よりちり〴〵についまだ在所も相しれねばかく方々と尋ねをるのさ 幸成程御存ないも御尤マア爰は端近源氏の武士の入込なれば裏に我等の仕事部屋幾日成共お心置なふ 衣御詞に随ひ暫時お世話に 幸作殿御承知下さる上からは拙者は是よりかの方へ 幸そんならお前はもふムるかつ奥様にも和子様にもいさいは跡より 衣五郎殿太儀でムつた 幸作殿おさらばでムる家來まいれ「立わかれてぞ出て行跡見送つて幸作は 幸ても扨も氣丈な人さあお二人共奥の座敷へ 衣左様ならば幸作殿 幸さあまあお出なされませ「奥底もなき挨拶に 衣さあ小七おじや「おじやと小七の手を引奥の一間へ入にけり跡に幸作とやかくと思案ひたひに波よせる後につつくり娘のおきせ きせ申とゝ様 幸ヱ、悔りさすわへけたゝましい何じやぞい きせアイ嘸悔りでムんせふ今の女中の名は何といふへ 幸ヤアさあれば名は何とやら きせ上總の悪七兵衛景清が女房衣笠といはふがな 幸ヤアそれやそれ聞てゐたか きせ聞ていひでならふかいなア 夫みをいそに恥をかゝした景清が女房子かくまはしやんしたお前の心は肌をゆるさせ鎌倉殿へ訴人する心でムんせうな是とつさんそれよりは手短につかまへて景清が在家を白状させて見せ升ふ (ト一と間へ行ふとする) 幸コリヤまて娘そふは成まい きせそりや又なぜへ 幸ハテ一たん幸作がかくもふたからはゆびさゝせても男が立ぬ きせヱ、そんなら今のは眞實にかくもふのかへ 幸おいやい きせあのみをのやといふ源氏の侍を聟にもつてゐながら 幸さればいやいその聟をおれが方から乞て我をば嫁らしたか向ふから慕ひ我が惣遠い國迄つれていに子まで産だらしよ事がないとおれが腹には始から箕尾の谷は氣にいらねどそこを捨ぬがおれが氣質なれ共今度の臆病な事聞ておりやもふみをのやのみの字をきくもうるそふなつた我も又みをのやと縁切てもつと來らいよい男と持かへいもう〳〵聟の臆病者には愛そもこそも盡果たわい きせ是はとつ様そりやおまへ本氣でいはしやんすかへ 幸しれた事本氣でなふて何でいはふぞい きせヱ、おまへはなア〳〵 (ト幸作のむなぐらをとる) 幸コリヤどふするのじや きせどふするもこふするもないわいな不覺をとるも手柄をするも軍の習らひ時の運わしが口か

ら自慢すりやなけね共あの様な器量骨柄揃ふた男が
今一人とあるかいなア外の男と持かへいとはあんま
りなア、あたあほらしい置て下さんせ 幸イヤおのれ
は〳〵老としよつた親をやりこめをるがなあほらし
いとはおのれがこつちやは せき そふゆふお前があほら
しいわいなア 幸何でおれがあほらしいその譯いへ せき
そのわけいふて聞そふかへ 幸ヲ、いへ聞ふわへ せき 今
の此源氏の世に平家の肩をもつおまへがマアあほふ
ではムんすまいか 幸イヤこいつが〳〵いはしてをけ
ば口が過るがな せき そふいふおまへが口が過る 幸何を
おのれが「イヤお前がと水掛論親子喧嘩のその中へ
音色やさしき虚無僧が彳む鶴の巣籠りもこなたは親
子腹立紛れ（ト此内橋懸りより重忠伊達こも僧にて門口に尺八を吹ゐる内には是を構はずゐて） 幸ヱ、
やかましい通らしやれ一體おのれが片意地な せき アイ
どちらが片いぢ片意地くらべして見たいわいな 幸お
のれまだぬかすかな是はしたり通らしやれといふの
に 重忠 ハッ通れとあれば罷り通る「御めんならふと笠な
がらしづ〳〵奥へこむ僧が通るも白髪の親と子は一
心不亂言ひがゝり（ト重忠天蓋作すつと通り二重にて一寸顔を出し一間へ這入る兩人は是をしらず） せき
所詮水臭いおまへの心勘當さしやんせわしや出て行

イヤそりやならぬおのれは出ていても大事なけれど
ひよつと孫めを連てゆくと翌からおれが淋しいわい
せき ほんにこりやおかしいわいな 幸何がおかしいぞい
せき いやがらしやんすみをのや殿の子の時松連て出る
はこつちの勝手 幸イヤ〳〵そりやならぬおのれ男と
縁をきれ せき イ、ヱわしを勘當さしやんせ「果しなか
ばの折も折又も來かゝるこむ僧二人一度に表と裏口
に吹合せたる甲乙も調子のあはぬ内の時宜（ト此内向ふより箕尾の谷西の通ひ道より景清雙方とも伊達こも僧にて捕手二人宛附出て花道中程にて十手を構へる雙方一寸笠を上げきつと見へ捕手雙方とももとへ逃こむ兩人しづ〳〵本舞臺へ來て東西の門口にて笛を吹ゐる此内やはりせり合ひて） 幸ヱ、さりとは
ひつこい尺八殿そこ所じやない通らつしやれ〳〵
箕尾谷 景清 然らばさやふ仕らん「雙方おめず内に入（ト兩人共大がいのまゝずつと這入る兩人悩りして幸作はおのれ故じやといふこなしおきせはおまへゆへじやとせり合ふこなし箕尾の谷景清大がいながら）
景 通れとあるゆへ通り申た 箕尾 雲水の身の某らに 兩人
御用ばしムるかな 幸ハ、、是は〳〵こちらにちと取
込んだ事がムり升て修行者樣に申訶を忘れ升てぶし
つけな事申升たが何にも用事はムり升ぬお二人乍ら
どうぞ歸らしやつて下さりませ 箕イヤ歸るまいそれ
にムるはいざしらず我等是へ參つたは修行計りで何
幸作殿貴殿の商賣に附ちと求めたい物有て 景拙者と

ても其通り武具をもとめにわざ〳〵是まで何と幸作とやら貢て下されふや 幸ハア拙はお二人共御大身なお方と見受升た武具は私が商賣なればお賣申さいで何と致そふ鎧甲はいかよふなでもお目にかけるでムり升ふ 幸イヤ我等が好の品此方より持參いたした（ト懐よりもへなりの鉢計りな出して）是此兜鉢ばかり有てしころなし此鉢に合そふな錣があらばもとめたい 幸ハテかはつたお誂らへして又こなた樣のお好みは 景身共も是に所持致す（ト是も懐より錣な出し）此錣に相應な鉢があらば所望したし貢ておくりやれ 幸スリヤお前には錣ばかり又あなたには鉢計りはてなア「はてふしぎやと幸作が心奥にも立聞虛無僧思案に解けぬ笠の内（ト合方に成る上手の障子な明内に重忠立聞してゐる）箕是此如く鉢計りでは戰場の役に立ぬ元の如く錣の武士の著るべきよふ兜に仕立てもらひたい 景ホヽウ身共は又戰場にて取んとせし源氏武士の兜首今少し取殘して殘念錣計りは手柄にならぬ滿足にして請取たい 幸ムヽそんならあなたは平家の御侍御名ゆかしい笠の内（ト覗ふとするをふり拂ひ）景イヤ〳〵虛無僧の天蓋はとらぬが禮儀 箕ヲヽ某とても其通り元の武士になる迄は姓名は名乘られぬ せきサアそふおつしやる程ノフと丶樣一倍ゆかしい笠の内（トいご作らみなのやの顔をのぞいて見て）ヤアヽおまへは（トよらうとするを引廻し上手な見る是まで重忠障子びつしやりしめるこなし有て）箕イヤ笠とるにはまだ早い（トふり放すおきせじつと下にゐるしころと鉢を兩手に取て）幸ムウヽ成程あちらには錣ばかりこちらには鉢計り一つによせればしづくり合ふてよい兜 景身共のしころに鉢を附るか 箕某が鉢に錣を附るか 幸兜は一つ 景箕望は二人り せきアヽまヽならぬ浮世の事 幸所を此幸作が仕立あげ 箕某に相渡すか 景身共に渡すか せき善惡二つは 幸奥と口の間 箕景して刻限は 幸明六つ迄に 景箕然らば幸作 せきアヽ是モウシ（トとらうとする幸作引廻して）幸ハテ細工はりふ〳〵仕上をごらふじ 箕景樋に誂へ申たぞ「互ひに我名を忍びの緒ととかず左右へ（ト[illegible]にて景清は上手箕尾の谷は納戸へ氣味合有て這入る幸作おきせなつれ納戸へしづかに這入る本つりがね暮六つ打）「わかれ入る既にその日も入相の鐘かふかふと告渡る軒の灯火春日野の飛火の野守りそれならで落武者ねらふ南都の衆徒我慢不敵の般若坊幸作が門さし覗き（ト向ふより般若坊衆徒頭巾衣玉だすきにて長刀なもち出て門口よりうかゞひ）般若たしかに此家へ景清め六代諸共入込をるに相違はない首にして梶原殿へやれば褒美の金甘い〳〵「折こそよしとうなづき〳〵裏口さして立忍ぶ（トきつと裏を見こみ戸口へさし足にて忍び込）榛澤（床のめりやすにて納戸より重忠やはりこむ僧の形りにて笠なぬぎ出てあたりな窺ふ橋懸りより榛澤いぜんの捕手四人つれ出て）

御主人重忠様 重忠是あたりを見廻す トおさへる榛澤 申附たる通り計らひしか 半ハッ仰の通り相計ひ此者共に委細手配り致させ置升てムり升る 重ム、よし〳〵此上は是 ト又囁く 榛ハッ畏つてムり升る ト捕手皆々に囁く 捕四人 スリャ狼烟を相圖に 重是隱密〳〵 榛皆々 ハッ ト平伏する 重忠こなし チョン〳〵返し

壇浦軍物語の正本

造物奧深に三間の高二重前本緣附下に人の出這入あるべし右前側に障子をはめ上手下手共に同じく高屋臺各障子をはめ屋臺の間は塀にてつなぎよき所に石燈籠手水鉢庭木井戸のあしらひ好有べし東西に枝折戸柴垣程よき餝附本釣鐘殘つて靜に道具納る「そよとの風も落人は氣を奧よりも衣笠が一腰さすが侍の褄引上て小七郎が手をひき窺ふこなたの障子明て以前の浪人に主の幸作手をつかへ ト此内上手より衣笠六代の手を引出、枝折戸の外に窺ふ正面の障子引ぬく上手に景清笠を脫下手に幸作ゐて 幸お誂らへの甲は此幸作が受合升たらきつと仕立て差上升ふマアそれ迄ゆるゆる御噺被成ませ 景ヲヽそれは過分〳〵 幸扨あなた様のお名を尋ねたとてよもお明しはムり升まいが此幸作めがお願ひがムり升るがお聞屆下され升ふか 景某に願ひとはそりや何事 幸イヤ外の事でもムり升ぬあなた様は平家のお侍ならば先達て八島の戰いち〳〵御存でムり升ふな 景ム、いかにもくはしく存てをる 幸サヽ其時の戰にかの上總の惡七兵衛景清殿と源氏方の箕尾の谷四郎との勝負の樣子いろ〳〵に申升るが此實說が承りたふ存升る 景スリャ其時の軍物語を 幸どふぞお聞せ被成て下さり升まいかな 景アノ町人のその方が 幸何とやら似合ぬ所望なれど 景ホヽ何よりもつて安い事則是にて語つて聞さん承れ「物語らんと威儀を改め 景いでその比は元曆元年三月下旬船と陸との戰に「我先驅んと獻味方はやり切たるその中にも 景平家の方には侍大將惡七兵衛景清源氏の方の兵には「箕尾谷四郎國時と夫々の身の上を庭と外面に立聞女房源平互ひの幼子もこぶしを握つて聞居たる ト此内下手よりおきせ時松の手をひき上手に衣笠小七立聞する 景されば平家の方の大將に賴むは能登殿唯ひとり弓杖突て船ばりに「突立あがり平相國清盛が舍弟門脇の敎盛が嫡子能登守敎經なるぞや 景源氏の大將義經に「見參〳〵とのたまふ聲沖にひゞきて物すさまじゝ 景詞たゝかひ事終れば景清是にと夕日影に「波の打物ひらめかし切てかゝればこらへずしてはむかひたる兵は四方へバッ

とちり〴〵に景逃る後詰は箕尾の谷四郎「二打三打
戰ふ太刀を打落されこは叶はじとや思ひけんみぎは
の方へ逃てゆく景ヤアきたなしかへせと兜の錣「後
へひけばみをのやも身をのがれんと前へひく景互ひ
にヱイヤとひくちからに「鉢附の板より引ちぎつて
四郎は濱邊にまつさかさまほう〳〵ながら口へらず
景さるにても汝恐ろしや腕のつよさといひければ
「景清は又箕尾の谷が首の骨こそ強けれと笑ふて左
右へさつとひく景イヤモみをのやが臆病さん〴〵恥
辱のだん〴〵あらかじめ斯の通りさ「語ればいき
〳〵衣笠親子おきせ親子が口おしさまぶたもしめる
あら涙胸も張さく計り也かゝる思ひの折も折障子窺
ふ椽の下突出す白刄に身をかはしト衣笠に大に拜み嬉しきこなし おきせ口おし
きこなしにて泣落し小蔭へかくれる椽の下より刀を突出す景清の鐵扇働くゆへきつと見へ 幸ヤア此白刄は
トよらふとするを突のけて 景ヤア小ざかしいはでてんごういで正
体を見届けくれん「蹴返す疊の破れ口あらはれ出た
る般若坊景清疊を蹴かへす下より般若坊ぬき刀にて出て 般うぬまつ二つにして
くれん景何をこしやくなト切てかゝるを鐵扇にて立廻つて見事に中返りして虚に迎上り
般惡七兵衛景清め住家は慥に見屆たり此通り注進せ
んと駈出すをヱイと體に打込手裏劔すかさず表の目
を配る氣轉の衣笠取て おさへト衣笠小七とゞめなさし 衣氣遣ひ
被成な景清殿外には誰もムんせぬ只今とゞめ幸でも
いつの間にあやうい事なア景ムヽ女房衣笠悴の小七
その方共はいつの間に衣かゝる事あらんかと今日薩
摩五郎諸共幸此幸作がおかくまひ申ました景ヲヽ老
人が志過分〳〵衣して此者の死骸はどれへ景ヱヽだ
まつてをればよい事を物好なづくにうめムヽ幸ひそ
のづくにうの衣裳をひつぱぎ跡の死骸はそれ其草井
戸へ衣ハツ心得ましたト般若坊の衣をはぎ取り死骸を草井戸へほりこむ 景此場に
をるは女房悴その外には平家の恩を蒙むつた具足師
幸作よもや他言は致すまい幸疑がはしくば此鍬首す
つぱりとお打被成い景ヲヽさもあらんそれ女房悴そ
の衣をたづさへ一間へ參れ衣アイ〳〵畏り升た幸い
ざ奥の間で御酒一獻景然らば馳走に預らん「心靜に
一間の障子さしも不敵の振舞を見るにつけ聞につけ
おきせが身にしむ腹立涙ト正面の障子しめるおきせ時松ソロ〳〵出て きせヱヽ
無念なわいの口惜しいわいの箕尾の谷殿さつきに覗
いた笠の內二年ぶりでおふた夫の顏手柄して戻らし
やんしたヲヽ出來た出かさんしたとほめふと思ふて
待くらした甲斐もなふ今度の不覺笠とるは折が有ふ

とは女房にさへその顔が合されぬかいのふ夫程面目
ないならばなぜ手柄しては下さんせぬ今景清が悪口
雑言おまへの耳へは這入らんかいなアふがいない女
の身でも腹が立て〳〵ならぬわいのふ是みをのや殿
「無念なわいのと身をもだへ 夫を思ふ恨泣思ひ詰た
る時松が 時かゝさん氣遣ひさつしやるな何の景清ぐ
らいをれが殺してくるそうじや「裾を小みぢかく武
士のたねさすが逆手に駈行を母はあはてゝいだきと
めきせヲ、出かしやつた〳〵是小供心にもよく〳〵口
惜ひと思へばこそ此時松が景清を殺そふといふわい
のふ（ト舞臺な叩き一間へ聞へる樣に云て） 是時 松やそなたの手にあふ景清
なら何の母がほつておこうぞ最前から殺して仕舞
ふけれどなそなたは怪我しやつたら悪い程にまあ
〳〵待や 時いやじや〳〵きかぬ「否じや〳〵とむし
やぶりつく幸作一間をそつと出（ト正面の屋臺より幸作出て） 幸コリ
ヤまあ〳〵まてきせおまへはとつさん口惜ふ厶んすわ
いなア 時おりや口惜ひ否じや〳〵 幸サ、道理じや
〳〵おれが心底定めてそなたはふしんにあらふが初
から景清とにらんだゆへ心をゆるさず眞實顔時松が
子心にも景清を切らふとはヲ、出かした〳〵有樣に

おれも景清を殺す心きせそんならお前も得心して 幸ヲ
、したが孫が手では所詮ゆかぬ景清はおれにまかし
て我が相手には相應な小七郎敵の小忰坊主が憎けり
や衣泣いつそ袈裟切に切てこいきせそふで厶んす臆病
なみをのや殿の氣をはげますには上分別 幸ヲ、そふ
じや〳〵こりや時松よ此脇差で切てこい 時ヲ、がつ
てんじや〳〵「いさむ我子の帶しめ直したすき鉢巻
ぬかりやんなとせはしきむねの時松は一腰さしあし
忍びこむ子よりも二人が氣はあぶ〳〵の生死の境ひ
物かげに身をひそめたる間もなく時松が切先に受太
刀に成つて小七郎（ト正面の障子へ時松這入る幸作おきせは下手の柴垣へかくれる障子の内バタ〳〵にて六代時松切結び作ら出て） 六代コリヤわしを何とするのじや 時何とも
せぬ殺してしまふのじや 六イヤ〳〵おりや侍の子じ
やに依てわけを聞ねば相手にせぬぞ 時わけといふた
ら外でもないおのれは平家の景清が子で有ふがな 六
ヲ、景清の子なら何ゆへきる 時しれた事おりや源氏
の侍みをのやが子の時松殺してしまふ覺悟せい 六ヲ
、そんならこちから殺してやらふ 六時サア〳〵〳〵
「手並を見よと名乘りかけ一すんさらぬはれ勝負切
つきられつ親々の八島の戰ひ今爰に汗を流して打合

しが小七いらつて打こむ刄受はづして時松が肩先より脇ばら迄うんと倒るゝ一聲に幸作駈出引わくるおきせは我子をだきをこし幸是まつた早まるまいぞせき時松氣をたしかにもちや時松いのふ「呼いけられて起直るはや絶々の息ながら時おのれ景清が子めきかぬ〳〵「勝負〳〵も舌廻らず血は瀧津瀬に目は紅ひせきヲヽ無念に有ふ嘸口惜からう親の恥辱をすゝがふとて科がもない子を殺したが可愛ひ事を仕ましたわいなア幸ヲヽ道理じや〳〵尤じやせきヤイそこな子めよふも〳〵むごたらしふ此樣に切りをつたなおのれ我子の敵じや覺悟しや「覺悟しやと突かゝるを幸コリヤまて娘はやまるな「とめればおせきは猶むしやくしやせきヱヽとつ樣がおなじよふにかばい立殺して仕まはにや腹がいぬ「そこのかしやんせと飛つく折しも一間の内より聲高く箕やれまて女房そこつすなせきヱヽその聲はみをのや殿箕申聞す仔細ありマア〳〵まて「聲かけ出るみをのや四郎女房は猶いらだちて（ト正面の障子殘らずひらく）せきヱヽ何の仔細がある物かそいつは景清が子じやわいのずた〳〵にしてもあきたらぬおのれいつそ「かけよる小がいな取て捻伏小七郎が

手を取て箕下座にをくは恐ありまづ〳〵（ト六代を二重へ上平伏し）てみをのやが悴をしとめしは天晴のお手の內さすがは平家の御公達六代御前にて渡らせ給ふハヽッ「上座に敬ひ奉るせきイヤ〳〵六代でも十代でも我子の敵とらねばをかぬ箕ヤア敵とはたが事時松を殺せしは此みをのや舅殿にも得心させ親が手にかけ殺したのじやわやいせきヱヽヱイそゝそりや又どふして箕ヲヽ合點が行まい舅殿悴が持たその刄物女房にお見せ下され娘なく〳〵な孫が最期のわけは是（ト時松の持てゐる脇差おきせに見せ）何にもいふな堪忍せい孫よ堪忍して呉いやいせきヤアこりや是刄引じやわいのヱヽ是じや物切られる筈こんな物あてがふてわざと殺すは何事ぞとゝ樣孫には何の科があるサヽそのわけ聞ふ〳〵ヱヽうつむいて居てすむかいのふ國時殿も國時殿子を殺さして落附顏犬死さすのが手柄かいのふ樣子が有ふさあ聞ふみをのや殿とゝ樣ヱヽ胴欲じやわいのふ「むごいわいなとどふとふし狂氣の如く取亂すみをのやもめをしばだゝき箕イヽヤ犬死でない時松が最期は親への孝行主君へ忠義せきそりや又どふしてどふいふ譯で箕時松を殺せしは則是なる六代御前の御身替りに立ん爲せき

ヱ、何をよい口な六代御ぜんは平家方敵方の身替りに我子を殺すしてそれが何で忠義じやぞいのふ箕されぱさ主人の身替りに子を殺すは武士たる物には常の事源氏の侍みをのやが子を平家の公達六代御前の身替りに立る事嘸ふしぎにも思ふらんその仔細といふは去ぬる比平家追討出陣の折から頼朝公某を密かに召れ日本の賢人たる小松殿の子孫をば西海の浪にしづめん事のいたはしや然れ共法皇の御怒りつよければ助けよとの指圖はならず汝宜しく計ふべし又平家の侍の中に我家來にほしき者は上總の悪七兵衛景清一人もし頼朝に仕ふるならば命を助け歸れよとの御諚何萬人かある御家人の内某一人のたましひを見込仰附られし事心魂にてつして有難く何卒景清に出合ならば我君の仰をのべ源氏に仕へさせんず物と心を配りし甲斐有て八島の浦の戰ひに難なく彼に出合こが某心に思ふ様かゝる烈しき戰ひに此事を告ん暇もなし力業にて組附なばあたら勇士に疵も附ん此場を不難に助けをき重ねての味方に招かん物と思ひかへして退く所を「景清得たりと引戻す敵に錣をひかれ乍ら其儘見のがす事あらんやふり拂ふて唯一討箕とは思へ共イヤ〳〵〳〵手柄は子孫の榮利の爲盤石よりも猶おもき主命にはかへられじと「ふんばる力と曳力互ひの勇力劣らずまさず錣はちぎれてわかれしが箕かれもさる者心をしつてか長追もせず引退く「拙こそ八島の戰ひに後を見せしとみをのやと譬へ諸軍に笑はれても箕臆病武士でない事は鎌倉殿御一人はよつく御存被成るゝわいせきそれ程しれた言譯をなせ鎌倉殿へいはしやんせぬへ箕鎌倉へ歸らんにも景清を味方に附ねば詮ない事と合戰果るとその儘に忍び〳〵に景清がありかを捜せど廻りも合ず然るに此比東大寺の大佛供養に我君御上洛と聞しよりひつ定景清一門の仇を討んが爲覗ひよるに相違なしと東大寺へ駈ゆけば我推量に違はず虜と成たる六代君景清夫婦が姿をかへ奪ひさりしと詮議のさい中重忠殿の奥方の仰には助命さすべき六代なれ共奪はれながら打捨置けば四海の政事亂るゝ道理汝六代の討手を蒙りいそぎ首討立歸れと心有げな討手の役目は取も直さず身替りたて景清を味方に附よとの御謎々とは察しながら敵方の身替りに死で呉れとは我子ながらも言ひにくゝ女房に語つてもよも得心はすまじと思ひ

舅殿にひそかに告ふびん乍らも此仕合戰場で討死したとあきらめてこらへてくれよ女房悴「ゆるしてくれと武士のなかぬ涙は猶百倍思ひやられて哀れ也おきせは悲しさやる方なくせきそんなら言合して身替りに殺す覺悟であつたかいのうといふて是がいぢらしい是時松そなたの最期はお主人忠義とゝ樣の爲にも孝行になるといのふ「犬死とばし思やんなといへど聞へぬ手負の耳一圖にこつたる幼氣に時ヱ、口惜しい大事の勝負にまけたゆへ一倍とゝ樣にひけが附ふかと夫が悲しい祖父樣よはいやつじやとしからしやろ堪忍して下されいかゝ樣おりやもふ死るのか目が見へぬ幸ヲ、道理じや〳〵せき尤じやわいのふ時死んだ先でも賽の河原で卑怯者の子じやといふて突廻しをらふと思へばおりやそれが口惜しい無念なわいのふ「おりや口おしい無念なとくるしき中のはら〳〵涙せき何のマア誰が呵らふその健氣な魂で成人したら類ひないよい弓取にならふもの十やそこらで死ぬ程なら「なぜ發明には產れしぞせきかあいや耳も遠ふなつたか是とゝ樣は卑怯者じやない強い侍じや程に氣を落さずと死でたもや「いふ聲耳に通じてや時

ヱ、嬉しうムる「嬉しふムると合す手に幸作は抱き附ヱヱ、さりとては侍の胤程有て健氣な物じや常からして切合ずき怪我さすまいと此間ヲ、拵へた刄引の脇差怪我所か親よりも子よりも可愛ひたつた獨の大事の孫を殺す胴欲な此祖父を今はのきは迄ちいさま〳〵と廻して呉たがかあいわいの〳〵「なげゝばともに箕尾の谷が胸も張裂憂思ひ涙拂ふて抱き上箕悴時松出かしたなアよく死んだ勿體なくも平家の公達六代御前のお身替り其方が首を討鎌倉殿へ差上なば此父の役目もたつ親より増つた手柄者むざ〳〵殺す親の身はどの樣に有ふぞやい箕閻魔の廳にむかつてもおめず臆せず箕尾の谷が悴と名乘つて冥途の先駈人より先に先陣せよ一歎きを隱すいさめの詞時は傍よりすがりつきせき是とゝ樣じやわいのふ目が見へず共お暇乞をしやいのふ「暇乞をと抱起せば嬉しいあまりにかづくりと笑顏を殘す佛顏せき是時松いのふもふ息は切れたかいのふ幸コリャ孫よ一遍ちい樣といふてくれ兩人かあいや〳〵かあいやなア「あへなきがらをおし動かし聲を限りになき叫ぶ涙は落て佐保川に水かさ増るごとく也歎きの中にみをのやは二人を

引のけつつ立上り 箕歎いて居る所にあらず健氣に死せし時松が最期を無にせぬお身がはり「すらりと拔し刀の下首は前にぞ落にけるみるに歎きのいやましてワッと泣入女氣をなぐさめ兼て幸作は 歎コリヤ娘何ぼう泣てももふ戻らぬおりやもうなきはせぬ悔もせぬ我も侍の女房じやないか早ふ泣止め きせアイ〳〵 幸ヱヽまだ泣かいやいおりやとふから泣止んでゐるけれど我がその樣になくとおれも悲しうなるそふじや年寄の役じや佛前で回向せふサヽ娘よ來い「娘よこいと手を取て佛間へこそは泣に行四郎は我子の首ひつ提一間に向ひ大音上 箕ヤア〳〵景清先刻よりの樣子夫にていち〳〵承り我君の御仁心定めて肝にめいじつらん恩をしらぬは畜類同前今より心を改めて鎌倉殿へ奉公せよ返答いかになんと〳〵「何と〳〵と呼はれ共返答とても嵐まつ折しも外面に吹立る相圖の呼子と諸共に奥より出る惡七兵衛出立姿は衆徒頭巾藤繩目の大鎧草摺長く小手脛當上に衣の玉襷白柄の長刀かいこんでゆらり〳〵とあゆみ出 ト此内橋懸りより薩摩五郎よでんにて出て呼子をふく正面の奥をひらき景清本文大佛供養の形りにてしづ〳〵出て六代を抱上きつと留る 箕ヤア物々しや上總の景清異形の姿に出たちしは仔細ぞあらん「語れ聞んと詰かけたり景清是にはめもやらす 景待兼たり薩摩の五郎計略の首尾は何と〳〵 薩ハッ極上々の時節到來今宵は政子のもてなしにて女原に酌とらせ油斷の頼朝諸大名の沈醉最中此盧に乘つて責いらば首取る事は屈竟 景ホヽウよし〳〵コリヤみをのや景清が武勇に恐れ源氏の味方に引入んと思をかけたる今宵の事宜喜ぶ物も有べきが此景清は何とも思はぬ今宵の内に頼朝がすかうべとつて返禮せんイヤ六代御前のお爲には親の敵一門の仇いさましく初太刀遊ばせそれ五郎おん供申せ 薩ハッ畏り奉るいざ若君 ト六代を抱とる すりや箇程迄言きかせど 景ヲヽ何とも思はぬ馬鹿なやつの 箕そふいへば六代を汝らに渡そふか ト薩摩をさゝへる 薩邪魔ひろがずとそこのけみをのや 箕イヽヤ渡す事はならぬ 薩何をこしやくな ト立廻る内景清太刀にて四郎をとめ 景こやつに構はず五郎いそがれ 薩心得ました ト石燈籠へ手トカケリにて六代を抱乍らりゝしく向ふへ走り這入る 箕南無三寶此上は ト裏劍を打パッとのろせ上るドンチヤンになり軍兵大ぜい出て景清をとりまく 軍皆々 景清うごくな ト きつとかこふ景清ゑせ笑ふて 景ヘヽハヽヽヽヽ數にもたらぬ蠅虫めら三人五人は面倒な首を並べて成佛ひろごふ 箕それ者共打てとれ ト言すて一間へ走り這入る軍兵皆々鎗先そろへて 軍皆々 動くなやらぬぞ 景何を

こしやくなト是よりドンチヤンはげしく立廻つて皆々を追込み道入チヨン／＼にて右の道具を上手へだん／＼にびく
下手の高二重上手のはし迄引後口奥深に山まくになるやはりドンチ
ヤンにて道具納る直に下手より軍兵逃て出る景清長刀にてなわへポ
ン／＼と切てすて 景いらざるやつらによほどの遲刻それト行かけるを
又軍兵一人かゝるをポンと切のふうすにしづ／＼行かける花道の所にて上手の障子の内より 重ヤア／＼景
清何國へ 行秩父の庄司治郎重忠言聞す 仔細有まづ
／＼まてト景清一寸跡を見て 景ヤア、うぬらに逢ふていらざ
る問答六代御前のお待かねそふれトまた行ふとするドンチヤン打込にて向より
榛澤り、しきなりにて鎗をもちきつととめ 榛ヤア景清御主人重忠公の仰を
うけ榛澤六郎成清討手に向ふたそこ動くな 景何をこ
しやくなうづ虫めトドンチヤン嚴しく一寸立廻りてきつとときまる又障子の内より 重ヤア
／＼景清重忠に用事はなく共征夷將軍源の頼朝公是
に御座ある景清に見參／＼ 景ヤ何がなんとトふりかへり長刀
そばめきつと見へになるドンチヤン打上天王立に成る上手の障子一めんにひらく重忠すこふ立障子相引にかゝり後に軍兵大勢六代を抱上並よく並びゐる景清きつと見へ有て 景ア、ラいぶかしや景清を討取ん
とこも僧姿の重忠はさもあらんが六代御前を奪取
たはコリヤどふじやト大鞘り榛澤鎗にてきつとかこふ 重ホヽウ合點ゆ
くまじ諸葛孔明は孟獲を七度とらへて七たび助くる
手に入たる六代御前一旦汝に奪とらせしは恩をかく
る源氏の仁心 榛何と骨身にこたへしか 景ヤア仁心と
は何が仁心年來ねらふ一門の仇敵頼朝めを一太刀な
りとも報はん爲炭をくらふて咽をからし漆を塗つて
はつらをかへ心を盡す某なれば頼朝ごときの一疋二
疋討とらんは安けれどせめて御一門の御公達に初太
刀をさせんと女房衣笠といひあはせばいかへしたる
六代君又もやうぬらに奪返されしかチヱ、心外や無
念やなアト無念のこなし榛澤ジリ／＼と本舞臺へくる橋懸りより薩摩五郎り、しき甲にて鎗をもち景清をきつとかこ
い 薩ヤア／＼景清我薩摩五郎と名乘りその方が味
方と見せしは皆主人重忠公の計略誠は畠山譜代の郎
等本田の治郎近經とはしらざるか 重平家を西海へぼ
つ下し天下の棟梁と仰がれ給ふ頼朝公景清が首を召
れんは蠅打よりもいと安けれどよく／＼汝が忠義を
感じ思召ばこそ今日迄助け置るゝ寛仁大度 薩源氏の
世にいで源氏を覗ふは 榛土をくらふきりうじ同前 重
さあすみやかに降參するか 薩榛景清返答は 皆々何と／＼
ト景清無念のこなしにて 景チヱ、きつくわいやなア關八州の源氏
武士蠅虫とも思はぬ景清頼朝が運には叶はぬよな畜
生侍が心にくらべ降參なんどとは穢らはしい此上は
平家の仇一人なりとも切て切死そふじやトツカ／＼と重忠めがけゆ
かふとする薩摩榛澤さゝへる此時上手よりみなのや軍立の形りにて首桶をもち出てきつと見へ 三ヤレまて景
清みをのや國時是にあり 景ヲ、景清が望む敵八島の

手なみ忘れたか切て〳〵切まくるぞ 箕さいふ汝が首とらん景何をこしやくな ト重忠六代な引よせて 重ヤア景清かく迄利がいを解聞すにしうねき汝が献たいだて 箕此上は六代が命を立所に打取ふか 榛薩それがならずば降參するか 景サアそれは 皆々サア 皆々サア〳〵〳〵 箕返答は何と 景チヱヽ奇怪やなア トどつかと下に座す幸作鉢としころをつなぎ合せ持跡よりおきせ衣笠出て來て 景いさいはあれで聞ました源平二つをたとへて見ればてふど此鉢としころ景清殿を味方に附ふとめさる頼朝公又頼朝公をねらふ景清殿互ひに心が放ればなれ是此樣に繼合して和睦あれば六代君の命もつながる景清殿の首もとらずみをのや恥辱もすゝげる三方四方納るは景清殿の心一つさもない時は御主人のお命がないその上天にも地にもたつた一人の孫めが最期かあいや犬死になりまする爰の道理を聞わけて折角ついだ此兜のはなれぬよふ了簡を頼みまする景清殿 重ホヽウさすが具足を商ふだけ武士にもまさる老人の詞重忠深く感心するそれみをのやその首是へ 箕ハツ ト首桶な重忠の前に置く 重六代御前の御首 秩父庄司重忠が請取たり又是なる幼子は平家の血筋を立きつて鎌倉殿の世繼の君 衣すりや六代樣の御助命有こ きせ時松の最期もお役にたち 幸聟殿の功も立再び歸參も叶ひまするか 重ヲヽ出こ歸らぬ武將の嚴命心易かれ皆の者 幸衣きせ段々のお情有難ふ存じ升る 六コリヤ景清今迄の忠義忘れはせぬ今又自が命を助る鎌倉殿の仁心仇に思ふな景清 衣ヲヽよふおつしやつたその通りさあ我夫 箕かくまであつき情の柵み 榛さつ是でもてきとふか 重サア上總の景清返答は 皆々何と〳〵 ト詰よる景清長刀なからりと捨 景かく計り仁心あつき源氏の大將頼朝に引んず弓のあらばこそさりながら今日迄こりかたまつたる景清が二君に仕へん事思ひもよらず腹かつさばくは道なれ共安德天皇の御母君門院の御行衞尋ね出しお和睦なし申迄景清が命は景清に暫く預り立歸る運盡て討るゝ首は箕尾の谷に進上申再會は重ねて〳〵 重ホヽウあつぱれ〳〵それでこそ鎌倉殿の仰もたち 箕みをのやが役目もすみ 衣六代樣のお身も御無難 きせ忠孝かなへる我子の最期 幸兜ももとの兜となり 重浪風立ず納る御代「花も實もある勇者と勇者智仁を兼し畠山 重ホヽヽヽヽいさぎよし〳〵源氏に仇せぬ義者の道「平家を助くる仁者の道の本海道 重此明方に賴朝公鎌倉へ御歸館の方々用意 榛薩いづれもお供ぞろへ

軍皆々ハア丶「いふ間嵐に雲晴て夜も白々と小松原はや御立の鎗長刀霞の隙に見へ渡ればト是にて後の山まく切て落す打ぬき松原に行列の道具きれいに絹ばりの朝日ぱつと出す「重忠始みをのや本田ハッと遙に三拜平伏源氏の威勢を見るにつけ又も逆立悪七兵衞思はず詰よるまなこざしト各立上る景清は後をきつと見て無念のこなしにて思はず長刀を持立上る箕「こは心得ず上總の景清「おなじく太刀の柄の間にかはる夫を妻と妻ト衣笠おきせ時松の死骸を見て衣「是の今の情を忘れたかきせ「此子の最期をむにしてか「見せる死骸にはら〳〵涙によはる武士と情に無念をこらゆる勇士五郎は六代を抱榛澤は首桶を持重忠の両方に立幸作は兜をもち衣笠おきせは時松のしがいを見せる景清みなのや愁ひのこなし皆々並よく並らび衣「鎧の總角うなゐ子のきせ「神ならぬ身は夕べまで幸「わやくいふとて叩つたにきせ「今は抱てもさすつても三人「なきなきがらを野邊の露一「袖に手向の死骸は此世の限り秩父が門出重「鎌倉山の星兜榛薩「忠義は輝く景「箕尾の谷箕「景清立皆々「きのふの仇は衣幸きせ「恩の浦八島の浦の物語今に傳へて皆々「さらばト各こなしよろしく「殘しけるト段切三重幕

嘉永五壬子年初春　西澤綺語堂主人述

西澤文庫脚色餘錄二編下の卷終

西澤文庫脚色餘錄三編上の卷

目次

西澤文庫 脚色餘錄三編上の巻

西澤綺語堂李叟著

室町殿歌舞妓興行

歌舞妓事始に曰人皇百七代正親町院の御宇永祿二未年足利義輝公室町殿におゐて御酒宴の興に狂言盡御催し有則御前にて管領職の嫡男或は御近習衆御小姓衆御局衆其外御抱の人々物まね狂言盡有し御役者左の如し

永祿二未年於室町將軍家御前物眞似狂言盡興行

翁　名古屋山左衛門　千歳三番三　京屋萬太夫村山又左衛門

太皷　大藏彌助　小皷　筒井新八

脇皷　小八　同十右衛門

笛　長命甚八

春之狂言　義經記三段續　上之段鞍馬之事、中之段八島之事、下之段芳野之事

役者附書上うしわか丸荒木三之助荒木與次兵衛祖也　僧正坊松本名左衛門今大阪名代祖也　べんけい晴經殿、いせの三郎京屋萬太夫今都半太夫祖也　しづか御せん於くに歌舞妓元祖也　こしもと堺屋とよ、たゞのぶ村山又左衛門村山平右衛門祖也　つぎのぶ村山又四郎、けんれい門ゐんかさやなつ、くわんちよ戎屋ゆら今蛭子屋吉郎兵衛此才採也　能登守高保殿、きくわう丸御小姓　たみや殿牛若丸成人して　九郎義經名古屋山左衛門狂言の祖也

翁　伊兵衛　千歳三番三　古彌九郎右衛門

太皷　大藏與左衛門　小皷　一屋源助

脇皷　小兵衛同吉十郎

笛　中屋五三郎

高砂　太夫伊兵衛　ワキ長太夫　ツレ新八久助

舞二番　長太夫ツレ奈良衆一人今早雲長太夫祖也　囃子方　奈良衆

冬之狂言　曾我の敵討三段續　上賴朝御前の段、中大磯傾城の段、下敵討本望の段

役人附書上賴朝卿鹽屋九郎次今大阪鹽屋九左衛門名代也　すけつね鹽屋九郎右衛門今大阪名代也　少將扇屋まん、十郎祐成村山又左衛門、梶原平三大藏彌十郎、とら御ぜんきくの方、五郎時宗大和助殿、大藤内左京太夫殿内の衆　大いその長きくの方つぼね衆　五郎丸大阪太

左衛門（今大阪名代也）　仁田四郎高保殿　太刀もち（お小性よしや殿）
以上
右室町殿の目錄にのせたり右歌舞妓女御抱五人有中にも於國はことに才藝勝れたるもの故度々召れ舞ひ諷ひしが山左衛門と密通の科により共に御扶持に離れ浪々に及び殘の四人の女藝者も殘らず御いとま賜りけり山左衛門於國は渡世に營まん爲或時は床を架して神代の故事或は公の式法の事など講談し居たりしが其後織田信長公の御時御前へも召れ度々舞を御上覽有しに附場を求め歌舞せん事を願ひしかば其比北野に人枡のありしに御免許有て天正三亥年於國神樂を略して始て北野にて舞けり是歌舞妓を芝居にて勤る創也夫より文祿慶長に至り洛東祇園南林に於て場をひらき是を催す山左衛門と於國が中に娘有けるを伴ひ連舞を仕たりける其後五條橋の南（今云問屋町さや町の邊也）にて娘に國の名を讓り芝居興行せり是を世にお國かぶきと云り此二代目の國に聟を取舅山左衛門が名をかたどり山三郎といへり世にいふ名古屋山三是也又慶長元年より同三年の間村山又八（村山又左衛門の子山三の弟也）其外松本名左衛門、京屋萬太夫、大阪太左衛門、鹽屋九郎次、同九郎右衛門皆々伏見の御城へ度々召れ太閤の御前にて狂言盡をしけり御褒美として衣裳を賜りし事などあり村山又八子兒の又太郎も共に出勤しける二男又三郎は寛永年中江戸へ下る是市村座の元祖也此系圖役者大全に委しく記し侍る右二代目の國女五條にて芝居興行せし時島田萬吉といふ女有才智なる者にて共に是をはかり女名代といふ事を始め淨瑠璃操をなし切幕をも始たり其比六字南無右衛門と云女夫おなじく操を興行す則淨瑠璃河内介上總介也其後淨瑠璃太夫左内、宮內と相續す又佐渡島坊（初は與三郎といふ）といへる者あり藝の妙を得て遊女に此業を施す此佐渡島家も後は二つにわかれ竹島天笠左衛門（竹島幸左衛門祖也）佐渡島傳兵衛の家（佐渡島傳八親長五郎が祖父也）此兩家也扨國が芝居の場所も伏見の御城より秀吉公京師に入給ふに此所群集する故御上洛の節妨と成により四條中島へ替地を仰附らる其時今の高瀨川なし勿論邊に人家もなし今いふ河原町より四條中島までの間に芝居を建て右の四人の者興行しけりその後元和年中時の御奉行七衛の櫓を赦し給ふ都伴太夫、早雲長太夫、龜屋粂之丞、絲檜權三郎（後大黑屋竹之丞と改）蛭子屋吉郎兵衛、布袋屋梅之

承、村山又兵衛（後平右衛門と改）此七箇の櫓の外大和權之助杉本庄太夫と名代あれども是を省き前の七人の名代を免さるなるべし右七箇所の外櫓を揚ゆる事能はず櫓なきを小芝居といへり其時初めて今の四條河東に芝居建てけり」北側に二軒南側に三軒大和大路常盤町に二軒以上七軒也又寛永年中に佐渡島坊に習ひ得たる六條の遊女等芝居能といふ事を其比所々にて是をなす歌舞妓芝居には故有て女藝者を禁じ給ふにより小姓を以て女形に仕立たり承應元辰年祇園村に爭論有て芝居悉くやみぬ又其比橋本金作といへる女形を仕損じ有しにより彌芝居停止に成て役者共迷惑に及べり承應二巳年にいたり其時の御奉行祇園御參詣の節山村又兵衛御駕訴訟に附芝居御赦免の御願ひ申上御役所迄附したひ御歎申上けれど御免なかりし故御役所の軒の下に起臥雨露にうたれ著類袴ら破れ損じ痩衰へて人のかたちもなかりける弟子の子供役者食物を運びて又兵衛をはごくみしが時有て同年三月に物まね狂言盡と名目改り御赦免有しより今に相續す今年寶暦十一巳年迄凡百十年に及ぶ世人此又兵衛の事を聞傳へ總じて役者たる者は河原者と惡名を附又は穢れし身也など賤しむは大に相違なる事也たとひ田舍芝居勤る役者たり共穢はしき者と交はる事曾てなし元來右體の者狼籍など致させまじきといへる一札有舞臺勤むるもの常に身を清め天下泰平國土安全の政を業とする也世のわる口聞にうとましくこゝに其譯を記るし侍る」と云々此書出板後九十年になれば村山氏此道を業とする事を創られしより二百年に及ぶ歌舞妓道に立交り所業とする者村山氏の恩を思はずんば有べからす

傾城と書外題の濫觴

同書に曰都萬太夫（今の芝居名代都牛太夫先祖也）といへる美少人を女形にしたて專ら京島原傾城買の狂言を仕たりける其比の狂言の外題に都て髮切島原、坂田島原或は八島島原、安宅島原などゝ賦せり是島原歌舞妓の始也一說に島原かぶきといへる事寛永年中京六條三筋町の（廓今の島原へ移りて肥前島原に似たりとて名に呼其廓の）遊女芝居能とて舞けるより云傳へしとは大な誤り也されば こそ京はいつとても二の替りは傾城事の狂言をなす故に島原歌舞妓といひしをいつの程よりか島原といへる替りに外題の上にけいせいとを

く樣に成たる也是其因緣也芝居の總名にあらざるゆへ二の替りに限り木戸札場にても島原歌舞妓と今もいふなり是のみは古風有の儘のこれり」と云々是も九十年の今は誰も辨へし者もなくなりたり

大頭起三勝の辨惑

同書に云抑女舞といへるは二代目の國女が弟子に柏木といひし者舞を工夫し小鼓なしに太鼓を用ひ諷ひものも元祖於國が作りし神歌の變風をやめ平家物語源平盛衰記の事跡を文句に綴り太鼓に合せたり因て大頭といへる事是よりいひ始たり裝束は天冠に狩衣大口にて舞ふすべて女舞には箇條數多ありて岩戸開或はしはだ、天地拍子、羅生門などゝいふ傳受の舞有又昔より傳ふる舞に樂拍子舞、蟇舞といへるもの有是は上梵の月宮月の宮人の舞給ひし霓裳羽衣の曲の舞也近世專ら用る小舞十六番も昔より傳ふる處の舞也又鼓歌といふもの有すべて太鼓を用ふ室町殿の御時の御扶持人笠屋なつ子孫新勝といふ者の一子三郎兵衛寬文六午年名代御赦免有三郎兵衛が先妻を萬勝といひ三郎兵衛が娘を春勝といひ後妻せんといひしを後に新勝といへり夫より姪さつといふ者へ讓り則新勝と改め夫よりつやといふ者へ讓り正德年中に宮地芝居御停止に成享保元年四條にて後の新かつ前藝唐子踊をして後女舞の業をなし兩年つとめたりしに女藝を禁じ給ひ享保十六亥年九月二十三日新太夫と改り名代赦され元文二巳年閏十一月二代目新太夫へ讓請又三代目新太夫へ渡せしなり女舞大頭柏木、笠屋三勝よしかつ、たちやくに、仕形男舞　舞又太夫、丹波、右六株は今絕たるも有當地に居住なきも有延享年中一勝といふ者大阪にて大頭を催したり又前かた大阪にて淨瑠璃小歌に諷ひし半七に馴染たる三勝といふ者此株の內なりといへるは大なる誤り也夫は簑屋三かつといひし者也今按ずるに其みのや三勝も女舞のまねびをして田舍廻りなどして大和の國に下り茜屋半七と密通して浮名を請たるものなるべし世人附會の說を實と思へる人に虛誕のむねをしるし侍る也と云々予が作書三勝が傳と讀合すべし

梨園頓話口書の寫

首　題

維此册子總論劇場標題初桂姓字終楊圖黒船俠示姉川臈褒貶不失巧拙實詳昔時自笑簡易何當

浪華幹旋子識

標題

櫻山四郎三 南雅置酒
中村喜代三 華曉花圃
中村富十郎 慶子湖柳
生島柏木 孤立瀟灑
藤川柳藏 富尾輕薄
市川吉太郎 伯子伏蛃
中村治郎三 丸子齒婦
市野川彦四郎 可慶茗話
嵐三右衛門 杉鳥周鼎

三桝德二郎 漁江吹笙
嵐三十郎 三蝶蘭亭
中村粂太郎 鯉長丹楓
坂東岩五郎 岩止怪奇
嵐七三郎 朱連濃粧
三桝宇八 都舟盃魚
三桝他人 黑稻博徒
市山助五郎 志山花談
嵐吉三郎 里環般盤

嵐雛助 珉子借面
姉川大吉 讃多夜雨
中村十藏 虎宥樂鑄
佐桐豐松 四聲燕子
淺尾爲十郎 奥山紅蕎
中村歌右衛門 歌七貧士
藤川八藏 八甫高低
中山文七 由男大商
中山來助 舍柳園圃

尾上粂助 里聲奏箏
嵐文五郎 睦友晨風
坂東三八 平久酒池
山科甚吉 棣石海棠
澤村國太郎 其答白衣
三桝大五郎 一光官厨
小川吉太郎 英子風流
嵐三五郎 雷子少年
尾上菊五郎 梅幸雪梅

此梨園顧話は傾蹟逸人の撰にして甲午冬日記北窗散人の跋有小册也甲午は安永三年にて其比俳優者の評隲せし書也今嘉永五年迄七十九年となる書也口盡出入の湊新町橋の圖おかしければ寫して爰に記す物也

東都三場俳優艤の叙開

夫天地を一個の戯場に比せば渾沌未剖の一番太皷にすめるは薄靡て霞となり濁は淹滯て土間の薦筵となる豐秋洲の大名題國常立尊の世界定に二神の吐し初碬馭盧島の檜舞臺を踏堅め天より素戔烏尊の口上演いつも八重垣の引幕さとひらけ天地人の三番叟天照大神の天石窟隱れの狂言天鈿女の所作事古今の大入トヾ本神樂の鳴物チヨン〳〵とぶん廻して神祇釋敎戀無常の道具建に收まり山川草木の造物花になく日覆の鶯水に住切穴の蛙よくたて歌の心を動し力をも入れずして若い衆を中がへりさせ目に見へぬ敵役の惡工も哀れと思はせ若女形和事師の中をも和らげ鬼神をも取挫ぐ角義髮の大荒事其親玉の發句を乞て俳優艤とやらかしたれば初編の一幕何卒評判よろしき樣偏に願ひあげ幕より兩手をついて申上ますと云爾

于時享和三癸亥孟春鷄旦　東子樵客戯撰

此小册は世に流布する俳優艤に倣ふて點式は持狂言當り役の扯撰を書き以て風流なる書也奥に自筆の句有

先祖の譽れは我及ぶ所にあらず
和歌によむは汝にあらず婪

成田屋 五百崎 反古庵 市川白猿

櫛の齒も通らぬ夏の柳かな　濱村屋なには町東籬園　瀨川路考

ちら〳〵と挽く夜ぞ雪の初音　音羽屋假宅大阪町向島札の辻　坂東薪水

やぶ入や花より芝居明からず　高麗屋長谷川町三光稲荷　松本錦考

白粉の匂ひ床しや春霞　綿屋市村座樂屋向裏　小佐川巨撰

松を出て花へ滋こむ霞かな　瀧野屋甚左衛門町酒屋の裏　市川新車

いく程の世にきれい也けしの花　近江屋げんや店　中山錦車

梅が香にのつと日の出る山路哉　大和屋がくや新道　岩井梅莪

鯉喰ひの髭をなでたる柳哉　音羽屋住よし町　尾上三朝

鶯になりすましたる初音哉　大和屋げんや店四方の　坂東是業

よひものを笑ひ出しけり山櫻　姿見丸屋せと物町　大谷馬十

櫻より御簾に近し桃の華　紀伊國屋和泉町田なこやうら　澤村曙山

兄といふ名にはかしこし梅の花　立花屋深川六間堀　市川中車

先に遺脱たる最負戯子太陽出の大達者頗多し他日後編の幕に出して四方の御見物雅兄に獻せんと欲すと有此書も早五十年後の昔とは成けり

江戸歌舞妓芝居の始

名物袖日記天明二年出板萬里亭曰に曰猿若勘三郎寛永元甲子歳御願申上蒙御免て初て御當地中橋に於て太皷櫓を上芝居興行す同九年壬申年伊豆の國よりあたけ丸の御船御入の節元祖猿若勘三郎木遣の音頭をとり則金の麾を頂戴す其比禰宜町今の人形町に住居し慶安年中今の堺町に移る同四年辛卯年に御上覽に備り明暦の類焼にて上京なし禁裡へ被爲召諸藝仕り怍明石と申名を被下置衣裳等まで拜戴す金の麾猿若の衣裳は中村座の實物也と九月江戸表へ立歸り相續芝居代々繁榮す此家に太平の綱曳といふ狂言の拍子事有此さるわかといふは元祖中村勘三郎より言傳へたる事にて中村座家の名物也是より已後市村座始り萬治年中に至り

森田屋山村座相始ると云々以前は山村長太夫といふ座有て四座なりしを寶永年中故あつて滅亡す今は堺町中村勘三郎、葺屋町市村羽左衛門、木挽町森田勘彌（初め竹之丞といふ）（河原崎權之助とも云）此三座也其外諸所寺社内に小芝居株あまたあれども是は格段別にて譯ある故小芝居へ出たる小供は大芝居の役者交りせず勿論舞臺へ出さず其仔細一口に論じ難し京大阪の名代座元芝居主等皆持主は別也江戸は元祖より以來太夫元と稱し名代座元芝居ともに一人の持主にて今に相續す又操り座等の事は近代世事談といへる書に出たれば爰に記さず三座元祖よりの系圖は役者大全に委しくと歌舞妓事始に出たり天保十三寅年に當時の淺草猿若町へ替地賜はり一丁目中村座、二丁目市村座、三丁目河原崎座となり淨瑠璃は薩摩座、結城座の二軒は一丁目二丁目の向ひ側に移れり此餘の宮地の芝居等は此時皆取拂ひと成けり

京都歌舞妓の興廢

歌舞妓事始出板後九十年に及び四條川東に南北の芝居二軒となり北側を（早雲長太夫）（龜谷粂之丞）南側（都萬太夫）（布袋や梅之丞）此二軒を大歌舞妓と云其餘に小芝居と呼ぶもの四條道場因幡藥師誓願寺北向芝居なんど有しが今改革あつて後島原（一名に左女牛）に二軒宮川町に一軒と三箇所に移し以上五軒と定まりしは以前七箇所の櫓名代を免されし遺風なるべし此餘に機關淨瑠璃操說經讃語等の名代委しく歌舞妓事始に出たり

大阪歌舞妓の起原

元和年中下難波領内に傾城町有（今云道頓堀九郎右衛門町裏）傾城數多九郎右衛門芝居にて女歌舞妓と號踊をさせける是を大阪にてはお國かぶきと云り其後寛永十年女藝を禁じ給ひ若衆歌舞妓と改め濱側小芝居にて九六十餘年興行仕來りし事は歌舞妓事始及戯場の雜書等に悉く書たれば改め云はず承應二巳年鹽屋九郎右衛門同九左衛門大和屋甚兵衛三人の者に名代を御赦免有て後追々に芝居數ふへ既に寶暦年中芝居の名代と極りしは鹽屋九郎右衛門、鹽屋九左衛門、大和屋甚兵衛、河内屋與八郎、松本名左衛門、大阪太左衛門（右は室町家の御扶持人の子孫也）淨瑠璃操の名代は大阪次郎兵衛、虎屋長右衛門（後源太夫）宇兵衛出羽（後信濃又出羽）大和（後に筑後）上野（後に越前）說經與七郎、七太夫、舞太夫、又太夫、市太夫、兵太夫、金太夫（以上）と有しも後段々と興廢有て安治川芝居荒木（堀江あみだ池前）此太夫（東側市の側）曾根崎（北の新地）道頓堀大西（戎橋より西）角丸（相生橋詰）此七軒は

素より天満天神社内御靈座摩稲荷高津等の社地に有し宮芝居と呼しも天保此方廢りたるは目前に見る所也今道頓堀に遺る五軒の芝居の内角大阪太左衛門中鹽屋九郎右衛門の兩座は寛永以來の古き大歌舞妓なれば櫓元と云べし筑後（今大西とも云）越前（今若太夫と云）の兩座は淨瑠璃操の櫓なれども中歌舞妓と呼び竹田は近江出雲外記と代々櫓操座にて此三軒とも貞享此かた舊座なれば今に廢せず中芝居共小芝居共呼て此五軒共芝居主は時々に變ると雖も古く打續興行して道頓堀の芝居とて大阪名物の第一番と稱す元祿十五年濱芝居數多有比水茶屋十二軒よりなかりしを願出して立慶町にて二十七軒吉左衛門町に十九軒都合四十六軒有茶屋御赦免有しよりいろはの假名に合せいろは茶屋の名目遺り小芝居を濱芝居の名と混ずる事予が藏せる書物に有後々の編に委しく出すべし

梵天櫓鎗の來歴

歌舞妓事始云芝居の櫓は京師に入（伏見口、三條口、大原口、鞍馬口、長坂口、丹波口、鳥羽口、）の櫓を象り名代座元の紋附たる幕を張左右に塵を立る是を招きと云歌舞妓の祖お國初て北野にて芝居興行の時は白幣を櫓の四隅に立來りしが明暦年中に塵に轉じ今は梵天ともいふ勸善懲惡を本義とし寸善尺魔を除く心にて梵天王を祭る旨趣也櫓に並べたる五本の鎗は元祿年間差圖有しに五奉行の持鎗の餘風なり或説にいにしへ役者の持鎗なりしといふは妄說也尤上なき御方へ藝盡しを御覧に入たる時役者共歸宅行粧華麗にすべしとの仰によりて立役女形何れも麻上下に大小を帶し立役は若黨二人詰役より仕たて挾箱もたせけり女がたは小童二人召つれ日傘をさゝせたるより例となり寶永正德の比迄樂屋入に大小を常に帶し女形は日傘をさゝせし也圖歌舞妓事始にも出せり其比柴崎林左衛門、藤川武左衛門は故ある方より大小を給はり相傳ふて其比さゝせたる日傘も古き役者の家には持傳へたれば櫓鎗も古役者は皆浪人より出たれば持やり也と思ふも有れどさにあらず雨ふる時鎗幕ともに出さゞるは濡さゞる爲又雨天の節は相休むといふ印也ともいへり

戲場看板名目の大略

芝居と呼びたる謂より棧敷木戸口の名目は樂屋圖繪戲場訓蒙圖會等に委しければいはずされど臆病口の名などは其をしらずなりにいひ來る事とはなりぬ著

物もおくび形りに附たる故おくびやう口也亦二三十年此かた新に名に呼ぶ物有舞臺の兩脇へ切込たる場を蛸壺と云舞臺前の場をかぶり附と云是を其黨にて蛸かぶりと唱ふ又來る幾日よりと初日の張札を木戸口に張を日びらと云是日披露の略語也今役者藝者なんどに進物贈物等の目錄を張るもおなじくびらと計り云是又おなじく披露也又表看板も昔は繪看板とてはなく大外題と次に一座誰々と役者の名前を印したるを評附と唱へしなり中古細書に大序より大切迄書き別に一日の性根とする所を名代役者のみ撰出して是を一枚看板と稱し其下へ外題制書附り并に等を書て大外題と云今や其法式も廢り似貌看板を何枚も書並べ輕口豆藏の身振聲色小屋の看板の如くとなり外題看板を大江都看板と唱へ古き仕來り狂言一場にて名代役者の揃はぬ時は二段目三段目の寄せ書を出す樣に成たり譬はゞ伊賀越乘掛合羽宿屋の門口に譽田內記鎗をもち立居雙蝶々の米屋場に十治兵衛人相書をひろげ門口に彳む圖など畫けり其法を知らぬ作者役者の描きより起ると知べし又中古は總稽古の日に仕組御目にかけびと張札せしは其日舞臺にて道具を餝りて稽古萬事正しからざるを改むる故人に見せぬ也文政中總稽古を噴として見せる事をせしが好人是を見て扨初日出より狂言出揃ひし比衣裳拵へ等をあらため見んが爲め總稽古にて下見をせし也當時は總稽古を見れば夫限りにて濟し初日出てより見物にこぬ人多くなりたり又辻々に出す看板を辻看板と云歌舞妓事始に元祖名古屋山左衛門が出せし辻看板の文に曰

從二五月八日一於二北野一名古屋山左衛門在所糸捻女之所作成レ之一覽念望之人須二來見一

如此板に書て辻々に出せしと云むかしは乾としたる格式なりとしるべし

紅色桔梗の番附正本

造物二重向ふ長暖簾上手下手共一間宛腰襖二重の前一面に毛氈かけ軒釣の挑灯づらりと釣り都て島の內大茶屋祭りの體二重に琴浦伯人の拵藝子おゆうおかの仲居お品お富牽頭持桃八甚吉此吉權十郎藏屋敷侍客にて帷子羽織なまの八獅々の足の形鐘藏せんまの形りにて酒のんで居る此見へよろしくだんじり太鼓にて幕開くいつもの通り藝者俄四五番有て留る奥より花車お園出て（お園）是は／＼磯樣俄はどふて厶り升な

天保七申年七月北の新地芝居にて盆替り新狂言役割番附

座本　竹田内藏

乍憚口上

殘暑の砌御町中旦那樣方益御機嫌能被遊御座恐悅至極奉存候隨て此度さる御ひいき樣より仰被下候には近比盆替りは凉風を見合せ候ゆへ始りも遲く相成今年に當芝居にて先々の通り早く相始候はゞかへつて御意にも可入やう御勸に隨ひ未熟の者共には候へども何がな珍らしき狂言取組奉御覽入候間被仰合賑々しく御見物の程偏に奉希上候

中村富十郎
坂東壽太郎

一寸縞のぼつとり者戀にはせ話をやきがれと釣船ならぬ土船の三ぶが好みにひきかへて

紅色桔梗女團七

新形三反

九郎兵衛娘おかち　中村富十郎
たいこもち茜吉　ばん東橘次
同この吉　中むら慶藏
鶯昇みだの三　ばんどう利根藏
同さしの六　中むら八ぞう
仲ゐおしな　嵐福太郎
同おとみ　中むら慶次郎
げいこゆう　市川扇升
なまの八　中村龍藏
たいこもちもゝ八　中村菊五郎
こつばのごん　片岡鐘藏
ゐづゝや小いし　藤川勝三郎
げいこかの　片岡よし野
ゐづゝやお園　中村かほしよ

大島嵯峨右衛門　中山新九郎
助まつゆきへ　實川延三郎
みだれの傳八　中村翫十郎
三ぶの妹お仲　中村のじほ
玉しま磯之丞　桐の谷權十郎
三ぶの女房お次　坂東七五郎
伯人琴浦　實川勇治郎
魚賣彌市　中村歌十郎
つち船三ぶ　お梶母くま　片岡市藏
一寸女房お辰　坂東壽太郎

作者　狂言綺語堂

頭取　中村富右衛門

時に琴浦さん見りやうかぬ顔附桃八さんどふじやいなアなぜ挨拶さしやんせぬぞいなア 八もィイヤもふ最前から私も如在なふやつてをり升れど兎角磯様よりは琴浦様の御機嫌が取にくいで困り升て 圓ヲ、お圓様けふはよふしらして下さんしたなア 圓ヲ、勇さんかのさん歌柳様が遅いので御退屈に有ふなア かのゆう もふおつ附お出じや有ふわいな 磯之丞 お圓あの通りじや同じ島でも藝子迄が揚の客を待兼るに此琴浦はひろ網の海老見た様にぴん／＼と刎廻るそちや胴欲な物じやぞよ 琴う堺の乳守に居る時分から振附るといふ事をしつてゐながら仇しつこいほんにお前も上根なお方じやわいなア 八是々琴浦どん此なまの八も今では磯様の辨慶なれどぶい／＼仲間では立られるおいら 權ヲ、おれもこつぱの權といふて面を賣たおいらが顔を捨て思ひ附の流し俄獅子にやとはれて赤頭八せんまのなりを其儘に座をもつもこな様の機嫌を取ふ爲 八もィそふでムり升お腹のたつ事は夏越の祓の事なれば太左衛門橋からさらりつと流して 圓けふの口舌は私が貰ふて中直りにわつさりとお盃をかへてこつぷで一つ呑直しとはどふでムります 品おそれ／＼たしか今さつぱりとしたお吸物がさんじるを筈 皆々さあ／＼お一つ上れいなア ト磯の丞のんで 磯さあ琴浦さそふ ト盃さす 琴いやじやわいなア 權是琴浦どん旦那の思ざしを 八否じやとはどふじやいのふ 琴否じやによつて否じやわいなア 八もィア、イヤこりや何でムり升あんまり邊物や俄をばこじつけてごろじやつたゆへ大方氣上がして酒はいや／＼とおつしやるのでがなムり升ふ 磯又も丶八めがさし出をるかだまつてゐよふ 琴イヱさ丶には酔ぬがすかぬ男に酔たわいなア 磯何じや好ぬ男 ト立かゝろ 皆々とあて 皆々まあ／＼よふムり升る 磯先約の客を變改させても貰ふてあるその方否でも應でも抱て寢るじや 琴否じやわいなア貰はれたゆへ座敷計りは勤れど抱れて寢る事はならぬわいなア 磯抱れて寢る事がならぬとはム丶我言かはしてをる助松靱負めに心中立かきやつ主人より預りの千手院の刀紛失の科で親主計に勘當うけ今では宿なしなりや菰かぶらふもしれぬ者に心中立とはかはつた物好も有物じやなア 琴さいなア世にない男へ立るが心中すかぬお客は勤ぬわいなア 八其勤ぬ女郎をこのなまの八 權こつぱの權が腰おして抱れて寢さす 磯否でも應でも

女郎は貴物金で買て抱て寝る 琴そこをふるが勤の習
ひあはぬが間夫への心中立 磯して其間夫は 権八ゆきへ
めか 琴イヽエ 磯そんなら誰じや 琴外にかあいな男が
ムんす 磯八外に色とは 琴めつたにいふてよい物かいな
ア 磯いはぬ所をいはせて聞のじや 琴いふまいがどふ
して聞んす 磯ヲヽこふしてける ト琴浦を蹴ろ皆々取さへろ さあその
間夫の名をぬかせ 磯八ごん何とじや ト此時向ふ戸やの内より 梶おその間
夫は爰にをりますわいなア 磯ごんヤなんと トすりがね入の祇園ばやしと出に成向より中居お梶酒に酔たるこなしにて大盃を持ひよろ／＼と出る跡より嵯峨右衛門大盃かづきも宛ら田舎侍いつもの敵役の揃茶や娵小石と兩人おかちを肩にかけ連立出て花道にて さが右衛門是々お梶女郎こりやどこ
まで連てあるくのじやちと休息と出かけたいて おかち
サアよろしいわいな何が俄や遷物の囃子で氣のぼり
がするわいなア さが何遷物とはありや 一體何の事じや
小石サア夫はあなた始ての事故おしり成されんも御尤
その遷物俄といひますわな 梶ア、是それを門中で講
釋する事かいなアかれ是いふ内戻つてさんじたわい
なア さが何でも暫時睡眠と出かけにやならぬて ト又右のはやしにて本ぶたいへくる 圓ヲヽおかち嵯峨様を連ましてどこへ這入
てゐやつたぞいの 梶どこといふたらゆふべからおい
通しの御褒美に晝迄隙を貰ふたゆへさが様を連まし
て難波邊を流したらもしおゑ様士龍様や五調さんが
せん一方にゐなさつてなお梶よふきた是で一つのめ
てヽこんな物でのましてヲヽあつ ト大盃で、あふぐ 権琴浦の
間夫といふて出たを八誰じやとおもや仲居のお梶 磯
わりや何で邪魔に出た 梶イヽエ邪魔は致さんぞへ琴
浦のまぶをいへまぶの名を聞ふといはしやんす故ハ
テ琴浦様を揚詰のおかち今ではマアあの子の深間と
いふは私じやゆへ間夫の男と名のつて出ては男なり
けり女圖七といふ琴浦さんの深間じやわいなア さがハ
ヽアそれで外題の趣意もわかつたと申物じやが今申
た琴浦は身が執心で折角取よせた所を貸たとやらか
つたとやら申てこりやどふしてくれる心だ 梶サア宜
しいわいな此遷物の間は紋日つゞきで自由に出來ぬ
子供衆そこを此お梶が揚なれば繰合してあなたへも
貸ますわいなア さがサア其かすとやらかるとやら曰
因縁がわからぬ故 小石ア、申さが様の又根どひが始ま
つたヲヽ笑止やの トさが右衛門の脊中を叩くさが右衛門きよろ／＼して さがハテ扱
こな女は何を云てもヲヽせふし／＼と云がそのマア
大せうしといふは 小石堺にあるわいなア さが成程／＼堺
の大せうじ聞及んでゐる扨はそなたの生國は堺と見
へるわへ 梶イヽエ堺といふは私が生國 小石又あの琴浦様

もゝとは堺の乳守から此大阪の島の内へ仕替へに來やしやんしたのじやわいなア 磯ム、其琴浦が爲にお梶その方が間夫なら間夫にもせよ女郎は賣物此磯之丞が身受をするお圓親方を呼にやつて手附の金子を受とらせ 梶イヽヱ手附は私が打ますか さかハテ奇妙な事を聞物かな女のお梶が女郎の琴浦を受出そふとはかはつた物好 梶なる程嵯峨様はわかりますまいが總體此色里に育つた物は相身互ひ心さへ合ふ時は姫ごぜどしでも中のよいのが則色ましてや一生連そふ男いやじやと思ふては片時もそはれぬ事じやによつて琴浦様の身受は私がしてあの子の好た男にそはす氣じやわいなア琴浦様 琴そふでムんす身に引受て世話して下さんすお梶様の心次第でムんすわいなア 磯スリヤどふでも身共には 梶まあ自由にはさしませぬ 磯して又琴浦を受出すかね 權八お梶そちやもつてゐるかよ 梶イヱかねはムんせぬ 權八それに又身受とは 梶おゑ様見て下さんせ 圓見いとはや 梶琴浦さんの身受のかねまあ當分手附と思ふてわたしが勤奉公に出ますよつてハテ二十兩なりと三十兩なりと私が器量次第相應に直を附さして下さんせといふ事 圓夫でもそなたには親のある身しつかりとした請判がなふてはどふも 磯お圓そんなやゝこしい手附をとらずと爰にある五十兩是を手附にとらすがよい ト財布なげ出しけらかす 梶イヱけふ迄は私が揚の内殊に此さが様にかしましためつたに外の手附をとらす事はならぬわいなア 小石それさがさんお前の揚じや程にどちらへか連立てゆかしやんせいなア ト琴浦を突やる さがそりやマアほんの事かそんなら一寸 ト引よせようとしてはたと見て 少しあたりに法界悋氣暫しは人めの關を忍びたまへ〳〵 女皆そんならけふの相手はあの嵯峨様かへ さが少分乍ら琴浦が思ひ者は我等〳〵 權是々磯様見せ附たらしいあのざま 八どうする了簡でごんすぞいのふ 磯ヤアどふのこふのと又しても出過たおかちめ二人りともうむをいはさずと琴浦を引立い 權八ヲヽ合點じや ト琴浦を引立る皆々取さへる此内向ふより土船のみぶ男達の拵百萬遍の珠數と叩がねのもやふゆかた下駄かけにて出て兩人をポン〳〵と投る 梶ヤアおまへは三ぶさん 女皆つち船さんよい所へ 琴よふきて下さんしたなア 磯そりや兩人共土船じやと〳〵 八イヤ土船でもごもく船でもかけ構はぬ所へ出さつて 權人にしられたおいらをばなせ斷りなしに投やがつたのじや 三ぶヲヽ投たら大事かまだ此上に締上て捻殺そふもしれぬそふ思へ 磯イヤ思

ふまい何で又我々を三ヲヽどづいても大事ない三人そ
りや又なぜに三仲居のお梶が揚詰にしてをく琴浦を
かしてくれいとぬかす故かしてこますさへあるに何
じや抱て寝よふうぬが揚の時人が抱て寝よふといふ
たらうぬら機嫌よふ抱して寝さすか磯ヤア三大阪中
に隠れのない釣船の三ぶが子分釣船より鯊船まだま
だ重い土船の三ぶ樣じや親仁が切た立引の珠數は浴
衣の染もやういがんだ相手と見るならばいさくさな
しの叩鉦うぬらしやつとでもぬかして見されトにらみ廻してい
ふ敵役三人ぶく〳〵してふるふ八もゝ磯樣しやつといはつしやりませぬ
か磯ヱヽやかましいわへ控へてをらふ桃おつとひか
へてをり升ぞト此内さが右衛門もびく〳〵してゐてさがハヽア成程噂に聞た
釣船の跡取てつち船とやらがこふ入てきては大がい
な磯はとり合ぬはずじやてハヽヽ梶三ぶさん此間
からかのお人の事で何やかや相談もありお前に逢た
いと思ふてゐる所よい折に來て下さんしたなア三サ
アおれもその事を聞たゆへ遂物見がてらきた所が今
のしだら見かねて一寸爰へ出たがすぼねの立た代呂
物でもないにおとなげない立引となるまいその替り
には琴浦はちつとの間をれがかるぞや又かさぬとい
ふて見されすぐにすかうべ張倅くはト烟草盆を磯之亟の方へ蹴ちらす磯之亟びく〳〵する權と八もづ〳〵してゐるさが右衛門ついせうしてさがアヽ土船殿とやらもふ夫
には及び申さぬそれなるおかたが挨拶で身共にかす
と相極つて有からあの仁達も何のいひ分がムらふぞ
扨々貴公よい所へお出下されて拙者も祝著に存ます
ト扇にてあふぎ立る三アヽ是々此おざぶも我ばつかり嬉しがつ
てゐらるゝ琴浦をかつたのはをれが與へつれていて
酒の相手にするのじやさがアヽ何の事じや馬鹿〳〵し
いトつまらぬ貌する三サアこちらのざぶ言分があるかありや
いふて見いどふじや磯ヱヽ是最前よりだまつてをれ
ば慮外の段々ト反打皆々留て皆まあ〳〵よふムり升る三何じ
や反打て切る氣か大阪の町人は骨があるぞわが身達
がどの樣にもがいてもそこが土船じやぞく共せぬの
じや磯ヱヽもふ了簡がならぬ兩人共何してをる土船
がこわいか恐ろしいか八アヽ是磯樣おいらにとひ合
すには及ばぬ事權お侍だけで言分が立まいおいらは
まあ跡でいゝ事八權搆はずとあまいかんせ〳〵ト咒ごみする磯之亟仕方のないこなしにて磯ヱヽ是その方ら迄がヱヽもふ了簡がなら
ぬ土船めとやらうぬトぜひのふ三ぶが方へ行ふとするさが右衛門ソカ〳〵いで磯之亟なとめさが
磯殿とやら待たつしやれ磯なぜとめさつしやるさがイ

ヤとめまするのはそのもとのお爲を存じて見受た所が定めて貴殿も御主人より知行てうだいめさるゝで有ふそれが町人との口論に及んで打果し御主人の御用にはどの命をもつてお勤被成るゝぞ 磯 イヤ何のあれ式のやつ眞二つに がさ サア其町人は他領の者殊に遊所といひ旁もつて場所が悪いまあ／＼おひかへ成されい 磯 じやと申て ふさ かよふなる繁華にまじわるからは兎角物事大よふにナ見た事は見逃し聞た事は聞流し馬鹿に成つて遊ぶが欝散と拙者は存ずる磯殿とやらあゝさりとては堅い／＼ 圓 それ／＼こりやあなたのおつしやる通り 皆々 もふ堪忍被成いなア 梶 モウシ磯様お前の様にさしてもない事に力み返つてこわい顔するお方をやぼじやと云て笑ひ升ぞへ がさ こりや堅みをやめてくだけをれ／＼ いも さつてもがをれさつきにからきついひがじやと思の外さが様の粋なお捌き 小石 白いといふたわたしらが白いので有たわいなア 梶 どふやら心有げなさが様の今のお詞何をいふても爰は端近 琴 三ぶさんも奥へ來て何かの相談 がさ それ／＼かよふな論に及ぶのも賑はし過るからの事 三 ヲ、此ざぶがまだ咄せるさあ琴浦どんもお梶もおじや 梶 まあ奥へムんせいなア がさ 身共も小座敷へなと參つて休息申そふ 三 さあ奥へ行ぞよめんざいあら云分ないかぬかして見ぬかアノ大だくらめがさあ皆の衆 皆々 まあ／＼ムんせいなア ト歌に成三ぶおかぢ琴浦女形たいこ持皆々さが右衛門をそやし乍ら這入三人のこつて 磯 てもひどいだんな素町人めじやコリヤ両人の者わいら影でぽん／＼申てをつて今のざまはありや何じや 權 ア、お前もだ侍だてらあの様なたんくは切らして默てゐるといふ事がある物かいの 八 おいらはこわふも何共なければおまへの了簡にある事と控へていたのじや 磯 何をよい口な事ばかり身共とてもさして恐しふも思はねど唯今田舎侍が意見の通り場所が悪い故ひかへをつたコリヤ是武士のたしなみといふ物じや 權八 なにをまけおしみばつかり 磯 それはそふと言合して置た者共がもうきそふな物じやが 八 イヤもふ追附でムり升ふ 權 それ迄こふしてもゐられまい 磯 奥へいて一てう入れうか 權八 それがよふムり升ふ 磯 然らば兩人 權八 まあムりませい ト歌に成り三人奥へ這入るわしが思ひに三國一の歌に成り向ふよりおたつ一寸縞縕後の著附日傘をさし跡より魚賣猟市江戸襲當地白のじゝ絆にてひろ綱の荷なかつぎ竹の子笠にて出て花道よき處にとまり 長 おてもよい所で聞升た事でムんす 市獵 サアわしは堺の肴やじやがお前が尋さんす非筒擲はこちの得意

じやゆへ幸ひと今ゆく處案内をして進ぜませふ 辰私もこつちの勝手は存じませずその井筒甥といふ茶屋で待合しますゝ人がムり升て聞ましたがきつい仕合せでムり升た 彌祭りなり遊物時分じやと思ふてゐらうさやしなるなサヽごんせ〳〵 トどふしんせう馬鹿らしいと跡の歌にて兩人本舞臺へ來る 奥よりお圓出てきて アイ〳〵おとみ二階にお手が鳴ぞへ是は又忙がしい事ではある 彌是爰が井筒甥でごんす 辰それは大きにおせわになり升た 彌お圓様ひる網を持て來ましたぞへ 圓ヲヽ彌市どんか最前から待てゐる所じやわいの 彌そふじや有ふと思ふてえゝ魚計りもてき升たモウシ此女中は内方を尋ねて見へたお人じやぞへ 圓それはマアあなたよふお出被成升たどなた様でムり升へ 辰イヤ私は下のものでムんすが内方へ下荷物の世話なさんす三ぶ様といふは見へませずかいなア 圓アイ三ぶさんは今のさきお出被成て奥にお出被成てゞムり升 辰それはてふど幸ひでムり升た今お内へ行ましたが慥に内かたへとの事それで尋ねてきんじ升た 圓それはマアよふお出被成升たマア奥へお出被成ませ御案内申升ふか 辰イヱ〳〵構ふて下さり升な暫く往來を見がてら爰で汗を入れてからさんじ升ふわいなア 圓さやうならマアおたばこなりと トたばこ盆持行 彌そふ共〳〵爰で見てゐさんせ追附俄もくるし晩には所の遊物で賑やかな事でごんす 辰そふでムり升そふなどふぞ遊物も見て歸りたい物でムり升 圓料理場が待てゐた程に彌市さん荷を見せて下さんせ 彌ハイ〳〵お圓さん見なされすんがりとしたいきな代呂物思ひなしか坂東の女形といふ拵じやなア 圓サアとんと生寫じやわいな 彌ヱヽあんなげんさいを抱て寢て足も腰も抜てやりたい トお辰と顔見合せちやつとり着かごなど見て サアアノやり鯛や鱧きすごや車ゑび ト賣聲にまぎらすお圓笑ひながら 圓何いはんすやら早ふ見せて下んせ 彌どりや代呂物をはかしてこふか ト歌に成り彌市はかつ手へお圓は奥へ這入るお辰のこりゐると奥より琴浦出るゆへ片わきへよりゐる 琴ヱヽ是観負様はムんせぬ事か此二三日はとんと便りも聞ず戀しい人には合もせず聞もうるさい磯之丞づらが身受のさたこりやどふしたらよからふぞいなア ト此内さが右衛門そろ〳〵出て思入有て後よりそつと抱つく琴浦恟りして 琴ヲヽこは誰様じやぞいなア さが誰とはおろか嵯峨じや〳〵 琴ヱヽお前は嵯峨様佻いやらしいはなさんせいなア さがイヤ放さぬ放さぬもうこふ後から縮附てからは水をかけてもはなしやせぬ琴浦こてさまは胴欲な者じやぞよ乳守にゐる

時分から見ぬ戀にあこがれてをる此嵯峨右衞門聞けば靭負とやらは勘當の身の上其樣な風來者に心中立とは惡い合點又磯之丞とやらを否がるも無理はないそれよりさらりと氣をかへて身どもに抱れて寢る氣はないかうんとさへいや是此通りソレ受出す身受の金は此財布に小判で百兩何とゑらいか〳〵是どふじや〳〵 ト首にかけてゐる財布をもたしてしなつくをふり切 琴ヱヽ人體らしふもない爰はなさんせ否じや〳〵 さがハテぴんしやんしても此大鳥が摑んではなさぬ〳〵 琴ヱヽ憎てらしいアレヱ〳〵 さがハテ扨そふいふた物じやないまんざら身どもじやてヽ撥られた男でもないわさ其上金銀に事をかヽぬ身の上じやうんといふて靡きをれ〳〵 ト又だき附 琴ヱヽめつたな事さしやんすなきたないわいな さがイヤもふきたなふてもきれいでもかふ成たら差別はない否でも應でもちよつとじや〳〵 ト琴浦をこかし上へのる所をお辰ずつと出て嵯峨右衞門を突のけ又くる所をさか手に取る アイタヽヽコリヤどふする〳〵 辰イヤ何ともしませぬちよつとさヽへ升たのでムんす 琴ヤアお前はつゐに見受ぬ女中樣 辰イヤ私は此内にちよつと待合します人が有て參り升た物でムんす トさが右衞門手をさすり乍 さがム、その者が何故身どもを手ごめにするのさ 辰イヤ手ごめには致しませぬさつきにから見て居升ればれつきとしたお侍樣が姫ごせをとらまへて人體らしいよふ出來ますマア爰はなしてやらしやんせいなア ト又よる所を手なびつしやり叩く さがヱヽ甘い所へさまぐ〳〵の者が出來てア、いたい世話なア 辰是お前は堺の乳守にゐやしやんした琴浦さんかへ 琴アイ私は琴浦でムんす 辰そふして靭負樣はかはらず爰へムんすかへ 琴イヽヱ此二三日はお顏を見ませぬゆへ案じて居升がよふマアしつてゐやんすなア 辰しつてゐる筈こちの人に常々聞及でゐるお二人の中わたしは靭負樣のおせわする一寸德兵衞といふ物の女房でムんすわいなア 琴ヱヽそんならお前がお辰樣かへ 辰そふでムんすそんならお前も私が事を 琴よふ聞てゐますわいなア さが是はしたり ト仰山に手をたゝいて 女は女同士とよくはなしのあふ物じやなア 琴幸ひ三ぶさんもお梶さんも奥にゐてヾムんすぞへ 辰サア爰へきてゐやしやんすと聞升た故何かの事を噺したし連合の德兵衞殿は此春から脚氣を患らふて出られませぬゆへ辰が代りに登り升たのじやわいなア さが夫は遠方の所御苦勞千萬にムつたのふ 辰ヱヽ此侍は俄追從そふして三ぶ樣

やお梶樣はどの座敷にゐやしやんすへ 琴奥の離れ座敷にでムんす私が案内しませふわいなア さが イヱ〳〵ひどいめにあふた序に身どももどふで奥座敷へ参るついで案内を致そふわへ 辰成程そりやおまへ御苦勞でムんすそんなら琴浦さん何かはのちにホヽ私とした事が我内か何ぞの樣に さが イヤ何の遠慮に及び申さぬ 辰どりやお二人にあひませふかつ ト歌に成嵯峨右衛門むかしふ案内して連立這入る琴浦あとを見送つて 琴南手の座敷でムんすぞへそこへ宜しふたのみ升たぞへどれ此内に靭負樣へ上る文をそふじや ト硯をとつて來て文を書にかゝる歌に成り向ふより靭負著流し一本ざしにてくもかごにのりみだの三、さしの六、くも助にて駕なかき出て 六旦那爰が約束のいづ勘でごんす だみ旦那是旦那 トゆきへ中にへねむりて 靭ヲイ〳〵やれ〳〵面白い夢を見たわい太儀で有た歸つて休んでくれ トすつと出る六とめて 六是々旦那駕ちんを貰ふかい 靭とは何の事じや だみ何の事とは爰まで送つて來た駕ちんを下されませ 靭ヲヽ金が入用なかけふは持合せがない重ねてやり升ふ 六是々貴樣たわいもないわろじや駕賃掛にする者が有ふかい だあ持合せがないとぬかすなら著てゐる物をひつぱげやい 靭こいつ武士にむかつて慮外なやつの身の程をしらぬ者じや 六錢も拂はぬ分際で身の程しらぬもすさまじい だみヱヽたゝんでしまへ〳〵 ト立かゝる琴浦此中へわけ入り 琴ヤア靭負樣か是は又騷しいまあ靜にして下さんせ 六みだ いやじや〳〵了簡ならんぞ〳〵 靭ヲヽ琴浦か搆やんな狼籍働らくやつ手は見せぬぞ ト刀をひねくる琴浦とめて 琴是はしたりお前は世を忍ぶイヤ忍んでムんす事じやによつて私次第にしてまあ靜まつて下さんせいなア だみ是々女中樣此わろはな 琴もふ何もいふて下さんすな心にはたるまいけれど ト鏡袋よりかねを出してやる改めて みだヤアこりやヽ朱が三きれ 琴ちやつといんで下さんせ 六忝ふごんす相棒こい ト兩人橋懸りへ這入るゆきへ跡見送りて 靭ヱヽ不屆者めが 琴もふよござんすまあちやつと這入らしやんせいなア ト二重へつれて上る和らいだ合方に成る お前もマアめつそふななぜあの樣な短氣を出して下さんすぞいつぞやから浪々の御身の上大せつな刀を詮議して親御樣の御勘當ゆるされふとは思はずか立にも居にも案じられ今も今とてみ上ふと書かけて居る所相手といひ所といひひよつともしもの事が有たらどふせふと思はしやんすぞちとたしなましやんせいなア 靭サアそういやると皆おれが悪いもう堪忍してたもや ト琴浦つんとすねて顔背ける 是々琴浦わしじやとて何の如才が有ふぞいの此間内は堺の方へ三四日いて

ゐたもその刀の詮議の爲親類の方に居たれどそなたの顏も見たしと戻りかけたがついゑんどさに中の新家から駕に乘て今のしだらもふ大概で堪忍して呉たがよいわいの（ト琴浦煙草盆をあちらへ持行ゆきへこなし有て）こりやおれが誤りよふが氣にいらぬの然らば改て行儀正しふハッ〳〵琴浦樣へ申上升る只今のは拙者が重々の不調法兩手を突かふべを大地にすり附て千秋萬歳御堪忍の程偏に希上奉り升るハッ〳〵（トむつかしふいふ）琴ヱ、あほうらしいをかんせいなア 靭スリヤ御高免なし下されうか 琴あんまりでおかしいわいなアホ、、、 靭そんならいよ〳〵堪忍してたもるか 琴堪忍して上る程に一寸ムんせ（ト手をとる） 靭どこへ行のじや 琴しれた事奥へいて咄するのじやわいなア 靭何の噺するなら爰でもできる事じやに 琴イ、ヱ外に何じやかじや噺があるわいなア 靭何じやかじや噺がたまつてあるかそりやこつそりと聞んならん事か噺たら庚申の晩の物じやに 琴そんな事いはしやんすと又怒るぞへ 靭ヲット夫では降參〳〵 琴サムんせいなア 靭さらば噺を承らふか（ト歌に成り兩人手をとり奥へ這入跡へ磯之丞權と八入ちがふて出てきて） 磯二人のもの今のを見たか 權がんばりやんした 八そんなら今の二才めが 磯戀の敵の靭負めじや去年の春お鯛茶屋で亂れの傳八にいひ附てきやつが主人より預りの千手院の刀をぬすませ肌身放さず爰に持て居るにまだ浪人してもあの通り手に手を取て閨へ入をつたヱ、もえるわい〳〵（ト足ずりしてなく）八（ト叫く磯之丞ヲ、合點じやとうなづき三人奥）權是へ這入跡へ地に成彌市ほつと醉にて出て來て） 彌もふ〳〵のめぬ〳〵いきついた〳〵何のめりや如才が有ふ持てきた肴は皆はけるし程のよい臺所酒ゑらふやつたら面白なつてきたぞ是から俄などやらかさにやなるまい（ト此時奥ばた〳〵と足音する彌市小隱にする奥よりそふ〳〵しく權はゐきへ八は琴浦な引立磯之丞をつて出るをお圓げいこ仲靭居みな〳〵とめ乍出て）こりや狼籍な何とするのじや 琴めつたな事さしやんすと聞事じやないぞへ 磯身どもが身受する琴浦に忍逢ふ間夫の正體 權よふ見附さんした盜ぐらひの見せしめ 八此邊を引ずり廻つて跡はどんぶりじや 女皆ア、めつそふもない（ト此時彌市ソカ〳〵と出てきつとゝめ）
彌コリャ貴樣ら此二人をどふするのじや 權こな堺の肴屋わいらの出る所じやない 八とめ立してけがまくらぬ内ちよこ〳〵と成てをれ 彌イヤちよこ〳〵なつてゐまいわへ此お二人は堺に居る時分からの深い中じやそれをわいらの自由に手ごめにはさゝんはヲ、一番堺の魚仲買の彌市樣がさゝんのじや（ト鉢卷しておふごを持てつ）

よいふりする 磯ヱ、めんどうな兩人共擶はずと早ふ〳〵 ト彌市を
はりたふす 權八ヲ、合點じやさあうせふ ト皆々なさゝへもみ合ふ內橋懸りより傳八出
びたへ附元服上下大小にて跡より女のり物一挺つらせ家來大ぜいつれ出る本舞臺の人數もみおふた見て 傳八家來共そ
りや家來皆々しづまらふぞ ト皆々なを取まく磯之丞權八三人悄りして 三人こりやどふ
じや 傳身は音羽浪之進といふ者勢州長野の姫君をお
迎ひの爲おちの人諸共罷り越たぞ 磯ム、勢州長野の
お乳の人とやらが此所へ 權姫君の迎ひといふが 八そ
の姫はどれにゐるのじや 彌何じや姫の迎ひじや朝
迎ひか暮迎ひかても仰山な迎ひじやなア 小石どふぞそ
の生たお姫樣とやらが見たふムんす 女皆ちやつと見せ
て下さんせいなア ト傳八乘物の傍へいてていねいに手をつかへ 傳お乳の人いざ
是へお出まし被成れい ト合方に成る乘物の中よりお熊ばゝ、御主殿のこしらへにほうしかけふけたる拵
にてしづ〳〵出る 熊浪之進殿ってんならあの女中が琴浦殿か ト耳の遠
い思入にていふ 傳八そばへいて 姫樣と申はあなたの事でムり升わいの
ふ 琴ヱ、ト靭負彌市も顏見合せふしぎなかほ 熊お驚き被成ふふしぎにムら
ふイヤモ思ひ懸ない主従の御對面水子の時におわか
れ申た儘親はなけれど子はそだつと申がハテ美くし
ふ御成人被成たのふ ト琴浦の手をとつて懸ひ意に 琴ヱ、何の事じや
ぞいなア 彌何じやむつかしい事をいふなア 靭そなた
は覺が有かいのう 琴イヱ微塵も覺へはムんせぬ 傳成

程お覺ないは御尤あなた樣の只今の父御は攝州住吉
安立町三河屋義平次と申つる物の種を商ふ町人でム
らふがな 琴アイそふでムんすわいなア 傳その三河屋
義平次と申はこなたの養父眞實血筋をわけられたは
拙者らが御主人中務の大夫信政樣是なる女中はこな
た樣にお乳を上たる漣殿でムり升る 琴ヱ、 ト皆々悄りお熊懷より
短册を出して 熊證據といふは此短册「いせの海のちひろの底
にしづむとも 琴なる程「今は名にてふかいやあらま
じと云下の句は私しが守りに ト守りより短册を出して見る 傳則それ
が殿樣の御直筆御妾腹に御誕生の姫君殊なふ寵愛遊
されし所御本妻の妬ふかくいたはしながらをりおの
ゝ松原に此短册の下の句を後の筐にそへ捨られしを
ひろひ取たは三河屋義平次とやらその、ち泉州乳守
の里へうき川竹の御奉公ときくとひとしく主君のお
歎き今は本妻そのふの方も過行給へば誰憚からぬ殿
の姫君いそぎ迎ひ奉れと主君の嚴命立越見れば大阪
島の内へ住替とやらに御出と承るより直樣當所藏や
しきへ參上致し樣子を開ば柏風呂の琴浦はをりおの
ひめ樣と明白に相しれしゆへお乳の人諸共今日のお
迎ひいそぎ國へお歸り有て絶へてひさしき御親子の

對面あられませふ 彌そんならあの琴浦さんの親御といふはお大名で有たか 靭ほんにそふとはしらずても人の行衞と水の流れは 磯ハテ思寄らぬ事じやなァ 琴扨はそふいふ事ござムんしたか私は今まで義平次樣をほんの爺樣じやとはつかり思ふてしらぬ事とて思出しも仕ませなんだ不孝の罪おゆるし被成て下さりませ 熊御合點がゆきましたかしらぬ內はぜひもなしこふ申出し升からは姫君樣に勤奉公はさゝれませぬツレ浪之進殿 傳いかにも此家の亭主はをらぬか是へ出ませい 圓ハイお圓と申て私でムり升る 傳今聞通り琴浦は此方の主君の姫君なれば片時も勤はさゝれぬ夫ゆへ唯今藏やしき迄伴ひかへるそふ心得よ 圓ハイそれはきつい迷惑でムり升る琴浦樣は柏風呂と申て親方もムり升殊に私の方にお客がムり升て身受を〳〵とおつしやるさへ 傳ハテ金子がほしくばいか程なりと勢州表へ取に參れ 圓でもそんな事が 傳詞をかへすと手は見せぬぞ 圓是は又迷惑な事では有ぞ 傳いざ漣殿姫君樣を御同道 熊ヲヽ宜しいかいざ姫君樣にはお立あられ升ふ 琴サァ夫でもあの私はな 熊勤の內に言交はし遊ばした殿御が有てか 琴アイ國へとては

どふも 傳イヤその儀もとくより承知致すいひかはされたる靭負殿諸共國元へ連歸り長野のお跡目をあしいようには計らひませぬいざ御兩所ともお立あられませふ 琴そんなら靭負樣も一所に行のかへ 靭でも拙者は大切な千手院の刀詮議の 傳ハテそれも一まづ歸國の上にて一家中と評定いたし同勢をもつて手分をなし詮議致さばしれぬと申ことはムらぬ 熊してゆきへ樣とやらには助松の系圖の一卷それに所持してムるかな 靭成程勘當受しその折から助松の家の系圖は肌身放さず所持してをります 傳系圖は則御所持でムり升ると（ト始終耳の遠い心にて大音にていふうなづいて） 熊ヲヽ夫は重疊その一卷さへ御所持なら系圖たゞしい國の守の聟君何かの事は歸國のうへ 靭さよふならいかよふ共 女皆琴浦樣もういかんすかへ 琴皆樣さらばへ 熊ソレ浪之進殿 傳姫君のお立 家來皆々ハア、（ト合方に成り琴浦お熊ゆきへ傳八家來皆々向ふへ行ふとするよき所にて內より） 梶お乳母樣まつた揚詰の琴浦樣をどこへ連てゆくのじやへ 熊ヤァ（トぎつくりとまる傳八磯之丞權八氣味合） 梶せりふが殘つたおうば樣附そひのお侍樣もお邪魔じや有ふがまあ〳〵待て下さんせいなァ（ト向ふへ出る彌市御山に身拵して扨こそといふ思入傳八お熊の顏を見るお熊大事ないといふ思入にて） 熊ヱ、是何を猶豫家來共搆はずときや〳〵

ト向ふへ又行ふとする　梶それ彌市どん　彌ヲヽ合點じや是男衆〳〵
あの手合ひひとりも迯すまいぞ　みな〳〵合點じや〳〵　ト幕
明のたいこ持下男大ぜいてんでに棒をもち出て傳八お熊を取まくゆへ琴浦は上手へのく家來皆々乘物を置て迯て這入る　傳コ
リヤうぬらいひ合して狼籍を働らく〳〵なにつくいやつ
まあ女めからうぬを　ト反打ておかちにかゝるおかち一寸とめる彌市男皆々支へるお熊もたまりかねて
お梶にかゝるおかち傳八を投のけてお熊の顔をきつと見合して　梶ヤアおまへは　熊ヲヽそな
たは　ト雙方びつくり　梶母様　熊アヽ是　トいふてくれなと仕方して隠して拜む傳八何なとかゝるな
ふりほどいて又投付　梶サアかゝかゝかたりの様なお乳母様と申
にマア〳〵ヱヽいひたいわいな〳〵いへばいふほど
恥の上塗コリヤお前が言合して琴浦様をほんにむご
い心なサアむごいめにあはぬ内きり〳〵ちやつとい
なしやんせいなア　トいろ〳〵思入有ていふて突はなすお熊そしらぬ顔してふもんつくらひ　熊ヲ
ヲいに升ふ〳〵こんな所にゐるといふたとてゐられ
る物かどりや歸り升うか　ト傳八に來いと顔にてして行ふとする彌市とらへて　彌イ
イヤいなさぬ〳〵お梶様衒のよふな所かいのしれて
ある大盗人藝者衆も男衆もだんないすねも腰もたゝ
ぬ程どやさんせ〳〵　男皆々　ぬす人めをどづけ〳〵　トわやく〳〵い
ふて傳八お熊を取巻お熊びく〳〵する傳八立上つて　傳コリヤ〳〵衒とはうぬ誰が
かたりじやさあ返答ぬかせ　トお熊礒之丞と顔見合せきつと成て　熊ヲヽわ
しもそんな紛はしい者じやない勢州長野のお乳の人

じやぞ　礒ヲヽそふじや長野家のお乳の人とあれば俺
相いふて腹立させては跡がむづかしからふ　權八　きよろ
きよろした事いはずと誤れ〳〵　梶そふじやわいなア
ハテ高が衒でも侍なりお乳母様なり誤つたとて恥に
はならぬによつてこりやこつちから誤つていなして
やつたがよいわいな　彌ヱヽ何をうろたへていふのじ
やいの何も衒めに誤つていなす事はない重ねての見
せしめ腕もすねもぼつき〳〵と折てしまへ〳〵　礒ヤ
イヤイ肴やめうぬ一人が衒呼はり衒といふには　ごん八
何ぞ證據が有ての事か　梶ハテせうこも何にもいらぬ
早ふいなしてやつたがよいわいな　彌ハテ妙な事をい
はんすわいのこいつらを捕へて大盗人衒じやといふ
からはせうこのない事いはふかいの　三人　してその證據
を見よふかい　彌ハテせふことといふは琴浦様をいせの
長野のお姫様で本妻の妬から捨たといふが伊勢の國
から捨る所も有ふにわざわざと遠い此住吉の遠里小
野の松原へ捨に來たといふが嘘の正銘　礒漣とやら言
譯があるならちやつと申せ〳〵　熊サアそりやアノ何
じやわいなアそれヲそれよ伊勢の國は狼がたあんと
ゐる所で捨子が有が最期〳〵てしまい升わいなそこで

此住吉は猥のない所じやと聞こくはれる氣遣ひのない様にとそれではる〴〵爰まで捨にきたのじやが何としたへ 靭夫に又此靭負と琴浦との中をどふして藏屋敷にしつてゐるな 傳夫はアノヲ、そふじや評判じや柏風呂の琴浦は助松靭負と深い中じやと今町中で専らはやつて評判じやわい 彌それればかりじやない伊勢の藏屋敷が大阪に有ふ筈もない 圓金もなしにお大名が奉公人を引上被成れふ筈もなし 彌その上おうば貴様耳が遠いじやないか 熊ヤァ 彌それにお梶様が呼とめた折よふ一番に聞へたなア 熊サアそれはな 彌そちらの侍いひわけが有か 傳サアそれはな 皆々サア〳〵〳〵 (トお熊傳八いきつまる磯之丞八權も術なき思入) 八 コリヤ街めもうかう顯れる上からは爰に長居したら身どもが目に物見せるぞ 八權 早ふ迯ていね〳〵 (ト二人あせる) 彌 一體マアおのれはがてんのゆかぬ衣裳附どふやら衣裳屋の借物らしい 皆々 そふじや〳〵裸にせい〳〵 (ト皆々わや〳〵いふ傳八かたはだぬぐと下に江戸はら當してゐるお熊つゝよふなつて) 熊 おのら寄りやがつたら開事じやないぞ衣裳はもとよりあたまゝ迄借物で此通りじや (トあたまの子をとる下帽せわ婆々也は皆々見て) 彌 そりやこそよふ〳〵と化の皮現はしをつた 皆々 皆てもふといやつらなア 女皆 ヲ、氣の毒やの 彌 あの顔見やんせ悪い俄なアあれで姫君のお乳母もすさまじい 圓 もふよいわいな泣かゝつてゐるぞへ 彌 重ての見せしめ川へやれ〳〵 (ト皆々棒にてお熊傳八なぐり廻す) 熊 ア、いたいわいな荒らふさんすな姫ごぜじやわいの 彌 うぬ姫ごぜもすさまじいわへ (ト又なぐりかゝるお梶磯之丞とめて) 梶 ハテその位にしたらもうよいわいなア 磯 それ〳〵おかぢが挨拶じやけふはもういなしてやれ〳〵 八 そふ共〳〵ヱ、命冥加な大がたりめ 權 きり〳〵ちやつとうせをらふ (ト首筋とらへ兩人共下手へほふる兩人こけてゐる) 彌 大盗人めがいろ〳〵のやつがわいてうせる 梶 てもまが〳〵しい街事琴浦様を大名の姫君じやのと此頼み手も大かたそれとしれてあれど心有ていはぬぞへ (ト磯之丞の方を見る磯之丞もよそ見して) 磯 悪い婆なアどふしてをるぞ 彌 厳餅焚た様に成てをる (ト傳八お熊片いきに成て起上り) 傳 アイタ、、ゐらいめに合しあがつたぞお熊ばゞ心もちはどふじや 熊 心持はうごろもちじやアイタ、、ヱ、折角味よふやつた物を悪い所にさま〴〵のやつがをつてかり物のいせふはもとより下帷子までちやつちやむちやくに成つたヱ、覺てをらふぞ (トおかぢの方をにらんでゐる) 圓 ほんにもう油断も隙もなる事じやない 彌 お圓様災難逃れた祝ひ事に自立はどふじやな 圓

いはひ酒に奥で大立にせふさあ皆樣もムんせ 磯 身共も奥で酒などのもふ此上の肴には彼が印にご印なア（トお熊に顏でするお熊うなづく磯之丞ちやつとはたの顏見て）それ印は冬瓜ご印は五位の吸物でのみ直そふなア二人の者 八 ごんそりやよふごんせう 梶 サア街の女中もよいかげんにいんだがよからふぞへ 熊 サアよいわいお歸り被成るにも此乘物がのこつてけつかる傳八是も借物じや歸さにやなるまい 傳 ヲ、そふじや家來のがきらは一番に迯て助つてけつかるせうことがない婆主片棒やつてくれ 熊 がつてんじや〳〵邪魔になる物は中へぶちこめ〳〵（ト兩人刀やぼうしな中に打込みちんば引乍かき上る皆々笑ふて）皆々 あのざま見いハ、、、 熊 笑ひやがるなおかしふないぞいま〳〵しい何と傳ば聞てくれ延三わざと仕込で來た片市事もてこずつて慶子からぬめに淡路をつたとはどうじや 傳 イヤ甘いわへ我等も一首うかんだ翫十郎よりうむが安いと世にいへど坂東事じやの一蝶やくたい 熊 アヽよふ云れた事だや（ト歌に成り兩人ぼやきながら乘物をかきながら向ふへ這入る男みな〳〵わ〳〵下座へ這入）彌 サアかたりめはぼいいなした是からがゐらの立のゐら騷しじや 靭 そふとも〳〵さあおかぢも琴浦も奥へおじやらんか 梶 アヽイヤお前にはちよつといひたい事もムんす爰

に殘つて是琴浦樣おまへは奥へいて氣を附さんせぬと今の樣にめがける物がそこら當にたあんとムんす故ほんにマア心がらとて淺猿しの（ト向ふを見て磯之丞と顏見合せちやつと氣なか）へあつさりと騷がしやんせいなア 女皆々 さあ〳〵ムんせいなア（ト騷歌に成り此一件皆々奥へ這入る跡にゆきへおかぢ兩人殘つて）靭 おかぢおれにいはんならんとは何の用じや 梶 サアその用といふは（ト一寸心いき有て靭負の手な取思入有て）ヱヽマア お前樣はなア（トむな盡をとつて下にたくやわらかな合かたになる）今更いふではムり升ねどあなたの親御は泉州濱田の御家中助松主計樣私の爺樣團七殿は喧嘩の上下手人にとられ入牢の時主計樣のお情で無難に助りその御縁につれて私も又お國の殿樣へ妣奉公四五年以前に爺樣の御病氣介抱がてら御暇をもらひ今此樣な奉公はしてをり升れど死れた爺樣といひ私まで御恩のある主計樣の御子なればと琴浦樣のお世話まで致し升よふな物それに附ましても去年の春お鯛茶やで殿樣よりお預りの千手院の刀紛失何卒此刀の詮議をして琴浦樣諸共御歸參をさせましたいと爺樣の友達の三ぶ樣や德兵衛樣とも心を合していろ〳〵の心遣ひそふして何か詮議の手筋でも出來升たかへ 靭 サア此三四日方々と心當りの所を尋ねて見たが是ぞ

といふ詮議の筋も 梶 それごらふじませなあなたより世間の者が鵜の目鷹の目と今の樣にかたりもあればとかく御歸參被成る迄は大切なお身隨分共に何事にも心をお附被成ませや 靭 そりやよふ合點してゐるわいのふヱ、是何かに附てこなたのいかい心遣ひ何と禮のいひよふも 梶 ハテ扨何のお禮に及ぶ事琴浦樣をひかし升て早ふ御歸參をさせましたいが私の心樂しみ （ト此内琴浦奥より出てゆきへの顔に紙を丸めてほるゆきへ琴浦仕かたおかぢふと琴浦を見る琴浦かくれるゆきへそしらぬ顔で居るおかぢこなし有て） ほんにわたしとした事が自身計りこんな事いふて定めてぽつと被成つたじやあろさあちやつと奥へいて琴浦さんと一所にさゝなと上りませいなア 靭 イヤもふ酒ものみとふはないわいの 梶 ヱ、何をしんしやく被成るぞいなア琴浦樣も待てゞムんすちやつといて上被成いなア 靭 行とふもなけれどそしたらいても大事ないかいのふ 梶 ハテそふはちやいなア （ト靭負いそいで行ふとするおかぢ一寸たもとをひかへて） もし又あんまり逢過てわづらはぬよふに被成ませや 靭 ヱ、何をいやるぞいの （ト歌に成り靭負奥へ這入るおかぢ跡にちつとこなし有て） 梶 堺からのなじみといひおもしろい水の出ばなア、思へばしどのないのも道理でもありそれはそふと三ぶさんとの噺しの事はハテどふした物で有ふなア （ト思案の思入和らかな合方と成る下手より嵯峨右衛門煙草盆を提乍欠びしい／＼出て来て） やれ／＼丁稚のよふによく遣はれる事かな女郎を買に來て女郎は抱いでさま／＼の目にあふ事じやちと愛でのんきをやつてくれうか （ト平舞臺へ下りて煙草のむおかぢ是を見て傍の銚子を取て盃に二三ばいのんで俄に酒に醉ふたるふりにてひよろ／＼とし乍そばへよつて） 梶 ヲ、嵯峨樣愛にかへ座敷の取持でさゝをしいられきつふ醉ふた程に （トなまめいてもたれる） 是々その方は御機嫌でも此方はとんと機嫌にはないでゐすじや買にきた女郎は仲居の貴樣が揚詰で手には廻らず長居は恐れどれいんでくれう／＼ （ト立上り衣紋を直すおかぢ嵯峨右衛門の相口をそつと隱してなく嵯峨右衛門うろ／＼あたりをさがす） 梶 嵯峨樣何ぞ見へぬ物がムんすかへ イヤ／＼見へぬ物はないがハテめんよふな （トいひ／＼尋ねる） 梶 てもマアあぶな物をひらふた事じやよい／＼太左衛門橋へ持ていて流してしまおふ （ト右の相口を出す嵯峨右衛門術なきこなしにてうしろより附あるひてとめて） アア是々落し人の在家がしれ申た／＼ 梶 そりやどこに居られ升るへ 少分ながら愛にゐられ升るて 梶 ヱ、あなたかへ 面目次第もムらぬ 梶 おまへもマアお侍樣が刄物を忘れるとはたしなみ被成れ イヤ以後はきつと申附るでムり升ふ此方へ遣はされ 梶 イヱ／＼上る事はならぬそれ共是がほしくば上もせふが其か

はり私が頼も聞てもらはにやならぬぞへ さが イヤモ夫
さへこつちへ下されば何事か御用を承るでムる 梶 そ
んなら聞て下さんすか嵯峨様わしやおまへにな さが ヤ
ア 梶 惚升たわいなア（ト抱つく、嵯峨右衛門ちやつと飛のく） さが ア、めつそふ
もないおやまこそ買にきたれ仲居と懇ろは致さぬ置
てもらをふ否でゑすわい 梶 そんならおまへ仲居は嫌
ひかへヱ、折角わしが心ざしも水の泡じやなア さが そ
りやもふ女郎にはふられるしせめてこなたがそふい
ふて下されば嘘にでも喜んではゐるじやて 梶 そふお
もはしやんすなら琴浦様の事は思ひ切て乗かへる心
はムんせんかいなア〳〵 さが イヤモこんな拍子の悪い
時にはどんな目にあはふやらしれぬ何でもあの琴浦
をしたつてきたも何の役に立ぬ事で有たいんでくれ
う〳〵その腰の物を戻して下され 梶 サア是がほしく
ば私がいふ事をきかしやんすか さが じやて丶それでは
法華宗が正信偈を上るよふな物じや 梶 ヱ、いろ〳〵
の事をいはしやんすそふしてマアおまへの帷子はど
こもかもふくろびて裾がばら〳〵してゐるぞへそん
な形でも門中をあるかしやんすかへ さが イヤもふ少々
のふくろびぐらい何ともないじやて 梶 ヱ、おまへも

マア片意地な一寸一針ぐさ〳〵と縫て上ふさあちよ
つとぬがしやんせいなア（ト嵯峨右衛門の帯へ手をかける悧りしてちやつとおさへて） さが
ア、是縫なら此形りでぬふてもらをふぞ 峨 ヲ、しん
氣お前もそふした形りで縫はれる物かいなア さが でも
内證は北國じやて 梶 ホ、自慢で加賀の下帯かへ さが 其
マア隣の越中じや 梶 ヱ、ちやつとぬがんせんと針で
つくぞへ さが ア、是あぶない〳〵 梶 ヱ、卑怯な人さん
ではある（トむりに帯をとき著物をとる嵯峨右衛門丸裸じゆばん一つになるてい首にうこんちりめんの財布にかねを入てかけてゐる此時奥より三ぶやはり一腰さしツカ〳〵と出ておかちを引廻し眞中に立） 三 間男見附たつてこ
動くな 梶 ヤアおまへは三ぶさんハア、（トうつむくさが右衛門はあせ褌一つにてそろ〳〵逃かける）
三 是々侍またんせ さが イヤ私はちよつと
三どこへゆくのじや さが しゝして参じ升る（ト三ぶ嵯峨右衛門の帯をとつて）
三 此帯は貴様の帯か さが ハイ左様じやそふにムり升
る 三 此おかちは仲居奉公はしてゐれど此つち船の
三ぶと云主のある女房無體な不義いひかけてなせ帯
を解たのじや さが ア、是々麁相いふまい身は否じやと
いふ物をあのお梶がむりむたいに 三 しらぬこなたが
なせ帯をといた さが そりや身共の帷子がふくろびたと
いふて誰がたのみもせぬに 三 マ、夫ならそれでよい
サアお梶おのれにいふ事があるそこへ直れ（トおかち覺期きはめた

こなしにて前へ出て 梶是こちの人私にも用が有とはあの嵯峨樣の事ならぐず〱といひわけはしませんアノわたしやあのお方に惚ましたト嵯峨右衛門びく〱してゐるアイ惚たによつて私の方から仕かけた事じやこふ成たら義理もへちまもムんせぬあのお方にそひとふムんすさあきつぱりと私に暇を下さんせ 三へゝたのもしそふに思ふたが暇ほしがる根性で樣子がしれた暇がほしかやらうおのりや見事貰ふかよ 梶アイわしも今迄は身を堅ふ持ておまへをのけて外に男狂ひした事もなしアヽさすがは親の子じや親の闇七によふ似てかたちは女子心や所在はとんと男じやありや女闇七じや〱と迄いはれた物じやが是此嵯峨樣計には惚ましたほれたによつてさあ暇下さんせ 三ヲヽゑらい物じや夫程ほしかやらうわへ 梶さあ下さんせ 三ヲヽこうしてやらうト刀に手をかけるをお梶とめ乍ら嵯峨右衛門の刀にかけて 梶わたしもこふして貰うわいなアト双方一時に刀をぬき合す嵯峨右衛門びつくりして さがアヽコリヤ又短氣などふした事じやト中へわつて這入かけてふるひ乍留て コリヤまて〱〱待てくれ 三ヤア邪魔せまいあぶない〱 梶お前に怪我がありや悪いわいなア さがイヤ〱〱待てくれコリヤまた困つた事じや堪忍ならにや跡で切あへ今切あふと刀は身共のなりかゝり合で迷惑じや夫程きりたかせひがない此嵯峨右衛門をきれ〱〱ト胸をたゝいて中へ這入かけて悔りして飛のきよしづの風呂屏風をとつてきて裸身乍わつて入まん中へ當刀をおさへて三人きつと見へとなる まて〱〱 嵯峨がとめた此夫婦喧嘩一番待て貰はふわい 梶お前のしつた事じやないそこ退て下さんせ 三邪魔しやるのは扨はおかちめがかたもつのじやな 梶三サヽそこをのいた〱ト又きつとなる さがイヤのかぬ又かたもつも嗅にもつもまだそこ迄はゆかぬ内じやが女夫喧嘩から言上つて討はたそふとはアヽ了簡が若い〱 三ヤア女房めにあゝいはれて了簡をする物が有ふか若ふても年よつてもざがわがみや夫を堪忍するか さがヲヽするとも〱三千世界に堪忍のならぬといふは春寒いと秋ひだるいより外かんにんのならぬ事はない物じや此嵯峨右衛門が是まで見きたつてきた内ま男のおこないよふに上中下の三段有若いによつてしるまい〱まづ其内に下の了簡といふは今するが下の下の極々下の思案なぜといへ男らしふ討果しても今まで尻に敷れたり鼻毛をよまれた風聽を世間へパツとちらすこんたんそこで了簡してだまつて悪性をさしてをくを粋じや〱と思へ共是もあ

んまり褒られた事でもない是がまあ二番目の中の思案極上々の飛切無類箱入の思案といふは丁簡の胸をさすつて思ふさま扱ひの金をとつてさらりと暇をやつてしもふかそふでなくばもとの樣に又餘でくらすが極上々の箱入の思案ナ合點がいたかそこを思ふて喧嘩の挨拶あまり是は珍らしいから少々のかねはおれが出しても貰ひに出た身共にたも〳〵ムウ道理じや〳〵が雙方共に得心がいたかいたらさあひきやどふじやぞいのふ 三サアそりや丁簡すまい物でもないがお梶わりやマア何ぼだすぞ 梶何ぼといふてわしや金はムんせぬそれじやによつてこちやひきやせぬ 三そんならおれもまあひかぬは さが是はしたり少々ならおれが出してやらふといふ事 三少々では丁簡がいかない極上々の箱入ほどとらにや聞ぬ 梶嵯峨樣おまへも挨拶さんすからじや全體何ほど程出す氣じや さがまあ三百目のお定りを張こんで五百目出そふか 三めつそふもない五百目位ですます物かい 梶イヤコリヤやつぱり出入を片附るがよいわいな さがア、是々短氣なそんなら飛で五十兩じや 三イヤ五十兩でもめつたにやひかぬぞ 梶ヱ、卑怯な三ぶさんさあ立上つて勝負〳〵 さが是は又情ないおれもとめかけた意地じやとんで百兩じや 三何百兩ム、夫だけとりやおかちひかふか 梶嵯峨樣お前を立て何にもいはぬぞへ さががてんいたかそれ財布ぐち百兩（ト財布をほふる三ぶ受とつて） 三金を取たらひかふかい 梶お前からひかしやんせ 三われからひけ 兩人さあ〳〵〳〵（ト一時に刀をひく嵯峨右衛門よしづ屛風を取むれ撫おろして） さがア、嬉しやまあ是は助かつたといふ物 三段々とせわでごんしたそれ帶と帷子（トほつてやるおかぢ刀をさやにおさめて） 梶嵯峨樣それお前の刀（とほり出すさが右衛門取て） さがア、嬉しやあまの命を助かつたさり乍つまらん物はおれひとりじや女夫喧嘩の挨拶して理屈たら〴〵しやべつた上扱ひ料が百兩長居したらどんなめにあおふもしれぬいんでくれう〳〵何の大阪にゐたとて花實のさく事もあるまい國へいんで噪の顏など見てたのしもふヱ、いま〳〵しいとふにいねる物を仇どんくさいふくろびひとつぬふてもらふたが言上り此著物もおれが著るからおれ次第じやもふ誰も點の打手もあるまい此帶もおれが結んで羽織もおれがのじやおれが刀をこふさいてどりやいんでくれう〳〵（トいちう〳〵我手にして橋がゝりへ行にける） 三たまにごんしたにさしてもない事 梶よふ御出被成たへ又おちかい

内にがさア、段々御馳走で高いふくろじを縫てもらふたつち船殿とやらさらば（ト歌になりしく向ふへ嵯峨右衛門しかつべら遣入る兩人跡見おくつてよき程にかほ見あはせて）梶さぶさんまんまとお前のおしへの通り嵯峨様にとつたその口良道ならぬ事ながらそれで琴浦様の身ぬきができ升ふかな三ヲヽ出かさんした非道のかねも親々が恩義送りいひ合してありもせぬ不義間男呼はりおりやちつとも早ふ柏風呂の親方におふて年季せう文をとつてこふわへ梶ヲヽそふして下さんすりや片附仕事でムんす三最前聞たそなたの母者の街事といひいかにしても氣ぶさいなもし身受の埒が明たら琴浦殿も覩負殿も當分こちの内へ預かつておこふわい梶そりやきつい太儀でムんすなア三何のいやい是奥にまだお辰がゐる何かの事を覩負殿や琴浦にもとつくりとゆふておかんせ梶そりや合點でムんすわいなかならず親かたのかけ合をたのみ升三ハテ大船ではないつち船にでも乗た様に思ふてゐやんせどりやいてこふわへ（ト歌に成り三ぶ向ふへ遣入る跡合方おかぢ向ふを見送りて思入有て）梶三ぶさんをたのんであれば琴浦さんの身ぬきは濟むといふ物それに附ても覩負様を御歸參さすには千手院の刀の詮議もし此有家がしれぬ時はゆきへ様

には一生埋れ木ハテ何としたらよからふなア（ト始終合方にて思案のこなし奥と橋懸りより人音するゆへ一寸かた脇へよる奥より磯之丞橋懸りより傳八粋方のなりにて出て顔見合せ）傳磯之丞さんお熊ばゝといひ合せ折角甘ふやつた物をさゝほふさにしられていまくしい磯夫に附てもお熊ばゝに最前いふて置たかのもくろみ何かの手廻しは致して置たか傳ヲヽそりや氣遣ひさんすなおれも亂れの傳八といふてはちつとゝやつとゝ骨がある是（トさゝやく）磯成程そふした上はナコリヤ（トまたさゝやく、おかぢそつとでゝ）梶おふたり様よい咄ならわたしも相談に乗ふかへ磯ヤア、わりや仲居のおかぢ最前からの噺を聞たか梶アイ聞たでもなし聞ぬでもなし磯うぬ最前の意趣といひ傳八ぬかるな傳がつてんじやお梶めうぬ（ト兩方より締めにかゝるを）梶こりやお前がたわたしを何とさしやんすのじや磯何ともせぬ身共が戀の邪魔する女め我々がしめ上た事傳最前かたりぞこなふた衒妻を腕づくで貰ふのじや梶ホヽこりや姫ごせをとらへて出入でもさんす氣かしたがそんな事はいはぬ物でムんす傳磯何いはぬ物とは梶サアなア琴浦を心よふ渡そふといふたらよけれども相手にこそよれ九郎兵衛がひとり娘の女團七お前がたの手まゝにならふかヱ、置しやん

せいなアト兩人を突はなす兩人腕のしびれたこなしにて手をさすり　磯アイタ、、、こりやうぬ手ひどい目にあはしたぞよ傳磯さんこりや何としためらふであらふな梶ム、最前の街事と欲に目のない鳴様のかたふど亂れの傳八とやら又磯様は琴浦の手に入らぬごう腹それで此お梶に仕返しとはこりや聞へたわいの磯扨はそつちもがてんがいたか此方も今の腕まへ合點がいたわいなふ傳八傳ヲ、こいつは街妻だてらふじみとやらお熊ばゝに聞ていたが成程それで靭負の腰おすのじやな磯何富士でも劔菱でも高が女なじや傳だますに手なし磯おかぢめうぬをト又兩方よりかゝるを程よくとめて傳八の横ざつばを引たくりさん〳〵に打すへて　梶又しても又してもせうこりもないおさん達そんなでゆくお梶じやない此のち手ざしをさんせぬ樣叩いて〳〵叩きのめして骨身にしゆむ樣こう〳〵〳〵ト兩人をむね打にしてきつとなる此時奥よりお辰出かけ見てゐてツカ〳〵と出ておかぢの横ざつはをきつととめて　辰おかぢ様そふは成まいわいなト鳴物に成お梶おたつを見て　梶ヲ、おまへはお辰さんト是にて兩人よふよふと起て　磯ア、情ない又一枚ふへて來た傳此上にふへてはたまらぬ事じや兩人ヨヲ〳〵ト腰のたゝぬ思入にて尻ゐにへたる　梶お辰様何で私を止さんす辰イヤお梶様イヤ男増りの女團七様とやらそふお前の手まへには私も女子なれど一寸德兵衞が女房此お辰がさすまいわいなア梶ヱ、何といはんす辰最前から見てゐればお梶様なかなか出入はしつかりとした物じやお前の親御の團七様又こちの人の爺様德兵衞殿先の三ぶさん此三人が兄弟分の盃して心安ふさんしたとの事故久しぶりて今度の登りに逢ましたが最前も見てゐれば田舍の客を相手に筋道の立ぬ事をさしやんすが何ぼう人のせわをさんしても其様なわけの立ぬ事さんしてはマア此お辰はよふ見てはゐまいわいなアト横ざつぱをふり放すかぢ思入有て　梶お辰様お前はあちな所へ出しやばつておかしいせりふをさんすなア辰アイあちな肩を持さんす持たらどふさしやんす是お侍様ついに見た事もないお人じやが此出入は女子でこそあれわしがさばいて上やんせうハテ受こんだといふからは一寸も跡へはよらぬといふしんにせの家此一寸のお辰が買ふたからは是程もお前方にゆびでもさゝす事じやない程にまあ落附てゐやしやんせいなアト磯之丞傳八ぞく〳〵よろこぶ　磯是は〳〵有難い思召で此磯之丞を御贔負と有て腰を押て下されふとはノウ傳八傳さよふ〳〵有難い思し召夫を聞て氣が丈夫に成升た一寸様とやら何ぶん宜しふたのみ

升 辰さあ女團七のお梶様ちよつと出て貰ひ升ふか 梶ア、私にか 辰アイ ト梶物ばやしになる思入有て前へ出て ちよつと下にゐて貰ひませふ ト兩人下にゐて イヤお梶様今迄御互ひに親達は心安かつたれど此辰ばかりは懇ろはたちましたそふ思ふて下さんせ 梶こりや面白い兄弟同前の德兵衛殿の御内儀こりや何ぞ根葉のある事で有ふ氣にいらぬ事がありやこわい事は何にもない有體にいやいのう 辰イヤ根葉も何にも入た事じやない是 ト懐より縮緬の襦袢の片そでを取出して 是此片袖は前方親々達が互ひに取かはしたかための袖今度の登りにも持てゆけてゝ連合が渡さんしたがあんまりそつちが袖ない故こふ引やぶつてしまへばもとの白地 ト片袖を引さく 梶そふいはんすりやこつちにも ト懐よりおなじ袖を出してすん／＼に引さき 片腕がはりに思ふた袖もこふ引やぶれは義理もなし身仕舞部屋の雑巾になとしてしまおふ是も何の詮ない事で有た ト兩人袖を後へすてゝ 辰さあかうかためを破つて仕もふたからはお前の立引はおかしふない此お衆達の腰は身不肖ながら此お辰がもつ程にそふ思ふて下さんせ 梶ヲヽおもしろのお前・があの衆の腰ゐしやるなら不肖乍相手に成つて上もせふがどふして又腰をおさんす 辰アイ改てお前に貰

ひたい物がある下んすまいか 梶そりやならぬゆふたとてむだな事おかしやんせ 辰わけも聞ずとやる事はならぬとは 梶琴浦様の事なら聞た所が出きぬ事じや 辰そふてつゝらと出やしやんすりやいつそ手短に腕づくで トお梶の腰なとらへるおかち思ひ入有て 梶こりやこふ有そふな事出入に花が咲て來たが此お梶には骨がムんす然も爺様は堺の肴屋鳴戸を越た生魚を見事料理にかゝらんすか 辰おもしろい其生魚を生取に此辰がして見せう 梶そりや又どふして 辰ちよつとこふして ト兩人一寸立廻つて 梶そんな事ではゆかぬわいなア 辰そふすりやかう 梶所をかう 兩人 ト祇園ばやしに成り兩人わかれてきつとなる彌市奥より出て是な見て 彌サア／＼／＼／＼ヨウ／＼／＼／＼お梶様と最前の姫とが立引かこいつはゑらい事が始まつたぞ ト仰山に身ごしらへしておかぢをあほぐ磯之丞傳八はお辰のうしろより屏にてあほぐ此内靜なる兩人立廻り有べし 傳そふでごんす御苦勞／＼ 磯何と傳八よい出合ではないか 彌何じやわいらそつち味方かこつちにも彌市がひかへゐるぞ丈夫に思はんせ／＼ 磯どふか一寸は坂東といふ係じや 彌そつちが坂東ならりやこつちは富十郎に似てゐるわい 傳イヨ中ばし中ばし 彌やれ難波／＼ トやかましういふてあふぎ立る此内立廻り有てお辰あやふくなる 辰是々お侍その腰の物を早ふ／＼ 磯オツと合點じや 傳エ

ヱ早ふやらんせ（ト腰差をぬいてわたす直にお梶に切てかゝるおかぢさやにてきつと受とめ）梶ヲヲそんなまくらで此おかぢ計りはめつたには切られまい 彌ヲ、そうじやこつちはふじ身で刄物は立ぬは 辰所をわしが切て見せう（ト又切てかゝるおかぢお辰の刀を叩き落すお辰ヲ、とひろも傳八いらつて）傳 磯様早ふ刀を渡した〳〵 磯ヲ、いるなら是を（ト刀を出しかけちやつと引こめて）なせ〳〵 磯 是はサアかの千手院（トいはふとして口をおさへる此内お辰あやうくなり）辰 是々早ふ刀を（トお辰手を出す）傳ア、情ないつてふいふ内も危い〳〵何でもかでも搆はぬ〳〵 磯 じやといふて是を出しては 傳ヱ、マア早ふ出さんせいの 彌 そりやまけをつたぞ〳〵（ト是にて傳八むりに刀を引たくりお辰にわたすお辰手早く取て又切附るおかぢさやにてきつと受とめ兩人よく〳〵見て）辰 切先から鍔もとまでくもらずきたふた此刀 辰 千手院の刀に違ひは有まいがな 梶 燒刄の巾に千の一字是に違ひはないわいなア 辰 お梶様何と趣向はどんな物じやへ 梶 お辰様段々御苦勞でムんした（ト是にて刀を鞘へ納る磯之丞傳八きよろ〳〵して）磯 ア、コリヤ〳〵お辰とやら 傳 こりや全體どふしたのじや 彌 貴様らが最前いひ合してをつたをお辰様がきかんしていひ合の立引じやわやい 梶 それともしらずアノマアあほらしい顔見やしやんせお辰様 辰 それ〳〵わしが腰を持てやらふといふたりやほんまに受てでもよいあほうな 梶 ゆきへ様に戀の意趣で去年の春お鯛茶やの奥座敷へ忍びこみ此千手院の刀を盗んだ折跡に殘つた證據の片袖 辰 夫德兵衛殿が預かられけふが日まで尋ねもとめた盜賊はそなたら二人で有ふがの 磯 ヨ、、そんなら今引破つた片袖は（ト傳八も袖を出して見て）傳 ほんにこりや是磯様お前とわしが此袖を 彌 そふ共しらずにうつそりめ 磯 ヱ、いま〳〵しいそふあらはれたら破れかぶれ 傳 おいら二人が死物狂ひじやないそふいふて 磯傳 迯た物じや（ト一さんに橋懸りへ迯て這入）彌 ア、きついがきじやとふ〳〵迯てしまひをつたぞや 梶 ハテ大事ない琴浦樣の身受は大方出來るし千手院の刀の手に入たれば 辰 是で靱負樣の御歸參も叶ふといふ物さりながら氣の毒なはさつきの侍 梶 非道としつて三ぶ樣といひ合し心に思はぬ僞もたせ（ト橋懸りよりさが右衛門著流し一本ざしにて向ふへすつと出て）さが 金衒られた正體は爰にゐるて 梶 ヤアお前はさつきの さが 田舎侍大鳥嵯峨右衛門以前は助松主計様の若黨曾平太お供先の喧嘩より不興を蒙る此身の誤り夫といはずと衒られた金は御恩の百分一 辰 そんならおまへも得心で 梶 ハテ思ひ合た中じやなア（トゆきへ琴浦奥より連立出て）琴 何かの樣子は皆あ

れから聞まして厶んす 靱お辰殿といひ皆の衆の志嬉しふ厶るぞや トお梶右の刀をゆきへに渡して 梶是こそ御歸參の種の千手院の刀しつかりとお持被成れませ 辰時にお梶樣わたしやもふ宿へ〃に升ふわいなア 梶ハテマアよござんす追附邃物も出る時刻まあ見てからいなしやんせいなア 辰イヱ／＼まだ大阪の勝手もしらず宿へいぬるに迷ひ升たら惡いわいなア 梶成程そんなら彌市どんお前は御苦勞ながら琴浦さん連まして三ぶさんの所まで送つて上て下さんせ 彌ヲツと合點じやのみこんだ／＼ 琴そんならわたしや三ぶさん所迄ゆくのかへ 靱おかぢわしも一所に行ふかいのふ 梶イヱ／＼お前は大事の刀といひ系圖の一巻をもつて厶んすゆへ跡で三ぶさんが厶んしたら一所に向ふへ送つてもらふわいなア さが ヲ、サ勝て兜の緒をしめると跡の用心が第一／＼身どもも道迄連立て歸りませふか 靱そんなら跡から三ぶ殿と連立てヲ、合點じや／＼ 彌サア／＼同勢がふへたので氣が慥なぞ 辰そんならお梶樣又明日 琴靱負樣を早ふおこしましてや 梶ハテやんがて跡からやるわいなア さが 然ばお辰殿 辰さあ厶んせいなア ト歌に成り琴浦お辰さが右衛門彌市は向ふへ這入るおかぢ靱負は奥へ這入る橋懸りバタ／＼にて三ぶ大はだぬぎこつぱい

權なまの八いつもの一寸と團七が心にて兩方よりあふぎながら 八親分まあ／＼よごんすわいの 權まあ／＼戻れやい／＼さあ厶れ／＼ トすりかれ入の鳴物で出る三ぶ二人なきよろ／＼詠て 三ヤイ馬鹿者めら誰とも喧嘩もせぬに人の顔見てまあ／＼よい戻れ／＼とは何をぬかすのじやぞい 八さいのういつもこなん所はよい役者のする所 權こんどは一番氣をかへておいら二人がやつて見たのじや 兩人何とゑらからふがな 三ヱ、何をぬかす事やら柏風呂から出た所をそふいふ事ぬかして附てうせたはこりやうぬら磯之丞めにたのまれたのじやな 權そふいや今さら隱すにや及ばぬ 八我が懷の琴浦が身受せう文 兩人それをこつちへもらおふかい 三ヘ、名のりかけたばつたりめつち船の三ぶはそんなじやいかぬは何をちよこ才な トかゝるを取て投て又かゝるを打のめして 三おかちはいぬかさあ／＼埒が明たぞや／＼ ト奥よりおかぢ團七じまの著附にて出て來て 梶ヲ、三ぶさんか御苦勞で厶んしたなア是お辰樣といひ合して千手院の刀も手に入たわいなア 三何じや刀も手に入たかそいつはゑらいじや／＼そふしてお辰どんや琴浦どんは 梶琴浦樣はいかにしても氣にかゝるゆへ今彌市どんを賴んでお前の所まで送らしたわいなア 三ヲ、出來た／＼夫でマア親達が

送らにやならんといふた恩も報ふたといふ物じやして靭負殿は 梶 お前が戻らしやんす迄奥座敷に待して置升た 三 連立ていぬるに幸ひじや 梶 モウシ〳〵靭負様〳〵 ト呼ぶ時奥よりお圓走り出て來て 圓 是々お梶磯之丞や傳八とやらがいひ合して最前の街の婆々と一所に靭負様を駕籠にのせて裏道から迯ていたぞや 三 ヤア〳〵〳〵そんなら又侍めと 梶 母様があの靭負様をヱ、〳〵〳〵 三 あわてゝゐる所じやないぼつ附にや成るまい 梶 そふしてそりやどゝどつちへいたへ 圓 慥出合ふ所は長町裏じやといふたわいのふ 梶 何長町裏 ト權と八起上つておかぢと三ぶにかゝる立廻り乍三ぶ我刀をほつてやつて 三 お梶うろたへずと追駈い 梶 がつてんでムんす ト刀をさいて身ごしらへする 三 早ふゆきや 梶 そふじや トだんじり太鼓に成りおかぢりゝしく向へ走り梶入る權と八そふと迯ふとするな三ぶ引もどして尻たうんとからげ 三 うぬら是から案内さらせ ト兩人の手なぐつと捻あげ お内儀やかましふごんしよ 圓 早ふムんせ 三 さあきり〳〵うがせやれ トれち上ながら立上る此見へだんじり太鼓にてよろしく 幕 ト直に祭り太鼓のつなぎにて此道具飾り附次第引かへにして幕明る 中の巻長町裏は今少し長ければ下の巻に出すいかなる仕組になるか讀て知るべし

西澤文庫脚色餘録三編上の巻終

西澤文庫脚色餘錄三編中の卷

目次

西澤文庫 脚色餘錄三編中の巻

西澤綺語堂李叟著

近松歌舞妓作者番附

佛の原の古番附は延寳年間都萬太夫の芝居にて近松門左衛門末歌舞妓作者の名前おかしければ爰に出す

傾城佛之原

都萬太夫

座本

坂田藤十郎

ワキ 御田はうち子のかぐら歌

立役 いわ井半三郎 いわ本太十郎

同 玉川げん三郎 ゑぐち甚五郎

同外山庄五郎つゝゐてんろくとみの山十郎兵衛

二ばんめ女ぼうは家のきつね 福

若女方 竹村萬のせう 立役 三松彌三右衛門 さゝゐでん十郎

若女方 玉川吉のせう 同 上村つね右衛門

立役 若 九郎 同 半道 たじま半兵衛

同 なにはの里右衛門 くはしや つま木とらの助

ゑちせんのくに梅長文藏二重の戀衣

けいせい佛の原 三番續

げつさうじくつはきの如來みやこいり

第一 月の前のあだし女

附り三國の奥州はねびきの松太夫のなごり

幷に二千石のねんぐ米此よね物成よし

第二 窓の前のこも尺八

附りしもく町の今川は子持梅きのすいな女郎

幷に十年のねんき手形此判すみいろよし

第三 寺の前のかれうびん

附り東山のふもとは九重櫻にぎやかな幕毛氈幷に當春のかいてやう此佛御利生よし

梅ながきやうぶ　宮ざきこみ九郎
總領梅長文ざう　坂田藤十郎
二なん梅長帶刀　三かさじやう右衛門
からう望月八郎左衛門　しばざき林左衛門
いもと松ざき　玉村ゑもん
若殿ふぢ松　しばざきかん太郎
小せうさくら谷げんの助　花ざき大十郎
同かつうら友彌　村上しまのせう
侍みわ長七　山本みつ右衛門
同手作長八　はぎの松右衛門
立花主計娘竹ひめ　上村吉三郎
からう藤脇げんば（木ノこ）
子藤脇つりく　み澤き八郎
身うけのけいせいおほしう　村上竹之丞
こしもと小はる　いわ井左源太
同小なつ　さかた六三郎
同小ぎく　山下かめの丞

つぼね（悦下附）　竹村萬のせう
三國の女郎や玉や新兵衛　いとう庄太夫
けいせい今川　若林四郎右衛門
かぶろ大吉　きゝ波千じゆ
やりてかめ　山下小才三
けいせい小さつま　松本六右衛門
かぶろきんご　そてしまげんじ
やりてまん　きりなみつねよ
けいせいわかむらさき　つま木とらの助
かぶろもん彌　きりなみ花づま
けいせい高はし　はや川さの助
玉川しゆせん
かぶろ君の　山下かるも
あげや柏やさ衛門　天井又右衛門
たいこ京の左七　たじま半兵衛
文三下人あほう三五郎　かねこ吉左衛門
こもそう風山　村上せん左衛門
月そう寺ほういん　さか田藤九郎
いぬい助太夫　ふぢ川ぶ左衛門
狂言作者　近松門左衛門
正月二十四日ゟかはり申候　いづみや又兵衛

幷に鹽谷判官は二世を契りて三世の曉
太平記さゞれ石
附り高の師直は戀慕のやみの暗のふしど

上　仁義講
幷に主從の淺き袴きて見る夫婦が姿
附りかゞみにうつしてをいたみことば

中　禮智講
幷に親と子のさま〴〵別れてよる朋友の情
附り書のこして置た高名日記

下　武勇講
幷に軍勢一ょう出立下知に隨ふ兵者
附りそこでした合圖の武道具四十八色

役人かへ名の次第

ゑんや判官高貞　片岡仁左衞門
いひな附の娘いづものまへ　山下かるも
ふじがえ　よし澤大じう
みさご　おのへうこん
ちさと　山下あさの丞
はぎのじじう　くま本伊左衞門
かうのもろのふ　あさだ善右衞門
同子もろやす　とみ山兵右衞門
木ざわ元すけ　中村みねの助
わたりしん左衞門　山田ちん八
小ばた六郎左衞門　みや木新十郎
はなむら友彌　おぐら七三郎
かまだ惣右衞門　さわ村長十郎
女房おすが　山下かめの丞
子たけの助　杉本新太郎
さゝをかとうない　みうら儀左衞門
女房おさく　山下宇源太
玉ゆり　花澤かめ十郎
おみき　よしざは玉ぎく
おしほ　中むら萬三郎
ほり内彌次兵衞　大はじぶ右衞門
かぢのは右衞門　吉岡もとめ
須山げんじ　さは村おと右衞門
とくらや九の八　みくにかん九郎
女房おまき　あらし竹十郎

おくめ　あらし八ちよ
おしま　山下さわの丞
おくの　とみなが若竹
おいわ　よし澤千菊
おかや　きく川京之助
おせん　中村さの十郎
おはや　花井吉三郎
りうやうおしやう　あさだ藤七
くない女ぼうおたつ　水木菊之丞
子りき太郎　山下小才三
ゑんやはんぐはんからう
大ぎしくない　山下京右衛門

太平記さゝれ石享保年間忠臣藏の舊狂言なれば筋書を奥に出す

坂田藤十郎名譽の話

延寶の比歌舞妓役者に名高き坂田藤十郎が傾城買の役に妙を得たる事は耳塵集（道外形の名人金子吉左衛門撰）佐渡嶋日記（佐渡嶋長五郎撰）歌舞妓事始等に出たり元祖市川團十郎坂田藤十郎が藝を見んと態々上京せられけるに折節坂田氏病氣にて舞臺へ出ず市川氏殘念の事に思ひしに藤十郎使を以て云るには適々御登りの事に候へばせめて東山邊にて飯酒進じたき由申送る團十郎辭退なく行けるに藤十郎座敷へ出ず市川氏少し腹立しける體見へし時向ふの座敷へぞろりとした姿にて立出生花などして又這入ければ市川いよ／＼不興にて既に歸らんずせし處へ坂田氏人を以て云るは嘸御退屈に候はん唯今御目に懸らんとて長髮の體を改め威儀を正し立出對面しける其行粧さすがの市川氏狂言を見るに及ばずとて其翌日江戸へ下りける扨江戸にて云るは藤十郎存生の内は京へ役者上すまじと云りしと也

芳澤あやめ總藝頭の話

元祖芳澤あやめは三箇の津若女形總藝頭にて立役坂田藤十郎に并ぶべき名人也或時山椒太夫の狂言に總領娘あほうの役を勤ける此役は嘸やおかしき姿をするやらんと思ひ侍るに常體の拵にて然も美しき打扮也人々心得ずして是を見るに舞臺へ出るやいなや見物腸をかゝへて一笑す何事をするやらんと樂屋よりも各々出て見るにいかにも鈍にしておかしき也淺尾十次郎といへる若女形阿房の役せし時はゆきたけ短

く鐵炮袖の如くに拵へ其身をいかにもあほうらしく作り出たれ共さのみおかしくも思はざるにあやめは身の拵へ美しく舞臺の業自然と愚也あまりふしぎさに或人あやめに問はれければ答て山椒太夫は其所の分限者也娘も隨分きれいに育つべし元來召遣ひも附置べし阿房に見するは心にありといへるよし名人の心得は又格別也と人々感じける淺尾氏も其此の上手名人なれどもあやめには劣たると知るべし

澤村宗十郎作をせし話

元祖澤村宗十郎後長十郎又助高屋高助常々語りしは作者より新狂言相談ある時は我役割にのみかゝはらず狂言の一體の筋合序より切迄の納り趣向を篤と聞辨へ當時の流行役者贔負の多き目の出の役者に能似合しき役が附世間の請取も然るべしとおもふ狂言なれば我役廻りは心に落ずたとへ不足なる役にても役不足をせず兎角見物の受さへよささふなる狂言なれば夫にしくはなしと思ひ我役に拘はらず狂言を納ると也此訥子は一體風雅人にて俳諧茶の湯を好み文才有て狂言の作をよくしそれ故狂言の筋合に誤り有時は作者へ心附直させ亦中より以下の役者迄も其人相應に役を附るやうに心附け故下手な役者も自然と引立て悦びしと也既に寶暦五亥年江戸森田座にて座頭勤し節作者の方へも助高屋高助と立作りに名前を出せしと也

中村富十郎所作事の話

元祖中村富十郎寶暦三酉年春江戸中村座にて始て京鹿の子娘道成寺の所作大當りせり或人慶子に問ふ此度の所作大當りにて申分はなく候へ共手鞠歌幷花踊の所戀の手習の手踊などは今少しむつかしき振にても有べきに餘り込入候所も見へずと尋ねければ慶子答て身不肖の私なれど成程今少し込入候振の工夫も有べく候へ共私が自由にむつかしき振致し候へば夫切に相成り大切の道成寺の所作以後に仕手なく廢り申べくと存右體の振附置候時末々迄も誰々も致しよく廢り申まじく存て也と答へし由今に至り子供迄此所作の學びをするは又格別の工夫也と感じける也

姉川新四郎名言の話

頭巾に迄名を遺したる故姉川新四郎の曰江戸の氣持は二十計也大阪は三十計也京は四十以上の氣性也と語りけると也是いかなる義と尋ねければ江戸は二十計の氣なればこそ物だめもしくは受合活氣にして締

らぬ樣に見ゆるさるによつてくはつと白眼で見へでとる大阪は三十計の氣持にして少し分別して理非を正し男を立る氣前也京は四十を越たる氣にしてよく物にたづさはり始終を辨へ物をなす氣持也此心なくては三箇の津藝は仕分がたし然るに近年京は物和らかなる土地にて歌道などを好むべきにあら事をすき馬士歌を興にして女形の紅の湯具あらはに出る事を好むは全歌舞妓役者藝の仕打興になる事のみにかゝはるゆへおのづと見る人其心になるといへりさればこそ敵役が女形の弟子と成り女形より敵役の弟子に成るやうには成たり愼むべき事也

中村仲藏定九郎をせし話

故山中平九郎鬼女の役を取り樂屋にて稽古をし私宅へ歸り二階へ上り鏡臺に向ひ紅にて顏を隈どり手を鳴らしければ妻女何心なく二階へあがりしに平九郎が顏を見てアッといふて氣を取失ない下へ落たり人々あはて介抱し漸正氣に成あら恐しやといふ其時平九郎手を打てしたり／＼と悅び書たる鬼女は見るといへ共正體をしらず今我顏の隈どりを見せたるに氣を失ふ程の形に見ゆれば此度の役は仕當しといひしが果して其狂言大入せしとは誰もよくしる昔噺也初代中村仲藏は寶暦の頃稻荷町より段々出世して大立ものとなり明和三戌年秋市村座忠臣藏に定九郎役の時王子の稻荷へ參詣して何卒此度の役評判好やうにと祈念して歸り道日暮方道灌山の下通り稻荷の森に差懸りける時向ふよりくる侍一人浪人者にても有しや古き黑小袖所々ほころび切綿のみへるを著し月代は山の如くはへ丈高く何さま其體怪く見へ若や追剝なぞにてはなきやとゾッとしてこは／＼摺違ひ通りしに何事もなく行過て是より思ひつき定九郎を其形りに拵らへ當時の人氣に叶ひ大評判に預りしは實に王子稻荷加護なりとて咄せしを西川純道作者語れるとぞ定九郎の拵は大縞の木綿廣袖に丸絎帶麻苧の山岡頭巾に脚袢草鞋にて仕來り故閑藏の錦書子珍藏せり今は誰も黑小袖に傘となりしは此時より始る是仲藏が出世狂言也とぞ

加賀屋歌七思入の話

初代中村歌右衞門梅玉の父加賀屋歌七は何役にても其役になりおゝせる事を第一に心懸ると也たとへば淸盛ならば淸盛袴垂の保輔なれば保輔と其人柄と心持を考へて

その人に成たる心にて扨狂言の仕打に懸りては十の物を七つ八つ迄も心の中臍の下に落つけ誠しやかに仕打をして十が二つ三つを客にて見へよき樣華々しき狂言にする也實を七つ八つ華を二つ三つとする也元の狂言の事故華はおのづからと有やすき物ゆへ實をおもにする也獨りしてする舞臺は猶々實をおもに心の中にて仕打をするを專一と心懸る也と云明和六丑春江戸中村座にて清玄の時色衣を著柄香爐を持出たる時自然と尊き大和尚と見へ墮落の時櫻のちるを見て生死無常を思ふ場獨舞臺古今大出來見物感に絕今に言ひ出す事とはなりぬとぞ

岩井半四郎改名の話

元祖岩井半四郎より四代目半四郎迄は立役也五代目半四郎（近頃歿したる杜若の父なり）幼名松本長松又七藏と成り明和二酉年四代目市川團十郎より（木場）半四郎と云名を讓る時半四郎云けるは實に名高き名にして有難き事いはん方なしされど女形の名に半四郎とはいかめしき樣なれど傾城に半太夫と言名もあれば是より末世に至るまで半四郎と云名は女形の名に限るよふに心がけ女に生れてはいか樣に男になりたきとて男にならるゝものにあらねばたとへ何樣なる事有とても元服して立役にはなるまじく半四郎の名も半太夫と同じやうに申ならはすべしと言ひしとかやさればこそ半四郎といへば女形の名になりすませり六代目は粂三郎より半四郎と改杜若となりて悴粂三郎に七代目を繼せ弟松之助紫若より八代目となり兄弟とも若死したれば紫若悴粂三郎をれば今に九代目岩井半四郎の名前を相續すべし

瀨川仙女名前辭退の話

三代目瀨川菊之丞（後改仙女）未市山富三郎と云し比嵐雛助（後改嵐小六）段々肥滿して品形何如故立役に成存寄り也夫に附雛助の名前を遣はすべきやと有しに富三郎云不束なる私へ御名を讓り下さるべきとの思召は忝存候へど一生女形を致す心ゆへ女形の名なれば御貰ひ可申候へ共女形を止て立役にならんとの御名は好しからず御免あれかしと申ければ雛助さして立腹もなくいまだ年も行ざるに大丈夫の心根其思入にては今に大立者に成べしといはれし此時富三郎年若といひながら跡で思へばさりとはぶしつけ成事言ひしに立腹もなく却て褒られ痛入て氣の毒にありしと也是を思

ふに仙女三箇津の稀者に成べききざし若年より顯れしと見へ雛助も又玉と稱せらるゝ程の者なれば腹立なく却て雑言を尤なる事と賞美せしは奥ゆかしき事とやいはん

市川白猿すさみ草の話

五代目市川團十郎（反古庵白猿）は向ふ島の隱居にて日々の樂は草を取て反古の裏に書つゞり氣のあふたる風雅の友へ是を與ふ其中にすさみ草と名附し書有此中より或人來つて云こなたには舞臺の藝を大まかに被成るゝゆへ大まかなる事で團十郎藝者と申がちとこんたんをなされ細かい事も工夫してごらうせぬかと言れし時予答へて云我等下根多病にして心を勞する事一向ならざる故若き比よりこんたんを捨ていたさずさり年壯年のみぎりより唯一つ工夫する事有平の淸盛になり日を招き返す狂言をせば此せりふ如何言ふべきやと此事計り考をれ共五十一年が間此工夫ひらけず候先日輪暫らく止り給へといはゞ慇懃に成て淸盛が弱く成るべし日輪しばらくとゞまれといはゞ存在過て人柄惡かるべし今に開けず是より外に魂膽工夫したる事なしむつかしき所は路考、杜若、新升、錦升などに談合して教へて貰へば事は足る故當年五十才迄こんたんは致さぬと言ひ聞せければ或人大笑して歸りける此話は東の花勝見といふ小册（永下堂波靜撰 立川淡州樓序）歌舞妓事始の中よりおかしと思ふて拾ふて出せり

さゞれ石三番續の筋書

上仁義講尊氏將軍は天下泰平民安全の爲七堂伽藍御建立ある既に石突始りゐいとな／＼如才はござらぬ木やり歌賑々しくみへにける時の執權高の師直同じく子息師安親子此所を守りゐるかゝる所へ鹽谷判官言號の姬出雲の前萩の侍從を伴ひ姥あまためしつれ普請見物に行たまふ道すがら侍從いふやふ御姬樣には道をいかふ御急ぎなされます靜に御ひろひなされませムヽがてんいたしました此たびの御ふしんの役をお前の言號の殿御塩判官樣の承りて御普請場へ御出被成てござりますゆへお逢被成ましたふ思召でおいそぎ被成ますの戀しゆかしに思召は御尤でござりますといへば姥共いろ／＼の惡口をいふ出雲のまへのたまふはいそぐ共思はぬが早いかいやる通り判官樣とおれが事は夫婦の言號ばかりでついにしみ／＼とした事もないけふは普請の所へ行判官樣におめに

かゝつて早ふ祝言をして下さんせといはうと思ふが判官様のおめにかゝつたら恥かしふて物がいはれまいと戯れ事いひ侍従諸共普請ばへ行給ふ師安侍従を見ておのれは侍従かハア是は師直師安様でござりますかヤイ侍従おのれはにくいやつじやづた〳〵にしてもあきたらぬ侍共侍従に縄をかけいといへば出雲の前おしとゞめ侍従はわしがけふ頼みます事が有て連て参りましたまづ此度は了簡して堪忍してやつて下さんせ師直様どふぞ了簡してやつて下さんせと詫れば師直聞て是師安此度は了簡してやりやといへば師安おまへの御意なればしよふ事もござりませぬこりや侍従おのれ日比頼んだ事埒明るか侍従その儀はよふお受合は申ますまいといへば師安猶々きしよくする出雲のまへわしが成程埒明さしましよまづ此場は免してやつて下さんせ侍従是おひめ様おまへのお心一つで只今私が難をのがれますが師安様のわしを御頼被成た事埒あけましよと受合ましよか出雲のまへ何の事やらしらね共受あやさやうござりましよならさきはわし次第に被成ませといふてモウシ師安様何をかくしましよ此中のみは一つも届けませぬ師直聞て何事をいふやらひとつもがてんがゆかぬといへば侍従師直が耳の傍へ口をよせ咡きければ師直聞て打笑ひ扨は悴師安があの姫を戀にしてそなたを頼むとやよいやうに仲人して娵にしてくれ侍従是お姫様お前が御がつてん被成ませぬとわしはいかやうなうきめにあひましやうやらしれませぬに御がつてんなされましてよろこびますといへば出雲の前師安にのたまふはわしを夫程に思はんすか御へんじを申ましよわしが心は小夜衣でござんすとのたまへば師安悉ないさあすんだと悦ぶを親師直見て何と埒があいたかなるほど埒があきました只今の返事にわしは小夜衣でござんすと申されますとよろこびける師直聞て其小夜衣といふ心は何と合點しやつたハテ小夜衣と申ます心は結構な夜著蒲團のうへで寝よと申事でござりますイヤ〳〵そふではないそなたの學問がたらぬゆへがつてんが悪るい小夜衣といふ心は「さなぎだにおもきがうへのさよ衣我夫ならぬつまなかさねそ」といふ歌の心で是は埒のあかぬ返事じやと言聞すれば師安あきれ氣をせく侍従思案をめぐらし師安に咡きいひけるは姫君此所よりお歸の折おむか

ひのにせ乘物を搭らへ乘物にめさせ奪はんといひければ是尤とうなづきあふ侍從モウシ／＼出雲のまへ樣と言號の鹽谷判官樣が是れへござりますといふて奥へ這入る判官はさもきらびやかに出たち此所に參り給ひ師直師安に對面し此度尊氏公七堂伽藍に附私御役目に仰せ附られ書附目錄の通り用意いたしましてござりますと互ひに一禮の挨拶ある侍從みをもちいで急用ありいそぎ持行きたまへと下部にわたして屋敷へやり奥へいる師直師安判官にむかひ我らは御前へまいるこなたは是れにござれと親子とも奥へ入判官侍共にむかひ書附の通り用意致しをけといひ附給ふ侍共畏り皆々奥にいる判官ひとり居給ふ所へから乘物を舁ぎこむ判官とがめて此大事の御ふしんばへ乘物をかきこむは何ものじやととがめられ乘物舁共鹽谷判官とは夢にもしらず師直と思ひお前は師直樣でござりますか内々おつしやりました鹽谷判官樣のいひ號のお姫樣此所へ御普請見物に御出被成てござるお歸り被成る折お迎ひの乘物じやといつはり此のり物にのせましうばふて參りますといへば判官ぎよつとしがてんゆかねばしばらく思案し打うなづきすいどり故と師直になりでかした／＼しおふせたら褒美をとらしよまづ片脇へのいてゐよと忍ばせをき師直を打はたさん氣色して内へかけいらんとし給ふが又思案して思案してまづ樣子を見とゞけんとかの迎ひに持來る乘物の内へ這入りかくれゐ給ふ出雲の前師安連立出の給ふは最前申ました通りお返事は小夜衣でござんすもはや歸りますといふて乘物の戸をあけのらんとする時判官乘物の内より出給へば出雲の前悅び給ふを師直に引あはせんといふて師直が前へつれ立是れ出雲の前あれにござるは尊氏公の御執權高の師直樣といふて仁義だかいおかたで人の女房などに心をかけさしやる事ではない扨て何れも樣へ申ます此出雲の前はわたくしが女房でござります見しらしやつてをいて下されませとあて事いひ扨侍從を引出し此者は私所へ日比出入をいたす心立やさしい者でござる是もお見しり置て下されませといひしなさん／＼にうちたゝきあの者を此樣に打擲するは物がたりがござると樣子を語らんとする所へ木澤源助出判官殿上よりの御上意がござります此たび伽藍御建立被成るゝは民安全の爲なれば參詣の老若男

女に酒さかな赤飯をお出し被成との御上意でござる判官愼んで承る其儀は仰渡されの書附の目錄にござりませぬによつて用意いたしませなんだでござりま す師直聞てそれは不心得な事でござる師安此方に用意はないか成程こしらへ置ましてござりますといふて酒肴せき飯を師直方よりいだし判官に面目うしなはせけり源助いふやう判官樣まだ御上意がござります暑氣の時分なれば參詣の貴賤男女迷惑するで有ふ程に汗手拭手反葛水をお出し被成との御上意でござります判官畏りましたといへば源助さあたゞ今お出しなされといふ判官是も書附の表にはござりませぬによつて用意致しませなんでござりますだゞ今申附ましよといふて立んとする師直師安にむかひ何と此ほうに汗手拭葛水の用意はいたしおかなんだか成程こしらへて置ましてござるといふてあせ手拭葛水出し又判官に恥辱をあたへけり扨師直判官にむかひ是判官殿こなたには此たびの御ふしんの御用人にお附被成かほどの御用意を得被成ぬはよく／＼内證がつまり貧ぼうなされたそふな夫程不自由で金銀がなくば入用ならば何程でも此師直がかたへいふておこさしやれといろ／＼の惡口して恥辱をあたへ這入りける判官師直に一度ならず二度まで恥辱をあたへられて殊にさん／＼惡口せられもはや堪忍骨髓にてつし成がたく打果さんと思ひ覺悟し歯がみをならしきばをかみかけいらんとし給ふを出雲の前後よりいだきとめどふやらおまへの氣色が違ひましたこゝは所が惡ふござんすまづおまち被成ませと引とめ取附歎き給ふを突のけ切入師直に切かけ給へば師直運やつよかりけん向ふ疵ひとかせおひ迯てゆく判官無念ながらとらはれ給ふ▲上の中入

かくて判官あしき所の狼籍と上よりの御上意にて亘新左衞門に御預け置被成其後切腹のよし仰附らるゝ切腹の日限に成しかば判官白裝束に淺黄上下著し刀載せし三寶の前に居直り切腹の刻限を待給ひ新左衞門に一禮ある此中は何かいかい御苦勞をかけ忝なふ存じますされば人多き中におまへの儀わたくしに仰附られ大慶に存じます何卒御命の儀申あげ助けたふ存じましたれどかゝるしぎせひない仕合せ御切腹遊ばしてよふござりましよ判官ともやにむかひ此中は何かと介抱に預り過分におじやると禮をい

ひ給へばともやつゝしんで禮をうけ私主人新左衛門御命の儀を何卒と存ぜられたてござります所に御切腹の段は近頃殘念に存じます此中までおそば近く御給仕申ましてござりますにお名殘おしう存じますといふ判官新左衛門にむかひ切腹の太刀取はどなたでござるそれはどなたかも今にしれませぬといふ切腹の刻限は何時でござると尋ねたまへば午の上刻でござるといふ所へ小ばた六郎左衛門案内こふて來り新左衛門にあひ切腹の場へ這入り上よりの御上意判官殿の御切腹今日午の上刻に相きはまりました則わたくし見分に仰附られてござる是にお上よりの書附を持て來ました是でよみますお聞被成此度鹽谷判官所あしき場所にての狼籍其つみのがれ難きによつて切ぷく申附る物也太刀取は旦新左衛門見分小ばた六郎左衛門とよむ判官六郎左衛門にのたまふは師直殿のお手は何とござるたゞ今養生最中でござるといへば判官歯をくひしめ無念がり給ふ新左衛門六郎左衛門に切腹の場所はいづくでござるとゝへば庭上でといふそれは打首同前でござる鹽谷判官程の人を打首同前に庭上にての切腹とはあまりなる儀

でござるといへば友彌すゝみ出切腹のしだいをいひ立主人新左衛門に判官様をあづけられ庭上にての切腹はさしまされまい判官様本式の切腹を願ひ奉りますといへば新左衛門も共々に六郎左衛門に願へばかれらの計ひにも成がたし然らば書附を以て上へ御願ひ申さしやつてよふござろ然らばさやうに致さんと願ひ書をしたゝめ六左衛門に渡すれば受取則ともやにいひふくめ此狀取次宇津の宮殿へ届けよと渡すれば友彌受取判官に申やう宜しき御返事承らずば歸るまじと急ぎゆくかゝる所に鎌田惣右衛門は主人ゑんや判官にまへ方勘當を蒙り浪人してゐけるが此度の騷動主人判官殿切腹のよし聞有にもあられず今一度御存生の内逢度おもひ新左衛門所へゆき案内を乞へば下人出る鎌田惣右衛門と申ものでござる新左衛門樣にちと御意が得たう存ます其よし傳へて下されといへば下人主人新左衛門に取次ば新左衛門しばし思案し手まへ取込たる事ござれば今日はえ逢升まいといふて歸せといひ附又思案仕直しいや／＼出てあはふといふて門の外へ出あふて惣右衛門かといへば惣右衛門かとお詞を下さる段まづ忝なふござりますそ

れに附ましてちとおたのみ申上たい儀がござります主人判官は今日此所で切腹なさるゝと承りましてござる私儀は判官外の家來とは違がひ一しほ高恩を受ました私事でござる程に旦那判官の御最期に今一たびあはせて下されましたら生々世々の御恩有がたふ存ますのと頼み入新左衛門は聞届け身一人のはからひにも成がたない檢使がきてござる是に相談いたそふといふて內へ入六郎左衛門に右の一々次第をかたり是へ通し逢はせた物でござらふかと談合すれば六郎左衛門苦しかるまい儀でござる是へ通しあはさしやれといへば新左衛門惣右衛門を呼入れ判官の前へ出すに頭を地に附はら〳〵淚を流し居る新左衛門判官に申さるゝは御家來惣右衛門が參られたお詞かけられませといへど何とも物いひ給はねば是惣右衛門只今御最期じやによつてお詞が出ぬ是非に叶はぬお歸りやれといへば惣右衛門判官に申上るは私御勘當の身なれば御詞をなし下されませぬは御尤に存ます御前樣へ申をかつしやります事がござりましよならば申傳へましよあやまりましたおじひに惣右衛門かといふお詞をかけ下されませと歎く判官立腹して切腹の場へきて最期の樣子もいさめそふな物が何じや御前樣への御言づけがあらば屆けうとは何じや其心じやによつて勘當して置たいよ〳〵勘當じやあのものおつ歸して下されとのたまへば惣右衛門猶々歎き刀を拔腹切死んとする新左衛門をし留それは主人にむかひつら當に腹切か不調法千萬としかるまつたくさやうではござりませぬどふで死る身でござる私は前髮の時分から御高恩を受てをりますれば外の者とは違ひます相はてゝ殿樣の御供を見へ隱れに成共いたしたふ存まするると歎きゐる判官六郎左衛門にあの者是へ呼ばしやつて下されと賴み惣右衛門を傍へ引寄せおのれは誰に斷つて腹を切るおのれが命は我儘には成まい一たび成敗にせいで叶はぬやつなれ共勘當して助けをいた小姓多い中にわけておのれにはめをくれた其內に身が近習の女めと馴あふた其時女を成ばいすればそちも殺さねば其女とそふてゐるか只今悴がござりますム、追腹切ろといふは尤じやさぞ身が勘當がかなしかろそれ勘當ゆるした本國へ歸れとのたまへば惣右衛門ハアト飛すさりよろこびいさみ悉ながら只今本國へ歸りましたとて私御勘當受

ました身なれば大岸宮内なか〳〵がてんいたされますまいとてもの御じひに一筆せうこの御墨附を下されましたら有難ふ存ましよといへば判官尤と思し召新左衞門六郎左衞門に墨附つかはすべきかと談合し給へば兩人聞て御文體によりましよ一筆遊ばせといふ判官みしたゝめ兩人に見せしたゝめ惣右衞門に渡し給へばおしいたゞきよろこび懷中する所へ友彌はせかへり御返事が參りましたとさしいだす六郎左衞門開き見て是々判官殿願ひが叶ひましたおよろこびなされ本式の切腹でござるといへば判官各に一禮して三寶をいたゞき給ふ時惣右衞門いふ樣殿樣只今御腹でござります大岸宮内かたへ何も仰らるゝ事はござりませぬかと伺へば判官仰らるゝは師直にとゞめをさゝいで口おしいと傳へてくれとのたまひ切腹し給へば新左衞門介錯しあへなくも首を打をとしける

△上の中入の切

鹽谷判官切腹の後屋敷受取に上より勅使たつ家中のめん〳〵我一とつゞらたんす長持はこび出す鎌田惣右衞門女房おすが一子竹の助をつれ笹岡藤内かたへ用の事有て行ける道にて家中の女房達五人連にて是も藤内方へ心ざし行給ふにあひ給ふ女房達おすがにのたまふはおまへはどちへござりますわしは藤内樣に尋ねたい事がござんして藤内樣へ參りますわしらも藤内樣へ參ります連立て參りましよとおの〳〵連立藤内の所へ行ければ女房おざゝ出是は〳〵皆樣何と思召ての御出でござんすといへば藤内樣におめにかゝり問ひましたい事が有て參りました藤内殿はけさから屋敷へ上つてゐられますが今に歸られませぬさればわしが所の人もけさから屋敷へ上つて日もはんじましたれど今に歸られませぬ餘り心もとなふ存ます故屋敷の樣子をどふじやぞ藤内樣に聞ましよと存て參りましたがひよんな事ができましたではござんせぬかしてどな樣の荷物は皆一所に拵へさしやんしたかあゝ主のもわしがのも皆一所に拵へて置ましてござんすおすがそれについてわしはふしぎながてんのゆかぬ事がござんすこちの惣右衞門殿わしにいわれますはおれが荷物とそちが荷物と別々に拵へてをけといはれました其心根がづんと合點が行ませぬおざゝ聞て氣にはかけさしやんすなそれはこな樣を去といふ事でござんしよぞやといへば殘りの女房衆

おすが様はさられさしやんしたのといふてなぶり笑へばおすが此騷動の時節なればさられたとてしやうともないがといはるればおざゝ聞てこな様はさられたとてさられてござんすかわしはこちの人が去しやつてもどこ迄も附てゆく氣でござんすといへば日比の悋氣深い事を言ひたて皆々なぶり笑ひゐる所へ荷物持通るをとがむれば侍與様是にござりますかといふてみをわたしかへるを是々と呼歸へせどいそぎますとみをやり捨にして通りけるあとにてひとりの女房何事やらんとみをひらきみればいとまの狀也殘る四人の女房衆我々が狀もその樣な暇の狀ではあるまいかと心もとなく手に／＼開き見れば皆去狀なれば歎き悲しみ此詮議せねば堪忍ならぬといふて五人の女房は皆々奥へゆくお菅お笹二人殘りゐる所に大岸宮内女房おたつ一子力太郎を連れ通りあはするお菅お笹を見て夫へござりますはお辰樣でござりますか御屋敷の御相談は何ときはまりましてござりますぞととへばされば門前には勅使が立て屋敷を受取にござつたそふにござる若い衆は死ふとおつしやるどふでも屋敷を渡さねばならぬそふにござんすまづおいとま申升とかたりすてゝ歸り給ふ笹岡藤内は我内へ歸りければお菅あひ私もお前におめにかゝり様子をお尋ね申ましよと存まして最前から是へ參つてをりまし待受てをりますがお屋敷の樣子はとふでござりましたな屋敷の様子は屋敷をあけわたし明日皆立退く筈でござる殿が一人ござらねば騷動する事でござるこちの惣右衛門殿はまだ歸られませぬかのおつ附て歸らしやるかへりに是へよらしやる筈でござる連立て歸らしやりませまづ袴をぬぎましよといふ女房お笹袴の前紐ときにかゝる惣右衛門女房お菅後紐をときにかゝり藤内が腰をしめだきしめつめつたりいろ／＼と仕形で濡かくるお笹さとりながら袴をたゝみゐるお菅藤内にいふやうは殿のおやしきを渡す筈で明日屋敷を立退く筈でござんすにおまへはどちへござりますされぱわしは津の國へ退ましよと存升女房お笹それは此さき有馬へいた時の宿でござんするそこはせばい所でござんすぞやといへばお菅せばくばおし合ふて寢ましよといふお笹つの國の方より近江の方がよふござんしよといへば又お菅近江はどこでござんすと懇ろにとへばお笹お菅にいふやうこな様

はがてんのゆかぬこちの人のゆく先々をとはしやんす男のある身で女房のある男を見苦しいと恥しむる藤内又例の悋氣かおれが行先をとはしやるまい物でもない其近所へゐしもござつて今迄のやうに互ひに行ちなみをなさりよといふ事じやよしない事をいはふより酒でも進ぜ御馳走申もてなさふとはせいでなか〳〵でもないとさん〴〵しかり奥へ追やるお菅是藤内様おまへはあのお内儀様をさつてわしと添うと日比いはんした約束でござんせぬかそれに今お内儀様と連立てのかんといはんすはどふでござんすとせりふしてゐる所へ表へ惣右衞門見へければ藤内氣の毒がる體にてお菅同子竹之助をそばに有ける具足箱へ入かくしをく惣右衞門這入り藤内におひ屋敷は上へ上る生身の犬の扶持に放れた樣な物でござるといへば藤内されば〳〵それにつき承れば宮内殿には京へおのぼり被成たぞと聞ましたが左樣でござるか惣右衞門されば宮内殿よい所へ氣が附ましたはお藏のかねを各家中へわけて渡さうとござつて京へ上られました藤内かねをわけ〳〵に致したら二年や三年は心やすふくらされましよさあまづ御酒一つ參れと

いふおざゝ酒持出る具足箱に入ゐる子竹之助おつうてどふもならぬわいのふといふ藤内惣右衞門にきかせまいと思ひわちやくちやと早口に物言ひてまぎらかす惣右衞門きよろ〳〵と天井を見あたりを見廻し何共がてんのゆかぬどこからやら子供の聲してあついといふたがと不審がる藤内猶々氣の毒がり言ひまぎらす藤内女房お篠惣右衞門にいふ樣私におまへのお内儀樣を下さんせといふ惣右衞門それは何ともがてんがゆきませぬ品によつてやりましよが身が女房をくれとおつしやるは何ぞ樣子こそあるでござらふ其仔細を承つての事にいたそおはなしなされ御合點の參らぬは尤でござります成程樣子有て貰ひます事でござりますお噺申ましよおまへのお内儀お菅樣とこちの藤内殿と密通してゞござんすそれでこふいふ事でござんす程に私にお内儀樣を下さんせといへば惣右衞門あきれそれは確かに見とゞけさしやつておつしやる事か成程證據を見屆て申事でござんすといへば藤内おのれよしない口をたゝきおれが一ぶんが立ぬとさん〴〵に打たゝく惣右衞門あきれはてたる體にて此上は女房共を呼にやり詮議を遂げましよと

いへばお笹いやお内儀様は先にから爰へきてござんすあの具足箱の内に隠れてゞござんすといふて箱の内より引出しあはす惣右衛門興さめ顔にて女房お菅にいふやうそちは此所へ何としてきた藤内様にちつと用が有て参りました惣右衛門ム、此砌りじやによつて用があるまい物でない何の用できた大事ない有様にいへといへばお菅迷惑の體にてうぢ〳〵としてゐるお笹是お内儀様こな様とこちの藤内殿と不義の事を惣右衛門様に告言ひましてござんすあらそはしやんす事はござんすまい有様にいはしやんせといへばお菅ぎよつとした顔附しまぢ〳〵として居給ふ惣右衛門一子竹之助にむかひそちは結構な親を持たなあのやうな畜生めをとお菅をにらみ附る藤内迷惑がり是惣右衛門殿こなたの手前何共面目しだいもない儀でござるこなたの腹いせに腹をきらせて下されと願へばそなたは腹を切て一ぶんが立ましよがおれが世間へつらがむけられませぬといふて氣色し刀を拔て藤内を打にかゝるおざゝおしへだてとゞめおはら立は御尤でござりますれどわしがお内儀様をもらひますも藤内殿といつまでもそひたさの事でござんすもはや堪忍して下さんせとなげゝば惣右衛門聞とゞけ刀を鞘へ納め殿の書置の次第をかたり殿のおはて被成屋敷をさしあげた所に女房せんさくではあるまいといふておすがをそばへ呼恥をあたへ又ぬき刀して藤内がそばへゆき藤内がたぶさをとつて根もとよりおしきりあゝ何もいふまいと刀を鞘におさめてやすみゐる藤内惣右衛門にいふやう是はけつかうな御了簡に預りまして忝ふ存じますこりや女房ども其方は去たぞいとまをやつた出てゆけといひければおざゝ何のさらりよぞや堪忍して下さんせとなげく何の歎く事があるおのれが悋氣ぶかい心からよしない事を有やうに打明ていふたゆへ此わけになつたおすが殿をもろふて結構なりのどふでも去た出てゆけいとまには此刀をやる出てゆけと引立おひ出すおざゝぜひなく〳〵も出ゆきけるを藤内見をくりかへれば惣右衛門藤内にいひけるはお内儀は首尾よふ出てゆかれましたか扨々中程であらはりよかと存て何ぼう氣の毒にござつた藤内されば一家中皆屋敷をさしあげ女房衆をさらしやつてござるにわしが女房は悋氣ぶかふてどふも去られませぬによつていつそさしこ

ろそふと存じましたれどこなたのおつしやるは殺すといふはいたはしい事じやとおつしやつた了簡に附てこふした作り事を頼みまして首尾よふさりました御夫婦共にいかい御苦勞をかけましたとよろこぶお菅迷惑な事を頼まれましてあられぬ事をしましてござんすお内儀様のこふした作り事とはしらいでさぞわしを憎ふ思ふでござんしよわしもお内儀様も此やうにそはれぬやうになりましてとなげく惣右衛門藤内殿髮がいはるゝやうに隨分短ふきりましたが成程是でもいはれます惣右衛門いとまごひし歸るを藤内呼かけ此度のくはゝりの人數はいか程ござるされぱおよそ百五十八體に極りました所が四十七八人五十迄は集まりますまい然らば連判を取たらよふござろそれは宮内殿からさたが有筈でござる然らばもはやおめにかゝりますまいさらば〳〵とわかれける

中禮響論　清光寺には鹽谷判官の御魂屋並に家來四十八人の者共の石塔をならべ建て有判官殿の御臺出雲の前けふは殿の御命日とて姬あまた召連清光寺さして參り寺にもなれば案内を乞ひ同宿に逢給ひわしは鹽谷判官様のゆかりの者でござるがちと和尚様に御めにかゝりたうござんす同宿和尚には只今お勤を被成てござりますまづ客殿へお通り被成ましておまち被成ませそんならば客殿へゆきさ御勤の間待てゐましよやい其御乘物をかた脇へのけてをけといひつけ奥へ入たまふ從の葉右衛門殿の墓へ參り花をたて水を手向淚を流し懇ろに拜み這入る其跡へ大岸宮内おなじく女房お辰同じく一子力太郎堀内彌次兵衛殿の墓へむかひ香花をたて水たむけ拜み奉り宮内女房おたつに申さるゝはけふは此所でちと相談する事がある程に御參りやつたら力太郎をつれかへりやれと申さるれば彌次兵衛けふは殿の御命日でござる故廟參致しました苦しうござらぬといふ所へ寺の住持立譽和尚來給ひ宮内殿各御廟參でござるかきのふからこちへ御傍輩衆じやとござつていくたりも廟參でござつた餘り大勢でござつたによつて銘々に御名を書とめて置ましたといふて書附を出す宮内開見て彌次兵衛殿此書附の通りでござるかと見せる和尚申さるゝやうきのふござつたお衆が殘らず銘々に金子一兩宛をかしやつてござる只今は御浪人の身でござれば受ますまいもどして下されと申さるればめん〳〵に心ざ

しで上られました物でござればやはりとめをかれませ然らばそふしましよかと納めをく彌次兵衛いふやふは殿の御廟所なれば皆家中の者共逆死の石塔を建置お庭をふさぎ置ました宮内彌次兵衛申さるゝ通り逆死の石塔を建置ました逆死と思しめさずと此世にない物じやと思し召て御回向をたのみます同宿御臺様が奥にござりますといへば宮内聞てヤア御前様も御廟參被成て奥にござりますとやおめ見へ申ましよといふ所へ出雲の前走り出宮内おじやつたかおれは殿様の御死骸を縁ない寺にとり置ては無縁塚になると思ふてお死骸を取此乘物へ入とりかへつたとのたまへば宮内彌次兵衛きもをつぶし御死がゐを乘物より出しはいし奉る彌次兵衛御死骸入し箱のそばへより私は堀内彌次兵衛でござります殿様さぞ此度の無念におぼしめしましよさりながらおつ附敵を亡し御憤りをやすめましよ御心やすう思し召ましよといふ宮内つゝしんで申さるゝは御他界の後御屋敷を明わたし家中立のき申候事ふがひなき者共とさぞ心外に思し召ましよと言わけし家中一味致したる物語して此四十八人の者共が御恨に思し召師直が首取ておまへにそなへましよといふて歎きゐる和尚見たまひ御歎きは御尤愚僧も殿の御死骸を外の寺へやりますは何程か心外に存じましたに今此寺へ取置ますは何ばう滿足に存ます宮内ひとへに是も御前様のお働らきゆへでござりますまづ御死骸をとり置なされて下されませといふ和尚文をとなへとりをく所へ四十八人おの／＼廟參して殿の御墓を拜し宮内にあふ宮内申さるゝは何れもよろこばしやる事がござる御前様が是へお入被成てござるおめ見へなされといへば皆々ハアと感じ目見へする出雲のまへ皆々に詞をかけ給ふ宮内きかしやれ御前様には殿様とまだおなじみもござらぬ中にあのやうにお姿をかへられて御しがゐを他所の寺に置ましては無縁塚にならふかと思し召て墓守をたのみお死がいを此お寺へ連ましてござりましたよう拜ましやれといふて扨連判の評議する所へ梶の葉右衛門きたり彌次兵衛を賴み大岸宮内へ願ひ狀を上ければ宮内ひらきよみ外に起請文一通あるを堀内彌次兵衛よみ見れば殿様の勘當かふむりをりし身にて御座候へ共此度の思し召たちの敵討の連中の内へ加へられ候はゞ忝なく候はんとの二なきとの

神文よみをはれば一座の連衆聞入中に笹岡藤内申さるゝは何れも何と思し召殿の御勘當得てござる人なれば此度の人數へいれます事何共心えがたう存ます何れも遠慮のない事でござる思し召のほどいふてごらんせとひろうするおの〳〵くちをそろへおつしやる通り勘當の人を人數へはいれられますまい宮内殿には何と思し召拙者とても何れも同前でござるまづ身共があひましよ爰へよばつしやれといふて呼入れあふてこなたには願ひ狀と起請文をおこさしやつたその起請文の書出しを見るに何れも家中申合せ出會をとげるやうな書出しでござるがまつたくそふした事でござらぬ定めし世間にはいろ〳〵の取ざたを致すでござろがかつてさやうの思ひよりではござらぬお屋敷まで明わたし立退た浪人の我々なれば何方へも有附扶持くれる人もござるまいと存くらすばかりでござるとつゝみてかくしお歸りあれといへば薬右衛門それは曲もござらぬ私まさかの時の役にはたつまい物じやと思召ておかくし被成ますかどふ有ても此度の人數に入れて下されと賴入る宮内イヤそふでござらぬ思召入が違ふてござると猶々同心せねば薬

右衛門せひなく思ひ詰すでに腹きらんとするを皆々おしとめわれ〳〵に何の不足が有て腹を被成るゝととが〳〵しうとがむれば恨をいふ時宮内薬右衛門殿御前樣も是にござる殿の御廟所を穢さつしやるかといへば是宮内樣うらめしうござる殿の御廟所私此ばをかへり何れもの思ひ立もしもしれバツとさたの有た時はそりやこそ薬右衛門がしらせたはといはれた時は私一ぶん立ませぬどふでも人數へ入て下されんからは死なねばならぬといふて又腹切んとするを宮内見て是々もはや心が見へましたとゞめ成程人數にいれましよといへば薬右衛門大によろこびける藤内宮内にいひけるは勘當の儀は何といたした物でござらふそれは御前樣へ申上てゆるさせましよといふて出雲の前にむかひごぜん樣へ申上ます殿樣薬右衛門御勘當の儀殿樣になりかはり遊ばされ勘當おゆるし遊ばされつかはされましたら有難ふ存ましよと申上れば出雲の前薬右衛門にむかひのたまふ樣是薬右衛門今までの御勘當ゆるすぞ今から隨分忠をはごくんで皆の衆と心をひとつにして師直が首取て殿樣に手向てくれ勘當はゆるしたぞとの給へば薬右衛門骨

髓に通つて有がたがる一座のめん〳〵よろこぶ宮内あゝめでたい〳〵といふて小謡をうたひよろこびをなしけるかくて藤内何れも連判を取ましよと一々一味同心の連判をとる宮内一子力太郎連判させんとする時宮内まづおまちなされ忰には判をいたさせまい藤内是は何とも合點のゆきませぬどふした事でござるいや忰力太郎は此たびの儀につれてまいらぬそれゆへ判を致させまいと申事でござる是は角のあるやうでいよ〳〵がてんがゆきませぬ是彌次兵衛殿御氣にはさへられな是にござる彌次兵衛殿は足輕でごされ共こなたの思し召入有て此度のお供につれらるゝではござらぬかそれに一子力太郎殿をつれられまいとはがてんがゆきませぬ定めし是は親の身で子をふびんに思し召跡にのこしをき末繁昌を願はしやつての事でござろといへば宮内全くさやうの事ではござらぬ然らば忰をつれまいと申心お物語致ましよこりや女房共最前力太郎を連歸れといふたに歸りはせいでよしない事を聞す暇をやつた歸れ暇やつたといへば女房お辰そふはなりますまいいとまを下さりよなら手打に被成となげくを宮内扇を持てさん〴〵に打たゝく皆々とりさへる力太郎母におゝひ重りいたわる宮内見て何れもあの體をごろふせあの性根で此度の用に立ましよか日比母に孝行を盡しそれが惡いではござらぬ御きげんは何とござるおめしはあがりましてござるかなどゝ心を盡したゞ母を大切にそばを片時さらず大事に致します其心からは此たび連參りたりとてまさかの時母が事を思ひ出し未練な働きいたした時はさう崩しといふ物でごさるさるによつて跡にのこしをき連て參るまい連て參らぬからは連判もいたさせまいと申事でござると理をせめていへば連衆皆々尤とかんじける力太郎いふやうは母に孝行つくしましたはやがて別れ長ふはそひませぬと存まして孝行にいたしました是母樣もはや今から母でも子でもごさらぬと親子の舊離を切思ひ切たる體親宮内見ておゝでかした〳〵其心ならば成程連行ぞとよろこぶ母親お辰歎き自害せんとするを皆々おしとむれば最早わしが願ひは叶ひました力太郎が御供が叶ひまして嬉しうござんすわしが身は夫にわかれ子にはなれ長らへていられよかといふて自害する宮内此體を見てこりや力太郎母が自害して死だが名殘おし

うはないかといへど力太郎すこしもなげくけしきなく何れも明日の立時は何時でござると尋ぬれば親宮内聞はてハァ出かした〳〵といふて皆々奥へ入ける

▲中の中入

遊女屋の體茶屋の亭主都倉や九之八正體なく酒に醉座敷中に寢入りゐる女子共出てモウシ旦那様〳〵とゆすり起せど性根づかずモウシ旦那様駕の處はどこでムんす旦那様〳〵とゆすり起せば九之八現に何じや牛がかごぬけするとたわ事いふて目が覺ねば女房おまき出て女郎達にいひけるはこちの人の九之八殿にあまり酒をもつて下さんすなといつも賴み置ますにあのやうに性根のつかん程もりつぶさしやんして聞へませぬあの人は酒に醉れますればたはいがござんせんといへば女郎達花車さんわしらはもりはしませぬ奥の座敷で大酒もりがござんしたその座敷でのましやんした酒でござんしよおこしよふがござんす鼻の中へこよりを入てくさめさせてせゝりおこしましよといへばこりやよふござんしようと手に〳〵こよりをひねりもつて九之八が鼻の穴へさしいれんとすれば九之八醉覺めをさまし其やうな惡じやれをくふて此商賣がなる物でござりますか手の惡いと笑ひ女房共しておれを起して何ぞ用があるか大ぶん用がござんす約束さしやんした女郎様達をいふてをかしやんしたか成程約束して置たまづお糸様、お島様、おくの様、お岩様お約束申て置たといふてゐる所に次の座敷に須山源次、大岸力太郎遊びゐて障子をさらりとあけ源次亭主〳〵といふて九之八を呼何と女郎達はまだか此お若衆は此様な遊びは始てじや程にずんど美しいお女郎の手を取て入れて下さるやうなあてがふてやつてたも亭主心えましてござります此お女郎様を進ぜましてくわつ〳〵とのみかけましよとそゝりける源次是々亭主こゝへこばたといふ客がくるか成程こばた様お出なされます其小幡とわれ〳〵はさし合じや程に合せてくりやるなこゝは端近で惡い奥座敷へ行ふといふて奥へ入にける藤内、薬右衛門連立此所へ遊びにきたり女郎達を見てそめきそゝり騷ぎ奥座敷へあがりける鎌田惣右衛門女房おすが惣右衛門に去られて後身を賣遊女と成勤をしけるがかごに乗ちらし都倉屋へきたる亭主九之八出てエヲお女郎様お出といへばおすがけふは宮内様の此處へ

御出とき丶ましたによつて先をひまをもらふてきましたといふ所へ笹岡藤内が女房お笹來る是も又藤内にわかれて後身を遊女屋へ賣代なし勤の身となりゐけるがおすが見てお笹さんけふはこな樣と一座でござんすすりやといへばてい主九之八成程一座でござりますとお菅にいふ是は改りましたお詞を聞ます何の事でござんす九之八お笹樣はお氣が短ふてせんどのお客といさかふて泣しやんす御意見を被成ても下さりませといへばお菅くつ〱と笑ひたしなまんせといへばお笹いやせんどの客程むりな事いふ人はござんすまいむりもよほどな事をいふたがよふござんすまあ聞て下さんせわしが酒をえのみもせぬ物をむりにのめといひまするその跡では床へいらふといふてわしを屏風のうちへつれてゐて帶をとけといひます是さへあんまりなむりをいふ人じやと思ひますに懷へ手を入てシャはやいろ〱の惡い事をしやりますあの樣な客は重ねても喧嘩します是がわしがのがむりか聞て下さんせといへばおすが打笑ひ此樣な勤の身になればこな樣のやうにいふてはなりませぬと打笑ひ皆々連だち奥へ入大岸宮内、鎌田惣右衛門連

立出る惣右衛門宮内にいふやう是はどこへ連てござるどこといふ事がござらふぞ惡い所へは同身は致すまいわしに附てござれと道をいそいで遊女屋の都倉屋九之八方へ連立行九之八表へ出むかふ宮内是ていしゆ此お客を引附申す此かたは田舍の大盡じや此所始ての御出じやどなた成共めき丶の御女郎にあはせまし隨ぶん御馳走をめされと引合す惣右衛門拙者事はかやうの所へついしか來た事がない萬事樣子をしらねば不都合がちにござらふ程に諸事たのみ入ます九之八そこらは拙者めが受込ましたまづ奥へお通り被成ませといへば二人ともに這入りければおすが宮内にござんしたかけさから待てゐましたといへば宮内忝いといふていだきつきたはぶる丶惣右衛門此體を見れば我女房のおすがなればあきれはて丶ゐる宮内女郎共をいざなひ皆々奥へ連立這入る惣右衛門一人座敷に殘り不審顏にて身が女房がかやうの所の勤女になつてゐよう樣はないがと思ふ顏にて小首をかたげ思案し身をもがき氣色して刀の柄に手をかけこぶしを握つてゐる所へ亭主九之八たばこ盆持きたる惣右衛門ちやくとさあらぬ體してゐる九之八ふしぎ

顏にてたばこ盆そこにをき這入りける惣右衛門あたりを見廻し人なければ又こぶしを握り氣色し刀の柄に手をかけ齒がみをなしてゐるところへ九之八お茶あがりませといふてさし出す又ちやくとさあらぬ體に見せ是御亭主今こゝにござつたせのすらつとした女中は勤をなさるゝか成程つとめを被成ますあの女郎を買ますは何程でござるちよつとが七匁跡をおつめなさるれば十四匁又夜明迄が二十八匁でござりますといへば惣右衛門直段の金銀はいとひはせぬがまづ試るまで一寸の七匁であひましよ心得ましてござりますさりながらこよひはお隙がいります程においではござりますまいハテ今夜ひまがいるなら翌買ましよは扨九之八どふなり共被成ませなれどもあの女郎は御無用に被成ませそれはなぜに尤お勤の身ではござりますれどおまへにはあはしやれますまいいよ〱がつてんがゆかぬは拙者にはあはれまいとはなせにさればおまへのおつれ小幡樣にあはしやりますればおまへにはあはしやれますまいすればそんでござります身どもがつれにこばたといふつれは覺がないが誰が事ぞ宮内樣のかへ名でござります此やうな所へくればかへ名がいるかなる程さうでござりますといふて九之八は奧へ這入るおすが出惣右衛門にいふ樣こな樣の樣子を聞しやんせねば腹のたつは道理じや此やうな勤の身になりましたは樣子がござんすはなしましよ聞て下さんせといひわけせんと取附ば聞入ず突のけ脇へ立退き物にまぎらはし聞いれねばが子をしらいでめつたに腹をたてすとわしがいふ一通りをまあ聞て下さんせと又取附ば又つきのけよりそはで腹たつる所へ葉右衛門出で惣右衛門とお菅と女夫の中とは夢にもしらずそゝりかゝる惣右衛門よきすきを見て歸らんとしけるがいなれもせねばせきだが見へぬとかこつけていひ立かへり紙燭を拵らへ座敷の行燈の火を灯しせきだをたづぬるといふて持出てはわざとけし紙燭がきへましたといふて又とぼしにかへりついには行燈の火をけしくらがりまぎれに迯歸らんとさしあししてゆく葉右衛門さきへ立まはりとらまへいなしは致さぬ手の惡いと引とむる所へ藤内わが女房のお笹が手を引て出る惣右衛門騷ぎの體に興さまし是藤内殿それはこなたのお内儀ではござらぬかされば身どもが女房どもでござる此所に

勤奉公してゐます是は興がる事で何とも合點がゆきませぬ合點のゆかぬは尤でござる女房どもが心いれ樣子をきかしやつたら涙がこぼれましよ身どもが浪人いたしたをいつまで浪人さしやろもしらぬとあつて此里へ身を賣て此かねをやろと呼におこしました心底の程がなみだがこぼるゝ程嬉しうござるとかたれば惣右衛門聞てこなたは涙がこぼれましよけれどわれらは涙がひつこみますといふお笹惣右衛門にむかひわしやおすが樣が此里へ身を賣勤の身と成ましたも皆樣子有ての事でござんすまあ樣子きかしやんせんが惡ふござんすといふてゐる所へ宮内そゝり子共をおどらし音頭取出るお菅宮内にむかひ是宮内樣こな樣はきこへませぬわしが賴みました事を惣右衛門殿へいふて下さんしてぬしもしつて連立てきて下さんしたかと思へば惣右衛門殿は何もしらしやれんさうな是は宮内樣きこへませぬとうらみをいへば宮内、惣右衛門おすが夫婦の中に入根は尤じや是惣右衛門殿内々お菅殿身どもを賴みおつしやるは夫惣右衛門浪人いつまで浪人してゐられましよもしれませぬによつて身を賣ました此かねをこなたへ渡してくれとのおたのみでござつた拙者もあまり心ざしをかんじとかく直にあはしましての事と存今日まで申さずにをつて連立てまいつた其かねも是に懷中してをる何も恨みおつしやる事はない此かねは心ざし大切な金なれば受さしやつても大事ない受とらしやれと懷よりかね取出し渡すれば惣右衛門樣子きゝかんじ入是宮内殿最前はお恨に存ましたが近比忝ふござる是女房ども心ざし過分にござると涙を流し一禮いひ中なをる皆々よろこび宮内小謠をうたひ舞騷ぐ所へ宮内一子力太郎奥座しきより出親宮内がそゝり騷ぐていを詠めゐる親子たがひに顏を見あはす親宮内そげていふようさしあひはくらぬあれにも相應の女郎をあてがふてくれとそゝる力太郎親宮内を扇を持てうちたゝき親でも子でもござらぬぞ其御所存で本もうは得とげさしやるまいといふて歎く須山源次つつと出是力太郎殿そなたに此樣子を見しよと思ふて此所へ同身したあのやうな放埒な所存ではなか〳〵本望はとげられまい不所存な者と一味せんより身どもが連判はのぞいたぞ此樣子を師直方へ注進せんと走り行皆々追駈とめんとかけ出るを宮内おしとゞめ

あの源次は二心あるものとはかねて見受置た事でござる何れもこうした遊山は主の事わすれ武士道を忘れてゐるといふ事を師直方へしらせん爲の計略の遊山なれば告にゆくこそ幸ひなれ足に灸でもすへてやり達者にしてやつたがよいといへば何れもそふじや／＼といふてやみける宮内いふやうむかし曾我兄弟親のかたき祐經を討んため兄十郎は大礒へ通ひ虎といふ遊君にふかく馴染敵祐經に心をゆるませ終には本望を遂たと申す我々もそのごとくじやいざ明日は早天と約束きわめ勇み進んで皆々這入る

下武勇講　かくて師直屋敷には其夜客有もてなし客は歸り給ふ體師直師安親子出ハテ今晩のお客は御機嫌がよふて嬉しかつたヤイ皆の者共火の廻り用心きつと致せ申附たぞと下部共にいひわたし親子ともに奥へいるかゝる所へ鹽谷判官の家來ども今宵ぞ主の敵高の師直を討んと兼て言合はせ大岸宮内おなじく一子力太郎、鎌田惣右衛門、笹岡藤内を先とし以上四十八人の者共兜頭巾に羽織をきて手に／＼がんどう提灯引さげもゝひき脚袢はきしめ一やうに打扮ち師直屋敷の門外にはせ集る宮内相圖の詞をいへば皆一

時に頭巾をとる又合圖の詞をいへば皆一統に羽織ぬぐサアトいへば惣右衛門築地に梯子をかけのぼり内へ忍びゐる所へ時の拍子木打通るを引とらへさし殺すのこる面々に梯子をさし又はかけやもつて打崩し亂れ入さんぐ\に切たゝかふ大岸宮内は鎗を突下知をし合圖の笛を吹ばみな一所へよりあつまり井のもとの水を汲上手に〱のみ息をつき敵師直に出あはしやつたかといへばめん〱にまだ出あはぬといへばハテ無念やと一統に亂れ入爰かしこを尋るに師直逃ゆかんとすれど詮方なく柴部屋にかくれゐる各を見つけ引いだし首打落しいそぎ國元さしてもたせやり宮内體首を引さげ人數を揃へ勝鬨あげしとやかに歸りしはいさぎよくぞ見へける

右太平記さゞれ石は横綴三冊にて既に東武芝泉岳寺の墓義士の法號を不殘記せり畵面十五枚有其内を少しく爰に寫す上の卷は近松が兼好法師物見車の清水寺を種とし中の卷清光寺の場は宗助が忠臣金短冊の墓所を遺ひ敵討は碁盤太平記を寫したる物也一日の趣向假名手本の舊狂言なれ共當時の仕組と替り古雅なる所あれば後日狂言硝後太平記とともに下の卷に出し一部の總評を演るもの也

西澤文庫脚色餘錄三編中の卷終

西澤文庫脚色餘錄三編下の卷

目次

西澤文庫 脚色餘錄三編下の巻

西澤綺語堂李叟著

霧太郎天狗の考

寶曆十一巳の年春角芝居にて並木正三の作にて始て霧太郎天狗酒醼と外題して謠曲の善界を舊(もと)として大天狗の首領の名に霧太郎といふ名を作りもふけしは都て物の大きなるを太郎と呼所謂總領を太郎と呼次男を次郎と云より起るか京にて雲の峯を丹波太郎江戸にて利根川を坂東太郎と呼が如し古き諺に山太、近二、宇山と云は山崎の橋を日本第一として山崎太郎、近江二郎は勢田の橋宇治三郎は宇治橋をいふとぞ央邦が句に「廣澤やひとり時雨る、沼太郎」とは廣澤は池の太郎なりといふ心也謠曲狂言の惡太郎は總領の惡者を云鈍太郎は馬鹿者の總領を云か金太郎は金時の子の異名にして川童を川太郎螢を火太郎と呼ぶが如し酒器の大なる物を盃太郎猪口太郎と呼も皆同意也故に天狗の首領に霧太郎と名附しが皇都六波羅の西愛宕の社に例年正月元朝天狗の宴と云有是によせて外題をもふけし物也けいせい桃山錦けいせい英雙紙にも霧太郎の名をつかへど狂言の世界によせて霧降が嶽又た岩國山の大天狗として有何にもせよ天狗にはよき呼名なるべし

日本左衛門の再考

傳奇作書續編に日本左衛門の事跡を出せども年號月日をもらせり再び爰に記す延享三年寅の冬人相書を以て御尋有紋所は丸の中に橘なり二代目李冠橘の紋なるゆへ文政に遠江渴戀賊と外題して日本左衛門に李冠大に當りをとりけり此者本名濱嶋庄兵衛といふて京町奉行所へ美服を著し金拵の大小をさし名乘出て以前同類の疑ひ捕はれたる梶井の宮に仕ゆる新參者中村主膳は前方入魂に致し候へ共近來は中絕して某が行衛は曾て存候まじさあらば某故に罪なき主膳難儀に及び候段聞捨難く名乘出候且又改て盜賊の御吟味にも及ばず某事いかにも盜賊の大將を致せり然れ共世人難儀に及びしよふの儀は致さず先金子三千

雨より下の者を盗みたる事は御座なく手下の者に下知してとらせ候兎角御仕置を相待候といふ是によつて濱島を揚り屋へ入れ其後江戸へ送られるにも牢輿にも乘せず駕の戸を開き御紋附の長持を跡にもたせ夜に入れば御紋附の提灯を出し旅宿にては上下著用の者膳の給仕など出させたり其後數日をへて遠州見附の町外れにて濱島以下四人獄門に懸らる濱島は初中後緞子繻子の類ひ著用しけるとなり此濱島正兵衞の異名日本左衞門と附しは此書の上卷に古役者竹島天竺左衞門に傚ひて附し物か天竺左衞門は藝人役者なれば嘸かし美男にて衣服とても綺羅を餝りたる者なるべしそれに對して名附たるなるべし世に天竺浪人と云は逐電浪人を轉語して電逐浪人と云は予が滑稽隨筆に出せしが都ての名に左衞門と呼事以前の流行物にて謠曲狂言に見物左衞門、有非雅左衞門、風左衞門、土左衞門の類數多あるべし日本左衞門は天竺左衞門より出たる名なるべし文化十二亥の春中の芝居にて奈河晴助傾城廓入船と外題して一枚看板に天竺德兵衞片岡、日本駄右衞門嵐吉、唐土太夫澤村田之助、琉球島六工左衞門と四枚書看板を出せしが狂言納らず看板取替秋葉權現廻船噺となりたる事有けり

歌舞妓謀反人名の考

書に傳内流と云有東都に一家の書風を立し建部傳内名は賢文と云是を竹田出雲豫菅原傳授手習鑑に武部源藏と作り名して遣ひ歌舞妓に黃金鯱には柿木金助の父を八代須八官とす八官は來舶人にて今江戸の外堀にやよそ河岸と呼又八官町（昔比丘尼女郎町有と云）の名を遺す謀反人に非ず又向坂甚内は新吉原の開發人にて惡人ならず三千世界商往來といふ古狂言に山西の金左衞門と云實惡の役名有是は海外を歷遊して書を能し後大阪に住すと書畫一覽雜の部に出たる也又雜伏水と云狂言は小堀遠州侯一旦改易となりし時雨の釜といふ寫本の一話を脚色して野守専州と名を作り此狂言の謀反人に麓甚内（こしづけ）といふ有是は平賀源内（一名風來山人又福内鬼外）とて戯作者の諢附名也阿蘭陀エレキテルなど工夫せし畸人故狂言にて謀反人の樣に仕組たる物也此雜伏水を京都芝居にしてせし大切に少し增補して大領久吉北の松原にて大茶の湯を催す麓甚内賣茶翁の容して荷ひ賣出て後拐に仕込し鎗を持て久吉に近寄仕組有高遊外を謀反人とせられたるは大なる迷惑なるべし

梅澁吉兵衛胡椒頭巾の話

梅澁吉兵衛小梅が事實は傳奇作書續編に出せどももれたるを爰に云天王寺屋久左衛門子供長吉が墓は谷町筋寺町久本寺にあるよし梅澁吉兵衛が仕出したる胡椒頭巾といふ物は紙袋に胡椒を入て往來人に窺ひよりて是をかぶせかけ右の胡椒にむせびて苦しむ内に腰の巾著懐の物など奪ふ事を工夫して專らその比からかゝる事をなす惡黨多かりしとなり近松の作楓狩劔本地の三の切艾屋久作の文談に乳をのぞいてさし足に雨戸の樞懸金をしめて廻す力帶女房が口に手をあて鼻息窺ふ胡椒の粉藥硏鍔の二尺一寸するりとぬきとあるは梅澁吉兵衛が胡椒頭巾とおなじく此比の惡者專ら用ひしものとしらるゝ近松はよく世話に馴たる作者なりけり

夏祭浪華鑑狂言の話

延享二年丑年七月十六日より竹本座新淨瑠璃團七九郎兵衛釣船三ぶ一寸德兵衛夏祭浪華鑑九段續は並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作にて世話淨瑠璃續本木偶に此度始て帷子衣裳を著せ古今の大當りをとり此年十月に潤月年の暮迄打通せり其節の段書は第一色の水上波分た御鯛茶屋の鹽竈第二殿の謎意を卷込だおやまま繪の拜領物第三出入の數をつまぐつた珠數三昧の男作第四手代が戀を堀だした浮牡丹の箱入娘第五道行妹脊の走り書第六男の意地を立ぬいた燒鐵の女房作第七舅が欲を止兼た紅粉絞の宮入帷子第八友達に心を碎き石割雪踏の合印第九親と子の緣を繫だ貫ざしの捕繩以上九段とも唯俠客の意地を宗として書たる物ながら見處多くして今迄百十八年の星霜を經れ共淨瑠璃歌舞妓ともに行なはるゝは作者の譽なるべし辨慶といふ縱横縞を故人吉田文三郎俠客によかるべしとて九郎兵衛の人形に著せたるより今に團七縞と稱し一寸の女房お辰が燒鐵は東武落合に一乘院といふ精舍を建し了然禪尼の白翁和尚に法を受ん爲火熨を燒面體を燒爛かしたるを仕組又住吉の場にて一寸團七立引の間の文句に其間拔さいたる髭ぬかふと床の床机に上足打煙草入から出す鑷もなんぼうふとき穿鑿也と有は尾州名古屋に南方鑷とて毛拔の名物有當時皇都産毛屋の鑷のごとし孔明出師の表に深く不毛の地に入て今南方を定むと有より近衛殿より賜りし名也と云是を聞せし文談なり寶曆年

間角の芝居にて中山文七座元の時見物喧嘩せし咎めにて文七座元なれば入牢仰附られやがて濟したる折此夏祭をして團七出牢の姿にて三ぶのに父新九郎徳兵衛に弟來助父子兄弟にて口上を演大に當りし事有とぞ此夏祭の世界の増補狂言は織合團七縞夏景色浪華細見等有予も此世界にて仕組たる物二部有紅粉桔梗女團七上の卷茶屋場中の卷長町裏下の卷三ぶ内の段三幕にて下の卷には燒鐵の紋切形お梶は心に靭負に惚て居て三ぶが道外交りの世話場狂言の穿あれども事長ければ中の卷の長町うらを爰に出して下の卷は次々の編に演るものなり

女團七長町裏の正本

造物向ふ奥深に淺黄幕此前に一面の竹垣上手草井戸はね釣瓶のあしらひ此傍に水船一面に南京の花盛舞臺一面に砂を敷御輿太鼓の鳴物本雨さつと降らし幕明る「追ふて行夏と秋との堺道御祓の雨のしだらでん住吉參りの賑ひに紛れていそぐ磯之丞傳八諸共附そふて駕の簾を細引でくる〳〵廻る細道長町うらにさしかゝる ト此上るりにて向ふより安傘をさし磯之丞頬かむり尻からげ大小傳八塩ざつぱな腰にさしみだの三さしの六かごなかきめい〳〵傘をさし走り出て花道にて 磯傳 サ、早くやれ〳〵 三六 合點じやく〳〵 ト本舞臺へ來る此時向ふ戸口より 梶 ヲヽイ〳〵と呼かけ飛くる仲居のお梶南無三寶と横ぎれに畦道ゆけばおつつゞき駕の棒摑んで畑中どふと打すへ息を繼 ト此上るりの内大バタ〳〵にておかち走り出でいきつと駕をとめ 梶 此駕まつたやらん〳〵やる事ならぬまあ〳〵待て貰ひませふぞ ト棒鼻つかんでもどすかごの二人よろ〳〵として下になく磯之丞傳八きつと成て 磯 わりや仲居のお梶め一寸の女房といひ合せよくひどいめにあはせたな 傳 まだ其上においらが跡を追ふて長町うら三界迄駈てうせたは 磯傳 何ぞ用でも有ての事か 梶 アイずんとムんす用がありやこそ爰ら迄跡をおはへてきたのじやはいの 磯傳 面白いそりや何の用で 梶 譯いふてゐる隙がないわしがきたのは是此駕の内のお人がほしさどふぞ返して下さんせいなア 磯 ヲヽそれ程ほしがる駕の代呂物 傳 ほしかそつちへやりもせふ駕から出して 磯傳 つれていね〳〵「心よふ出た挨拶も聞や聞ずに駕の繩がんじがらみをほどく間も 梶 モウシ靭負樣憮惘り被成たでムんせう又してもも〳〵此通りサヽ今ほどいてをります程にお出まし被成れや「よふよと解た駕の垂明て引出すその内は思ひもよらぬ母お熊作り聲してぬつと出 ト此内磯之丞傳八ふせ笑ふて雨方の石へこしをかけ燧火打にて煙草のみゐるお梶捨ぜりふにて繩をとき駕のたれを上る内に母おくまゆきへの着物を引ばり乘

て出で　熊ヲ、駕の内の代呂物はおれじやぞや　ト前へ出るおかぢすかして見て大悔りして　梶ヤアおまへは母様ヨ……こりやどふじや　ト大悔りお熊はたの二人りと顔見合笑ひ乍　熊娘よふ貰ひにきてたもつたのふ　ト合方に成るお熊おかぢにすがりつくおかぢふりはらふて　梶ム、そんなら此駕は靭負様と思ひの外　熊ヲ、此お熊じやはいのふ　梶ヱ、ヱ、　熊さあきり〳〵連ていにをらふぞ　梶ム、ウそんならこりや又皆が言合はせうま〳〵わしをやりやるのじやなア　熊やりやるのじやなアとはどふじやそなたがほしがる駕の代呂物は此おつかあのお熊じやぞやいゝやいの此おつかさんの難儀を助けふとてそれで爰まで跡おふて貰ふて呉たじやないかいやい　トおかぢなふりまはすおかぢ始終氣ならぬこなし　一こも扨もそなたは孝行な物じやのふよう迎ひに來てたもつたさあ連ていんでたもて、ひいてたもるかおはれていのふかヱ、是そは〳〵とどふじやぞいのう　トいぢ惡ふむしやぶりつくおかぢ向ふ計り見てゐて突のけ　梶ヱ、人の心もしらずに面白そふにこりや外を尋ねる迄もないかゝ様靭負様のお行衛はおまへしつてゐやしやんすじや有ふけふ晝のしだらといひ定めてどこぞのお衆からたのまれて靭負様を盗み出し脇へかはして私を一ぱいやる仕事どふぞ靭負様を早ふかへして下さんせいなア　熊ゆきへをかへせ〳〵とはそりやマア何の事じや　梶何の事とはまが〳〵しい是嬶様あのゆきへ様はお前も兼て聞ての通りとゝ様段々と大恩のある助松主計様の御子息爺様の爲にも御恩がありやお前の爲にも恩義もあらふしいはゞ御主同前の靭負様もしもの事が有たなりや今まで長々御せわをやき盡した事も水の泡爰の道理をかみわけてどふぞ行衛をあり様に　熊否じやゑつてもいはぬアノ爰な恩ゑらずの不孝ものめがあの靭負の親には死んだ耄親仁やおれ迄恩があるとは何の事じやコリヤヤイおのれが親は闇七九郎兵衛といふて二つ名とつたならず者先の嬶はてこねて後連におれが這入たもなどふで長ふは生ぬぼれ親仁死跡とつてもほんのめくさりまだも見込は繼子のおのれがゑぶり皮のむけためろこいつ大きふ成りをつたら新町か島の内へ賣てこましや相應の元手にならふイヤ〳〵〳〵まだそれぐらひじやてんこつじやいつそ大名へ奉公になとこましてもし殿様の手でも附たら我儘氣儘はいひ次第左團と濱田の屋敷へ奉公にこましや直でもないヤットウを見習らふてめろの癖に力自慢ア、まゝよ生物の味しつたり

やまんざらそふも有まいとめをねむつて暮す內親仁の團七はがつくり往生介抱がてら取戾し賣といや四の五のと島の內へ見習ひの仲居奉公やしなひといやわづかのつまみ錢小悴の間から誰がそのめんどうを見てこましたのじや思ふた事は皆ぐれはませめてその入合せにかり衣裳までして出かけたりやお乳母樣待んせなど丶利口そふによふ金もふけの邪魔さらしたなコリャ我が貰ひにきたゆきへめはな持てをる千手院の刀と助松の系圖書とをひつたくつてなま殺しにさいなんでとふに腸へぼいやつてしもふたはいやい梶サヽそふしられては私がどふも熊たゝぬかその立の立ぬのと理屈をいふは誰がかげじや何ぞおのれひとりも大きふ成たよふに思ひをるかやい トおかぢなむがふ引附て コリャあの琴浦にはな爰にござる磯之丞樣が惚てござるによつてその邪魔をするかはり千手院の刀は素より系圖の卷物もわけ取にして金にするそれにきよろ〳〵と靱負めが在家をいはふかい馬鹿盡しやがるなアノ爰なぬかみそめらふめが「立蹴にはつたと蹴られても義理ある親ぞと無念をこたへ齒をくひしばりゐたりしがとかく詫るに詮なしと笑顏つくつてもみ手をし 梶 ホヽヽかゝさんとした事がてもマアこわいかほして何じやぞいなア最前からいはしやんす事一つとして無理な事はムんせぬ長々お世話の上にお前の金もふけの邪魔した事じや物腹立は尤でムんす道理でムんすがもう〳〵此後はどんな事があつてもおまへのもふけ事の邪魔は致しますまい程にどふぞ靱負樣の在家とその二品をどふぞ戾して下さんせ是慈悲じや情じや拜みます是モウシ「手ひき袖ひき膝をつき無念を隱す詫なみだ親といふ字はぜひもなや 熊 詮らぬわい拜みたをし置てもらはうしたがそれほどほしくば二品をやりもせう又靱負の在家もおしへてやらふが我が持てゐる琴浦の年期證文とかへてやらふか 梶 そりやおまへ無理といふ物 熊 むりいふのは親のかうけじやまだ〳〵それもかへてやる所じやなけねどかゝりやつながる親子の緣と思やこそこりや親じやぞよ〳〵 トむごたらしふ引ずり廻して突とばす磯之丞傳八笑ふて

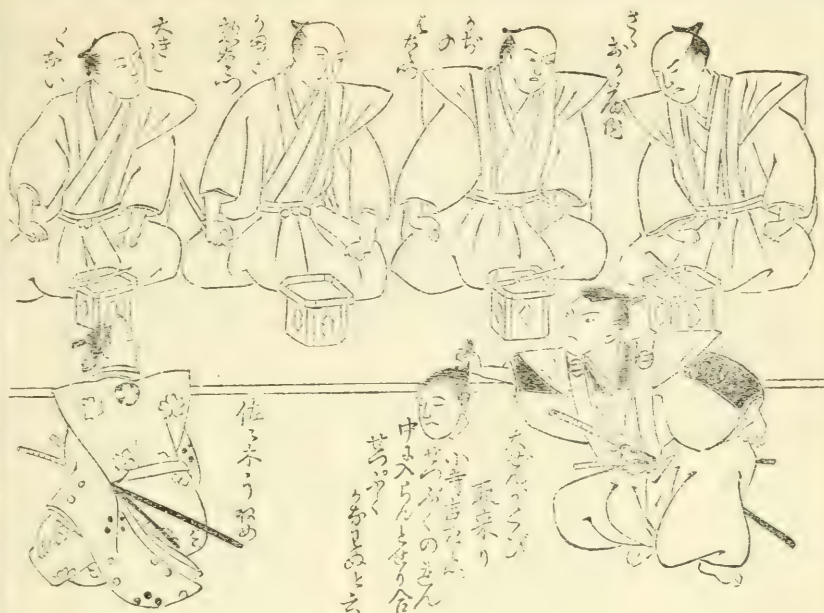
磯 ハテお熊の申ぶんおもしろいけふの駕の趣向といひ 傳 こりやよつ程新らしい近年の新狂言じや 磯傳 ハヽヽヽヽ 熊 サアお二人り共とらずやらずなら手間隙はいらぬかの所へ行ふじやないか 磯 ゆかふとも〳〵

さあ傳八 傳それ〳〵早ふいて酒などのもふ 熊サヽ駕
の衆もごんせ〳〵 ト行かふとするおかぢいろ〳〵思入有て向ふへ立 梶是母樣かう
なるからは私が命は投出してをりますぜひ共わたし
が頼む事がどふぞ鞠負樣の居處その二品をわたしの
方へ 熊かへさぬ時はコリャおかぢわりや大方おつか
あを殺す氣で有ふなア 梶めつそふもない何のお前を
熊イヤ命を投出したといや切る氣じやサヽ殺せ〳〵
熊傳ヲヽそふじや〳〵切てもらへ〳〵 梶エヽマア何の
勿體ない 熊何勿體ない物のほしさの附づいせうエヽ
憎てらしいマアどふしたら腹がいよふかうして〳〵
アノ爰な死人めらうの獄門めらうめがうぬ「捻廻し
〳〵ふんだりけたりあげくには砂に摺附石に打附引
廻し引廻されても手向ひのならぬも無念さ口おしさ
熊何じやなくか口おしいかヲヽ悲しかろ道理〳〵そ
の涙をば此泥草履でかふして〳〵ふいてやらふわへ
「有あふ草履顔へたヽ摺附〳〵さいなまされこたへ
兼て思はずも無念と見つめる母の顔 熊何じや〳〵そ
の顔何じや親にむかふて其つら何じや 梶エヽ母樣で
なくばなア 熊何じや母樣でなくばとはそりやこそお
れを切る氣じや有ふさあきれ〳〵 磯そふじや〳〵コ

リャ親を殺せば天下の式目 傳一寸切れば一尺の竹鋸
で引かへすぞよ 磯ヲヽ二寸切たら三尺の竹鋸で引か
へすお熊 磯傳さあ早ふ切てもらへ〳〵 熊さあ一思ひに
やつてくれ〳〵 梶アヽ勿體ないどふしておまへが殺
されう是かゝ樣是程に被成つた上はどふぞ私がたの
みをば 熊ヲヽ系圖の一卷からさきへないふて置た通
りにして返してやらんせ ト顔にて仕方してのみこます 磯ヲヽその一
卷をかうして〳〵やらふわへ ト懐より手紙を出しずん〳〵にさいて 傳の
ぞみの一卷じや受取をらう トおかぢ悔りしてきつとなつて 梶ヤアこり
や大せつな一卷を 熊ヲヽ破つたら何とするぞ 梶もふ
せびに及ばぬはいの ト刀をぬいてきつとなる 熊それ皆の衆 磯傳合點
じや覺悟せい とかごの二人も一所にかゝる此立廻りの時向ふ淺黄まくを切て落す遠見にお藏前の書割になる誂ら
への住吉音頭に成りうしろを往よしの飾り挑灯に火を入隨分澤山に
通ろお梶は四人を相手に駕をこだてにいろ〳〵おもしろき立廻りあ
る此内お熊はほんまの系圖を懐より出して隱す處にこまり傳八が落
した胴らん持の合羽たばこ入の中へ入はねつるべの中へかくすおか
ぢは四人と立廻りの内お熊うろついておかぢに行當る
おかぢ思はず一かせきるお熊すほうになる悔りして 熊ヤアこ
りやほんまに切をつた親殺しじや〳〵 トいふ口をおかぢおさへる内に
かご二人は逆て這入る磯之丞傳八はおかぢに切てかゝる傳八が刀は
おかぢを切てもふじ身にてきれぬ事有べし磯之丞刀はおかぢが
なし一寸きれた心にて此刀を引たくり二人共一かせづゝ切附る兩人悔
りして兩方へ逆て這入る此内おくまおかぢの肩をかつぎ切つくなふり
はらひを熊を見事に切るお熊わめき作逆あるき傘にて受留る御こし
太鼓に成り兩人はげしく傘の立廻りあつてとゞ兩人ともつかれ雙方
へ打附られたよふにたをれる鳴物段々かすめる向ふの挑灯も引こみ
しんとなるおかぢ起上つて磯之丞の刀を改星明りにてすかしはれつ

るべにて水たくみ上げのりな洗ふ此時鍋釜の中よりまき物たばこ入と共にころんで出るおかぢさぐつて取あげ巻物ゆへ嬉しやといふ心にて有の刀のさやをさぐりとる此時おくますほうだらけにて起上つておかぢの足にかぶりつくおかぢ愁ひの心にて上手まで引づられながらいてよき程に足にてはね上るお熊草井戸の水船へはれかへつて見事にかへり落る水けぶり立本水バッと上るおかぢ悔りしながら是をおがんで吐息つく宜しく　ひやうし幕

硝後太平記の書の寫

後日狂言さゝれ石も横綴二冊にて書も又七葉有珍らしき書組三葉を寫して爰に出す此假名手本の世界の物を數種撰て忠臣藏類聚大成として兼て草稿成れり然れ共此硝石前後狂言の筋書は誠に古風なる昔狂言なれば有の儘爰に出すものなり文中に高位ならぬ詞にも賜ふなど云は此頃のならはせと見へたり城受取の節勅使とあるもおかしく藤内、惣右衛門が女房〳〵を去る間の仕組珍らしく義士傳の堅みを和らげし作なるべし四十七士の内笹岡藤内、梶の葉右衛門、鎌田惣右衛門、小寺吉左衛門此四人を此狂言の立役と見へたり假名手本にては矢間重太郎、千崎彌五郎、竹森喜多八、寺岡平右衛門と一變せしと見へたり出雲前を顔世の前宮内を由良之助力太郎を力彌太田大膳を斧九太夫床世辰姫を小浪と呼かへ宇都宮公綱を佐々木主膳を桃井石堂と思へばさして不審もなかる

べし後太平記の場に力太郎と惣右衛門が男色の仕組復讐後の和らかみにて當時歌舞妓には用ひぬ所にていと珍らし吉左衛門國への注進は二度目の清書寺岡切腹の原本なるべし

さぁれ石後日狂言役割の寫

本望をとげてかへる曉のかね十兩の酒代請取申口上覺書高名を石塔に手向の水清き流を子孫に傳ふる文武の條々

硝後太平記 後日 三番續

夫婦のきぬ／＼きて見る旅の宿假初乍物思ひ四十七度武運長久つは物共の四十八願成就の所繁昌

目録

弁梓弓手まはしの宵働きは下女の玉だすき

第一 おもひぐさ

附り矢竹心のがうなものかしらの分別藏

弁増鏡うつりの姿な女ぼう立の玉くしげ

第二 志のぶぐさ

附りくもりなき心のがうなもの使の勘定藏

弁故郷の錦かざりのよい出立の奥方の玉すだれ

第三 わすれぐさ

附りいつはりなき心のけうな物語の調法藏

役人かへ名次第 座中不殘出申候 大あたり狂言

ゑんや判官おくいづものまへ　山下かるも
さらしな　中村さの十郎
おばすて　をのえうこん
そのわら　とみなが若竹
すま　よしざはせん菊
あかし　はな井吉三郎
つぼね　水木きくのせう
太田大膳　あさだ善右衛門
いしだうちぶの助　とみ山兵右衛門
さゝきうぬめの助　おぐら七三郎
うつのみや公つな　宮木新十郎
いもとしら玉ひめ　あらし竹十郎
ますほ　中村萬三郎
すぎ　山下淺之丞
はぎの　きく川京之助
力太郎いひ名附たつ姫　山下うげん太
のむらごんのしん　三國かん九郎
きぬがさ平八　竹中七郎左衛門
まつしま　山下はなのせう
口澤國八　金子伊左衛門

島川くはん八　染井平左衛門
立譽和尚　淺田藤七
しゆんてつ　山野かん六
同けんもつ　若井半十郎
料理人才兵衛　とく若金八
酒屋久左衛門　澤村音右衛門
小寺吉内　（道外）山田甚八
小寺吉左衛門　片岡仁左衛門
女房おきく　花澤龜十郎
子吉三郎　永をか小四郎
かまだ惣右衛門　（立役）澤村長十郎
女房おすが　（太夫座本）山下龜之丞
子竹之助　杉本新太郎
さゝをか藤内　三浦儀左衛門
梶野葉右衛門　吉岡求馬
女房おしげ　あらし八ちよ
子じん吉　宮木德之丞
堀江彌次兵衛　大橋武右衛門
奥山女房おみき　芳澤玉ぎく

子孫太郎　宮木新太郎
かた山子みの助　あらし源次郎
竹もり子十太郎　中むら源太郎
川瀬子かめ八　若井久之助
磯川子庄吉　淺田傳吉
杉野子次郎吉　山下與三郎
勝田子さ太郎　杉本平次郎
岡島子半之助　芳澤梅松
大岸力太郎　山下小才二
大岸宮内　山下京右衛門

上おもひ草の筋書

大かたの物を思はぬ人に心をつくる秋の嵐松に聲有て向ふの堤より大名の行列花やかなる有様殊更御近習の若侍は何れも美しき女房達男姿の打扮中にも局らしき女房かい〴〵しく進出て何れも御供の衆中へ申渡す事がある此乘物の内にござるは鹽谷判官高貞様のみだい出雲の前様にて渡らせたまふが判官様には高の師直が狼籍にて終に御生害遊ばされ御本領まで召上られしゆへ御家來大岸宮内殿を始何れも敵師直を討んと御國を出て折からの秋の木の葉とちり行て淋しき御館の内にはあるにかひなき我ら計り出雲前様にもひとりふせやの枕の塵やるかたもなき御物思ひに御心もすぐれさせ給はずさるによつて大岸宮内殿相家老太田大膳殿より御徒然をなぐさめ奉らんとて今日御申あるにより忍びてお越被成るゝ間何れもぬからぬやうに御供あれといへばあつとこたへて長刀さすが女の行列風流にて程なく大膳方へ入せ給ふ太田の屋敷には抱料理人の才兵衛を呼是こよひのお客をたゞいつもの通りのお客と思へば御祝言振舞じやとあるそれに此様な料理では濟まい程に獻立をしなをしやといへば何じや御祝言のふる舞じやそれはあての槌がはづれたしたがおれは祝言の料理の仕様をしらぬ幸ひの事がある飯焚の玉が諸事才覺なものあれをよんで談合せうと玉を呼出す此玉はもと鹽谷判官家來鎌田惣右衛門が女房のお菅なるがいかなる心入にや賤しき飯焚となつて此屋敷に勤務がけに摺子木持てとも〴〵料理の談合する所へ奥より出雲の前涙ながら走り出さりとは口おしや今かふした身になつたれば大膳めがあなどつて無體な事いひかけ

ると獨身をもやし腹立給へば大膳も奥より出て不興顔局は下心あるにや是出雲の前様何とてさやうにお腹たてさせたまふまづあなたのお心入もとつくと御聞あそばされと色々すかし申せど何も聞事はないそちは大膳のひいきをするかとあれば何しにあなたのひいきを致しませうあまりお腹立ゆへお氣があがつたさふなハテ心の附ぬそれお茶上ませいといへばアツといふて飯焚のお玉茶を持て出て互ひに顔を見合せ兩方共に興さめ顔にて暫し詞も出ざりしがしばらく有て出雲の前我身は鎌田惣右衛門といはんとしたまへば玉ちやくといかにも鎌田惣右衛門様にも一期をりましたといひまぎらはし惣右衛門様にも殊の外懇ろに仰られ随分辛抱せよのちく引上てよい身にもしてやらふと御意被成ましたがたゞ憎きは太田大膳めでござります皆一統してお主のかたきを討ふとはしをらいで金銀をむさぼりとつてさりとは腰ぬけめとさんぐあしざまにいへば局氣の毒がりャイ玉あたりを見て物をいへ是にござるが大膳様じやといふにわけもないあなたは大井監物様とこそ申ますれおゝいかにも今は監物様といへどもとは大膳様といふたと聞やいな又いひ直す智謀の程こそたのもしけれ時に出雲の前ャイ大膳そちが最前いふことには我心にしたがはずばおれをさし殺してそちも腹切といふたが何ほどいふてもそちが心にしたがふ事はならぬ程にさあ殺せとすこしもわろびれ給はねば大膳いよく腹を立いかにも男のいひがゝりなればとてもたすけはせぬとすでにあやうく見ゆれば惣右衛門の女房その儘大膳が袖にすがり是は憚りながらおまへの仕方が悪ふござります戀と申物がさやうにあらけなく鬼か鬼神を平ぐるやうに假初にも腕まくりして皺面作り太刀刀をふり廻しておどせばとてそれに恐れてなびくものではござりませぬもと戀路といふ者は情を第一に心いきひとつの物なればつれなきを恨とすいく度も千束の文に筆の命毛をきらしゐ返されては濡る袖をかこち互ひに心の奥山に分入てかはるなかはらじと契るこそ誠の戀なれさき様は何人にてもあれほれたといふはさりとは憎からぬ物もと女の色づくるも男にほれられたさの事出雲の前様にもお心の内によもや憎しとは眞實思し召まじけれど此大勢の人中にていかにもと御返事は被成にくい筈なれ

ば此戀は私が請取ました程におまへを始め皆々奥へござりませとさま〴〵たらせば大膳笑壺に入て扨々我はいかい粹かな然らば此戀はそちが埒明るか成程受取ましたといへばいよ〳〵たのむとみな〳〵奥にぞ入にける惣右衛門女房出雲の前の傍により判官様のござりませぬゆへさま〴〵の御難儀おいたはしうこそ存ますれ私の愛へ奉公に參りましたも夫惣右衛門殿申されますには敵師直は皆々心を合せ討取べきが太田大膳めを安穩にてをくが黄泉の障りとなるといひ置れましたゆへ大事の男のよみぢのさはりになるやつをしばらくも生をく事の無念さ何卒討て夫の心をやすめたく晝夜油斷なく附ねらひますれど今に本望をとげませぬ女ごゝろのあどなく跡さきわかず語るこそうたてけれ局いち〳〵立聞して走り寄りこりや〳〵皆々樣子を聞た扨々おのれは恐ろしいやつじや此通り殘らず大ぜん樣へ申今に思ひしらせんとかけ入を最早のがれぬ所とお菅料理庖丁にて後より切附ればうんといふて打たをれうへを下へと組あひしが難なく局を取てふせ是々才兵衛此間に御臺樣を連まして立退ともがけば才兵衛もとよりおろかしき者にてうろたへまはればけはしき中にもお菅ちからを附前垂手拭をはづし是を御臺樣に著せまして小寺吉左衛門殿親吉内殿方へお供申せと細々いひふくめ落し申あら心やすやと局をばさん〴〵に切殺し死骸をかたはらへ押よせ御臺樣の自害被成しと呼はれば大膳驚き侍あまたつれ駈出樣子を見れば御臺にてはなし局也扨は最前の女めが殺したそれ尋ねよといふひまに表の幕引おろし行方しらず落行けるこそ手柄なれ▲上の中入

かうじのもとにけんぎよたへずてうしやうの家にしふ有とはまことなるかな鹽谷判官高貞の家臣大岸宮内を始その外一味の與力四十七人の人々は終に本意のごとく主君の敵高の師直を討取つて勝関作つてかへるさや會稽の山高く何れも並ゐしに宮内くわんじと打えみて誠に武運に叶ひしか又は亡君の御守りめつよきゆへかさばかり大勢の中へわづか此人數にて亂れ入敵を討取あまつさへ味方ひとりも討れず本望を達する事ひとつは各のかい〴〵しき御はたらきゆへ殊には身不肖の某が申事御ゐはひなく彼是身に取ては何程かよろこばしく草の蔭なる亡君にも何ぼう

か嬉しくおぼしめされんとあれば何れも同音に是と申もひとへに貴公の智謀あつきゆへと互ひに勇みあふこそ理りなれ力太郎藤内兩人は薄手少々おひしが力太郎藤内殿こなたには御疵はいたみ申さずやとあれば某が疵はわづかのかすり手なればすこしも苦にはなりませぬがこなたの疵はよほどの事なれば嘸いたみませうとあれば惣右衛門立寄見て是は骨へくりました程によほど痛みませう苦しからぬ事なれば跡に下つて靜にござれたゞしどこぞの戸板をはづし乘ませうかとあれば宮內聞て何と痛むか是から御菩提所迄あゆまれまいか何れもの御せわになれば遠慮のない事じや若いものは手をおへば恥辱の様に思ふぞふなが隨分の猛將も時にのぞんでは手をおふものぞれが侍の手柄なればすこしも苦しからずとあるに成程御菩提所まで參られますとすゝめば併し今にも師直方から討手にむかひなばその疵にても見事働らかふかいかにも此體なれば思召はござるまじけれど心いつぱいは働きませんとあれば近ごろたのもしと父子の禮儀ぞこまやかなれ時に惣右衛門何といづれもにはいかゞおぼしめす宵に食事をしたゝめ申たまゝなればことの外空ふくにござるが見ればあれに酒屋がござるほどに少々たべて參るまいかとあるに各是は惣右衛門殿よくお心が附ましたさすがでござる然らば私求めて參らんと惣右衛門酒屋に行て戸をたゝき酒がすこし所望したい賣てくりやれといへば亭主寢をびれたる聲してどこからじやとめをすり〳〵表に出て人々の有様を見て大に驚き內へ逃入り戸をおしたつればいかさま我々の體を見ては恐るゝも理りさりながら少しもくるしからぬもの共なればぜひ酒を所望したしといへば內から爰は代官殿よりいひ附が嚴しうござるによつて居酒は賣る事はなりませぬと取あはねば血氣にはやる若武者共生ぬるい戸を叩きわれとはやるを宮內しづめて所の法度とあればもだしがたし價をやつて是にあふた程酒をくれ爰にてはたべぬ外へ持行たべるとおしやるとあれば惣右衛門鼻紙袋を格子のさまより投入右の通りをいへば亭主聞とゞけ四斗樽一丁表へ持出見れば金子が十兩ござります是ではおかねが過ますほどに此價程酒あげませうかたゞしさし引殘りを金子にてあげませうかとあればいや〳〵一樽にてよふござる金子もそのま

まとめをかれ我らはけふ有て翌をもしらぬ命もし後日にとふ人もあらば其價ほど酒賣たと申されよその方の名は何と申す私は酒屋久右衞門と申まする然らば御意次第に此金子を申受ましせんお果被成ましたと承りましたらば殘る金子は御追善のけうおうに致しませうと一禮して内にいれば扨々律義なる者でござると鎗の柄にて酒樽をさし荷へば惣右衞門さきにすゝみてあゆみしが立歸りて見れば向ふより大勢の人音がいたす是はまさしく師直方よりの追手と見へましたそれ備へよと何れもかたづをのんで待かくる處へ屈竟の侍數十人拔身の鎗さき揃へて出來る人々のま近くなれば先にすゝみし侍ひざまづきて見申せば何れも一よふの白小袖にて只今事にもおあいなされしやうに見受ましたが各の御けめう承りましたい事とあれば宮内聞て成ほど御推量の通り我々は主の敵討にて唯今首尾よく打とめまして歸るさでござるして御自分の御名は何と申ます某はうつの宮公綱が家來石堂治部之輔と申ものでござる扨は宇都宮殿の御家臣でござりますかわれ〳〵は鹽谷判官高貞が家來どもにて敵師直を討て判官が墓所へ參るがお構ひなく御通し被成ますかといひもはてぬに惣右衞門氣短なる男なればもし御とめ被成るゝと御ふせうながら我々お相手になり申とあらけなくいへば御主人のかたき師直殿をおうち被成て御通り被成るゝを何とて公つながおかまひ申さふやうが御ざらぬいそいでお通り被成然らば罷通ります御歸り被成たらば公つな公へもよろしく御申下されなる程かしこまりましたおさらば〳〵と互ひに一禮して立わかれそれより人々は心靜かに御寺へ參らるれば立與和尚出たまひ扨々何れも本望遂してお歸り被成たか今朝七つの時分か首尾よく敵を討取たと御家來衆兩人に師直が首をもたせ下されしよりやれ嬉しやおの〳〵にもつゝがなく御かへりあれかし扨何とがなとそれより今までは門ぎはに立盡し何かと物案じ致た所に何れものこらず無事にておめにかゝる今の嬉しさ御推量あれと衣の袖をひたしたまへば何れ共に涙を流したれ有てさやうに申てくれませふ近比有がたふ存じます時に和尚今朝も先だつて師直が首を御もたせ下されしが見申せば又首を持參被成しが是は誰人の首にてござるぞ御ふしん御もつとも師直が首二つあらふ

やうはござりませぬ敵は大勢にてござれば跡より追手の參る時首を奪はれまじき爲是はあらぬものゝにせ首にてまさかの時には首を渡し申さんと是もひとつの智謀の樣なものでござりますす最前の首が誠のもゐのふが首にてござりますれば亡君へたむけませう間御出し下されとあれば和尚感じまし〳〵て首を出して渡したまへば宮内受取やがて主君の御墓のまへに備へ合掌しらいはいして日外御尊骸にむかひ奉りて申上候ごとく皆々心を合せ御かたき師直が首を討て只今御墓へ備へ奉ります今迄の御いきどふりをさんせんられはうからざれんの佛身のゐさしめたまへ南無亡君尊靈佛果菩提と囘向し奉れば何れものこらず同音に囘かう有忠義の程こそ殊勝なれ暫らく有て宮内師直が首をおこし器物に入亡君にたむけ申せばもはや此くびは入申さねば和尚樣に渡しますよき樣に御取置下されとあれば成ほど其段は愚僧が受取ました扮粥を申附て置ました程にいづれも勝手へござつてまいれ夫はお志しかたじけなふござりますしかし一樽のもたしましたれば是で下されませふおかまひ被成ますするな夫は風流な御心入しからば後程愚僧も參りてたべませふ幸ひさる方より珍らしい肴を二三種えましたれば後ほど持さん申ませうと奥へ入たまへば何れも打くつろぎもはやかたきは心のまゝに打とり此世におもひのこす事はなしまづ〳〵酒をお墓へも備へ我々もたべんと酒樽をまん中に置さし受引受おさへた今ひとつとさま〴〵の亂れ酒扇おつ取て舞かなで皆打くつろぎ兵の交はり賴みある中の酒ゑんかな然る所に和尚は惣右衞門女房のお菅と彌次兵衞娘を連出て宮内をかたはらにまねき此兩人夕べこゝへ參られ候ゆへとめ置ましたが苦しからずばあはしませふかとあれば是は珍らしや成程あはしませうとつれ出是々珍らしき肴進上と有ばいづれもそれはようござゐふと何心なく見あげて是は惣右衞門殿お内儀彌次兵衞殿の娘御先々御息災で御一段と互ひに昔忍ぶの涙かな彌次兵衞娘は父の膝もとにもたれての嬉しなみだ彌次兵衞も涙をおさへ母はみへぬが何とした母樣はおまへの御國を御たち被成れし時分より御煩らひ被成ましたが終にお果被成ましたといひもあへぬに何母は死したかと又改まる涙ぞ哀なる惣右衞門はお菅にむかひそちは何として爰へは來た

まづ御臺樣には御けんごにて渡らせたまふか成程御そく災にござりますがそれにつき太田大膳めが妻にせふの女房になれのとさま〴〵御臺樣へ無體を申まするとあらましはなせば惣右衞門たまり兼何と宮內殿憎ひやつめではござらぬかといへば宮內はすこしも驚かずハテその分にて何事も聞せらるゝな我々が此世に長らへてその善惡を糺す身ではござらず我々は師直を討迄の命でこそござれ何事も御かまひなされなそれゆへ小寺吉左衞門をお國へ下しました諸事は吉左衞門がさばきませうとあれば何れも仰らればその通りよしない事に心をくれがいたしたとかく酒にせふと又改まる酒宴所へ佐々木主膳と宇都宮公綱御上使に參らるれば各つゝしんで請招ある兩人は床几に腰をかけまづ公綱御上使の趣きに鹽谷判官が家來共意趣は師直やしきに殘せし書置に相違はなきか時に宮內愼んで君御代萬歲のため七堂伽藍を御建立あそばさるゝ其役を判官高貞に仰附らるゝ所に高の師直殿狼籍によつて判官堪忍のむねをしづめ兼師直殿に手をおふせましたが場處あしく慮外と有て生害に及びました相果ます時分師直を討とめずして無念なと申一言骨髓に徹して忍びかたく何卒矢一筋射かけ腹切て相果んと存せし所に武運の冥加にかなひしか討たてまつり是より外天の照覽もあれ野心は少しもござりませぬと詞を淸しく申上るゝ其後主膳懷中より又書附をとり出し鹽谷判官高貞が家來の內

一大岸宮內　一竹田文右衞門　一船岡五右衞門
一有馬喜兵衞　一岡松勘右衞門　一堀尾安左衞門
一上村勘兵衞　一木山里右衞門　一堀部彌次兵衞
一原善左衞門　一水無瀨七太夫　一磯川十左衞門
一大森助十郎　一大谷半九郎　一千種三次郎
一岡山銀右衞門

十六人右の者共は佐々木主膳に御預也

一大岸力太郎　一笹岡藤內　一鎌田惣右衞門
一梶野葉右衞門　一伊賀彌兵衞　一高岡源八
一石崎與次兵衞　一下村次郎太郎　一田川半左衞門
一横野甚助　一間川孫右衞門　一富松五太夫
一岡部右衞門八　一松田定九郎　一磯間十兵衞

十五人右のもの共は宇都宮公綱へ御預也

一浦石瀨兵衞　一太田八郎助　一奥村矢太夫
一赤坂平藏　一早瀨藤兵衞　一朝村又七郎

一松島八郎左衞門　一吉岡村右衞門　一小林佐太八
一岩橋傳次郎　一大間甚六郎　一松山喜右衞門
一大野十太兵衞　一勝浦新十郎　一小野村小兵衞
十五人右の者共畠山左門へ御預也
何れも右のおもむき承りかねては死を一所にと思ひかはせしに所々の死にをせんかと各今更の涙中にも力太郎宮內にむかひ母樣おはて被成るゝ砌りもお前と一所に死ねと仰られましたに今又別れになれば一入母樣の事が思ひ出されますと涙を流せばそちはまだ母が事思ひ出すかされば敵師直を打ます迄はなか〳〵母樣の事は思ひ出す事もござりませなんだが打おふせての後は母樣の御事のみ思ひ出しますと歎けば宮內も涙をながし今こそ暫く別るれど未來はかならず一所にめぐりあふぞといさむる袖も涙なり惣右衞門はお菅に心ひかるれど人めづゝみの高ければそれといはぬばかりに和尙にゆびざしして何よりかよりお前の御回向をたのみ上ますとうはべは往生心い內は妻の事のみ賴をく互ひの心ざし思ひやるさへ涙なり彌次兵衞も我より外にたづきもしらぬひとり娘のふびんさあはれ男子にてもあらば死を一時にして未來までも召つれん物と心まで涙をおさへそれと計に和尙に賴をく何れも互ひにつきせぬ名殘是ぞ今生の別れ也未來は打つれ一所に亡君へ目見へせんとさらば〳〵のわかれぞ哀なりけり

中しのぶ草の筋書

夫なき宿はいとゞ露けき忍ぶ草しのぶかた〳〵おほき昔と鹽谷判官高貞の後室出雲のまへは宿願の事ありて二十三夜待被成此度師直を討んと御國を出し御家來の妻や子共をなぐさめのため呼よせ給へば何れもよろこび打連て來りたまふ中に小寺吉左衞門親の吉內は兩眼しひて見へざれば吉左衞門內儀一子吉三郎をつれ下人才兵衞諸とも介抱にて御屋敷へ參らるれば出雲の前出たまひ是は吉內內儀何れも早かつた皆達も淋しからふと呼にやつた心置ずゆるりと遊びやとのたまへば吉內私は年罷りより目は見へませずけつくお遊びの妨げなれば參じますまいと存じました所にぜひ參る樣にと仰下され有がたふござります出雲の前されば殿樣の敵を討んとて宮內を始め何れも國を立のかれしが今に何のたよりもないによつて何とかとあまり氣遣ひさに皆々無事にて歸りやる樣

にと思ふて二十三夜待をするが御かげにて首尾よく敵を討戻りやつたら嬉しからふとあれば吉內それに附夜前ふしぎな夢を見ました皆々敵を打取立歸ると思ひましたれは夢が覺ましたと語ればそれは嬉しい夢じやと悦び給ひ先々めでたふ盃せふ是は吉左衞門の子が盃さすと皆々打より御酒宴の折ふし姥衆表より走り入て只今關東から吉ざへもん殿歸られましたと口々にいへば御臺始みな〳〵よろこびたまふ所へ吉左衞門罷出れば扨々めづらしや皆々無事で何と敵を討やつたか樣子が早ふ聞たいといさみたまへばまづはお前にも御機嫌よく御わたり遊ばされめでたふござります成程首尾よくかたきをうちおほせました宮內申されますには誰有て此事をおまへえ御しらせ申者がない私に歸る樣にと申されましたによりあら曲もなやお國をいづるより何れもと一所と存じ極めしもの何程御申有ても歸る事は致さぬと申きりましたれどさま〴〵ことはりをつくし行かへるもおなじ御奉公と申されました故ぜひなく立歸りましたしてその敵を討た樣子くはしく噺して聞してたもと御前近くめさるれば成ほどおはなし申上ませう皆々鎌く

らへ下りましてより折々御ばだい所へ打寄ましてさまざ〳〵と相談仕りとかく夜討にせんと何れも相圖を定め心中をかためすでに日限も近づけば四五日前より皆々假宅を明ましてそれよりはかしこの軒の下こゝの木陰にイみその夜になれば八つの時刻に忍び入筈を皆々心せき九つに師直が館によせかけ兎角一時もはやく討取れといふやいな惣右衞門高塀のりこし內に入とその儘面々かけや才槌にて門を叩きあけわれも〳〵と亂れ入篝をたけと申たれば宮內篝は火の用心心もとなしとめん〳〵懷中せし蠟燭をともしてかしこ爰に立ましたればそのまゝ日中のごとく敵の方には寢入端の最中なれば途方を失ひうろたへまわるを十文字の鎗さき揃へて爰に突とめかしこになぎふせ追つまくつゝ切立ましたれば宮內制してかならず女童を切るな自然出家などのとまり合せて居まじき物にてもなしそれと見たらば助よとそれよりこゝかしこをさがしますれど師直が見へませぬにより皆々一所に集りもはや武運も是迄と互ひにさしちがへんとせし所を宮內いさめてあれに一構へ奧らしき所あり爰を捜せといふやいな我も〳〵とふみ込捜せど

爰にも見へず正しく師直が閨と見へて綾錦の夜著蒲團の上を撫て見て今迄臥したと見へて暖かなれば外へは遁ず館の内を捜せとうら口より雜物部屋のあたりにまわれば片隅に人音するに爰こそ曲者なれと鎗の石突にて突たつればたまり兼て内より柴薪をなげかくるを皆々寄て引出し首討とりしか共誰が一人師直を見しりたるものなければあやぶむ所に宮内なるほど是が師直也下に白無垢上に綾綺の衣服をまとひ眉間に疵有ば疑ふ事なしとあれば皆々よろこび勝どきあげて火の用心萬事に氣を附心靜かに立のきます道にて何方から共しれず粥を下されしゆへ我々もたべまして其夜の内に御菩提所まで退まして御墓に首を備へみな〳〵回向仕りましたとあら增御はなし申上れば御臺吉内その外の女房達いさみあふこそ道理なり是は宮内より上まするようにと申附ましたとさしあぐれば出実の前ひらき見て是勘定書なればおれが見る物にてはないとのたまへばその儀也宮内わけて申附ました是はおかね配分の勘定書でござりますその節も大膳申ますには知行高に應じて配分せふと申ましたれど宮内申されますは知行がさの者は衣類調度を代なしても五年一年もくらしかねまじ小身の衆には貯へもかろければすへ〴〵は心もとなしとかく何れも等分に配分召れと有に皆々配分仕りました一萬兩餘の金子を何としたぞと御ふしんもあらんかと存かやうに認め御めにかけられますと有ば宮内ほど念の入た人はない是までには及ばぬ事して又宮内その外の衆はいつ頃歸らるゝ事ぞされば其儀はきつふ不定にござりますればいつ歸りませふもしれませぬそれは何共心細い事をいやる國を立るゝ時には敵を討申さば其儘歸りませうといやつたによつてはふか翌かと待しに頼みすくなき浮世にはなりはてたと歎きたまへばむねとの女房たち子供衆是は何とせう悲しや是に附ても吉左衛門樣のお內儀樣や吉三郎殿は御息災でおあひなされさぞおうれしからふうらやましやと皆々涙の雨なれや女心の跡先なく吉左衛門女房は是吉三郎我身はとゝ樣にあやかつて果報な人じや吉内樣およろこび被成ませとよそのなげきに身のよろこび是もなみだのたねなれや吉内三寶を取よせ脇差抜て前に置押肌ぬいでヤイ吉左衛門おれは腹を切る介錯をせよとあれば皆々あわてゝおしとむ

る出雲のまへおどろき我身はなせに腹を切やる殿様の追ばらを致しますハテ譯もない我身は隠居しやつていまだ隠居料も下されぬに追ばらきりやる所ではあるまいとのたまへば吉左衛門こなたは氣が違ひましたか何で腹をお切被成るゝおれは腹は切たふなけれどおのれへつら當に切皆々御恩をおもひて死を一時にするにおのれひとりのめ〳〵と立かへりて今此衆中にめでたいのうらやましいのといはれて目こそ見へね何と顔が合さるゝ物ぞ國を立鎌倉へ下りをる時には隨分御息災でござりませもはや今生ではおめにかゝりますまいとぬかしたをわすれたか腰ぬけの畜生めのと恥しめらるれば吉左衛門も返答なくもくねんと座して口おしがれば女房心もとなく夫の脇差の柄をとらゆれば吉左衛門腹をたておのれ男のこしの物に手をかけて何とするいやどふすると色をむすんでしかればおはらのたつまゝにもし短氣なお心もおころふかと存とめましたとあれば短氣な心があればおめ〳〵と國へは戻らぬおれは命がおしいおのれ最前のやうに御息災でおかへり被成て嬉しや吉三郎も嬉しいか吉内様にもおよろこび被成ませと人々の歎きもかへり見ずぬかすその時には御臺様をはじめ皆の衆へおれは顔に火がたかれたいかに女なればとておのれも侍の娘ではないか暇はやらねどその悴はおのれにくれた成ほどおはらのたつは御尤何事も私のわるふござります隨分吉内様にも孝行に致しませう程に御かんにん被成て下さりませ何じや吉内殿へ孝行にせう今日ではいはねど心の内では縁の切たれど今までの通り夫婦じやといろを直せば吉内あいつがいとまをやらいでもおれがそはせぬとかく命があるゆへに口をしき事を聞と又腹きらんとするを吉左衛門おしとめ成程さやうにおぼしめさるゝも理りさりながら今三時お待下され夜が明ましたら御いちぶんの立やうに致しませう何と夜が明たら一ぶんのたつ様にせうどれこゝへこいと引よせむなづくしをしつかととらへ扨々おのれは卑怯ものじやおふおれをたらして此ばをのがれんとなヤイものしらずめおのれが幼少の時若殿のおそばにおつたれば大殿のごらんじて我成人したらば武士のいきぢは親吉内にあやかれとて忝なくもてづから御ひざの上にを

かれしがさばかりの大御恩を忘れて未練のふるまひ四相を悟る宮内なればとても役に立まじき者と見て追戻せしを其恥もかへり見ぬ腰ぬけめと子をおもふ親の誠有武士の心ぞや有がたけれ吉左衛門懐より一通取出し成程お腹立は御尤しかし私が心底は此一通に認め置ましたれば今すこしおまち被成夜明なばごらんなさるべしと手に渡せば何と此中に様子が有となれば然らば夜が明てから披見んとすこし色をぞ直さるゝその時又吉左衛門一通取出し女房に渡し是吉三郎十五に成りし時そちひらきて見せよ今ではないかれが十五になりし時の事と言渡し扨御臺様へ申上ます夜を日に繼で参りましたゆへ殊の外草臥ましてござります間少しのうち休んで参りませうといへばいかにもやすみやじやが必ならず短氣な心をもち腹ども切やんな何が扨侍の冥利にかけて只今はさやうな心はござりませぬすこしもお氣遣ひ遊ばされますなと勝手に入ば吉内最前の文取出し女房にこれをよんできかせとあれば内儀是は夜が明て御らんの筈なれば今すこし御待被成ませいといへばせひよめとあるに詮方なくひらきて見ればしら紙にて何も書てはない扨

扨にくきやつでござります私をだましました腹のたつ事かな是おかた吉三郎にのこし置た一通をひらいて見やわけもない事を仰られます是は此子が十五になる時ひらいて見よとくれ〴〵申されましたもの何の十五定めてろくな事は書ては置をるまい早々ひらけさもないとおのれ共に生てはをかぬと氣色かはれば御臺文を受取ひらき見たまひ是には何か書てあるおれがよむほどによふ聞ていやかしこまりました一筆申のこし候此たび亡君の御敵を討ん爲一味の輩と鎌倉に下りしかど又京に一けつしがたき事有により立歸りしが又罷下りて死をひとつにす其方出家になしをく事親の慈悲なり成人ののち出家相續の進退はその方の思慮にあるべきものなりおつて申のこし候我ら仕古せし帶一筋、刀一腰、鎗一筋、鎧一領のこしをく成人の後幸ひもあらばとゞめをかるべきものなり小寺吉三郎殿同名吉ざへもん何と吉内是はがてんのいかぬ書やうではないか師直が一族共後々子供に仇をのこすとも出家は助けをくで有ふずれば親の慈悲なり又出家に此鎗刀などはいるまじきが成人の後心おこし侍にもならばとゞめをけとの事そふな何と

深い心ざしではないか成ほどさやうでござります其心底ともぞんじませいでよしないうらみを申まして悔しうござりますと歎く所へ吉左衛門旅装束にて裏門より出て表にひざまづき今關東へまかり下ります是よりおいとまごひ申あげますといへば御臺御らんじ然らば暇乞にいはふて盃をせうとさしたまへば是は有がたう存ますと頂戴すれば吉内もはや下るかその心ざし共しらいでさま〴〵の不足をいふてくやしいさらばじやといひもあへず脇ざしはらに突立れば是吉内殿何が不足で腹をおきり被成るゝ何とふそくが有て腹を切ふぞそちが今の心でい見てもはや此世に思ひのこす事がないにより殿樣のおそばへまいるとあれば然らば末期に盃をさしませうといかにもいただかふとひとつ受てのむやいなや空しくなれば吉左衛門なみだながら東のかたへとわかれ行あとにとゞまる人々の心の内こそあはれなり▲中の中入

明わたる春のけしきのふに變るとは見へねど何となく人の心も浮たつこそおかしけれうつの宮公綱かたに預られし人々の内力太郎、藤内、藥右衛門はけふ正月の十五日なれば鏡に向ひて髪ゆはせ翠しらぬ身にも春の壽きしてのち藥右衛門何と惣右衛門殿はまだ寢てか藤内あの男は骨牌好にてゆふべから其まゝ打あかしてゐられますとゝり〴〵噂してゐる所へ公綱の家來運之進銚子盃持出ておかしき挨拶ひとつふたつの盃半に公綱妹の白玉姫の部屋より腰元どもあまた羽根とはご板を持て我さきにとさはがしく走り出れば跡より白玉姫出たまひ我達はあの方樣の御用はきかふとはせいで何をやかましくせり合ぞとしかりたまへば腰元のとこよわたくしがむま屋へ用がありて參りますればあの衆も同じ樣にいかふといやりますと互ひにせりあふ中へ力太郎、藤内、藥右衛門立出てお妹御樣此中はおめにかゝりませぬと互ひに挨拶過て藤内とこよ殿こなたは姫ごぜの大膽なむまやへは何しにござるされば此はねがまひませぬにより馬に蹴さしにまいりますとあれば羽ねの舞ふまじないありとさま〴〵おかしき事いふに力太郎はねはこふすればやう舞ますとゝこよがはねをなをしてやりたまへばとこよはかねてより力太郎に思ひそめ羽の雉子のはねより舞ますと嬉しがるを藤内此のはねは我ら貰ひ升とむりに取ていざお妹御樣今日の

お盃申ませうと皆々打つれ座敷に入盃も數かさなりてとり〴〵の噂に白玉姫何と惣右衛門樣が見へませぬがどれにござります藤内、葉右衛門、惣右衛門は見にゐますがそれに附おまへをちと賴み上ましたい事がござります力太郎殿と惣右衛門は日外から中が悪しふなりまして互ひに物をいはれませぬ私共何かと申ますれど直られませいで氣の毒に存ますどふぞ中なをられますよふにお前を賴みあげますとあれば扨は左樣でござりますか此中も姫共がさやうに申まし誰有てよも左樣の事はあるまいと存ましたがそれは何ゆへお中があしふなりましてござります藤内もとが戀てござります力太郎殿に惣右衛門がきつう惚てゐられますゆへとやかくと申さゝますれどどふおもふてか力太郎殿がてんいたされませぬからをこりました事でござります力太郎恥かしそふにハテそのまま捨をかれとあるに藤内葉右衛門さやうではござらぬと惣右衛門を呼出せば骨牌に打入てふせう〴〵立いでお妹御樣おいでで被成ましたときよろ〳〵とした顔にて挨拶すれば白玉姫けふのお盃いたしませふ是へござりませとあればいや是がようござりますひらに是へと力太郎のそばへ呼よせんとしたまへどわざとあらぬ方へ直るをしら玉ひめせひあれへとあるにふせう〴〵力太郎の傍に直りおかしげなる顔してゐればしら玉姫おまへは力太郎樣と御挨拶が悪ふござんすげな私が取持ませふ程に中なをつて下さんせ誰が左樣に申ます藤内、葉右衛門我々が申たハテわけもない成程物も申ます中もよう御ざりますノフ力太郎殿左樣ではござらぬかとふせう顔にていへば力太郎もいかにもさふでござると互ひにすまぬ挨拶なれば白玉姫氣の毒がりいろ〳〵挨拶したまへば惣右衛門けふはいまだ公つな樣へ御禮に參りませぬのちほど又おめにかゝりませふと立を皆々とめたまへば追附參りませうと懷より錢三百文落しもしらずむりに勝手に入ば力太郎も不興げに立ば白玉ひめその外の人々も皆々奧へ入たまふ跡にて權之進落てありし錢を見つけ是は惜ふない物が落てある事かなしかし主のしるもしらずたゞその儘に置ふかいや捨てもをかれずと懷中してこそ入にけるそれとはしらで惣右衛門うろ〳〵と彼錢をたづぬる所へとこよ何心なく銚子を持出るに惣右衛門こなたは先にからこゝにかあ

あ爰にをりましたそれなら出して下されと錢の事をいへばもとよりとこよはしらねば何の事でござんすハテ意地の悪い今まんがよければ張最中也ひらに下されといへば猶がてんゆかねばまづ何の事でござんすハテこなたの懐の中にあるものを下されおれがふところの中にある物をこなさんしつてかへしつてゐるかとはつらい早ふ出して下されといへば然らば力太郎樣に進ぜてと懐より文を出せばこなたのいふは此事かとふしんそふにしてゐればお前はいかい嘘言じやわしがせんどから頼んだ事を力太郎樣へいふたといはんすがおまへと力太郎樣とは中が悪いげなものこなたはそれをしつてゐるか先頃こゝにて承りましたもはやこなたの事もおれは取もつ事もならぬおまへは力太郎樣が憎うござんすか可愛さが餘つての事でござるあれが事思ひ出せばつかへが上りて物がくはれませぬによりわすりよと思ひて骨牌を打てば錢をまけます此中の間に二貫五百まけましたそれはおいとしいお心入でござんすそんなら此文を力太郎樣へ進ぜて下さんせそれではおまへの戀も叶ひます此文の内に樣子が委しう書てござんすと二人談合

する所へ力太郎珠數を持出て所作をくりゐれば二人は手持あしく次の間に立て惣右衛門かの文を持て力太郎が方をのぞいて見ては跡へ戻ごみするに床世氣の毒がりて突やれば立かへり唐紙障子に立そひて互ひにもみ合しが床世難なくつきやればせびなく力太郎が傍により何とも詞なく何程所作をおくり被成るるぞいつもは八百遍づゝくりますれどけふは母の祥月ゆへ千遍くりますお袋樣の戒名は何と申ます香月と申ますと何共埒の明ぬ所へ惣右衛門文をわすれ置しゆへ床世ふたりが中へ投やれば力太郎見て是は何でござるそれは床世が文でござるといへばこなたは私へ意見も被成て下されいでよしない事をお取持被成るゝ私しもあれが心ざしあるとは遠からしつてゐますれどとても永らへぬ身に仇なる情も結何人の爲ならずとふつつりと思ひ切てゐます叶はぬ事にとやかく物思はすもふびんにござればいそいで戻して下されとあれば女の中事にはふびんをくはへられて男の中事は何共思し召ぬそれはお情ないと恨みかこてば成程こなたの事も忘れはいたさねど折を見合せてかさねてお返事申ませう惣右衛門も詮方なく三寶

の山椒をつみ〳〵とても御返事なさるゝならば人に物思はせずとはやく被成たがよいせつ〳〵參りてやかましう申ではござりませず何のかのといはさつしやるが外聞ではござりますまいどうだ〳〵と口たゝき〳〵山椒くふてつい山椒にむせてぎち〳〵すれば床世驚きそばによれば力太郎もあはてゝ傍により何と被成たといへば只ひい〳〵と術ながれば床世わたくしは醫者殿よんで參らふと表へ出れば力太郎是惣右衛門殿こなたはもはや死なしやるかそんならとふから心に隨がふて兄弟の契約せうもの今さらくやしい是末來迄も兄弟分でござるぞや是とあれば惣右衛門かすかなる聲にて誓言で承りたいといふ何が扨侍冥利兄弟分でござるといへばそれを聞ふばかりにわざと山椒にむせましたとけもない顔なれば力太郎よろこび銚子盃取出し互ひにかはるなかはらじとかためのの盃事をはれば力太郎いまだ公綱殿へ御禮に參らねば連立て參りませふ程に髮のつとがそこねました直して下さんせとあればいかにもと後より撫附る雨手を取てしめよせ是兄樣短い浮世じや程にたんとかはゆがつて下さんせと涙ぐめば惣右衛門も嬉し涙互ひの袖にかゝる所へ權之進立出て御膳がよふござりますといへば何れも出て並居る所へ姬共膳を持出るに公綱も出たまへば何れも一禮して永々の御厄介に罷りなり御禮の申上やうもござりませぬ所に是は又結構成御料理仰附られまして忝なふござりますされば何れもへ何がな御馳走が申たふござれどけつく御遠慮も如何と存わざと御かまひ申ませぬけふは祝ふて鶴の料理を申附ましたそれはお心ざし忝ふござりますといたゞきやう〳〵膳もとれる折から佐々木主膳御上使にて御入あれば皆々アッと提る主膳床几に直りて御書附を取出し鹽谷判官高貞が家來共來る四日に切腹仰附らるゝ物也檢使は小畑六郎左衛門介錯は貢新左衛門と仰渡さるれば皆々アッと御受ある中に惣右衛門すゝみ出て切腹の場所は皆々一所に仰附られましてござりますか其儀もおたづね申上たれば預り主の屋敷〳〵で致す樣にとの仰附られたそれさいせんの持てこいよとあればアッとこたへて家來の者三寶に土器のせて持出るに主膳のたまふは是力太郎親宮内より今生の暇乞に盃がかはしたいとの願ひゆへその段はくるしかるまじきといふて是迄持して

さた程にいたゞかれよとのたまへば夫は忝いお志然らば御意にまかせんと是宮内殿お盃を頂戴致しますあの方でおめにかゝりませうと一つ受さがりとのんで下に置ば何れも殘らずいたゞきて下にをく所へ床世つか〳〵と來り此お盃は私もいたゞきませうと懷中してそのまゝ公綱のさしぞへぬいて自害せんとの有さま公つな飛しさつておのれは氣が違ひしか大事の所へ出て尾籠の振舞しされと怒りたまへばいかにも御ふしん御もつとも是力太郎樣誠に私は秋月源次左衞門が娘の辰姫でござりますお前と私とは夫婦の言號がござりましたれど親源次右衞門武士の道をわすれし者と夫婦にはせぬと緣を切ましたれど又志有て私をさしこしましたいさいの事は最前惣右衞門樣へ進せました文にござります程に御覽下されとあれば惣右衞門懷より文取出し主膳へ御覽に乞て開き見る狀に一筆啓上せしめ候其御地宮内殿を始め何れも御堅固のむね珍重に存奉り候然れば宮内殿父子共に亡君の御敵は討ずして明暮酒宴遊興に長じ武士の道を御忘れ候により某緣の切て娘を取返し候所に此度いさぎよく仇を御くだき候ゆへ今更先非を悔申事に候かくとは存せず世になき人ゆへ緣を切候などゝ世上の人口も恥かしく御ざ候ゆへ娘をそのもとへ進じ候間たゞ今までの通り御緣の御結び下され候はゞ忝なく存奉るべく候もしお上より御とがめをもふして死罪にも御なり候はゞたつ姫事黃泉迄も御つれ下され候はゞ本望たるべく候以上大岸宮内殿御連中參る秋月源次右衞門とよみおはりさりとは源次右衞門殿は誠ある侍かなと皆々感ずる所に公綱是たつ姫殿いかにもいひぶんは聞へたれどかく内緣ある人を何れものそばに置くかと主膳殿手前に某一分が立ぬいかにしても言わけの場が惡い一時も爰には置れぬ早々お歸りやれとあればたつ姫名殘りを思ふて立かねればこなたは公綱が一ぶんのすたる事を思はしやれぬかいそいでお歸りあれさり乍夜ふけて女の道の程も氣遣ひなれば某が門前に旅籠屋があればそれにて今宵はあかし翌は早々おかへりめされとあればたつひめ名殘りのおしげに淚をながし立出んとするを主膳走り出て手を引座敷に直し力太郎に引合せ扨は公綱殿聞へませぬ此主膳が他言でも致そふかと思し召か存せぬ共苦しふござらぬとあればそれは近比忝ふ

存じますとよろこびたまへば力太郎たつ娘の手を取て二世迄も夫婦でござると互ひに盃を取かはせば惣右衛門是は力太郎殿よりつかはされし暇の状今引やぶり捨ますとずん／＼に引さけばたつひぬ手を合せてのよろこび妹背の道こそわりなけれかくて主膳公綱その外の人々にも暇乞して歸りたまへば皆々奥にぞ入たまふ

下わすれ草の筋書

何思ひ草忍ぶ草皆忘れ草夢なれや此度徒黨の人々は半のあゆみ程もなく其日になれば皆白小袖に淺黄袴死手の門出の死装束花やかにも又哀也時に主膳公綱詞を揃へて何れも所々の死をなげかるゝゆへ達て御訴訟申上我々兩人の預りの衆中は一所の切腹仰附らるゝとあれば何れも有難ふ存ますと一禮ある所へ侍一人あはたゞしく走りきたり品田左衛門樣お預の衆中は只今切腹が相濟ましてござるとあるに何れもおくれましたと覺期する所へ小寺吉左衛門わらづと一つ提てかけ來り御檢使の前にひざまづき扨々よき所へ駈附ました私もあの衆と一所に切腹仰附られ下されといへば公綱ごらんじ宮内は何と思はるゝぞとあれば宮内是吉左衛門お手前は一きの場より駈落めされたではないか定めてお國へ參られたで有ふと思ふたに此場の切腹思ひもよらぬ事とあるにいかにも駈落いたしお國へ參つたれどつく／＼思ひますれば各と一所に死なねば侍の一ぶんが立ませぬゆへ歸りましたこなたへおめにかける物があると藁づとより首一つ取出し是は太田大膳めが首でござるこなたへ土産に持て參つた是にめでゝ一所に切腹さして下され宮内見て何のそれ程の事がお手前の手柄にならふ切腹はかなはぬとあれば吉左衛門詮かたなく是々何れもたのみます宮内殿へよきやうにいふて切ぷくさして下されといへばみな／＼詞をそろへて何ほど御申有ても切腹は叶ひませぬといひ放せば吉左衛門はらをたてヤアラ聞へませぬ宮内殿そのはづではこなたござるまいがよい／＼爰で死ないでも死る場が何ぼうもあるとたつ處へ立學和尚聲高く是々尊氏公よりの御敎書があるまつた／＼と息を切て來りたまへば皆々ハッとしづまるに公綱御敎書を開きよみたまふに何々四十七人の者共罪科のがるべからずといへ共忠臣の擧これあるにより國々に遺しをく子供は

長く御赦免あるもの也かつ又高貞の所領は相違なく弟の鹽谷六郎に下しをかるゝ間子供は六郎につかゆべきもの也よつて執立件のごとしとあれば何れもの悦び何にたとへんかたぞなき吉左衛門立出てさあ〳〵此よろこびに一所に切腹さして下されと有に皆々いさめて生はかたし死は易しひらにとゞまりたまへとあれば何と長らへても人が笑ひはいたすまいかな長らへるも忠孝なれば誰が嘲りませふせひにとあるに然らばともかくもと納得すれば何れもよろこび皆一統に聲かけて切腹ある血汐の烟り空しくきゆれど名は末代にのこりて武士の鏡とはなりぬ千穐萬歳武運長久菊屋板

維時嘉永五壬子孟春

西澤綺語堂李叟述

西澤文庫脚色餘錄三編下の巻大尾

西澤文庫讃佛乗初編上の卷

目次

西澤文庫讃佛乘初編上の巻

西澤綺語堂李叟著

武家百人一首

雲井なる人をはるかに思ふには　經基王
　わか心さへそらにこそなれ
君はよし行末遠しとまる身の　源滿仲朝臣
　まつ程いかゝあらんとすらん
斯なんとあまの漁火ほのめかせ　源賴光朝臣
　磯邊の波のおりもよからは
かた〳〵のおやの親とち祝ふめり　藤原保昌朝臣
　このこの千世を思ひこそやれ
君ひかすなりなましかはあやめ草　平致經
　いかなるねをかけふはかけまし
夜もすからたゝく水鷄は天の戸を　源賴家朝臣
　あけて後こそおとせさりけれ
都には花の名殘をとめ置て　源賴義朝臣
　けふそ□□□につとふ白雪
吹風を名こその關とおもへとも　源義家朝臣
　みちもせにちる山櫻かな
夏の日になるまてきへぬ冬氷　左衛門尉源賴實
　春たつ風やよきて吹らん
しつの女か賤はた帶のぬきにうつ　清原武則
　うのけの布や程のせまさよ
思ふことならすや春をすくさまし　兵庫頭源仲正
　浮世へたつる霞なりとは
ゆく人をまねくは野邊の花薄　平忠盛朝臣
　こよひもこゝに旅寢せよとや
人しれぬ大内山の山もりは　從三位賴政
　木かくれてのみ月を見るかな
身のうさも花見し程は忘られき　伊豆守仲綱
　春の別れを歎くのみかは
今迄もあれはあるかの世の中に　中納言敎盛
　夢のうちにも夢をみるかは
難波かたあしのまろやの旅寢には　前參議經盛
　時雨を軒の雫にそしる
あれにける宿とて月はかはらねと　平忠盛朝臣

むかしのかけは猶そ床しき

住なれしふるき都の戀しさは　正三位重衡
神も昔に思ひしるらん

なか／＼にたのめさりせは小夜衣　前右近中將資盛
かへすしるしはみえもしなまし

なかれてはなたにもとまれ行水の　右馬頭行盛
あはれはかなき身に消ぬとも

散そうき思へは風もつらからす　平經正朝臣
花をわきても吹かはこそあらめ

まとろめは夢にも見へぬ現にも　右大將賴朝
わするゝ程のつかのまもなし

伊勢島や鹽くむ袖の月かけを　伊豫守源義經
波にのこしてかてるあま人

秋風に草葉の露をはらはせて　平景季
きみかこゆれは關守もなし

武士の取つたへたる梓弓　平景高
ひきては人のかへす物かは

夕暮は衣手涼したかまとの　鎌倉右大臣
をのへの宮の秋の初風

世中のあさはあとなくなりにけり　平泰時朝臣
ゝ心のまゝのよもきのみして

たけくまの松のみとりも埋れて　河內守源光行
雪をみきとや人にかたらん

いたつらに行てはかへる年月の　式部丞源親行
つもるうき身に物そかなしき

あたにのみ思ひし人の命もて　蓮生法師
花をいくたひおしみきぬらん

思あれは賴めぬ夜半も寢られぬを　平重時朝臣
まつとや人のよそにみるらん

つらかりし春の別れは忘られて　平政村朝臣
あはれとそきく初雁のこへ

梅か香のたか里わかすにほふ夜は　行念法師
ぬしさたまらぬ春風そ吹

定なき時雨の夜のいかにして　眞昭法師
冬のはしめをそらにしるらん

あられふる雲のかよひし風さへも　源義氏朝臣
乙女のかさし玉そ亂るゝ

寂しさのいつくも同しことたりに　武藏守平長時
思ひなされぬ秋の夕くれ

さゝの葉のさや／＼霜夜の山風に　佐渡守藤原基綱

霧さへこほる有明の月

竹葉のみ露をかるへき秋そとは　下野守藤原景綱
わか袖しらて思ひけるかな

よしさらは我とはさらしあま小船　信生法師
みちひく鹽の波にまかせて

人しれすいつしか落葉なみた川　千葉介氏胤
あふせにかへて名を流すとも

山の端の見へぬはかりは和田海の　素暹法師
波にも月はかたふきにけり

いにしへの野中の清水汲ねとも　常陸介惟宗忠秀
思ひ出てゝそ袖ぬらしける

行末の空はひとつに霞めとも　藤原頼景
山もとしるくたつ煙かな

つれなくて何かたき世に殘るらん　出羽守藤原宗朝
おもひもいてぬ有明の月

ふしの根を山より上にかへりみて　信濃守藤原行朝
いまこへかゝるあしからの關

沖つ風吹こす礒の松かへに　藤原宗泰
あまりてかゝる田子の浦ふし

都思ふ旅寢のゆめの關守は　藤原基信

よひ〳〵毎のあらしなりけり

ちる花の雪と積らはたつねこし　源頼隆
しをりをさへやまた廻らまし

わすれ草心なるへき種たにも　平宗宣朝臣
我身になとかまかせさるらむ

大井川氷も秋はいろみへて　平惟貞朝臣
月に流るゝ水のしらなみ

夢ならてまたは誠もなきものを　左近將監平義政
たか名つけしか現成らん

吹はらふ嵐にはれて山の端の　平貞盛朝臣
松より高く出る月かけ

世を捨る數にさへこそもれにけれ　藤原頼氏
うき身の末を猶頼むとて

みねにたつ雲もわかれて吉野川　伯耆守源頼貞
あらしにまさる花のしら波

みし友はあるかすくなき同し世に　藤原範秀
老の命のなにのこるらん

古郷にこよひ計の命とも　寂阿法師
しらてや人のわれを待らん

我袖の涙にやとるかけとたに　源義貞朝臣

ゑらて雲井の月やすむらん
おしとたにいはぬいろとて山吹の　等持院贈左大臣
花ちる里の春ぞ暮れ行く
いつ迚もまたすはあらねと同くは　従三位貞義
山郭公月になかなん
妻こふる涙やおちてさを鹿の　寶匚院贈左大臣
あさたつ小野の露とおくらん
鶴か岡木高き松を吹風の　従三位基氏
雲井にひゝくよろつ代のこゑ
いにしへに變らぬ神の誓ひならは　右兵衛源直冬
人の國までおさめさためや
春といへは昔たにこそかすみしか　上野介源高國
老のたもとに宿る月かけ
添す共こはるとせめてきかすなよ　伊豆守藤原重純
待もたのみの夕くれの空
音たにも秋にはかはる時雨かな　源清氏朝臣
この葉ふりそふ冬やきぬらん
初袖はまたなかゝらぬ空なれは　播磨守高階師冬
あくるやおしき星合の雲
梓弓もとの姿はひきかへぬ　陸奥守源信氏

いるへき山のかくれかもかな
定めなき世を憂とりのみかくれて　道誉法師
ゑた安からぬ思ひなりけり
徒らにまつは苦しきいつはりを　源氏頼
かねてよりしる夕暮もかな
露霜のおかへのまくす恨みわひ　左京太夫源氏經
かれ行秋に鶉なくなる
都にはまたしき程の時鳥　高階重成
ふかき山路を尋ねてそきく
埋もれぬ煙を宿のゑるへにて　元了法師
雪に鹽汲里のあま人
數ならね身は中々にうきことを　源直頼
ならひになして歎かすもかな
たのむかなわかみなもとの石清水　鹿匚院太政大臣
なかれの末を神にまかせて
假ねするゐなのさゝ原うきふしも　養德院太政大臣
ゑらてや今宵月に明さん
ゑづかなる心のうちや松かけの　源頼之朝臣
水よりも猶すゝしかるらん
あはさりし辛さをかこつことの葉に　陸奥守源氏清

いまたにぬるゝにゐ枕哉

春は猶咲ちる花のなかに落る　源義將朝臣
よしのゝ瀧もなみやそふらん

戀しなん身のためつらき命とも　陸奥守源棟義
さてなとなる地きるにそしる

秋きぬと萩の葉ならす風の音に　源　貞　世
こゝろおかるゝ露のうへかな

日數のみふるの早田の五月雨に　多々良義弘朝臣
ほさぬ袖にもとるさなへかな

心なき尾花か袖も露そおく　源重春朝臣
秋はいかなるゆふへなるらん

すむは空にこるはつちと別にし　勝定院贈太政大臣
そのいにしへも神そ玄るらん

霜結ふ野原の淺茅うらかれて　權大納言義嗣
むしのねよはる秋風そふく

ほとゝきすまつ宵すきて難面は　源賴元朝臣
あくる雲井に一聲もかな

聞なれし木の葉の音は夫なから　源高秀朝臣
時雨にかはる神無月哉

かこたしな春やむかしの夜半の月　源　詮　信
我身ひとつに霞むかけかは

夕立の雲の衣はかさねても　普廣院左大臣
そらに涼しき風の音かな

おもひたつ雲のよそ目の僞りは　源滿之朝臣
ある夜嬉しき山櫻哉

秋ふかきをのゝ淺茅の露なから　源　持　信
末葉にあまるむしの聲哉

みなの川峯よりおつる紅葉々も　正三位義重
つもりて波をまたやそむらん

ひと目みし形ちのをのにかる草の　源範政朝臣
つかのまもなと忘れさるらん

なほさりに眺むへしやは忘られて　堯明法師
もの思ふころの夕暮の空

さらてたにほさぬ袖しのうら千鳥　多々良持世朝臣
いかにせよとてねさめとふらん

鳥の音のつらき計をうつゝにて　平　貞　國
ゆめにそこゆるあふさかの關

けふはまつ思ふはかりの色みせて　慈照院太政大臣
心の奥をいひはつくさし

友もなき夜半の枕のたち花や　大智院贈太政大臣

むかしをかたるにほひなるらん

霞とも花ともいはしはつせ山　常徳院贈太政大臣

ひはらにくもる春の夜の月

日に添て袖のなみたをせきあへす　惠林院贈太政大臣

身を忘る雨の空の亂に

月見むと契りやおきし佐（本ノマヽ）男鹿の　法住院贈太政大臣

かへるれみのつまこひのこえ

醒々齋の報條

文化九申年初春江戸兩國柳橋大のし富八が報條山東京傳醒々齋誌

新年の御吉慶目出度申納候先以各々樣益御機嫌克御越年被遊恐悦至極奉存候然者私店の儀年來御贔負御取立の御蔭を以日増に繁昌仕難有仕合奉存候猶又此度普請あらたに仕かへ少々間廣に仕御料理向別て相改いたつて下直に差あげます萬事隨分働以て安く上るが商ひ上手どつこい其句も醬油のつけやき思ふ壺燒皿に盛たる笋羹康賴安賣ならばござんなれ馴々鴨の燒鳥め胡蘿蔔の葛かけて太煮の根いもとおことばに我身もかへりみず雜水糸目の膳の春霞にひき物の鶯餠手鹽に匂ふ梅が香は下戸樣方へもつてこい猪口に若菜の久しものも棰の小口か宿雪味噌葱の口合は獨活の短册とりあへず柳鰣に櫻鯛白高麗にこき交ておなかぞ春の下直あり合細魚の更衣にはちよと花柚の袖香爐全糸玉子に風薫るゆかりの色の初茄子冷素麵の五月雨にあらひ鱸の盛合せはまた音の高き時鳥啼や五百の早松と出かけ早乙女笠の笋は苗代水に青鷺と共に裳裾を冷し汁別て近所は涼みの場所樓船家根船風そよぐ奈良の小川の夕鰺に味噌吸ぞ夏の仕出しもあり秋は猶夕鮪こそたゞならぬ葱のうはおき鱗の下露たつぷりと天の河原の川茸に願ひの糸瓜結び鱠殘御口とりには菓子小袖今宵を契る星鮃は歳に一夜の鹽加減まだ初鮭の切机に初あらしの鱗をちらせば初茸の鹽燒に置霜のけしきをみせ冬籠の御座敷には芹に眞鴨のいりとり鍋籠松茸の用意して空にしられぬ時雨を催し或は小春のでり鰹におろし山葵の凩は木の葉鰈の芝煮と捻り山かけ豆腐の淡路島山椒醬油の衝やきには幾夜ねざけのすまし吸もの千住の鯉に佃の白魚四つ手の網の魚までも四季折々の獻立に巾著湯葉の底を叩てめくる元手も松の魚桃の水鉢雪の鰒軒の鮟鱇最中の月菊の酢漬や俄のおこのみ何で

もお間に鮎の鮓押合へし合御出を祈る心は丸煮の慈姑かうべに宿る神おろし茶飯にござる法印さん生臭半臺新らしく上る魚も皆江戸前庖丁いたらす高ういたさすやすくあげるがかねての工夫杖とも貝の柱とも存まするは唯御贔負御取蓼御莧鳩を海膽鱲子までつらりつと鯉ねがひたてまつり鮹切溜の庖丁白湯煮

山東京山補

武具短歌

山鹿素行先生撰　加藤涼友考

夫武具は鎧腹卷太刀刀冑は筋や星冑。頭形兜鍪四方張懸冑二重白總覆輪に片白や。扨名所は數多し錏母衣附吹返し。四天品垂八幡座。眞向眉庇内冑。見揚浮張忍緒。前立物に後立。頭立脇立引廻。面頬猿頬。姥頬や。甲州頬に。涎懸。喉輪脇摺脇當や。胴は桶輪。佛胴。縫延小札最上形。楯無形に革具足南蠻胴や胸目綴。菱綴鏁綴色々の縅毛色は有ぞかし左の方は射向也右は勝手に後をば押附總角襟周。左右の袖に胡顏管。綿齒相引肩當や。清慈の板に采附や金具周に魚養也旃檀胸板弦走二の板次は三の革四の革發傳動糸。受筒合當離待受や下散草摺高緒や繰縮下著下袴釬は掙小手地半籠手。松葉輪小手に稻荷小手。筒小手小田籠手篠小手や伊豫佩楯に踏込や。毘沙門脚當。篠簀懸上帶腰當陣刀。陣脇差に采幣や扇團扇冑立揆襪毛沓陣羽織。具足羽織に胴肩衣や笠印胴服鉢卷鎗印。腰簀打違。首袋。床机敷革水筒や野太刀長刀鎗刀。著込鉢金胴の火に草鞋股引草鞋懸。扨指物は色々や輪貫幡連に天突や四方四半に吹流し吹貫小籏三團子。枝蔓母衣張酒林。尾花鳥毛に暖簾や半月御幣鐘や志奈伊切割折掛に。釣手拭や釣鏡赤熊黑熊に瓢簞や香車簾に蠅取や角母取紙に羽團や三提灯に金の笠。白母衣黃母衣幅雜乳衣赤根紫黑母衣や母衣串母衣籠母衣袋。籏は釣籏附籏機踢手繩に籏竿や纒小印馬印軍鐘貝に押太鼓。外幕内幕幕串や船幕幔幕暖簾幕。鎗は持鎗長柄鎗。徒鎗鎗鑰袋鎗。月劔管鎗船鎗や長鋒薙刀鋼叉鉈薙刀に片鎌や弓は重藤側赤や塗込藤に三所藤。白木小弓に半弓や箙胡簶革箙矢籠輛に騎馬纃。行縢弓虎手弦卷や上指鏑雁股や蟇目神動弓立に矢筒弩兵や藥棟革。的矢矢筒に弦袋。石火矢大筒火箭筒に小筒鑄筒や種が島玉筥火繩口藥。胴亂早合雨袋。鞍は作鞍布袋鞍金覆輪に鏡鞍南蠻鞍に革包。熟梨鞍に金鐙眞鍮鐙五

六掛。千田掛加賀掛佐々木掛韉馬肩力革。鞴𩍐に腹帶や馬面蛇面に馬鎧。胸懸尻懸面懸に手縄轡に鞭絓。障泥馬氈に糠袋。鞢に鞍帊靶美縄馬柄杓。楯は持楯鎧甲竹把牛に車楯。狼烟篇に續松や柄樓石弓我屈銅。網敷陣鍬陣鍋や。矢外感狀首帳や其外籠城責や陣取備行列に伏兵覆小搆合。夜込夜軍に船軍。物見忍に相詞。手柄の批判武者詞。勝鬨軍禮品々也何れも深習有

施印七種の聞書

正月七日七種の若菜を服すれば萬病邪氣を除くといふて往古より上下用ひ來れ共或孝心の人毎年正月五日自身若菜を摘てよく洗ひ新なる籠へゆづり葉に穗長を敷七種をうるはしく取揃へ長きのし昆布根のびの松に梅の花添包水引をかけて御主人御兩親へ上られし由是君親の御長壽を祈るなれば誰しも自身に摘て奉るべき事かと思ふまゝ七種の本名をこゝに書附侍る（〇薺〇芹〇五形（五形ははうこぐさの事なり）〇蘩（蘩ははこべなり）〇佛の座（佛の座れんげそう俗にげんげ花といふ）〇鈴菜（鈴菜かぶらの事なり）〇鈴代（鈴代大こんの事なり）以上七種

歌に

薺せりこきやうはこへら佛の座

鈴菜鈴代これて七種

此七種を摘に心得あり野邊に出て田畑の搆ひにならぬ所又作りものなど取違摘ぬように氣を附べし同じくは百姓衆へ頼いづれも其有處を案内くはしく請求又古鎌かさすが樣のもの地をほるに用意して何れも根のきれぬ樣に摘とり能あらひ籠に入參らせ給ふべし根の長きが長壽を祈る心也かゝる趣其志の深き事を或老人悦び此心持萬事に通ひて用ひん事を願て風聽し給ふにより感心の餘り寫之

醒睡笑の拔萃

醒睡笑といへる書は文つゞまやかにしておかしき咄あり三つ四つ爰に出す

〇或家に小姓の名をかけがねとつけて呼人あり何のゆへぞやと主人に問ければたゞの時は我前に居る樣なるが少なりとも用のある時なればはづすといふ心なりと

〇ある大名のもとへ客あり振舞に湯漬を出たり其席へ亦客有夫にも膳をすへたり又客來有膳を出せとあれどもつい出かぬる時物賄ふものを呼出し何とて手間もいらぬ事の遲きや湯をえわかさぬかと申されけ

る時手をつかねて湯は御座るがつけが御座ないと申たりければどつと笑ひになりにける
○十人計連立て北野へ夜深に參詣しけり二十五日の群集なればおしおされ下向する道すがら夜もほのかに明ぬ友達の中に一人腰の廻りを見れば脇差の鞘ばかりに刀を添てさしたりこは何としたぞといふに肝をつぶし鞘をぬきふいて見つ叩いて見つすれどもなし揚句にいふ事は畢竟おれなればこそ鞘を取られね
○客來るに亭主出て飯はあれども麥飯じや程に否で有ふずといふ我は生得麥飯が好じや麥飯ならば三里も行て喰はふといふさらばとて振舞けりまたある時件の人來るそちは麥飯が好じや程に米の飯はあれども出さぬといふにいや米の飯ならば五里も行かふとて又喰ふた
○急がば廻れといふ事は物事に有べき遠慮なり宗長のよめる
武士のやはせの渡り近くとも
いそかは廻れ瀬田の長橋
○物を無用といふ詞のかはりによしにせよといふはあら鹽も戸さしもよしや駿河なる
清見か關は三保の松原
此うたにて心得べし三保の松原の面白きけしきを詠めゐ給へば關に及ばずえゆくまい程に清見が關はよしにせよとよめり
○なべて上﨟方にはさくぢといふを禁中にはまちがねとかやもてあつかひ給ふ事是こぬかといふ言葉のえんにや
○慶長十九年の冬將軍樣大阪の城へよせさせ給ふ時日本六十餘州の軍兵一騎ものこらず出陣ある本陣は天王寺の茶臼山にて有しを何ものやらん
大將はみなもとうちの茶臼山
引まはされぬ武士そなき
○仁物らしき男衆の前後に鯛を入荷ひ鯛よ〳〵と賣けるをある家のぬし呼入てけしからず寒き日なりまづちと火にもあたりて茶をものみてお通りあれちらと一目みしより是たゞならぬいにしへはさもありし御身なりしが思はずも世に落ぶれてかゝるわざをなし給ふにやと涙をこぼし候ぬといひければかの男靜に火に當り茶など呑てたち樣に大なる鯛を一つ亭主が前に差出したりこは何としたることをし給ふぞと

しんしやくしければいやけふは心ざす先祖の頼朝の日なりと

○ある人連歌の席に句を出しけしからず慢じたる顔を見つけ脇より生天神（いきてんじん）／＼といふて膝をつきければあまりなつかれそ社擅がゆるぐにと申されし事よ

○洛陽にて淨土宗の寺へ尼公の参られ一人の弟子を呼出し十念を受たきよし披露してたび候へとありしかば心得たるとて方丈に行き下京にて何といふ女人の参りに候と申もあへぬに長老はを出し上﨟とか女房とこそ申べけれ女人といふ事やあると大に呵られければ弟子の返答にそなたは我にあみだ經を敎て善男子善女人といへといふて置て今は又そふいはぬとは一事兩樣なる事哉などさん／＼にからかひて表へ出ける時尼公赤面して笑止や御機嫌のあしき時する下向せんやと申されたれば弟子のいふいや苦ふも候はずちと女房事の出入で御座るといふた

○ちと假名をもよむ人の言ひけるは此程つれ／＼草をさい／＼見て遊ぶがおもしろふ候よとありしかばその座に居たる者さし出て搆へて口あたりよしと思ふて多くまいるなつれ／＼草のあへものもすぐれば毒じやと聞たに

○侍たる人右筆を呼て此程は久しく不レ掛ニ御目ニ滿足仕候とかけとそれは如何候はんと筆を持ゐけるにそれならばよくきこゆるやうに此程はおめにかゝらず本望に存候

○昔より矢倉の寺は禁酒なり寺中に酒を好む僧の巧て經箱をさゝせ角を取いかにも結搆にぬらせ上に五部の大乘經と書附それを通ひにしける酒を取て來るに人はそれはとゝへば是は五部の大乘經なり京にいたゞかん事を願ふ旦那ありそのゆへに折々もちて行通ふと答ふあまりに京通ひのしげければ人普く推してんげり或時うちの者經箱をもちかへる途中にて酒の匂ひをきゝ呑たさやるせなしそと口をあけたまはりぬそろ／＼寺へ持かへるにそれはなんぞ常の如く經にて候といふさらばちといたゞかんとて手にとりふりて見誠に御經やらん内にごぶ／＼といふ聲がする

○百三十年餘りの跡かとよ筑前の國宰府の天神の飛梅天火にやけてふたゝび花さかずこはそも淺ましき事なりと人皆淚をながし知るもしらぬも集り思ひ

思ひの短冊をつけ參らする中に權狡坊とて勇猛精進なる老僧のよめる歌こそ殊勝なれ

天をさへかけりし梅の根につかは

土よりもなと花のひらけぬ

短冊を木の枝に結びて足をひかれければすなはち緑の色めきわたり花咲春にかへりし事よ人々感に堪てかの沙門を神とも佛とも手を合せし

山の端にさそはゝいらんわれもたゝ

憂世の空に秋の夜の月

解脱上人の世に隨へば望みあるに似たり俗にそむけば狂人の如しあなうの世の中や一身何れの所にかかくさんとかゝれしを右のうたに引合て衣の袖をしぼにき

○將軍天下を治め給ふ此御代に賢臣義士多き中に京都の所司代として訟をきゝ理非を決斷せらるゝに富貴の人とてもへつらふ色もなく貧賤のものとてもくだせる體なし然る間上下萬民裁許をよろこんで奇なるかなと讃嘆する人ちまたに滿り一滴舌上に通じて大海の鹽味をしるとあればその金語の端をいふに餘は知ぬべきやさかる時越後にて山伏宿をかりぬ其節國主の迎ひに亭主も罷出るに彼山伏のさしたる刀拵といひつくりといひ世にすぐれたるものなるをかりて行いまだ宿に歸らざる間に一國德政の札立けりさる程に亭主かへりても刀を返す事なし山伏こらへかねさきりに乞ふ宿主返事するやうそちの刀かりたる所實正也されども德政の札立たる上は此刀もながれたるなりさら〳〵かへすまじきといふ出入になりければ雙方江戶に參り大相國御前の沙汰になれり其砌京の所司代下向あり御前に侍られしが此裁許いかにと御諚あつて謹て造作もなき儀と存候幸ひ札の上にて亭主がかりたる刀をながし候はゞ又山伏がかりたる家をも皆山伏がに仕べきものなりと申上られしかば大相國御感甚かりし當意即妙の下知なるかな以₂正理之藥₁治₂訴訟之病₁挑₂憲法之燈₁照₂愁歎之闇₁といふ金言もよそならず

○平安城にて質に具足をおき請むとする時にみれば鼠がいとをくひたり請主難儀に思ひいろ〳〵理をいひてなげきさらば利息なりとも少しはゆるされよと詫けるに質屋さらにきかず剩鼠を一つ殺して是が藏に居て具足を喰たる科人なり然る間成敗して候とも

たせ遣す質置口おしき事に存所司代へ罷出初中後を具に申ければ多賀豐後守下知せられけるやう扨は鼠は盗人なり盗人の居たる家なる間闕所せよやとて家財をこと〴〵くとり質置に下されけり

○北野の神前にて祈禱の連歌あり

かくなるものかさすらへの果

此神のかへり北野に跡たれて

此附句執筆書とむると同じく社頭震動し暫く止まざりつるは神も大きに納受し給ふにやと皆感じ申たるよし

○連歌の席にて一句出したるに執筆船が近い〳〵と言けるをとくと思案して

船てなし中くりあけた木に乘りて

○人皆連歌を仕習ふとて一順の月並などゝてはやらかすうらやまし我もちと稽古せんと思立ち宗匠する人に向ひ大體一句の仕立いかなる心もちにて工夫致し候はんやさればよ此道をまなばんとすればいと深くもくづれよらぬ和歌の浦なれば言葉短ふきりたくば心をながくふかう物哀れに華奢風流につく樣にかの人きくと同じくはや合點參りて候一句申さん

首きはや二季の彼岸に茶香杵

心はと問れされば水を渡るに首際に及ぶはふかければなり物の哀は二季のひがん華奢風流なるは茶と香つくやうには餠つくきね

○細川幽齋公の姉御前に宮河殿とかやいふて建仁寺のうち如是院といふにおはせし事ありき長岡越中守殿より大津にて米を百石まいらする由のみを見給ひて其返事に

御ふしんのやくにもたゝぬ此尼か

百のいしをはいかてひくへき

とありしをげに理りやと則車にてをくり給ひし

○大名の扶持うくる座頭あり茶をひかせられしが呑て見給へばあらし大に機嫌そこねしに

あらくともわかとかのをとおほすなよ

茶臼に目なしひきてにもなし

○深草に薄墨の櫻とも墨染の櫻ともいふは兒有手習硯の水に白き櫻のちり落ちて墨に染りければ

世の中を花もうしとや思ふらん

白きすかたを墨染にして

と此うたよみて兒死にけり明のとしのなき日に當り

○山の一院に兒三人あり一人は公家にてをはせし坊主年に二度物思ふといふ題を出せり
春は花秋は紅葉の散を見て　としに二たび物おもふかな
一人は小兒侍にてありし夜るは二たび物思ふといふ題なり
宵はまちあかつき人のかへるさは　よるは二たび物思ふかな
今一人の兒は中方の子なり月に二度物思ふといふ題にて
大師講地藏講にもよはれねは　月に二たび物思ふかな
○洛陽に一噌とて名を得たる笛吹あり弟子の名を秋風とぞつけらる秋風心に思ふ樣秋風は物にあふといふ緣あり我笛を褒美してつけられけるこそ忝けれと自慢限りなき折ふし同學の者一噌にとふ秋風とは何の故につけ給ふぞや別にわれは所存なし秋風はふく程あしきものなりかれが笛もふく程わるい程に
○宗祇有馬の湯に入ておはしけるに人々寄合歌などよみ遊びしが爰に居らるゝ旅僧も若思ひよりたる事
師の坊主
去年のけふ花ゆへうせし兒の爲　今うちならす鐘の一聲
と詠じ靈前に備へければ則返歌あり
花ゆへにとはるゝ事の嬉しさよ　苔の下にも春は來にけり
○光源院殿京都四條の道場に陣を取御座ありし時夜九つの太鼓を寢ぼれ七つの時打けり公方より御使ありて番の僧をめす定めて折檻に及びなんとふるふ〳〵參ければ樣子御尋ねありつるにさん候深く睡入目覺仰天の仕てのゆへと有の儘申上ければ案の外御機嫌よくて
此寺の時の太鼓は磯の波　をきしたいにそ打といふなる
○三條三光院殿十六歲の御時禁中にて懷舊といふ題出たりつるに何ともよみにくしとあれば一座皆おもしろき顏に見なし誰も題を取かへよまんと言ふ人なかりしに
程近きわか昔さへ戀しきに　老はいかなる淚なるらん

あらばいふても見たまへと傍若無人の作法なりし時
音にきく有馬の出湯は樂にて
腰おれうたの集りぞする
○情深き兒のもとへ折々かよふ僧ありし暮に及びそときたれり兒にこやかに夏衣よくこそとあれば其言葉を聞とひとしくふいと立て行兒の方より入道はしまづかへれとよび戻すに僧立歸りぬ何とて物をいはずいなれしや夏衣と始て仰られしまゝ罷出候きいかなればとゝはるされば新古今に素性法師
おしめどもとまらぬ春もあるものを
よはぬに來る夏衣哉
と有候此趣存あはせてなりとなく／＼申されければ兒聞てなか／＼の事なり
夏衣ひとへに我は思へども
人の心に裏やあるらん
といふ本歌にていひつるものをとあるにぞ僧かたじけなしとも
○備前の國岡山にそこにべといふ魚あり餘國に稀なり大守浮田直家より藝州小早川隆景備中笠岡の城におはしける時彼の魚を送らるゝ隆景侍に仰せ夜中に備前よりそこにべが來た程に家老の衆に今朝ふるまふべき由申せとあればかのものまいりて備前より今夜そこにべ殿お越にて候今朝振舞あり出仕あれとぞ申ける各々いんぎんに打扮ち參らるゝに客とてはなし出たる膳部をみればそこにべの汁なり右の樣子を申されて大笑なりし
○聟あり舅の方へ見舞ふとてある時町を通りしが新き鷹を棚に出しをきたり二百にて買ひ矢を通しもたせ行舅出合鷹を見て是はとゝふに我等道にて仕たるとあれば大に悦喜し一族皆よせて披露し振舞わめきけり聟かつにのり今一度もたせ參らせんと家の子に示し合せわれは先きへゆかん跡より調來れといひ捨て先舅に逢ふと同じくいな仕合にて又鷹を仕て候といふ舅いさみほこれり彼の內の者鹽鯛に矢を貫き持來れりして今の矢はあたらなんだかされば鷹にははづれて鹽鯛に當りまいらせたと
○雜談に心の奥のみゆるかな
言の葉ことに氣をつかふへし
ともあればなにはにつけ常の心をいふなる事此おもて八句にて工夫あるべし

しとやみやけらこが嶽の木々の露　濟家
いかなるかこれ秋の夜の月　曹洞
行つくす江南數日鴈啼て　儒者
西よりきたる風の涼しさ　淨土
そこにこそくせもの佛はある物を　當宗
何なまふたととなへさるらん　時宗
金剛界胎藏界の春の花　眞言
諸法實相へたてあらしな　天台

○所の地頭と中のよき坊主あり振舞に呼れ種々食物の噺ありしに海月といふものは精進めきたる物なりさる程に出家にも參らせたや殿にいふて是をばゆるしにせんなどかたる年たけたる弟子聞て殿へ仰上らるゝ序でに生鯛の事をも賴入と申たり

○禁中に御能あり狸の腹鼓を狂言にする狸が出けるを狩人汝なにものぞ我は狸の王なりといふ何とや王じや王ならばゐころいてくれふずと

○善界坊のおもてに上﨟面をかけて出たり橋がゝりへみゆるを同じくあれ〳〵おかしやと笑を太夫聞ても今更かへらん樣なし舞臺にていひける事は抑是は善界坊の內方にて候と

○山姥は福分の人にてあると聞たが耕作はせずあきなひの音もなし何としたる事に有德なるぞと不審する奇特をいはるゝ言葉にはいへど目に見るものなし其上不辨分限を迄いかにとしてしられたるぞかくれもない山姥に作りたるは八木たう〳〵として

○佛には毛があるかなきものかいやないむげくはうぶつとありいやあるけぶつぼさつといへり互ひに論じて堂坊主に判斷を請ければあるにあらずなきにあらずそれは何事ぞ熊野の謠に末代一世けうすの如來とつくりた程に

○蚤といふものも一廉のやつやら謠に作つた何にある二人靜にあとをのみよし野とそれならば虱をこそ猶ほめたは何に實盛に玄らみあひたる池の面とあるは

○三輪の謠にある夜のむつごとに御身いかなる故にによりとは作意もない作りようかな總じて理のすまぬ文章やたゞある夜の六つ時に御身いかなるうへにのりと直したらばよからうとは作者めいわくの

○高雄神護守の文覺は聲の高い人で有たといふが荒行をせられた奇特さよと聲の高いといふ事を今迄は

きかず書物にあるか勿論誓願寺に虚空にひゞくは文覺の聲と造つた

○何といふいはれに昔は花になく鶯水に住蛙をはじめ馬などまで歌をば詠たるぞ人倫たる身をうけながら五もじ七文字のわかちさへ志らぬはとなげくやさしの心ばへや去ながら馬のよみたる歌は未きかずといへば

世の中にさらぬ別のなくもかな

ちよもといのる人の子の爲

是こそ馬の詠たる唱歌ぞうよ是は業平のにてはなきか念もないゆやにそも此歌と申は長岡に住給ふ老馬のよめる歌なりとこそ

○奥州にみてぐらといふ武家あり彼館にて能に鐵輪を志かゝり恐しや見てぐらにといふをゆき當り俄に直して恐しや膀に三十番神おはしますとあさましき神の居所や

○幸若の舞をきゝ扨々おもしろのふしや中にもせめがおもしろきと感ずるとき總じて此舞といふものは誰が作りし事ぞこざかしき顔の人いふ不案内や仁和寺にてつくりたるなり終にきかぬ庭訓ににんわじのまひつくりと書たるは

○青海苔を煎豆につけたる菓子太閤の御前へ出したれば幽齋公にむかはせ給ひなにと／＼とありし時

君か代は千代にや千世にさゝれ石の

いはほとなりてこけの結豆

○宗祇修行の時山中にて思ひよりなき三人行むかひ一人いふ一つあるもの三つに見へけり則祇云

たくひなき小袖の襟のほころひて

又次の者いふ二つあるもの四つに見へけり祇云

月と日と入江の水に影さして

又ひとりがいふ五つあるもの一つ見へけり祇云

月にさす其ゆひはかりあらはれて

右三句ともに聞て後三人いづちとも見へずうせにけり

○西行法師修行の時津の國七瀬川にて麥粉をくふとて志きりにむせられけるを馬より侍の見つけ

此川はなゝ瀬の川ときく物を

お僧を見ればむせわたるかな

時に西行の返歌

此川は七瀬の川ときくものを

めしたる馬はやせわたるかな

○小松内大臣重盛公は釋迦の弟にてありし事よちとも忘らなんだとかたる嘘そふな時代も二千餘歲違ひたる物を忘ても醫師問答といふに平家に重盛の定業もし醫療にかゝはるべう候はゞあに釋尊入滅あらんやといはれた

○茶は是釣レ睡鈎とあり又食を消する共いへり

わか門にめさまし草のあるなへに
戀しき人は夢にたにみす

などいふて人々ほめはやしのむ末座に百姓の候て夫ならば我々は一期茶をたち申さん終日骨折ても夕べとくとねむればぞ辛勞をもわするれ又たま／＼とほしくてくふ食の消ては何のゑきあらんあら否の茶やと頭をふりたりされば憂喜依人といふ題にて

ますらをか小田かへすとて待雨を
大宮人や花にいとはん

とよめるさまこそかはれ心ばへひとしかるべくや侍らん世をおもしろくすむ人は茶を愛し賤の男は茶をいなと狂言せし一旦は理有

何となく人に詞をかけ茶碗
おしぬくひつゝ茶をものませよ

花をのみ待らん人に山里の
雪間の草の春をみせはや

利休は侘の本意にて此歌を常に吟じ心がくる友に向ひては搆へて忘失せさせなん

契りありや忘らぬ深山のふしくぬ木
友と成ぬる閨屋の埋火

是は夢菴の歌にて有古田織部冬の夜徒然吟せられし

右醒睡笑は萬治元丁酉の板本にして此外にも種々話あり（醒睡笑は作者安樂庵策傳と云ふ其序文に「元和九云々」とありて同年頃の活字本あり）

淡々文集の雜話

淡々文集は寛保二壬戌の出板にて雜話すこしをひろひ出す

○春日空しからざるは皇都の人の心なりけり二人連にて叡山へ参るもの蹴上の知音の者の方へ立寄けふは大師へ詣候又歸りに立寄べしと言捨去けるが暮過歸りにかの所へ一人立寄一人は跡へおくれたり扨々今日は益もなき事に山坂をかけり候先は用意の割籠もいつしか高觀音にてたべ切湖の風にてなまぐさく胸わるく叡山へ登り著兼々必といひ約束の捨坊主が

所へ行著けるに甚腹淋しく何成ともあたへられよといひければ菜飯に田樂こそし侍りけれと同宿米をあらひ一人の男は豆腐を厚く薄く長く四角におかしきものに切りちやく＼くりて燒ぬも燒たるも山折敷へ打入こわくあらく＼き菜の切たる飯をむくつけなる鉢へ入て突出し生木の枝を折て箸としていざ＼／心まかせにまいれとて何やら名のしれぬ草々を引て醬油打かけ出してきよろりとして住持は佛と打つぶやき侍る扨々懲はて候叡山殿かな跡より連が立寄候はゞさきへ歸り腹を早く直すとて飛で歸りしとお申たゞと言ちらし立去りける跡へ一人の男立寄けふは近年のたのしみ覺たる事あらば歌にてもよみたき事ばかり拙き身をこそ自慙候へ常々大津へ掛取に往來の時は左右の山も心にとゞめず木草も目にわたり候はず今日叡山參りと改て出立より常にむさくくさく息どしかりし車牛の響も昔めき崩かゝりし軒端のかづら山の霞伊勢戻りの一ふし耳にとゞまり俄に走井の水かゞみ心はづかしさ頻にまして獨り打笑高觀音にてこうりめし取出し湖の春風空と水と一つに成て吹こす花の匂ひいやはや暫く貴人の心になりぬ大師の御惠み先覺へ侍りて扨叡山に登り約せし御寺へ立寄りければ何のまちもふけもあらずあらく＼しき菜飯不加減の田樂春草の芽のある限りひたしものにして玄ひもすゝめもするではあらでお住持は香盤の煙り絶さじと御佛につかへ給ふ世を離れたる趣たゞものゝ不加減却て世間寺の重味馳走にはまして殊勝さいはんかたなし誠に王城の守護山と承り傳へ候にうたがひなし有難覺へ候又々暇あらば遠からず登山致たしさらばく＼と言捨出けるとぞ兩人風雅の有となきとのたがひは是非の論なき事なり何藝に附ても上手下手の心的意箭各かくの如し予例の老のひがみの心出來て兩度芳野の花へは參りしかども馬上にて坂を登りたしと思ひたちて六田よりいかにも瘦たる馬をかりて行李のもの引つけみおろし見上て恙なく藏王堂にいたり

よしの山世界の花と飲くらひ　　半時庵

と眞實の風情世人を罵言して下りぬそのゝち老友の方々に一夜咄し侍る折ふし人々見し所の風色をかたり出て吾も芳野の趣を申出れば誹諧の詞宗といふもの其席にありて某も初て去年の春罷ける素より花は

面白けれども茶屋もなく喰物もなく扨々不自由なりと眞顏にて申出けり此人叡山にも料理茶屋あれかしとおもはるべし仍て發句は申出さずなりにき

○昔さる貴人常に坊主共に竈の伽羅をわらせらる時四角に見事に割て四面の割屑をしたゝかに坊主共配當しらる事常なり或時新參の小姓に此木割よと仰られければ一大事の御用始と御次に出四角に割て四面の割屑微塵も散さず割たる木の側に載て御前へ出しければ機嫌甚だ損じいかでかくの如きのむさき仕方にぞ侍るいづくも坊主共が割て差出るにかやうの塵芥のごとくにぞ取あらじ艶なきおこのものなり坊主共かしこくも割直せよとある時例の如く割屑を配當して美しき所計を差上ければ是こそと仰ありて暫く思惟したまひ伽の人を召てかくの如く違ふ事わと尋給ひければ伽醫者申けるは坊主衆は屑を包み置て次々の御用になすべしとの致方ならん御新參は律氣眞法にて屑迄さし出し候事御次御用の心いまだ到ざると申に笑はせ給ひ新參を召て坊主共は屑を盗むにぞあらん古人も竊香と書置侍れ責るに不及我はあほうなりと御機嫌どもよろしかりけるとぞ

○から漬といふ物を贈りたる人のもとへ半時庵ふ□かうのものといふ事いかなる名ぞと世に稀に論じける事ありかう〳〵ならず或は糠に漬たる物ゆへ糠のものと言又大根を以て神に供すによつて神のものとこそ神々と言訓をかりたるなるべし昔たがへり禁中臺盤所へ女房の局よりおかうをまいらせよと呼時味噌をてうじ侍る事上古今更なりみそに漬たるをかうの物と言なり香の字を下す事文字を用ゆるの餘情香はすべて清淨の心なるべし薰風あながち南より匂ひ來る事なけれども此類みな以て雅の要とする所ならん其かうに漬たるにあらず糠に鹽を加へて大根を漬て家々民くさの朝夕の事とはなりぬ其中に群を出たるものあり稱してから漬と云西域にあらず唐土にあらずいかなるからぞ世のさまからやき榮して調度の俤眞菜野菜も至て風情のこまやかなりけり歌の日歌月と云人よりかうの物を得たり其味いひがたし若此蘿蔔は筑紫何某の押領使が朝々好みたる土おほねにやあらんかしさあらば夜盗の來りけるともおぢおのゝく事もあらじや日を添て乾けるはこのうへの歎きなるべし

○蒼頡に文字を敎へたる鷄今飛來らば一字もよむ事あたはず別れの邪魔をして飛さるべし手跡も先祖は惡筆なり追々手練の文字細工を積り〳〵て風情日にますより和漢相とも筆の自由を感じ墨色を稱して其道に目を空しくせる者は眉を顰めて能書と呼なり然れども風雅のおもひ深からぬ人の手跡は額にも掛物にもつきなき物なり自慢をいひ散して聞ぐるしく淺猿し因以謝肇淛壽と書べしなどいへり淸輔もその趣兼好も手など拙からずはしり書とこそ書弄たりといへど傍人いふ半時庵無筆同樣の事にて筆道咄無用の事と笑ふ予云非なり雲溪先生は能書の名ある人なりしが予が書たるものを見て今天下の名筆は淡々なり文字一行の俗誰か及んそのうへ一字〳〵を離しみれば少しも文字の道理なしもとより學ざるものかくもあるべし謝肇淛是を見ば甚悦べしと大笑ありけり長夜腹滿しく廚飯ありやとゝふ僕云あり何ぞ菜あるかと問ふ有と云何ぞと問ふ九年面三つ有と云此者鷄にだもおとれると又大笑也

○爰にあはれをとゞめしは達摩大師にておはします九年面壁とて尊者名僧和漢相とも背たる像を念じける愚案大悟の祖九年の間壁にむかひて尻を腐らし悟たるは至て不器用なり思ふに九念面壁ならん三念一念卽情頓話禪一二三と念じて二念にもとるは桑華の垣情なり敎の要主なり一機九念して向ふ所は壁にても窓にても岩にても柏樹にても海山も吹風も其時の心の的なりされば二祖の的を得て數年嗜たる箭を放されたり又蘆葉の像とて蘆の葉に乘たる達摩目痛きものなり柳葉蘆葉孤舟の一名なり川上の觀念誠に見性成佛異國の虛名ならん澤庵も蘆葉の讃にいたる所難し信とは尊者の心裏をよく識りたるならん古賢禪師海印光にも達摩をせめけり難有き事なり

○爰に隱元禪師を尊み參じ給ふ貴人ありて黃檗の夏の中參詣ありて袴をとりて居士衣に袈裟をかけ如意をもち行道の僧中に交り經をよみたもふ其時又貴人の交代の節黃檗山見物隱元を見んとて立寄給ひてかの貴人の厚鬢に衣を著袈裟をかけて行道ありけるをみて驚き肝をつぶし武士のあるまじき事なりと大笑して歸國ありて後御國の黃檗流の和尚を招待あり各の宗旨には唐にても武士が三衣をかけ出家の眞似をする者もありや見兼候事なりと御申ありけるが和尙

の云こなた樣にも常に狂言をお好しかも御上手と承り候左樣にて候やと云いかにもと仰ありけり然ば狂言の大事は釣狐と承り候畜生足大切のよし日外被成候て諸人感じ候全く暫く畜生の心になり正に狐になられ候なりかの貴人も暫く行道のうち釋迦の教を熟得して佛の心裡に叶ひ給ひしなるべし然ば野狐の魂を似せんよりは行道のかたまさるべし形より先その法其道をあらため心裡をよせ候事なりと答られければ城主則佛道を感じ大寺建立ありけるとぞさかしきかな一禪賢哉佛印終には東坡も

○いつの頃か蘆野殿へ京より女の宮仕に參りて三とせ計勤めて都へかへる時御餞どもいと興ありてその方の名をけふよりづれとかへよと仰ありければ女とりあへずしばしとてこそと存候に御惠にひかれて三とせは立とまりつれと申上けるとぞ心ある育の女なりけり

○昔武陽に勝山と云妓有萬人肝を縮め朱唇を窺ふもとより黄金用盡せども心を撓めず酒屋の一夫に生涯いふ儘にしたがひ侍り或時夫狐にか佛にか誘はれて逐電しけり亂るゝ髮も袖も袂も齒に咬裂みちのくの方にやあらんと荻に身をさかれてよう〳〵

　秋風もはや吹たへて冬の夜の
　　霜は寒けき白川の關

とよみてもとゞり切拂ひ山林深く入けるに忍の里人有がたく思ひとりて頻りに招じければ

　來て歸る道しなければ山里に
　　墨染衣幾代ふるとも

　糸竹の昔を今に引かへて
　　嵐のみきく深山邊の里

歌の風情はとにもかくにも瞋恚の心葉をきやう[本ノマヽ]ざくうへなからんと感ずべし

○予先年妾あり名を崎と云死に及んでいふ事有是迄の御恩報じがたし死てのちかならず一家の者どもが事共御たのみ申ませぬといへり賴まするといふことの口が重みたるかと問へば少も賴ませぬなり不のぬなりといひて則死すいたはり事日々に消行さる御方へ夜話笑談の折節申上ければ極めて一家に口說あらんその上理の埋れたるならんととやかく御志を添られけるが口舌とけて一家和してむつまじかりける其後又笑談申侍りければ畢ぬならば取あげもせまじと

ありけり不のぬ眞實ある時はよき切字なり人將に死んとする時いふことよし東坡が燕々張建封が眄々是には劣るべし

舊國の俳懺悔　同俳諧傜の話

俳懺悔二卷俳諧傜二卷は大江隣大伴舊國が文集にして序に蘐光齋天府とありて明和七年庚寅冬囘心齋舊國謹誌とあり此中におかしき雜話を拾ふ

○晉子其角常に申されしは

好氣根稽古の三つにくらふれば
好こそものゝ上手なりけり

將棊の師大橋宗桂もつね〴〵このうたを誦し申されし

○洛の諸九松島行脚の折の添ぢからにとて案内の爲に遣しける元治郎といへるあら親父の七十五歲になりたるが風景の面白さにめでゝやありけん

いのちこそ寶の山の松島や

かく不風流のものだにも時に感じて自然とうかびしものなり

○又みちのくの二本松に俳諧すけるものども櫻がもとに酒くみかはし遊び居ける中へ所の百姓のいでゝ酒呑せ給へと乞ふほ句いたし申されなばいかにもとたはれしに

きのふより翌よりけふの櫻かな

といひ出されて興さめ人々ほ句も出ざりけり

○鬼貫曰未熟の人の俳諧は春雨のと五文字をいひ出し時春雨先に出候といへば秋雨のと附かへ侍らんといふこそうたてけれ春の月は暮初るより朧だちて物だゝぬけしき夏の月は灯を遠く置て詠め深し秋の月は窓に軒に海に川に野に山に詠めあり冬の月はひとむらの雲の雨こぼしゆくひまをてらしていそがし春の雨は物こもりて淋し夕立は氣晴て涼し秋の雨はあはれにて淋し冬の雨は底より淋し鶯はきく郭公はまち侘るこそ詮なるべけれ四季折々の草木ひとつ〴〵辨ふべし

○古き歌を折よく誦し出たらむはあらたによめるよりも風情ありとや淀のわたりのほとゝぎす宗盛の宇治の奉納など手柄有てきこゆと承る近頃尾張の人の妻の七とせ迄腰たゝで有しがつひに身まかりし時其夫のおもひいでゝ申

麥喰し鴈とおもへと別れかな

野水が句をつぶやきしはいとあはれにして野水が作せるよりも情あつかりけると鴫海の蝶雜物語なり
○雪中庵にて夜話のせつ門人出幸申けるは其角五元集の中に
　　ゑまむろに茶を申こそ時雨かな
といひつる句いかなる事にやと尋ねけるに蓼太の曰此こと先師東登物語にきゝしはむかし初代の一蝶は其角と相よし然るに蝶故ありて公の罪をかふむり伊豆の島に流さるゝに友人かれこれ別れをおしみ船場までおくりて信友の情をなす一蝶申けるはかゝる身のふたゝび相見ん事かたし是迄の御懇情いつの世にかは忘れ申さむ我かの島の事を聞に大かたの人魚を取日にほし乾して江戸の便にひさくと承る我も又さこそあらめ然ば魚の腮に木の葉のやうの物をすこし宛入置べし若さやうの物の入たる干魚あらば蝶がなせるものよと思ひ給へかしといひて別れたり人々其船影の見ゆる迄見送り其角はいとゞむねふたがりて立もさらでありし其後ひとゝせばかり有て其角が僕日本橋の魚の棚にて乾魚のありしをとゝのへかへりかてぐさになさむとたはらなる魚を火にあぶりけるにむろといひつる干魚の中に笹の葉のやうの何ともゑれがたきが一枚出たりのこる魚どもにも各おなじやうに有しゆへ扨々島のやつらはおかしき事をなす成と笑ふを其角ふと寢耳に入りやをら起上り蝶がいひし事を思ひ出し此乾魚はいづかたの島より參りしものかと其ひさげる問屋へ人走らせて尋けるに大かたは八丈大島より渡申よしを申其角爰におゐて蝶がいひし詞を思ひ望友の情ゑきりにうごき蝶が親しかりし友どちをあつめ茶を申入此干魚を出し是こそ蝶が申のこせし俤なれいまだながらへてかゝるわざをなしけるよと皆々そなたの方に向ひはるかに信友の情今更涙をとゞめかねたりしとぞ角が句も此時の事なりと師の物語有しとぞ申されし
○東登翁の云世にはらみ句といへる有趣向うかびても何をおしみて其場をまつ今の世の懷劔辨當などゝいへるさもしき心とはおなじ日にかたるべからずむかし源の順が
　　楊貴妃歸唐帝思　李婦人去漢皇情
かねてたしなみ侍りしが對レ雨戀月といふ題を得て此句を出せし津守の國基が薄墨にかく玉章と見ゆる

かなの歌も同じふし柴の加賀白川の能因なども皆此たぐひ也ばせを翁もうき世のはてみな小町也といふ句をひさしく心にかけて品かはりたる戀をしてといふに出せり

○嵐雪曰句を吟ずるに訛りては口おしとてひたもの都に登り後々は少しも訛らず執筆へ句を渡されしとかや

○淡々曰詩は長刀和歌は刀連歌は脇差俳諧は懐劔なり心切に思ひつむれば其利事はやく始皇の胸先をさすにいたる及長くば其所にいたりがたからむか昔戀といふ題を給はり

夏痩と問はれて袖のなみたかな

といひけむも卽懐劔のきれ味なり

○長嘯子の云はじめて物を誦しよみかぬるは夏中人の家に入てしばしあれば其ものかのものとわかるが如しと

○常に風流の心なき人ものゝ善惡に感じておもはず秀逸の句あり遠江の國にある人の子をうしなひて其ひととせのめぐり來りし比

去年まで呵つた瓜を手向けり

かく千萬のあはれをふくませ申出しとや

○雪中庵曰其角が附句に毛拔にも名を給ふ君が世とあるはかの尾張名古屋の毛拔師南方といへり孔明出師の表に深く不毛の地に入て今南方定と云々不毛といふよりしてむかし近衞殿下の下されし名なりと

○雪中云句振は我生れのまゝにして修行ありたしつくろへるはいやみなり土地によらずして句に都ぶりあり鄙ぶりあり高雄といふ遊女のある田舍人に意見しけるはそこにはいなかにて歷々の御方也此程は江戶衆のはやり詞など似せ給ふがいやみ也よき男と金つかふ人とはやり詞に傾城は倦てゐれば只有のまゝなるが可愛なりありの儘なる人におろかなるはなきもの也ゆめ〳〵似せ給ふなと申せしと一座せし貫支といへる人の物がたり也かゝる遊びものゝ内にも名高きは心のおき所格別なりしからば風雅も

○書林何某煩て心地死ぬべく覺へしに菩提所の和尙を請じ末期の安心をすゝむるあらましにて念頭に後生の大事を逃られけり何某むつかしき男にて有ければ重き枕をあげ樣々の御玄めしありがたく存候也ひとつ御尋ね申度事の候は皆死候跡にて野送りの節御

引導と申事ござ候定めてよき所へ參る事を御教下されん候事に候はんが折角仰聞られてもその時は息たへ耳もなし生たる人のみ承り候あはれ御情には只今仰下されたしと願ふ和尙すつと立て佛前にありける法然上人の一枚起請をとりよみ聞せ是難有き所へ行道中記也と申さる病人大にさとり扨々結構なる道中記にてこそ候へ有難し／＼と息の限り念佛して往生をとげ申ける是書林に對して題のうごかぬところ也

○淡々猫を飼けるに我喰けるめし夜菜(よさい)などを我が器にてわけ遣し膳の脇にてくはせけり門人の曰先生の餘りなる不行跡の飼せられやう也猫の癖あしく成候はんと淡笑つて曰さればとよ初め二三疋の猫は隨分と行儀に飼つけ首玉などもきれいに諸事めし遣ひの女共の取計たりしがいづくへかぬすまれ十日と內の用に立ず畢竟美しく飼たるゆへ人もほしがるなり依て此猫は飼し初めよりかくあしく育たるゆへ一二度はぬすまれたれども行儀あしきゆへ追かへされしとみゆいづれもよく御考候へ猫は所詮鼠の書物を荒すを防ぐの役が專一也と見る時は餘事にかまはず唯鼠の役といふ所が眼のつけ所也俳諧も又かくの如し爰が眼字それが其題の專といふ事を見さだめたし

○或妓家にて星合を大江丸

　七夕の今宵大ほし力彌かな

此句餘りけやけくいかゞなりと申さるゝかた多きよし沙汰有につけ思ひ出し事ありひとゝせ東武にて雪中庵の附句に

　おれも是から醫者になるはつ

といふ前句に雪中

　ひそ／＼と矢間千崎ほり小寺

と附られ候其席に魚汶連丈などいさめて云おもしろき句ながら浮世めき候こゝは矢間神崎などゝあらむにと申蓼太笑て夫にては近代にて遠慮もあり實にはまりてもいかゞなり都て和朝のてあそび源氏伊勢物語など上古の人あながちに不ㇾ可ㇾ尊其作者只可ㇾ翫ニ詞花言葉ニ而已と戸部尙書の奧書有是らをいふにあらねど俳事に八雲の末なればと下略「ちからとあらんには風流なし七夕のあふぼしとつゞけて力彌とされたる宗因の風到をおもふばかりひとゝせに數千の句をいひ捨るうちの我なぐさみなり我にはゆるせとありしひとつの癖と大樣に見なし給はれかしと

○雪中庵蓼太の句に（此一項はいかゞ袋夏の部に見ゆ）
　さみだれやある夜ひそかに松の月
といへるをからくによりほめてこしける事の珍らしければ爰にしるす
撒蜜他列耶阿兒要披促革尼麼子那次吉雪中庵蓼太蓼太先生者隱君子也都人士以爲ニ金馬侍從之流亞ー矣乙未春於ニ崎陽客館ー得ニ俳諧歌一章言ー是先生所ㇾ著僕不ㇾ能ㇾ讀ニ其國字ー故就ニ譯士某ー得ㇾ解解則興在ニ景中ー意在ニ言外ー大非ニ俗品ー可ㇾ知蓋僕亦有ㇾ所ㇾ感也因賦ニ一絶ー寫ニ其意ー傚ニ顰之ー請所ㇾ不ㇾ辭也
　長夏草堂寂　連宵聽ㇾ雨眠
　何時懸月色　松影落ニ庭前ー
　乾隆四十年孟夏月望後三日　雲間程劔南
句のうへはとまれかくまれ俳諧の道の唐土にきこへてかく賞し送られけるめでたさにしるす也
○良能あるとき一卷の變化を説申されし序物語に昔淨瑠璃の作者近松門左衞門國性爺といへる狂言を作り出して大あたりせし跡を猶おもしろき趣向もがなと枕をわりし工夫にわたる其時の芝居ぬし竹田近江申は作者のこゝろにはさここそ存せらるべきがさりながら大當りの跡は大體すら〳〵としたる事をなしておかるべし國性爺にてよほど德分あれば一二年不當りしたりともわれらしきがたべる程は澤山也其間は古き物にても出し其内には自然とよき狂言も出候はん夫より上夫より上と趣向に趣向を重ねたらむかくもてゆかば我家業はつき果申さむたゞ天然にまかされよと申たるは一道に秀たる物の詞諸道に通じ俳諧の一卷の變化もこの心專要なるべしとかたられし
○良能云世に來山が「門松やめいとの道の一里塚」といふ句をもて禁忌也いかに新しき事をいはんとて風雅の罪人になれりと云ふ人あり是は來山が住ける家の裏屋に住居せし者の大晦日に身まかりけり來山が隣は家ぬしにて不斷は庭を通せしかど元日なれば翌こそと申裏のをのこはやもめにて遠き親類抔の取賄たれば早く取しまひたき人なるをと來山聞てきのどくがり我は世をのがれける風人なればかまひなしと許して元日の夕かた我家より野送りを出しやりての詠なるよし夫を罪人といふも又道を重んずるの謂にて殊勝には侍れど物は其時の樣をよく〳〵考ていふべし人の句を聞むも同じ

○手にはとゝのはざれば天地の神にかなはず我人ともに受ざる處あるべしかの伊勢の團友讃岐の浦にて
　生海鼠ともならて果けり平家蟹
との初案認ながらいまだ心行ぬ事のあればこそ其夜の夢に數多の蟹にせめらるゝと見しかば再案
　なまこともならてさすかに平家也
是景清の謠にも叶ひたり手爾葉自然と備り句ぶりも格別なりと我心中に復せしかば心神ともに納り其夜は聊の夢にも見ざりしとか又其角が
　此木戸や錠のさゝれて冬の月
平家物語の內に此木戸は錠のさゝれて候ぞこなたへ
　酢をさせは閻浮にかへる生海鼠哉　舊國

○防人丸山權太左衞門が角力の高名はいふも更なり全體心やさしく風流にして雪中二世吏登の門に入て俳諧のほ句をなす或時連中の望にて我手のひらを墨にて紙に押形となし其かたわらへ
　とつかみいざ參らせん年の豆
かれが身のたけ六尺三寸七分手のひら長さ七寸九分あればよき祝の句也あら〳〵しきわざものながら斯風流なりしもいとやさしかりける(以上俳ざんげ)

○乙由云閑人を訪ふならば風雨の日行べし此方の面白き日は人もおもしろく出て留守なりよしつね大物の船出を思へと申されし

○古雪中庵曰俳諧も年よりて段々と詞を伊達に遣ふやうに心がくべしさなくては物古びて靜なる句も出ぬように成もて行也されば妓家の長といひし中村富十郎慶子心がけを心の師として我はするなりと仰られし

○たのしきに居ては淋しきにたのしみがたく又淋しきに居てはたのしきに樂しみやすしとは古き人の詞也と仙城の白居物語也

○蓮二云百韻は百變にしてひとあしもとゞむべからずば新古自在の俳諧といふべしあたらしき句の二句もつゞきたらん跡へひだるひにめし喰ふと古き詞を附たらば又新き詞よりも珍しからむたとへば人のよき女房もちながらあしき下女に思ひしみて人目忍ぶもよきは古くあしきは新しきゆへならめ

○松江維舟が犬子集十七の卷にしるせし三條殿山崎宗鑑を召れ庭の杜若けふ翌と咲り思ふ程折とるべしと御許ある鑑何の心なう有がたしとて池のほとりに

のぞみ花を折る公
宗鑑かすかたを見よやかきつはた
と仰らるゝ長やがて
呑むとすれと夏の澤水
といまだ詞もひかぬうち
くちなわに追れていつちかへるらん
と鑑つかふまつりければことの外めで笑はせられかずのたまものありしとぞ
はいかゐぶくろ本文に
一、なるみの由父曰山崎宗鑑がかきつばたの脇の事古人いろ／＼と沙汰しぬれども皆ひとつとして慥ならず松江維舟が犬子集十七の巻に玄るせしとさるかたにて承りしと事おなじ或とき連歌師宗長三條殿にまいりたれば公の仰に山崎の宗鑑法師は句は達者にすると聞り汝つれてまいるべし我ほ句せんずるほどに汝早く脇をつけてかの法師せかせてあそぶもおもしろからんと仰なり長かしこまり或日宗鑑をつれてまいりければなにか四方山の御物がたり有て後庭の杜若けふ翌と咲りおもふほど折とるべしと云々

○又支考が童子をつれて吉野山に遊び
歌書よりも軍書にかなし吉野山　支考
と申せしも貞徳の紅梅千句に
公家は衰ふ元亭のするゑ　正章
歌書よりも釋書を専にもてあそひ　可頼
この附句をひとつにして句となせり何れも風流のたわむれ事今の世の人の句を盗むなどの心とは同日の論にあらじ古書は常によく見て覺悟すべしとぞ
○故雪中曰はいかいはもの丶摸様だてなる中に淋しみを聞せたらんこそよからめたとへば故團十郎が顔は赤くくまどりながら紙子きて樂屋に居たらむやうにあるべし
○石髪の云かぶき役者二代目の海老藏が門人にいふ修行はおのれが勝手あしきかたをならぬ迄も精に入てはげむべし得たるかたは夫につれて上達するもの也と申せし我俳諧もその如しほ句かつけ合か勝手あしきと思ふかたを修行すべしと
○霍公鳥萬葉　時鳥古今新古　杵乞　郭公後撰　子規金葉　鵑
催歸　勸農鳥　蜀魄　納鳥　杜鵑後撰　不如歸　周
燕　鶴　望帝　杜宇　子巂　保度々木須とうけえん　鷗鷂

陽雀　怨鳥　鵑鳩　四手田長

○作に名たゝぬものも世におもひ出ぬ天然のよき句をするもの也妓道に名高かりし初代の山下金作里虹

盥よりたらゐにかへる寒さかな

とはよく生死の門を出入せしもの也とある人のかたられし

○良能曰人のよき句志たらむに驚き我も負まじと思ふ心これ卽俳魔なりその日は其人に手柄をさせて遊ぶべし未來記にいへる「負いくさ功者に退てかへる也」といひし如くかやうの時我も〳〵とあらそふ心いできたらむ己がはいかいの地までうしのふべしと

○白牛曰ばせを翁の日はつれなくもの句是は昔尊氏の歌とて

須磨よりも明石のかたにあか〳〵と

日はつれなくも秋風そふく

このうたをかねてをかしと耳底にとゞめひとゝせ北國行脚のとき北枝を尋て秋の風秋の山椎口に枝が器をはかり給ひしこれらも俳諧俗に入たる物とかたられしこのうたいづれの書にありしや志らず

○兵庫の北風といふ家すじはそのかみ神功皇后の異國退治の御時より仕へ奉りし船の家也といふ亦新田義貞より北風といふ名を給はりし家の今に血脈たへせでつゞきたるよしいづくにもたぐひなかるべし

北風か二千餘年の梅靑し　大江丸

○連丈の曰人情をはくには其人をあく迄もうつし得ざればいかゞ也といひしいづれ俳力の入ものなり

初松魚重衡みやり給ひけり　大江丸

はつがつを宗盛むづとまいりけむ　同

初松魚高時くはで死たりける　同

はじめは三位中將の狩野之助がもてなしをあだにせられざるみやび中の句は八島の大臣のおろかにして人前を恥ざるさま末の一句は鎌倉の入道の田樂法師をもてなさゞる恨をのこせり

○信夫曰何の道にても四十年計前かどは名人上手功者下手とわかり下手は下手なりにたのしみ年をつみて功者となり上手といはれ天然と名人の場へもいたりし事なり今はこの下手に成てゐるものなくなりてむりおしに上手といふものになる故名人といふものも出來ぬ樣になりしとかたられしも早二十餘年のむかしがたり也此下手になりてゐたる人こそ風りう

最上の人ならむに左樣の人なき世こそ恨なれ

○半時庵淡々江戸にて其角が門に入りばせを翁の終焉の時其角二十五歳淡々二十二歳也大江丸が江戸堀にて相見せし頃は元文の始め翁六十四歳なりし

○夏の季寄に住吉の御祓火替と有て此火がへと云事いまだ句にもむすばずや見あたらず是はとし毎の六月晦日住吉の神輿をさかひの津大小路の南なる宿院へ（一名名越の丘 夏こしのなか）うつし奉り夜に入て又御本所へ還御なし奉る泉の氏人堺の町人手ごとに松明とぼしつれて七堂の濱といふ所を巡り大和橋の北なる御輿の据へ石に休め奉る津の國の氏人すみよしの郷民各々てうちんをかゝげ迎奉り御輿をうけとりかき揚奉れば和泉の方の松明一度に打消してくらがりをおどりかへるなり此御祭を遙拜してきの國いづみ路あはぢ兵庫の湊西の宮尼が崎の浦々に漁るもの共のかぎりは磯邊に出て挑灯をてらし篝火を焚つゝけ祭まいらすにいづみの方の火の光りのきゆるを期とし各還御を拜しおのれ〳〵が濱邊のひかりどもけちて家に入とかやされば此火の光をせんぐりに目當とし程遠き浦々志ま〳〵迄もかくの如く祭とか然れば境遠き道はかりがたき廣大なる御はらひなり是を住吉火替の神事と申奉る也いづみの人どもの家々にかへる時ははや夜半なれば秋のうつる折から誠に夏越の正しき事是にまさるはあらじとぞ思はれ侍る

火を替るさかひの町や秋の風　　ふる國

○西鶴井原氏住吉にて二萬三千句を吐て夫より二萬堂といへり浮世ものゝ俳者にして近松が俳諧は鶴にならべりと云元祿六年酉八月十一日五十三歳宗因の門人也住吉大矢數は貞享元年子六月五日也此時の矢見其角也と申說あれど此とし其角十六歳

○廣南大泥國より象の渡りしは享保十四年にして大阪を通り寬保のはじめ比まで江戸に育られし何れ八十年のふるごと思へば我もいきたり〳〵象ものちのちは一丈五六尺に及びしなり

七尺の象見た町よ春の月　　大江丸

○活々舊至曰一卷の變化は起承轉の三つ又見聞志の三つをむねにとりて其場の働らきに有べしやむかし太平記にいへる楠判官正成が討手として六波羅より須田高橋數萬騎にて攻め下りしを正成方寸のはかり事にてさん〴〵に追ちらしその跡へ宮都宮わづか五

百騎にて向ひしかば楠早く天王寺を逃て公綱にかちをとらせ扨近邊の山々浦々にて篝火を焚うたがはせ又骨折らずに追かへしたり是程面白き三句のわたりはあらじとかたり申されたり

　公綱もかうむされけむ灯籠

○近年俳諧のうらにて人情をよく盡すものは蓼太蕪村の雨叟殊にその妙ありすもふの句にても

　大内の砂を土産やすもふ取　蓼太

これはかのいにしへ名がみの成衡さつまの氏長がたぐひにて田舍のいゑづとに守りのかはりにとりかへるさまこけても砂といふおかしみをふくめたり又

　負ましきすまふを寢物かたり哉　夜半

妻にあひての情思ひ巡らすべし

　白梅や北野の茶屋にすまひとり　夜半

すもふの祖野見の宿禰も菅神の御先祖なれば一入道の信心もこもれる也是等の力にて風月花鳥の情をいひかなへたらむ道に手だれの程を思ふべし鳥虫のうへばかり凡に察しやりて句作ゑたらむ大方人形の笛ふくやうならんとさる人の仰さもあるべく承れり

○世に秀逸の句あり貞室の「これは〳〵」又貞柳の「にくまれて」の狂歌などは物知らぬものまでいひもてはやすなり誠に世をおほふものなるべしこれに次ては淡々の口癖の「よし野も花のくれ毎に」はかならずいひ出す也是等こそ道に入たる本意なれかヽる一句も願はしき事にこそと鳴海の蝶羅かたられし

○さる御方の御說にて承る名月の文字史記月令爾雅などにも見あたらず又源氏須磨の巻に今宵は八月十五夜にてと有夕顏のまきに八月十五夜月のあきらか成とあり詩歌の題にも八月十五夜とありたま〳〵明月とかけるはたゞ月の清光なるを詠ず按に八月十五夜は名月といへる俳諧の家よりいひ初て本邦の俗稱となれるならむか良夜とはいつにても月のよき夜といふ事也たゞし中秋の十五夜はうごきのとれぬ良夜なりと仰られき今更是を改めがほなるもいかゞ心にこめてあるべしと

○五條の中島なる秋里氏のすゝめるほとりはいにしへ河原の院の鹽竈のあとなるよしこヽをなつかしとひと夜語り明し

　名ありげな鳥なくなり明の月

○春堂の云能太夫橋本何某友人とふたり故專助が辻

能を見物せらるその日は道成寺なりしを見ていかにも感心の體有しかば友の曰辻能はにた事をして間をあはすものとこそ承れいかにかく泣ほゐ給ふ哉と云橋本の答へにさら〳〵左様なる事にあらず專助が道成寺はじめて見申せしが感心いふばかりなし今の世にて口利く太夫の内に是程道成寺をこなすべき人あるまじく覺ゆるなり其かたちはともあれ一體が我ものになり濟してゐるなり外のものをするとかはる事なし故にくつろぎ有て面白し道成寺の場數專助ほどつとめしものあらじたれにてもあれスワ道成寺なりと心のあらたまらぬものあらじ是くつろぎをうしなふ處なるべしと申されしとなりしからば俳席にてもはいかいに心あらたまらずくつろぎありたきものなりとかたられし

○市川五代目の團十郎わざをのがれて牛島に隱れ白猿と號し小さいほりをむすび老をたのしむこゝに請て

いろのしろき猿とのにそと見參まう　大江丸
　とつば冷酒けふのもてなし　白猿
月を秋の花となかむる世にすみて　定來

○江戶俠者はよく利口をいへり物は附といふ事はやりしにみえぬものは不二から駿河鷹といひ又川柳點に「實悟敎よめば不二山腹たてる」とかいひしこれら其事を貫くなりと石瀨子のものがたりせられし

○天王寺のはやし町は梓巫のすめる處にして二季の彼岸には在所の人のこゝに來りてなき人の口をよするとて梓の弓に其鬼がみを招き往事を泣く殊にあきの彼岸はひとしほあはれにおぼゆかしこのはやし町に住るみこの名の昔めきておかしければかきつく

たち花屋小女郎　ゐんきよふぢ　黑格子のもといゐせんだんの木の姊　やぶのうちのかゐ　くろごうしのまん　升屋の女郎　くろがうしのよめ　ふじやの小女郎

その外にもあまた有中黑格子殊に名高し

○十とせあまり先の秋八月十七日春甫のぬしにいざなはれて難波の氏原何某へ月見に罷りしに西のかねうつ頃瑞龍禪寺にまいり爰かしこ拜みめぐり半時庵の殘されし二樹二石のほとりこと更に月なごりなく澄わたりいとゞ懷舊の心うかびしかば靈あらば淡々月のあるじせよと手向して其夜はうぢ原の家に酒

くみかはして宿りせし夢にもあらず又現にもなくうしろに聲有て疾く置いてまつ露を知らずやと答ふるにやをらふりかへれど人なし程なく夜も明て件の事を思ふ露を知らずやの詞のつねならざるをと此翁にゆかりある八千よぬしに物がたりせしにふしぎや此しらべまたく百川の翁にあらむ其夜の情にひかれ枕上にあらはれ給へるならん外の夢想などゝは事かはりたればと深くも感じこのまゝにやはと其あらましを雪中庵へも申遣しけるに誠風流の神に通せしものならめ然らば其神をまつるに如かじとて雪中八千よの三唫を催ふし脚力の往來に調ひしするに不二庵の句をむすびてひとつのかたりぐさとす

靈あらは淡々月のあるしせよ　大江丸
　疾く置てまつ露を知らすや　御
世はむかし秋の中なる松かしは　完來
　やふしかくれに見ゆる北の家　陀岳
いさみたつ駒のかしらを鞍壺に　丸
　夏まだ寒き朔日の絹　中略　來
たのしめや世は實に花の半時庵　不二
　よしのく〳〵も口癖の春　執筆

右前篇俳懺悔は四季の發句千餘り畢附百三十葉ばかり自筆にて寛政二庚戌年出板今年舊國六十九歳亦後篇俳諧袋は享和元年辛酉出板是亦自筆齡八十歳也

西澤文庫讃佛乘初編上の卷終

西澤文庫讃佛乘初編中の卷

目次

西澤文庫讃佛乘初編中の巻

西澤綺語堂李叟著

四方赤良風来山人の誤 虱が道行

太夫 爪本加久太夫直傳

道行虱の妹脊筋

戀すてふ我名はまだき立出る襟の縫目やはだ著のうらなれし故郷をふり捨て何國をあてと定めなく落て行身は人のみか虱の身にも戀の淵深き妹脊の二疋連れ生れついたる數々の足手まとひのはかどらぬ大推峠天柱が原風門の谷うち渡りいとかう／＼たるけんべきの峨々たる峯をよそにみて脊筋海道とぼ／＼とたどり出るぞうざ／＼し見上ればはるかの峯に生茂る木々の梢や烏羽玉の夜晝わかぬ所にも頭虱は住とかや世上の人の惡口に花見虱と浮名たつ身の樂しみもいつしかにきのふはけふの瀬とかはるあすやさつてやもえ出るくさのにそよぐ風さへもしや知死期のつかひかと世を忍ぶ身の一筋に千手の御手につくづくと杖とたのみし七九の里四くはくわんもんを打越て鳥の空音や帯の關十四十六初戀に思ひ亂れし物心血汐の酒のゑひ紛れ縫目のいとのたまさかにほころび初し轉寢のそのむつ言にいひかはし取かはしたる誓紙のからすかはひ男とだきしめてたとへ野の末山の奥虎ふす野邊の足の毛や爪の地獄へ落るともはなれはせぬといはしやんしたその言の葉がしみ附てわたしが脊の入ぼくろ苦勞する身のうき旅もみんなわしからおこつた事こらへてやいのとよりそへば男もともに打しほれ親のゆるさぬ不義徒襟の住居も叶はねばかく落ぶれし二人が中心は矢竹にはやれども走らふにも飛ふにも蚤ならぬ身のかなしさとそゞろ涙にくれにけるがハア迷ふたり誤たりげに數ならぬ此身にも先祖の擧に王猛が傍若無人と名を傳へ不思議をのこす節穴に恨をむくひしためしもあり又水中に浮んでは磁石にかはるの德あればゆびにひねられ灰吹の底の藻屑としづむとも尸に舉有明の盡ぬ妹脊の旅づかれいざや急がん夜明なば東じらみと人やとがめん兎にかくに身の用心の腰眼やくものかけはし白たへの加賀越中の國境ふんどし谷の片ほとり肛

門寺(もんじ)とて名にしおふ大師の古跡ふしおがみ蟻のとわたり打過て金だい宿にぞ著にけり

此一巻は寢惚通人(風來山人の譯なること前に云ふ)の狂文にして天下の珍藏なりこや二字庵の主雨中の徒然に世の塵中を試みんと雅席三昧にいれば宵風來て巨壁の一葉をふく是や我業の大悟を開き手の舞足の踏事を忘れぬ

道行の虱のみか這出て
　つふしにならぬことそ嬉しき

遊女五十人一首 并女三十六歌仙

遊女五十人一首序

漢に遊女あり或は漢濱の遊女とは儒書の詞衒賣女色或は欲色媱女の法とは經論の文又漢書に、たび顧みれば城を傾とありこれら傾城遊女の權輿なれども何れも異國の事也又或抄に此日の本にて昔小松の天皇八人の姫君を七道につかはし給ひ其名を玉肩姫陵風芽など丶號給ひし事を濫觴と記せり然りといへども此說覺束なしそれより遙往古聖武天皇の御代に遊女ありし事は萬葉集に見へたり是を祖として江口、神崎、兵庫、室、鞆野、關、室積其外浦々の君里々の姫其末なりとてもこなさるゝ賴ひ舞妓あり傀儡有て色を賣ふ業となれりされば雲の上に召れ星の位に交り和歌を詠じ今樣を謳ひ我身を盡し人の心をなぐさめける其言の葉の勅撰に入しを始口號の諸書に記したるを撰び遊女五十人一首と題せる其ことわりを序とす

寶曆二壬申歲穐八月吉日　浪華安田蛙文自序

雪島の巖におふる撫子は　遊行女蒲生(がもう)
　千代に咲ぬか君かかさしに

萬葉第十九の歌にて天平勝寶三年正月三日越中之助繩丸の館にて中納言家持と共に雪を詠し也雪島は越中とあれば唯雪の積りしを云

たるひめの浦を漕つゝけふの日は　遊行婦土師(にじ)
　たのしく遊へいひつきにせん

萬葉第十八の歌にて田邊の福麿大伴家持など丶歌をよみ合しとかやたるひめの浦は仙覺抄に越中の國とあり家持が越中の守にて下られける時の事なるべし古の遊女は公卿に交り姿も髮も宮女にやつし姫とも君とも呼れし也

我宿の盧橋はちりにけり　遊行女婦(おとめ)
　花の盛りにあはましものを

萬葉集第八にあり古今集に蛙なく井手の山吹ち

りにけりといふ歌に此歌の下の句をとりてよめり此女も中納言家持大伴村上などゝ歌よみあひしと也

金門にし人の來たては夜中にも　末の珠名
身はたなしらす出は逢ける

萬葉第九に出たり珠名は上總の國の美女末は所の名也金門は門なりたなしらずとは俗にうか〳〵といふが如したなは空也天引天曇りの類なり色好みなる事遊女の類なるべし

左夫流兒かいつきし殿に鈴つけぬ　遊行女掞古
はゆまくたれり里もとゝろに

萬葉集十八の歌也家持の註に左夫流は遊女の字とあり傳曰尾張の少咋といふ人妻をさりて此遊女を迎へたり其後先妻おして來りし時よめり驛馬は驛路の鈴を賜はりし官使の下る義也異本に家持の歌とせり

難波潟何にもあらすみをつくし　鳥飼の立野
深き心のしるしはかりそ

後撰集雜のうた也大江の玉淵が女とあり大和物語に亭子院へうかれめども召れし中に大江の玉淵が女鳥飼をかくし題にて「淺みどりかひある春に逢ぬれば霞ならねど立のぼりけり」とよみし事をのせたり今此歌は友達のかたへ差櫛を心ざすとてよみしなり

命たにこゝろにかなふものならは　江口の白女
何かわかれの悲しからまし

古今集第八別れの歌也詞書に曰源の實が筑紫へ湯あみんとてまかりける時に山崎にてわかれをおしみける所にてよめると有此時源の實が歌に「人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていさかへりなん」とあり

年ふれは我黒髪も白川の　檜垣の嫗
みつはくむ迄老にける哉

後撰集雜の歌也詞書につくしの白川といふ所に住侍りけるに大武藤原興範朝臣まかりわたるついでに水たべんとてうちよりてこひ侍りければ水を持て出てよみ侍りけると有袋草紙には肥後の國の遊君と有（みつはぐむは老かゞまりたる顔かたち也）

音にきゝ目にはまたみす播磨なる　伊豫の長柄
ひゝきの灘といふは誠か

忠見集に見へたり忠見伊豫にいきたるによしあるうかれ女のいひたるとて此歌あり忠見が歌よみの名高きを響きの灘によせてよめり忠見の返し

年ふれはくちこそ增れ橋柱
　むかし長柄の名たにかはらて

委しくは契沖師の川社に註せり

黑染の衣の袖は雲なれや　赤阪の力壽
　涙の雨のたえすふるらん

拾遺集二十哀傷の部によみ人しらずと有力壽は三河守大江の爲基に深く思はれしに病にしづみ今はの時爲基なげき發心せる姿を見てよめる也盛衰記四十五に爲基を定基と有書寫の誤りにや

室つみのみたらひに風は吹ねとも　室積の長
　さゝら波たつあらおもしろや

東齋隨筆に書寫の性空上人告により周防のむろ積の長といふ遊女にま見へ給ふ時長酌とりて諷ひし歌也上人目を閉給へば長は普賢菩薩と顯れ其聲實相無漏の大海に五塵六欲の風は吹ずといへども隨緣眞如の波たゝぬ時なしと聞ゆ又目を開けば遊女にて此歌ときこへし也

津の國の難波のことか法ならぬ　盤島の宮木
　遊ひたはむれ迄とこそきけ

後拾遺釋敎の歌也宮木は盤島第一の名高き遊君なり性空上人結緣經供養し給ひけるに宮木が施物を性空思ふ心や有けんとらざりける時に讀る歌也

かきちらし花とのみふる白雪は　盤島の如意
　雲の都の玉のちりかも

夫木抄第三十の歌也如意は宮木におとらぬ遊君也歌のさま古代めき萬葉集の風體なり

下野やしめちか原のさしも草　江口の小觀音
　われか思ひに身をやゝくらん

六帖の歌をとれり今樣抄には小觀音は御堂の關白道長公住吉詣の序寵愛し給ふ也

ともすれは戀しき方の名におへる　神崎の河菰姬
　都貝をぞまつひろひぬる

夫木抄二十七雜の歌也河菰姬は神崎遊君の長也姬とは君といふ如く容儀の美なるをいふ此時代公卿物語のついで遊君を召給へば別の後戀しき

にせめて都人の名におへる都貝をひろひてなり
とも慰めんとの意也

大かたになとりきくへき秋風の　江口中の君
　さそひてかへる日くらしの聲

今撰抄捕者長元五年十月宇治の關白頼通公八幡住吉參詣の時中の君を寵愛し給ふ此うたは御宴の酌取てうたひし歌也源氏あげまきの我名におへる中の君の歌をとれるなり

年を經てもゆてふ不二の山よりも　蟹島の立牧(たつまき)
　あはぬ思ひは我そ増れる

詞花集第七戀の上に有古抄に因此歌拾遺に人丸の歌に「千早ふる神も思ひのあれはこそ年經てふしの山はもゆらめ」是を本歌とせり

つきもせす憂を見るめの悲しさは　空のみるめ
　あまと成ても袖はかわかぬ

撰集抄に有みるめは顯基の中納言におもはれし一年あまり都に住居せしがすさめられて室へかへりても再び遊女のふるまひせず終に尼と成て讀遺したる歌也

はかなくも今朝の別れのおしき哉　傀儡名曳(なびき)
　いつかは人をなからへてみん

詞花集第六に有くゞつとは鏡の宿などに居て旅人をなぐさめの爲術立衣桁をしつらひ人形をくゞまりつかふの略語にて云也くゞつと號く此歌は東へ下る人に詠送れる歌也

雨雲のかへしの風の音せぬは　島の千歲(せんざい)
　おもはれしとの心なるへし

金葉集第八戀の下の歌也下津の國島上の名高き妓女也
鳥羽院叡覽有り昔より女舞はあれども白柏子といふ號は千歲を始とする事諸書に出たり

足引の山のまに〳〵たおれたる　島の若(わか)の前
　枯木はひとりふせるなりけり

金葉集第八にあり島の千歲と共に鳥羽院の御宇にめされたる白柏子なりうたをよむとて和歌のまへともいひしにやしらず

かすならぬ身にも心の有顔に　都の戸(と)々、
　ひとりも月を詠めつるかな

千載集十三に有藤原の仲實朝臣備中守にてまかれる時女を具して下りけるに思ひ薄く成てのち

月を見てよみし歌也

玉くしけかけこに塵もすへさりし　妓玉櫛
ふた親なからなき身ともしれ

寶物集上の卷に有あやしき女實源律師を請じ親の追善供養して手箱を布施にしたりけるを開て見れば此歌有撰集抄は詞少し違ひあり

思ひこし西の方こそ嬉しけれ　神崎の戸根黒
彌陀の誓ひを賴む此身は

寶物集下の卷に有此遊女としたけて男を伴ひ身のいとなみにや有けん西國へ下りけるに海賊に逢ひきられんとする時西方に迎ひ辭世のうたなり

もへ出るも枯るもおなし野邊の草　都の妓王
いつれか秋にあはて果へき

平家物語に有平相國淸盛公におもはれし白拍子也佛といへる女に見かへられたる時の歌也のち尼と成て嵯峨にこもれり

人の身も佛のたねときくものを　都の妓女
へたつるのみそ悲しかりける

同妓女は妓王が妹にて共に淸盛の寵愛にあひし白拍子なり姉と同心にて西八條の御殿を立さる時今樣のうた也

老の身のなれし都をはなたれて　妓王か母刀自
ひなの住居と成そ悲しき

同刀自は妓王妓女が母なり親子三人共尼となりて嵯峨にこもれり妓王寺是也平家物語にくわし

おもはすも秋にあひぬること草の　加賀の佛御前
我身の上に思ひしけらん

平家物語にあり今樣抄に淸盛公妓王を見捨て佛を寵愛し給へども又ふるさるゝとしりて尼となりて妓王妓女とともに嵯峨にこもれり

いかにせん都の春もおしけれと　池田の宿久萬の
なれし吾妻の花や散らん

長秋記の抄に有遠江國池田の宿の遊女なり平の宗盛にもおもはれ都にありしに母の病によりていとま申受るといへども叶はす宗盛同じ車にて花見に出給ふとき花のちるを見てよめり謠には此くまのをゆやと作れり湯谷と久萬のとは別人なり

やとりあひおなし流を結ふこそ　手越の千壽

みなさきの世の契り成けれ

平家物語に有今樣抄に千壽は手越の長が娘也平の重衡東へ囚はれ給ふ時鎌倉殿の御情にて重衡を慰の爲此女をゆるしつかはされ御盃の酌とらせ給ふ也一樹の蔭一河の流皆是他生の緣といふ朗詠の心也

東路のはにふのこやのいふせきに　池田の宿の侍從

ふる里いかに戀しかるらん

盛衰記四十五に有平の宗盛囚はれ鎌倉へ下り給ふ道遠江池田の宿に泊り給ふ時長が娘侍從御伽にそひふしてよみし歌なり

もろ共におもひ合せてしほるらし　侍從同母湯谷

あつま路にたつ衣はかりは

娘侍從が宗盛公と歌よみ合しに附て同じく母も詠せし也平家物語には大臣を重衡とし又謠には此湯谷を宗盛の思ひものとして作れり

見るとても嬉しくもなします鏡　都の靜御前

戀しき人の影をとめねば

義經記第五にあり靜は鎌倉殿へめされ鶴が岡の八幡にて法樂の舞をかなでしは世にしる所也此歌は芳野にて僧に鏡を給はりし時の歌也

よしの山みねの白雪ふみわけて　磯の禪師

入ぬる人の跡や戀しき

義經記第六に有鎌倉若宮八幡宮にて靜が舞の折から母磯の禪師も法樂の爲舞ける時いうた也跡や戀しきとよめるやのかな字眼なり

都のみおもふかたにはいそかれて　江口の椎木

心すまれぬ柴の庵哉

撰集抄に有江口の尼の連歌とあり西行時雨にあひて同行の聖と共に此尼の庵に宿りしにつれなる僧かく下の句を打すさみしかばあるじ上の句をつけたるとなり

世を厭ふ人としきけはかりの宿に　江口の妙

心とむなと思ふはかりぞ

新古今集撰集抄沙石集にも有西行法師江口にて雨にあひ宿をかりけるにかさゞりければかりの宿りをおしむ君かなとよみし時のかへしうたなり

千歳ふる松の枝には鶴すくひ　喜瀨川の龜鶴

巖の上に龜遊ふなり

曾我物語第八に有今樣抄にかめ鶴は少將と同じく祐經の假屋にめされ備前大藤内が思ひもの也折から曾我十郎假屋へ來り工藤と酒もりの時いどみ有けしきを見て取あへずうたひし今樣歌なり

捨る身に猶思ひ出と成るものは　化粧阪少將
　とふにとはれぬ情なりけり

同第五書に見へたり此女は五郎時宗に相馴しに梶原源太せきてあはせず折から時宗最期の別れをおしみに行しかども逢事ならずして歸れり終に尼と成て虎が庵に住で往生せり一說に手越の少將として別人とせり

露とのみきへにし跡を來て見れは　大磯の虎
　尾花か末に秋風そふく

曾我物語第十二の卷に有虎は十郎討死の後尼と成所の翁をあないにてゐでのやかたのほとり祐成の最期場を見ていとゞ歎きにしづみよみし歌也

月影はさこそ明石の浦なれと　椋橋の龜菊
　雲井の秋そ猶も戀しき

承久記下の卷に有白拍子龜菊殿とて後鳥羽の院の御寵愛にて攝州長柄椋橋西庄を賜ひ世に傾城の大名といへり然るに地頭かめ菊をあなどるゆへ改易の勅有しかども北條泰時用ひず終に兵亂と成一院隱岐の國へ流され給ふ時龜菊殿附參らせ明石にてよみし歌也

信濃なる木曾路にかける丸木橋　都の綾
　ふみたる時はあやうかりけり

沙石集第三に有信濃のある人京より遊君を具し下りて妻とせり此女京にあまたなじみたる男のかたへみをのぼし其返しのみかくし置ぬ夫此事をしれども物ゑがゝぬゆへ息子の兒によませたり此兒心あり唯よの常のみのやうによみて難なかりければ女よろこびてよめる歌なり

物思ひこしぢの浦の白波も　越路の初君
　たちかへるならひ有とこそきけ

玉葉集第八旅の部に詞書に爲兼佐渡國へ罷り侍りし時越後の國寺泊りと申所にて申送り侍りしと有

大船にのることとなれとたのしさは　島寺の袖

同し波路を漕渡る哉

太平記第十七に有今樣抄に越前金が崎にて義貞御遊の船を催し春宮御盃をかたむけ給ひし時袖御階に立て翠帳紅閨萬事の禮法異なりといへども船の中波の上一生の歡樂是おなじといふ心の今樣をうたひしとなり

夏はつる扇と秋の白露と　　野上の宿班女
いつれかさきにおきふしの床

謌祕抄に有班女は美濃國野上の宿の遊女なり本名を花子といへり吉田の少將といふ人に契りて別れの時筐に扇をもらひしゆへ唐土の班女にたとへて異名とせりそのゝち便りなきゆへものぐるはしく狂人となりて諷ひし今樣歌也

死ぬはかり誠になけく道ならは　　傀儡阿古
命とともにのひよとそ思ふ

新續古今集第九に有詞書に尾張國に京より下れる男のかたらひつき侍りけるがあす歸りなんとしける時しぬばかり覺ていくべき心地せぬよしいひけるによめる歌なり

東路に君か心はとまれとも　　傀儡侍從
われも都のかたを詠めん

新續古今集第十に有湛覺法印青墓の宿に泊り主の心あるさまに見えければ曉たつとて「しのゝめや都を旅になしはてゝなほ吾妻路にとまる心を」とよみしおかのへんかなり

聞しより見て恐しき地獄かな　　高師の地獄
しにくる人もおちさらめやは

泉州志提要抄に有もと是は連歌也上の句は一休和尚下の句は地獄也

幾夜われおしあけかたの月影に　　府中の宮城野
それと定ぬ人に別るゝ

疑源抄に見へたり駿河府中の藤井氏此宮城野を請出し夫婦と成て後永祿年中に夫上京の跡にて武田信玄と今川氏眞と兵亂の時軍兵宮城野を犯さんとするゆへ深く隱れ縊れ死したり此歌は遊女の時よめり此歌のやさしきゆへ藤井氏が妻とせしなり

花すゝき君のかたにそなひくめる　　尾道の宮産
おもはぬ山の風は吹とも

疑源抄に宮産は備後尾の道の遊女なり永祿の頃

大和の國廣瀬十郎といふ郷士尾道の伯父方に滯留の時ふと宮産に契り互に深くあひなれてよみし歌也

思ひやる今宵はたれと契るらん　吉原吾妻
　定めなき世に定めなき身は

宗因紀行に出たり吾妻太夫は風雅の聞へ有もの也延寶年中の全盛と聞へたり

右寶曆三癸酉年八月吉日出板畫工江東蒲生大谷産
　月岡丹下

平瀨露香氏藏摘英雜錄卷二にのす同書には末文に左の如くあり

選者　浪華阿紋觀安田蛙文
畫工　江東蒲生大の谷産月岡丹下
翰士　浪速　桂井蒼八
書林　大阪島の內南塗師屋町浪華屋忠五郎

右は寶曆三癸酉歲八月吉日の出板也

女三拾六歌仙といへるを因に爰へしるしぬ

思ひつゝぬれはや人の見へつらん　小野小町
　ゆめとしりせはさめさらましを

三輪の山いかにまちみん年ふとも　伊勢
　たつぬる人もあらしと思へは

秋風の吹につけてもとはぬかな　中務
　荻の葉ならは音はしてまし

何か厭ふよも長らへしさのみやは　殷富門院大輔
　うきにたへたる命成べき

逢事のまつに月日はこゆるきの　右近
　今は恨んいろにいてゝや

絶ぬるかかけたにみえは問へきを　右大將道綱母
　かたみの水は水草ゐにけり

あふ事はこれやかきりの旅ならん　馬內侍
　草の枕もしもかれにけり

常よりもまたぬれそひし袂かな　赤染衞門
　むかしをかけておちし涙に

諸ともに苔の下には朽すして　和泉式部
　うつもれぬ名をみるそ悲しき

ぬまことに袖ぞぬれけるあやめ草　藏人左近
　心に似たる根をもとむとて

みし人の煙となりし夕より　紫式部
　なもむつましき鹽釜の浦

死ぬはかり歎にこそは歎しか　小式部內侍

いきてとふへき身にしあらねは

馴行は浮世なれはやすまの蜑の　齋宮女御
鹽燒衣まとふ成らん

たよりある風もや吹と松島に　清少納言
よせて久しき蜑のはしふね

うたかひし命はかりは有なから　大貳三位
契りし中のたえぬへきかな

ひとりぬる人やしるらん秋の夜を　馬内侍
なかしと誰か君につけつる

浦風に吹上の濱のはま千鳥　一宮紀伊
なみ立くらし夜半に鳴なり

諸ともにいつかとくへきあふ事の　相模
かたむすひなる夜半の下紐

忘れてはうちなけかるゝ夕哉　式子内親王
我のみしりて過る月日を

みわたせはふもとはかりに咲初て　宮内卿
花も奥あるみよしのゝ山

契りしにあらぬつらさも逢事の　周防内侍
なきにはえこそ恨さりけれ

俤のかすめる月こそやとりける　俊成卿女
春やむかしの袖のなみたに

おもひきや忍ふへしとはうき人を　待賢門院堀川
なとかはるらん吾心さへ

なにとなく聞は涙そこほれぬる　宜秋門院丹後
苔の袂にかよふ松風

夏引の手ひきの糸の年經ても　嘉陽門院越前
絶ぬ思ひにむすほゝれつゝ

一夜とて夜かれし床のさむしろに　二條院讃岐
やかても塵のつもりぬるかな

樒つむ山路の露にぬれにけり　小侍從
曉おきの墨染のそて

心していたくななきそ蟋蟀　後鳥羽院下野
かことかましき老の寢覺に

をく露は草葉のうへとおもひしに　辨内侍
袖さへぬれて秋は來にけり

恨ても泣ても何をかこたまし　少將内侍
見しよの月のつらさならては

別にしその日はかりは廻り來て　伊勢大輔
いきもかへらぬ人そ戀しき

春は猶かすむにつけて深き夜の　土御門院小宰相

哀を見する月のかけかな

曇れかしなかむるからに悲しきは　八條院高倉
月におほゆる人のおもかけ

偽とおもはて人の契けむ　中納言尙侍家
かはる習の世こそつらけれ

身を去らぬ同じ浮世と思はすは　式乾門院御匣
いはほの中も尋ね見てまし

それをたに心のまゝの命とて　藻壁寺門院少輔
やすくも戀の身をやかへてん

白猿徒然文題上の卷

徒然文題發句獨吟狂歌獨詠反古庵白猿戲述日本の論語と稱する徒然草は反古の裏にかゝれしときくに我等如きの戯れ書をかゝる白紙にかひつくるはおこがましくもたいなくはおぼゆれど人每に一つ癖は神佛も人間をゆるし給へまた假名遣ひ一向に存ねば推量にて讀給へと白猿がいふ

序　つれ〳〵なるまゝに
蝸や硯にむかふ窓の先　反古庵白猿
年ふれは筆も坊主になるものを
かみおしみ也反古うらとは

一　いてや此世に生れては願はしかるへきことこそおほかめれ
いてや此世に住甲斐も鳴子引
いてや此世に生れては願はしき
ことおほかめものゝ寄合

二　古への聖の御代
此里は神代のまゝのまつりかな
古への聖の御世の政事
忘れぬ里は隙な辻番

三　玉の盃そこなきこゝち
蓮呑やそこぬけ上戸玉の汗
禁酒したそこぬけ上戸玉かかね

四　のちのよの事心に忘れす
のんてふさけるいとそう〳〵し
草の戸や露の命のおき所
燒は灰埋めは土と身はなれと
心は西に有明の月

五　顯基中納言の言けん
罪なくて配所の月やはつ松魚
罪なくて配所の月を三圍も

六　水の出るにははつとあき甚
子といふもの
子といふものなくて有たき暑さ哉
子寶の多きに末はいさしらす
まつ當分はかゝる貧乏

七　人計命長きはなし
斯なれは彼も哀よ九月の蚊
春秋をしらぬ蟬さへ有ものを
古稀の賀祝ふ人そめてたき

八　粂の仙人
掛香や袷なんとは借のもの
雲にのる術もけふからさつはりと
罷洗濯になんと仙人

九　女のあしたにて作れる笛
鹿笛や汝か妻も待わひん
あしたにて作れる笛の其主は
しかもかの子のふり袖の君

十　蔦ゐさせしと繩をはる
寢殿に繩引く時は蛙子を
しんてんの繩にかゝるな凧

十一　鳶のさらふあふなけもなし
おか棚に菊紅葉折ちらして
閼伽棚や木の葉煎に甚
おか棚に折ちらしたる菊紅葉
狐たのんて舍にしたさよ

十二　同し心と物語
よき友を月夜に得たる口雨
影法師を友達にして遊ふなら
馳走もいらす爭もなし

十三　見ぬよの人を友とする
螢消て雪には遠し月の窓
夜もすから見ぬ世の人を友衛
いく夜ねさめぬ老のつれ〳〵

十四　臥猪の床
猪に噓をさせる薄かな
猪のふすいな客はお身の爲
野邊は錦に夜具の敷物

十五　いつくにも旅立たる
馬士唄に明て卯月となりにけり
都をは鼠に留守を預つゝ

明店にして白川の關

十六　かくらこそなまめかしけれ太神樂

獅子を庭んで三ヶ日

かくらこそなまめかしまの躍ぶり

面白瞥紊狐醜／＼

十七　山寺にかきこもりて佛につかうまつる

山寺に煩ふもかりの時雨哉

撞も憂しつかぬもつらし鐘つきは

心盡しの山櫻哉

十八　許由瓢を捨る

格番に瓢を廻す清水哉

世の中のことばどふとも生瓢

はてはてゝ猶心涼しき

十九　一きは心うきたつは春のけしきこそ

鶯に此頃つゞく朝寢かな

世を捨ても遊多く成にけり

月雪花に出はゝとさす

二十　客の名殘

貧棒はともあれ客の名殘かな

光陰の彌生さつきと唯過て

土用に近き暑さ哉

二十一　月と露のあらそひ

下戸達は露の哀よけふの月

月はおかし露は哀とあらそへど

とんと錢にもならぬこと也

二十二　古き世のみぞしたはしき

印籠の時代蒔繪や花相撲たり

何事も古き世のみぞしたはしき

よひ／＼ものと人は云共

二十三　衰たる末の世

おとろへた世と誰が云し年の市

衰た末の世なとゝ申せとも

二歩ては買ぬ初松魚哉

二十四　すへて神の社こそなまめかしく捨がたきものなれ

八判に猶なまめかし御遷宮

佛をばなかこお經はそめがみと

いふは神道ひみつこうさい

二十五　飛鳥川の淵瀬

桃李物言ぬが花の垣根かな

聞しことゝきゝなかしなる通り者
　　云ぬか花の浮世成ける

二十六　妹が垣ね
　　昔見し芋が垣根は芋畠かな
　昔ほし[illegible]荒寺の
　　　住持と成ていと殊勝なり

二十七　御國ゆづりの節會
　　殿守の朝寝かなたる紅葉哉
　つこもりの拱も隠居は餘處に見て
　　　拂はぬ庭に紅葉ちりしく

二十八　ぬのゝもかう
　　天蓋にあら／＼しさよ秋の風
　葬のこわめしやつとくひ過て
　　　はらも十萬億土成けり

二十九　酒にしかたの戀しき
　　去年の友二人缺たり冬籠
　忘られぬ死んだ女郎の文がでゝ
　　　返／＼も泣せけるかな

三十　去る者は日々にうとし
　　さるものは日々に獨活汁揚豆腐

有はなくなきに數そふいやなこと
　　哀いく日ものらをかわかん

三十一　雪のことかゝぬ文
　　雪の事かゝぬ手紙やとしのくれ
　雪のことかくはかりなる長文に
　　　つもる思ひの消やらぬかな

三十二　こゝのつき月見歩行
　　垣間見にいとゞ月夜の美人哉
　忍ぶにはやみか吉田の兼好も
　　　月にうかれてふらりしやらりと

三十三　閑院殿のくしかたの穴
　　夕風や窓に手の込夏座敷
　拂玉へ溝のんなから組たてゝ
　　　六根障子はれば引越す

三十四　やなたりはかな澤うらにあり
　　へなたりや野島の蜑の濡浴衣
　金澤の名題の餅をつく音は
　　　へなたり／＼ことぞきく

三十五　手のわるき人
　　山里や花に來よとのにじり書

口惜の書出し見ればいかさまに
釘の折ともいふべかりけり

三十六　久しく音信ぬ女のもと
夕貌や是はかきねのそとの花
隔れのはてはいづくへかし本屋
人しれすこそ積る見料

三十七　へたてなき人の心をくさゝ
元日や夫婦くらしも折目高
年禮にわせた江戸衆へもてなしに
田舎豆腐のかたひ附合

三十八　身の後の巨金
夜さくらや引四つ過て又おかし
主は潤巨金は山へ捨る程
せめて一日持て見たさよ

三十九　念佛の安心
日は覺め南無阿彌陀佛時鳥
一寢入りねぶつ唱へて寐れば
たねを枕の夢の世の中

四十　くりをくふ女
栗好む娘はいくつ十三夜

物思ふ君がおかほの杓子栗
ゐめどもむきて見る人もなし

四十一　かもくらべ馬
山猿の祭見てゐる梢かな
加茂川の水ぞうすひをくらべ馬
五月五日は初日じや〳〵

四十二　きのゝぼる病
二の舞の面もかふらす松魚かな
此人にして此病有たけの
錢ではたらぬこほうたんかな

四十三　春の夕ぐれ文見る男
よみはてぬ胡蝶の巻や夕日影
二巻目を握つめたる欲心の
報で今夜ちこくへぞ行

四十四　笛吹て倫華に至る
涼しさや編戸をもるゝ灯の光り
笛竹の音の編戸を吹送る
風に眞如の月は映けり

四十五　榎の僧正
露の間を心つくしや庭せゝり

胸並て切倒したる大[illegible]
　しゆらをもやしの薪とそなる

四十六　御原の強盜法師
　口するゝ身をまかなりに[illegible]かな
春風の柳と同し人心
　解ては結むすびてはとく

四十七　嘘兒の尼
　入相の風を引すな姥ざくら
くつさめの一つは噂三つは風
　二つはそしり六つかしの世や

四十八　對重
　鷹匠や草鞋のまゝの[illegible]敵
やきめしをくひちらしたる重箱を
　誰に洗へとつい重置

四十九　心戒世を歎す
　あきらめのよひ女房や花の留主
死ぬことを知てゐなから心めが
　やくにもたゝぬ苦勞する也

五十　女鬼
　都かな鬼見かてらの夕涼

百國の橋の[illegible]の[illegible]娘
　宇治よりまさるそだち成けり

五十一　龜山とめゝ水車
　番匠の裸涼しや水車
世の中は廻りもちなる水車
　雪つまりたる年のくれかな

五十二　石清水拜ぬ僧
　遠近にみてらを拜む落葉哉
はかはかと行て參らぬ石清水
　しらぬか佛極樂寺きり

五十三　鼎をかふりし僧
　かなへをば仕舞ておきやれとし忘
酒の上征が過て大かぶり
　家内のさわき只葬てなし

五十四　辨當祈
　今さらに御籠もほしき枯野哉
辨當の印ンを結をぬすまれて
　珠數さらさらと茶漬くひたき

五十五　家作りは夏をむねとすべし
　須磨内裏夏を宗徒は兵者等

家作りは夏を棟上け柱たて
〆口やあれの木遣り〻匠
五十六　わがかたに有ほとの事いひちらす人
一年のふさたをしやへる御慶哉
尻馬に乗ては落るさしてもの
毎度咄の腰をふん折く
五十七　歌ものかたり
かくし藝皆懺悔せよとし忘
しらぬ事知たふりにて夕闇暮
諸行無性に咄をつき鐘
五十八　静ならては道は行しかたし
三味線に隣かゝはや冬籠
道中の工夫に骨打の座頭
一[illegible]しに本来空[illegible]
五十九　命は人をまつものかは
翌日は又あすの命そはちたゝき
われ死なば[illegible]に問はれよ
地獄へおちて便なければ
六十　芋頭といふ僧
八本のはきあしおかし芋畠

百日の説法といふ冥加錢
芋にのこらす入上にけり
六十一　御座[illegible]雷落し
[illegible]鳴ておとす雷そほとゝきす
初聲のきかまほしさに時鳥
雷なり共落してや見ん
六十二　ふたつもじの御歌
ふたつ文字牛島かけて涼み哉
二つもじ牛の角文字すくなさに
茶漬にせんと眼は覺ゆる
六十三　後七日の阿闍梨武者
水鶏にも心ゆるさぬ宿直かな
盗人に逢ふた跡かふなう繩は
いかいたわけと人か嘲
六十四　五つの緒の車
颯[illegible]る五つ緒車ませ誰
五つ緒の車にのればむつかしや
七つ起して公事にやつるゝ
六十五　かふりのさまも昔より高くなりしとそ
冠からすかたかへしそ辻か花

かんむりの高き位に登るより

たゝ沓ろひて寝て咄す友

六十六　年羽のきし

梅咲て雑子ふるまはん春の雲

梅に鳥附る故實も有明の

月はとしはの名残なりけり

六十七　岩本はなりひらなり

岩本の宮居も古りぬ朧月

中將の扮も鬚には豆男

性か悪いと人か岩本

六十八　土大根敵を追ふ

大根よ實も汝は鬪の者

大根の出に鋤く太刀風に

かゝみて逃るふたまたの武士

六十九　豆からを憐む

豆からの焚火に袖のしくれかな

豆からにわか身拆つて獨り旅

あらいたわしの草鞋くひやな

七十　琴の柱を縛ふ

星の夜やことち作らぬ瓜はつれ

立琴の其糸筋も十三夜

ゑつれはかけた柱を縛らふ

七十一　名をきくより傒の推はかるゝ

領見世や下らは淺尾爲十郎

名を聞て斯くと思ひし傒は

とんた違ひの[illegible]大言で

七十二　多くてみくるしきは顯文に作者[illegible]た書の

すたる

多くてみくるしからぬは文車ふみちりつか

のより

落葉してあちこちに交る宮居哉

日程にゆかぬ心を省て

雨戸はつすなわさわひのかと

七十三　世にはそら事多し

參らふと存しなからも時雨哉

かくすよりあらはつかしのわか心

うそを筑摩の鍋の數なり

七十四　東西に急南北にわしる

年の關しるもしらぬも大三十日

掛乞のつれなく見えし別より

曉はかりよき春の空

七十五　つれ〳〵わふる人
鶯や江戸から誰そ來はせいて
世の中のうきに秋葉の猿の爪

七十六　世の聞へはなやかなるあたりに交る法師
ひつかくれ家に身をかこちつゝ
心から隠居も實[illegible]秋の風
隠居ほと費な物は世にもなし
そふ思へとも死ぬことはいや

七十七　人のうへ言ならす
はせを以後物もいはれす秋の風
物いへは唇寒き秋なから
言ねはならぬ論の言擇

七十八　今やうのこと共言弘る
よみうりの笠につれなし秋の風
六百になる御比丘尼の生國は
扨も若狹の國とこそきく

七十九　辨たる道は口むもし
達磨忌や灰汁であらつた古布子
たるまとの九年見つめし壁に耳

八十　人毎にわか身にうときことを好
片手のこへを聞出されけり
顔見世や片手の聲をかけるはし
小男か大脇さしをほつこんて
糸ひん奴はゝ廣の帶

八十一　屏風なんとの繪に主の心はしらるれ
元日やとこの床にも不二の山
世の中は霞天井に大津繪
坊主疊にひとつ竈

八十二　頓阿かうすものゝらてんのしく
露の世の記行書れ[illegible]吉のうら
五器の外道具のいらぬ我庵も
筆と紙とは敷島の道

八十三　竹林院殿は一の上にて出し給ふ
足ることを汁もよこしもわか菜哉
上へみれは限もあらす
下みれは限もあらす限りなの世哉

八十四　三度渡大
鯛や日歸りなからも八百
錢金をおもいれかねてかゝ[illegible]

とてんの供に立そ嬉しき

八十五　惡人のまね

雪の眞似して轉ひけり花の山

人心唯賢きに馴よかし

梅か香匂ふ鶯のした

八十六　惟繼閭伊と同宿

僧正と一日談らん山さくら

かり初の浮世に士すのかゝりうと

一家一文なしの身代

八十七　具覺房馬の口つきに切度ゝ

花盛供にしやうなく下戸か増し

酒きけんよのよいといふまくれ

歸す刀につた／＼坊主

八十八　道風の朗詠集

其愚には及ふへからす大三十日

五十から手習してもいろはにほ

へたの上手に成も一心

八十九　奥山に猫また出る

如意かりて連歌戻りの枯野哉

尾は二つ姿は三毛の乳は四つ

いつの間にやら人くらふ猫

九十　乙鶴丸やすらとのゝかしらを見すと答ふ

頭巾ぬけは見違へらるゝ隱居哉

隙な時おり／＼通ひやすらとの

夜毎／＼におとつるゝなり

九十一　赤舌日

柴の戸や暦はなくも梅の花

吉日によいことをして惡日に

惡をせぬのか吉田相傳

九十二　弓を習ふ人

總領に乙矢もたすな弓はしめ

一本て覘はつきぬ大的は

にほんめてたき弓の名人

九十三　うらんと約せし牛の死ぬ

牛一つ安賣にせんとしの暮

たのしみは春の櫻に秋の月

夫婦仲よく三度くふ飯

九十四　ちよく書の下馬

遠爽の紅葉におりて女かな

世の中は下から出るも程かある

九十五　はこのくりかた
親にもらふた我身ならすや
小細工か利てうるさき師走かな
儒佛神慈悲より外に掟なし
心まよふなはてしなき世に

九十六　ゐなもみはくちはみにさゝれたるにつける草なり
蒼蒡をさかしに出し暑さかな
生繁る野ちの旅人心あらは
朽葉見らて摘やもなもみ

九十七　國に盗人家に鼠
帆風は花見た後の月見哉
熊坂も物見の松に摺火打
聟は書雛と明す明月

九十八　後生を思はゝ甚太かあ一つも持まし
皿鉢のたらぬもおかし花の宿
貧しくは貧しき口（露カ）になからへよ
いつまてこゝに住やはつへき

九十九　竈屋の唐櫃あらたむへからす
御内儀のさし圖をまちやれ土用干

百　千早ふる神代のまゝのから櫃は
明すに塵を拂ひ給へや
曲り曲りて水を召す
冷水に器好みも奢りかな
はこねから先にはやほか有ふとも
江戸はすいとの水の皆上

百一　宣命を忘るゝ
女中衆てことたる桃の節句哉
龍宮て泣て見せたる智恵の程
猿とは膽の太いやつ哉

百二　衛士の又五郎男
林間の落葉に衛士の膝火哉
林間に酒あたゝめる又五郎
されは公用茂き身の上

百三　謎〳〵の詞
神棚や三月の末はから瓶子
ある人の内儀狐に化されて
闇の中ておはくろをつけ

百四　人目なきに忍ふおとこ
確に寝ぬ夜の甲斐や時鳥

短夜の貫きぬ〳〵の別れ霜
　消るおもひに起まとひけり

百五　きたの家影に啼く男と女
　忍路やわるい所に雪こかし
忍ふ戀人のよかぬ所にて
　出合かしらを見ぬふり通

百六　讒容惡口
　時雨るゝや都に近きかたはたこ
お十夜とかたせ參りとてつくわせ
　互ひに惡くいゝ沼の花

百七　ほとゝぎすや聞給へるかと心引見る
　雲のうへから挨拶からやほとゝぎす
一聲の雲井に高き時鳥
　てつへんかけ直なしに聞たや

百八　一錢かるしといへともつもれは人を助る
　風を切れにして千金の夕へかな
春宵一刻未餘寒のつよければ
　價千金の起りこそすれ

百九　高名の木登
　こわいけんせふにもおそし年の暮
木登りの登り詰ては怪我もなし
　唯下り際に心用ひよ

百十　雙六の傳
　雙六の目傳授する師走哉
雙六をふり込降す村時雨
　とふやら雪に四三ヮ中ぬき

百十一　碁を好む人
　碁かすんで又打向ふ巨燵哉
功なら†名とけす身退きたれは
　碁を討事も存不申

百十二　わか生涯に譯話たり
　嘆々[illegible]も同し夢心
夢の世のさめた所か用もなし
　二度寢をしても夢や結はん

百十三　四十に餘り色すてゝ
　兼好は[illegible]とふ比は初幟
そこなはぬ身形りかの山の紅襦袢
　やはかりしより思ひ染てき

百十四　ことやうの名つきたる女房達
　女中衆を俗名て呼ふや年忘れ

御器量はしかも十八浪越た
　御末女中の御名も松山

百十五　虚無僧敵討

御無用と留ても春の行衛かな

御無用と止て止らぬ命こそ
　終に河原の夕暮の露

百十六　葛の名も昔は安らかに附けり

　書初やお鶴[illegible]松竹に助

法性寺入道前の關白は
　年始の禮に口か酸くなる

百十七　よき友三人有

わか宿によき友三人り江戸の春

金持と醫者と智恵ある人なりは
　これいにしやれ損のないもの

百十八　鯉の羹

きぬ〳〵の袂露けし洗ひ鯉

くふもうしくはぬもつらし武藏屋の
　鯉は木椀に餘る大鍋

百十九　かまくらの松魚

引提て八十二斤初松魚

極樂の百味のしきもなにかせん
　松魚か出るとことは樽酒

百二十　唐のものは藥の外なくとも

紅毛の文字や竹筆の匕加減

日本の金て藥を買込は
　唐にもまして富貴神農

百廿一　犬は守るかならす飼へし

管仲か寝覺は安し雪の門

[illegible]は出す其まゝよ慈悲心と
　佛法僧も日本の鳥

百廿二　人は[illegible]道を學を第一とす

御降へ先孟子入る御慶かな

忠々と雀かなけは孝々と
　烏か觸て廻る每朝

百廿三　衣食住

衣食住の子三人在り花の春

麥くはす雨にうたれす風ひかす
　可なりに揃ふ衣食住哉

百廿四　唯念佛してやすらかに世を送る

蓮の國十萬億土遠からす

六道の街の外の近道に
　花も咲升月も照り増
百廿五　導師の顔を狗に見立る
　歯に絹を著せぬもつらし秋の風
酒もりかこふしく＼て鴻門の
　會よりもまたこわひ口呑
百廿六　はくちのまけ
　子を捨る藪のあなたや西の町
一のうら六な心をもたぬゆへ
　獨り乞食となり果る身そ
百廿七　あらためて益なき事
　筍や八幡の鳩ものそかるゝ
あさつきをむすびそめたる妹背中
　主人は通りものの言娘比
百廿八　萬虫迄も命を惜む
　先送れは共に嬉しく放鳥
蚤と蚊と蟻と虱と集りて
　人を喰ふ事計いふなり
百廿九　顔回は人に勞を施さす
　名代のかりの枕やほとゝきす

下は皆上の掟を守なり
　缺れはかくる水の月影
百三十　己を曲て人に隨ふ
　おとなしい人に德ありぬくめ鳥
人に得とらせてわれも損せしと
　心かけるかほんの發明
百卅一　貧き者は財を以て禮とす
　村長の机は挾し歳暮錢
是事を注かけめしに香の物
　品仕事て腹は錫鐵
百卅二　元日の參賀
　屠蘇酒や廻れは鳥羽の作り道
岡雨は鳥羽繪のやうな造り道
　七つさかりに仕舞舍庭
百卅三　夜のおとゝはひんかしみまくらなり
　寐譜りの左りの耳やほとゝきす
人は皆帝樣でも
　寢人ば同じ夢の世の中
百卅四　三昧借錢を捨る
　秋風や流にうつる旅やつれ

わか影の寫る鏡は曇共
　心はなとか磨さらんや

百卅五　馬のきつりやう
　資季にいさ奢らせん鰒そ汁
知らぬこと問れて知た顔すれは
　心の內かくれんとう哉

百卅六　土へんの誤
　本草にもれてうれしや初松魚
しほといふ文字さへ知らぬ[illegible]師
　さりとはつらの皮の敦重

徒然文題上の卷終

西澤文庫讃佛乘初編中の卷終

西洋文庫 讃佛乘初編下の巻

目次

西澤文庫讀佛乘初編下の卷

西澤綺語堂李叟著

徒然文題下の卷

反古庵白猿通

發句獨吟狂歌獨issue

一　花はさかりに月はくまなきをのみ見る物かは

此春も寝て仕舞けり柴の庵

花は散り月はもらねとたることを

新樹の窓に蟬の諸聲

二　くす玉もきくにかわる

玉味噌の薫りふせくや菊畠

くす玉の取かへらるゝ菊の花

菊香はしき九重の内

三　秋の草

蕣やさっきりて蟬の枕元

四　朝顔は朝な〳〵に咲かへて

盛久しとへらす口いふ

[illegible]死して時壊るは智者の恥る所なり

盗人の擧て歸るや菊畠

身のゝちに財の殘るは御隠居は

聟や娘のきつひ厄介

五　古鄕の人と物語

古里の忘かたさよ雲白樓

京かよい江戸かよいとのあらそひも

もとは古鄕を思ふ心切

六　心なしのよきつ言

猿曳よ猿ほどの子も持ながら

世中の親の心はおしなへて

唐も大和もかはら撫子

七　人の終えんのさた

蜷川が賑貴し花の雲

總領に姉に妹に孫彥に

玄孫まで見て賑に死す

八　阿字觀

たまされる人は貴し年の暮

僞りも實と思ふ心より
　祈れは石も佛とそなる

九　落馬の相
　女郎花落馬に怪我はなかりけり
　桃尻にして毎度乗り栗毛馬
　　刎落されて恥を栃の木

十　兵仗の難
　田鼠化して鶉も猫にくはれけり
　光陰の矢にむないたをゐとふされ
　　あゝらくるしの節句まへかな

十一　灸治神事に穢
　宿下りの一日はつらきやいとかな
　灸こへて拜まぬ神や佛なら
　　不動はきつい得手勝手なり

十二　四十以後三里をすえへし
　四十越すうき身に寒しやつこ花
　信神の御影て灸もすえぬとは
　　無病れいほう神道の徳

十三　鹿茸をかけは鼻に虫入る
　鹿狩や吾妻男に京女郎
　眼から鼻へぬけ出る程の發明も
　　つまる所はたつた一口

十四　物の上手もはしめは不堪のきこへも有へし
　蝶になるはたらきもなし蚰蜒
　七年に一寸伸る楠木も
　　月日つもれは梁となる

十五　五十になるまてあからぬ藝
　不器用な人は目出たし年忘
　精出して習へは上る年六十
　　ましてことしは六つの書初

十六　靜念老衰
　丈六の無量壽佛や眉の霜
　酒のます肴もくはす戀をせす
　　生たかひなき僧の貴き

十七　資朝とらはれをうらむ
　雛棚や莊子かめにはひな祭り
　わか國の梅の盛も過ぬれは
　　大宮人の御出ちかよる

十八　かたわを見て異草をぬく
　ことそうなもそうこのみや一花口

ちんぼうもびつこいさりも夫々に
花見てくらす君か代の春

十九 死は汐のみつるごとく
蛤に足ることを知る汐干哉

世の中は百迄ゐたか今死ぬか
知らぬが佛寝か極樂

二十 大臣の饗應
高安し晴て寝る夜や年忘

我宿の狭さに人の別莊を
かりの浮世に世話なふるまい

二十一 筆をとればものかゝれ
曇なき神の鏡や梅の花

ことにふれて來る心をすてゝ見よ
罪も報も南無阿彌陀佛

二十二 盃のそこを捨る
あばれ蚊や捨盃にへばり付

おあひじやのおてもとじやのと樣々に
しいつけられていたみ諸白

二十三 総結
宿下りのとけぬおもひやみな結

御家風もしやんとりゝしきみな結
舞ぬ思ひの君か下紐

二十四 行法のほうの字はほうと濁りて云へし
鶯や朝題目に夕雲雀

濁る共澄ともよしや世の中は
流れ渡りの水の月影

二十五 花盛は立春より七十五日大㆑違はす
七十五日命なりけり初さくら

ちるにさへ目出度ものを櫻花
増して盛の褒めやうもなし

二十六 承仕法師獄に入
身の業をはたくや雁の諸翅

打ふせて命を烏の報にて
縄目のはちは承知千萬

二十七 太衡の太のしのてん
書物や玉といふ字の筆走り

御手跡も吉平殿のうら書に
點の打手はあらしとぞ思ふ

二十八 人逢時多く無益の談有
壁越にもの言かはす時雨かな

江戸の衆か田舎へわせて久々に
御意を得ましの麥の御馳走

二十九 我俗にあらす世に交る
乘合てみれは涼しやわたし船
江戸者の談り出したる大さつま
あきれはてたる京の錢湯

三十 雪佛
雪達摩何處有南北無東西
鶯が御經をよめは忽に
罪消はてる雪女かな

三十一 あらぬ道の席にのそみて
武士の八幡鐘やほとゝきす
翌日有と思ふ心の山開
夜るは嵐の深川の客

三十二 今は忘たり
顔見世や藝無猿の懷手
聖人も禮を老子に問の芋
ふかしきなれや大玄の道

三十三 世の式
よのしきもかはらぬ御代の御慶かな
何事の式三番叟翁たち
面白いめん面黒いめん

三十四 さしたる事もなきに人のかりゆくよからす
草履迄二日灸や梅の客
世の中を遁れ〳〵て住めは又
めがれ同士の交はりそ憂き

三十五 貝覆
人並に膝行も摘や土筆
貝覆ふ人は燈臺元くらし
遠く願ふは愚成けり

三十六 老て智の勝る事若くて姿のまさるかことし
女房の下戸も頼もし山さくら
龜の子の池の日向に連立は
いく萬年の齡成らん

三十七 小野の小町の事
はなうりのいつまでか世に古布子
花の色は現か夢か幻か
木々の梢は皆毛虫婆々

三十八 道をたのしむ

分登る籠はくらし月の宿
何ことも馴ては性と成ものを
心こそから心くるしむ

三十九　人に酒をしゐる

唐土の人に見せたや夷講
二階から廻らぬしたの氣をかねて
あけもとしもならぬ色客

四十　黑戶

とし寄の炊こと見たり冬籠
墓目する宿直はなきかやよいかに
黑戶の鷹（以下缺文）

四十一　かわき砂子

都かな花に琴の音鞠の音
春雨に泥滑る鞠場へしく物は
鋸屑もたんとありく

四十二　古き內侍

人にくき師匠しらすの女房哉
其昔內待ときゝし姑の
きり口上に嫁の氣かはる

四十三　唐　西明寺は大門北向なり

ふく禪の北向き寒し松並木
大門も大門も字は同し事
されは唐にも北向の寺

四十四　神泉苑にさきちやうをやく

長閑なる聲の限りや法成就
春も潮神泉苑の汀なる
池にとんとと燃るさき長

四十五　ふれく小雪

初雪や淀やか障子思ひ遣る
最明寺源左衞門と見る雪は
出家侍犬の伯母さま

四十六　供御のから鮭

乾鮭の綿も古りぬやれ紙子
からさけのからき浮世に長らへて
骨計なる老の身ぞうき

四十七　人突牛は角を切て印とす

雜交寢の夜守宮命戀しけれ
唐土の是も英布がためしかや
人つく牛の角をきるとは

四十八　松下の尼公の切張

切張に家納つて師走かな
切張に四海を示すしやう糊
法の身なから尼の手すさみ

四十九　馬の強弱
若盛麓に繋く駒の數
花の枝に繋止たる殿の駒
ほとけは頓て入相の鐘

五十　吉田か傳
塞翁か行衞はいつく年の坂
年の關越んと鞭を二つ三つ
當れはいさむ春の若駒

五十一　愚かして愼めるは德のもとなり
顏見世や親の光りの鏡立
精出してあからぬ藝も朝夕に
心かけなはいつかまさらん

五十二　ますほの薄
村雨や簑に薄の風の音
油斷なく世なれて物を聞ならは
人に増穗の薄成らん

五十三　まつ人は障り有
定らぬ世とも言れし花盛
折にふれて雪駄直しも悲しけれ
柴の庵に獨り住む身は

五十四　いつも獨住なる心にくし
砧うつ音はそものなく音哉
はら鼓打聲聞は月淸み
またねぬ狸客にしる哉

五十五　夜は物のはへなしといふはひかことなり
夜櫻や引四つ過て又おかし
夜に物はへなしと云うつけ者
吉原も見す顏見世も見す

五十六　神佛に詣る
露けしや觀音草に藥師草
愛宕へは每月芝に參らふか
伊勢に熊のへとふとおやまる

五十七　己か境界にあらぬものに爭ふへからす
十月や戶塚の臺の宗旨論
神主と儒者と和尙と爭ひの
勝負なしの渡船著

五十八　直なる人はそらことにはからるゝ

正直も時によるなりとしのくれ
きをもめするれは地獄も極楽も
嬉しくもなしかなしくもなし

五十九 木作の地藏を洗ふ
冥加いのるあのくたら野へ石佛
色欲を滯き流に押積て
洗へは無垢の世界也けり

六十 東大寺神輿
御祭やとれも似合ぬ緋縮緬
とん〳〵と鼻か茶店の賑ひは
まつか崩れの利生也けり

六十一 定額（本ノマヽ）の女嬬は公人の通號也
番傘の皆出拂ひて時鳥
僧の身にかきらぬ物は釣網引
うそをつくこと俗も愼め

六十二 楊名之助
人からのよい客滯しけふの月
楊名のさかんとあらはこてまねき
ひとりぬるよの友とすさまん

六十三 神國は呂音なし

松拍子四座の外には十太夫
高砂や此浦舩に帆を上て
月諸共に開く沖人

六十四 呉竹河竹
猗とみたはきのふそ秋の風
卯の花の雪の中よりそろ〳〵と
孟宗竹は生出る哉

六十五 卽凡下乘の卒都婆
穢多が花そとは何かは摺火打
理りや火のもとに寺を附よかし
さりとては又鍋の下とは

六十六 神なし月
大社神在〳〵餅は是
御仲間は皆出雲へと立給ふ
御留守見舞に御忘を爽に

六十七 勅勘の勤
夕立や青葉の中にゆきの宮
夕立の神鳴きはく筑波根に
向ふて不二の入日涼しき

六十八 狂人のしもと

春の水直なる道の處々

盗人も軍もしらぬ君が代に
　かしは恥よ筑波雪

六十九　大師くわんしやう

　兒のぬる戸のしり寒し比叡おろし

火に不燒水に溺ぬ楠木は
　金剛山の峯にこそ生へ

七十　あさねか牛はなるゝ

　牛のねた疊めてたし夷講

世の中の角附合を遁來て
　のろ〳〵くらす牛島の庵

七十一　龜山殿のくちなわ

　口繩にあやなきけふや山さくら

のらくらと浮世に邪魔なへび親
　いつく出しすれば人がいやがる

七十二　經文の紐

　雪はとけ柳は結び春の風

經文の紐を日毎にゆふねぶつ
　むすぼれ安き人心哉

七十三　非道の田刈

　初松魚毒をくらはゝ皿つきり

田の畔の其泥水をおし出して
　言くるめても上はせいすい

七十四　呼子鳥なく時招魂の法を行ふ

　猫の戀頼政きつと見上れは

香爐からぬつと出たる立姿
　女のさいに李夫人千萬

七十五　萬の事はたのむへからず

　儒者ひとり睡辨當や花のもと

世の中はさつと淺黄の古布子
　心とめぬかしなのものしり

七十六　秋の月は限なくめたき物なれ

　花鳥はとまれかくまれ月の風

三日月の糸鬢あたまふりかへて
　今宵そかつら男なりけり

七十七　御前の火爐

　けふたさよ落葉に衞士か竹火箸

春をまつ巨燵に足をのへの草
　めはかり出して厭ふ冬の日

七十八　想夫戀

蓮呑や妻は袖引くさうふれ

わか宿に三とせ馴染し猫の妻
皮になつても膝へ來てのる

七十九　時頼どの味噌のさかもり

味噌て呑む酒もおかしや時鳥

世を納め國を鎮めた其跡は
みそてのんても甘(うま)い酒盛

八十　同鶴が岡足利みやけ

手土産の足利染や衣配り

いつか又君に蛇と存せしに
時節を海老の待しかゆ餅

八十一　大福長者の客嗇

名月や大福長者大尉

錢金を遣ひはたすも儲るも
心一つの地獄極樂

八十二　狐は人にくひつくもの

初午や化されて行繪行燈

葛の葉の恨かちなるふるされも
もとはしやうねのしつほ成けり

八十三　筆はたゝふくはかり也

筆の音に八千人の落葉哉

責寄る敵は短兵急里山
簫事も口(なくカ)負軍哉

八十四　六時堂の鐘の銘

花酒の醉さませとや鐘の聲

有難き聖の敎たへぬ世に
黄鐘調の聲響くなり

八十五　放兎の附物

不似合(はしたなき)月に薄や堺町

いつとても絶ぬまつりの喧嘩沙汰
大や〳〵同町のふと寄合

八十六　亡者の追福

わか噓は佛のうその繼穗かな

君よきけ佛と說し言の葉は
佛生袋配らんか爲

八十七　たつのおほいとの

あの形りて雅名おかし松魚賣

頼朝の放給ひし鶴の足の
札は四五枚ほしくこそ有ける

八十八　ありつね田を開く

野はにしき立て恥さる峯山子哉
矢壁の多い長者の臺所
みな番頭の胸にありつね

八十九　白拍子の根元
川竹の流凉しやみなれさほ
舞の手の外には何も白拍子
しらぬか佛祇王祇ぎく

九十　五德の冠者
思ふ事二つ忘れて花見哉
七德を二つわすれた某は
斯のことくの不調法もの

九十一　六時禮讃
念佛て事たる庵や山さくら
彌陀佛と唱へる內は生佛
唱へぬと又生凡夫なり

九十二　千本の釋迦念佛
小袖著た御も花の都かな
千本の釋迦念佛のくりきより
たつねにほんの神の御利生

九十三　よきさいくはにふき刀を用ゆる
村雲に竹田名る丶月見かな
きれ文のつかひにたのむ下手細工
手を切ことかきつい名人

九十四　五條の內裏には化物いつる
名月や百物語すめはとて
五條なる內裏に出る化物は
凡河內の狐成けり

九十五　百日の鯉
かさひたらうた丶き起さんけふの月
我庵はお江戶の辰巳しかそ住
世をうし島と人はいふなり

九十六　尊者のまへにて史記の文を引く
寶引や是はとなりをかえすとも
三千の戒多き其中に
遠く遊んてしかもゐつ丶け

九十七　若人も少しの事もよくもあしくもみゆる也
はる〳〵とめのよる所王の春
よしあしの中を漕行筏士の
ふかき心はみさほにそしる

九十八　萬のとかは人をないかしろにするに有

炭部屋に雪の雫や白重ね
詠めんと思ふ心も仇にちる
花には咎の嵐とそおもふ

九十九　人に物敎ゆる
道問へは腮て敎る寒さ哉
何事も習ふうちこそ笑わるれ
得れは其身の寶成けり

百　主ある家
かとのない主人貴しけさの春
主あれは狐狸は寄ねとも
唯鼠にはこまる柴の戶

百一　高麗狗を置直す
こま狗の所定めぬしくれ哉
こま犬にかゝる泪の村時雨
ふりかへられて大笑する

百二　柳箱
朧夜や枕につらきやないはこ
たてにのせよこにもすへる家々の
風に任する柳箱哉

百三　自讃の七箇條の内

萬言萬句一忍に不如大三十日
紫の曙ちかき春の夜に
いとゞ色濃き閨の衣々

百四　婁宿
名月やおらか座敷は竹の影
足事を印の柳とくちりて
ことの缺さる月をみ園

百五　朧月に彳む
素一步に梅香はしく朧月
女房とくらふの山のかこひもの
人め忍ふのうらは四つ切

百六　望月のまとかなる
十六夜や兀いたしたる額際
鳴戶より生死の海はあらくも
法りをくるゝなうかむ瀨もある

百七　樂欲する所一には名也
和歌によむは汝にあらす巷
色欲と名利のとがの毒斷は
つねに大醫の戒そかし

百八　父に佛を問

算へ日や根問する子の枕元
とらけとは何を岩松苔むすこ
　只通人にしく物はなし

徒然文題下の卷終

花街浪華色八卦の附錄

來るか來ぬか、內に居るか居ぬか、うそか、まことか、末とげる緣か、とけぬ緣か、叶ふか叶はぬか
此五つの事を占ふにかんざし楊枝又は扇にても一本もち心をおさめていたゞき何れにもせよ信ずる所の神佛を念じて扇を投まさまにても逆さまにても竪に成たるを陽として頭を左りにし橫に成たるは陰としてかしらを右へなし三度投て一卦を起す也始に投たるを下の爻として段々後ほど上になる也なげたる扇のゆがみたる時は竪へちかきを竪とし橫へちかきを橫と定むかくのごとく三度投爻を得て一卦此卦を奥にあらはすところへ引合せて其占の吉凶を知るべし

來たらず
うちに居る
まこと
すへとげる
叶へどもあふ事おそし

すみやかに來る
內に居ず
いつわり
すへとげる
叶はず

來れども遲し
內に居る
まことあれども邪氣有
すへとげる
叶ふ

來る
內に居る
まことなれどもうたがふ心あり
末とげる
叶ふ事おそし

來らずして文來る
內に居ず
まことなれども取〆なし
末とげず
叶ふ

來る事はやし
內に居る
まことふかくして忘るゝ間なし
末とげる
叶ふ事はやし

來らず
內にゐる
いつわり
末とげず
かなはず

來らず
內にいる
誠あれど人に深隱す心あり
末とげる
叶へどもすこしおそし

此書餘程古き洒落本にして島の内坂本北新地中町こほり町尼寺高津新地勝まん六萬たい安治川れいふ八軒茶屋編笠茶屋北野梅ばたけ眞田山上鹽町野堂町馬場先難波新地新屋敷堀江新町を八つの卦になぞらへうかちを書たる書也

滑稽外國通唱

外國通唱を前篇として青樓洒落文臺は後篇二冊とも□□小本にして皇都川東のしやれを書たる物の寫□□□都の東南に當つて一洲有名をユスルメロといふ國風豐饒にして華美を好み好色を專らとす何を以所業とする事をしらず常に絃歌を奏し酒肴を翫ご晝を夜となして臥夜を晝となしこ勤人の形異風にして多くは女を司どる國也頭に鼈甲の角を光らして手足に金銀の爪を磨たてゝ夜陰深更に徘徊し折々餘國の男子をみては紅の唇を開きて唯一呑にせんとする事さも恐し尤人語文章日本に通ぜずされば比日其國の通辭によりて文字言語を正し猶本朝の俳諧てふ歌によそへて人情を委しくしらしむる事しかりユスルメロ國語、神樂講、これは日本にていふ仲間の事也此仲間此國にてはことの外かたくきびしきと也、さげ札是は全く此仲間の掟をそむきたる物あれば家々に札をさげて商賣をとめると也おかわり是は馴染の女郎ならぬ時に代りの女郎をすゝめてよばす事也大嫌是は兩説あり實にきらひの事もいひ又心中には好て居ながらいやな顔する時も云一かう粹是は粹かへつて野幕な事を云餘は奥にあらはす所の發句を見て考合せらるべし文字の體一ふでしめしら〴〵一筆示し參らせ候也甲子の陽春通士ミルトウル序粹川士編

神樂講　やわらかき物のかたまる氷かな

水　上　無理やりに先咲せけり室の梅

鐵醬附　染しはや一夜時雨にぬれてより

かたの客　大せつに思ふも三日福壽草

枕がけ　高いほと猶このもしき花の枝

店仕舞　夜半から直の高ふなる衞なか

雜喉寢　夜もすからあふなきものやぬくめ鳥

身請　萍や思案の外の誘ふ水

再勤　引鶴や又舞もとり〳〵

中宿行　町中を通れはめたつ螢かな

袖詰　糸櫻よりはまことのさくら哉

約束　鷹の文候へとものなくもかな

身揚　涼風や我ものにする我からた
退代　あちらむく時に見へけり雉子の爪
戯場行　身賣場を扇にしのふ涙かな
他所行　御供かとゝへは客也花見駕
仕替　若蘆や所かはれは名も替り
入込　二三軒見合せ來る乙鳥哉
千振舞　紫陽花や澤山に咲花の數
揃衣　おなしやうに見ゆれと菖蒲杜若
遠物　男とも見ゆるや夏の女郎花
間夫　梅の花兄樣などゝいふて置
居續　けふもまた去ずに居るか夏の雁
泊　仇浪にゆらるゝ鴛の浮寢哉
朝迎　きぬ〳〵の妻戸を叩く水鷄哉
生買　待て居るうちは冷たき蒲團哉
一げん　春の雨芝居咄をよるへかな
馴染　身仕舞はなうてもゆるす柳かな
禿頭　はやませてひんしやんとする小鰺哉
見習　かへる子や矢張かへるになるつもり
自前　折々は內へはまねく薄かな
文彌　嘘らしい程なく木曾の時鳥

重箱　月はひとつかけも田毎の幾つても
情代　水仙に似といふても慾かな
下げ札　朝顏や又したらくに餘所て咲
差紙　夕顏の名て買附る瓢哉
指込　夏草や名さへしらねはもしあなた
四六　何處やらかうつきりとせす藪椿
起番　しつとして居れはいねふる胡蝶哉
貸借　螢火や宵闇のうちをしはしとて
花車　木の本や花の主も花のはて
藝子　萩ふくや起てはうたひ寢ては濡
琴藝子　一休み爪それなりに火はち哉
優曲藝子　段切の汗にそこなふ粧ひかな
亭主　折に出てみても興なし夏の蝶
牽頭　かれた聲で辭儀する夏の蛙かな
粉頭　あゝしんとゝいふてすわりし火鉢哉
若衆　伯父さんといふ顏淒し夏の霜
新娼　うつむいて居るも風情や百合の花
客　富貴なときけは床しき牡丹哉
辨慶　鶯にならんて居ても目白かな
娘分　芥子の花さわらは落ん下こゝろ

袱客　つかまよとすると逆出す蜻蛉かな
踏客　蜘蛛の子はおとゝひこいと去しけり
僧客　藥湯の戻りにぬきし頭巾哉
小樓主　魚釣に出歩行書のいとま哉
忘八隱居　天山の軍書はこそる夜長かな
廻漢　鬼ゆりや姫といふ名の下に附
送僕　身の上を道々はなす夜寒哉
線香場　これは〳〵とはかり花の紋日かな
料理人　小夜衙水雜炊の手柄あり
年明　篤實に見へて淋しゝ梨のはな
祝儀狀　八寸に敷るゝ春の名殘かな

青樓洒落文臺

客けふ春亭からかういふ本をもたしておこしたがかの先達て出した仕方俳諧外國通唱の如く人物を題にしてされ發句を作した物じやげな是迄のは皆茶屋の事や芝居の事を作した故今度は町の人物を題にしてあらはしたと云こと例のおもしろからぬ物で有ふが何と明てみよふかい こたい コリヤモウシきつい珍書どふぞ聽聞ナモシどなたも 座中女 早ふ明てよんで聞かしいなア こたい モウシ旦那よろがはやうあけてくれと申されます 客 めつたにあけてくれな溫氣の時分宇津の宮の神主ときては叶はぬ 中い 七さん大嫌ひ惡口いはんと早うよんで聞しいなア 客 ア、そんなら開きもせい

儒者　年暮孔子も時の間に合す
醫者　疫病のはやるを祝ふ冬至哉
茶人　口切や掛ものは顏てよんで置
陰陽師　身の上はしらし野分の軒のあれ
社人　茄子齒公家かと思ふ月見哉
評人　花にうた當時の戀の間に合す
畫師　五月雨に乾かぬもよし篗の絹
俳人　虱のみはせをに似たる旅寢哉
能太夫　楊貴妃の面に餘るや鬘の霜
狂言師　譽るとて油斷はならし入間川
百姓　年貢上る羽織も妻か手織かな
職人　剃立て月額青き御影供かな
商人　千金といふてまけなし花の月
內儀　餘所の花はよっ見ゆる也家櫻
息子　鳶が鷹うめは古巣をあらしけり
娘　鶯も前うしろ見る時分かな
嫁　一よさの間にはたと染て初紅葉

後家　なか〳〵の素顔もゆかし墓参
腰元　二の替り能のお供の恨みかな
下女　藪入や劇場一日戀二夜
隱居　居藥喰むしろやふりの浮名哉
女隱居　今はやる髮いやしかる花見哉
出家　老僧に似た弟子もある十夜哉
梵妻　菩提樹の花は凡夫のしらぬうち
番頭　其癖に色には深き毛虫かな
手代　風呂敷を羽織にかへて夷講
丁稚　口とめの白狀させる粽かな
座頭　撫て見て色いひ當るそろへかな
舞子　母親に日傘もきせす夏の足袋
神子　白粉の斑に兀て夏神樂

客ナント町のことばかりはかたづまつておもしろうないじやないか 幇間サモシどうでも此邊の事でなけねば愛がムり升ぬ 客サアそこで發句はいひふりたによつてけふ此東盡にして附合をして見よふかい 幇間コリャおもしろふムり升ふが私どもは大の素人でムり升 客なんぞいふてかいな素人とはすこしする者のいふ事じや丸でしらんことじやあらふがな 幇コリャ旦那丸つぶしでムり升るなそのやうにもムり升せぬ 幇さあ〳〵そんなら始めい〳〵 幇まづお客發句に亭主脇と申せば 客いかさまきつい黒人じやゑらい事しつて居るわいどれ〳〵まづ發句を案じやうか しばしうつむき思案のこなし有 てかういふてはどうあろふ紋附をゆかたにかへて夕すゞみ 幇コリャモウシ旦那油なしの本妙でムり升 客脇はさしづめ花車の役おきとどふじや〳〵 花車わたしやいやいなアわきとやらはきとやらそんな事はぞんじ升ぬわいな 幇ヤアしらぬとてしらぬでおかふかさあ尋常に白狀ひろげ 立上りて例のみぶり 客さりとてはさわがしいちとしづかにしてくれいさあおきとどふじや〳〵 花夫でもわたしやそんじ升ぬもの 幇モウシおきさんどんなことなりといふて旦那に直しておもらひなされ升せ 花そんならモウシ此樣に盃をすゝいで居る所が何になり升かへ 客まて〳〵何になるぞ〳〵初手からそゝぐ夏の盃 客こりやけしからぬ銘脇になつたお出かし〳〵 花ヲヽ嬉しわたしが役はまあすんだ祝ひに一つのもかいなア 客第三は藝子の内からたれなとして出せ〳〵 こげいこんな時お柳さんかお袖さんがゐてじやとよいわいな鈍吉さんおまへしておくれえな

ア 幇夫はあなたから仰られいでもしてあげたふて〳〵なり升せぬけれどひつとしてあげたらナモシ旦那右の口から屁がかうかとおもふてこげい大嫌らひあほういはんとおまへしいなア 客まてよ今の右の口といふので趣向が附たかうはどふ有ふ「三味線をつぎ〳〵右の噂して 幇是はかんしん右の口は是から戊亥に當つてすこし鼻のたくましいモシ旦那大ていよい殿御じやムり升ぬこげい又いひか大嫌ひ 幇先は藝子さんの役もすんだが四句目はだれでムり升 客四句目は仲居のよろが場じや 仲居わたしや四句目よりは七つ目がよいわいなアこの間こちへ來る元庵さんが隣のきつねつきさんを四句目とやらいふ事をして落してじや有た 幇何をいひじやいなそりや墓目じやあろがな 客ハヽハヽこいつはよいわいでかしをつたそれで出來た〳〵かたことといふて笑われにけり 仲居ヲヽ外聞わる皆よつてしろものにしなされませ 幇なんの勿體ない先生をしろ物にするものでまづよろさんの墓目もよふ出來升たしかし旦那ての文字が折合やうにムり升 客てのおり合も片言のうちじやゆるしてやれ 幇成程これも妙じやが此てやひでしたら三味せんがたんと出升ふぜ 客夫も此一巻に五丁はゆるしじや 幇月花よりよけいなら大丈夫〳〵 客さあ四句目が出來たりや文臺を立て本式で始めよ文臺は三升屋にさそかへ 藝わたしやおゆるしついに文臺とやら書た事はないもの 幇いやでもお手がよいで是非がない 藝どふかくとよいへ 幇此間たゝみや町へ御上なさつた狀のやうに御書被成升せ 客ハヽこいつはゑらい穴じや 藝鈍吉さん大ぎらひ（鈍吉が脊中をひつしやりたゝく） 幇その叩なさつた美くしい手で文臺がうけたうムり升 客さあ〳〵是から本式じや笑ふ事はならぬぞ 藝それでも鈍吉さんがわらはしじやもの笑はしなへ（と鈍吉がかたな一寸おさへしじりのきれたやうなあろきやうで文臺のまへへ直る） 幇さあ〳〵先そこへよみあげておくれ被成ませへ

紋附をゆかたにかへて夕すゝみ　客
初手からそゝく夏の盃　花車
三味線を繼々右の噂して　藝子
片言いふて笑われにけり　仲居
挨拶にちよつと顔出す二日月　亭主
秋の扇にのらぬ物眞似　幇間
逢ふてから反古に成たる鴈の文　妓

節季前からいろの深切　　客
鼻紙を丸めて當りや當てかへし　　是より亂吟
邪魔な所へすわるさし込
目利して惡い男へ思ひさし
三味線箱にこまる落書
又しても鏡取出す鼻たゝき
約束たのむ花車か助太刀
商賣を兼て芝居へ行たかり
ムエといふ手のけんの早蕨
紙花はいつも三分で扱はれ
こりやまた古い菜箸に月
手拍子も糸にはのらぬ不器用さ
鉢打たゝく山姥のきれ
辨慶へさゝやきにくる店仕舞
姉が義理にて買ひし妹
舞まふた跡燭臺が二つふへ
返事の臺子一時に來る
間の悪き時は手水に立て行
寒いといふかよるへなりけり
うとんうり聲より更る冬の月
戀も情も親と相談
仲居に質の札まで見せて置
枕の下にいなすましない
鼻うたを諷ふて這入床の内
ちとおやすみと人中ていひ
醉過て無常の起る駕の中
二番太皷の胸にきつくり
我宿へ戻つて寢たる本の花
遊び盡せぬ色里の春

堵庵影讃の教訓

心學家豐島堵庵影讃之施印寫(挿繪略之)

かげぼうしは心のすがた

古語にかたち直ふてかげまがらずとかやよろづのこと我心にかなはぬは人のあしきにはあらずみなわがあしきゆへなりとおもひたちかへり見てつゝしむべし

緣にひかれて心はうつる

わるいことにはましるまい

盜人のまねをすれば直にぬすびとゝなり佛のまねをすればほとけなり高慢の心あらば直に天狗なり女を

このむこゝろふかければ女となる忠義の人孝行の人のまねをすればはやそれほどの忠孝にてつゐに忠臣孝子となるべし我願ふ行狀の通りが能うつるなり諸願ひとつとしてかなわずといふ事なしそれゆへ主人のかたちのとをりに家内がなりつゝしむべし〳〵
何事もよしあしともに我にありかたち直ふてかげはまがらずゐにうつるかげあいするもにくむのももとは立よる其身にぞあるよしあしのかゝみにうつるかげぼうしよく〳〵見ればわが姿なり善惡をうつして見せる淨頗梨のかゞみはをのがこゝろなりけり

宋丞相文天祥語

忠　　上事二於君一　下交二於友一
　　　內外一誠　　　終能長久

孝　　敬レ父如レ天　敬レ母如レ地
　　　汝之子孫　　　亦復如レ此

煎茶入門說

夫茶を煮て點れと惟はゞ水の吟味を専らにすべし之熙が曰茶は水の神也水は茶の體也いかほどの名品なりとも水に應ぜざる物は其能薄し茶と水と相和すれば香氣盛にして味尤美也宇治產の茶は長流水をよしとす他邦の產は一概に論じがたし井水涌泉灌水各清白にして目方の輕きを好めどもあながち輕き重きにもよらず篭濁せし水に茶に應ふもあり試て知るべし瓶は來舶の器は論外也まづ土器を最上とす汲立の水をうつして熖火にかけよく〳〵煮て湯玉の發時を待火を去て瓶の口を切り手早く茶を入蓋を閉器の口よりもれ入ざる樣にそつと水を灌外のかわくを見て飲べし飲盡して後又熱湯をさす極品は三度に及ぶ迄茶の味出るもの也分量は水一升に茶六匁を定法とす薄を好人は減すべし濃を好まば增すべし高料の茶は惜しむがゆへに香も味も薄し心得べき也葉茶を藏は錫にしくはなし其次はよき壺をもとめ幾度も紙にて張り漉をひきて桐の木にて口をよく〳〵して其上より澁紙にてとく〳〵と掩人氣の通ずる所に置べし土藏抔に入置ば其明の暖りなきゆへ早く損する也委しくは好事の人に尋明らむべし予去る文政七とせの夏東山眞葛原に茶店を開き漢書陸羽が茶經和朝櫟亭が清風瑣言獻可堂の煎茶仕用集にもとづき當時好事の賓客に學

び問ふていさゝか婦童の（爲にか）著ことしかり

洛東雙林寺門前　眞葛原賣茶園誌

西澤文庫讃佛乘初編下の巻終

西澤文庫讃佛乘二編上の巻

目次

西澤文庫讃佛乘二編上の巻

西澤綺語堂李叟著

三勝半七情死口書

大和國宇知郡五條赤根屋半七於大阪心中の砌檢使の趣正德三年辻彌五左衞門樣控帳有之候を寫取置候御同人大阪へ御出の節攝州西成郡下難波村御代官所右の節檢使御役人御同人樣御手代

關戸條左衞門
渡邊爲右衞門

攝州西成郡下難波村墓所南側石垣の根畑にて年頃三十四五歲之男年頃二十四五歲之女咽を切二人共相果居候

一男の疵咽二寸計腹臍の上一寸計突疵に相見申候
一女咽四寸計突疵くり候樣に相見申候
一男の衣類
郡内縞兩面綿入一　細帶　一筋
男二重下帶　一　革足袋　一足
珠數　一連　但し手に懸罷在候
脇差　一腰　拵附燒附金具糸柄 長さ二尺一寸
小刀　一本　但脇差の鞘に御座候
一女の衣類
日野絹縞竹小紋綿入一　但日野絹茶うら
郡内じま綿入　一　糸ろく帶　一
日野絹ゆぐ　一　木綿足袋　一足
縮緬服紗　一　但裏紅
一封狀一通但木綿茶ぶくさに包　三勝はゝ樣 みの屋平左衞門樣

右之通吟味仕候處相違無御座候以上

下難波村庄屋　甚左衞門印
同村年寄　源左衞門印
七兵衞印
九兵衞印

元祿八亥年十二月七日

辻彌吾左衞門樣御内
關戸條左衞門殿

渡邊爲右衛門殿

口　書

攝州西成郡下難波村墓所石垣之根畑にて年頃三十四五之男年頃二十四五之女咽を切り相果居候處墓所所わり幷乞食垣外のもの下難波村庄屋方へ申來候に附早速右之通御注進申候處闕戶條左衛門殿渡邊爲右衛門殿御出死骸衣類等御改其上當村中幷近所の者何い覺も怪しき事も無之哉と御吟味被成候へども右之儀に附しき儀少々も怪敷義無御座候

一右二人の死骸へ番人附置候處上本町八丁目京屋安右衛門長町三丁目大和屋八郎右衛門見申候て右女は長町四丁目美濃屋平左衛門娘に御座候由申候

右之外別條も無御座候に附いよ／＼死骸番人附置申候御檢使相濟候迄は右死骸大切に仕置候て御下知次第可仕旨爲其口書差上申候

元祿八亥年十二月七日

下難波村庄屋　甚左衛門印
同　村年寄　七兵衛印
又左衛門印
九兵衛印
孫左衛門印

辻彌吾左衛門樣御内
闕戶條左衛門殿
渡邊爲右衛門殿

差上申口上書

一下難波村領墓所石垣の根畑の内に拙者女房之妹幷男自害仕候之由風聞承候に附早速罷越見申候處拙者女房の妹さんと申女に紛無御座候尤男は存知不申候女の親は長町四丁目美濃屋平左衛門と申平左衛門儀は御番所へ罷出申候右女相果候樣子曾て存知不申候

右之通御尋に附申上候趣聊相違無御座候已上

上本町八丁目札の辻町
元祿八亥年十二月七日　安左衛門印

辻彌吾左衛門樣御内
闕戶條左衛門殿
渡邊爲右衛門殿

差上申口書

一下難波村領墓所石垣の根畑の内拙者娘幷男相果罷在候由承候に附御番所へ御訴申候則死骸見屆候處拙者娘さんに紛無御座候男女相對にて右の仕合に

御座候得共何と申分も御座無候間右女の死骸申受
度奉存候以上
元祿八亥年十二月七日
長町四丁目荒物屋市兵衛貸屋
美濃屋平左衛門印
辻彌吾左衛門樣御內
關戶條左衛門殿
渡邊爲右衛門殿

口上

一私方常々宿仕置候大和國五條赤根屋半七と申者當
月五日に參り罷在候處昨晩町へ罷出候由にて私方
罷出候然る處今朝下難波村領に相果居候由承候處
死骸見屆候へば女と相對にて相果候體に相見申候
右相果候儀私申分も無御座候宿の書置一通御座候
故大阪御番所へ御斷申上候處則右書置は大和へ遣
候樣に被仰附候故差越申候相果候樣子は曾て存知
不申候拙者宿仕候儀に御座候間半七死骸受取申度
奉存候以上
元祿八亥年十二月七日
大阪長町一丁目
近江屋庄右衛門貸屋
中村屋安右衛門印
辻彌吾左衛門樣御內
關戶條左衛門殿
渡邊爲右衛門殿

右之通書狀五通幷半七書狀一通御番所へ渡邊爲右衛
門殿關戶條左衛門殿持參にて玄蕃頭殿へ申達候處鶴
見惣兵衛殿を以御被渡候は被入御念見分御申附口書
御見せ候此方よりも見分役人遣候處相違の儀も無之
右の譯にて候へば下難波村の者共にも仔細無之候女
は長町之者男は大和のものに候へば男女共町人方へ
受取候て下難波村の者に相渡候樣申候樣に玄蕃頭殿
被御渡候に附庄屋吉左衛門年寄共に右之通申渡右口
書五通御返し半七書置はさん親の方へ直に御渡しの
由尤男女の死骸相渡候はゞ先方より受取手形取之注
進申來候樣に被申渡候
亥十二月七日
尙々御袋樣にはいつぞやくれぐ〵御申置候御事も
皆偽りになり今更に恥かしく存じ候へどもしかし
過去のごうなりと思召し御あきらめのみと存候
今度こ勝私かた相果候事拗々にくしと思召候はんな

れども互に捨がたき一命にかけかく成行候事くどく具に書ず候へども戀のせつなる事推量可被下候各様にも身の上の大事なる娘我身も獨りの母と申殊には身上の事も不辨人口にかゝる死を遂候も銘々うわきなると思召被下まじくとにもかくにも筆にはいはせがたく候まゝ跡不便と思し召下され聞じくまづ〳〵次第に跡にてしれ申候間筆をとめ申候以上

十一月　　半七

三勝どの御袋さま

美濃屋平左衛門様

右書置封の儘御番所へ差上候處直に三勝親共へ被遣候由

覺

一和州赤根屋半七死骸

一長町四丁目美濃屋平左衛門娘さん死骸

一半七衣類道具

一さん衣類道具　　右之外封狀一通

右之通御番所にて我々共へ受取申候樣被仰渡候に附則慥に受取申候爲其如此御座候已上

平左衛門印

元祿八亥年十二月七日

市兵衛印

市左衛門印

安右衛門印

半七宿安右衛門家主　庄右衛門印

五人組　藤兵衛印

御番所様

靈名

一蓮　嵐雪月照信士　　和州五條新町　赤根屋半七

誌生　月雪妙霜信女　　美濃屋三勝

薫物六種序

たきものゝ方さま〳〵なれどつねにあはするは六種なり梅花、荷葉、菊花、落葉、侍從、黒方、梅花は春のうめのなつかしき香にかよへり菊花は秋のきくの身にしむ香にかよへり荷葉ははちすの涼しき香にかよへり落葉は冬の木葉のちる頃ほう〳〵と匂ひ來るにかよへり時にしたがひて昔の人はおはせけれど今の人にはさしも見へずなり行や物のおとろふるなりけりそのをり〳〵にあはせずともおなじもよふといふぞ世のすゑの人の心なめり侍從は乙侍從といふ女房の

あはせそのぬれはその名をよぶといへり山田の尼をはじめは侍従といへば此尼のあはせそめしともいへりいづれにてもその袖の香もおぼゆばかりの匂ひなり黒方はたきもの丶にほひにては玄の玄といふ心にて名づけたるを黒方と假名がきに書けるを後人あやまりて黒方と書といへりあやまりをあらためずその字を書もはゞかりある心に例あればかみのその字をかざし侍従黒方この二種は霜雲の頃さむきにあはせよと傳へたる是は人のつたへもうけずふるきふみにかきおきしをも見ず年々あはせこ丶ろみてかくなしおきしを人の見せよといふにあらためて序おもふ

梅花

沈香　五兩　丁子　一兩
貝香　一兩　甘松　一兩
麝香　二分

荷葉

沈香　七兩二分　丁子　一兩二分
白檀　一分三種　貝香　二兩二分
甘松　一分　藿香　二分
安息香　一分　鬱金　三分

菊花

沈香　二兩　丁子　一兩
貝香　二分　甘松　三朱
薫陸　三朱　麝香　一分

菊花のいかにもかうばしきを取てうすやうの下に菊をしきてその上にて香具をかきね撒して鳥鷺をあはせ蜜を合する也

三春行樂記　　儌載介著

式觀ニ四時一、莫レ如ニ三春一、細推ニ物理一、莫レ如ニ行樂一、余幸生遇ニ太平一、少充ニ小吏一、父母共存、兄弟亡故天下英才互爲ニ師友一、眼中仙侶無レ分ニ主賓一、歡レ無ニ虛日一、約多ニ遨頭一昔人所レ謂一月之內、開レ口而笑者不レ過ニ一日二日一者吾不信也、壬寅初夏、病瘍息偃ニ數日一偶憶ニ昨是一、遂如河山序、所レ記以自慰焉、名曰ニ三春行樂記一、

正月元日晴、晩將ニ宿直一、終日在レ舍、幸盤酒室、家相慶樂飮、浮レ杯少長皆醉、二尊在レ堂怡々如也、姊弟侍レ側愉々如也、孟光擧案操作、而前長女弄レ毬雅子舍餳、偃ニ曝南軒流一觀稗史、會ニ山士訓一蘇百順至酒レ之、客歲猶原克敏惠ニ二盃一、余以ニ一浮一、士訓以ニ一

浮百順偶念歲暮赤城之遊、因名此杯百桃花、一曰流水、二子有詩、

三日子日也、將同土山活之遊東山宋松栽、雨不果酌之、土山氏男女交錯、相酌無算、流筵左十名、各有賞金探得一策、書云、弟三十五名、賞以方金、

五日、晴、陪土山登之及流霞夫人遊勾欄、觀傀儡戲、世所謂中戲場也、演本鏡山舊錦畫一場畢、登中戸樓、唱曲者竹本住太夫、至歡飲夜闌、是日也、菅江內海嘉十倖七亦與焉、

八日夜、同蘇百順遊赤城、登山下樓、命二妓、百順呼於巖、余呼須摩、

十二日、朝雷雨、停午新晴、同菅江嘉十田阿陪土山活之及流霞夫人遊洲崎、宴望汰欄、活之及夫人乘轎先行、余與菅江嘉十田阿過牛門舟星野文竿既在、乃與乘舟下楊柳塘、過兩國橋下、文竿下舟而去、頃之携二歌妓至、一曰阿兼、一曰阿留、香火姊妹也、獻酬交錯朱顏既酡至望汰欄、會源東江先生右史近藤氏三井長年倖七、竹本住太夫亦至、庭有荷葉盆、有銘東江手楊爲墨本、三井氏捧硯使余爲跋、余筆不停綴文不加點、余既醉止、不覺在硯之左右也、主人絕倒嘆曰、白雲蒯緱囊不必旅裝、赤良寫字硯不必置有滿坐胡序、望汰欄者酒樓也、松江老侯數然斯枝也、以其瀕海故、名曰望汰欄、乃扁樓上、金聲緊目、樓東南向不假彫琢樸素最妙、庭上松樹松門見海布帆出沒見隱沈浮、凡工構之妙、庖厨之美、蓋東都第一也、

十四日、陰晴不定、過本阿彌子土磯坊、是日諸子賦夷歌、會者凡三十餘人、

十六日、晴、同布施氏及夫人萬年氏金子氏文竿、重遊望汰欄、歡竟日、

十八日、晚晴、同關叔成集都子雅、賦詩、歸路過百順、乃携遊天台山、登三河樓、命三妓、叔成呼茂與、百順呼保乃、余呼須磨、

十九日晴、草堂開講、會者四十有餘人、賦詩飲酒醉臥者數人、五陵醉臥、翌日蘇百順又至、截劉阮遊天台國爲贈、

二十日夜、過土山活之、觀東江作書、

廿二日風與至文竿子遇羽倉右山翁、翁携余至戲場、入戲房見優人市川三升、是當時第一孟優也、歸路過源東江、

廿三日夜、過ニ山士訓一、過ニ關叔成一、遂同ニ叔成一遊ニ天台一、登ニ三河樓一、呼ニ二女一（是舊相識之女也）

廿四日、晴、朝衛ニ三緑山一歸路、過ニ士倚坊一、又過ニ數奇橋一賦ニ夷歌一、會者二十餘人、

廿五日、雪、過ニ無端齋一賦ニ狂歌一、夜過ニ榊原氏一、又賦ニ狂歌一、

廿九日、岡田忠卿詩會也、同ニ服右父熊田子光山田宗俊忠順一賦レ詩、

二月朔日、雨、宴ニ五陵樓上一書ニ一聯一云、紅白花開烟雨中、樓前寶景也、

二日、同ニ文筌子一、陪ニ萬年氏青木氏□氏伊賀侯臣大橋氏一、遊ニ望汰欄一命ニ二歌妓一、曰ニ阿仙一曰ニ阿兼一、阿仙通ニ唐詩一、請レ余解ニ唐詩一、余後作ニ唐詩捷經一贈之、

六日、同ニ行元淳公叡山一、某源子光橋生遊ニ高田寶泉寺一、賦レ詩、過レ雨夜半歸レ家、是夕也歌妓阿仙過ニ士山沽之宅一呼レ余、余不レ在、余聞レ之悽惋度レ日、

十二日、同ニ文筌子一、陪ニ萬年氏金子氏一、遊ニ中戲場一、觀ニ傀儡戲一、呼ニ三歌妓一、曰ニ阿仙一、曰ニ阿沓一、曰ニ阿兼一、夜宴ニ稚松樓一、

十五日、同ニ士山沽之及流霞夫人一、遵ニ於海一而遊ニ於品川一、宴ニ三間亭一、嘉十管江田阿亦與焉、

十八日、都子雅東林館集、同ニ士訓華仲一賦レ詩、

十九日夜、宴ニ樋季成一、遇ニ潭ニ清國一者一、名吉二郎、

二十日、同ニ士山沽之及流霞夫人一宴ニ望東江一觀レ妓、

廿三日、同ニ作忠順岡田忠卿一、過ニ服右父千葉地一、賦レ詩、

廿九日、慶嶺阪安藤吉卿詩會、同ニ關叔成作忠順立子岡田忠卿安子潤一、賦レ詩、

三月三日、過ニ士山沽之一、作ニ曲水宴一、同ニ菅江嘉十三井氏一飲レ酒、歌妓阿加與亦至、夜逃レ席至ニ万年氏一、至則布施氏青木氏長瀧氏文筌子及歌妓阿仙阿兼在レ坐、令レ傳從レ筆、杯盤狼藉、余大醉臥ニ文筌宅一、天明歸レ舍、

四日、宿醉未レ醒遊ニ望汰欄一、里長數人從レ宴終日、遂同ニ五陵子一宿ニ望汰欄一、

五日、夙起、至ニ洲崎天女宮一、還ニ望汰欄一、會ニ文筌子一、至乃與ニ主人一相携觀ニ鶴岡神寶一、至ニ深川八幡宮一、

八日、宴ニ野美卿一賀ニ華燭一也、

九日、晩晴、同ニ菅江嘉十一、陪ニ士山沽之一遊ニ北里一、過ニ茶亭尾張樓一觀レ花、是月也北里大道種ニ花樹一、弦服靚

粧粲如二紅霞一、夜過二京街一登二大文字之樓一、妓誰袖取
レ袖上總角以贈。余爲二家珍一、是土山氏押妓也、菅
江呼二妓袖芝一、余呼二妓一娃一、夙起又同二菅江一宴二書
肆耕書堂一、午後書肆命二肩轝一歸レ舍、
十八日、同二土山沾之流霞夫人菅江嘉十文竿一、遊二望汰
欄一命二二歌妓一、曰二阿直一、曰二阿兼一、潮退升國共拾二紫
貝一、會二東江子一瀧口氏杉浦氏亦至、
十九日、都子雅集林館詩會、
廿三日、陪二土山氏一、同二菅江嘉十一、宴二瀧口氏一、歌妓阿
管阿銀亦至、
廿四日、同二倖忠順岡田忠卿諸氏一、遊二練馬村一採レ藥、
廿七日夜、過二土山氏一、始嘗二松魚一、
廿九日晝、飲二土山氏一、夜過二万年氏一、文竿子金子氏在
レ坐、見二神門諸君一、歌妓四人佐レ酒、曰二阿伸一、曰二阿
兼一、曰二阿安一、曰二阿文一
四月朔、同二土山沾之流霞夫人菅江嘉十一、舟行遊二午
諸一宴二中田亭一（俗稱島西太郎）角觝谷風朝谷亦至、共宿二
北里扇屋一、妓名忘レ之、菅江妓留て、

かくれ里の記

いづれの世いづれの所にやありけん七の福ある神こ
しく〳〵けり中にも大黒屋ときこえしは八雲たつ出雲
の國より見せを出してからのやまとのものはさらな
り西域のしろものをよろづ心のまゝにたくはへたり
西宮の夷三郎とは遊びがたきのやうにて春の花のも
とにかへる事を忘れ秋の月の前にうかれありき給へ
り又福祿ときこえし人の弟に壽星といへる老人あり
てつねにひさごつぶりをうちふりつゝこのふたつの
家に出入してなれむつび給ひしかばいづくの遊びに
もつきしたがはざる事なくこれなん世にいはゆる神
といふことのもとなるべし頃は福德三年の春の頃や
よひの空のうらゝかなるにかけ鯛の糸による柳のは
しのもとに鶴屋といへる船やどへより片菜のあしの船
よそひしてむかし鶴岡何がしが繪かける南岸一覽と
いへるけしきを見つゝ名におふかくれ里のほとりに
あそばんとて出たつなりあまざかるひなは箱にはあ
らで玉くしげふた國の名たゝるはしをもあとに見な
しつゝゆく駒どめ橋の駒もとゞめずみくら町のたち
つゞきたる大倉のよねはむ鼠のうはさは黒米のさし
あひあれば水門のわたりの蜆の味よろしなどいひま
ぎらはして常山の蛇のかしらをうてば尾いたるとい

ひけん松のすがたもおもしろや岸のむかひに椎の木のひろごりたるはたのむかげある松によれるなるべしけふしも遊山ぶねのあまたある中にうるまの琴かきさしつゝわざをぎのこはねをまねぶものあり壽星はこれにうかれて

しら波のこすや親方首尾の松

シイの木やしき聲か高塀

何がしのわざをぎの聲をうつしてうたひ出たるに人人どよみてわらふあはれ辨財天をもぐしたるましかばよつの緒のしらべはうき世の人のみつのをにもたちまさりなんをといふゆき〳〵てみむまやがしのわたりにいたるこゝはわたし船もて西よりひがしにひがしより西にとゆきかふ所なには人にしられんもなかなかつゝましとて大黑は頭巾まぶかに夷はゑぼし引入てゆくを壽星はたゞうつぶけに顏かくし給ふも長枕の心地せられておかしいにしへ駒かけ堂ときこへしは今の駒形堂にして鳥がなくあづま橋とよべるは大川橋をいふなるべし花川戸のわたりにて花川開ニ繡戶ニ雙燕自相求といひけん南郭の翁のからうたの句も思ひいでられて壽星は南極の翁と戯れて

何處春霞起　花川戶半開

風梳助六柳　波洗意休苔

とうちずし給へり惠美壽

釣上し赤めとゝもに酒くまん

いはくす船のあしたゝぬまで

大黑屋のぬしは小槌を腮にさゝえて

むらさきの頭巾もかすむ筑波かな

此はぢまきは過し頃ともいはまほしきゆかり法師の布袋和尙はのびあからねば見えぬてふ三囲の鳥居のかたはらなる牛頭山のみ寺におはせどけふはついであしければたちもよらずかの眞土しづんで木末のりこむ今戶ばしとうたひし土手ぶしも今戶の今みるが如くさんやぼりのほり替ものはむかしも今もかわらざりけりなともに船より上りて堤づたひにかちよりゆく袖すり稻荷の袖ふりし手ぶりに引かへて今は枕橋もふたつならばず孔雀長屋の名のみこと〴〵しう見かへり柳のなみたてるに二もと柳のむかしをしのび人目づゝみもつきなんとすこゝにきびしき掟の札たてり境にいるには禁をとふならひなればたちとゞまりてよみて見るにくすしの外は馬車にのる事をゆ

るさず又ものゝふの手にならすほこのたぐひは門の内にないれそとかけるをみるにもよくこそ鞍馬の多門殿をはいざなはざりしとかたみに目くばせして笑ふ大黒屋の相しれりけるやどりに入て松ともさせてかなたこなたかひまみつゝありくこゝに櫻を植る事は家々の鉢の木を門邊に出してよな／＼雨露をゆたかにたもつといへる年の頃より市のつかさに聞えあげて今はかくうつし植る事となんきこへしげによし野の山もうごきいでゝすまの若木の花のなみこゝもとうちよするはとうたかふゆきかふあそびどものさまをみるに綾羅のたもとをひるがへし錦繡のもすそを曳て花か人かともたとうまほし人々興じて見てのみや入にかたらんとてとある高どのにのぼりてあそびをめす盃あまたゝびめぐり壽星はあまりに酔しれてかたへにありあふうすものゝ帶を鉢卷して踊り出給ひしも鼎かぶりの心地せられてかの助六のゆかりの色には似もつかず日もくれ竹の町の子のひとつはつゝみのほとりの亥の時ときくにもかへるさのほども思はれてゆめばかりなる手まくらに朧月夜の歌口ありつきの雲とやなり雨とやなり給ひけんよくもしらずかしかゝるよしなしごとをそこはかとなくかきちらさんもつゝましけれど千代に一たびすみだ川のながれたえせずつくば山のこのもかのもにをひしげりゆくかくれ里の鼠のはつかにも物いひさがなくいひいづべき事かは大あなむちのあなかしこと筆をもとゞめなまし

天明とあらたまりぬるはじめのとし彌生の頃小車のうしごみの里に筆をとるものはたぞ　　四方赤良

復讐新聞　忍池子筆記

午十一月十二日新大橋糺藏後敵打の次第

南塗師町
權三郎店手習師匠
仙　龍　廿三四歳
頬あご手疵三箇所

右同人養母
み　き　四十歳位
頭手二箇所

右同人妻
は　る　十六七歳
手面部少々二箇所

神保左京家來
崎山平內　三十四歳
うで頭內襟疵三箇所

右は午十一月十二日四つ時深川六軒堀中の橋邊にて平内へ切掛け夫より猿子橋通り元町餅屋の裏へ逃こみ候處三人の者追詰め切詰倒し申候右は粉藏に詰居候者の語翌十三日に承る

十二日朝深川六間堀さるこ橋の邊にて復讐の事ありと風聞す前原孫市下女（もと神保の藩中に居し者也）いふ樣それは神保の家中にて有べしといふ何故さいふやととへば先年同家中山崎彦作といふものを闇討せし事あり數人徒黨とはいへども崎山平内頭取ゆへ討れし人の妻子つけねらひ候由聞はべると答ふはたして平内也平内を親の敵ときりつけしものは年十七の娘也助太刀せしものは此娘の繼母の聟となり聟は南塗師町權三郎店に住居せし仙龍といふ書家也平内をつけねらひ候ため今年春六間堀森下町幡非山長慶寺門前へ出張をせしとぞ其日朝平内通る所を娘出向親の敵也と云平内いや我一人にはあらず敵は大勢なりとあらそふ此問答手間取内娘先刀を拔平内も拔合二太刀三太刀うちあふ時母後へより一太刀切平内おどろきてかけ出す娘のがさじと追ふ平内逃行ゑびすやと云ふ餅屋のうらに入かねて入魂の釣針師の家にかけ込（大後町の樣子かわり入魂のものはあらでぁらぬものゝ家にて有しとぞ）娘おひつきてきりかくる平内いらちて拂ふ娘刀を打落されて表へ出仙龍が脇差を取て又敵にむかふ時其邊藏普請ありて土こねし所ゆへ泥にすべりてたをるゝ時平内刀ふりあげすでにかうよと見ゆる所を仙龍そばにありあふさいとりを以て拂ふさいとり腮にあたり泥目に入ひるむ所を娘一太刀きるきられて逃る母出あひて又きる敵縱横に奔走して粉藏の普請場へかけ込んとする時竹を荷ひたる者出るにさゝへられて入事を得ず娘又きるきられて倒るゝ時母とゞめをさし立のく敵又おきあがりてにげ出んとする時人々出合て雙方ともにおさへける也（とゞめをさしける時あやまりて肩の方をさしけるとぞ）平内手疵七箇所突疵一箇所深し娘六箇所母二箇所（股の疵ふかし）仙龍二箇所（手うす）平内に殺されし彦作もとは賣卜にて親方吉村市正と公事をして江戸構になりしものなるが神保へすみ込し也これより先當主幼年の砌平内親兵左衞門家老にて三千兩程私欲押領して言語道斷なり長子をば町與力となす中村八郎左衞門とて今吟味がた勤役なりと云或は町屋敷を買或は田地をかひさま〴〵の奢などせしかば主人知行ひしと行づまり彦作はたらきにて漸取つ

ゞきけるそれより追々私欲露顯して平内親兵左衛門遠慮いひ附らるこの一味のものども漸々に身分にもかゝるべき勢故徒黨して彥作を闇打にす平内頭取しと云彥作妻子をば下屋敷へ移し男子なきゆへ扶助米をあたへくれ平内又遠慮せらる親の私欲より事起りて人を殺せし次第ゆへ切腹すべきやなど取沙汰せしをさもあらで過さりし也彥作妻は扶助をうけ候ては復讐の事遂がたしといとまこひて流浪し娘を養育し夫のいひつけゆへ去年仙龍に嫁せし也仙龍は東江門人書家を業とし京橋邊に住居し又南塗師町權三郞店に住居せしといふ

追加

寬政六年二月山崎彥作江戸拂の者を不吟味にて召抱候に附榊原左京差扣被仰附候し也

山崎彥作實卜せし時の名は渡邊左京といひし此度彥作が遺物の刀にて娘敵を打けるとぞ刀の銘は相州藤原正國

先年崎山平内とともに彥作を闇討せしもの平内の外七人の名

岸上主水　鹿島藤兵衛　榊原將監

川口嘉作　山岸平角　高橋七藏

宮崎治兵衛

崎山平内平日出る日は供など多くつれ出る故打事あたはず其日は笛の稽古に出る日にて供少き故に其日をうかゞひ當朝も屋敷の門番に今日は平内がいよ〳〵出る日なるやと聞しものありしとぞ

平内不敵のものにて劍術などよくしかつて殿の遠馬の供などして步行にておくるゝ事なかりしが翌日もまた遠方へ使者を勤しとなん

平内は下駄をはき居る娘は草鞋をはき居候肩を切候節も平内背高く娘の手とゞきかね候由也娘は刀三尺餘を風呂敷につゝみ手に持居候を見る者有之由承候

同十一月二十一日平井仙龍傷を病て同二十八九日頃死す崎山兵左衛門（名保晁字景陽號東橋）葛波山人高俊の門人也かつて葛波の書を墨本にせし事あり序を予に求めし故書つかはせし事もありき

本所一つ目辨財天の額は崎山平左衛門筆なり

辨財天

東橋山保晁謹書　［保晁之印］［東橋］

火方盜賊改加役組の者町内の者に承候由書附

手疵二箇所　中橋塗師町權三郎店　平井専良　二十六

手疵一箇所　元神保左京家來　山崎彦作後家　四十六

手疵七箇所　同人　娘　十七

右之者共塗師町借宅いたし専良儀深川猿子橋家に手跡指南の由稽古所出し置家内は猿子橋店差置候

手疵三箇所　神保左京家來　崎山平内　三十歳

右平内今四つ時糺藏前にて行逢専良妻父被打候節迄所持致し候短刀を常々所持致し候處行違後より専良妻切附候平内儀も拔合候間も無之候得共是も手者にて迯ながらぬき女へ手負はせ右の短刀を打落し女は二つにも可相成處夫専良側に有之候左官持候さいとり棒にて平内面體打候に附目眩み兩手に抜身を持ふり廻し候節下より拂はれ手疵負母は右ふり廻し候節手に一箇所淺手負申候其内町内より雙方取押へ申候

寛政十午年十一月十二日

深川元町往還疵人口書之寫

深川元町月行事平次郎申口

今晝四つ時過同町六間堀町中の諸邊より仔細不知年頃二拾五六歳に相見候總髪の男同三十歳計に相見へ候侍體の者並に四十歳位に相成候女十六七歳位に相見へ候女都合四人拔身にて互に打合往來さわがしく御座候間町内一統罷出制し取押右の者共名住所承合候得ば右侍體の者に御寄合神保左京殿家來崎山平内と申仁の由總髪の男は森下町に罷在候浪人平井仙龍と申者の由女兩人儀は南塗師町權三郎店者の由申立候間早速疵人共へは醫師懸置五人組名主並申聞一同御訴申上候へば御檢使被下置候

南塗師町權三郎店　みき

同人娘　はる

深川森下町吉兵衛店　手跡指南致罷在候　浪人　平井仙龍

右三人申口

一私共儀神保左京殿家來山崎平内へ手疵爲負私共儀も手疵受候に附御檢使之上仔細御尋に御座候みき申上候私夫渡邊左京と申神職にて八丁堀岡崎町忠

兵衛店罷在候處六年巳前丑年八月中御寄合神保左京殿家來崎山兵左衛門並に同人忰同平內世話にて右屋敷へ勝手小役人に相住山崎彥作と相改妻娘とも屋敷へ引移り相勤罷在候處同九月中家老役被申附尤其節同役は右崎山兵左衛門並同人忰平內儀は見習にて夫彥作三人にて家老役相勤罷在候處同役兵左衛門並同人忰平內兩人儀年來不正の筋有之町屋敷等も三簡所所持致し其上金三千兩程之不正之筋有之趣にて相調の儀主人より同十月中被申附候に附段々取調候處町屋敷の儀は一簡所有之並に三千兩程之不正の筋の儀は千五百兩程之由取調主人へ申立候由之儀を遺恨に存候哉同月二十三日夜九つ時頃主人用向之由にて小使中間呼に參り候間罷出候處傍輩共之內前書平內弁に同人弟川口嘉作其外岸上圭水鹿島藤兵衛榊原將監山岸平角高橋七藏宮崎次兵衛右之七人にて夫彥作を及殺害に候間私儀直に罷出右之通見受候間其段主人へ相賴可申と奉存候處其砌より私共儀は老番附き委細の儀は追て被申附も可有之候何れにも神妙致し罷在候樣に川口嘉作達て申聞候間見合罷在候處十日程過いづれにも私共儀は御屋敷にて扶助被成下候間安堵いたし罷在候樣被申附候に附乍殘念屋敷內に罷在候處翌二月二十七日永之暇被申渡候に附知人深川六間堀町喜右衛門と申者方へ參り親子共世話に相成罷在候處同三月十一日より南塗師町、權三郎店神職香取相模と申者方へ參り世話に相成罷在候處右相模儀萬端世話いたし候陰陽師平川仙龍と申者名前にて右店借受罷在候尤娘はる儀右仙龍妻にも可遣旨約束にて未盃等は不爲致候得共當月九日娘召連右仙龍方へ逗留に參り居候處今晝四つ時頃崎山平內往來を通り候を見受候間兼て遺恨を晴し可申と心懸罷在候間娘儀は仙龍刀を持私儀は所持之脇差を持罷在右平內へ夫の敵之由申候へば人違ひ之由申逃出し候間追かけ參り兩人にて切懸候へば平內儀も拔合互に切合罷在候處跡より右仙龍儀も罷越倶に助太刀致し異存念相晴し可申と存候處町內より大勢罷出制候間仕留不申殘念奉存候此上右平內弁外七人之者被召出御吟味奉願上候尤私共儀町內騷し候段奉恐入候何分御慈悲奉願上候

一はる申上候前書之母みき申立候通相違無御座候父

彥作儀先年右平内其外之者共に殺害にあひ候段兼で承殘念に存じ罷在候處今朝表を平内通り候を見受頻りに殘念に相成仙龍所持之刀を帶し罷出母倶に親之敵之由乍申切懸候へば平内儀も刀をぬき私共へ手疵爲負申候儀に御座候尤跡より仙龍儀も參り助太刀致し吳候得共其内町内より大勢罷出制候間討留不申殘念奉存候何分此上母倶に御慈悲奉願上候

一仙龍申上候私儀は右みきはる世話に相成居候陰陽師香取相模と申者は山崎彥作儀元渡邊左京と申神職いたし候節弟子に在之彥作相果候後は弟子之儀に附みきはる兩人共參り世話に相成居候處右相模儀去春中より病氣にて職分も不相成候由にて私へ萬端相賴候間引受世話致し罷在候處同九月中右相模儀致病死候間私儀則香取相模と相改陰陽師職分いたし罷在候得共勝手に附遠藤正健と申ものへ香取相模と申名前を職分共相讓り相模儀は本鄉邊へ參り陰陽師職分いたし罷在候私儀は右吉兵衛店に當七月中引移り平井仙龍と相改手跡指南致し罷在候儀に御座候尤みき儀は其筋より私名前にて右權三郎店借受差置候勿論追てはみき娘はる儀は私妻に貰ひ受候趣約束はいたし置候得共未盃は不致候然る處當月九日にみき儀娘はるを召連私方へ逗留に參り居候處今晝四つ時頃はる儀私所持之刀を持みき儀も所持之脇差を持表へ駈出し候間何事候哉と私儀入湯に可參哉と脇差を帶し出懸け候間直に跡より追駈參り見候へば侍體の者をみき儀は夫之敵之由はる儀親のかたきのよしにて切懸候處右侍體之者も刀をぬき互に切合罷在みきはる危き樣子に附不得止事帶し參り候脇差を拔儘に切合候節手疵受候儀に御座候尤いさゐの儀は不奉存候得共右始末および候段奉恐入候何分御慈悲奉願上候

寄合神保左京家來
家老役
崎山平内口上

一私儀手疵被爲負候に附御檢使之上仔細御尋に御座候今日四時頃用事有之屋敷を罷出六間堀下之橋を渡り河岸通り罷通り候處同所中の橋際にて何者共不知私後より肩先へ理不盡に切附候間驚き振返り見候處先年相果候傍輩山崎彥作妻娘幷に惣髮之男

一人都合三人にて切懸候間私儀も刀をぬき座に打合候得共手に餘り殊に場廣にて小橋に取可申處も無之難防御座候間段々相しらへ引退洞所元町裏屋を小橋にとり待居候間跡より惣髪體之男追駈參り候間手疵爲負候へば脇差を投附逃去り候處みきはる儀引續き參り候間右之者共へも手疵爲負刀もぎとり申候へば右三人之者共も追々逃去申候私儀も數箇所にて疵痛候間其場所へ倒れ町内之者に介抱に逢ひ申候儀に御座候尤山崎彥作妻娘理不盡に及候儀は全く六年巳前丑年十月中仔細有之私並傍輩川口嘉作岸上圭水鹿島藤兵衞檜原將監山岸平角高橋七藏宮崎治兵衞右之者寄合彥作を殺害いたし候儀有之其砌私共儀は主人より押込被申附いづれも日數相立被差免候彥作妻娘儀は翌寅年三月中永之暇被申附其後は一向見受不申候處此儀を遺恨に存じ私へ手疵爲負候儀と奉存候不慮成儀に逢ひ數ケ所手疵受迷惑仕候勿論三人者之共へも不得止事私事手疵爲負候儀に御座候何分此上御聞濟被成下候樣奉願候

午十一月十二日　　崎山平內

崎山平內疵所　　年三十一

一左腕肘下横に三寸程切疵　一箇所
一同方下二寸程切疵　一箇所
一同方手の平より腕へかけ六寸程切疵　一箇所
一右脈所懸横に二寸程切疵　一箇所
一百會左りへ寄竪に三寸程切疵　一箇所
一同方横に二寸程切疵　一箇所
一襟横に三寸程切疵　一箇所
一左小指先少々疵　一箇所

〆八箇所

平井仙龍疵所　年二十六

一右脇の下より吭へかけ竪五寸程切疵　一箇所
一右の人指ゆび竪に二寸程切疵　一箇所
一左り大指除け手のひら二寸程切疵　一箇所

〆三箇所

みき疵所　年四十一

一左り肩竪に三寸程切疵　一箇所
一右脈所竪に一寸五分程切疵　一箇所

〆二箇所

はる疵所　年十七
一左り大ゆびへかけ竪に一寸五分程切疵　一箇所
一同方小ゆび一寸程切疵　一箇所
一右脈所横に一寸程切疵　一箇所
一同方横に一寸程切疵　一箇所
一額ぎわ髮の內竪に二寸程切疵　一箇所
一同方竪に五分程切疵　一箇所
〆六箇所
一みき 拵附脇差　一腰
銘出羽大掾藤原國路長さ一尺三寸程但血附有之
一仙龍 拵附刀
銘近江守藤原繼廣長さ三尺一寸但血附有之
一みき 短刀
銘助宗作長さ七寸五分程但血なし
一はる 短刀
銘平安城能長裏に永祿三長さ九寸程但血附有之鞘なし
右は仙龍みきはる所持之品に有之候事

一平內儀疵痛所候に付召連不申尤疵養生之內主人方へ預け場所に於て引渡し遣候三人之者共は於御番所店請人に預け遣す尤店請人共より銘々口書差出す

寄合神保左京元家來
山崎彥作後家にて
南塗師町權三郎店に罷在候
みき
同人娘
はる

其方儀先年崎山平內外七人之者共彥作を致殺害候處右仔細も不相分其節重立取計ひ候平內を敵と存込何卒討果し申度存候得共其節娘はるも幼年にて殊に平內も油斷無之樣子に附差扣罷在候內はるも致成長候間彥作殺害に逢候趣申聞せ倶に平內を可討果と六ヶ年已來心掛け罷在候內當十一月十二日平井仙龍方へ兩人共逗留いたし時節を窺居候內仙龍宅前を平內一人罷通り候をはる見受刀を持追駈出候に附みきも短刀携へ罷出候處仙龍儀も助太刀致呉候間倶に平內と打合互に疵受既平內は無程相果候始末に相成候段父夫之敵平內を年來心掛け右及始末候儀共女之身分

別て健氣なるいたし方に有之其上はる儀はいまだ若年にて右體之働いたし父の敵平内へ數箇所爲疵負父母之憤を散らし候段別て孝心奇特なる儀に附兩人共無構みき其方儀夫由崎彥作不埒有之先年江戶拂に相成候處其後武家方へ奉公住致し候を其分にいたし連添候段夫之儀と申殊に舊惡の儀に附咎に不及沙汰候

神保左京家來

宮川嘉内

一みきはる儀は戶田釆女正殿御指圖に依て右之通申渡一件令落著候間其旨主人へ可申聞

午十二月二十八日

いもとせのかたらひをなしほど
なふ身まかりたる夫をこひて　　はる女

かすかすのたのめしこともをはらぬに
　はかなく成し人そ戀しき

名殘をし野邊の草木となりし身は
　さそ此世にや心のこさん

下町稻荷社三十三番御詠歌

願主　安上弦晉
　　　大根太木

四方赤良
同行三人

西國秩父はた坂東など數の步を運ぶ輩多かるそれは大悲の身を分ち給へる誓の數によれるなるべし今年きさらぎ初午の日倉稻魂の御社にまうづる事三とせあまり三つになんなる豆腐のしろがね町に初めて赤の飯田町に札打おさめぬこや稻荷の山の紅葉々など て青かりし昔のよる所へ玉のよるてふ諺の如くあながち信じ奉るにもあらずさして願ふべき望もなし飄々として心の行所にしたがふものはたぞ同行三人

安永三年甲午二月上午

一番　白銀町　白旗稻荷

源九郎狐と見へてみやしろの
　ほとりにたてししらはたいなり

二番　本町二丁目　三吉稻荷

作頭とならぬ口にとある神垣の
　名さへ丁稚の三吉いなり

作り物相撲木戶の體　松本幸四郎市川門之助角力行司市川海老藏作り物なり
同奧庭に二間茶屋の體　釋迦が嶽酒宴の體

三　番　浮世小路　福徳稲荷

さま〳〵の浮世笑止な願をも
　きゝわけ給へふくとくいなり

作り物忠臣藏開帳

一番　大星由良之助 刀一腰 繪圖一枚　二番　同 力彌 鑓一筋 文箱一つ　三番　加古川本藏 編笠一がい 尺八一本

四番　おかる かんざし 一本　五番　早野勘平 鐵砲一挺 蓑笠　六番　寺岡平右衛門 袴 一具

七番　天川屋義平 大福帳一冊

四　番　安針町　常盤いなり

梅咲て松のみとりも一しほに
　常盤いなりの色をおみやれ

五　番　新材木町　杉森いなり

寄進する新材木は神垣に
　いのるしるしの杉の森かな

六　番　同　所

一つならす又ふたもとの杉の森
　いなりにみるは初瀬川かな

七　番　長谷川町　三光いなり

願ひ立叶はぬ月日ほしと思ふ
　事をいのらん三光いなり

八　番　和泉町　出世いなり

さゝけつる御みきはつきぬ和泉町
　出世稲荷の身を祝ふとて

九　番　富澤町　有川いなり

賽錢も有かはらとやなけぬらん
　家富澤にたてる町々

十　番　住吉町裏河岸　いなり

名にしおふ火ふせの神といふ事も
　ふいご稲荷のかちによるらん

十一番　元大阪町　伽羅いなり

初午のそのきさらきの客夥に
　足をとめ木の伽羅いなり哉

十二番　樂屋新道劍三郎かくや　銀杏いなり

十三番　同所　羽左衛門かくや　岩代稲荷

十四番　とうか堀　いなり

行燈なぞづくし

順禮の道も中々とほいなり
　こゝはいつことゝつとうか堀

十五番　　かやは町やくし　いなり
かやは町やくらの前のうへ木屋は
　稲を荷へる老翁かさて

十六番　　新場　祐いなり
新らしい新場の肴さゝくるも
　けふこのしろの幸いなり

十七番　　本材木町三丁目うら　不二いなり
そことなくふし川いなりさして行
　木材本やいかたなるらん

十八番　　下槇町　壽いなり

十九番　　中橋白魚屋敷　豊藏いなり
とよくらの内のいなりのさゝけ物
　このしろよりもしら魚屋敷

二十番　　京橋炭町　五本いなり
作り物踏臺に藤棚雙六の賽を下げ踏臺より出
しと書夫より行燈五十三次
京はしの橋の橋つめ都つめ
　五本いなりの宮に入王

二十一番　　京はし　一心いなり
順禮の札はうつともよみかるた
　うつな萬能一心いなり
作り物行燈にめくりかるたの札箱を附夫より
かるたにて

二十二番　　京橋南かぢ町　出世いなり
地口行燈(挿繪略之)
立身や出世いなりにいのるらん
　南かち町かちきとうして

二十三番
東風ふかせにひて太皷は天滿の
　神の梅よりとんた賑わひ

二十四番　　同町　中富いなり

二十五番　　上まき町　日出いなり

二十六番　　同町　清玉いなり

二十七番　　同町　於まいなり
初午にあたる京橋中橋や
　おまんかへにの朱の玉垣

二十八番　雨がへ町　成とくいなり
金銀をうがのみたまのいとくにて
雨がへ町にたてる家藏
二十九番　かまくら町　戸崎いなり
三十番　同町　神尾いなり
三十一番　永富町　佐竹いなり
三十二番　横大工町　子持いなり
三十三番　飯田坂　世繼いなり
世々繼て參らん人の先駈に
田安く札を打納めけり

同行三人
いなり三十三社詣
朱印
當日もちにてほりし也

安永三年甲午二月初午　四方赤良しるす
みそしあまり三つの社のみしめ繩
かけてそいのる三つの火影に　大根太木

復仇紀聞　杏華園藏
寛政十二年庚申十月九日七半時敵討口書
下谷御徒町御徒佐々木忠三郎地借
一ツ橋殿御徒頭衛指南
篠渕彌兵衛内弟子
徳力貫藏　二十八歲
淺草御藏前町札差
伊勢屋義次郎召仕中働
喜兵衛　四十二歲

右貫藏儀松平陸奥守領分奥州名取郡仙臺領北方中岸村長町五右衛門借家善助悴にて父は十五歲之節病死十箇年已前寛政三亥年迄母と兩人にて小商賣致居候へども手廻り不申候間母相談之上同國宮城郡小泉村杉之下百姓七三郎悴長松同年十一月中看抱人に頼相稼候處大酒にて身持不宜身上も難打續八年已前二月下旬長松へ母申渡し候は不如意に相成候間外へ縁附候樣申聞差置候所四五日過同月二十四五日之夜臥し罷罷候へば八半時過と覺母うなり聲致し候間打目覺

見候所母を右之方耳より頬へかけ切附長松儀は迯去り候趣附候へども闇夜にて見失ひ母は相果候間右之段領主へ相屆檢使相濟其後家內取調候へば賣溜金十兩紛失全取迯仕候依之其節より敵討可申存念に候へども任方の儀故相分不申候處御當地へ參り罷候由承當三月下旬忍儀も御當地へ罷出藥研堀埋地罷在候劍術指南大道寺親儀は知人に附便り參右輪淵彌兵衞方へ申込內弟子に相成劍術指南受長松行衞所々相尋罷在今日彌兵衞忰彌司馬へ相斷淺草觀音へ參詣仕罷歸候途中今夕七半時頃同所御藏前片町往還にて敵長松見當捕御役所へ召連可申と存候內振放迯去候樣子に附拔打に仕止めは制不申候へども長松儀は相果申候

一長松事喜兵衞疵改

左鬢に五分程突疵一箇所

同方鬢より頬へかけ七寸程切疵一箇所

同方月代より鬢にかけ五寸程同一箇所

右疵所

一刀銘備中國紫郡住河野利兵衞尉爲家

長二尺六寸八分

右書面之外同所支配名主喘聞候は右貫藏儀喜兵衞を及殺害候上町役人を尋候に附行事罷越候處前書之始末粗申聞候間町詰に候間先帶刀可預由申聞候へば成程承知に候併刀は師匠より借物にて拙者刀には無之旨申候に附卽刻前書彌兵衞を呼に遣候處忰彌司馬罷越成程此者は令使には無之候得共內弟子に相違無之夫故刀をも貸置候旨申聞候其後檢使被相越候由物語也

但喜兵衞儀夜五つ時頃迄存命候得共口書之間に合不申相果候よし

王橋復讐記

寬政十二年十月九日淺草天王橋の北西側鈴木といへる休所の前にて敵討ありその人は仙臺侯の封內名取郡岸村長町といへる所の商人善助が子貫藏といふ者年は二十八歲なり敵は札差伊勢屋幾次郎手代喜兵衞とて年は四十二歲なり貫藏十五歲の夏父にわかれ少年の事なれば宮城郡小泉村の百姓長三郎が子長松といふものをその年の冬よりたのみて（看抱人といふなり）渡世しけるが長松酒をこのみ行跡よろしからざるにより八年まへの二月母がいふ樣はそ看抱に及ばざれば勝手次第にいづかたへもかた附候へといひて四五日を

經る程に或夜丑の刻ばかりに母のうなり聲きこへければ貫藏側によりて見しに右の耳より頰へかけて一刀きゝれたり其まぎれに長松にげ出しかばその時追かけしかど折あしく暗夜なりければ行衞しらずなりし跡にて見れば金十兩うせぬ是全く長松が盜み取しものならん母をばとかく介抱せしかど其かひもなく事きれたりなく／＼愁訴しければ侯より檢使を下されしとぞ是よりして長松がゆくゑをたづねもとめけるに江戸に在と聞てことし三月當地に來り馬喰町に旅宿して兩國ばしの邊に住居せる大越圭稅といへる劍術の師の口入にて和泉橋通の御徒町に住る櫛淵彌兵衞が弟子となり劍術をはげみ江戸一見にことよせていたらぬくまなくさがしもとめけるにけふしも淺草寺に詣てかへるさ此所にて敵長松に出逢し故頓に捕て奉行所にいたり公裁をあふがんとて八とせ前に母をころせしおぼえ有やと問ければなにとばかりいらへて振放しにげけるゆへせんかたなく討留し也先ぬきうちに打かくれば左の耳の上より頰まですぢかひに七寸ほど切きられてふりむくたゝみかけて小鬢より月代へかけて五寸ばかり切込深手にて倒るこれを見て貫藏は自身番所に入る長松今は喜兵衞と名を改てことし八月十三日より來年三月まで給金二兩のさだめにて幾次郎がもとにかゝへられしもの也櫛淵彌兵衞は一橋殿の徒にて神道一心流の達者也貫藏これが内弟子になりて德力と稱す刀は備中國爲家の作二尺七寸ばかりあり喜兵衞きられしは夕七時過の事にてかや町一丁目にすめる長江玄意といへる本道をかねたる外科をむかへて療治をくはへしかど疵深くして治しがたしといふ暮過る頃息たへたりこれその夜檢使の間につきてかれらが申所なり十六日に予廩米賜はるとて伊勢屋嘉右衞門がもとにてきく所也幾次郎は嘉右衞門が比隣にて家二三軒をへだてゝ南のかたなりその前を過ればみせ戶ざしてあり鈴木の前にいたれば昨日の雨に土ぬれて血痕あざやかに見ゆ

ますらおが手にとる太刀のつかの間に　弘賢
はかなくなりし跡を見しはや

西澤文庫讀佛乘二編上の卷　終

西澤文庫 讃佛乘二編中の巻

目次

西澤文庫讃佛乘二編中の巻

西澤綺語堂李叟著

小金が原御狩の記

寛政七年乙卯春三月五日將軍家齊公下總國小金原に御狩し給ふそも〳〵此御狩と申は曾祖吉宗公享保十一年丙午春三月二十七日小金原に猪鹿狩し給ふその御跡を慕はせ給ひ七十年絶しを起し給はんとてかなたこなたにおほせて古き繪圖なんど持傳へなば誰によらず奉るべきよしを觸させしめらる松平伊豆守立花出雲守に其事を司とらしめ安藤大和守、石川將監、成瀬幸右衛門なんど取々に沙汰し侍り就中關東の郡代久世丹後守すべて事取まかなへり又諸役人〳〵は夫々に命下りて日記ども求出て爰の御爲かしこの勢子なんど樣々の所作共前の寅の秋の頃には誰かれつとむべきなど〳〵人數凡に定め有て各意を成にけり冬の寒きにもいとはで駒が原鼠山などいふ野原へ行て組々の者引連習ふ事度々也始の程は麾もてまねくも隨がはず口を開てさけべども耳つぶれたる如く思ひしに走り廻り足弱は踏たをされよく走る者は馬より先に出てしたり顔なるさまして立たるもいと見ぐるしかりし度々習はしぬればおほよそには習えしにや左へさせば左へまはり右へ麾ば右へ行事には覺ぬ朧月の八日には總ならしとて駒が原の霜ふみわけてさま〴〵の所作共し侍りぬその年は雪もふりくれ行年のこと繁きにより又年始は御規式なんどにてしばしはその事もならざりしに初春二十二日には立花の何某見分せられにけり如月の十六日には習ひえし所作共殘りなく上覽ましまさん爲とて駒が原へならせ給ふ此日雪ふり雨いとふ降て明方にはおやみにけり北風烈しく空晴て大に寒き事限りなし宮崎町といふ所の百姓の家にいたり爰にて各赤飯をぞ下し賜りける夫より御供人も連ず馬に乘り思ひ〳〵に組々の羽織を著し頭役は麾をさし纒押立駒が原に至りぬ風はいよ〳〵强し人も馬も吹よする樣にて有し程なく御駕の御注進なりとて大筒ふたはなち耳のもとにて聞へぬれば皆々驚き持場〳〵へぞ出にける布衣已上の者

はこふ松のもとにて御目見へ仕り馬に乗べきのよし御側の衆傳有て皆馬に乗りて各屯へ集りやがて御ならし始り夫々の所作共のこるかたもなく首尾調ひ皆安堵の思ひをなしにけり御合圖に隨ひ奉り進退御心に叶ひ侍りしとの仰と立花の何某番頭の者共へ傳へ給ひぬ遠からぬ道なれど色々の用意共して人々事しげく侍りけるゆへにや程もなく彌生四日になりぬきのふ迄は雨ふりつゞきて道すがらの事など思ひつゞけ侍りしにけふは空も晴やかになりて道も大かたよかりし人々の歡びおほかたならず兼て定めをれば夜深きにやどりを出て兩國の橋に至りぬればはや御船よそほひ仰々しく又御船に旅立人々の粧ひなど見んとて老若群集し侍りぬ卯の時過る頃牧野内膳正下屋敷本所割下水と云所に行しに辰の時の始にや人々も揃ひぬはや打立べし物な失ひそ群集にまぎるべからずなどいひて列を正し沙石川を右に見なし行々て逆井の川を渡てさかくら道といふ平かに直なる道を出し田面の道を過る折しも雁のともなひ顏にとび行空長閑さに橋いくつも渡りて市川はととへば一里もありなんと答ふまた一里計行て尋ぬれば同じやうにぞ言めるいそがむとおもへど人おほく伴ひ行事なれば重荷もちたるものかたかゆるなどにておのづから人も我も行止り／＼して猶おなじ心にもどかしめなりし巳の時過る頃にや瀬川の邊りに至り早く船よせよなどどよみあひて我先にといそげど船きらふ馬などありて心にまかせず馬人と共にこぞり合てあやうくもむかふの岸に至り市川の驛にあがり爰にて暫らくやすらひ腰兵粮など思ひ／＼に腹つくり帶しめ直し又小金が原にては水のよからぬよしもあれば各用意するも有て立出にけり此川をこへぬれば土地の樣子もことかはりて松の葉のみどりも一際につや／＼と勝れて美しき事也國府臺の古き跡赤かけの物凄きを左になし幽なる道をのぼりてきよげなる松原にそふてゆきぬこなたより下る坂のけはしく道も狹くて馬の通ひなどたやすからぬをあらたに山をきり開きたぐひなく淸らかにも造られてけり左の方を谷水の流れ青めきさゞ波よせて池水の如く汀には姫こしゝなどいふ花白々と咲けるけしきのどやか也右の方は少し遠く松山の幾重もかさなりたるが木立しげからずうす／＼と立並て緑りの色ことに勝れたるさまなど言

葉もなし又山をのぼりて平なる野原を右にな屢々行侍ればはや百姓の勢子なりとて小き幟りを持何村何人など書てさし上げ竹螺とやらん云笛を吹聲高くたてゝ鹿を追ふて詰寄る遠き方には鹿の走り行も鳥の飛ぶやうにかすかに見へし午の刻の終りの頃にもや有けん五本木の小屋場といふ所に至りぬ總圍ひは竹の矢來にて門四つあり西の方の門よりぞ入ぬ百四十間四方程にて二萬二千坪總人數一萬三千五百二十一人馬數三百八十疋とぞ聞へし一棟〳〵にわかり苫もて葺たり大なる桶に飯を入て配りあたへ大釜竈をまふけて湯をわかし足の洗足などすべての事皆御陣中のならはし也とぞ聞へしやがて松戸の驛よりお馬にて渡御まします立場〳〵のやうを御巡覽有べしとて御先をも誰彼乘續く時の爲とて笠を著行縢をつけ弓矢たづさへ思ひ〳〵の伊達胴著にて列す歩行にて射する役も二行にあゆみ御先に白熊の對の御鎗しろじろと風になびき御犬はいさみにいさみてほゑ狂ふと有扨御乘らせ給ふ限りにたみたる御笠紅精好の御陣羽折金の御もやう御麾を指せ給ひ御馬もたくましげなるをゆゝしく歩せ給ふ御勢ひ旭に映じてかゞやく計り拜し奉りぬ御跡に御兩卿供人少々召連給ひて供奉せられしが松平豆州を初御供の歷々皆馬上にて随ひ奉りぬ馬上にて備しものともにて皆そのまゝにて首を馬の立髮に附て伏し歩行立のものは膝をつきたる計りにて平伏いたすまじきよし兼て掟りし馬上の者ばかりは紋附の笠著よとの仰あり御巡りすみて御立場へ入せ給ひぬれば程なく總始りの御相圖の大鐵炮二放次に五放つるべ打井上何某組のもの御前にてつかふまつれば御向備へ四百二十五放一度に釣べにて打せぬ原通りの勢子共夫々の合圖有にや鐵炮打立し程も其響四方にわたりぱち〳〵といふ音して物をはじきなどする樣に覺へぬ御向備百人組御傍組御先手組へは白の吹貫にてお合圖成し組の者は皆勢子杖ばかり成りしあれ來る猪もあらんなどあやうしとて十手その外ものゝいかめしげなるを羽織にひきかくして出るも有騎馬の兩番頭へは御合圖白布也番組頭をつれて左右より乘出し乘合の印に附夫より御合圖に随ひ鹿つきとめ又引すゝみて出るも見事也歩行立三番頭へは御合圖貝也後には白尺鹿にかはると所に太鼓をうたせ入替らし詰よせ鹿つきぬく御左備に

て拍子木うちて詰よせ四本松のうちには初の程騎射有久世丹州赤き挑灯を大竹に附て印とし赤き羽織に駒形附たるを著乗廻りそこをとうすな爰をとめよかしなどふせげど限りなき原の事なれば思ふ様にはあらざりし也すこやかなる獸はたゞもらしぬると聞えし追駈騎馬百騎計にて乘つゝまんとすれどもれて迯るも多かりし御網の方へ追つめんとすれどももれて迯るも有行はまれ也突れてたふれたるを耳居などをとりて引合などいとおかしげ也君にも御馬上にて御鎗のつきたる數ありし也鹿すくなき折にや大鐵炮二放打せたる是をかけ給へり百姓勢子一段〳〵に詰寄鐵炮打聲たて篠竹又は色々のもの持笛吹おめきさけびて詰寄るさまいとさはがしくかまびすしき事の限りなるべし馬も驚き又は勞れてや走り出し乘たほして落る者も多し組合るなども有て百姓に背負れくるしげに退たるなどもみへて烈しく走り廻り落ては直に乘も有又は落て馬にはなれ馬は行馬の內へ走り入備亂れし杯も有しとぞ牧士といふものはかの原を日比乘廻りて野馬とる業など熟したる者也赤き羽織に駒形附たるを一樣に著なし猪鹿追ふ事誠に駿き業也走る鹿を追越て先へ廻り追戻し追廻る手練見事也と人皆感じぬ追駈騎馬なんどは多くの中よりえらばれ馬もつよきを乘たらんなれど人も馬も野に馴ぬ故にや鹿を追にいつも跡より計乘行ついに追失なふと歯がみする計ならんかと見へし獸數御網の內すくなしとて立花の雲州一騎乘廻し爰かしこ沙汰せられし段々に詰御場所の邊りまで總勢に押詰たりその聲郊原に響き遠山も崩るゝかとばかり覺へたりとかくして獸出かねたるなんどゝいふ程こそあれ北の方に野火をかけたり烟天におほひ火飛風にまかせてやけ行たりその夜まできへず家居なども思はず燒しもありとぞ江戸にて此烟を見て兩國橋の邊まで火消の役など詰しとなん近きあたりは皆百姓の勢子なりかの笛を吹立篝いくつも焚鐵炮しげく其間に流星の花火をまじへ大竹のふしをこめて切たる火に焚音高し猪鹿追込む勢ひいかめし此人數七萬計とぞ鐵炮は武藏、上總、常陸國四季打又は月限など云鐵炮殘なく持出よと松平豆州、安藤和州に命じ計らしめらると也小屋には色々の紋の幕うち廻し纒鎗なんど立て其さまおごそか也膝近く役するものめぐり來て非常をいまし

め火のもと用心などいふて草臥たる者共いらへ速ならざるをばとく／＼しくとがめのゝしり行も有けり南の方は丘に鐘櫓をもふけて時鐘をも告しらしめらる丑の時の終には一番の貝とて南の木戸にて螺を吹ば皆一同に飯たうべて馬に鞍置すべての事調へて待ぬ其内九番の貝迄定ありて騎馬、歩行道其列をわかちゆゝしくぞ押出しぬ歩行の者は鹿鎗とて柄を竹にて拵へたるを持馬上の者は口附の百姓に小菅笠もともに持せて武者溜り迄揃ぬ漸々夜明がたに成ければ高提灯どもゝ消じつまだ小ぐらきに木戸を乗出し御狩場さしてぞ急ぎぬ限りしられぬ廣き野原の内には小山もあり又ひきゝ所には沼も有て道もよからぬを多勢押行事なればいとさふ／＼しく茨の木しげく生ひしを刈とりし跡などにては足をつらぬき歩みかねてぞ覺ゆ道おそしはや御狩始ならんなど急ぎて漸々辰の時の初の頃にもやあらん物の屯といふ所にぞ至りぬ爰は鹿虻といふ虫多く馬の足を刺ましきり也何れの馬もいとくるしげ也人里とたがひたる故にや霜いとふ降て霜柱など白々としたる所もありき追駈騎馬はこなたの備の前に馬立置ていかめし御目附御使番は皆伊達なる胴著に裾細脚絆つけ袖なしの羽織を著しぬ色々のもやう絲綱など附たるも有てけふときさまして目立よかしとぞ出立ける御立場の高さ三丈計とや四方より登る坂道をつけて裾のかたには鹿坂をまふけへりには青竹にて腰矢來を結ひ若松を植させ給ひ誠にゆゝしき御粧ひとは拜し奉りぬ御後の方には白に御紋の大吹貫をしのぎ春風になびきていづくよりも見まがふべくもなき御印とぞ此吹貫の差渡し二丈四尺有とぞ長さは其程に應じて幾丈もや有けん中の段には御弟君右衛門督殿民部卿殿此狩御拜見の爲とぞ御座をもふけてぞおはしける未の刻過る頃にもや有けん狩盡させ給ひしとてかの御合圖の鐵炮七放初の如くうたせらる御向備を始人込置侍りし鹿共思ひ／＼に拍子木響かし打拂て御狩濟たり元來此原は野馬のある野をけふの御場の御もふけとて馬共はこと原へ追やりける殘たる野馬をつれて三つ四つ勢子に恐れて出ぬ猪のかけめぐるかたちは蚤といふ虫に似たり鹿の走るさまは品もなく只足の早き事見留がたし枯野の色にまがひて爰と指物すれど初の程は見附ざりししばし見馴ぬれば草々鹿と見わくる

事になりしなと皆興せらるゝ夫より皆々列を亂さすもと來し道を小屋場に歸りぬ焚火の烟にむせび目いたへ腹淋しき故にやけさよりも道遠く覺へし漸々おのか小屋〳〵に入湯のみ物たうべて力をそへたりし上には御成道通り松戸の驛を還御なさしめ給ふ常は此川船渡しにてあるをけふの御もふけにとて船橋を渡され大船數多横たへ大綱にてつなぎ橋のもとには新たに築などして木立枝ぶりすぐれたる松を植られ又松戸臺の御小休と申は驛をこへて細道をのぼる左の方の小山也老松枝をつらねおのづから風景作れるがごとく川のあたりを見おろしたるは類ひなく覺ゆ此品にて御往還ともに御小休をばなさしめ給ひぬやゝ有て御目附の小屋へ參れといひこし候程に皆々行ぬ御菓子下し賜るよしの傳あり忝き由申侍りぬ夫より誰かれの小屋などへ行て目出たしなど壽き廻り怪我せし考もなく天氣もよく濟たりなど人々の歡にや小屋〳〵どよみあひて物の音聞へぬ程に有ける申刻過る頃にや打立べきとの案内有し待まふけし儘にいそぎ出立ぬれど多勢のことなれば道もはかゆかずたどり〳〵する内にはや日暮にけり市川の宿よりは六七丁もあなたぞとありしいよ〳〵道おそく風ははだへを通して寒くやすらふも野の中に馬をとゞめて居る事なればいとひさしくぞ覺へし市川の驛に至り爰にて暫くやすらひ腰兵粮など少しつくろひやがて立出ぬ船橋騷々しく人多込合松明の灯のみにては見わけがたくして渡し守も渡し兼ていひあらがひなんど有けり踏はづして川へ落て人に助られぬれにぬれて來るも有眠り〳〵あゆみ兼しもある程なれば川へ落たるもむべなりけりからふじてこなたに上り市川の關を越て一里計り行し頃空かき曇りにけり西の方は雲なし雨にはあるまじなどいふにはや降出しぬ道をいそぎ逆井の渡に至りぬ爰にても物たがひにとひてさばし時を移しこなたに上り草臥つまづやすめなどして百姓の家かりて此所よりは列を正すにも及ばず己々が心にまかすべきとの掟に隨ひ皆人別れぬやがて鐘の聲聞へし程に所の者にとへば丑の時也と答ふ爰は本所の二つ目也大雨にもやならんかといよ〳〵道をいそぎ寅の刻過る頃宿所にかへり明日六日辰の時頃立花の何某のもとへ行て細々の者迄さゝはる事もなく侍りし由を皆々申てけり夫より心落つき三夜寢

ざりし程を取かへすべしなど丶て休みぬ七日には御獲賜るのよし申傳へあれば八日には御殿に出て忝きよしを申奉りぬけものをばおの／＼へわかちいたゞき組々の者迄も御いさほしのゆ丶しきをあふぎ奉れるといひて鼻をおほひながら持運てぞことぶきける久しく絶にし小金の御狩の御時にあひ奉る事有難き御事の至りなりどうやまひ恐れみ奉ることを書とゞめぬ于時寛政七乙卯孟夏三日従五位下因幡守源季寛

櫻請狀の事

一其御與芳千本三月十二日、谷三月二十四日野三月十八日屋　醍醐郎殿家々平野屋東三月十五日寺郎時西行庵三月十日雙林と申仁櫻狩被致候此仁生國城州愛宕三月十三日鹿谷三月九日に御座候先日より能天氣にて慥成日和に御座候間我長三月朔日等受合に相立申候宗旨は大に上戸宗にて御禁酒の切えらん呑人にても又醉轉たる者にても無御座候則智恩院三月十七日末下寺町新善光寺三月二日の暖和に高臺三月十六日紛無之候

一照降の賭勝負遊女の宿は勿論櫻に行暮たりとも花を主じの木の下陰に一夜の宿をも爲致まじく候其外鞍三月十九日馬岩三月十六日倉二尊三月十五日院御三月十六日室太三月十五日秦三

月十八日法輪寺三月十五日祇園三月十四日清水三月十三日嵐山三月十八日大谷の花盛り如何樣の捻上戸出來仕候共我等罷出其埒仕舞毛氈樽提重々諸道具迄直樣夕景本光三月十六日引取可申候將又猥籍の折迯花の座の駈落志賀三月十四日等仕候はゞ早速尋出し御與樹主へ少しも御迷惑相懸申まじく候爲家產の一枝折醉て如件

三月十五日

狩主　平野屋雙林

千本なる櫻霞の雨あがり空請合の
三月十六日
香花殘念　　けふ屋咲兵衛

三月御いたつ
春の日も程なく暮て西へ入影を引とる
三月十五日
花屋四郎次郎

三月十三日花の寺町三月十五日六角こかるけふ

年毎佐久良兵衞殿

京中浮む參る

江戸三芝居替地申渡の寫

堺町葺屋町木挽町三芝居狂言座並に操座同人抱役者座頭出方總代料理茶屋總代へ御申渡

此度市中風俗改候樣にと御趣意有之候所近來役者共芝居近邊住居致候町家の者同樣に立交り誠に三芝居共狂言仕組甚猥りに相成右に附市中へも風俗推移り近來別て野鄙に相成り又其時々流行の事多くは芝居より起り候哉に附旣之往古は兎も角も當時御城下市中に差置候ては御趣意にも相戻り候事に候一體役者共儀は身分の差別も有之候處いつとなく其隔も無之樣に相成候ては不取締の事に附此節堺町葺屋町兩狂言座幷操芝居其外右に携候町家の上は不殘引拂被仰出候乍然二百年來土著地相離候に附ては品々難澁の筋も可有之哉に附相應の御手當可被下候替地の儀は取調追て可及沙汰候木挽町狂言座の儀も追て類燒致候か普請大破に及候節は是又引拂申附候間兼て其旨可存權之助狂言座の儀は來春興行相始候共狂言仕組幷に役者共猥に素人へ不立交候樣に取締方の儀をも厚く可相心得申候右之通被仰渡奉畏候仍而如件

前　書　當　人

天保十二丑年十二月十八日　町　役　人

北御奉行所

市川海老藏へ申渡の寫

水野越前守殿御差圖寅六月二十二日申渡

深川島田町熊藏地借十兵衞方同居同人父

歌舞妓役者　海　老　藏

其方儀家作の儀は長押塗がまち等不相成雛幷に道具の儀も結構の致ましくと前々より町觸有之所其方家業體の儀は時の風俗に隨ひ專表間を飾り不申候ては贔負も薄く道具類も右に准じ金高の品々無之候ては融通も不立候とて右町觸を背居宅長押造床かまちに致し赤銅七々子釘隱し打附庭向へは御影石燈籠其外大石數多差置又は同所土藏内不動の像を飾莊嚴向總金箔彫物有之須彌檀朱塗の彫物總金泥合天井に致或は小簞笥へ赤銅七々子に金丸桐の紋附小柄等鐵物に致其外手込り候鐵物相用書棚幷額奈良細工木彫彩色の雛等追々買取右雛道具も島桐にて金砂子を置胡粉

にて瓢簞を菊桐三五の桐紋形に置名前不存町人より
貰受候迚右櫃に猩々緋を敷座敷內へ相餝其上狂言用
候品も一通にては見物の人氣に入申間敷と革製具足
一領鐵にて甲無之具足一領何れも武用ひ品を所持致
狂言に相用且又先代より持傳り候其珊瑚珠の根附緒
〆附候高蒔繪の印籠等狂言の節相用又は銀無垢のち
ろり等所持致候所金子に差支右之內ちろりは所持致
其餘の品は質入又は可賣拂と預置金子借受候後去丑
之十月質素儉約の儀被仰出候に附不相濟後悔致居宅
造作等取崩候場所も有之候得共右體身分をも不顧奢
移僭上の至殊に先年より買置候共高さ一丈七尺の石
燈籠一對深川永代寺境內に於て開帳有之候不動へ可
致奉納と右境內へ差置候段旁不屆に附觸に背候品幷
居宅取崩候木品ども取上江戸十里四方追放申附候

右　十兵衞

其方儀父海老藏儀町觸相背居宅向長押造塗がまちに
致し道具類其外華美高價の品所持致し奢侈の及所業
候を如何の儀と乍存心附父の儀に候とて差留も不致
其儘に致置候段不屆に附叱度呵置

右家主　熊　藏

其方共の內熊藏地借十兵衞父海老藏儀町觸等背居宅
向長押造塗がまち等に致道具類其外華美高價の品所
持致候をも不存罷有の段畢竟平日申附心附方等閑故
の儀兩人共不埒に附過料三貫文申附候

同町　甚右衞門

質屋 同町字右衞門店　六　三　郎

其方儀海老藏より質に取候雛道具類は手を込候奢侈
の品に有之處前々より町觸をも相背無判にて質に取
候段旁不埒に附右品取上げ過料十貫文申附候

岩代町家主　作　七

其方儀武器の類は容易に質に取申まじくと先年觸置
之處相背殊に身分不相應の品と乍心附海老藏より具
足二領無判にて質に取月數相立菊次郎へ賣拂候段旁
不埒に附過料十貫文申附候
但菊次郎より受取代金錢可償候

神田平永町源右衞門店
古道具屋菊次郎

赤坂裏傳馬町二丁目忠兵衞店
同　平　兵　衞

其方共儀武器の儀に附ては先年町觸れ有之處篤と出

所不相糺菊次郎は作七より具足二領無判にて買取所
持致居候段兩人共不埒に附右品取上げ菊次郎は過料
十貫文平兵衛は同五貫文申附候
但菊次郎は平兵衛へ相渡候代金錢同人へ可償作七
へ相渡候代金錢同人へ償申附候間可受取
右之通被申渡海老藏は於數寄屋橋御門外追放被仰附
候

玉滴隱見卷の一

目　錄

玉滴隱見卷第一

齋藤山城守成立ノ事

一土岐美濃守頼藝ハ昔在濃ノ屋形ニテ有頼藝ノ居城ハ北美濃ノ大桑ト云所ナリ其家臣ニ長井藤左衛門某ト云者有ケリ亦長井ガ臣ニ西村所右衛門ト云僕臣アリ然ルニ京都ニ住居ケル貧賤ノ油賣カレガナリ立ヲ委細ニ尋ルニ則西ノ岡ノ松波トイフ古商賣人也此者美濃ニ通ヒ土岐殿ノ家中ノ人々ト馴ムツビ親シク罷成ケリモトヨリ此油賣京ニ生立者ナレバ自然ト風流ナリ因玆諸侍トノ附合モヨク常ノ人柄トバツグンナリ其下心ハ其身ニ過タル望ミノ有ケル故ニ先長井藤左衛門ガ臣ノ西村所右衛門ニヨクコビヘツラヒ彼者ノ名字ヲ貰西村新助ト改之徘徊セシガ兼テ大望ノ通リ長井藤左衛門ヲ討テ其領地ヲ奪取テ剰後ニハ土岐殿ノ直參ニ罷成其後亦長井新九郎ト名乘テ虎ノ威ヲカリ揚句ノ終ニハ屋形ヲモマゾレク思ヒ頼藝ヲモ尾州へ追出シケレバ土岐殿モ無是非於尾州織田備後守信秀ヲタノミ被ケレバ頼モシクモ被頼ヲ熱田ノ社院ヲ明テ馳走有ケリ此時長井新九郎ハ亦々俗名ヲモ改テ齋藤山城守政利ト名乘テ時得ガホニホコリケリ其故西村所右衛門ガ一類共コレヲ憎ムト雖一戰ト叶ハザリケレバ織田備後守信秀ト相戰ヒケレ共タガイニ勝利コレ

ナクシテ和談トナッテ則山城守ガ娘女ヲ以テ備後守ノ息男ノ織田上總介信長ヲ婿ニ取ケレバ美濃尾張ハ不及申近國迄悉靜謐ニ屬シケルト云々是天文十一年十二年ノコトナリ

一齋藤山城守政利ノ入道ニ三ガ行跡ヲ見ルニ其身ノ奢リ太政大臣清盛ニ超過シテ物ノ情モシラヌ關欲ブドウノ仁ナリ縱令雖爲少罪犢或ハ牛裂ニシ或ハ釜煎ニシテ其釜ノ火ヲバ其罪人ノ妻子兄弟ナドニタカセ亦柱ヲ科人ニイダカセテハ鎗責ヲシヲノレガ眼ヲコロコバセ前代未聞ノ大々惡人ナリ

一齋藤亦兵衛婿龍興コレ道三ガ長男

一天正三乙亥ノ十二月三日ニ官位昇進ノ衆中ハ塙九郎右衛門ヲバ原田備中守簗田右衛門太郎ヲバ戸次右近大夫木下藤吉郎ヲバ羽柴筑前守ト申ケリ右何モ從五位下ナリ

一右ノ木下藤吉郎ヲ羽柴ト改メ給フコトハ丹羽若狹守長秀ト柴田修理亮勝家ト此兩人ノ武藝ノ達人ニ似ト被爾將名字ノ上字下字ヲ取合テ羽柴トハ信長公ノ名乘セ給フトナリ

一天正十壬午ノ五月二十九日ニ信長ハ江州ノ安土ヲ出御有テ京都ノ本能寺ヘ著御ナリ御息信忠公ハ妙覺寺ヘ著セ給フ然ル所ニ明智日向守光秀中國ニ羽柴筑前守秀吉毛利家ト挑戰アテ罪アルニ附テ其加勢トシテ光秀ヲ被仰候ニ附居城ナリケル丹波ノ龜山ヨリ人數ヲクリ出シ六月朔日ノ夜京都ニ至テ信長公ノ御本陣ナル本能寺ヲ取カコミケルホドニ是非ナク信長公ハ翌日二日ニ御生害春秋四十九中將信忠公モ御自害二十八トナリ

一明智事早速武威ヲ洛中ニフルフテ京都ニ所司代ヲ置亦洛中ノ地子錢ヲ免許シ五山及大德寺妙心寺此兩寺ヘ祠堂銀ヲ寄進シケル所ヲ勅使立テ光秀ヲ勞セラルヽト云々

一其節羽柴秀吉ハ備中ノ國高松ノ城ヲ取マヒテ水攻ニシ給フ所ニ毛利家ノ後詰何トシテカ延引ニ附城代ノ清水長左衛門宗治事秀吉ヘ申入候ハ我衆命ニ代テ切腹スベシ御同心ニ於テハ此程籠城ノ鬱氣ヲ散ズベシ美酒ヲ相償ラルベシト有ケレバ被任望酒肴並上林ガ茶ヲ被差添被遣候ヘバ則清水事小船ニ浮テ海上ニ出テ速ニ切腹シテケルト云々

一明智光秀事信長公ヲ弑シタル由六月三日ニ備中ノ

國高松ノ陣所ヘ注進ニ附秀吉同六日ニ高松ヲ發足有テ同八日ニ播州姬路ノ居城ニ著給ヒソコニテ人馬ヲ暫ク休メ給ヒ十日ニ攝州尼ガ崎ヘハセ著テ秀吉髮ヲ斷テ後ニ織田三七郎信孝、丹羽若狹守長秀、池田紀伊守信輝及ビ息ノ勝九郎之助等ヘ使者ヲ以テ被申達ケルヤフハ信長公ノ御弔ニ光秀ヲ卒ニ攻ツプサン其爲ニ秀吉尼ガ崎マデ罷リノボリ候ナリ因茲其儀申達ノ由述給ヘバ三將トモニ不移時刻尼ガサキヘハセ來リ給ヒテ軍評定ノ時信輝入道勝入進ミニス、ンデ今度ノ先陣ハ勝入也ト申シ給ヘバ其席ニ高山右近大夫長房ガ居タリシカ申ケルハ此度山崎表ニテノ一陣ハ此長房タマフヘシ扨二陣ハ中川瀨兵衛淸秀三陣ハ則池田信輝尤タルベシト申ケレバ秀吉聞給ヒテイカニモ〳〵ト有テ軍列今日定リニケリ扨各山ザキ表ヘト云給ヒ敵味方立合テ挑戰ヒシガ十三日ニハ光秀敗軍シ給ヒケレバ筑前守秀吉勝利ヲ得給ヒテ勝ドキヒビキケレバ山崎ノ山彥モ時ノ聲ヲ合セケリ扨其後ニ秀吉ハ大德寺ニ於テ信長公ノ御法事執行トシテ一七日僧侶集テ御經讀誦ノ爲トテ白精千石ニ靑銅一萬貫添テ被遣之ケリ勅ニ依テ贈官アリ則大德寺ニ御廟所有之ニ附寺領五千石被寄附次ニ白銀千百枚進覽之是御經御執行ノ料ト聞ヘタリ

天正十壬午六月二日

總見院贈大相國一品泰巖大居士

右信長公ノ御法名也

一天正十一癸未四月ニ越前ノ國主ノ柴田修理亮勝家秀吉ノ武威ニ誇ラル、コトヲ憎ンデ一戰ノ勝負ヲ爭ヒ給ヒテ勝家ガ甥ナリケル佐久間玄蕃頭盛政ヲ大將トシテ軍兵一萬六千餘騎ヲ差副ラレテ江州志津ガ嶽ノ北嶺ニ指登セテ敵軍ノ待請給フ時ニ玄蕃頭盛政ヨリ柴田三左衛門尉勝政ヘ使節ヲ以テ援兵ヲ請給ヘバ則勝政三千餘騎ヲ引卒シテ盛政ノ勢ト合シテ秀吉ノ大兵ニ被向タリ秀吉則相戰テ勝利ヲ心ノ儘ニヱ給ヒテ修理亮勝家ヲ始メ門葉ヲ悉ク討給テ天下ノ政務ヲ是時ヨリシテ司ドリ給フト云々

一右ノ節秀吉公近習ノ面々ノ内殊ニ戰功有之人々ヘ官祿等宛行ヒ給フ何モ少ナキニ五千石宛行之諸大夫ニ任ゼラレケリ

一番　福島市松正則　任左衛門大夫

二番　加藤虎之助清正　任主計頭
三番　加藤孫太郎嘉明　任左馬助
四番　平野權平長泰　任遠江守
五番　脇坂甚內安治　任中務少輔
六番　糟谷助右衛門武則　任內膳正
七番　片桐助作直盛　任市正

右ノ通也此時福島正則ハ其日ノ合戰ノ一番首ノ高名ニテ其武勇他ニ勝レタリ然ル所ニ筑前守秀吉公ノ方ニテ石川兵助亦柴田勝家ノ方ニテ拜鄉郞良左衛門此兩人相討也依之兵助存命無之ニ附テ福島正則ハ其日ノ一番首ト云シカモ二ツ迄取給ヘバ是最上ノ高名也サレドモ石川兵助右ノ仕合ニ附七本鎗ノ人數一人不足セリ就夫後世ノ儀ヲ秀吉公思召七本鎗ノ其名ヲ殘サレ度御內存ニ附福島正則ハ御使ヲ以テ被仰遣候樣ハ七本鑓ト云コトハ末代マデノ大高名ノ義也兵助コト討死故一人カケタリ尤其方ガ一番鎗ノコトハ七本鎗ニハ拔群勝レタリトハイヘドモ其義ヲ曲テ不足ニ不存候ハヾ其方ヲ加ヘテ其數ノ都合ニセンハイカニト有ケレバ正則ノ請ニ曰トモ角モ上意次第ト有ケレバ其時被加正則七本鎗ノ數ヲタシ給フト云々此衆中ノコトヲ江州志津嶽ノ七本鎗トモ亦ハ柳ガ瀨ノ七本鎗トモ或余湖ノ海ノ七本鎗トモ或ハ柴田合戰ノ七本鎗トモ云直右七人ノ衆ヘ七月朔日ニ御感狀ニ被差添ノ領知ノ御書出シ被下之ケリ但知行ノ御書出シモ御感狀ト一紙トミヘタリ可尋之右感狀ニ曰

今度信孝被レ對レ某被レ及ニ鉾楯一雖レ有下可レ亡ニ秀吉一企上依レ爲ニ前將軍信長公之御連枝一今又不レ去ニ兩業一可レ用ニ斧柯一事有ニ手[illegible]一殊柴田修理亮瀧川左近將監與被レ仰レ合之由決然也依レ之至ニ濃州大垣城一令ニ在滯一可レ攻ニ伏岐阜城一之處柴田先勢柳ケ瀨表ヘ致ニ出張一之旨告來之條不レ移ニ時剋一走飯ナ柳瀨決ニ勝負一之砌粉骨ヲ合ニ於一番鎗一突退群雄北國勢及敗北事偏有ニ爾之武功一矣則加ニ增領五千石一令宛行者也仍感狀如件

天正十一年　七月朔日　秀吉　在判

右之通感狀七通七人衆ヘ一通ヅヽ被下之ト云々

一此柳ガ瀨合戰ニ秀吉公被得勝利御歸陣ノ後ニ秀吉公ハ攝州大阪ニ新城ヲ被築テ御居城ト建給叙從

四位下被任參議ケルトナン
一堀邊兵太トイフ浪人明智日向守光秀ノ家ヲ望ミ荷俵ヲ負相越テ曰御家ヲ望ミニ存參タリ知行千石下サレ候ヘト申ス光秀聞給ヒ料理ナド給リ候其内ニ被荷俵ヲ明サセテ見セラレケレバ長身ノ鎗ヲイサギヨクトギタテヽ入置候ト申ケレバ心緒面白キ侍也望ニ任セ千石取セ召抱ヘヨトテ則御禮申上ル扨明智殿ニ罷有候内ニ數度走廻リノ高名アリ其後丹波國押谷光秀敗軍シテ已モ危カリシカバ侍共五六輩返シ合セ討死ノ時彼堀邊一番ニ取テ返シ勝負ヲ爭ヒ討死仕候也兵太ガ首ヲバ畑老休是ヲ捕ト云々
一布施左京ノ進某ハ和州ノ葛下郡ヲ領シケリ並信長公ヘ仕ヘシカ共公ハ明智ガ爲ニ弑セラレ給ヘバ布施モ世上ノ鳴音ヲ窺ヒ居タリシ所ヘ源家康公ハ其時和泉ノ堺ノ津ヘ御遊興トシテ御座被成候テ於彼地信長公ノ御生害ノ由ヲ被聞召ニ附御弔ノ爲ニ光秀ヲ討亡シナント有シトキ公ノ寵臣其儀御無用ノ旨進テ諫言申上候ニ附テ御延引ト云々扨亦堺ノ津ニ暫モ御止坐ニモ及バザレバ大和路ニカヽラセラレ東國ヘ御歸坐アラントノ儀ノ所ニ畿内以ノ外ニ騷動スレバ強御トンヂヤクモナク御通ノ所ニ彼布施氏ガ領内ニ至テ即チ御使者ヲ被遣左京進ニ此度見屆候ヘト有ケレバ布施氏畏奉ルノ由安々ト御請ヲ仕早速家臣ナリケル吉河主馬助並息次大夫ト云々人數ヲ差添河内ノ山田村マデ御迎ヲ出シ夫ヨリ大和ノ竹内峠ヨリ吉河父子御先手仕其身ノ采地ノ内ナル長尾村ノ明神拜殿ニシテ御酒等ヲ進メ奉リ良有テ御立ノ所ニ和州ノ石原源太ト云者數百人出向途中ヲ妨奉ント相待居タル所ヲ吉河父子急ニハセ向ヒコト故ナク蹴チラシテ家康公ノ御供仕勢州高見峠マデ參候所ニ武田穴山ハ十町餘御跡ヨリ來リ被申候也扨吉河父子ニハ高見峠ヨリ御暇被下御直ニ有難キ被加御意御長刀拜領ス罷歸其趣共ヲ主人ノ布施ニ申聞候ヘバ別テ感悅シテケリ左有テ布施ガ申ケルヤウハ思ヘバ石原ガ今度家康公ヘ路頭ニ於テノ狼藉ノコトハ心外ニ存ル也トテ重テ吉河父子ニ軍勢ヲ差添テ大儀ニハ思ヘドモ源太ガ館ヘ押寄テカレヲ討亡セトテ布施重代傳リケル雉子ノ胞毛ヲ以テ作ツケル軍團扇ヲトラレケレバ吉河弓矢トツテノ面目是也トテ謹テ頂ダイシ則源太ガ館

へ押寄テ互ニ入亂戰ヒシガ石原源太ガ首ヲバ磯野善兵衞討トツテ軍ノカチドキ上テコソハ立歸リケル

一太閤秀吉公御治世ノ時如何ナルシサイ有テカ布施氏累代ノ家滅却ス依之吉河等モ流浪セリ然ル所ニ布施ニ子嗣ナクシテ一女計也其娘ヲ隣國ノ東池玄蕃頭ニ嫁セシメテ後一子出生セリ其子ノ名ヲバ後ニ東池隨庵ト云シ也此隨庵御當家嚴有院樣御代ノ時彼布施ガ末流ノ者共ト一同ニ御老中迄コトノ仔細共ヲ訴訟申上候ヘバ御當家ヘ對シ奉リ忠勤申上候儀共ヲ水野監物忠善逕底御聞及候ニ附テ公儀ヘ御取成被下候ノ所ニ彼隨庵不幸ニシテ於江府病死仕候ニ附テ右ノ訴訟無益仕候事

一彼之吉河主馬助並其子ノ治大夫コト令緣流吉卿ナレバ和州ノ側ニ蟄居シテ居タリシガ慶長十九年ノ比家康公ト秀頼公トノ御弓矢ニ成タル由ヲ承之彼吉河父子根來二百人餘引連テ攝州大阪ノ城中ヘ籠リ則大野主馬頭治房ガ子ニ附時主馬助ト改テ吉河瀨兵衞ト名乘シ此陣ノ時大野ガ持口ハ天王寺表也此所ヘノ寄手ハ亦藤堂和泉守高虎ニテ著ケル其側ニ亦淺野但馬守長晟陣取給ヒケリ此兩將ハ關東方ニテノ大將分ナリケリ因玆城中ニテモ取々ニ評定シテ曰何トカハシテ彼西將ヲバ殺シテンヤト計略工夫ノ所ニ大野治房ガ曰思案ヲ廻ラスニ渠等ヲ亡ス謀ニハ秀頼公ヨリノ謀書ニ認テ高虎ガ陣ヘ遣シナバ必定家康ノ高覽有ミシ然ラバ兩將ヲ追罰疑有マジト申セバ各尤ト同ジケリ扨左アラバ其使ニハ誰ヲ遣シテンヤト試ル所ニ彼吉河瀨兵衞ヲ撰出シ則某謀書ヲ持セテ出シ家康公ノ御本陣ノ邊ヲ忍ビノ〳〵ニ窺ヒシニアンノ如ク番所ノ者共尤レ之彼吉河ヲ捕テ尋問ケレバ是藤堂和泉守高虎ノ陣屋ヘ使ニ參タルモノ也ト申タレバサレバコソ始ヨリ不審モノゾト思ヒシ也イヨ〳〵其要事ノ仔細ヲ尋トヘト云シカバ其使ニ向テ委細是ヲ尋シ所ニ吉河ガ云ク今度御陣所ノ大將分ニテ被居タル高虎事ハ太閤秀吉公ノ御恩ヲ重々蒙ケルモノナレバ外ニハ城ヲ攻ル振ヲミセ内證ニテハ淺野長晟ト肌ヲ合セ不怠城中ヘ美肴珍酒等ヲ饋之內道之忠義ヲ盡シ申サレ候也ト申ケリ此事上聞ニ達其晩和泉守ヲメシテ曰其方事家康ニ忠ヲ盡スコトヲバ諸士ニテモ皆是ヲ

知レリトテ彼秀頼ヨリ高虎ニ給ハリシ一通ヲ御ナゲ出シ被成和泉守ニ被下ノ臺命ニ云ク則使ニ來タル吉河ヲバ高虎ニ被下候ノ間十ノ指ヲ斬テ額ニハ燒金ヲ以テ秀頼ト云印ノ押附テ大野主馬頭ガ持ロヘ追ハナツベシトノ上意ニ依テ其儀ニ隨ヒケルト云々扨翌年ニ元和元年ト改元ノトキ大阪落城以後吉河瀨兵衞コト熊野ノ山中ニカクレ居テ世鎭ケレバ福島左衞門大夫正則方ヘ食祿七百石ニテ被呼出ト云々カク有テ彼家臣ノ内ニテ正則ヘ讒言シテ云ク渠等ニ右ノ通ノ御合力ヲ被下候コトハ童子ニハ劣ルコトナリ指モナキ者ナレバイカントシテ太刀ノ柄ヲバニギランヤト支ヘケレバ吉河是ヲカヘリ聞テ時ヲ窺ヒ彼家臣ヲ日中ニ討スマシテ立ノカント仕リシヲ大夫正則ヨリ追手ヲ遣シ給テ討給フト云々

一慶長三年八月十八日太閤秀吉公薨御其後秀頼公ノ御守ハ加賀大納言利家卿也亦天下ノ御政務ハ江戸內府家康公トシテ聞ヘケル

一秀吉公薨御以後色々騷動シテ京伏見右往左往ト物騷シク有之間家康公ヲ討奉ルベキト諸大名衆野心ヲ挾タマヒ慶長四年正月十六日ニ諸大名衆ヨリ安國寺ト德山五兵衞ヲ使ニシテ家康公ヘ手切ノ儀ヲ申達ラレシ也其砌公ハ河氣ノ御屋敷ニ御座ナサレ折節御番代リノ砌ニテ本多中務少輔ハ關東ニ休息ス榊原式部少輔ハ未登ラズシテ井伊兵部少輔計在伏見仕御無勢ノ御故京極宰相高次ヨリ大津ノ城ヘ御移リ候ヘト申來リ候ヘ共御許容ナクシテ東寺ヘ御籠リ可被成カ亦ハ金札ノ宮ヘ御上リ有テ野合戰ニ可被成カト御相談區々ノ所ニ大谷刑部少輔幷新庄駿河守御味方申候ニヨリ眞田安房守昌幸、其嫡子伊豆守、二男左衞門佐、石河紀伊守、同備前守、同掃部助、脇坂中書父子、丸毛三郎兵衞、平塚因幡守、伊藤武藏守、服部土佐守、野村肥後守等右ノ面々御味方ニ罷成候ニ附敵方ニテ評定ドモ極ラザル內ニ日數延引ス然者井伊兵部少輔老臣ノ木俣土佐申樣ハ今ノ世中ノ何トカ思召シ候ヤト申候ヘバ兵部申サレ候樣ハ小勢ニテ防戰ハ成マジ討死スルヨリ外ハナシトアレバ其時土佐申樣ハ下々モ其段ヲバ存ジ寄所ニテ候ヘドモ死スル中ニ活ヲ求ルニ大將ノ大事ノ御座也就夫私ノ存知奉リ候ハ向島ヘ御移リ

可然奉存候是ハ太閤樣御遊山所ニテ御用心能御屋形ニテ候間アレヘ御移リ遊サレ尤ニ候殊更彼所ニハ諸大名ノ用木數多御座候ヘバ其材木共ヲ柵ニフリ一方口ニテ持固メ其向島ハ四方大河ニテヨキ御要害ナレバ是ヘ内府樣若君樣幷御簾中樣トモニ御移候バ、ナカ〳〵諸大名コセ來申候事ハ存知モ寄ズト申上候ヘバ兵部聞届ラレ夫ハサモ有ベケレドモ兵粮ノ儀ハ如何セント有ケレバ土佐アザ笑テ其分別ナクシテ弓矢ノ御意見可被申上ヤ十日以前ヨリ宇治ノ竹庵ニ申附河内ヨリ登リ候米ヲ調サセ晝夜共ニソレヲ舂セ白米ニ致サセ過半船ニテ運送可申候次ニ味噌鹽野菜薪等ノ儀ハ淀ノ與惣右衛門ニ申附置候是モ此方ヨリ一左右次第ニ向島ヘ差越申筈ニ云合置候ト申候ヘバ兵部横手ヲ打テ則其由ヲ御前ニ於テ兵部被申上ケレバ内府樣一々被聞召御機嫌非大方扨夫ハ其方ガ思寄ニテハ有マジ左樣ノ儀ヲバ何者カ工夫シタルゾト御尋候ヘバ私召仕ノ木保土佐ガ申候ト被申上ケレバ上意ニ曰左樣ニテ有ベシ其木俣ガコトハ隱ナキ覺ノ者也今ニ始ザルコト、仰出サレ早速其夜ニ向島ヘ御移リ被成柵ヲフリ一方口ニシテ兵部御門ヲ固メケレバ諸軍勢丈夫ニ圍ツ、御詰リ被成候故治部少輔コト手延ニ仕候トヲ後悔致シ申候コト

一治部少輔コト色々樣々ニ風說ヲ申觸諸大名ノ心ヲ動シ候附福島左衛門大夫、池田三左衛門、大津宰相加藤主計頭、生駒雅樂助、藤堂佐渡守、堀尾帶刀、中村式部大輔以下右ノ諸大名悉ク家康公ヘ馳加ルニ附石田三成モ降參仕故上方筋無事ニ成候事

一右治部少輔申成ニ附科ナキ内府公ヘ名不足ヲ申カケ面目ナク候ノ間是非其返報ニ三成ヲ打殺シ申ベキト相談ノ儀ヲ治部少ヘ佐竹義宣ヨリ知セ申サレ候故彼男小月毛ト云名馬ニ打乘テ大雨篠ヲ亂スガゴトク降ケルニ唯一騎大阪ヲ出テ伏見ヘ馳入家康公ヲ頼奉ルノ由申上候ニ附御不便ヲ被加御刀コヒ被成跡ヨリ諸將追駈給ヒ内府公ノ御屋敷ヲ取卷治部少ヲ御出シ被下候ヘト被申候ヘ共吾ヲ頼テ參候者ヲ善々諸共ニ切腹ニ及候トテモ相成マジキ由御誓言故是非ナク各退散ト云々扨伏見ノ御城西ノ丸ノ續キニ治部少輔曲輪トテ有之其三成ガ居所ヘ御送リ屆ケ被成候ト云々其后猶諸大名憤リ給ヒ兎

角治部少輔ヲ討べキトテ佐和山迄結城宰相秀康卿ヲ被差添御送被成候ノ所ニ三成勢田迄御同道申カシコヨリ秀康卿へ御斷申上返シ奉リシ也然共相公ヨリ御念ヲ入ラレ芝田左近ヲ佐和山迄見屆ノ爲ニ被遣候ヘバ三成歸城シテ今度ノ御厚恩一生ハ扨置未來永々忌奉ルマジキトノ起請文ヲ書テ内府公へ進上申扨左近へハ貞宗ノ脇差ヲ引出物ニ出シ御禮儀宜樣ニ賴入ト申候テ返シタルト云々

一其後加賀大納言利家卿御病氣重ク候ニ附秀賴公ノ御事賴ミ置ベキ爲ニ大阪ヨリ伏見へ參上内府公へ御對面諸事被仰談事畢テ後公ニハ伏見ノ城へ御移可然トノ由被申上利家卿ハ大阪へ歸候附内府公モ伏見ノ御本丸へ御移リ被成候事

一右ノ御返禮旁々内府公モ大納言殿へ御見廻可被成ト被仰出候ニ附井伊兵部少輔申上候ハ祇今御用心半ノ節如何ニ奉存候旨達テ申上候ヘドモ御承引ナクシテ大阪へ御下向ニ附利家卿叮嚀ニ御馳走有テ扨明朝御茶ヲ上ゲ可申旨ノ所ニ御内意被申上候方有テ御延引也扨早々大阪ヲ御立ナサレ森口迄ハ御馬ニ召レソコヨリ亦御船ニテ前後御氣遣有テ御登ノ所ニ佐田天神ノ下海邊ノ松原ノ中ニ足輕ナドノ樣ニ相見へ申ニ附御不審被遊御船ヲ被留候所ニ伏見ヨリ井伊兵部少輔ガ千餘人計ニテ御迎ニ參ルニゾ有ケル其先手ニハ横地修理、木俣土佐也物頭ニハ脇上右衞門、菅沼雪仙齋鐵砲三百挺ニ火繩ノ挾ミ參候ガ御船ヲ見附候テ其儘兵部馬ヨリトビ下リ御船ノ近邊へ近ヨッテ猩々緋ノ羽織ヲ刷ヒ拜伏シケレバ御機嫌不斜御船ヨリアガラセラレテ彌八鹿毛ト云シ名譽ノ早馬ニ召テ伏見へ一馬場ニ御歸城也扨兵部少輔ハ弓鐵砲ハ大阪ノ方へ立雙テ晩景ニ及迄ヤウスヲ見アハセ候ヘドモ大阪方物靜ニ候ニ附御跡ヨリシヅ〳〵ト歸被申候也今度兵部少輔ノ仕形共ヲ上方大名衆被聞及内府公ニハヨキ御家老ヲ御持ナサレタルトテ天下ノ取沙汰ニ成テ皆人感之ケルトナリ

一石田治部少輔三成コト一タビ天下ヲ望ミ有之附京都ニ於テ無雙ノ細工人ナリケル庄助ト云者ヲ佐和山へ呼下シ殿守ノ下ニカクシヲキ不斷黄金ノ似セ幷小判一分等ヲイカホドモ致サセ置候テ關ガ原前ニ諸浪人幷地侍共へ當座ノ心附トシテ右ノ似金共

ヲソレ〳〵ニ取クレ申候ト申是人ヲナツケンタメ亦ハ其身小身ニテ度々方々ノ御陣普請繁クシテ勝手不自由ニ附作ノ如シトナリ

玉滴隱見卷の一終

富再び情死の本說

（此前に岩井風呂の實說の一章あり傳奇作書殘編と同文ものなれば略す）

扨又富は（岩井風呂その富なり）その翌る月（人殺しのありし）九月になりて京都へ住替られ登りける則内野新地五番町龜長と云茶屋へ來り勤しに何が評判ある女郎ゆへ押立もよければ日々の帶客絶る間なし二箇月程は全盛なりしが此界の習らひ翠帳紅閨に枕を並べしいもとせもいつの間にかは隔つらんに例の帶客も掃仕舞なじみの客もそれ〳〵に出來たれ共緣の切めは錢のきれめにて繁々通ふ跡は詰らぬだらけにてなじみの客の足が上ると又出來ると又預けらるゝなどとやかくして女郎は借錢こしらへ客に無心いふて渡るが大體常也夫が中に蛭子屋何某店の手代彼富にふかく通ひしがある時富いふは其元さま繁くお通ひ被下かく馴染に相成嬉しく存候へば私命はそなたさまへ差上居候何卒一所に死んで下されずやといふにかの手代商賣柄とてかくは云ぞとそこ〳〵にあしらひ其夜は還り又一兩日過て呼迎へば初の如く一所に死たい死でくれぬか兎角死たい〳〵と實心にいふ顏何となく物すごく色々欺して宿へ還りしが餘りおそろしさに其後は頓と通はず成けるか樣に死神の附しもかれ故に非業に死せし四人の恨ならんか扨も初冬も過霜月頃に成しかば初入込の時に引かへひつしと淋しく成ぬ爰に一條千本西に帶屋喜七と云ふ有て頃は霜月上旬の事なりしが町内に振舞事有て他に參會す終日飲酒にもてなされ夜に入て酒きげんの若輩同士五番町へ立より銘々女郎を呼迎てける是因果の始り也かの富を呼むかへし喜七は三十歳にみたざる美男なれば富殊の外悅び眞實を盡してもてなしける既に友達は打連歸らんといふにせひなく別れ歸りしかども富が實心わすれがたく翌日又かしこに行て富を呼迎へければきのふより猶又面白く可愛がり近所の事なれば日々夜々に通ひ詰たり尤喜七に老母妻子あれども打捨て膠漆の中となれば朝毎に富風呂屋へ行も時刻を合置一所に入などその餘はおして知るべし然れ共錢財限りあり其上喜七内證もとより豐なるにもあらざれば今は諺の

錢の切目となりしかば富は樣々工面してなじみの客はいふに及ばず一見客に迄無心をいひ我あたまの差物迄質物に入なるたけ借錢こしらへ明る年二月迄介抱して續けれども男も女郎も義理の借錢だらけに成今は死より外あらじと互ひに心を定めて邪が淵へ身を投相對死をぞしたりける爰に奇なるは其夜喜七富かの淵に在り附富の帶を半引明綿をぬき兩はしへ石を拾ひ入是にて二人の身をぐる〱卷にして其上喜七が褌にてしかと結びとめたり是二人一所に沈み浮上らぬ爲とぞ如此不工面なる形りゆへ淵へはまるも思ふ儘にはなり難く岸の杭に額當り一寸餘打破り死し居たり是に依て御檢使も御隙入られしとぞ扱その砌一條町内年寄五人組其外過半かの所へ至り町内にるすとして殘り居たりしは若き輩兩三人のみ也其中に布屋何某と云有是は喜七が朋友にして年も同輩にて至つて親しきなりしが此日夜に入れど町衆一人も歸り來らず暇に夜半過る頃にもなりしかば布屋某火燵に凭掛り睡りたる所夢ともなく現ともなくふと面をあをむけて見れば顯然としてかの喜七立居たりその形相色青ざめ眼つり上り額に一寸餘りの疵より鮮血を流し無言にて立居たり何某驚きその方は非業に死せしと聞しが無事に歸りしやといひければ半句の答へもなくひよろ〱とおもてをさして出ると思へば目はさめぬ何某ふしぎに思ひとかくする内組頭屋根七と云人歸れり何某落著を問ふに大體相濟候故先しらせの爲我計り歸れりやがて皆々歸るべしと云何某又問ふ喜七が額に是々の疵無やと云に屋根七大に驚き我より先へ歸る人無に如何して知れりやその通りの疵ありといふに彼喜七が亡靈まざ〱來し樣子かたり初めて身の毛いよ立しと也二人の死骸は六波羅野南無地藏といふへ打込れしかど親族より石碑を拵へ今北野下の森下る西側に有としるせり

紀州奥山大樹の寫

寛政六年寅春の頃紀州熊野深山里より三十里奥山へ御用木見立に行て榎の木の大木見出しけり是迄折に來る者もあれどたゞ山とのみ思ひ氣も附ざりしが此度大木なる事を見出しぬ則人夫の杣人等その大きさを積り大守へ上覽に入奉りぬ

一榎木一株太さ百二十抱へ六十丈也高さ三百二十四間五丁餘也枝三本に分れ南の方の枝凡八十二廻り

丈にして四十一丈也

宿り木

一杉長さ七間半　二本有

一椎長五間二尺　七本有

一檜　長五間半　十二本有

一黄楊長四間半　九本有

一松　長四間半　七本有

一柳　長四間半　六本有

一竹　十八本有

一南天長二間半　七本有

右は紀州表より書狀にて申來り珍らしければ寫置ぬ

京大丸の主馬斬の正説

安永三甲午七月三日夜京都烏丸通丸太町上る町大文字屋彦右衛門癇症にて人多く怪我させし趣御公儀へ書上の寫

一新河原町材木町大文字屋金次郎座敷へ出養生致居候主人烏丸通丸太町上る町大文字屋彦右衛門と申二十五歳に相成候者の座敷にて手代丈助を切殺し夫より新河原町を四條へ出四條通を西へ烏丸通北へ丸太町上る町迄の内にて往來の人を切殺し又は手疵負せ右道筋につなぎ置候馬迄三疋に疵附候

一即死　數箇所疵　彦右衛門手代　丈　助卅九歳

一手疵　頭　西石垣四條下る町にて攝州上福島前町 祇園町鍵屋龜之助方に登り居候　河内屋久兵衛

一手疵　面體少々　新河原町材木町にて　大和屋伊助四十歳

一切疵　膝の上　清水四丁目　木村屋專助

右專助竹輿昇渡世仕三條寺町西へ入町へ參り歸りがけ四條御旅町にて切附られ持居候馬挑灯彦右衛門引取逃候に附追かけ參り寺町三條下る町にて挑灯の火消へ見失ひ三條寺町東へ入町鼠屋四郎兵衛へ參り養生致候

一手疵　右の腕先脈所より骨にかゝる　松原西洞院西へ入町鍛冶屋忠兵衛悴 三條柳馬場東へ入町に泊り居候龍の谷　善　次　郎卅一歳

一手疵　面體の右のかた　市助抱へ番人名　不　知

一手疵　右の胸元三寸計り　三條麩屋町東へ入町にて三條油小路西へ入 丸井屋ゑん悴　市　郎　兵　衛廿一歳

一手疵　右の乳の上一寸計かすり　三條堺町辻にて六角室町東へ入　伊勢屋利兵衛四十歳

一手疵　腮一寸程右の腕二寸程　三條烏丸東へ入町にて　大文字屋彦右衛門四十八

一即死　胸一箇所　烏丸三條上る町にて雪踏屋町室町東へ入　綿屋庄兵衛妻　きせ　卅七歳

一手疵　右の腕三箇所五寸計り四寸計り三寸計り　右同町にて二條烏丸藥屋利右衛門小者　利太郎　十四歳

同所にて馬借井筒屋惣五郎軒下に繋置候城州淀大

下津村

一馬三疋　首胴一疋足首一疋脇腹一疋切倒れ候　馬持　助治郎、久兵衛、三右衛門

一手疵　右の腕先少々　烏丸通三條下る町にて町内鍵屋權右衛門　手代　利八

一手疵　右の腕先少々　同斷同家　手代　清八

一手疵　左太股二三寸計　右同町にて二條川原小屋十二郎抱番人　藤助

一手疵　面體額左の方并に手足少々　烏丸二條上る町一丁目大坂屋太郎兵衛　下人　治郎吉　十二歳

一手疵　左の手面少々　同町にて西堀川三條下る綦屋傳兵衛　下人　久兵衛

一手疵　左りの腕八寸計　同通夷川辻にて同夷川東へ入吉田順安　かし屋　升屋小兵衛

一手疵　左りの手先二箇所　同通町竹ヤ町辻にて猪の熊下立賣上る所　津の國屋吉右衛門悴　清兵衛

一手疵　右の肩先四寸計　同通竹屋町上る町にて町内　槌屋甚右衛門手代　幸助

一手疵　右の膝頭下の方二寸程右の手首少々　同通竹屋町辻にて東堀川出水上る町　二木屋彌兵衛悴　義兵衛

一即死　數箇所　同通丸太町上る町にて天使突ぬけ五條上る町　水口屋忠次郎

一手疵　右の手表一寸計　右同町にて二條川原小屋十次郎抱番人　六助

一手疵　面體　同町にて兩がへ町左野周松　下人　與八

一手疵　左の手首少々　同町にて椹木町烏丸西へ入町の番人二條河原小屋　仁助抱　名不知

一手疵　大文字屋彦右衛門下人　九助

大文字屋彦右衛門は居宅へ歸り氣絶仕相果候その節腰物

一脇差　銘粟田口近江守忠納長二尺三寸計白鮫鞘黑龜甲陳金彫金の水玉十四五縁頭四部一波の毛彫目貫金もつかう鍔鐵無地下緒柄糸卷

私に曰右書附表向には彦右衛門居宅へ歸り自滅致せしとあれ共實は彦右衛門手代の計らひにて劍術の師匠にして〆殺させしと風說すと云々元より彦右衛門亂心にて尤其砌りは紺がすりの帷子を著せし故さだかに見へ難くして多く怪我人ありしも理り也

西澤文庫讃佛乘二編中の卷終

西澤文庫讃佛乘二編下の卷

目次

西澤文庫讃佛乗二編下の巻

西澤綺語堂李叟著

唐一行禪師出行日之吉凶祕事

正四七十月

日	事	吉凶
朔日七日十三日十九日廿五日	萬事叶心 開群門	大吉
二日八日十四日廿日廿六日	勿出門四方 萬事	大凶
三日九日十五日廿一日廿七日	被仰高貴 萬事叶心	大吉
四日十日十六日廿二日廿八日	千里叶心 逢悦	大吉
五日十一日十七日廿三日廿九日	萬事	大凶

三六九十二月

日	事	吉凶
朔日九日十七日廿五日	有惡難 口舌失寶	大凶
二日十日十八日廿六日	安穩無驚 得寶	大吉
三日十一日十九日廿七日	東西南北 心叶得寶	大吉
五日十二日廿日廿八日	逢盗賊 失寶	大凶
五日十三日廿一日廿九日	逢弓箭火災 不歸家	大凶
六日十二日十八日廿四日卅日	十方叶心 在悦	大吉
六日七日十四日十五日廿二日廿三日卅日	十方被仰人 逢酒悦	大吉
八日十六日廿四日	逢女人口舌道 行不歸家	大吉

二五八十一月

日	事	吉凶
朔日九日十七日廿五日	有死縫 萬事	大凶
二日十日十八日廿六日	有心中 幸萬事	大吉
三日十一日十九日廿七日	失寶多愁 萬事	大凶
四日十二日廿日廿八日	被仰人一切 叶心	大吉
五日十三日廿一日廿九日	有家業 之德	大吉
六日七日十四日十五日廿二日廿三日卅日	十里外不可 行逢災	大凶
八日十六日廿四日	有家業 利	大吉

右日取は旅行のみに限らず近所出行飛脚または國々文通にても同じ事也但し遠行程は吉凶ともに重し出船なども同じ事也金銀財寶商賣筋等には寶を得ると云日用ゆべし貴人高家へ行時は高貴に仰がるゝと云日を用ゆ出帆等にも安穩不驚と云日を用ゆべし何れも其品によりて考へ合て用ゆるなり

右行出日をためしみるに誠に百發百中恐るべき事也

三味線本手端手唱歌集

琉球組、鳥組、腰組、不祥組、飛彈組、忍組、浮世組右七曲を本曲と云本手といふ

待にござれ、葛の葉、ひらや小松、長崎、下總ほとり、京鹿子右六曲を新曲と云端手といふ裏組六曲外に一賤、錦木、青柳、人はた、見す、なよし、千代の惠、中許八曲、早船、搖上、亂後夜、晴嵐、七つ子、ほそり、かたばち、らうさい、大許、淺黃、茶碗、松虫、堺、中島、右五曲也　本手組　琉球之唱歌

「比翼れんりよのてんにてる月は十五夜がさかりあの君さまはいつもさかりよの

「思ひを志賀の松の風ゆへにしなでこがるゝ〳〵

「深山おろしのを笹のあられのさらりさら〳〵としたる心こそよけれけはしき山のつゞら折のかなたへまはりこなたへまわりくるり〳〵としたる心ぞおもしろや

「とろり〳〵としむるめのかさのうちよりしむりや腰がほそくなりそろよ

「とてもたつ名がやまばこそこちへおよりやれのう柴垣ごしにものいはふ

「おはらぎかはひ〳〵黑木めさいのてうりやうふりやらひゆヤリヤにひやるろあらよひふりやうなりひようふり

本手鳥組之唱歌

「とりもかよはぬ山なれどすめば都よ我さとよ

「我戀は千ぼん小松のかるゝほどたいがみづひてほこりたる程

「みよめばかりの戀をしてちかの鹽がま身をこがす

「いへばよにふるいはねば心がもだ〳〵と

「おめとめるめをみあわせてはなれがたなのその傍をゆめにも見せずうつゝになりともあわせてたもれあはねば心がもだ〳〵と思ひの種やあこがるゝ身をなとせうぞの

「京では一條柳屋が娘よつわり帶をたすきにかけいかにも腰がしなやかな〳〵

「いざまいろ六地藏へほとけにへだてはなけれどもさりとてはではのしほやがたてた六ぢぞうえいそれしほやがたてた六ぢぞう

「しのびのとの樣にふだんとさげさしよ緣のあるゆ

へよねんがないよの

本手腰組之唱歌

「腰に提たる小著はこれもうき人の縫じやほどに
「道で見たりともわすれまいしだれ柳のふりじやほどに
「雨はふるとも雪ふるなさしのぶほそみちのさゝのたはむに
「なるとならずと文をばつくせ心づよやつれなやとにかくにわれは數ならぬ身じやほどに君こふか〳〵ゆこかこずばもどろに
「一夜ふた夜となれそめてあすはふねつるなどせうぞのうらめしや
「いやといふたものかきくどひてのうなんぞやそなたのひとはな心思へや君さまかなえや我戀あらうつつなのうかれ心やもまいの〳〵さゞらもまいのわれともわかい時はとのにもんもまれた

本手ふしやう組之唱歌

「若いがふしやうでをひまいらせうかのせゝしば垣のやぶれたを
「思ふまいこのかねをちんからころりとうてばばちやらなをおもはるゝ
「はしにわが身を投かけてわたらせうよのとろ〳〵〳〵とやれわたらせう
「月の蔭にうつ砧の音のえいはう〳〵ほろ〳〵はうほろとまたしてもおどろくよも〳〵あるに獨ねよとは何事ぞをもはざなきそますはなぐるひしやうづものわざくれ
「わざとこんどはおしやれども眞實思へば恥も人めもおもわくも思ひ出されぬ物じやものしかしながら君はたゞます花のある故
「十七八はうんゐいころりなけしのほこりみなとのたちのめにいりた〳〵めにいりたらばやくしへこもれやくしのまへでのくすしよ〳〵

本手ひんだ組之唱歌

「ゆみや八まんねはせねどねたとおしやらばなとせうぞの
「ひとつこしめせたぶ〳〵とをにおしやくはしのびづま〳〵れんぼれゝつのれいしよしやうにそはゞれつのれ
「これのちよじよがかみわけはしちくこたけによつ

のふしかゞや越前美濃尾張越後京ねごろ粉河さかもとで所望召れた
「あすはしよづもの船のしよづもの　おもたげもなどおよる殿御やあゝかほるとのごやひんだのおどりをひとおどり〳〵
「船の中にはなにとおよるぞ苫を敷寢に揖を枕にひんだのおどりを一踊り〳〵

本手忍組之唱歌

「いよ忍び〳〵て心嬉しや梅にさへづる鶯のよるは梢に宿る共
「思ふまいよのやれそれほどにかほに紅葉のたつた山
「いとまごひにはきたれどもごばんおもてゞめがしげければまづおまちあれ柴の編戸もおせばなにあはれあられかはらほろとふれかなそのまにあゝ笑止やたつなや笑止とたつ名や忍びおどりはおもしろやおもしろや
「戀をせば〳〵二十三夜の月をまて月のいつはりなきものをててかうこしやんきしやかんこはらりついやひよついや〳〵つやにちやうらゝにやうつほゝしのびおどりはおもしろや〳〵
「我戀はもじの袋ぞ色小袖なるとつゝめど色にいで候やれ出さふろ逢見てのちは何とせうぞのもどろやれしやなら〳〵と

本手浮世組唱歌

「誰も浮世は假のやどさのみ人めをつゝむまじよや君しやらり
「文もやるまいびんぎもせまい返事さへせぬうさつらさ君をば人に思はせてかほどにつらきものぞとおんもひおもひしらせでとは思へども身のうへになればさらにおもひきられぬ
「とてもたづなに寢でござれねずともあすはねたとさんだんしよはなのおどりをのみはなの踊りをひとおどり
「われは小づゝみとのはしらべよかはをへだてゝのうかはをへだてゝねにござる花の踊りをのう花のおどりをひとおどり
「いとしわかしゆと小つゞみはしめつゆるめつしらべつゝ寢いらぬさきになるかならぬか〳〵
「みやまやるまいみやま瀧の水はうちやみていづく

ちやうどうてばうちやうていつくつく〳〵しんたんたらつくちやうどうつ若衆おどりをのうわかしゆおどりをひとおどり

端手新曲之唱歌　待にござれ

「まつにこざつたいとしの　君やのうこんや　ござらざこがれしのう

「とても緣なき中ならばなどや始のつらからんいとどはげしきふきあげはまにとりをかぎりにかのさままてばさむき嵐も身にしまぬ

「われがとの　ごはとら五郞どの　しゆじやが粟田口よりいしまたひきやるえいヤヤころさにやつといふてひきやるおこゝろきくさへよふしかなゆるましてそふたらしのずよの

「きみとわれとは　のやわくのいとのきれてはなれて又むすぶ

「しのんだりやなしのはれたりやなうらの　ほそみちこやぶから

「おもふまゝなるのやこよひ　かな月は朧につゝまはきてもみぢばを見よこひはちる

端手組くずのは

「さてもやさゝの　いよくづのはや何をたよりにはひかゝるいよえいはひかゝる

「君を松島　おじまの海士の　袂ひがたき我なみだいよえい我泪

「み山清水はそこからすむが君の心もそこからか

「山で小柴をしむるが　ごとくこよひそさまとしめあかす

「淺き契りに　あひなれそめてふかき思ひはあゝさてなみだ川君にあふせをまつばかりあゝさてまつばかり

「今度ござらばもてきて　たもれぎふの　お山のひの木の枝のうきよがゝりの思ひ葉を

端手組ひらや小松

「ひらや小松の朝通ひつまがぬれ候いそうつ波に

「鹽津貝津にある時はのぼりたいよのさかもとへ

「かどにたつたは八もじさまか　夜風身のどくうちござれ

「いつのなんどきそなたをみそめわれが　身はたゞ磯邊の衞なかぬまもなや君ゆへに

「爰は三でう　かやれかまざかゝいちや泊りてしげり

まいらしよわれが殿御はなごやにござる扨もおるすはものういものじやゑい〳〵さら〳〵のう石をひくゑい〳〵やつといふてひくにはゆめだんべいのえいといふてひけばおなびきやるかのうよいやつといふてゑいとえゑいさらゑい

端手長崎の唱歌

「みやいちがよれた〳〵しよじよがなさけ

「長崎の鳥は時しらぬとりでまよなかにうたふてうたふて君を戻す

「くれないの三尺手拭かたみに見よとておいてゆく

「紅ゐはうすくなるともそもじとわれとはいちごちぎるべいぞよもさくらがにこゐだのさくとちきるべいぞよもさ

「むかしより今に渡りくるくろ船えんがつくればふかのゑとなるさんだまりや

「おもはぬ君にお情はむやくうき身やついてなげくわれらにおちさせられぬ

「名所さま〳〵おほけれど〳〵ふきあげの濱は和歌の浦さあてんじん玉津島布引の松山いくちよ〳〵とわか山のおまいりあれの君井寺

端手しときほそりの唱歌

「此程は戀つ戀られつこよひは忍びのはつでござり申すよつさあいよえいよえうらとけてゆら〳〵とおよれのうさまだよはよながよしげれとんと君さまさああいよえ〳〵

「かひの國なる信玄さまのな一度もござらぬ二度もござらぬおちかぼしのぶにむつのくが候まづ一ばんに雨よ霰によ露に紫垣のう扨いぬのあだぼへそれ月はなを月はのう月扨はえせもの

「しのぶ細道にまつとくるみはうへまいまつよにそのみがくるみでもなしなよ扨まことにくるみでもなし

「こぞのたけとよことしのたけとよしどろでもどろでのうさてふしがそろはぬなよさてまことにふしがそろはぬ

「たれでござり申すかへこしのまたねずなきこよひは殿御のあとに寢てきくねてもきけとよ起てもきけとよこよひのよか扨あすのよになるともあはずばもどるまいよのなよさて誠にもどるまいよの

「扨もつれなのきんまんさまやきんきこざらさぬめりでくらすそれをたれぞと尋ねてきけば六でうしもの町のわかやまさまのうちの山のかみが聞たらばたけくたけりやろものを

端手京鹿子唱歌

「是は京鹿子いろもよやめゆひ手際もよやきよやあら都戀しやのうみやこのしてたち戀しやのう
「是は京小袖いろもよやもんがら手際もよやきよやあら都戀しやのうみやこのそめどのこひしやのう
「しんのやみにもきよはぬわれをあゝさてそさまのまよわする
「ふけよ松風あがれよすだれ今のこうたのぬしみたや
「花とならばなよたんだおんみは紅葉のいろよのう扨ひかずにそひていろまさる
「梅のにほひをさくら花にやとらせて青葉のまゝにながめばや
「尺八のひとよきりこそねもよけれ君を一夜は寢もたらぬあら心なの君さまや
「そちとこちとは松に藤のさがり枝のごとくたそがれどきにかゝるなさけがみにまとまわるゝ

裏組賤之唱歌

「しづの身なれば色には出さぬあたら心のうちにこがるゝ
「たちよりむすぶ山の井あかれずあかぬなかはな松の二葉よ千とせふるまで
「筆で書とも畫にうつすともさらにつきせじ松島の浪にうつろふ月のかげしまのかずしんしらぬ
「たんだ人にはなれまい物よなれての後はなんるゝみがだいじなる物はなるゝがういほどに
「かついた水がゆり〳〵だぶつきこぼるゝげなとのをうつゝなやとのはみやこに

同にしき木之唱歌

「神のおまへのみしめ繩そよふく風にもなびけばなびくつらさ心をうちすてゝものゝぐになまめされそそふりわるやうちとけよ〳〵すみてもせんなやでもんどりうたれぬ
「山がらがかごのうちでのうらみでゝかごがこかご
「七里おばまのなすなの數ほど思へ共ゐんが薄ひやらそひもせぬ

「おつとは錦木とりもちてさいさたるかどをたゝけどもうちにこたふるむしのねのおもひきろやれ戀の道きりはたりちやう〳〵

「忍べども思ふ君にはあはずしてむらさんめいはら〳〵ほろとふるほどに思ひきろやれ戀の道きりはたりちやう〳〵

「とてもおすちやかものゆへにさりがたひとてだかりやうか浮世の中のさんだんにさいひつることよのといはりよよりもなまなかいちやはまいるまいよいや〳〵いやなら始にいやとはおしやうで今更何となろふぞのうおもはざなきそますはなぐるひせうずものわざくれ

同青柳之唱歌

「扨もそなたの立姿春の青柳絲櫻心がたよ〳〵と

「文もやりたしびんぎもしたや俤にたつその俤をわすられもせでみにそひそゞろにうかれきてうきやうつゝや正體なしやうきや戀のとまらぬたゞとにかくにうらめしや

「枕にかゝるみだれ髮いとゞ心の亂れ〳〵てやるせなやよしや其身が何となろうぞの

「縁なき思ひに身はほれて蕣の花の露よりもろき身をもちてさのみ心なつくさせそ

「十七八はすなやまのつゝじねいろとすればゆりをこさるゝ

「くもる鏡かわれが身はおもひまわせばとぎほしや〳〵

「翌は殿御のきぬたうちおかたひめごもてゞうたいきぬた踊りはおもしろやきぬた踊をひとおどり

裏組八幡之唱歌

「月はやはたのまだ空にもいのいのとはおもへども跡に心がとゞまりてうしろ髮がひかるゝなんぼこひには身がほそろ二重の帶が三重廻る

「たつるお茶にはあわたゝでわれが浮名はむら〳〵にたつむら〳〵にたゝばたてのう誠の心とけずはしよくわんじや

「あの山影をすぐにくるだにおそひになよしんじつ恨み事さしおいてまづだいておよれのうなよしんじつ

「思ふかどには竹をうへて雪のふりたる曙をつれなき人にみせばやなびくさゝの葉

「人の嫁御と竹にさく花よやとおもへば曲もないさまじやせんないしやもしやもちくなにしよそうでなにしよそれしよしやなにしよわかしゆをどりをのう若衆踊りを一踊り

裏組みすぐみ唱歌

「みすの俤物ごしに見そめきゝそめうか〳〵と戀をしてやするは人のしらずして夏痩をするとやれすいめさるゝ

「露に亂るゝ糸芒そよ〳〵とふきぐる風にもなびきそろうつゝなやしやうだいなしやとはおもへどもそもじとわれとは萬代までも千代までも

「風にまかするうき雲も吹くかたへゆくめでしめばひくとおもはれつれなの君の心根や

「かづいた水がゆりこぼるゝも浮世の習ひ扨もつれなやしやうだいなしやうきやうきならぬはわれた尺八かさう

「竹がな十七八本ほしやな浮名やもらさじのなかごにくもわれた尺八てなりけそとてもなるまい物ゆへにわれた尺八てがござるしいじとしむればなるものをとりてふきてみたればふしがちやうとしだれつろれつろつりよれつのれがつれつろ

同なよし唱歌

「なよし〳〵はなよしなしのあだ花なよしなりはしもせでなるとなのたつ名よし

「さゝらこだけにあらねどもさらにさよ〳〵さらにしらぬ物ともすればなんぞよそなたのものぐねりなにとなりとおこのみやかねをうとかのう

「しんきはりよやれはまゝで沖の島々を見てなりとあれに見ゆるはしがのうらこか口さきひとつまついなかくだりのみちすがら〳〵

「田舍下りの旅のとの名所の月がながめしやんとのうしやんと詠めたりよさそゞろいとしうてやるせなや

同千代の惠唱歌

「千代の惠よの柳はみどり花は紅ゐよ人はたゞ情それ梅は匂ひよの

「あら野になりを君にそひなばみやなるもの〳〵

「篠の葉にふるあられの音のさらりさら〳〵さらさらとしたる心こそよけれけはしき山のつゞら折のかなたへまわりこなたへ廻りくるりくる〳〵くるとしたる心はおもしろや

「山の白きを雪かとおもふて見れば卯の花しむりや腰が細く成候よ

「武藏野におぎとすゝきが戀をして荻はそよめくのみすゝきはほにでゝみだるゝ

「おはら木〳〵かはひ〳〵黑木めさいのてうりやうふりやうひゆやりやにひやるろあらよひふりやうるりひようふりやう

此一曲うら組相濟候後許之　中許大許目錄のみにて唱歌見へず端歌本調子長歌二上り三下りは後世に出來しと見ゆ三味線琉球より渡りてのち寛永正保の頃は右本手端手裏組中許大許とて唱歌もいと古代なる物にて今は諷ふ者もなく手をしりてひく人は猶稀なるべし明曆萬治の頃より今専らひく長うた端歌の類いで來て唱歌も慥とわかる事とはなりぬ既に本調子端歌の內里げしきと云は赤穗の名士大石良雄の作にして井筒治郎三調也是元祿年間なれば此頃は長うた端うたの新曲出來て本手端手は古風なりとて早癈れりと見ゆ今謠曲の狂言に小歌と云は此文句に似たりたま〳〵殘れるは今諷ふおちやめのとの文句に見へたり古雅なる事愛すべし里げしきの文句昔めさてよければ爰に記

「ふけてくるわの粧ひ見れば宵のともし火そむき寢のゆめのはなさへちらす嵐のさそひきて 合間を呼出すつれ男よそのさらばもなを哀にて埒もなか戸のあくる東雲送る姿のひとへ帶とけてほどけて寢亂れ髮につげの 合つげのおぐしもさすがなみだやばら〳〵袖にこぼれて袖に露のよすがのうきつとめこぼれて袖に露のよすがのうきつとめ

此頃のはうた長うた數百番あれど今は是も古風なりとてすたり外題のみ呼てひく人も諷ふ人もなくなり行ぞぜひもなし

箏曲はむかしより歌も手もかはる事なし夫さへ生田八つ橋の二流あり近頃東都にて箏曲に名高きは山田撿挍斗養都也組をしらぶるに正しくして自うたを作り人をしてもつくらせ曲節を盡せるもの三十八種あり吾嬬箏譜と題して板本となし門弟山登撿挍松和へが藏板とす其目錄

弓八幡　布袋　夏やせ　めぐりあふせ　安氣がらす　今樣朝妻船　葉がくれ　竹筏　春宮曲　四季の艶　山ざくら　かきのうち　相生　曲水　花づ

ま　夏ほとゝぎす　手箱玉章　あづまの花　花のかゞみ　花ごよみ　蓬莱　芙蓉峯　はりま八景　奈須野　住吉　千里の梅　櫻がり　江の島曲　四季の段　小督曲　長恨歌曲　葵上　ゆや　八重垣　追加こゝろの奥　春日詣　初若菜

以上三十八種　此うち

布袋の唱歌

「戀といふ憂はかうしたうき物とがてんはしてもしら絹のもたれ袋のながきひもうちわかたてに思ひ寢のうつら〳〵とこがれてくらすそのぬしさんの三重の帯つひくる〳〵と一重にはむすびもはてぬ春のゆめ仇な此世に暈染のこちや木のはしやじやない物を　同

小督曲之唱歌

をじかなく此山ざとゝゑいじけん嵯峨のあたりの秋の頃ちぐさの花もさま〴〵にむしのうらみもふかき夜の月にまつ虫まねくは尾花萩には露の玉むしやそよ〳〵荻むしくつわむしなくねにつれて仲國が寮のおん馬たまわりて宿直すがたのふぢ袴たづぬる人の俤にたつうす霧のをみなへしそれかあらぬかまぼろしの蓬がしまねたづねわび駒ひきとむるさゝのくまやすらふ蔭の松風にかよふつまおとつまごひのねによる鹿にあらねども昔おぼゆるふえたけやあはすしらべのまがひなき聲をしるべにしたひよるさが野のおくのかたをりど想夫戀の唱歌はひよくの翅の雲ゐをこひ盤渉調のしらべは松のれん理のえだにかよふ小督の局世をしのぶすみかもあすは大原にかへんすがたのなごりとてよはにてならすつまごとのいはこすおもひせきかねてなみだに袖をかしはばや人めもいかゞあやめがた糸のいろねをしるべにてさし入月の雲ゐより御つかひにまゐりしとかしこき君がみことのり野べのをちかたわけきつゝ露の玉づさいしよするつまどのはしのえんのつな又ひきむすぶ御かへりごとそえてたまはるいつゝぎぬきぬ〴〵おくるほどもなくむかひのくるまたてまつりむかしにかへるもゝしきや〳〵千代をちぎりの松のとのは

江島流罪一件物語

正徳四年午正月十四日芝增上寺御靈家へ從三位月光院様より御代參として十二日江島と云御年寄を被遣尤十四日に大名衆御籏本方と參詣有之故十二日御代

參被遣けるに極る故江島方より增上寺設者中へ前日申遣候趣は明日御代參被仰附候間早朝に參り候何も御馳走は御無用に御座候乍去堺町成共木挽町成共芝居を御振舞被成被下候へと人を遣ける所右返答に御代參に御出被成候由承知仕候夫に附芝居之儀御申越被成候へ共御馳走も手寄り振舞も時節御座候依之芝居之儀は決て相成申まじき由返答致しける江島承り殊の外腹立し御呉服所の後藤縫之助手代次郎兵衛と云有て久々御役所相働者也同じ手代清助と云者當年二十三歲になりけるが女中方の氣に入毎日兩人上の御殿御用相勤罷在候處江島樣御召と申端女出て清助を呼れ江島殿御逢被成清助に御申附候は明日去る仔細有之罷出候故其節山村長太夫芝居見物申度候二階棧敷五十間計借り置辨當百人前餘申附吳候樣にと云ける故清助御受申早速木挽町松屋と云茶屋へ約束致明十二日棧敷五十間辨當百人前餘云附菓子拵調へ先手附にと金二十兩相渡候間是を受取翌早朝より治郎兵衛清助兩人は長太夫方に袴羽織にて待受致居たりけり然る所江島は御代參として增上寺へ參り候處方丈始設者衆迄被下物御包金銀七十兩と二貫五百目其外吳服物品に有之を少々にて賄ひ殘りの金銀並吳服物等芝居へ爲持代參に事よせ外に多くの女中を誘ひ出し增上寺をば早々立木挽町へぞ行けりかくて其節御年寄に肩を並ぶる面々此日同道せし衆中は

新御中老役	五百石	宮路	二十八歲
同　役	七百石	木曾路	三十七歲
表御使番	五百石	梅山	三十二歲
御內所御使番	四百五十石	吉川	二十七歲
同　役	四百七十石	沖津	三十四歲
御用人	四百八十石	およの	二十五歲
御小性衆	十人扶持	おげん	十七歲
同　役	各同斷	おせん	十四歲

右の女中を始として末々の女中供奉の諸士迄不殘棧敷に入て都合男女百卅人程と見へてけり扨江島事は當年卅一歲にて高六百石にて殊の外月光院樣御意に入なれば備樣に心の進まぬ人も江島が威勢に恐れ上下共に隨ひなびきけるとかや此日の有樣言語にたへたる事共也先棧敷には簾を下げ座元長太夫生島新五郎中村清五郎袴羽織にて酒の相手に棧敷へ呼れ酒宴のみにては狂言の物音も聞えぬ體にぞ見へにける然

るに松平薩摩守家來谷口新平といへる者夫婦連にて下棧敷にて見物しける所に上棧敷にて江島酒に醉我しらず酒をこぼし下へもりかの新平が頭にかゝりし故新平方より上の棧敷へ使を立ければ御徒目附岡本五郎右衛門新平に手をさげ段々と詫しけれ共新平更に得心せず既に事にも可及と見へけれ共達て詫した る故新平も場所悪しき故に堪忍して晝時夫婦連にて歸りける夫故五郎右衛門も達て江島に勸めて歸り候樣に數度諫けれ共決て得心なく却て大に立腹しても てあましたる體にみへける夫より八つ時二階棧敷より廊下傳ひに道を附長太夫が居宅の座敷へ行右の女中皆々行けるは言語に絕たる事共也扨狂言作者中村清五郎は夫婦連にて座敷へ出取持致ける此淸五郎妻事は幼少の頃踊り三味線を習ひ見めよき生れにて名をお梅と呼大法印と云祈禱者の娘なるが先公方樣御代御城へ被召出御意に入御奉公相勤ける者故上の御殿樣にても御意に入にて江島抔にも毎度世話に成恩もある者なれば一入江島に馳走ぶり大方の役者野郞子供と馴染深く出來けり偖又江島と新五郎と別して馴染の深き譯は新五郎が娘を水戶殿家中奥山喜內と

云者の娘にして喜內兄奥山交竹院手引にて江島が部屋子に致置江島と新五郎とわりなき事七箇年の馴染にて詞にも盡されぬ事共也此日早七つ時にも成ければ長太夫が座敷を立裏通りの山屋と云茶屋へ行二階座敷にて酒宴をぞ催ふしけり是も夥しき事共也扨も時刻のうつりしかば附來りける所の御徒目附御小人目附皆々相談致し餘りの大酒殊に日暮にも及ければ是非御立候へと度々云ひけれ共江島は大きに立腹して役者野郎茶屋其外へもすさまじく花をくれしは羽二重二疋三疋或は紅八丈縞其外反物呉服所より取寄遣しける扨又增上寺より持參の反物金銀迄不殘花に出しけるとかや漸々木挽町を立出平川御門より夜五つ時入にける右女中何れも月光院樣御前へ出只恐れ入て居られけり江島事は大のてれん者にて少も恐れず御前に出口にまかせてよき程に申上ければ上々樣の御儀殊に御意に入なれば首尾よく納りける偖翌日よりは其節供奉之衆中御徒目附御小人目附黑鍬同心中迄云合せ寄合附候て評議に及けるは茶屋遊び芝居見物の樣子彼是と心得がたき事共殊に其節歸り候へと申せしを腹立惡口致彼是此分にては置がたく以後

いか様なる越度にも成べしやあの我儘なる江島なれば若も上にていかやうの事申出し銘々の迷惑に成り申さんも不知とて銘々しめし合せ御支配の事なれば若年寄中方迄一書を以て訴けり其趣き後藤の手代治郎兵衛清助兩人が事芝居一件の事増上寺御代參の樣子新五郎等が事一々申上ければ夫より御詮議始り奥御留守は松平主計頭松前伊豆守大島肥後守大久保淡路守一位樣御用人堀丹後守品川佐渡守本間豐後守三位樣御用人安藤志摩守坂部飛騨守右の面々詮議す老中若年寄衆相談の上二月二日詮議相濟何れも御暇被下皆々上著御取上げ白無垢計著しはだしにして御城を追出され此時女中殊の外難儀に及び達て願よふよふ宿々へ町駕籠の願相叶宿へ御預と成にけり江島一人は白無垢計著せはだしにて髪取亂し雨の手を取り平川御門より飯田町江島が兄なる白井平右衛門方へ御預にぞ成ける其節は氣違の樣に成しと也大分の群集したりしとかや夫より平右衛門方にて座敷牢をしつらひ入置たり扨女中衆は何れも六七百石の面々なれば召仕の女房達下女端女末々に至迄上下三百人の餘其日の内に皆々御城を追出され跡は不殘闕所に相成當分下されずして二月の末に被下にけり下女の道具は當座に下され江島一人は闕所に成切りなりと也偖二月三日評定所にて皆々御詮議有之同四日木挽町役者共召呼れ村山平右衛門中村源太郎生島新五郎中村清五郎座元長太夫森田勘彌町奉行所にて御吟味の上右の内三人手錠被仰附又翌日右の者共と外に子供二人葉山源太郎三條勘太郎兩人相添町奉行坪内能登守が御番所にて御聞書相濟て後此兩人は子供の事故正直に申上しとて御咎なく歸りける其跡右の者共其外の者迄も江島に貰ひ候物不殘書上候樣被仰渡其通り皆書附にて差上る雙方御詮議の上にて新五郎牢舍被仰附ける其時の狂言に右衛門櫻と云外題にて丸橋忠彌が事を作り二月朔日より替りを出す其狂言に留縫の體にて敵と切合あり其時新五郎が著たる小袖上に緋地の金入立波の模樣の小手袖にて紅裏つけたるを著て出けり是は江島が所望にて遣候夫故江島方より御紋附の縮緬の小袖貰受候に附入牢被仰附候偖清五郎女房呼出され牢舍被仰附平右衛門源太郎兩人は手錠御免にて御預に相成候長太夫勘彌も町預と成り七日は長太夫座團十郎勘彌座藤田花之丞其外子供召

呼れ樣々御詮議有之上にて團十郎御預となる殘は御構なし次の日に團十郎申譯立御免也九日淸五郎夫婦共に嚴しく拷問せられ白狀す依之十一日堺町の野郎共其上葺屋町市村竹之丞座にて瀧井半四郎被召呼御詮議の上手錠被仰附殘は御構なし同十三日御詮議にて女中方と御奧醫師交竹院喜內淸五郎等對決あり後藤が手代治郎兵衞淸助下男七兵衞と三人入牢被仰附江島は其日より上り屋へ入りける淸五郎女房お梅色々と白狀致候故終に責殺されにける江島儀も段々責强故木挽町葺屋町の樣子明白に相知れたり扨其頃一位樣御大切の御道具二三品紛失す若し江島方より役者共に與候や又懇意成者にも與候歟御詮議あり總役者共へ被仰渡候て江島は勿論外之女中方より貰候物あらば包まず申候樣に仰渡依之有體に申上候者は御構なし少しも僞り候者牢舍手錠に成り其後段々御詮議相募り或は御免或は彌増の御詮議に逢ふ者も有ける葺屋町瀧井半四郎は初手は手錠にて有けるが後々は入牢被仰附ける同二十五日に奧山喜內と淸五郎と評定所にて對決有喜內專ら新五郎娘を自分の娘と僞り江島が部屋子に遣し其上芝居見物船遊山又は吉原抔へ同導致候事迄顯れ水戸へ坪內能登守より御引渡被成候故喜內事は水戸の屋敷にて追放せられけるとぞ扨淸五郎は獄中にて大病相煩ける故妻子共每日御願の願に出る所に御慈悲にて町內へ御預の上宿元にて養生致し每日樣體書を以病の樣子を屆ける其後全快致又候入牢致ける此時新五郎が妻子の別れ哀れ成ける事共也扨其後長太夫居宅の座敷へ通路を附て數多の女中を引込候儀重々不屆に附闕所にて其身は入牢被仰附勿論新五郎淸五郎半四郎不殘闕所と成にけり尤妻子共は店請人の引取に成けるかくて三月四日御評定所へ被召寄候者共は江島が兄白井平右衞門同弟豐島平八原田伊右衞門奧山交竹院金丸四郎兵衞西村右衞門御用達町人梅屋善六右雙方繩懸り入牢す此日對決の上にて顯れたる事は右の者共江島度々吉原賤并に四座の芝居見物に參り又は船遊山等へ同道致貴をいとはず筋惡しき者共と參會致候由相知れ吉原の茶屋呼出され御詮議被成候所右茶屋の方に御紋附の御長持有之ける故此御長持之儀御吟味有ける所に是は雜司が谷鬼子母神別當方より貰候由申上候故早々別當被召出候由風聞にきくとひとしく直樣駈落致候

依之又々御尋被成候へば目黒邊に居候由早々召捕御詮議有之候へば雜司が谷別當申上候は江島殿無心被申候故金三百兩用立申候故御返濟被下候樣催促致候所芝居又は吉原にて差引可致候由申され候故無是非參會致候金子貸候へば催促候筈なるに惡しき場所へ參會致候事紛しき儀故其分に成難く江戸御追放被仰附候扨長持の儀は江島か計事を以鬼子母神別當より中之町茶屋へ遣置候由長持の內御詮議有之候所皆芝居役者の衣裳也是は江島が吉原へ參候節外の人々同道にて役者共呼寄狂言致させ見物致候道具也此催は常に有けるよし申上ける扨此節增上寺中の德水院と申す出家駈落致ける此趣荒增尋ぬるに此德水院儀江島と殊之外懇ろに致候故立退候と相見へける也去年十月十七日芝宇田川町橋の角滿願寺屋と云酒屋有しが此女房を盜み出し町宅を致し江島が世話にて增上寺地內懇ろ成所化を賴み彼女房をかくまひ置よし是は滿願寺屋孫兵衞も彼坊主と女房不義の樣子後に考れば是も譯ある事にて江島が方便なりけり夫故女房の親元へもよき樣に挨拶致し置ける夫故其分にて有しが是は深き意味有ける事也扨も御評定所にては江島が一類雙方被召出罪過口趣仰附ける銘々其趣きは

俵島流罪（又猿島共云三崎より海上四百九十里）　江　島　廿一歲

右江島事段々御取立にて重き御奉公も相勤數多の女中の上にも立候身にて內々其行ひ正しからず御使に出候折節或は宿下り致候に事寄度々貴賤を不撰不宜者共に相近附指て由緣もなき家々に寢泊り致中にも狂言座の者共に馴染を重ね其身の行ひ始此のみならず朋輩の女中を追出し候て御殿をみだりに勤候段其罪過重き事に候得共御慈悲を以命を御助被遊永々遠島に行ふもの也

死罪　江島兄小普請白井平右衞門

右平右衞門儀御役相勤候節於大阪不調法有之に附大阪の町人御當地迄罷越度々訴訟に出候得共御宥免の御沙汰を以御窮命無之御役被召上候計也然る處妹江島事重き御奉公相勤候所に內々に於て其行ひ正しからざるを存罷在別て惡しき者共に馴染會合致候段重々罪過あげてかぞへがたし依て其罪を糺し死罪に行ふもの也

利島流罪（但し三崎より海上二十七里）　平田伊右衞門

右伊右衞門儀於櫻田御殿に御役勤來り總じて奧方御

作法不及申江島事重き御奉公仕多くの女中の上に立候者箇樣に不行跡成儀乍存其分に差置候咎に依て如此に行ふ者也

御藏島流罪 但し三島より海上四十七里　御奥醫師 奥山交竹院

右交竹院事江島と樣々の事申合候段不屆至極に附如此行ふ者也

八丈島流罪 三島より海上百廿里　小普請奉行 今井六右衞門

右六右衞門儀江島と度々悪しき所へ同道致し重々不宜事共不屆之至候依之如此行ふ者也

同島流罪　越後御代官 金丸四郎兵衞

右之者を同斷に行ふもの也

改易　御勘定 西忠左衞門

右忠左衞門儀去々年之夏豊島平八郎誘引に依て船遊びの節江嶋に對面いたし總て御奉公之面々其憚あるべき事に候所無其儀重々不屆に附改易に行ふ者也

追放　御徒 杉山平四郎

右平四郎儀去々年夏豊島平八郎誘引故江島と船遊山之節參會致傾城町にて相親しみ候由尤親類のよしみ有之といへども不似合行跡に候然れ共其罪をなだめ追拂に行ふ者也

死罪　水戸家人 奥山喜内

右喜内儀年來江島と相親しみ其亂行を誘ひ所々の遊びに伴ひ或は遊女と參會致し或は芝居之役者と參會せしめ其外種々重犯の罪科に依て死罪を以て水戸にて可有其沙汰者也

閉門　呉服所 後藤縫殿之助

右縫殿之助儀御代々御用承り御奥方の御用をも承候儀大切の儀に候御廣敷へ差出候手代事元より人を撰み其制禁を立女中方御用向を承らせべき筈の所不埒成者を指出し候段不吟味也扨呉服物の外密事承まじき事に候是常に嚴重に可申聞せ事也且僅に廿歳にも不成若輩者を差出し數年御廣敷相勤させ候故彼手代江島に親しみ船遊山芝居見物其外遊宴を催候事及數度只今に至て縫殿之助其趣不存由申譯致候へ共難相立吃度可被仰附候へ共御代々御用承り候者故御宥免の御沙汰を以閉門せしむるもの也

新島流罪 但し三崎より海上廿八里　新御番江島兄 豊島平八郎

右平八郎儀江島兄弟のよしみといへ共其禮儀もあらず江島と同道致芝居船遊山或は遊女町へ數度參會致不行跡の致方依之遠流に行ふ者也

同島流罪　後藤縫殿之助手代　清助

右清助儀数年江島に隨ひ船遊山芝居見物役者等へ文通の取次致候段不届の至候乍然上より御附之儀故難去候段申譯致候と雖主人縫殿之助へ隠し置候由申上其身も不宜事と相聞へ尤若輩者とは乍申主人申附に依て御奥方御用をも承り候爲御廣敷へ差出候ものに候所公儀を不憚次第其罪不可遁事といへども罪科をなだめ永く遠流に行ふものなり

追放　後藤縫殿之助手代　治郎兵衛

右治郎兵衛事當正月十一日朋輩清助に任せ狂言芝居等の事取計ひ同十二日に江島が見物の棧敷へ罷越茶屋に於て料理申附候條不輕致方尤輕き者とは乍申(下カ)主人申附奥方の御用をも承わらせ候者の儀公儀を不憚致方事輕々しく相心得若手の朋輩に諸事まかせる罪科免しがたく依て追放に行ふ者也

御免　後藤縫殿之助下部　七兵衛

右七兵衛儀正月十二日手代共申附候に依て狂言之芝居茶屋等申附候事不屆に候得共上立候者申附候に依てなれば其身に取て尤に聞へ候依て牢舍御赦免其上御搆無之者也

大島流罪 三崎より海上十八里　御書院番平四伊右衛門養子　平田彦四郎

右彦四郎儀父伊右衛門御留守番相勤候者にて江島と申合此者狂言芝居度々相催父子共に茶屋芝居へ罷越江島と同座にて狂言の役者子共を相集め夜更迄及酒宴候段数度の由此罪遁れがたし父伊右衛門事死罪成べき所を其罪を宥し遠島に行れ候間同罪に行ふ者也

追放　今井六右衛門子　今井六之助

右六之助儀父六右衛門共に江島と同道致所々悪しき遊所へ參會致候罪に依て遠流に行はれ候右子いわんや同座參會致候事罪遁れがたし依て今追放者也

同　金丸四郎兵衛忰總領　金丸又三郎

同二男　三十郎

右兩人の子供父四郎兵衛重罪の者たるにより遠流に行候者の子たるに依て追放せしむる者也

親類預　白井平右衛門忰總領　白井伊織

同二男　平七郎

右兩人は子供父平右衛門死罪に行候者の子故遁れざる所然りといへども兩人共に幼少なる者故十五歳迄親類へ御預け也

遠慮　豐島平八郎實子　疋田吉十郎

右之者實父平八郎儀其姉江島事に附罪科に行れ候と
雖吉十郎儀は他家へ養子に參り罷在其上實父幷に江
島杯へも諫言申たる儀も有之由しん妙の至に候依て
實父幷に平右衞門江島等近頃犯罪の者子供甥なりと
いへども其類をげんぜられ兎角御沙汰に不及例式の
遠慮仕罷在べき者也

大島流罪 三崎より海上十八里　　狂言座長太夫

右長太夫儀狂言芝居の座本をも仕候上は役者の事に
於て常に其差引をも可致候事にて總て見物之若人棧
敷茶屋等へ狂言の役者子供等呼寄候其女中若きに至
ては一切差出申まじく候事に候所然るに正月十二日
江島を初其外女中の見物に相集り棧敷へ其身も罷出
外の役者子供みだりに差出し其上自分の居宅へ伴ひ
江島と參會の座へ酒の相手に罷越罪科重かるべし依
て流罪に行ふ者也

三宅島流罪 三崎より海上四十二里　　長太夫抱役者 新五郎

右新五郎儀先年御城女中の事に付世上に沙汰し候事
も有之候得共たしなむべき所に九平已來度々江島と
參會致其身の娘を御城内へ遣し置候段是江島が惡事
と申乍上をも不恐致方罪科遁がたし仍て遠流に行ふ
者也

神津島流罪 三崎より海上三十六里　　竹之丞座狂言作者 清五郎

右清五郎義牢内にて相煩候故快氣次第可申附者也

追放　　竹之丞座抱役者 半四郎

右半四郎儀江島と狂言見物之度々茶屋において酒の
相手に成り夜更迄參會致候段難遁科に依て令追放者
也

右之通三月十三日評定所にて大目附仙石丹波守被申
渡町奉行坪内能登守并目附丸茂五郎兵衞稻生治郎右
衞門右之衆中如此なる御書附を以て被仰渡候へば江
島申候は是程の事に罷成候はゞ仕樣も御座候者をと
不足そうに申て立けり扨此日は白井平右衞門計死罪
に行れ殘りは島船出來迄牢舍致罷在候右の趣月光院
樣被聞召翌日に秋元但馬守を被召江島事は久々相勤
候者の事故何卒何方へ成共預候樣にと御意被遊候へ
ば一圓御請不仕上意には候得共此度之御仕置私一人
申附候儀にては無御座候何れも同役共へ相談仕申附
候尤上樣御幼少に被爲入候間何事も宥免を加へ重き
を輕き御仕置に仕候と奉存候只今に至り何と思召れ
候共一度評定所において諸役人の面々決論仕候上は

相改御仕置を直し候儀は家康公御法度を相背と申筋に罷成候へば難仕由御返答申上御次へ下り候へば安藤志摩守罷出但馬頭へ申候は三位樣御頼み候間御相談被成候樣又々申候故但馬守申候は評定所捌相濟候儀殊更御政道の御さわり相成難と被存候へ共三位樣左程に被爲思召候ば先々同役と相談仕り可申と申て則同役共に相談致候へば阿部豐後守申候は三位樣夫程に思召御頼被成候はゞ苦しかるまじきとの相談にて則豐後守御受申上て御差圖を以内藤駿河守へ御預被成候て三月六日に被遣同十七日に駿河守在所へ遣しける此時被仰渡候は向後木綿著物斗絹類一切無用に候朝夕一菜にて差置可申候下女一人附置家より外へ一切出し申まじき旨被仰度候

抑此江島と申者元來三河之國の苅谷といふ所の出生にて輕き民の子にて幼少の時關東へ賣られ女衒の手より吉原へ遊女に賣られ候者にて親類迚は無之者なりしか然るに白井平右衞門ふと吉原傾城町へ行候節此江島に馴染ふかく相成り馴染重りて平右衞門此女を受出しかくまひ置しが或時江島申けるは是迄度々御の恩程有がたく奉存候然しかやうに御屋形に居候ては奥樣の思召も如何に御座候間何方へ成と奉公に御出し被下候へと申ければ平右衞門も尤に思ひ夫より聞合せ紀伊中納言殿御簾中鶴姫君御逝去故江島も浪人いたし其後櫻田甲府樣へ御奉公に差出候所其後甲府樣御本丸へ有入御依之三の丸樣之供仕候故月光院樣附と成る右之通の者もの故平右衞門死罪と被仰附候無筋者を公儀を僞り差出し候事有まじき事也

一水戸殿家中奥山喜内は新五郎女房と一腹一生の兄弟也元喜内が妹にて有者が新五郎女房と成しは喜内妹さる御屋敷方に奥方に奉公致候所此新五郎に心をかけて度々文杯遣候事顯れ其屋敷より暇出けるを兄交竹院喜内共勘當致ける故夫より行方不知に有しが彼女新五郎方へ駈込候へば其節新五郎本妻相果無妻にて有し故幸にして夫婦に成り娘一人出生しけり扨中村清五郎は三味線を引踊淨瑠璃語候故所々の屋敷方へ集り候故喜内方へも參候或時新五郎方へ行女房と咄合し故扨はよき手懸りと清五郎を頼み右喜内に芝居を振舞何となく茶屋へ寄酒などもてなし候上にて新五郎罷出清五郎取持にて喜内に近附になり盃事杯致し扨且那樣へ何卒御

めにかけ度女中御座候由を申ける故輿に出し候事と思ひ何者か見申さんと云ければ首尾よしと襖を開き候へば色惡き女の病人取亂したる體にて兩方より手をとり座敷へ出しける喜内あきれ是は何事ぞと云ければ新五郎清五郎兩の手をつき此仁はお見知り被遊候方と云れ喜内扱はと思ひがけなき事能々見れば妹也年經て逢ふのみならず取亂したる有さま殊に存よらぬ所故見違たる是はいかにもと云ければお竹泪を流し漸々に云樣はお恥しうは候得共私去年の夏より久々相煩ひ勞咳と申候へば迚も命は御座候まじ何卒命の內に御勘當御免の願を申上是を未來の土產に致度候故是なる清五郎を吳々賴み今日御振舞に事寄かやうに致し先御對面申上生々世々難有しと泪に暮て願けり兩人語共達て願ければ喜內もさすがに兄弟の事なればあはれと思ひ成程尤に候是は誰が妻と成居たるぞや但し奉公人かと尋ければしんしやく乍お竹泣々御勘當後新五郎妻と成居候と云ければ喜內もあきれはて胸せまり酒一つうけ吞ながら卽時勘當をゆるされ盃してけりお竹大きに悅びどうぞ交竹院樣へも御賴下されといひければ喜內交竹院へもかくと云ければ兄弟のよしみなればなつかしき故勘當をゆるし對面してそれよりわりなく成にけり

一松平薩摩守家來谷口新平事に附但馬守より薩摩守留守居をよび其元家來に谷口新平と云者ありやと尋候所留守居申候よふは家來の內委細覺不申候故罷歸り相尋候て御返答可申上候とて立歸り尋候へば馬目附に有けるよし申上たり御上よりは何の御沙汰もなかりしが薩摩守方にては芝居見物など法度にて忍び參りしとがめも有けるよし又公邊より御尋の有樣なる事仕出たりとて切腹を云附けるとも云

一梅屋善六島へ參り候て早々被召歸候樣子江戶中に五六軒も有かなきかといふ程の分限にて有しも闕所の節僅に小袖二つ三つ金二兩ならでは上らず出居は米商賣にて有けるが米一俵もなし依之御吟味有けれ共一切知れ不申候故善六召歸され此詮議被成候爲と相聞へけり是は其節闕所に參り候與力同心へ大分のまいないを取濟し置候よし

一長太夫養父淨閑事町奉行丹波遠江守へ出入にて御

猥意に被成下候得共遠江守御役上り候故訴訟も不叶浪拂に成けり發心して京橋五丁目中田屋と云湯見世も仕廻ひ自分は麻布へ引込けり

一當年の四月朔日より堺町葺屋町木挽町森田座芝居狂言御赦免被遊候て初けり其節被仰候趣は向後三階の棧敷御法度簾を下げ候事畢無用尤役者共衣裳は木綿絹紬迄可致著用候旨被仰渡候

一四月四日島船出るとて方々へもつこふに乗せ運歩行扨々大きなる群集にて有けり汐留より乗るも靈巖島より乗もあれば永代橋大橋迄兩國橋より乗もありその一類來て暇乞する有樣此頃迄の全盛と引替りめも當られず哀也今年三月二十日江戸中宮芝居御潰し被成候此度新五郎彼島より書狀市川團十郎方へ參候處此節大分鰹とれ候へどもからしなき處故何卒からしを送り下されかしと申越與に

鈎鰹からしもなくて泪かな　新五郎

鈎鰹さくも泪の辛子かな　團十郎

西澤文庫讀佛乘二編下の卷大尾

西洋文庫綺語文章上の巻

目次

西澤文庫綺語文草上の巻

西澤綺語堂李叟著

有馬温泉の記

攝津國有馬郡有馬山の温泉は天下に勝れたる名湯にして貝原益軒が著せし温泉名所記一巻河合章堯が記せし湯山道記拾遺一巻秋里籬島が名所圖會等を見て予兼て疝癪に苦しみ腰痛の疾有れば温泉に入湯の望有て此秋試んため彼地に遊び湯本町二の湯に向ふ兵衛の客舎に宿り温泉の間の徒然に例の戯筆を採て當時の有樣を著す事しかり抑々此温泉の起原は釋日本紀に島大臣始て此鹽湯を見ると有て舒明帝（人皇三十五代）兩度御幸まし〳〵孝德帝（人皇三十七代）も爰に行幸し給ふ其行宮の古跡は今杉谷に有聖武帝（人皇四十五代）の御時僧正行基昆陽の池より病者を脊に負て此温泉に入らしむ病者は温泉山の藥師佛也行基感歎止ずして如法經を書寫し一宇を建る今の藥師堂是也人皇七十三代堀河院の御宇洪水山を崩し温泉絶たりし九十五年の後大和國高原寺の仁世上人熊野權現の告に就て舊跡を闢き湯源を浚ひて寺院及び十二坊を營みて守湯の人を置きける後鳥羽院（人皇八十五代）建久二年の事也此後享祿元年又天正四年再び鬱攸の災に堂舎民屋皆烏有となりしを同十三年羽柴秀吉公の北政所寺院を鼎建し封田を納らる今巍然たる者是なりと林道春温泉記を略出せり則京師より十四里大阪より九里兵庫へ七里夫木集に俊成卿の詠

　有馬山雲間も見へぬ五月雨に
　　出湯の末も水まさりけり

湯山の町十七町は有馬山天神山落葉山の三山に圍みて谷底に有依て擂鉢の底の如く東方京大阪よりの往還山口より坂道を下りて湯本に至る四方に山有がゆへに多く岨道に家居を建かけ三階造りの坊舍多く表より見る時は二階造りにて坂を下りて裏手に廻れば三階作りにして商家は土藏造り多し湯入の客を泊る家二十坊と云は湯女の附たる宿の名也當山藥師佛の十二神將を表して始は十二坊也仁世上人吉野より伴

ひ給ふ舊坊の家也後世温泉繁昌して八坊を加へて二十坊となれりされば坊の名なきは若狹屋、大黑屋、河野屋など也又二十坊にあらねど坊の名あるも有一二の湯二十坊に各二婢有一人を大湯女と云總名に蔭々と呼び小湯女は十三四歲より十八九歲迄の女鐵漿をつけ前帶にして朝より八つ時迄を小湯女其後は蔭々湯女浴湯の時刻を客にしらせ浴衣を持て案內し衣類下駄を預り番をして侍女の如くす小湯女の名古今不變にして人は替れども名は替らず是を湯女の通り名とす

一の湯坊名幷に小湯女の名

奥の坊なつ　伊勢屋たゝ　御所の坊まき
尼崎坊ゆり　禰宜屋すゞ　角の坊つた
二階の坊くり　大門たつ　若狹屋いち
中の坊つれ

二の湯坊名幷に小湯女の名

池の坊まつ　川崎やゝ　休所たけ
河野屋みつ　兵衛のや　大黑屋たけ
水船つじ　下大坊[illegible]　泰轉屋ふじ
茅の坊さい

此餘に八十餘軒の小宿有て旅客を止る所謂商人宿にて旅用乏しき病人などを泊る家也二十坊はもとより小宿にも數箇年の取引得意あれば其名前の絕る時には客先の仕にせを賣買すると見へて二十坊の內にも二三軒は廢したる有て既に奥の坊、伊勢屋、宇尾屋と三名を兼ね兵衛、休所、杓子屋と三名を兼たり此餘小宿にも大かた一軒に家名二つ宛を兼たり予が泊る兵衛の二階より二の湯の表のかゝりを見て凡を寫して爰に出し町の總圖は奥に委しくしるすもの也

(圖一葉略之…………編者)

一二の湯の眞圖

間口三間奥行一間半の湯殿雙方に有檜皮屋根宮作りに構へ觀音開きの戶より內湯槽幅の廣さ一丈二尺五寸奥行二丈一尺此眞中に隔あり一の湯、二の湯尻合せに有り觀音開きの戶は寒氣の頃は此戶をたてる外の燈籠は餝り也入口の內の金燈籠には温泉寺より夜々灯す湯槽の隅に棚有りて是にも薄暮より灯す正面の上に神棚有一六に一の湯は御所の坊二の湯は兵衛より燈明を獻ず一廻りめ〳〵に温泉寺より油料を滯留客に集む湯殿より湯槽の口に定書の條目を書き額

にうてり湯の内にて高聲の音曲を諷ふを禁じ幕湯銀一枚、合幕三匁五分、入込二匁宛但し廻りに附ての直也朝々の湯殿揚り場の掃除は坊々番に順有てつとむ幕湯は其坊より好みの染暖簾を湯の入口に釣て他の人を止む合幕は二組三組しり合どし入りて雜客を止むる也是にも合幕と藍に白上にしたる暖簾をかくる此餘狹嫌ひ、追込等の名あり一夜客は坊々より旅籠にて泊れど湯治客は二階三階の座敷にて菜の物は手づから煮て飯は坊の女米をはかり二階三階に竈走りもと有りて焚もて來る仕送り物には通ひをもつて買ひ誠に自由にて事足れり一間かり切の湯治客には一廻り毎に間錢とて四十二文の錢をとれり入湯の法は攝津名所に雛島子が狂歌あり

　足はさきかしらは跡にかゝるへし
　　たゝるは長湯客腹のとき

亦有馬の禁忌をしらせる雛島子の狂歌名所圖會に出たり

　重藤の弓も葦毛としら羽の矢
　　女の神の嫌ふ武の具

一條院(人皇六十六代)の御時長德三年彌生の頃和泉式部播磨書寫山に詣て其歸るさ此湯本に來り藥師の尊前に參りて祈念しけるに俄に月の障りありければ是を悲しみて

　もとよりも塵にましはる我なれは
　　月のさはりとなるそ悲しき

かく詠し給へは御帳の内より麗しき御聲ありて

　もとよりも塵のうき身の婆婆なれは
　　月の障りも何かくるしき

と本尊御返歌有りて不淨をゆるさせ給ふとなん湯槽の底は一面に鋪石にして其間々に竹の筒を挾みしと思はる石の間より湧泉す味鹹して潮水の如く色は辰砂の氣を帶たるし見へ黄色にして水放れせし暖湯の如し浴客多き時は溫泉よく清み浴客少なき時は濁ると云雨の前後は湯暖にして快晴つゝけば冷也とも云入湯養生のあらましは二十坊の門口にしるし有りて委しくは貝原翁が有馬溫泉記に見へたれば爰に略す手拭湯具を湯に染てよく染る事紅木綿の下染の好し扨一の湯の用水は鼓が瀧より筧を以て南の方市中の水溜に取り二の湯の用水は天神山より筧を以て北の方市中へ取り家々より出て是を汲用水とす所謂江

戸神田上水玉川の水を市中にひくが如し妬湯又明目湯は浴室にあらず湯本の東の町に有りて石の井筒の中に少しの滴り出るを云妬湯とは女子盛粧して此側に立てば忽怒沸すといへ共名のみにて怒沸する體今は見へず明目湯は俗に目洗湯と云ひて今に存せり

温泉の神社を祭るは有馬山と云て武庫山の裏手に當りて酉戌の方にむかへり一名を湯の山又名鹽原山、弓場山、巧地山、湯船谷、卯木谷、大場山、蜂尾山、登尾山とも云數名有天神山、落葉山は是に對して鼎足の如く峙てり温泉の神社祭神三社、中央熊野權現、左三輪明神、右鹿舌明神にして祭禮は六月三日九月三日兩度也愛宕の祠は山上に有りて天滿宮は天神山に有京師北野より三十三年後に建しと云然らば圓融院人皇六十四代の御宇にていと古き勸請也寺は温泉寺眞言新義報恩寺眞言新義念佛寺淨土宗鎭西派清凉院禪宗黄檗温泉寺奥院極樂寺淨土宗鎭西派蘭若院阿彌陀坊禪宗曹洞善福寺禪宗曹洞林溪寺淨土眞言宗東本願寺派御堂とも云施藥院曹洞宗一寺三院の其一也一寺三院とは蘭若院、施藥院、菩提院とて此三院より入浴の貧民を扶助せし也菩提院は絶て今はなく跡を菩提町と云菩提院を今は清凉院に預かる一の湯内外の燈明は施藥院より揭げ二の湯内外の燈明は報恩寺より揭る也名所は皷が瀧湯山の奥八丁許に南に有昔は山間に谺して皷を打の音有りしも中比洪水に山崩れて名のみ遺せり赤松則祐の狂歌に

音にきく皷か瀧を來て見れは
上には千々とたんほゝの花

有明櫻は瀧の前にあり地神嶽、蜘蛛瀧、白石が瀧何れも皷が瀧の奥に有鳥の地獄は僅二尺四方計りの井筒のみ有りて中に水なし地獄谷の名のみ遺せり松風庵の古跡とて昔風流人の隱棲ならん名義解らず新清水とて料理屋有落葉山は善福寺の後の山也一名投木山、童子山又城山とも云有馬の町を一陣の內に見下し茸狩などに遊ぶ場所也有馬川袂石、圓仁阿闍梨の塔、杉谷の行宮北政所、旅館の古跡、安膝亭林溪寺中に有高塚の清水清盛の塔、豐太閤願温泉の跡等也有馬の富士は愛宕山より北を遙に見れば尼寺村の角山駿州の富士峰の如く見ゆ艮の方に京師愛宕山鮮に見へて風景斜ならず入湯のひまには爰等見廻り歸りては酒肴菜の物を料理するに諸魚は兵庫西の宮より運び野菜は近郷より荷ひ持ちて賣歩行事喧し或は貸本をよみ

碁、將棊、淨瑠璃、三味線、琴、鳴物の類ひは料を定めて貸す楊弓屋有馬屋有徒然を慰め有馬名物を一間〳〵に運びて商ふ者を相手とし酒席には蔭々湯女、小湯女を集めて有馬節を聞く惜らくは古雅なるを失して當世のはやり歌のみにて雅ならず名産は竹細工の箱類籠細工筆は小兒の弄びにして管の中より人形出入の機關有鹿の卷筆とて糸卷の筆いと麗はし湯の花とは湯の香にて花山椒の煮つめたる有越天樂とは武庫山に生たる蕗を煮たる也萬葉に人丸の詠有りて菅笠を名産とせしも今は廢りて見へず當所の繪圖、有馬楊枝は溫泉にひたして用ふれば齒を固るとぞ餘は筆職鍛冶工のみ多く栖て此山に出來る幸茸を採りて干す者多し干加減によつて價に高下有とぞ予が此地に遊ぶは九月中旬なれば松茸の盛りにて安き重疊の價三百目一斤四十文位也一貫目にて百三四十文也柿栗最多く價も浪華より半直段也中にも松茸は唐土より來るを上品とし是を賞翫す溫泉寺の什寶に有馬六景の詩歌の色紙有

出題飛鳥井大納言雅重卿、 書圖滿院御門跡祐常大僧正、外題隨自意院准三后公道法親王、筆序從六位下左京少進大中臣朝臣典貞、跋澤成精舍松岡雄淵等也

鼓瀧の松風　　近衞攝政太政大臣內前公

山まつのあらしになをもひゝくかな
　鼓か瀧の水のしらへに

有明櫻春望　　九條內大臣道前公

千枝二月曙雲開　無限東風馥郁來
爲是溫泉洵美地　春花偏厭異鄉催

巧地山秋月　　飛鳥井大納言雅重卿

鹿の音もふけ行夜半の山の端に
　すみのほる月の影のさやけさ

落葉山夕照　　四辻大納言公亭卿

落葉之山名故奇　斜陽風景更堪思
懸知勝地常多賞　最在丹楓滿壑時

溫泉寺晚鐘　　閑院太宰帥典仁親王

いく星の暮おとろかす聲ならん
　此山寺のいりあひの鐘

有馬富士雪　　九條左大臣尙實公

東海芙蓉元等名　三峰千歲雪華清
何疑常浴溫泉者　好於南山北壽榮

以上六景の詩歌は皆自ら御染筆し給ひけると聞へし又兵衞の軸物に此六景を題として洛東澄月の和歌六首有

鼓瀧の松風
岩ねうつをとはつゝみか瀧つなみ
　松の嵐もしらへ合せて

有明櫻春望
月ならであり明の名に櫻花
　にほひこほるゝ春の朝露

巧地山秋月
詠めては水なき空の月にくむ
　千さとの秋のみねにさやけき

落葉山夕照
幾千しほ見しも今はと落葉山
　もみちにおしき秋の日の影

温泉寺晩鐘
生藥(いくくすり)もるたま水の音くれて
　山寺ふかく鐘ひゝくなり

有馬富士雪
時しらぬ雪とはなしに高くつむ
　山は雲にも有馬ふしのね

是を追ふて予も秋季六題に俳諧の發句をつらぬ
鼓瀧之秋夕　秋のよそつゝみか瀑布はどう暮るゝ
有明櫻紅葉　紅葉した樹も有明のさくらかな
巧地山秋月　曇らすは障りはあらし後の月
落葉山茸狩　茸狩や湯女も誘はゝ落葉やま
温泉寺晩鐘　鐘つきの又泣せるか秋の暮
有馬富士雉　雉へは殊更句なし有馬富士

林溪寺中に安騰亭と云有坊中休所の別莊にて當時は予が宿兵衛の持也黄檗高泉和尚、安騰亭に題す十二景あり温泉寺鐘(藥師堂前)二神靈廟(三輪苑音熊野權現)岩松濤(愛宕社前)蜂尾歸樵(山の名)三笠時雨(山の名)林溪楓葉(寺中御堂)落葉暮雪(山の名)、鳶巣尾月(山の名)、杉谷古宮(孝德帝行宮)洗塵納涼(寺前流也)、車谷行客(其谷道路)萬年巖花(がんくわ)(寺前の岩側に櫻有)右六景に同じく發句もくだ〳〵しければ略す天神山天滿宮に並びて建る蘭若院、阿彌陀坊の假山泉水は千野利休築しと云其製巧ならずといへ共物ふりて今めかしからず利休石とて二つ外に沓石とて沓の形したる石有世に阿彌陀堂釜と云は此寺の什物にして今は善福寺の末寺となり先年浪華下寺町遊行寺へ有馬善福寺の出開帳有りて本尊阿彌陀佛は

長一尺五寸東天竺毘舍離國月蓋長者閻浮檀金を以て鑄奉る靈像とて信州善光寺の如來と同一體也と云其時阿彌陀堂の釜を拜みたり豐太閤當蘭若院に遊び給ふ時住職澄西和尙の形容異體にして頭大きく猪頭也利休に命じ蘆屋の鑄物師を召て澄西和尙が首の形に釜を鑄さしめ給ふ利休銘じて猪首釜と稱し又阿彌陀堂とも銘ず今世にあみだ堂と銘ずる釜は當院の釜を摸範とするとぞ

　猪首釜によく似た形りや魁芋

院本の虎溪の三笑ならねど此兵衞の妻の名をお梅とも呼ねど或日毬栗の笑める如く小陽女下女を相手とし笑ひ聲しつゝ擣衣の音聞へければ芭蕉が吉野の句を思ひ合せて

　碪打てきかせ有馬の坊の妻

兵衞が別名を杓子屋ときけば季鷹の狂歌に傚ひて

杓子屋を作者とつめて兵衞をば
　九左衞門とも祝ひ延べばや

一日愛宕山に登りて逍遙の上例の狂句を吐く

時は湯女姉かしらする幕湯かな
　是は愛宕で秋季詠だか

有馬湯本東西の入口に日本第一神靈泉と大清江吾客の大字彫たる標石を建其に梅子丸雛丸の狂歌を彫りたり　（圖一葉略之……編者）

三國にまひとつとなき湯の本に
　不二のけしきも見る有馬山

山の名に馬はあれとも湯の驗
　いさりも立て歩行てそ去ぬ

予は十三夜の月を此山にて見ん物と樂しみて甲斐なく夜終雨ふりて望を失ひ後拾遺集大貳三位が詠にこぢつく

有馬山後の月見に雨ふりて
　茹さや豆を忘れやはする

袂石は有馬川の東岸にありて近比の水に荒れて道甚あしゝ繪圖名所圖會等には礫石と有て名義詳ならず此地の神輿を爰にもち行くといへば御旅所なるべし細き石階を登つて遙上に只ひとつの石有此邊の流れに竹を漬て細工に遣ふと見へたり

　鹿垣やつらりと結ふてたもと石

摺鉢の底の如く窪き土地にて柿は所の名産なれば

窪柿や有馬に御所と愛宕やま

鳥地獄　名のみにて鶉も居るぞ地獄谷

落葉山　毬栗と紅葉に埋めよ落葉やま

春風や湯女の篠原わけて寝んと許六の句に先をこされて兵衛が小湯女の名に思ひ合せて

　　荷にならぬおみやにめされ花山椒

　　茸狩におみやさすれよ湯草臥

　　卷筆も夜邊の職や鹿の聲

　　茸狩や是等を秋の山笑ふ

六日の菖蒲十日の菊は事をくれたることとに云俳諧には後の菊とて十日を云也予は十一日に出て生瀬(なまぜ)有馬屋に泊り十二日に温泉を浴るは今煩らへる病人にはあらず

　　後に菊爲とて浴(あび)る温泉かな

生瀬(なまぜ)より有馬へは只二里の道とはいへど四十八が瀬の内は小石多く踰越へる川原の水に增減有りてはかどりがたし

　　心してゆきやれ有馬は栗の道

猿石を過て飛こす河原道

　三田(さんだ)から又四里あろかいな

　　したなりにつゐ捨られし女こそ

　　　嫐湯(うはなりゆ)にも妬むなるべし

　　酒腹そいなにはあらぬ温(ゆ)泉松茸

紅葉見や用意かしこき傘二本とは夜半翁の句にして唯細きを專とし嵩張らぬ好みを紅葉傘とは云也花見小袖とて櫻紅葉見の時幕にかへて櫻樹に懸たるも昔の風流にして紅葉傘も山手には時雨すればそれをふせがん用意の風流にして今は男の指傘は蛇の目女の指用紺と白にて張交たるを紅葉傘と唱へる事也予は又今時指用の傘を案じて蕪村翁が何兄弟ともいはんか

　　紅葉見や日和に傘の持重り

湯船から出たり入たり有馬筆

　　其徒然に書る道の記

入湯の禁好養生を記して湯文と云て報恩寺より出す湯治するには先温泉の性を撰み功能を考へ入湯の法をよく守るべし入湯の内の行跡は平生の如くなるべし但不養生の人の例を云にあらず尋常の如くすべし湯治の間晝寢すべからず湯上りに寢れば汗走りてあしきゆへ也湯治の間酒を吞むべからず暖めて少しの

むは苦しからず湯に入りさま湯より上りて直にのむべからず濡れたる浴衣はやがて脱ぎかゆべし又湯より上りあつきとて風に當り身をさますことあしゝ湯治の間肉食すべからず養生の人は苦しからず常のごとく用ゆべし多く食すべからず飽食すべからず又食物にても藥にても熱性のもの用ゆべからず寒涼の物あしゝ強き堅き物も宜しからず湯治の内灸治すべからず上りて後もすべからずしばらく休みて後灸治するはいよ〳〵よろし湯上りの日雨風烈しきときは然るべからずいかにも快晴の日を待て出立すべしと有別に攝津國有馬山勝景圖とて折本一小冊有攝陽江東壽者後素軒橋守國書き書肆大阪北久太郎町心斎橋丹波屋治兵衛板是に書きたる事大約同じければ略す寶暦十庚辰正月と記しあれば今年迄九十一箇年になれば昔なつかしく抑へ置く河合章堯の著せる有馬廻りの拾遺は正德六歳孟春茨城多左衛門板と記しあれば是又今年迄百三十五年の昔なれば殊に愛すべし此書は貝原の温泉記にもれし事を出す其中によき説を爰に拾ふは國々所々に温泉有りて病により効有といへども熱くしてそゞろに堪へがたく又冷湯にして嚴寒

には浴し難きも有唯有馬の湯のみ冷熱人の好に應ずるが如し尤寒暑晝夜にすこしの違ひめ有りといへども杓にてそゝぐにあつく覺ゆるをつとめて入る時は湯和にして水を加ふるに及ばずおのづから中を得るが如し又すこしぬるき時も湯中に湛れば温氣底より昇て腹中にあたゝまり浴後に汗を催す第一に氣を廻らし食をすゝめて奇妙の温湯也有馬に予が相しれる老醫有りて語りしは凡此湯は諸病共によろし唯死病の一症のみよろしからず若しゐて浴する時は氣血の不順温湯の巡環に戻るが故に死朝近くなると云故に脾胃虚、勞咳、膈噎、老衰等の病に害ある事宜也往古仁世上人吉野より伴ひ給ふ十二坊と云も西の坊、北の坊のごときは絶たるゆへ今は十二坊の名儘にしる人なし二十坊の小湯女の名は古來より替らず唯下大坊のなべ計り近年鍋の字を憚り奉りてしげと改めし也總じて有馬の事は温泉小鑑と云書に委故是に略すと有百三十五年前にさへ十二坊の興廢有りて湯女の名を改むなどしるは實に書籍の德なるべし奥の坊にて賣る有馬山の繪圖を次に出して歸路の道行と宿坊兵衛より土産に送れる有馬温泉功能略記を其儘に綴

て跋にかへたり

(有馬山繪圖、葉略之……編者)

往還りとも同じ道なれば略して歸路のみをしるす湯本より宿の主送りて東の山口迄來る此道の右手に標石有りて右へ行けば六甲越とて靑木村に出る御影の東、西の宮の西也大阪迄歸るには一里の餘も近しと云へど登り坂下り坂有りて難所なるよし山口の河原にて宿の主に別れ少し登り坂に江芸客の碑有少し東に瑞寶寺(禪宗黄檗派) 有瘤坂とは瘤眼中に罹て愁ふる人溫泉に浴し歸路に爰にて瘤落ちて癒たるゆへに呼とぞ船坂(有馬より一里)仁世上人湯舟を爰にて造らせるより村名によぶよし是より生瀨に至る迄(船より一里) 四十八が瀨の難路也屛風が岩劍山、座頭谷を詠めて猿首岩は岩形猿の頭に似て眼耳鼻口を備へたり生瀨川の橋を渡り米谷村より左手の山に淸澄寺(一名淸の荒神 古義眞言) 遙に見ゆ京師吉田口の荒神も爰より遷せしゆへ淸し荒神と云とぞ此山の東に中山寺奥の院迄鮮に見ゆやがて小濱の驛に至る(生瀨より二里)明應の頃與村越後正信、亳攝津寺善秀房等此地を伐平げて此驛に子孫今に有と云昆陽野池を詠めて昆陽寺に出づる此邊こや野、こやの浦、昆陽の入江、こやの池、昆陽の里、古詠尤多し猪名の小笹はこや寺の東田圃に有りて昆陽寺の開山行基の像開扉(正月元日)の用具とす御願塚は行基の古跡高師直の塚を道に詠久々知妙見は廣濟寺に有是に詣て遊女宮城の墓又の名傾城塚女郎塚、〃と云て田圃の中にあるを詠め神崎にて中飯して渡しを渡り加島權の頭と云稻荷は外より拜み程なく十三の渡しをわたり三番北野を過ぎて浪華橋を越へ八つ半頃我家には歸りぬ行がけは出立の時刻遲くようやく七里の生瀨に宿りしが歸路は朝七つより眼さまし引明比に宿を立しゆへ勝手覺へし道といひ歸路ほど道のはかどるはなし年久しく此溫泉に遊ばんと思ひ立たる望足りて溫泉も相應せしか氣分甚よく滯留徒然の道の記を淨書してとく〳〵の淸水町綺語堂に筆を納む

維時嘉永三戌年九月の末西澤一鳳軒李叟誌

(此の次に「有馬溫泉功能略記」及び「有馬ぶし」と題する有馬名所小唄の刷物を附しあれどもこれを略す)……校訂者

暮秋北山巡り

行秋のけしきを見ん物と長月末の七日の夙に起出

豫て時雨に濡るゝ用意をしてまづ北野濱村を過つゝ本庄の渡しを越す比はや初時雨催すは餘り早き時候などと打笑ひ三國の渡しを越えて服部の天神に詣て箕面道岡山にかゝる

服部にて

七尺の草鞋作れやむら尾花　李叟

熊野田筍の名産椋橋大根名産櫻井谷を東手に詠め島熊山を經て千里川を越ゆる

椋橋の莊より大根をもらひて

龜菊が妹又よし大根引　舊國

六車川とも箕輪川とも云水源は萱野谷より出て末は猪名川に入る千里山又の名寢山とも云島下豐島の二郡に續き西に待兼山、玉坂山、島熊山等山脉三里に及び其廣大なるを以て千里山と云よし待兼山と玉坂山の間に待兼川と云有昔玉坂の里に美しき女有近き里の男戀慕ひ夜毎に山を越えて通ひわりなき中となり人目も恥ず通ひければ世の人の嘲りとなり二人ともうらめしく思ひ麓の川へ身を投げ空しくなり川の名に昔を遺す夫木集に俊賴朝臣の詠

夜もすからたまりて積る涙かな
　こや待兼の山川の水

待兼山適逢山坂とも池田街道石橋の東の山也新古今に周防内侍の詠又新後拾遺に藤原の顯綱の歌

夜をかさむまち兼山の子規
　雲井のよそに一聲そきく

明るまて待兼山のほとゝきす
　けふもきかてや暮んとすらん

夫木集に俊賴の詠玉坂山に顯昭の詠は六百番歌合に有

夜もすからまちかね山に啼く鹿は
　おほろけにやは聲を立つらん

かたらひし我戀つまや郭公
　たまさか山に聲のほのめく

行秋をまち兼山のしくれかな

東畑村に安倍の晴明の墓萱野谷芝村に三平重次の墓有是まての道を猪名の笠原とて古詠名所也元永歌合に法性寺入道前關白太政大臣の詠に

あやしくも時雨にかへす袂かな
　猪名の笠原さして行とも

けふの雨に山中の樹々の紅葉して詠め得もいへずさ

して行くと法性寺の笠原の詠に詞なくやがて箕面山瀧安寺に詣る天台修驗道聖護院に屬して山内所々に御獻上の松茸山へ猥に入るべからずの制札を建たり登り口聖天宮を拜み門前の宿屋に休みて中食をし酒の機嫌に觀音堂辨財天をふし拜み瀧道を行く十八丁の内紅葉のけしき得もいはれず色に光明朱、生臙脂丹色有黄色有青き葉に厚薄有けふの雨に其色しみつく如く實に紅葉はまだきに詠るをよしとす時をくるゝ時には嵐に散り失せ道のみ埋て錦を踏かとあやぶまんより初紅葉の梢色どるはいかなる名畫も及ぶべからず瀧は又雨に水増して巖頭より珠を散すが如し
夫木に津守國助の詠

わすれては雨かとぞ思ふ瀧の音に
　みのおの山の名をやからまし

不動の籠堂に腰打かけ摺火打に烟草くゆらせ

瀧津瀬に箕面景いよだつ紅葉かな

是より瀧越に登つて唐人の戻巖など踏わけ天上が嶽は絶頂を云奥の飛泉、座禪石、錫杖石、白龍石は奥の瀧の傍に有行々て勝尾寺への別れ道は右手に有りたり道を行きていと長き山道雨中にて木樵にも逢ず高山村は高山右近長房の領地なりしとかや牛房の名物にてよふやく人家はあれども食物賣る家とてはなく兼て用意の握飯を食ひ暫し息を繼げり爰より西は止々呂美とて多田の裔孫馬場信高の古城の跡有鷹岡山一名龍王寺山とも云毎年七月二十四日愛宕火とて此山上にて火を灯すよし土人に聞けり木代切畑の開發人貝川三位長乘卿の塔は木代村に有爰も牛蒡の名物にて木代牛蒡名高し

木代にて淋しさを

行秋を引ぬかれたる牛蒡かな　　李叟

切畑村に走落の神社影引の松など有木代切畑の兩村より毎年十月亥の日毎に玄猪の餅とて赤小豆餅を搗合せ禁裏へ調貢し奉る御嚴重の餅とも能勢餅とも云へり源氏葵の巻にねのこの餅は三つがひとつにてもあらんかしとありて揚名の介三つが一つとのゐものゝ袋は源氏に三箇の祕訣也ねのこと云しはいのこといふ二字を祝言の始に嫌ひていへるなるべし今年は十月五日初亥の日なれば三箇度有五日には木代五戸より貢し十七日切畑四戸より二十九日切畑四戸より貢すとなんことしは米穀の高ければ例の狂句に

御玄猪の餅も米の高ければ
　員も三つかひとつなるへし
餘野村に餘野山城守の城跡有餘野の神祠隱里の井一名幣の木の井とも云有雨ます〳〵降りて風さへ烈しく遊仙寺とやらんの入相を聞き乍ら辛ふじて挑灯の明りを消さじ山道に辷るまじと氣づかひながら能勢山妙見宮に詣て山の宿に泊る故能勢の藏人妙見城の守護神にて摩利支天也と云近年應驗あらた也とて遠近の詣人法華の題目を唱へ夜更る迄いと賑はしく風雨の音甚しく目もあはず一夜を明し翌朝又夙に立てもとの餘野の方へ下る以前の吐すてし句に
　圓駕籠に能勢の山路や柿紅葉
など思ひ出ながら忍頂寺の西に隣る國見山に出るも此度の能勢參りは直に龜山より京師に上り嵯峨嵐山より高雄へゆかん心がまへも雨風に恐れて一まづ歸り晴を待て上京せんと吹田へさして足をむくる國見山續に長き山坂にて谷を隔て西に大門寺見ゆ舊名を青龍寺（眞言）文祿四年七月二日當寺に於て木村常陸助（木村長門守重成の父關白秀次の忠臣也）自殺せし事は先年奧州仙臺の俳人言外餘情堂白人（俗姓中臣伴頭之助）が末裔なればば尋ねたしと有し

ゆへ名所記或は繪圖等にて見出せしが其儘にて行ず過ぎたりしも計らずこたび行合せ古き望足れり安威村には大職冠鎌足公の荒墳あり釋定惠入唐の内父鎌足薨じ白鳳七年に歸朝して此安威山より遺骸を携へて和州談の多武の峯に改葬せし跡也幣の杜とて名所此傍にあり天正年間明智光秀陣所とす八雲御抄に讀人しらず
　月夜にも手くらの杜もくらからす
　　ましてしらの丶濱いかならん
海北塚は福井村に有名義不レ詳下福井村にて酒を飲み暫らく休む能勢より爰迄五十丁道にて四里が間山坂計りにていと長し泉原とて松茸の名物は此山にて茸の香紛々として紅葉嵐にちりて蝶の群がる如く山中の詠得もいはれず粟生村は勝尾寺の麓にて粟生米とて池田伊丹の酒造にもちゆる米の出る所也
徒然文題
　御無用と留ても春の行衛かな　白猿
徒然に出たる宿河原にていろをし坊としら梵字とぼろんじの仇討有しも此所にて塚は郡山村の藪中に有
　暮露〳〵と時雨て止まず塚の前

山田にてよふ〳〵中飯をして佐井寺（一名山田寺 古義眞言）は街道より拜み岸部の大池を過ぎ吹田に至る泪の池は惡七兵衞景清誤つて伯父の大日坊を害し此池水にて血刀を洗ひ手向とせしより泪が池と云ひ景清を惡七兵衞と云ふとは妄談にして三國の曹操が事を云へり古人に和歌ありて壽永前より泪の池の名有夫木に西行

よしさらは泪の池に身をなして
　心のまゝに月やとるらん

二魂坊の火は雨夜に出る事名高く吹田の渡しをこゝとて

早咲ているぞ吹田の水仙花

新庄、新家、晒提、柴島より長柄の越へて暮半比歸宅せり

西澤文庫綺語文草上の巻終

西澤文庫綺語文草下の卷

目次

西澤文庫綺語文草下の巻

西澤綺語堂李叟著

花洛紅葉見紀行

時雨月六日甲子の夜船にて京師へ登る初夜過ぎ船出して七日夜明前伏水に著き本街道へ出るに朝霧深ふしていと暖也撞木町迄に竹の矢來所々に有りて薩州の大守此驛に泊り今朝琉球人浪花薩摩の屋敷に來る日也とて伏見の驛もいと賑はし朝霧をわけつゝやがて東福寺に詣で名におふ通天橋の紅葉を見んと茶店に憩ひ烟草呑つゝ露雫に濡たるを詠むるに五六日早きと見へ未其境に至らず櫻は麓より咲きて後深山に咲き紅葉は奥山より先だちて麓に至ると故人の辭に露違はず高雄は愛宕の高嶺に隣ればけふ此比の詠いとよからんと心嬉しく先づ通天臺の上に登る（通天橋今は難臺となりて橋の名を失せしは前篇に有は略）額は普明國師の筆橋下の溪を洗玉澗と云床几數多を置き居えて騷人墨客を待り當月十六日は開山忌（聖一國師諱は辨圓）俗に此日を當納めとて京師より群參す當寺は兆殿司（諱は明兆字は吉山）の繪に涅槃像名高く一生畫る繪具は此奥山繪具谷より出て今に其名遺れり

　まだ散らぬ紅葉は薄く繪の具谷

良日の昇る迄詠て北の門三聖寺の内萬壽寺を伏拜む（昔は六條に有て五山の第五位也）門を出て大佛前に至る此邊に撞木師一心何某と名乘る家兩三軒有（今念佛さし、題目ざし抔の元也）耳塚は大佛の門前に有文祿元年朝鮮征伐の時小西攝津守加藤肥後守を大將として數萬の兵を討取り首級を日本へ渡さん事徒なければ耳斬り鼻削りして送り此所に埋む耳塚とは日本に是のみと思ひしに筑前國濱男の里に神功皇后三韓を討ち給ひし時其國人の馘を埋め耳塚と云其後源義家朝臣奥州の戰に打勝ち河内國に馘塚を築き耳納寺を建らる是二度目にて豐臣公此大佛に耳塚を築かれしは第三度目也と閑田次筆に出たり

　木兎も墳から通へ崩れ門

毎年正月二日に火伏の札を出す天狗の宴と稱すは等覺山念佛寺を一名愛宕寺と云六波羅の西なれば爰に

もふず眞言宗開基弘法大師（中興八千觀内供なりし）晴明の社晴明の路子（づし）癩病の乞食爰に往て京町中に米錢を乞ふ藥師の路子十禪寺の社牛若千人などを也其者物よしを云詠めて建仁寺向蛭子社に詣で東山建仁禪寺（五山の三位）は
門前より伏拜む此寺の中門を矢立門と云て門脇敎盛
卿の館の門也と云正傳院（しやう）に織田有樂（うらく）翁の數寄家有
て兼て拜見を誘はれしど緣なくて未レ不レ見榮西長首の
懸聲は七條鴨川の深淵より融の大臣河原院の鐘を移
せし時より始る陀羅尼とて毎夜子の時より撞出し川
東に遊ぶ醉客の心を迷はせしも今遊所禁止なりて配
膳さへも嚴禁なれば晨鐘の念もなく寺中の庭は木の
葉にて埋りたり

　鐘樓堂に百八枚の落葉かな

怪談を好の謂もあらんが此建仁寺の藪中に狸の栖る
と云事古く世人の云所也予が友奈河一泉（始篤助後一洗 眞葛が原賣茶）
園の話に時雨ふる比或者此建仁寺町を南へ行くに夜
五つ過ぎ歳比十一二の丁稚と覺しき者廣き竹の子笠
を著手に酒德利を提げ栗下駄をはき畫ける狸の酒買
の容にて足元は邪魔をし又遙に向ふへ行くかと見れ
ば往來の妨げなるが故此者始は此丁稚め古風な狸の
出立にてはあらぞと笑ひ居しが行先の邪魔なるゆへ
狸めに違はじと傘にてはたと打てばワツと叫びて倒
る德利は破れて流れ何故打らしぞ丁箇ならずと聲を
上て咎むる體よく〳〵見れば狸ならずこは思はぬ麁
相をしたり餘り狸めきたる姿して足元の妨なるゆへ
打つたれど丁箇せよと引起して詫る丁稚泣止ずして
云我は此松原の得意先へ持行く跡の酒屋の丁稚也德
利われて酒を流し此儘にては歸れず汝來つて主人に
詫よと袂をひかへて止めければ是非なく半丁ばかり
跡へかへつて其家に行き丁稚を先へはいらせ賣場の
者に仔細を告る酒屋の手代笑ひながら夫こそやはり
狸の業也此方の子供にあらずと云内はや姿を消して
見へず跡へ歸つて詫たゞけが又化（はか）されたる也と云
是ら古きを以て新らしく妖（はか）せし也狸にも流行有りと
笑談せし事有り此餘に建仁寺の狸に數話あれども爰
に略して此一話のみをのする

　時雨るゝやあれも人の子狸（たね）ひらひ

亦柏莚の句有

　初時雨狸も合羽おしげなり

仲源寺は一名目疾（めやみ）の地藏實は雨止（あめやみ）地藏也謠曲の熊野
に云桂寺の橋柱にて作れる觀音は當時に有り桂橋寺

は下河原に昔有りて今舊地詳ならずと云四條北側の芝居は（中村玉七 市川米藏）子供芝居始り有り先斗町春水亭に（江戸 源）著き髪月代湯なとすみて晝後先づ祇園牛頭天王の社感神院に詣る四とせ前弘化四正月の末東武へ下りし時詣でゝ今年四とせぶりにて此地に遊ぶに今更心改まり珍しき心地せらる抑此社は貞觀年間愛宕郡八坂郷感神院と云寺に勸請せしが神殿もなかりければ昭宣公の御殿をまいらせて神殿とす依て尋常の殿舎造り也是を祇園精舍とはいふ也神樂所の傍に紅梅一樹有りかゝし滿の梅と云

　かゝしまば毎木もにほへ梅の花

と宗祇の句有り歸り花四五輪見へけるに

　かゝしまば梅の匂ひや歸り花

此社の神事多かる中に每歳除夜子の刻の比より參詣人雜言を恣にして他人を誹謗す其放言に勝ちたる者迎年の吉兆なりとし是を削掛と云東西の欄の內に削掛の木を左右に六把宛建て卽十二月の數に表ず丑の刻に是を燎とし其煙の靡く方を見て其年五穀の豐凶を占ふ參詣の諸人其火を携へて家に歸り元朝の羹を煮る東都にては正月六日削掛とて楊柳の木を三寸計り削掛て市中を賣る家每に求めて一間每に釣る是其歳の粟の豐凶を見る也と俗はいへり此祇園の削掛を謬る物か二軒茶屋島井先きに出て下河原を過ぎて牛王地の社に詣つ祇園牛頭天王播州廣峯より初めて鎭座し給ふ地なりとぞ祇園百度參りは此社迄詣づ故に下河原を百度大路と舊名有り菊水の井は此の東側に有り菊淵の下流にして茶に可也と云徒然に出たる小坂殿の棟に繩をひかれ鳥のむれゐて池の蛙を取るを悲しませ給ひし跡を蛙が池と呼びて此西安井の門前民家の奥に有白猿が徒然文題に

　寐殿の繩にからむな凧

の句有り今は又民家の裏にあれば

　掛栞せし繩をくゞるな小夜千鳥

菊水の辻に一奇談有り

享保十七年九月竹本座の淨瑠璃（文耕堂 長谷川千四）作壇浦兜軍記二の口下河原菊水の辻講釋場に關原甚內と假名して五條阪の遊君あこやの兄井場十藏一幸母を養はんが爲講師を業とし其日を送る面體格好惡七兵衛景淸によく似たるが故榛澤六郎組子をもつて召捕り晝姿に改めたるに景淸にあらずよつて榛澤詫び繩をと

き母を孝養の爲辻ゞ稼をすと聞、慢し商賣の妨せしを氣の毒に思ひ金子を惠む十歳是をいなみて景清に似たるは此身の不幸と、白金子を受んやとて返す榛澤は母に志也とて出て、ま隱惡を無足にするもいかゞとけふ清水の觀音の緣日なれは母の無病息災を祈りの爲に奉納せんとて傍なる賽錢箱へ打込む脚色有り是此菊水の事にて大雅堂霞樵の話によく似たり霞樵の傳は近世畸人傳にあれどももれたる一話を爰に出す大雅堂は嘉右衛門とて貨殖家なるが其業を悪み避て書工となり池野秋平(無名)と云其質雅にして聊も利にわしらず書もまめやかに殊に衆を得たり、日書林の許にて年比望みし一書を見欣然としてその價を問ふに價最貴し大雅云我にたくはへなし故に望を空しうす希は是が爲に今より勉めて金を積まん積みて後此價に足りなば我にたびけんさりながら賣物の事なれば其間に他に望む人もあるべし若さあらば我に知らせよと云書林云此書は高價なる物ゆへ容易に望む人も有るまじ若あらば其由告申べしと約してそれより大雅は日比に替り儉に物事を約にして年を經て望の通り金を溜め已に價調ぬれば彼書林方へ走り行き年比の望足りぬとて價を出し其書を我にたまへと云書林大に當惑して實にも先年足下へ約せし事只今存出せり其書は其後望人有つて賣遣はしぬ其時足下に約せし事を忘却して告げず罪多し、今更如何ともする事あたはずと悲愧す大雅案に相違して憮然として申けるは我かく迄貧しき中にて金を拵へしは此書の爲也既に價調ふて望を果さざるは天也苟も此金を他用につかはん樣なし不如祇園の地に住むからは恩謝の爲に御社へ奉納せんにはと右の金を殘らず束ねて祇園へ奉納す是を世に傳へて大雅の廉潔を稱し倍此人の書畫を世に賞することとはなりぬ此一話を狸軍記に潤色して大雅は祇園の社地へ出店して書畫を認め井場十藏菊水の辻に辻講釋を業とすと脚色あり

再考、霞樵は安永五年に五十四歳にて歿せしとあれば生年は享保八癸卯年也五月四日の誕生と大典禪師が碑銘に有り然れは狸軍記は享保十七年になりて大雅が十歳の時也是も自然と相似たる話か考ふべし

霞樵が常の風俗中華の唐人に似たり鬚耳頰に滿て髮す其妻玉瀾女も夫の雅にならつて風流也寡婦の後も

昼書を書きて渡世を渡れり其に享保の比下河原に茶店をかまへし梶といへる美艶の女有り和歌を嗜みて梶の葉と云集有り

雪ならば梢にとめてあすや見ん
夜の霰の音計りして

又或時醉客二人梶が容顏を見て年を當んと賭物して十八ならん十九ならんと爭ひて梶に問ふ梶狂歌にて是に答ふ

年越の夜の九つの產(うむ)なれば
十八とやいはん十九とやいはん

と此一句にて爭ひも止みたりけると也秀才思ひやるべし此梶の跡に百合と云ふ女有和歌を嗜みて早百合葉と云ふ集有此娘玉瀾(始の名まち後遊可)書は抑里恭に學び夫婦とも冷泉爲村卿に學びて和歌を詠ず娘のもとへ眞葛の花を送りて百合女

眞葛葉の色しあせずよやしなひし
親の守りの花のひとふさ

玉瀾遊可の詠

さくら花色うつろはでいにしへの
春のまゝなる香に匂ふらし

天明四甲辰年九月二十八日歿す扨も大雅(無名貸成)は安永五丙申年四月十三日行年五十四祇園の南葛草居に終りをとり船岡の南淨光寺に葬り墓碑は大典禪師の書にて今に存す門人謝葉雙林寺門前に一室をもふけ古へ靈山にて長嘯子が營み給ひし歌仙堂の古き柱礎等をもらひ歌仙堂の舊跡を止む軒の瓦には大雅堂とい ふ篆印を押す長嘯子の愛せられし石の手水鉢蕉玉瀾の書きたる物も此堂内に納む松を時雨の染かねてと慈鎭和尙の詠も此眞葛が原にての事也かし

葛枯るゝ原にめだつや大雅堂

此南向ふに先年予が友奈河一泉(委しき傳は予が傳奇作者に有)老後爰に住みて眞葛原賣茶園と土瓶茶椀に染附煎茶を賣る菓子は眞葛の葉の押物を口取とし一服一泉と呼ぶ此名は東海道品川宿の上大森の茶店に一服一錢の名有り一泉といふ名によりて然呼ぶよし原(もと)大阪高麗橋にて唐人の裝束したる商人竹のきせるにて一ぷく一錢づゝにて煙草を人にのませたるよし八水隨筆(享保元文の比大御番を勤めし人)に出たるを近比東都にて見たり一服一泉は煙草より出て今煎茶の名とはなれり此一泉も十とせ計り前沒して今は店の跡もなくなりたり存生梓にのせ

んとて一紙をみせたり其寫

煎茶入加減

夫茶を煮て翫んと惟はゞ水の吟味を專らにすべし之熈が曰茶は水の神也水は茶の體也いかほどの名品なりとも水應ざるものは其能薄し茶と水とよく和すれば香氣盛にして味最美也宇治產の茶は長流水をよしとす他邦の產は一概に論じがたし井水涌水瀧水各清白にして日方の輕きを好めどもあながち輕き重きにもよらず徹濁せし水に茶に應ふものあり試みて知るべし

一瓶は來泊の器は論外也まづ土器を最上とす汲立の水をうつして熘火にかけよく〳〵煮て湯玉のたつ時を待ち火をよけて瓶の口を切り手早く茶を入れ蓋を閉器の口よりもれ入らざるよふにさつと水を濯外の乾くを見てつゐで飲べし飲盡して後又熱湯をさす極品は三度に及ぶ迄茶味出るもの也

一分量は水一升に茶目六匁を定法とす薄きを好く人は減すべし濃きを好まば增すべし高料の茶は惜むがゆへに香も味も薄きと心得べし

一葉茶を藏ふは錫にしくはなし其次はよき壺を求め幾度も紙にて張り蓋をひきて桐の木にて口をよく〳〵して其上より澁紙にてとくと掩ひ人氣の通ずる所に置くべし土藏などに入れ置きなば太陽の暖りなきゆへ早く損ずる也委しくは好數の人に尋ね明らむべし予去ぬる文政七年の夏洛東眞葛原に茶店を開き漢書陸羽が茶經、和朝楳亭が清風瑣言、可堂の煎茶仕樣集などにもとづき將好數の賓客に學び問ふて聊婦童の爲に著事しかり

洛東雙林寺門前　眞葛原賣茶園誌

自筆の草稿有るを思ひ出て爰に出す此賣茶園の西隣の家猿唄居士卯子の住居にて有りしことども思ひ出られ昔なつかし

爐びらきや碎けて坂田小僧あらし

花園の地名は今の雙林寺にて雲居寺とて自然居士の住み給ひし舊地は今の高臺寺下壇の地也と云應仁に亡び慶長に太閤の北の政所高臺寺を御建立有りて鷲尾中納言隆良卿の山莊の跡也とて山號を鷲峯山と呼ぶよし八坂は此邊の總名にして祇園坂、長樂寺坂、下河原坂、法觀寺坂、靈山坂、山の井坂、清水坂、三年坂、以上八坂を呼ぶ也法觀寺は樓門伽藍嚴重た

りしも破壞して五重の塔のみ遺れり藥師の小堂は昔淨藏貴所爰に栖みて地震に傾きし塔を持念して元の如きにせしと云庚申堂は塔の西北に有り大黒山金剛寺延命院と云とぞ日本三庚申の一也（攝州四天王寺 江戸淺草寺内）延享の比此處の遊女七夕比より此塔の廻りに踊りを催し木戸の外より遊客あれ是と見立て一夜妻とす今云見世つき女郎に盆踊りをさせ見立つる事也是なん八坂踊りとて古名に遺れり此邊遺りなく詠めて五條坂に至り尿瓶を求めん望有り今ははや二十とせばかり前五條坂にて錦手の尿瓶を需めて花器に用ひ或は水瓶に遣ひ戯れしが以前破りて捨たり予東都淺草にて三とせの滯留中深夜に便所へ通ふも疾によつて歩行なりがたくふと尿瓶を求めて用を辨せり其後歸坂しても其癖止まず今は晝夜とも尿瓶を用ひ朝々餘人の手にかけず四辻の桶に捨る小便取の替物に著せず路次切戸の開閉を論せず隱棲獨居の閑を樂しむ身には第一の心得なり長明が方丈記桃靑が幻住庵の記にも書もらしたれ其芳野の西行古曾部の能因はもとより雙が岡の兼好山崎の宗鑑も何れ尿瓶を用ひられたるべしと發明して願はくは旅中にも是を携へ勝手覺へぬ旅籠屋の開閉にきしる襖戸障子に合客の睡をさます氣兼もなき此器をこそ持行たしよつて尿瓶の辭を作り祥水の古染附の器あらば箱に其銘を書かんとの望あれども未其器をもとめず

尿瓶を愛する辭

茂叔は蓮を愛し淵明は菊を愛す昔の隱者のうへはいはず近くは小西來山は女木偶を愛して記を遺せり書は机上にすへて眼に歡び夜は枕上に休ませて寢覺の伽とす物いはず笑はず腹立てず悋氣もせねば居住居も崩さず酒をのまぬは心うけれどさもしげに物をくはず四時同じ衣裳なれども寒暑をしらず夏は迎ふに涼しく撫るによく冬は爐邊に置きて暖也女の石になりしためしを思へば名が女に化すまじき物にあらず物に當らねば千歳をふとも變ずまじき容風老がなからん跡の君後家さりとも氣遣ひなし身は何國の土工ぞや出所を不知あら現なの妹脊物語やなと十萬堂に書遺せど予は亦此器を愛する事妻の如く醫者のごとく年古く召遣ふ婢の如し假令親子兄弟の中たりとも兩便の代りはたのむによしなく尿を長く堪らへる時は腹張りて息だ

はしく腫疾を煩ふ病源を覺ゆ春は梅匂ふ朧夜夏は水鷄の音信るゝ短夜秋は遠砧に寢覺を侘び冬は枕に響く鐘の音さへ氷りて聞ゆ長の夜も此器を引よせて用を達せば身を起すに及ばず睡るに易し然らば是妻の如く醫の如く心をしりたる奴婢にも及ばじ主の留主とて外心の氣遣ひなく愛すべきは此器なるべしいつの世に始りしか其起原は知らざれど（左寺）東寺の空海は衆道に縁あれば後を用ひ前に對する（右寺）西寺の僧守敏より號る物か夏日暑に苦しみて抱寢する籠を女は竹奴と呼び男子は竹婦人と稱す竹木を彫りて脊の癢さを掻くの具を俗に孫の手と云ひ又木童子と號ふ予は此尿瓶に陶器妻と名を冠らしめいつ迄寵を忘る事あらじ粟田ゝ清水の陶器屋にも此器を賣るに法有まづ穴の大いなるを前に出して誂を聞は彼四つ目にて御殿女中に商ふ具に第一番の太く逞き絶倫の物をゐすする是今すこし細き方との誂は開安言易きゆへ也陶器妻も是とおなじく穴の太きを心に望めども誂へがたきが故なるべし婦人は此具を用る事難く尿桶と號けし丸を用ひ淀川登船に炮烙をつかふ男子は竹の筒の底を拔きて筧とす夏日尿瓶の匂ひ甚しきには熱湯に濯いで臭氣を取る嗚呼愛すべきは此陶器妻我死なば棺中に入て共におなじ土となさん是偕老同穴の契りなるべし

石蕗の花尿瓶相應の地ぎりかな

音羽山清水寺に詣るに今さら貴き事云べからず舞臺は今普請中にて奥の院より音羽の瀧を見をろし茶店に憩ふ老婆の云當年は松茸の旬遲く例年九月二十七日二十八日には大谷の法事有此日を茸狩の納とすれど此兩日雨ふりて今に清水山に茸殘れりされど米穀高價なるゆへか人出ずと語る阿彌陀堂は奥の院に隣り瀧山寺と呼ぶよし地主權現の社に登つて櫻紅葉を詠め朝倉堂（越前の国司朝倉弾正貞景建立）田村堂（田村将軍始行叡延鎮像有）梟の梟は冬季に出て卵を産むにあらず親鳥土を塊めて其形をこしらへ木のうろに籠つて抱けば羽毛生じて梟となり親鳥をくらふ大惡鳥といへり古歌に梟のあため土に毛がはへて

昔の情今の仇也

實にそれなりやしらず景清兩眼をくり拔盲人となり惡の一字あるゆへ附會せし物か後人の考を待

松門獨閉とは梟の謠かも　李叟

清水、（景清が瓜形の觀音、子安觀音に詣で丶靈鷲山正法寺（俗に靈山又國阿山と云）の南口より登る擧白堂の舊跡は前年訪ふてしれば寄らず天哉翁長嘯子は豐臣若狹守勝俊世を遁れ此靈山に隱棲して和歌を善し後西山大原野に移り細川玄旨幽齋と共に大原千句とて連歌を催さる和歌には擧白集を撰す故に此名有又山の井とて古跡あれども此邊といふのみにて詳ならず俊頼の家集に

山の井のふた木のさくらさきにけり
みきとかたらんこぬ人のため

と赤染衛門の詠けるとも聞けり此山の絶頂に登れば洛中、洛外、加茂、桂の二流愛宕、嵐の峰々淀、山崎の通船迄一眼に遮り絶景いはん方なし坊舍に洛下の集會遊筵の輩有りていと賑はし國阿上人は常に足駄を履きて伊勢に參宮し女の髑を見れば葬り給へり故に參宮の人首途の前に登山すれば忌穢れを遁るとて都下の參詣絶ずとなん

下駄提げて山まで追はんみそさゝゐ

高臺寺中の枯萩を詠めて雙林寺に詣づる金玉山とて時宗にて平判官康頼入道は遠流より歸洛の後此山莊に籠居して寶物集三卷を著し頓阿法師も四條道場金蓮寺より爰に閑居し草庵集を撰す西行も爰に住んであみだ坊を慕ひ世にこのもしき住居と詠むばせをは又此歌の山家集に出たるをしたひ「柴の戸の月やその儘あみだ坊と云句有予は又例の戯れに

無陀のけて冬籠せん南阿彌佛

芭蕉堂は西行庵の西隣に有りて闌更の跡蒼虬ながく住み居て門人仙厓に讓りしが此二人とも歿して今は空庵となりけり東大谷に入りて親鸞聖人の廟塔虎石を拜し泰山府君の東漸寺、本住寺、疳神などは門前より拜み山根を傳ひて東山長樂寺、圓山安養寺の紅葉を見廻るに半ば照り半ば青黄色を交へたる風景言語に及ばず坊々には遊客の聲聞へ門前には小童樫の實團栗を拾ふ正秀の句に

花の香の虚空にひろし東山

嵐雪が蒲團著て寢たる姿と見立しも物かは

濃く薄く紅葉染めこむ蒲團かな

眞葛が原祇園林を通りて華頂山大谷寺知恩敎院に詣づる洛東第一の大厦は申に及ばず元祖圓光大師の宗

風八宗九宗の詐をはなれ貴き事言語に絶えたり中にも本堂の屋根裏に殘る傘は何人の所爲ともいはねど世俗左甚五郎が突きさし置きしと云甚五郎は原と紀の國根來の産にて後伏見に移住して彫物の名譽也此堂建營の時の棟梁は其比名譽の內匠にて左とは別人なれど只古き堂塔彫物の類を見る時は世人左甚五郎の作也といふは皆其身の人德なるべし

いつの代の時雨に置きし傘ぞ

鐘樓に登つて樫の實を打あてなどし戲れて山門の方に下り藤本甲斐の筆の下乘石、三條小鍛冶が鐵盤石杯打詠め落葉に埋る櫻の馬場を西に末吉町喬清子の方へより夕方春水亭に歸つて宵より草臥伏す

翌八日未明に出て御旅町小間久によりて暫く話し今道場の東大手饅頭屋のもとは江島屋其磧（俗名市郎兵衛浮世雙紙物作者）大佛餅屋を業として八文字屋自笑の代作をせし家也（委しくは予が著述傳奇作書にあり依て爰に略す）龍池山大雲院に詣づる爰は彼安土論の貞安上人の開基にて天正の末豊臣家の命によつて織田信忠卿追福の爲の草創也信忠卿の法名（大雲院殿三品羽林仙巖居士）大雲院の號爰に出たり信長公より七種の奇物を賜る其中に法然上人の一枚起請文是一休の筆也と云寺中悉く見ありきて錦綾山金蓮寺（四條道場）に詣づる南の入口に染殿地藏堂有是は十住心院とて道場の末寺也杜鵑松は方丈の東手に有りて小間久の裏手の西に當れり此比寺中に堀井專助の辻能有りて五日目也木戸口に木賊刈の建札有習ひ事にて興行中には一度勤る事とぞ錦の天神より北隣興正寺に詣づる（一名和泉式部とも云）誠心院に入て和泉式部尼となりしゆへ然よぶ軒端の梅の北手に風の言水（紫藤軒と云）の句碑其餘風人の碑二三基有鯖藥師は（永福寺と云）澤藥師の誤にて七日を緣日とし因幡藥師は八日を緣日とす誓願寺は近比燒失して今に假堂也每年此十夜の內には近隣の兒童鉦太鼓を敲きて夜々米錢を集めしも御趣意此かたは是なきよし六角堂頂法寺に詣で南にあゆんで汁谷山佛光寺に詣すもと汁谷に有りて興正寺と云ひたるよし緣起に見へたり因幡堂平等寺はけふ八日の緣日也とて寺中所せきまで市店を出しいと賑ほし橘行平卿の影像は西の間に安置すを拜み魚の店大五子を尋ね久々の物語に半日を費し七つ時菅大臣の社に詣づ爰は菅原是善卿の館にて菅公降誕の地とて誕生水鳥石の書し碑石を見て是迄に五條天神俗に天使の社と云是は昔は

廣き森にて彼義經記に牛若丸、笠原の湛海を討し場所と云節分には白朮小の餅と寶船を禁裏に上げる例有りとかや爰より見廻りて夕方先斗町春水亭に歸る喬脊子中環（浪華の産鋸板師）を同道して嵯峨高雄に行きて遊ばんと約束して歸る當九月二日江州、丹州、大にあれて城州貴船の山奥よりも洪水出て鴨川筋も大に崩れ三條の橋はすこし傾きながら流れねど四條川原高小屋一時に流れ五條は橋半ば落ちて今に懸らず尤東西の石垣は水につかつて難澁いはん方なし弘化三午年七月六日にも此度の如く三條五條の橋落ちて洪水あり毎度かく洪水に苦しむは鴨川宮川筋川下程土砂高く積りて水流れざるよし前後十日計りは水の騒ぎにて難澁せしよし生吉の物語にて聞たり淀川筋は日々川浚あれど伏見より京師迄は浚ゆる事なし既に此邊は二日の夜より三日の朝迄の洪水浪華の地には卯刻に來らず三日の暮半比に及んで浪華に來れり東堀久寶寺橋にて三十石の破船せし多も此水一度に落ちたるゆへ也伏見より淀に來て桂の急流に支へられ水は二三段も高くなり小橋より上へ流るゝ水勢恐しかりしと伏見にても聞けり實も春水亭の二階より見れば川の瀬は變り東にて一筋となり生吉の洲は水なくして丘とはなりけり其上米穀高價なると配膳の女も禁止なればいと淋しく夜は川音の時雨るゝと千鳥の音信るのみにて閑を好む予などにはいと妙也「飛鮎の底に雲ゆく流れかなとは鬼貫の句もあれど

走れ／＼圍爐裏の炭も先斗町

翌九日は金毘羅に參詣せんと四つ時より安井觀勝寺へ行く光明院の門跡と云「濱千鳥跡は都に通へどもと讃岐院（崇德院の御事也）松山の配所に於て詠じ崩御の後いろ／＼の怪異ありければ爰に尊靈を鎭め奉ると云新更科とて中秋に月を賞せしも今は名のみ呼びて風景を喪へり祇園林より知恩院の山門前をへて古門前の楓葉を詠め地内の櫻は膳所本田侯よりの寄附と云本堂廻りの櫻は淀の永井侯より植えしと云古門前を出て次の石橋を渡り半ばより北を見れば叡山のかたち富士峰に似たり都の富士とは爰よりの詠めをいふよし此川上は志賀の山越より流れて東三條にて白川橋の名有繩手大和橋より鴨川に落る閑田子の一話に粟田祭は例年九月十五日なるが天明六年は國恤（俗に云御停止也）の時にて霜月に延引せり此祭式の内此白川の流に掛て

獨木橋を重き劒鉾さして渡る事あり其夕べ霜深く置きて常さへ細き橋の見るめ危きをいかゞと人々思へるに其河涯に住める明田利右衛門といへる猿樂の笛師心を得て木屑を敷かせしかば障なく渡りたり假初のことなれど時に當ての働きを人々感じたり徒然草に鎌倉にて中書王の御物ありし時地の濕りたれば木屑を敷きたりしを人の褒めければ乾き砂やなかりけんと嘲りしこと見へたるに思ひ合せて此橋上は木屑ならでは用をなさず彼に增る事遠しと評せりと有則此橋にての事也と獨心にはなして明智首塚を通りぬけ粟田口を左りへ入りて親鸞上人植髮の尊像の御寺に詣し門前にて暦賣にあひ暦を求むる暦賣は俳諧の題に霜月の部に入れども例年九月中旬に出たる物也天保暦に改まりしより年々遲く當年は十月八日の賣出し也とぞ俗に六十一年目に至て元の暦に還ると云說は非なるべし嘉永四辛亥年二月朔日は初午にて京師にては是を己なし午なりとて火早きと恐るこは天明八戊申年正月晦日京都の大火にて平安城開けて未曾聞の大變也と云其年卽二月朔日初午なりし由へ今に京師ばかりにあらず二月月頭に初午有ば（五日より前と云）火ばやきとは浪華にても云ふ也此時の火は正月晦日曉より翌二月朔日卯の下刻までに晝夜十三時に東西凡十八九丁南北凡一里二三丁燒丁數凡千五六百丁長延にして四十里餘なりとぞ今嘉永三年迄六十三年になる翌れば卽六十四年也六十一年目古暦に還るとはいふべからず

來年の事白川のこよみ賣

奥の丹後屋にて酒飯のうへ南禪寺中の案内は小間久と約束あればけふは行かず岡崎の水車を詠めて聖衆來迎山禪林寺永觀堂に詣づる先年霜月に

見かへれど供人遲き枯野かな

と詠たる時よりは一月早く今紅葉の只中にて庭中に莚を敷き床几を置き洛下の騷客を待つ聖衆來迎の松悲田梅鶯の池など打詠め若王寺（正東山）光雲寺（靈芝山）は門前よりふしおがみやがて黑谷の東中山の三昧に至る爰は昔源三位賴政が山莊の跡なりとき丶爰より山道を曲つて黑谷熊谷堂の前に出る紫雲山金戒光明寺黑谷は叡山西塔の黑谷を移して新黑谷とは云ふなり鳥醉の句有

石塔の林に秋の入日かな

石塔の林を詠めながら登りて文珠塔紫雲石に詣で鎧掛松鎧の池は熊谷直實著せし鎧を池にて洗ひ松に懸置上人の教に歸入せし也と聞發心の時を思ひ出て

　佛やよろひの池のちり紅葉

正面の南門は古く假門にて有りしが此頃山門建立と見へて美々しく圍ひ足場等を組たり淨光が茶所も過ぎて鈴聲山眞正極樂寺眞如堂に詣づる此十五夜には十夜の篝を三處に焚くとて見事なる篝柱三本を建てたり寺中の楓葉詠め得もいはれず都べて昔より花の都といへども花といはば櫻に限るべし秋の紅葉には數樹有りて皇都の寺院に紅葉なき所はなく古今に素性法師が柳櫻を詠みたるは僻言とも思はる都の秋ぞ錦なるべし

　眞如堂の月に十夜の篝かな

門前の稻荷を拜み神樂が岡へあゆむに道の北手に迎稱寺（一條道場）芝藥師（大興寺）極樂寺とて門並に有て其西の端に東北院（時宗）は御堂關白道長公を法成寺殿と號す御女上東門院法成寺の内東北の隅に棲たまふゆへ東北院と云和泉式部の塔、雲水の井、軒端梅等有東北の謠曲によつて作りし物か吉田山神樂が岡に登る爰は天照大神天の岩戸に入給ひし時八百萬の神達神樂を奏せし跡也と云傳ふ地主神の社は與山に有り一面の岡山嶮しからず木の葉は錦して櫟の實盈るゝを兒童に拾はせ貴賤割籠竹筒をひらき居るさまを詠めつゝ西の方に下りる二本松の方を通りて長德山知恩寺（一名百萬遍）に詣づ（淨土鎭西）四箇の一本寺にしてもと加茂の神宮寺なりしを慈覺大師草創し法然上人鴨皇太神宮の懇望によりて一枚起請を書かれ念佛の道場となる八世善阿上人疫癘流行りて村民の死するを憐み禁庭に參內して一七日の間念佛すること一百萬遍也疫病忽退いて安堵す叡感ありて號を百萬遍と賜はる堂前の石碑は小松內大臣重盛宋朝へ黄金を渡さる其志を感じて石刻の阿彌陀經を送る所の摸し也

　珠數を見る百萬遍の蕪かな

かの沸々と字する門前の畠を見て今出川口に出干菜山光福寺に詣づる豐臣公へ干菜を獻せしゆへ號を賜り六才念佛の本寺也

　藪陰や冬の日影の干菜寺

とは岡崎の蝶夢が句也柳が辻より加茂皇太神宮を遙拜して長德院常林寺正榮寺法性寺と並ひしは門前よ

り拜む午年の洪水には此四箇寺の內の門流れて三條の橋を落せしと云東川端を傳ひ砂川より三條迄の道大に荒れ道ぶしん最中也聞法山頂妙寺（法華一致派）に詣じ叉檀王法輪寺（淨土宗開基袋中）主夜神は詣人多しいつも上京の度に此邊は唯打通りにしぬればこたびは悉く一見して三條の橋を渡り春水亭に歸へる欄干の紫銅の擬寶珠十八本、切石の柱六十三本、天正十八年庚寅正月日豐臣初之御代奉增田右衞門尉長盛造之今嘉永三迄二百六十一年になる叉五條の橋紫銅擬寶珠は十六本（北の方西より四本目に銘有）正保二年乙酉十一月日奉行盧原觀音寺舜興小川藤左衞門正長としるす然らば三條の橋より五十五箇年後也此擬寶珠の內一つ弘化三午年の洪水に橋落ちて紛失せり其女帝の御葬式に附新きを足して有りしが予東武に有りし時擬寶珠阿州德島侯より京師へ持上りしと云漁網にかゝりて再び手に入ると聞きしゆへ爰に記す欄干の木とともに流れたれば淀川より難波津を經て大洋に流れ出阿州の海に漂ひしと見ゆ既に河原の院の名鐘七條の深淵に埋れしを榮西長老とり上て建仁寺の陀羅尼鐘となし跡に鐘が淵の異名を竈が淵と誤るなど僞りならず實（げに）水勢の力程恐しき物はあらじ

十日中玉樹とともに宿を出蛸藥師に玉樹の知る人あれば訪ひ小川通二條の上裔（せい）春子の舍弟宅に立寄り會式によばれ玉樹子、裔淸子を伴ひ二條の城を過ぎて成敗場の傍朝顏の水（名義不詳）壺井の淸水と云よし少し西に壺井の地藏堂有り安井村より太秦に至る北に常盤の里を見南に木島（このしま）の杜を見つゝ行き（元紀）太秦廣隆寺東の門より入てそこ爰見廻り楓葉を詠める蜂が岡と古名を云蜂岡（ほうかうじ）寺と有りしも秦川勝の名乘によりて廣隆寺と改むよし太秦形の石燈籠は摸形とす名物なりとぞ九月十二日の牛祭は五人の僧侶五大尊の形に表し異形の面をかけ一人は牛に乘り弘法大師作り給ふ祭文を讀むよし予兼て一見の望あれどもはたさず西に行きて帷子が辻に趣く爰は檀林皇后の骸骨をさが野に捨てし時帷子の落ち散りしゆへ呼ぶとぞ材木町の入口に有栖川とて小川あり齋宮は野の宮に對したる名なるべし車折（くるまざきのやしろ）社（一名冥官）昔車に乘りて此前を行くに牛倒れて車を折きしとぞ今は洛の商人掛神也とて詣すと云ふ鹿王院（禪宗）より靈龜山臨川寺（禪宗）に詣で渡月橋の詰に至る此程の洪水にて橋落ち二丁計り川上三軒

茶屋の上にて船渡し有り續文粹に天下の勝地は大堰(おほゐ)川に過ぎたるはなし城中の名區は嵯峨野にしくはあらずとあるも宜也水上は北丹波より流れ水尾(みづのを)川、清瀧川に落ち合ひ猿飛、龍門の瀧、大瀬等の名有りて嵐山を帶びし渡月橋を經て末は梅津、桂の里の東を流れて淀川に落つる水の色藍よりも青く嵐山の樹々紅葉して色を交へ下す筏有り釣垂る有り絶景言語に盡きせず先づ小督の塚は橋詰の藪中に有るを尋ね彼の高倉院の勅を受け彈正仲國明月に鞭を打つて琴の音を慕ひ御文を渡せし平語を思ひ出三軒茶屋の上花の茶屋の弟佐右衛門方に宿り時は七つにもまだ早からんと思ふ此携へし酒肴取出醉に乘じて川上にあゆみ千鳥が淵の巖に上り（横笛瀧口に離れて身を投し所と云）嵐山に落る戶(と)難瀬(なせ)の瀧を見る大堰川の一名を戶難瀬川とも云ふ玉葉に俊成の詠

となせより流す錦は大井川
筏につめる木の葉なりけり

拾遺に忠岑寺

いろ〳〵の木の葉流るゝ大井川
下は桂の紅葉とや見ん

何れも古詠眼前に有り此川上へ四五丁も泝り見るに絶景いはん方なし後の山は彼の龜山とよぶ天龍寺の裏山なり茸の香紛々と香ひ木の葉降り敷飽かぬ詠めながら川下へかへりて渡しを越え夢想國師の座禪石細川右京太夫政元が築きし城跡に藏王(ざわう)權現の小堂有り龜山の院吉野の櫻を移し給ひし時此藏王も安置せると云大悲閣には惠心の作の千手觀音を安置し傍に角倉(すみのくら)了以の像七十有餘の相法體衣を著し手に石割斧を持片膝を立て圓座の上に坐す碑石は林道春の撰にて左り側に有り寛永六年冬と誌す二百二十餘年の昔也了以の隅の藏と云ひしを板倉侯より角倉と賜ふと有

冬椿の茗は堅し角のくら

智福山法輪寺（眞言宗虛空藏）に詣づる葛井(かどゐ)寺と云しを貞觀年間法輪寺と改むよし落星の井、轟の橋、籠堂淺りなく見る櫻紅葉夕陽に照りて法輪寺の入相告るに驚き西行櫻、西行田とて宗祇の住みし跡など詠め渡しを越えて花の茶屋に歸へる人訪はぬ比なれば肴のもふけはあらねども干物を燒き松茸を焚き饗應いと風流也中にも黑皮と云へる茸（〆治の如し）よく灰汁を拔きて薩

麞芽と味噌あへにしたる猪口を出せり甚佳美にてよし土三軒茶屋は天龍寺の用達にて泊客をせず櫻の比は此前に仕出し料理屋有りて是を取寄せ席を貸すのみ玉樹はいさゝか知音有りて爰に泊る風呂も別に沸せて相客とてはなく夜に入りては寂寞として大堰の川音千鳥啼くのみ貝原篤信翁が岐蘇路の記に古への人一日の勝に遊べば一日の神仙となるといへれば我が愚なる心の穢れも浮世の塵も日比へて佳境を過行く程は忘れぬ生きて堯舜の仁にあひて嶺南の遊びをなす事を得たりと東坡がいへるごとく太平の世に生れ此樂みを得る事いと有難しかゝる遊びは其一時の詠のみかは身を終る迄折々に其所々の有さまを思ひやれば又まのあたり見る心地して長き思ひ出とぞなれるとしるせるは爰也と思へば寢るに惜く雨戸ひらきて夜更る迄大堰川に照りそふ月を詠めて樂しむ東坡が赤壁の月に遊びしは元豐五年壬戌先生四十七歳にて七月既望十五夜前赤壁の賦を作り十月望十五夜後赤壁の賦を作れり此二賦は人口に膾炙すれども同年十二月十九日東坡が生日にて又赤壁に遊ぶと施宿年譜記(せしゆくねんぷき)年錄(ねんろく)等に有れば一年の中に三回(たび)赤壁に遊べり然れども賦は前後のみにて生日には賦なきゆへ人是を不知其詩に曰

山頭孤鶴向レ南飛　載レ我南遊到ニ九疑一
下界何人也吹レ笛　可レ憐時復犯ニ龜茲一

太田南畝杏花園蜀山人若きに是を出して享和二壬戌年十二月十九日に墨田川に舟を浮べて後々赤壁賦を作れり予は享和元年の生なれば此時未二歳也志學後俳諧に遊びて住江の社頭櫻宮、高臺、味原、難波等を始として石山廣澤は再度行きたり東都の墨水は以上三度舟行して遊べり近くは須磨に遊びて月を賞す信州姨捨の月は未緣なくして見ざれ共今年予知命に及んで徒らに過さんやはとて仲秋既望は網島より櫻の宮を逍遙し彼岸の入に當れば虫籠を持行き魚鳥の放生は人すれども鈴蟲松蟲を野に放す事をせねば先づ蟲の放生會をして樂みたり後の月は有馬に行きて見たり九月四日は予が生日なれば友を誘ひ荒陵山の東猪飼野にて月を見んと樂しみしも二日三日の洪水に荒れて玉造より百濟野邊は水につかりて行く事かたく空しく望を失ひしが今十月十日の夜城州葛野郡嵯峨の里三軒茶屋に泊りて名にあふ大堰嵐山の月を見る是

や後々赤壁の月とも見んや歌に描く詩に暗ければ俳諧に戯る

蘇子いかに冬の月見はあらし山

をじかなく此山里と詠じけんさが野の秋も過ぎたれば鹿の音もおとづるまじと主の老婆に問へば老婆云鹿の音は松茸のさかりと出る頃にして晝も喧(かしま)しく啼けど茸の旬過ぎぬれば音や入れけん啼かずと云へりかの徒然草に云へる龜山の院池に大井川の水をまかせられんとて大井の土民に仰せて水車を作らせられたり多くのあしを給ふて數日に營み出してかけたりけるに大かた廻らざりければ兎角直しけれども終に廻らで徒らにたてりけり扨宇治の里人を召して拵へさせられければやすらかにいひて參らせたりけるが思ふ樣に廻りて水を汲入れることとめでたかりとあるも此處にてのこと也など話しつゝ衛を聞きて寢入りぬ

川千鳥車にまふて群にけり

徒然文題白猿の狂歌に

世の中は廻りもちなる水車
雪つまりたる年のくれかな

翌十一日夙に起きて大堰の川水にて手水をつかひ朝飯したゝむるうち山手の習ひなれは時雨しだして木の葉を染むるされど徒らに居んよりはと傘をかりて草鞋に履きかへ靈龜山天龍資聖禪寺に詣づる五山の第一夢窓國師の開基足利尊氏公の建立にて門前の芹川にかゝりしを歌詰橋とて西行奇童と和歌の贈答に詰りしゆへ呼ぶ薄の馬場は此東の野を云野の宮は黒木の鳥居小芝垣いにしへ伊勢太神宮へ齋宮に立せ給ふ内親王の住給ひし遺風とて古雅なる事いはん方なし以前予が秘藏せし凉岱(綾足片歌の祖畫名寒葉齋)の自畫賛を思ひ出いとなつかし

建部凉岱の畫賛に

朧月是も黒木の鳥居かな

雨はます〳〵烈しきに常寂寺(法華宗)定家卿の社有りて高倉院より小督の局に賜りし車琴と云ふ名琴此寺に有り爰を出て小倉山二尊院に詣づる(天台眞言律淨土)四宗兼學にて釋迦阿彌陀を本尊とすゆへに二尊院と云高き坂を登つて法然上人の廟有時雨の亭は左の山上に有り鷹司殿二條殿の魂舍を始め長州侯の魂舍は本堂と御影堂の傍に有り山上には紳縉家の墓碑數多有りて

嵯峨天皇土御門院後奈良院三帝の塔は石門の内にあり原と二尊教院華臺寺と云醍醐帝の皇子兼明親王此邊りに山莊を營み雄藏殿と稱す其後星霜重りて中興法然閑居し給ひ二世正信房湛空は德大寺左大臣實能公の孫也當院に入て土御門後嵯峨院二代の國師となる空公行狀の碑有り磨滅して讀む事かたし世人法然上人の塔也といへれど湛空にて源空にはあらず何等の者か文字を缺損せしめ强て法然上人の塔とせるや師弟の碑を紛らすは惜むべしと蒿蹊は次筆に書けり足引の御影は月輪禪定殿下、畫工法眼宅磨に仰せて法然上人の像を寫させ開眼供養を乞ひ給ふ一方の足先出たるに驚き持念せられしかば忽然として足をひかれて坐せる像となる是ゆへ足びきの御影とて今に當山の什寳となれり時雨ます〳〵降りければかの徒然に云淨金剛院の鐘又黃鐘調也と書ける金剛院は當寺の塔頭にて昔は檀林寺とも嵯峨の御堂とも稱せし跡なれば尋ねて暫し雨を除けり

　あしびきの山足引の時雨かな

長の明神は檀林皇后の髮也と云嵯峨天皇の愛妃にて薨じ給ふ後戀慕愛執の思ひを離散せん爲遺命により嵯峨野の原に捨つる其時緋の袴のちりし所に日裳宮(ひもみや)を建て上衣の散りし所に裏柳の社を建つると共に大門前に有り車僧の塚は藪中に有り常に破車に乘りて四衢を往來す世人車僧と云ふ七百歲の往事を語る故に七百歲とも仇名す此像太秦の南海生寺と云ふ小菴に有りと云ふ妓王寺、三寶寺ともに往生院と云ふ先年の地震にて破壞して三寶寺は纔に遺り瀧口入道の古跡横笛が梓弓としるせし歌石も道埋れて行くべき樣なし妓王寺も淨土宗にしてよふやく藁屋根の小堂のみ本尊は阿彌陀佛にして脇士は觀音勢至也淸盛入道淨海の像圓光大師の像を後にすへて祇王刀自を上段に居え妓女佛の木像は下段に置きたり妓王が父刀自が夫は惠名九郞時長とて江州野洲郡永原村は妓王妓女が出生所也永原村、北村、中北村の三箇村水不自由なるがゆへ妓王平相國へ願ひて堰を築きし功有れば中北村に妓王堂を建て中興三譽利貞比丘尼此四つの木像を作らせしと見ゆ利貞は寶永元年二月九日四十五歲にて遷化すと過去帳に見へたり（假令寶永年前の作にもせよ百五十年前の像としるべし）草鞋を脫ぎて本堂に上り此木像と過去帳を見る主の老尼再建を願ふ事せつ也

雁啼て佛御前の家出かな　　舊國

草は秋にいつしかあはで初時雨　　李叟

（四比丘尼像繪、枚略之……編者）

愛を出て仇し野念佛寺より愛宕月輪へ行かんと思へど雨倍降りて止まねば元の道に歸へり小倉山下山本町落柿舍を訪ふ（姓は向井名は元淵）蕉翁の十哲にして

柿ぬしや木ずゑは近き嵐山

五月雨や色紙まくれし壁の跡

ばせを共に石に鐫せしは粟津の井上重厚也

近比梅室雪雄の句に

きれ凧や柿の木それて嵐山

と云あり亦去來百回忌

今もその梢は柿のあらし山　　大江丸

中院町厭離庵の門内に入つて庵室の後に廻ればさゝやかなる石を積みて楓葉一樹を植え是ぞ京極黄門定家卿の小倉の山荘の跡也此嵯峨野に山荘の跡時雨の亭と呼ぶは數多あれ共かの僞りのなき世なりせばの詠歌より後人なぞらへて作りし物多し新古今に

小倉山しくれの比の朝な／＼

きのふはうすき四方の紅葉は

とは此山荘にて遊ばされし由明月記小倉山百人一首も黄門の作にて世に名高し此表の庭に紅葉の歌彫りたる碑にあや子としるせしを建たり文字細くして讀兼たれど是清泉柳の水の跡なるや重ねて問ふべし爲家卿の墓畠の中に有り夫木集に

住そめし跡なかりせば小倉山

いづくに老の身を隱さまし

中院入道殿融覺建治元年四月二十九日甍ず下冷泉宗家卿建と有五臺山清凉寺の釋迦堂に詣でゝ

降らるゝを覺悟て嵯峨の時雨かな

三國傳來の尊像は毎度拜みたれば今更いはず棺掛ざくら、四足門、牛の華曼（けまん）など悉くふし拜み三月十九日の御身拭を思ひ出

撫ごゝろ赤栴檀の火桶かな

嵯峨野とは小嵯峨、上さが、下嵯峨の總名にして清凉寺の邊を中央とすいにしへより閑靜の地にして故人の秀詠數ふに遑なからん

遍照も凝りてかち行く枯野哉

大覺寺の宮（眞言宗）は嵯峨天皇の故宮を精舍とせしよしいと貴し菖蒲谷とは此北手に當り大池有り中將惟盛

卿の北の方六代御前此所に忍びておはせしと云堀拔川とは菖蒲谷の池水を北嵯峨に通じさせ數十丁の田畑を扶く是角倉了以の工夫也五所明神（神明、八幡、加茂、春日、住吉也）に詣して大澤の池を廻り菊が嶋庭湖石は池中に有り名古曾の瀧は北手に有り拾遺に瀧の音は絶て久しくと公任卿の詠は是也廣澤の池遍照寺山は巽の方に見へ薙刀坂の山路にわけ登り所々にて息を繼ぎつゝ此名義を考ふるにさびて長き道なればかく云やらんなど打興じよふ／＼高雄道平岡の八幡宮の前に出づる是よりは道もよければ梅が畑善妙寺などを詠めて先づ高雄山の前なる紅葉屋に著き酒飯調へ身の濕りを炙り清瀧川を見おろすに高雄の一山は楓葉五色に交へ雨に染みたるは實に錦をさらすとやいはん此屋に滯留の客散紅葉を絹に摺り土産にするとて打盞の上にて才槌もて打居るも優にをかし清瀧の水を汲携へし佳茗を入れ煎て杜牧が車を停めて坐に看る楓林の晩と賦したるも是なるべしと打興じやゝ時を移したれども時雨に轉ぶ所迄紅葉をよそに見すぐさんも本意ならじと又草鞋引しめ爰を出神護國祚眞言寺に登る門前の清瀧川の詠めは立田通天も及ぶべからずかの空海に詔して金剛定寺の額を書かしめ給ふ折五月雨して清瀧に水增り川を隔てゝ書かれたる額書石を詠め護法の社は和氣の清麿を祭る三絶の樓鐘（銘は菅原是善卿序の詞は橘廣相筆者は藤原敏行）は本朝にならぶ方なき名器也奧の院と云ふ地藏院より下なる溪を見下せば總一面の楓葉にて清瀧の流水は藍の如く巖に碎けて珊瑚の珠を散らすかと疑ふ爰の茶店に土器を賣る求めて投げるに嵐に誘はれて散行く風情實に仙境に遊ぶが如し楓葉の詠めは一に高雄二に箕面三に栂尾にて龍田通天は遙に劣れり

此秋の暮文覺我を殺せかし

とは晋子の句也

睦殿は嚔泣かるべし散紅葉

下山清瀧の川上にあゆんで槇の尾山平等院へ（眞言律）詣づる是又紅葉の詠めよく／＼西明寺と云ふ川に渡せし橋をもどりて栂尾山高山寺（華嚴）明惠上人の開基にて麓の橋邊に掛茶屋をしつらひ河邊に下りて床几にかゝればば龍田通天もひとつ所によせたらん紅葉の詠の渡らば錦中やたつらんとは此栂尾の事なるべし一の瀨の土民茶店を出し今採りし松茸に鱧をあしらひ酒をす

ゝむ實に年々開けたるを知るべし山門の前の建石には酒肉五辛を禁じ高き石段を登つて本堂有り遙隔てゝ右の方に春日、住吉の二神を祭れり爰はかの宅摩法眼（畫人）明惠上人を信敬す明惠解脱の兩上人は春日、住吉の二神常に此山に通ふて擁護を加へ給ふ或日宅摩明惠の室に至るに障子の內に人なふして上人と語答の聲有り宅摩怪しみて是を問ふに時々春日、住吉影向有りけふも又然りとぞ宅摩感じて障子の間より窺ふに兩人列座す光相及び衣服等尋常に異也頓て筆を執つて譫（そゞろ）に神相を寫す此畫像今當山の什寶とす宅摩歸京の時鳴瀧の徑に於て落馬して死す是則凡人神相を寫す冥罰なりとぞ今鳴瀧に宅摩塚遺れるは此故也明惠上人は北條泰時に天下を治むる事を問はれて唯無欲にならせられと計りと答ふ泰時云ふ我一人無欲になりても一門是に隨がはずんばいかに明惠云ふ人は兎もあれ我一人無欲にあれと泰時悟つて無欲になり北條の天下九代の榮を遺す是皆明惠の教によれりとぞ實に清淨の地にしていかさま神も今に影向あらんと坐に淚浮めり仁王門の柱に切手是なきに紅葉の枝提げ行くべからずとかけ札有りいと風流なる書きかたなりと感じてもとの道に下山す

紅葉して見ても及ばぬ慾かな

茶はもと高辨上人入宋して將來し栂尾に栽え給ひしより弘まれりと類聚國史に見へたれど世俗明惠上人栂尾に栽え給ひしよし云へり然らば朝夕茶を吞む者其恩を思ふべし今日本にて茶禮を教る人を茶人と稱す西土にては茶を採制する人を茶人と云ふ近來煎茶を流行して物ごとしるしらぬ者迄佳茗を吞む實に奢れるかな中興上田秋成（餘齋無腸）村瀨栲亭浪華の蒹葭堂等と意を合せ賣茶翁（高遊外）を煎茶の記原として弄びしより好人陸羽が茶經をひき出し凉爐（こんろ）急須の物數を盡し抹茶式に倣ひ當時は專ら紫泥の瓶を用ひて出し茶を吞む事とはなりぬ先年予秋成が淸瀧の水を汲み茶を煮たる折の長歌を書きたる軸物を秘藏せしが友人にくれて今其文も忘れたり高遊外は茶禮に悉しく晒落れて荷ひ賣をして煎茶の祖とはいふべからず祖と稱するは無腸子也嫲の容形（かたち）せし凉爐を餘齋好と云ひしが今は稀にも見ず花月庵を宗匠とか唱へるはをかしき事也東都に塚原宗箕（醫師 芸打）はしる人にて近比煎茶を發明して一派を立ると聞きて望みて飲しが其式甚む

つかしく見るに堪兼ね中座して歸へりぬ文華日々にひらけ書見に任せて新奇を巧み其もとを失ふに至るといふべし明惠上人は自遣心集と云ふ書を著はし和歌は新勅撰に數首出て寛喜四年正月十五日に寂す抹茶煎茶に遊ぶ人は勿論兎道信樂、川上、阿倍川、筑前、日向に茶を造る者茶の祖明惠の忌日には其恩を思ふべし其昔團茶と稱して茶粉を圓めし物有是を茶碗に入れ熱湯をかけ柄杓の末に丸き有りて是を攪り飮む事有りてや柄杓を見しが今是も癈りてや稀にも見ず流弊の世是非なしとやいはんやがて善妙寺に出て鳴瀧に歸へる宅摩塚を詠め三寶寺（日蓮宗）般若寺（眞言古義）妙光寺（禪宗）なと詣でたけれど時雨にて夕暮早く殊に玉樹子病に苦しめば喬什子を京へ歸へし御室にて泊らんものと足をはやめ近比山を開ひて八十八箇所の靈場を移せし大師堂の門口近江やといへる宿に泊る奥の放れ座敷は數間有り閑靜なる事夥しく昨晩の三軒茶屋よりは遙に寂ひたり食物家具は數十歩を隔てし母屋より運び侘しき事限りなし爰にこそ鹿も啼くめれど雨の降りつよく人語を隔てあたかも甲信の幽谷に宿りし心地ぞせらる鳴瀧は爰より西につゞきて砥石松茸の名産也とど此北に泉谷の法藏寺（禪宗）泉殿とは妙光寺と般若寺の間に舊蹟有りとぞ鳴瀧御坊とて一向宗の道場には例年霜月九日大根焚といふ有るよし飯は持行き五十穴にて土地の名物鳴瀧大根をよく煮たるを賞味する事とぞ風流は田舍に有り重ねて行くべしなど話ながら雨と筧の水音を聽ながら寢入りぬ

　　投やりに眉も作らぬ頭巾かな

翌十二日は雨晴れたり爰を立ちて御室の御所に詣す大内山仁和寺（眞言密乘）宇多天皇延喜帝に御位を讓り給ひ御出家ましまし寛平法皇と尊稱し當山に七堂伽藍及び御室造立ましまし〳〵入室ある御門跡號爰に始まる宮門跡方の上首にして總法務の宮と稱す諸堂ことごとく拜みて寺中の櫻紅葉を詠めて山門に出で黑門口より本辻に出て雙が岡はこなたより見やる一二三と岡相並ぶがゆへ呼ぶとぞ長泉寺は兼好の古蹟をとゞめ法金剛院はもと淸原眞人、其子瀧雄公の山莊にて雙丘寺（律宗兼學）の跡也西光庵（淨土）は雙が池の上に有り玉樹病足に歩行苦しきよし妙心寺裏門の西にて別れ獨大雲山龍安寺に詣でゝ細川勝元左大臣實能公の山莊を乞ひ請け方丈は勝元の館書院を以て營み庭前の築山池

邊の風色は勝元の物數奇也と聞けり池の面にはや水鳥數多下りて詠いとよし

　背邊下りた鴨もあらふに鴛鴦の聲

衣笠山は北に連なり藤原家良公の別莊の地也ゆへに衣笠の内大臣と云ふ等持院は此麓にて開基は夢窓尊氏公の建立なり今普請中にて雛形を書き堂前に有り東に行きて北野聖廟天滿天神宮に詣づ此程屋根替にて東側經所に移せり二月二十五日は菜種の御供の神神也といへども誠は梅の御供也とぞ其ゆへは平なる桶に飯を高盛にして神前階上の八脚机の下へ供じ其机の上に香立と稱して小土器に白き紙をめぐらし三杵の米を滿ちてそれに梅の小枝を挿して奉る或は花ちりてなき年には葉を生じ實を結びても同じく折りて挿す數は左四十二右三十三是男女の厄年の數に准ふ西の京の神人より奉るとの事也影向の松のほとりは豐臣太閤北野大茶の陽の舊地ときくもと高雄より歸路は菩提の瀧より千束、岩門、鷹が峰の光悅寺源光庵の方へ廻らん心なりしに此程の荒れにて道難澁也と高雄紅葉屋にての噂に隨ひかつは玉樹子の病苦を察して行かず歸へりき重ねて行くべしと思ひ捨てけふは芭蕉忌なれば雙林寺に詣でん物と干たる傘をかたげ此邊法華寺に參る會式の賑ひに紛れて春水亭に歸へり晝飯をしたゝめ暫時草臥を休む晝後小間久（こまきう）來つて南禪寺に行かんとさそふ兼て約束なれば連立ち粟田口に行き左側商家の裏に有る三條小鍛冶宗近が勸請の稻荷に詣し美山子（陶器畫師）の方に行き南禪寺中の案内を賴み三人連にてやがて瑞龍山太平興國南禪寺に至る（五山第一）舊（もと）龜山法皇の皇居なりしを普門（無關和尚諡大明國師）に賜ひ佛殿を創建し給ふとぞ寺中の知音より子供の案内と共に五鳳樓と號す山門に登る寛永年間藤堂高虎再建せしとて薩摩杉を用ひ造れり結構いはん方なし正面釋迦の像を安置し右には十六羅漢の像極彩色を用ひ此前に高虎公の像は厨子に籠れり左に大明國師の像を置き藤堂家九十餘人慶長の戰に討死の位牌を並べり天井の雲龍來光柱の彩色狩野常信の書く所煤びる事なければ善盡し美盡して此比なるかと疑がはる山門を下りて龍淵室に至る間毎々の襖は桃山御殿より爰に寄附せしと云ふ常信の書也山水花鳥人物を書きし金襖にて箔色滅金象眼の引手目を驚かせり北の間は禁庭より寄附とて上檀の書は古法眼元信

竹に虎の間の畫は探幽にして虎數疋の形容悉く同じからず中にも水呑の虎は名高く感ずるに辭なし是を出て北の塔頭名を忘るに入て庭山の楓葉を看る此間の襖は天明年間圓山應擧爰に居て認しと云ふ悉く墨畫なれども山水草木に筆勢を盡せり床は張床にして山水樓臺にて書詰めたり此向ふの襖は人物のみにて擧が眞草行看るに足れり爰を出て本多佐渡守の碑は堂內に有り陶器の龜を臺とせし也唐木の白檀二株は佛殿の左右に有り山門の外の大燈籠一基高二丈餘白川石也蓋石の寶形に二引龍の紋有地輪の上に南禪寺山門石燈籠寛永五年九月十五日佐久間大膳亮平勝之寄進之爲現當悉地成滿也と有り南禪院金地院にも拜すもの有りといへども時遲ければ重ねてと約して粟田口に歸へる爰に粟田口より日の岡に登る坂路を松坂といふよし

かへりこん程をちぎらん忘るなよ
　我松坂の松ならばまつ

と長明の詠有り大佛殿の石を曳く時東の方より來る者追分のこなた松坂の邊甚艱難なりしかば加藤淸正音頭をとりて松坂こえたやつさと諷ひ囃して曳かされしといへり今踊の音頭に通して諷ふを伊勢の松坂と覺へたるは同名にて彼れ名高きゆへに誤る也とぞ是ぞ榮西長首と同日の論なるべし一道に勝れたる人の言ひたる事は後に知るべしなど話しつゝ美山子の方へかへり會式の善哉に饗されて夕方春水亭に歸へりけふ南禪寺の名畫を思ひ出

　畫の虎の水飮む音か霜時雨

翌十三日伏見の驛館より琉球人薩州侯の屋敷へ行くよし御座船の結構など見んと京師の人の行くと聞きて小間久にも妻子者を連れて行くに誘ふ辻能など見て徒らに日を暮さんよりはと直に連立ちて橋下より竹田街道大石橋に出て錢取橋に趣く先比の荒れに道崩れて瀬は大約にかはれり伏水に入て薩州の屋敷の邊に行くにはや今の先琉球人は屋敷へ上れり驛館へ歸へるうちは往來止也とて通さず小間久の舊識に逢ふて幸ひと誘なはれ通行筋の棧敷に伴ひゆかれ赤飯煮染のもてなしに預り晝半比と覺しき比琉球人の驛館へ歸へるを見る都合九十三人と也前後は薩州の役人嚴重に附そひ次に頭巾裝束おかしく粧ひたる下官朱塗の名薄の大きなるに中山王府とか金泥にふとく書きたるを高く捧げ二行に行跡にラッパ、チャ

ルメラの如きの笛を四人吹きて次に四人太鼓を銘々左に持て是を敲く中山王は乗物に乗り附添ふ下官は總髪にして髪先をわがねあたかも矢脊の下良に似たり眞鍮の笄をさし服は木綿の布子を著す親方と稱する上役人は皆乗物に乗りたり頭に黄なる帽冠を戴き乗物一挺に下官一人宛附添ひ凡二十挺計跡に小童と覺しくて緋縮緬の首卷をして乗物六挺行き跡に薩州の藩中用人道中奉行とも覺しき人馬乗物に乗り附添ひ行く旅館は京橋に隣る蓬萊橋の詰なれば通行は一筋道也先に行く衣傘を見れば七八丁計り人數續けり是をまのあたり見て京橋を渡り御座船を見る薩州の船小笠原、毛利、龜井の紋附たる幕を張りて四艘並び次に薩州の紋附たる船二艘以上六艘也船の役人にしる人有りて船に入て悉く見終り今富橋をこへて中書島へ渡りて蓬萊橋をこへ旅館の門には役人の宿割通行の次第をしるせり明十四日は休日にて十四日未明に薩州侯は御出立にて四つ時には琉球人出立といへり草津守山より大垣に至り名古屋より東海道を行くとなん泊の宿は二驛三驛を隔て多人數の混雜なき爲とは聞けり

琉球國は南の果にて暖國也ときく我國の寒氣にをかさるゝを思ひやりて

　琉球人ひゞ霜やけの旅路かな

兼て伏水の驛には尋ね見たき所もあれど短日なれば御香の宮へ行くに京町には大文字屋（大丸）の別莊有りかの南京踊りの唱歌は東都吉原京町大文字屋（妓家）の主姿いとおかしき故紀文是に誦らせたる唱歌なりと京傳子の書きたるを見しに何れが是なりしやしらず御香の宮は神功皇后を祭る文祿年中伏水の城を營み給ふ時此社を大龜谷の東に移しけるに神祟ましく／＼ければ又此舊地に遷座有りし也とぞ蹇石は敷石の間に有り拜殿南の門は桃山の城中より移せしと云ふ彫物は實に左甚五郎（伏見に住居する事前の條に出たり）が作とも見へて美々しゝ北の門より出て大龜谷の入口藤の森黒門の東に出る左右竹藪にしてよき道也爰を東の小路にわけ入れば小栗栖にて明智光秀山崎の戰ひやぶれ坂本へ落行く闕道也明智胴塚とて一塊の丘あるよし以前見たると小間久の話なり大龜谷卽成就院に詣づる本尊は惠心僧都の作の阿彌陀佛也壽永の頃奈須與市宗高平家追討に出陣の時佛前の幡を借りて笠印となし西海に

下り壇の浦にて扇の的を射て名譽を顯はし道舍を修造し願望成就の意を直に卽成就院と呼べり與市宗高の石塔堂前に有り高さ一丈計り無銘笠石は脇に居えたり一說に宗高日の丸の扇を射たるは譽なれど是平家より咒咀調伏の爲に射させたるにて後宗高癩疾を病死したり今洛下の者長病に臥し死生存亡を早く願はんには爰に歩行を運ぶを是とすと云ふよつて參詣絕へすとなん予思ふに長門本には宗高扇の的を咒咀と知りて八幡大菩薩を念じて扇の要を射て落し日輪に表じたる日の丸を射たるにあらずと有り癩病を煩ひたるは虛實糺わからねど死生を一時に決すとは誤りなるべし此程有馬に浴湯の砌にも似たる說有り死病に決したる者は入湯すべからずとゆへいかんとならば若しゐて浴する時は氣血の不順温湯の巡環に戻るが故に死期近くなると云ふ此寺に詣する人もたとへ長病に倦むとも死は易く生はかたし眞に存亡を決する者は少かるべし予兼て那須の與市の事蹟を案じ並木宗助が西海硯により新に扇の的と外題して著述をもふく未草稿にして出板ならず此頃與市と云へるに數人有り眞田與市、淺利與市、關原與一各源平盛衰記東鑑等に出たり此與市と呼ぶ名に一說有り昔は總領を太郎と呼び二男を二郎と段々に呼び十郎の後十一人目に當る男子には餘一郎と名附るとぞ既に平惟茂は十五人目の男子ゆへ餘吾將軍と呼ぶとぞ然りやいなしらず因みに云ふ晋子の句に

　二本目は與市も困る扇かな

とはよく人口に膾炙する處也五元集に或人蕣の畫を一面に書きたる扇に贊を乞ふ晋子筆を採て

　蕣に扇の骨を垣根かな

卽興奇絕せしとて今一本とて無地の扇を出されし時二本目は此句を書たりと有り世人二本目の句をしりて始蕣の句をしらぬ人多ければ爰に書つく予幼き比此事を書きてしりへに

　扇もつほまれは(上手は)あらじ與市かな

と云ふ句を吐きたる事ありなど思ひ出ていとをかし此前の茶店にて割籠竹筒をひらき深草野にわけ入る桓武天皇の陵を拜み山本谷口より瓦村に行く此深草の鄕は高貴の別莊名賢の古廟靈佛の寺院數々ありしも千載の昔となり深草天皇の建給ひし嘉祥寺も今は嘉祥寺畑とて字となり仁明帝の陵後深草院の陵冬嗣

公時繼卿の別莊昭宣公の營み給ひし極樂寺も今は里の名となりて遺りぬ鶉の床は深草野の名所にして千載集に俊成卿の詠

夕されは野邊の秋風身にしみて

鶉なく也深草の里

此餘古詠甚多し眞守院（淨土宗深草流義の本山なり）安樂行院（般舟院屬）をふしおがみ霞が谷瑞光寺に詣す爰は明暦元年に元政上人草創して法華道場とし元政の墓は佛殿の西に有り塚の上に三本の竹を植えたり常に携へし竹杖を立てしが枝葉茂りしと也傍に路次下駄と竹箒を置きたり信心の者は箒もて木葉を掻清むる事也其蜩庵瓢水親の墓に詣で

さればとて石に蒲團も著せられず

と孝行の限りを述べたり元政が母を伴ひ身延紀行の始に此霞谷の父の墓に詩でし時瓢水の句とおなじ思ひなるべしとて密に感涙を催ふす

孝行に堀るさへあるに霜の竹

門前に出て寶塔寺（法華）を遙に拜み白丈山石峯寺（黄檗派）に茶碗子清泉五百羅漢の石像も拜したけれど日も西山に傾きたれば重ねて詣づべしと遙拜して昭宣公の墳にぬかづきて街道に出三の峰の稻荷東福寺は街道より拜して月影にあゆみつゝ初更前春水亭に歸へりぬ

翌十四日珍らしく門を氷魚よ〱と賣聲を聞けり抑氷魚は江州に限れり內膳式に云ふ每年九月より十二月迄是を貢とす氷魚を捕るものを網代と云ふ田上にて取逃したるを宇治にて取ると花鳥餘情も見へたり拾遺に

數ならぬ身をうぢ川の網代木に

おほくのひをも過しつるかな

とあるを思ひ出是をもとめて酒肴とし暫しまどろみしが

氷魚いつと問ふて都の名殘かな

誰待つとしもあらねどにはかに歸路のいとまを告げそこ爰の知る人々に暇乞ひして魚の棚の大五子に立寄り風話して七つ時東西の本願寺に詣で油の小路を下へ不動堂（青物市朝々立）不動をふどんと唱ふは古言にして熊野の謠曲にも六波羅の地藏堂と諷ひ高砂に遺（のこん）の雪の淺香瀉と諷ふ皆古き讀み癖なるべし道祖神天滿宮稻荷の御旅所に詣で八幡山敎王護國寺祕密傳法院は俗に左寺とも東寺とも云ふ遙拜して錢とり橋の末

は道はなはだ崩れ今よふやく道を造れり城南の離宮の舊地北向不動院を拜みて安樂壽院は鳥羽上皇離宮にましまし〳〵北殿をひらき營み給ふ所と聞きて詣で

藪越しや寺にはなにや榧の花

竹田街道に出てきのふ京より來たる道のみありき伏水阿波橋船宿につき按摩賣を合手に雜話を聞くに明朝琉球人摩州侯と共に當地發足也と云ふ當所油懸町油懸山西岸寺の油懸地藏尊と川口船大工町寶藏院の住吉の社と二箇所淀川上下通船安全の爲御免の勸化と唱へて僧俗奉加の錢を船宿の客に乞ふ九月三日の東堀の破船せしより此かたどこやらに心細く銘々奉加の錢を上るはいはず語らず夜船安全を祈るにやあらんと獨をかしく

呉竹のふしみに薄き蒲團かな

大江丸の句有

春の夜や伏見あたりの片はたご

四つ前と覺しき比よふやく船を出す船夫と乘手のいさかふも喧しく淀の小橋もいつしか八幡八崎は苫を上げて遙拜す

凩の中くゞり行く夜船かな

八軒屋にて七日の鐘を聞き夜明前道頓堀より船上りして我屋には歸りぬ

嘉永三庚戌年神無月中旬

西澤文庫綺語文草下の卷終

今古参考南水漫遊初編一の巻

一の巻

今古參考南水漫遊初編一の卷

颯々亭南水主人著

道頓堀濫觴

浪華の江南道頓堀此川往古はいさゝかなる小川にて水上は高津仁徳天皇の社地の邊りより流れ今の梅の橋その川筋にて梅川といふ其頃も此邊の地形低し元和元年大阪落城に及び翌二年より松平下總守殿御知行と成る然るに島の内は荒野にて三津八幡も纔なる小宮三津寺も小庵也東横堀より長堀、西横堀今の道頓堀まで四百五十間餘四方家建の儀下總守殿より今の總年寄安井氏の先祖道頓へ仰附られ則町割を致させ道頓堀東横堀より木津川口の荒地を安井氏拜領有て川を堀り南堀と名附け兩側へ建家なす其後寛永年中於國かぶきを興行せしより芝居町といふ此芝居を南堀へ引移され安井道頓の法號を用ひて道頓堀と改めぬお國かぶき女藝を禁じ給ひしより若衆子供の踊り興行有りしかど承應元年七月に是又御停止仰附られしかど翌二年巳の三月かぶき物眞似狂言盡といふ名目御免ありてより今文政三年に及び百六十八年年々に繁昌す延寶六年午初冬出板大阪道おしえ（道しるべイ）といふ小册に

道頓堀橋の分（但北南へかゝる東より内よこ堀より西へ落）

大和はし中橋これや日本橋
　南のかわそしはゐなりけり

太左衞門西はゑひすになんは橋
　さて其すゑはゑつた村也

長堀より南町名寄北より

うなき谷大ほうしせつたすわう殿
　もめん三津寺はては道頓

右の歌を見れば大和橋と日本橋の間に中橋といふ橋ありて今の相生ばしなし此考は六軒町重井筒の條に著す扨亦幸町の邊に穢多村あり其外今の清水町筋を雪踏屋町と呼び八幡筋の木綿屋町といふ（今も八幡すぢ西横堀懸りたる橋を木綿屋橋といふ）是等の考は末卷著す

三津八幡

古圖に三津、長堀、江川とあるは今の長堀の川筋をいふ同圖に布之美(フシミ)とあるは今の伏見町の邊也又三津八幡の邊をもいふこれ難波の伏見の里也それ伏見の和訓は伏拜みの略訓にして古しへは旅行の人遙に帝都の方を拜して通る所也といへり奈良の都の伏見は菅原をいひ難波の伏見は高津の宮難波の都の伏見也山城國今の伏水も帝都を伏拜む所なれども誰あつて平安城の方を伏拜む人もなく只下り船の遲速をのみ諍へり伏見は神社の遙拜所と同意にて八幡の伏拜みなども古書に見えて皆山下を通る人の遙拜なす所也といへり三津八幡宮は神託によりて行基菩薩の勸請也毎年八月十五日の祭禮は夜陰に及んで神輿三津寺の前なる旅所へ臨幸あり社説に云當社は淸和天皇の御宇筑紫宇佐の神男山に遷座の時(孝謙帝の御宇とも)西海より初めて致り給ふ洲中也その舊跡に祝ひ祭るといふ又一説應神天皇の行幸の地ともいへり天和貞享の比迄は八月十五夜遊客此所の月を賞し各深更に及んで家に歸るこれを月見と稱し又難波の御祓共いひて賑はしかりしが今は此祭禮を知る人も稀にして月見の夜といへど深更の渡御なれば拜する人も多からず古圖に三津の里三昧寺とあるは今の三津寺なるにや此地は今も折節に土中より舊き石塔など堀出す事有といへり因に云八幡の隱宅に井筒あり上代和州在原寺にありし井筒なるよし中古の事にや當國伊丹稻寺屋某とて富る人家宅は勿論庭前の樹木に至るまで風流を好みて頻りに珍石奇樹を聚め其頃和州在原寺の僧に約してかの寺内なる井筒を白銀四百枚に換て稻寺屋の庭に移す此井筒は伊勢物語に筒井筒ゐづゝにかけしまろがたけと詠じたる時の井筒なるを無位無官の平人の身として所望せしは倉忽とやいはん心ある人は眉をしはめて誹謗せしが程なくかの稻寺屋身上不如意に相成り家屋敷も賣拂ひて井筒は茂りたる草むらに殘りしが其後三十餘年誰問ふ人もなく空しく打捨ありしに豐竹越前これを望みて金子貳拾兩にて求め島の内八幡筋の隱宅に移す程なく彼宅も亡びて又もや井筒のみ殘れり惜むべし／＼稻寺屋なくんば井筒も在原寺にとゞまりて人も是を賞すべきに白銀黄金の媒に空しく名を失ひ塵芥に埋れしは實に雙袖を浸すに堪たり

戎橋

道頓堀戎橋の異名を操り橋と呼ぶは往古あやつり昌んの頃は今の大西筑後座戎橋の西にもあやつり芝居ありて諸見物かならず此橋を渡りしゆへかく異名とす此橋の南詰にて毎年正月九日十日西宮えびすの御影を弘むる事往古より嘉例とす夫ゆへ戎橋と呼ぶか亦は今宮の惠比須の社眞南に當るゆへにや此橋の西なる難波橋を大黑橋といふは戎に對しての名なるべし貞柳の家集に

西の宮戎の札を道頓堀戎橋邊へ持來りて披露なすを見て

わたりかぬる人をたすけん爲にとて
西の宮より來たえひすばし

窓のすさびに云

今時惠比須の像とて繪にも書き木にも刻みぬるは廣田の神主の像也神功皇后筑紫より歸洛の時西宮廣田大明神の祠廢して神主釣をいとなみとしてやう／＼神に仕へけるが鯛を釣て捧しかばほうび有て由緒を尋ね聞給ひのぞみ有やと尋られしに外に所望は候はず神社再興を願ひ奉ると申せしかば頓て造立ありしとかや此神主の名を夷三郎といひける此神主が功にて中興せしかば末社に崇め祭りけるにぞ後世に至て堺の商家此宮を信じ月詣せしが有福に成しかば神の惠みとて殊に渇仰しけり老後にはゝや月詣も成がたく何とぞ居所に神影を勸請し朝暮拜し申度と望みければ神體はうつすべき形もなければかの夷三郎が皇后へ上るとて鯛を釣て持行所を繪にうつし與へけるが世上に弘ごりたるとぞ

秋田屋水

古書に千日寺の堀井の水道頓堀側の秋田屋の水は大阪四所の清水と呼びて酒を釀するによしと云傳ふ愛宕の水聚樂町天神の水は天滿天神境内にありいづれも名井にして茶道にはかならず此四所の水を用ひしが堀井の水も秋田屋の水も今は知る人なし古老のいふ秋田屋は竹田の芝居の隣家にて饅頭を商ひたる家なりしが寶曆の末に絕て名井も度々の類火に今は所も定かならず桂井蒼八戲作古文鐵砲に云

道頓堀秋田屋まんぢうを賞する詩

新店更欺ニ於苑家一、頓河名物勝ニ於花一、
相逢方孔爲レ君放、霜雪裹レ甘酒當レ茶。

其頃粹名高かりし堺筋象牙屋六兵衛といへる人夏日島の內の青樓に遊び暑の堪がたきに砂糖水を飲んとて歌妓仲居を引つれ秋田屋へ來り一箱の砂糖を井のうちへ打こみ竿竹もてかき廻させ頓て飲んと汲あげしかばさしもの名水も泥に變じこは珍説也と手を打て興じぬ

太左衛門橋

太左衛門橋は立慶町角の芝居名代大阪太左衛門座の前に懸りたるゆへかく名附く此橋の西手の濱地は北濱淀屋古庵世盛りの時此地面を買取て千日の墓所へ寄附有しゆへ今に聖六坊の持地也往古は千日への葬送は大かた船にて來りて此濱地へ著たり夫ゆへ五六十年以前迄は此處の岸岐に石の地藏の迎ひ佛ありしが度々の燒火に失ぬ此邊より法善寺の門前都てだら〱おりにて凸凹の道惡かりしが寶暦の頃並木正三の工夫にて角の芝居の二の替り三十石艠始といふ狂言の大切り廻り道具を仕初し時舞臺の下を堀たる其土を以て往來の通路よき爲に此邊の道を直せしより今のごとく平地と成たり其昔は芝居裏人家まばらなるゆへ元文の頃北の新地にて五人切したる早田八右衛門梟に懸けられしを芝居の樂屋より見えたるよし古老のものがたり也

奴塚

延寶三年卯の春飢饉にて京都に餓死する者夥しく有ける其時智恩院の長老塚を築き引導なし度よし町奉行能勢日向守殿へ訴訟ありし所同役松村吉左衛門殿立會にて日向守殿何國に塚を可申附やと吉左衛門殿に御談合被成候ゆへ松村殿被仰候には大佛の耳塚も年月を經れ共其名今に殘り大阪城中に先年喧嘩の事ありて奴ども五六十人も殺害なし大阪道頓堀の墓に塚一つ穴へ築込今に奴塚といふ諸人申傳えて何の詮なき事也餓死の人は海川へ流れ次第に打やり捨たるが可然哉その塚後代に殘して其時の天下の恥辱也と被仰しと也日向守殿も尤也と其事止ぬ松村殿の申されし奴塚も今はなく爭論もいつの頃やらん詳かに知れ難しと土橋氏はなし覺といふ寫本に見えたり千日の奴塚寛文の頃まで有しと見えて寛文元年辛丑六月改正の大阪圖に奴塚あり

圖中七不思儀の栴檀樹今は所もさだかならず按ずるに延享元甲子年高津新地開發の砌此大樹絕しが高津

七ふごのせんぶん

大和だし

中だし

日本だし

太たつ橋

ゑびすむし

出羽志だい

七太夫志だゐ

せんぶち

ひや

新地の増地は明和二年也前文にいふ中橋も圖中に見えて慥なり其餘芝居四軒見ゆ千日とあるは法善寺いふ難波新地は享保八卯年京橋一丁目の人家を道頓ぼりの南へ引き本京橋町の名あり元祿十六年未三月玉造伏見坂町四丁を千日前へ引たり明和六年丑の春自安寺の邊新地と成て人家建つ世俗黑船新地といふ其心は向ふに獄門が見ゆる故也とぞ

長町古名

長町は古名名古町也應神天皇の御宇吳人吳織、漢織、此濱に著岸す此邊すべて海也吳人往來せし道なるゆへ名古の濱名古の江名古の海又は名古の坂名古の原など日本紀に見へたり

なこの海の汐干のかたは遠けれと　　　　公朝
　　目に近よりし淡路島やま

かゝる古き名を長町と呼びあやまりしさへ意恨なるに近世寬政七年公に訴へ長町五丁目迄を日本橋通と改め漸六丁目より九丁目迄に舊名を殘せり

東都四方眞顏浪華に遊ぶ頃浪華の昔物語を聞てみをつくし首たけはまる那古の海今はをなごの海と成けり

長町六丁目大乘坊は中古備中國倉敷地藏院といへる寺の隱居正慶といふ僧大阪難波村へ引越し在しが毘沙門天の修法をなして病氣を平癒なさしめ其外願望成就なさずといふ事なし依之諸人參詣群集なすゆへ寶曆八年寅の秋難波村より長町六丁目今の地に引移りて大乘坊を建立す夫よりいよ〳〵參詣多く相成地内に面屋といふ奇麗なる茶店を設て香煎を出せしが其頃は珍らしき事なりとて賞翫す其外近邊に料理屋出來て夜に入れば近邊の遊里より女郎藝子夥しく參詣して大きに繁昌せり近世毘沙門の祭禮あり每年六月十五日初更の頃長町六丁目より勝曼坂の上毘沙門堂へ渡御翌十六日還御は無言祭りにて道樂あり當所九丁目迄人家軒を並べ大半旅籠屋數百軒と成たりしが延寶七年上木難波鶴といふ小册に

八軒屋はたごや十一軒長町はたごや十軒

とあり百四十餘年の昔を思へば今の繁昌を知るべし此邊より住吉へ參詣の街道は豐臣家の御時泉州堺より大阪へ通ふ便りよき爲其頃造りし新道也依之大阪にては長町より北をさして堺筋といへり古道は今の安部野道往古の街道にして太平記に楠正成京勢を支

し時其身は天王寺の半途に在て味方の兩陣へ軍使を遣はし櫛のはを引が如し一日に馬を十二疋乘かへしなど記せしも今の安部野街道なるべし安居天神の祠は菅公筑紫へ下向の時こゝにしばらく休足ありて船帆の風を待給ひし地也といひ傳ふもさも有ぬべし新古今和歌集詞書に天王寺の西門より船にのりて西の國へ下るとあれば大江の岸につゞきて船著なることと明らか也一本證とすべきものにはあらねど松の落葉六の卷

石川五右衛門　松本治太夫

うき世のせわに申なるひんのぬすみに戀のうた今石川が身の上にて思ひしられてはづかしやせひにをよばず五右衛門も女房にはふかくかくし内よりはかごのかせぎにうちみせて彌之助かたらひたゞ二人ほうひげ作りさまをかへ大小をぼつかふで長刀さげてあけくれとあべのゝつゝみでおいはぎして往來の者どもをきり取はぎとりあはるゝゆへそれより下道につけかはりさかひすみよしてんが茶屋大阪迄の道の用心よろしく成次第にあべのはさみしくなる下略

穢多ヶ崎

往古の穢多ヶ崎といふは今の川口船番所安治川橋の邊なりとも又は島の内三津寺觀音の邊ともいふ慶長十九年寅十一月十九日未明蜂須賀阿波守穢多ヶ崎大阪の砦を破るよし冬夏攝戰記に見えたり寛文延寶の頃までは下難波領今の幸町の邊に穢多村あり太左衛門西は戎になんば橋さて其すゑほえつた村也大阪市中家並追々に建續きしゆへ穢多村を今の地に轉ず然れども今に難波領の内に穢多屋敷と呼なす所こゝかしこにありて明地とす元祿十一年堀江古川富島に人家建つ同時に道頓堀湊町世俗にかりといふの西に幸町二丁目より五丁目迄人家と成扨又堀江に玉造橋の名あり北堀江南堀江の地東は西横堀南は道頓堀西は下博勞の東側北は長堀川を限りて往古は四方の川岸に片原町有て堀江川もなく内は難波領の野畑也此内新玉造橋より西は玉造より引地にて總名を新玉造といふ下博勞の地也元祿十一年右の野畑を不殘新地に被仰附中央に川筋を堀て堀江川と名附け南北に分つて南堀江北堀江といふ古來上難波下難波といふは此地の事也是より元祿以前の古地と新地と入交りたり

安永八年亥の七月二十九日より幸町一丁目にて大角力ありし也勸進元御所櫻長兵衞東方關脇谷風梶之助小野川も方屋にて中の四大阪小野川喜三郎とあり相撲の一件委しくは末卷難波新地の條に記す

楊柳堤

難波領御藏の船入を新川と呼び此川邊を楊柳堤といへる名を知れる人稀也楊柳堤とは難波村東の口に柳の清水といふ名水あるゆへかく呼なすもの歟寛延三年午六月朔日初日豐竹座のあやつり夏楓連理枕といふ院本に道行楊柳堤と題して百間堀より難波瑞龍寺門前迄の文段に

炭屋町濱を南へ見渡せば破軍の星が劍先船もかゝる二人が難波ばし堤傳ひに行のべに四ひらの花や夏菊に露か螢かちら〳〵〳〵我なきたまの數そへて無常の煙立迷ひ心ぼそげな犬のこゑ身にも淸水か柳さへ爰で死とや松の露木影にしばしたどり行

瑞龍禪寺

教訓しのぶ草に云

難波村慈雲山瑞龍禪寺の其むかしは鐵眼といへる僧一人草庵を結び座禪怠らずおはしけるに一夜いとうつくしき女年の頃二十歳計りなるが門を叩きて涙と共に申けるは大阪に何某といへる人の妻にて侍るが本妻の嫉妬によりて追出され親なるものの堺に侍るそのもとへ今宵泣々歸るにて侍れどさらぬだに女の夜道犬狼盜人などのおそろしく候へばわりなき事ながら一夜を明させ給はれかしとしみ〴〵と哀にも賴みける鐵眼和尙つく〴〵と見給ひて一夜を宿しまいらせんはいと安き事也さりながら夜明なば歸り給へとて夜るのものなど出して凬ばし引給ふなと懇ろに宣て和尙は學問所へ入給へば女は斜ならず悅びながらも心細く寢もやらず明しけるに夜更てしきりに艾の匂ひしければ不審しく襖の間より和尙の寢間を窺ひみれば和尙みづから男根に灸をすへ居られける扨夜もほの〴〵と明けるに和尙表を開き女を戻されけるかくありて年月を經て飛鳥川の淵瀨つねならぬ世の中かの本妻身歿りて後くだんの妾後妻にかしづきかの女も過にし和尙の事ども物語などして夫婦共に歸依しけるがはたしてかの旦那寺を建立し今に絕せぬ禪林と成れり夜道を恐るゝ女を憐みて一夜をやどし

煩惱のおこる心をいましめたるありさまいと殊勝なり

水藍干瓢

染色に用ゆる藍は阿波國より出るを最上とすといへども當國難波村又は山城國より出る水藍に一妙あり阿波の産は濃き色に用ひて可也難波村の水藍は水淺黄中淺黄空色の類ひの薄色に用ひてよしとぞ昔三津寺前より多く干瓢を出せしが後世町家建て續きしゆへ今は木津の一村里人これを作りて此地の名産とす實のりたる時に取て輪切にし皮を去て細くむきあげ箕に懸て日に干す

難波のぼうた

難波木津の兩村に婚禮の取結びをなすに表向にて結納の祝儀を調へる時は萬事の費多く身體不如意の者は跡々の差支にも相成ゆへ右體の輩に女子を持ち似合しき聟ありて此娘を所望する仲人相談に及ぶ時さあらばぼうたにせんと約する事あり吉日を撰んで其日にも成れば嫁は化粧し衣服の曠着を取出し我家に待居れば兩親は知らず顏して他へ出行其跡へ聟の方には日頃親しき朋友など五六人かたらひ駕籠を持たせ出來り何の挨拶もなく彼嫁を駕籠へ打乘せ聲々にぼうた〳〵と呼はりて聟のもとへ連歸る其餘の祝儀は他に異なる事なし按るにぼうた〳〵と罵るは奪ふたといふ略語成べし

今古参考南水漫遊初編一の卷終

今古参考南水漫遊初編

二の巻

今古參考南水漫遊初編二の巻

颯々亭南水主人著

六軒町小夜格子

島の内六軒町といふは塗師屋町也重井筒の戯文中の巻に「月ははやわたりぞめして中橋や六軒町の小夜格子」とて娼家の二階窓の竹格子をいふ寶暦の頃までは兩三軒殘り有しが今はなし此邊を六軒町といふは元文寛保の頃まで女郎屋六軒あり堺屋、桔梗風呂、重井筒屋藤十郎、美濃屋、春木屋伊右衛門、河内屋勘兵衛等也呼屋には桝屋三右衛門、駿河屋喜兵衛、橘屋嘉兵衛、京屋七兵衛、豊島屋三右衛門、大和屋次兵衛、大和屋伊兵衛、津村屋幸助、松原屋源助など釣行燈の火影に家々の繁昌を爭ふ六軒町の異名今に世俗の口碑に殘れるはおふさ徳兵衛重井筒の戯文あるゆへ也重井筒屋藤十郎方の抱女郎おふさ上町紺屋徳兵衛と高津大佛勸進所にて相對死せしは寶永元年申十二月十五日夜の事にてお初徳兵衛が梅田におゐて心中せし翌年なるゆへ道行血汐の朧染の文中にお初天神記の道行知死期の霜の文句を取れり（お初天神記は近松氏の同作也天神記は世話淨瑠璃の始にて大當りせり）

いとゞ思ひにくれたけのふしをならひし上るりもよその事よとなぐさみしが今身のうへにふる霜の一足づゝにきへうせて死に行身のあぢきなや（下略）

初巻に著す道頓堀大和橋と日本橋の間に中ばしありしはいつの頃にか絕て今の相合橋は寶永の初に懸りて中橋と名附しにや重井筒中の巻の枕に

月ははやわたりぞめして中橋や
六軒町の小夜格子

とあり其頃樽屋橋といふは酒邊町也同書に

屋根傳ひにうらへぬけ樽屋町の門へおり宗門なればにつしん樣の御門で死せて下さんせ（中略）今ぞ冥途の門出とこれをかぎりの立酒やたる屋町にぞまよひゆく

其頃は世上に相對死多かりしにや道行の文中に

つゝむたもとのひだのせうふたつつかひの手妻にもかゝるなりふりうつす共此思ひをばよもしらじこそのおしまの心中のその井筒屋にわれが今かさ

ねゐづゝとしのづかにいはれ岩井の半四郎うれい
せりふのあやめ草
猶又心中多き證は元祿十六年出板の草紙心中戀の塊
り幷名寄鹿子といふ五册ものあり
久太郎町三丁目丸屋むすめお梅年十七男は内の手代
五兵衛年二十七内藏にて新町通筋一丁目播磨屋局す
みのえ年二十七男は内本町上三町大和屋九兵衛年二十八
松本芝居のうしろにて新地新茶屋まち大滿屋お山
おはつ年二十一男は内本町橋詰平野屋手代德兵衛
年二十五曾根崎にて堀江茶屋山衆きよ年二十一男は侍杢
兵衛年三十一天王寺元尼寺にて油町茶碗屋かるもと
は木屋天神出羽手かけ者也年三十一同弟喜兵衛も相
果男は南久寶寺町枡屋權兵衛年二十二堀江御池通天
滿屋おきよ年十九男はいかり屋又兵衛年二十六天王寺庚
申堂にて堀江南濱側明石屋おつね年十九男は長堀
平野屋手代治郎兵衛年二十五生玉馬場先にて堀江御
池筋けまやきてう年二十二元は新町女郎男ははぐ
ろ町らくがん屋七郎衛門年二十六坪の内にて願敎寺
堀にてさつまや下女中居おたま年二十四男は同久三
名は七兵衛年二十九敵は同手代嘉兵衛年二十七堀江にて
茶屋扇屋抱女おきよ年十九男はむすこ清太郎前髮
年十七安堂寺町堺筋平野屋うば年三十一同立町いしや
の下男七兵衛年三十一二階男部屋にて新町通筋一丁目
廣島屋松坂首しめ心中男は瓦町せつた屋七兵衛身
なけ心中清水ぶたい下にて中の島わん屋内およし
年十九男は大工町けんかく内六尺半平年二十四北野神明
の前にて和州八木村にて百姓の子午之助年十七女は
其邊のつとめ者しのぶ年二十二女の方より仕かけ心
中

右の本文を載るもくだ〳〵しければ心中の目錄計り
出す此册子の奧書に

此外珍しき心中出來次第跡より書加え追々出し申
候方々所々に名のなき心中數多有之候へ共爰に略
す

元祿十六癸年七月吉日　萬屋彥太郎

往古はかゝる册子を出板なし戲場の院本にも其實說
を書り又一本心中大全といふものあれ共略す

小三金五郎說

元祿の頃浮名立し額の小さん金屋金五郎の實說を探
り見るに島の内に額ぶろといふ娼家なし難波雀とて

延寶年中出板の小冊に其頃市中に垢すり女有し風呂屋十四間湯屋二十二軒と記す（同時出板難波鶴にも同斷）其中に蠟燭風呂道頓堀六間町、太左衞門柳ぶろ、六間町善兵衞とありて額風呂は籠屋町治郎右衞門也延寶六年午冬出板の小冊道しるべには

風呂屋十四株内天滿八丁目大黑風呂（ゆな三人）同五丁目扇ぶろ（ゆな三人）内平野町藥師ぶろ（ゆな三人）内あんどうじ町はせぶろ（ゆな二人）太左衞門橋柳ぶろ（ゆな三人）其餘はゆな無之

かく記せ共元祿の頃には額風呂にも湯女ありて小三と呼ぶ其證とするものは元祿年間の冊子風流文車といふものに額ぶろの湯女小さんが垢する處かきたる圖ありて小さんは其頃名高き湯女と見へたり扨亦金屋金五郎といふは歌舞妓役者にて歿年は太左衞門芝居（角の芝居也）加茂川のじほ座の抱役者なるよし額の小さんは籠屋町にて時めきし湯女なりしが後に島の內綿屋といへる娼家の妓婦と成れり是等の證とする事共左に著す

松の落葉に大阪茶屋名よせ

つらいつとめが身にしみ〴〵とはやり小唄のその一ふしも聞てなり共月日をまつやがくの小さんは綿屋のつとめ戀がござればつとめのさはり（下略）

宇治加賀掾院本難波役者評判と題せし金屋金五郎を仕組し戯文に

がくの小さんは心からふろ屋のつとめ引かへて同じうき身も品かはるちや屋の山しゆのなかま入綿屋といへるおやかたのきがねもよしやかの人の爲とおもへばうらみなし

同書綿屋金五郎道行に

身はかげろふのありやなし情ひとつをわすれかねしばしあはぬもつらけれどすぎつるしゆびを思ひやりわれとひかへし心の駒いまははなれて行足のなに長町の一やどりたびやのうちも夢むすぶころしも霜月二日の夜月かげよりもしら雪のふりつむ道をたかあしだつえからかさをたゞたのめ我よにありし身なりせばかへるうき目はよもあらじまことに小さんと我中はあのほりづめのふたつゐどどちらを見ても深けれど客のさはりと親方がせいてふつ〳〵逢せねば初のほどはまちかたの客とつれだちかよひつゝおりにふれては逢しかどのちは親

かた其手もくはず今はせんかた涙の雨や風の吹よも雪ふる夜半もかぶとづきんでかほかくし逢ふ夜あはぬ夜さだめなきこよひのしゆびをいのらんと高津の宮をふし拜み千日すぢのはしのうへ角のしばゐは我すみし（戯場の通言に其座へ抱へらるゝ事を仕込といふ）ながれもきよきかも川ののじをに身をばまかせつゝやがて顔見せあるはづとかたらばさぞやよろこばんと思ふ心のそこふかきいけだやまでは北嶋屋たとへいかなるみはらやにならばそれからそれまでとおもふ思ひをするがやと千々に心もくらはしや我もし浮世をさるならば跡にのこりしかの人の姿をかへてすみぞめの尼が崎屋で身はねれ衣いろがくろけりや大黒屋じやと人が名たつりやすこしはわくやわくかわかぬか井筒屋の座敷によねをつみて湊屋いざこぎよせん戀の相場のとりやりにまけかちのない色所かりましよかろといふこゑは耳をこすりてかしましく京屋伏見屋さつま屋のかどを過こし見やりつゝ小さんが住し綿屋なるむかふの軒にたちどまりしばらく樣子をうかゞひける

當時世に流布する金屋金五郎の唱歌は此院本と國太夫ぶしの忘れ草といふものゝ文句をこゝかしこ綴り合せて作りしものか道行の奥下の卷の文段に

かくとは知らず金五郎綿屋の門に立よりて内をのぞきかうしに立せんかたなさに思ひ附坂田藤十杉山勘左扮は玉川半太夫其外の口まねし我をしらする心のうちあはれなりける戀ぢ也小さんはそれと聞よりも心にこたへうれしく氣もたましひもうか〳〵と客のきげんを窺ひ表のかうしに走り出見ればかなしや降雪の其中にしよんぼりと立に目もくれ心きえ小ごえに成て是かねさんではないかいの

「先々待てくだんせと涙を流しとめける時小さん奥へかりませふ二かいへちよつとかりませふと杉がよぶこゑ耳をつきぬけ是非も涙を袂につゝみ後にま一どちよつとござんせ語らで叶はぬ事が有

「哀れなるかな金五郎せつなき戀に身をやつしゆき霜あられ雨の夜も風もいとはず行通ふ思ひかさなるやまふのとこ今は枕もあがらねば次第〳〵に朝がほの日かげまつ間のうき命終にむなしく成ければ知るも知らぬもをしなべて扮々おしや藝ざか

りあつたらどとの南無あみだといはぬものこそなかりけれ

「袖も袂も涙のつゆ霜月二十日の朝あらし消し金屋がうき命でんくはうてうろ石の火のあだにはかなきうきよかな

絃曲の唱歌には師走二十日の曉にとあれど此院本には霜月二十日の朝嵐に消ると書り道行は霜月二日の文段にて十八日過て死たりと覺ゆ

宮古路梅園に云浮名のはやり唄がくの小三金五郎忘れ草

嵐三右衛門　座　　太夫　松本澤太夫

ワキ　松本吟太夫　　三味せん　竹澤六十郎

くるふとも思はで狂ふ姿こそ戀にやつれし金五郎は人目を忍ぶかさや町ちたびもゝたびいては又もどりつゆきつ立どまりそれとしらすることはいろをきくに小さんは心にこたへのべのかたおり立しほのさしくるあいのもつれをば餘處に見なして格子へいでゝ見ればかなしやふる雪の中にうづもる立すがた中々と小ごゑになりて一つふたつとさゝやく內に奥よりかけし人ばしごはなす詞のへんじにまぎれのちにま一度ちよとあいませうと跡に心を殘しをくなさけないぞや金五郎は軒にしよんぼりたゞひとり

と書り是等の文段合考すべし又云前文にも記すごとく額風呂は籠屋町にて小三が妓婦と成りて出たる娼家は綿屋なる事明らか也然るに釣行燈といふ唱歌の中に附合にのむさゝ風呂もついに綿屋にはりもつて又はそばからはやす額風呂のなどゝ書たり此唱歌は遙のちに中村十藏といへる俳優の事を作りしものにて其ころは額風呂笹風などいふ娼家ありしと見へたり

難波雀に笹風呂太右衛門淡路町とありし其頃は欒師風呂も內平野町にありてゆな三人あり

金五郎の道行に茶屋の名よせあり釣行燈の唱歌は中村十藏の事を作り同じ俳優家といひ趣きも彷彿たり

釣行燈　前一中調　鶴山勾當改

くわきやうが身のくづをれや口舌は宵の夢心さめてもぬけの閨の內こけつまろびつ橋柱わたる向ふにまばゆくも誰が身をえばにつり行燈かげにたゞずむなりふりをそれぞとやがて走りつきコレきざ

んさんどうぞいなきざんは十藏が初の俳名とぞ思ひすごしの一言が夫ほどお氣に入らぬかへ粋ほど愚痴に戀の山思はぬ客に思はるゝせめてお前に百分一可愛がられりや本望と人目もわかぬ恨み泣きざんも心しみ〲と緣はおかしやサイノ過し迄誰とも知らで見し人の馴ての今は二世三世親のゆるさぬ中なれど命にかけて大阪屋わしはお前のやゝ抱てよに肌ふれず伏見屋と外の勤も苦に成そめし三原屋が附合にのむさゝ風呂もついに綿屋にはりもつて餘處の噂に大津屋も花橋屋かにめでしゆかりをねたむ姫路屋の弓も引かた甲屋にあじろのはへや打むれて京屋扇屋よすがをば門に松屋とそやされて物憂ことに大村屋そばからはやす額風呂のてうしにのつて大黑屋槌や俵屋打出してこなんと夫婦といはれたらどふしたひんくをするとてもわたしが心は福島屋土佐屋さぬきの果迄情は義理の有ものを風にまかせよ柳ぶろいせや八幡の神樣を紋日〱と澤山さふにいふた報ひか儘ならぬわたしが心が竹屋なら割て見せたい男めはわけも涙にないじやくりきざんもいとゞ思ひ川せなゝですりしばしとて

爰もしるべの假枕つれてかちやうに入にけり或人大和國五條茜屋半七といふものと相對死せし三勝も大阪かごや町額風呂のかゝえにて小さんと時を同じくせしお三といへる湯女也といへるは忘說にして三勝半七の事は三の卷に記す金五郎の歿年元祿年間とは見ゆれ共いづれの年ともさだかならず三勝半七の心中は元祿八年乙亥十二月七日にて額の小三も同時とあれば金五郎の歿年も元祿八年歟金屋金五郎浮名額といふ戲文は元祿十五年豐竹座のあやつりにて勤む前文に著す宇治加賀座の難波の役者評判といづれが前後なるにや未考坂田藤十郎、杉山勘左衞門、玉川半太夫等と當時に役者にて風呂入曾我は玉川半太夫の作とも金屋金五郎作とも歌系圖に記せ共此說は信じがたし

於妻格子

六軒橋の小夜がうし玉屋町のお妻格子といふ名は今に人口に膾炙す小夜格子は前文に著す於妻格子といへるは中橋筋八幡筋より北東側にて當時榎並屋某といふ醬油屋の邊也世人の口碑に殘れる古手屋八郞兵衞が爲に害せられしお妻といひし女郞が住し處ゆへ其舊宅の格子

をかく呼なし三十年計り以前迄は存せしぞ八郎兵衛の唱歌は俳優家元祖の嵐三右衛門作なるよしさあればお妻八郎兵衛は元祿の初の事にや（元祖嵐三右衛門歿年元祿三年午十月十八日）一說享保二年の事ともいふこれを信ぜば八郎兵衛の唱歌嵐氏の作庶ならんいづれか其信僞を未考明和元年八月中の芝居にて文月恨切子といふ狂言を勤しは七月下旬坂町の妓婦わか野と呼なすもの法善寺の細間にて殺害せられしを一夜附に仕組八月一日より切狂言に出し享保二年の古外題を用ひし也

通り筋のぞめき歌ふしと唱歌は
我身なせめる心の鬼は丹波屋おつま

昔の古手
今の新物　文月恨切子

千日寺の鐘のこゑ四つと二つは
我身なさくうなぎ谷の八郎兵衛

小野屋膏藥

正德享保の頃浪華の市中にてもてはやせし小野屋かうやくといふ賣藥家は道頓堀中橋北詰三軒目にて名は作兵衛といふ享保十年巳正月二日初日豐竹座のあやつり昔米万石通西澤一風作上の卷に

小野屋かうやくと呼れて頭も六十餘りねばりづよなる堅親仁箱ふりかたげ立よれば（中略）小野屋かうやくめんやうなかうやく此膏藥の奇妙には何んでもかでも一とつけでそつぺりなをると思はんせとりわけねぶとやはれ物や打疵や切り疵ようてうやけんべきひゞやあかぎれ松の木のはだへのやうにいくつも切れても小野屋かうやくをこよりのやうにほそめてちよぎやちよんとこそぐればちごや女郎や十六七の娘ごのはだえのやうにすべりつくめんよふなかうやく

藥の功能をいひつゝ賣歩行さまを戲文に仕組又其比名高かりし放駒長吉の實父とし今世に翫ぶ雙蝶々曲輪日記の原本とす中の卷に

大寶寺町に住居して營む業は搗米屋丸屋仁左衛門と人にもしられ年は六十三年米妻は子種の不作ゆへ二人のこ米やしなふて末の飯米搾も兄の長吉外を家妹のお長十三の年より知恵のひね米屋下部ひとりを相手にて世上の花見月雪も耳のとなりの糖ばたらきふむ米よりも世わたりにかしらの髮をし

らげける
雙蝶とは此戯文にもとづき長吉の妹お長を姉のお關とし濡髪長五郎と爭論山崎與次兵衛を與五郎と轉じて藤屋吾妻の事迹など一部の戯文に取組大當せしは寛延二年七月竹本座作者は並木千柳竹田出雲にて西澤一風が萬米通より二十五年後也右雙蝶々を歌舞妓にて勤しは五年過て寶暦三酉年五月五日より角の芝居三枡大五郎座にて八幡坊迄勤めしが始めにて夫より三都におゐてあやつりよりは歌舞妓座に花がたの役者兩人ある時は二枚ものとて必ず此狂言を出して大當りなせり

仙人煙艸

寶暦明和の頃まで島の内塗師屋町に神農の像に紛ふ仙人の木像を招牌に出したる煙草屋ありたばこの看板に仙人の像とは異風なりとて世俗仙人たばこと呼びこれに隣りし路次をも仙人裏と綽號し今に中橋筋八幡筋南西側の路次を仙人うらといふ仙人煙艸は八幡筋より南へ二軒目に住し家號は若松屋文七といへり（一說平野屋茂兵衛とも）扨又玉屋町は元文の頃まで當町に玉屋次左衛門と云人あり依之玉屋町と呼ぶにや玉屋は儉約家にて居宅に專ら石を用ひしゆへ石の次左衛門と綽號すさ計り石に根繼の儉約家も絕て玉屋町の名のみを殘し不老不死の仙人たばこも竈の烟り空に消て行末しらず成にき

芥ぐゝり

六軒町の娼家河内屋勘兵衛といふは明和安永の頃風流の人也其家今樂店と成る絃曲けしぐゝりの唱歌は河勘追善の爲に出す其頃は婦女の袖口にけしぐゝりといふもの專ら流行せり

子の日せし松によりにしやどり木のとみしかつらも露にぬれ時雨の雲にあふと見し嵐の木の葉ちりづかにちりもとまらぬみつせ川なれしいとには似ざりけりなみの紋日のをとものすごさやまひこさらに空しき契りさへかはかん袖のけしぐゝりむすぶあさぢに置霜の春にあはめやのりにあはめや

歌系圖に鶴山勾當調紙屋源右衛門作とあり此作者は朝三といひて明石の人也木端の門人にて狂歌をよむ一日木端遊處に行て歌妓の三絃を聞うち朝三作のけしぐゝりの事を思ひ出し此歌を所望するとて口號みに

袖口のあかしの人のつくりたる
　けしぐゝりをばひいてたもとよ

此唱歌にかはかぬ袖と有べき手爾葉をかはかん袖と諷ふは追福の主河勘の名を書こめし也木端の門葉にて達人の聞へある朝三なれば手爾葉のけぢめはよく知れどもわざとかはかんと書たるは是等をや曲言とやいはん

袖香爐

豐賀撿校は南豐屋町に住す墓は下寺町遊行寺に有得明院前撿校了圓大居士天明五年巳十一月七日卒す行年四十三袖香爐の唱歌は此法師の追善の爲納屋町餝屋次郎兵衞作峰崎勾當の調也

春の夜のやみはあやなしそれかとよかやはかくるゝ梅の花ちれどかほりは猶のこる袂に伽羅の烟り草きつくおしめど其かひもなきたまみつもほんにまあ柳はみどりくれないの花を見捨て歸る鴈

春木屋梶女

六軒町春木屋伊右衞門といふ娼家に寶暦六年の頃にや梶と呼ぶ妓婦あり生質大膽不敵にして容儀は美ならねど三絃は法師の名家をも欺き且茶の道生花香道も熟練なし又手跡は長谷川流の能筆にて萬事人の下に出ずおのづから全盛と呼たり髪の餝り櫛笄など大金を出して求るといへども仲居花車の輩是を譽ればすぐさま其ものにあたへ客に無心をいふにも百金より以下はいひ出ずこれによつて遊客も容易には馴染に成事かたし田中卯左衞門といふ人に請出されて妾と成たれども驕りの甚しきゆへ暇を出す又京都の富家に至れども始に同じ其後東武に行て妓婦と成しに梶といへる名は彼地までも聞へある事なれば一たびは流行なしたれどもいつしか花を失ひ終身を知らねども古今希有の女也近き寛政の頃には首のぶといへる歌妓寶暦の梶女に趣き相似たり事迹は世俗よく知れる所なればこゝに略す世にもてはやすこすのとの唱歌は此のぶが自作のよし峰崎勾當の調也

萍は思案の外の誘ふ水戀が浮世か浮世が戀かちよと聞たい松の風問へど答へず山ほとゝぎす月やは物のやるせなき癪にうれしき男のちからじいと手に手をなんにもいはずふたりして釣る蚊屋の紐

奴小萬傳

島の内鰻谷に木津屋五兵衞といふ藥種屋ありしが雪

といふ一人の女兒智惠聰きうへ生質俠氣男子に勝れり二八の年齡下女下男を召連天王寺へ詣んとて下寺町より口繩坂を登りしにむかふより巾著切貳人出來りて雪女が髮の餝りを奪はんとする其手を拂ひ大の男兩人を右と左りへ投飛しすこしも騷ぐけしきもなく天王寺へ詣でける是よりして此雪女を奴々と呼びて其風聞大阪中に高かりしかばかゝる噂事を趣向の種とする事劇場のならひにして其頃の淨瑠璃作者並木丈助、淺田一鳥等速くも戲文に綴り延享五年辰正月二日初日豐竹座のあやつり容競出入湊に奴の小萬に打扮木偶はかの木津屋の娘雪女が事迹を摸したるにて夫より雪女の噂いよ／＼高くいつしか奴の小萬と呼なすやうに成たり歌舞妓にても同年七月中の芝居市川龍藏座女尺八出入湊黑船忠右衛門當世姿(イマヤウスガタ)といふ狂言に仕組しより初まる雪女はそれをよき事也と思ひとり益々俠氣出て其身を慢じ人を見る事塵芥のごとく我終身を任せん男は由井正雪の再生なしたらんより外になし我身は由井が妻女なりと罵り常に著する所黑羽二重に菊水を附たり然れ共岩木ならぬ身にしあればいつの程にか柳里恭に契りて妾と成(柳里恭は和州郡山の家士柳澤權左衛門とて世人よく知れる風流人也一説密に嵐里環の胤を孕しともいふ)此婦女平日にいふ我家系は足利家の寵臣三好修理大夫長慶が末孫なりとて遁世の後は三好正慶と號け亦或時は我元祖は關白豐臣秀次公也近日二百年忌の追福には管絃の大法事を修行せんなどゝ物狂はしく罵り歩行たり老後難波村に住て元祖より持傳へる家財調度は同村月江院へ送り身を安く暮せるうちにも生質の俠氣ありしにや一日瑞龍禪寺に大法會ありし時俄雨にて參詣人難儀に及ぶ其中には雨具の用意も傘を借る知音もなく寺の門前民家の軒にたゝずみて老たるをいたはり稚きを抱き雨を凌ぐ有樣正慶尼見るにしのびず頓に使ひを長町に走らせ傘百本餘り買取て一日も知らぬ人々に貸あたへぬ其外生涯の行狀悉く書記さんもくだ／＼し此婦女若かりし頃より和歌の道俳諧の發句をたしみ書も又拙なからず老年に及び病床に春を迎へし詠あり

此年亥極月思よし有て難波苅谷何がしの許住る所より方能往新年迎へんとす然るに廿七八(ろカ)日より病伏廿九日は大に腦亭主繁女かいほうをこそかならねどくるしさにたへがたし暮に及て夜更て丑滿の

頃にや繁女ぞうにを祝給へとさま／＼祝儀すゝめ給ど難喰時いかにと問實の後と有され共腦事甚成ば頓て身まかりもやすらん此家の思わく氣の毒ながら無是非觀念せる內鳥の音鐘ひゞくなど聞るに早としもたち行さまと成ともかく有身なれば

　鳥鐘の聲をしまぬ年の丈

明近きに冷寒共に募るくるしさを凌そのまゝに寢入もやせし歟いかゞ夢成るべし廣野に至て晴々と見渡す今迄の苦さもなくあれば扨は死けるとぞ嬉しく從是何方往べしと思ふ內幼少なるわらんべどもこえさま／＼と聞ゆるに是以何と頭上見るに東の窓より太陽赫々と指入給ふにぞいまだ死ぬと心附本意なさいはんかたなし

　未來歟と思や難波の初日影

既に齡は七十の六も重ねし老が身の又存命もゝのうきたゞ命終をのみ奉念につたなき運命宿業あしく罪淺からぬぞかなし婆婆の因緣難盡最悲しかるや

　うしや世に又存命て何かせん
　　已が身ながら我に耻かし

子正月　　行年七十六
三好氏老婆正慶慎白

これ生涯の絶筆にして幾日もあらず歿す文化元年子の春也茄屋は難波村北の口にて藥湯を業とす

今古參考南水漫遊初編二の卷終

今古参考南水漫遊初編

三の巻

俳優御輿太鼓

今古參考南水漫遊初編三の卷

颯々亭南水主人著

崎陽古風

浪華江南の娼家遊戯の風俗を著述せし月花餘情、煙華漫筆、崎陽英華、陽臺遺編、南遊記等の雜書を見るに今古のけぢめ多し浪華色八卦に云

桔梗卦

桔梗は島の内弁坂町の卦也○活氣の人多く來る○萬花麗を好む○色事時々かはりて久しからず○此處八卦の中にて盛んなる事の第一にして女郎も其うぶなるは十五六より出し浪人の娘、貧醫の妹、妣のそけしまひ、梵妻の還俗、舞子の果、京の仕替、西の落、北のなぐれ、吉となり凶と成り萬物と容るゝの卦なれば舊きを去つて新しきを要とし月に日にものかはりうつりて事を轉ずるを妙とし花やかに面白きは此所にまされるはなし女郎も其勢ひに乘て意氣強く いやみをぬけ色道の綿氣（本ノマヽ）や野郎を買ふ仲居あれば役者に賣る藝子ありて粹がる事を專とし衣裳手廻りの物ずきも人のせぬ所をあんじ閻魔大王も紋にして附たがり髮も折にはぐる〳〵卷にて黑繻子のうしのくそ若きは飴の音のやうなるもありて憎てらしい仕立色事を隱さずして張こんだ所をすれば却て評判吉にしてはやる事多くせりふもまだるい事なくさあといふと客にもはりこむ事きびしく又うつけ客のいやみあるは喰ひちらして賣り〳〵ひどいめに合せ年寄客の癖にあたなめたと思ふがさいご闇中でもどうよくに繼子あしらひ贅も相應にいひはやり言葉絶ずして其れが止めば是がはやり早う覺へるを手柄とし知らぬを文盲がり古るけれど折にはせんぼうもあがき客も三日往かぬとはやりものにおくれ遊びがとぼつく也中にもめてなる女郎は猶まけ惜み強く一度も逢はぬ客でも名の高きものには夕べも逢ふた噂何なりと仕出して歌に諷れたがり仔細らしひ事いふて見たがりわたしや此中西照庵で歌を仕たら砂原の五さいじやうさんが譽てゝ有た下著はソレ高らい橋でもない所のしつとうさんにからの唐畫かい

て貰ふ筈じやと取てもつかぬ片言さらせの多葉粉入つぶれぬやうにしんを入れながら持て居るは情なしそれをよい事と心得てにやこい客が其通にして持るゝはなを論に及ばず菅笠は初天神から著かけ何の願も祈もなさに物詣を第一としそれもあいかた同前に心得てもうこんぴら樣でもないと此比は長町裏のびしや門樣へはり込み色事も飛つくやうにするかと思へば捨る事はやくきのふの艶男はけふの坊主役者にかはり其髯者が面白かろうあの糸鬢に出かきよかと少も著する所なくして氣味のよき所也客もさまざまの風俗ある中に二十そこらの若い男くすんだ著物に色は鼠當世茶の細帶どんな小紋の短羽織鬢には油けをもたさず女郎にはどくどくしい事いふて俗のはなれ自慢いつかどの粋じやと思ふて居る客とまきびんをきへ出して光らせ裏折帶して長歌のしやくり諷ひする客とかたちはかはれど根性のいやみは少もたがはず此罪業の秤でかけて見たら色男の方が五六匁輕い事や何となひかたちはせられぬ物と見へたり女郎の手管も有ふれたるはいふに及ばず男ぶりのわるいくせに九も十も喰ぬ客には惚たといふては合點せねばお前のやうな惡人はないとたつた一言の惡といふ字に無量の意味合を持たせて嬉しがらす事也色事の中宿も盃と唱へて戀無常をこちやこちやに人くさひあたりの家居爰にても手ばりの肴強く折節は味ひ物會も興行仕三つ骨の味ひも覺へ口舌も一際新しくせりふを附て花やか也客が茶屋の門口這入ると仲居のつかみ附樣にいふてうしは又外になき勢ひや法師いづれもよろし外里の幇間はむしやうに拍子つき檀尻藝を見るごとく鳥さしも仕かねぬ勢ひこれは幇間の下品也此處は幇間の水上にして仕うちばたつかずせりふも穴なく夫々の客の氣にあてがひ森田幸助を始め平助、喜八、宗助、與八、松沾、音太夫、伊勢太夫其外數も知らず利八隱居して日養坊と成りたるも興也繁花第一の地なれば勢ひ強く二人り三人請出してもそれには曾て驚かずちやむさき身受などは却て客の名をくだし生涯の恥となる也能々愼むべし暫らくもけだいなく通ひて黄白をまき遊びの仕うちよきを以て名を上る所也茶屋も銘々伊達を專とし中にも品のよきは貝半大七

堺なつてうしのはづみたるは川作大才、又近江屋、井筒屋おとなしきは大治豐三、足代伊長吉、橘嘉天吉ていねい落つきたるは足代太、若吉、富市、綿庄は茶屋抦を作り島九竹傳賑やか也其外岩長、岩善、長喜、河庄擧るにいとまなし又坂町の路次の内によしやといふ呼屋ありて此地の暗がり所にて樣々の獸あつまる也御秡の内は取わけ芝居側住九より角ど丸迄の間俄の本舞臺にして數萬のてうちんをつらねて夜の明るを知らず此灯の影に出張してのらの面を照らすべし此卦六月は大切の月なれば晝夜わかたず心身を盡して遊ぶべし

同書に

檜扇卦

檜扇は難波新地の卦也女郎は坂町の落堀江の仕替尼出妣出新造の出る事指紙口觸れ日々數を知らず又此所に我內あつてかり店から出る粹からしまたい顏して動る娘ありよふ行といふ女郎は存の外りきみはやると流行ざるとはきつぱりと衣裳に願はれ入れ込の新造どやつき此間逢たまかない出を呼にやればけふはもふ去んだといふ出るも入るもいそがしく近頃別て繁昌の地也新造といふも大方くはせものにて誠の素人は却て素人めかず出合の女郎にも負ず粹らしひ事いひたがり味やろふとする所是本白の正銘也こゝも藝子は女郎より勢ひ勝て內證の色事もしたへばどふ成と是になづんで入來る客多し是まで島の內で鳴らす藝子此所より出たる事數多也靭猿、かたし具、かくら女、三つ四つ覺へるとはや十一二から座敷へやれば可愛がられて大ぼやしにまけずはやり扮もよい顏立じやまあ二三年したら屹度した物じやと思ふて居るうちちやんと向ひ側へ出た噂此所の福新といふ置屋必よき藝子を仕立る店也中にも年のたけたる藝子は强仕立にして著物も壁下地のあらじま裙みじかに著なし帶はかるた結び髮はひつこき地聲は少うらがれて何やらわめき〳〵座敷へ通り客を見てコリヤ珍らしい顏じやナアとなめかけなんばの鉢のみ今に忘れぬわいナどふじや河堀へお出たかとがいなる事をいふを專にして三味せんつぎ國太夫の道行よい文句ナ所を中程から諷ひ出して古けれどよいかげんに山にぞ著にけりさあこれで祝儀は納つた

その馬びしやくの酒助けふかと胸を叩いてえら呑み拳もよつぽど自慢でゆびをそらしハマリウさんかよいやなアと角力の身に成りこれを悦ぶ客は六月の土用の中でも萬歳を彈せて聞たがり肴ばしで傍に有茶碗たゝいて拍子取りしつぽりと賴みますぞとしんそこから面白がり此囃子あはれ藝子を奴といふ異名附て稱美すれば乘が來て腕まくり上げ濱芝居の物眞似客の羽織取て著て迯りがてらのぞめき幇間らしい者に行合ふて辻で新八よ阿房よと大聲上てのゝしり皆興の覺たるおかしさ也又たいこ持の中にも漸々跡の月から八百屋を止め誰やらが弟子に成て苗字を貰ひ行燈へ名を出したつた一つの帷子に五寸計りの紋とり餅ひつぱつたやうな黒縮緬の羽織を三種の神器ほど大切にして呼に遣れば少遲う來て只今向側へ往ておりましたと問はず語り島の内で勤たを官位に進んだやうに覺へしいおらしき是には却てあはれみありて能客の附物也呼屋は座敷へ鼻が出れば爺は板本に扣へ替る〳〵勤て小女童をあしらひ家並に棒かし一本づゝはきよろりと庭に植て土細工の燈籠ぶらくりきたない柱のふたにした聯も一二枚かけたり此地は島の内の料理人仲居の店出しといふ物有てそれをつたいて思ひも寄らぬ客も來り醉覺しに歩行廻つて此所へ落るもあり近比よき客の入込事おびたゞし夫かと思へば島の内の茶屋龍屋の親父曾て色事の出合にはあらずして内のあしらひのうさ晴らしに此所へ來て客と成て大判官の遊び癖に持そふな藝子をくどくやら父御の御名の通つた何澤何山などいへる法師折々客に成て意地の惡ひ無理いふて遊び我勤の骨を休める也種々のおかしみ有て勢ひ強き卦也

茶屋敷

是も右の卦に屬して女郎は一段をとりたれど段々花やかに近き頃までは呼屋龍屋もそこ〳〵に有しに次第に賑やかなるによりて其隣の京橋屋文となりの灸屋も仲間入りして軒に懸行燈をつらね千とせ屋松本屋などめかしかけて終に一とかたまりの色里と成りそれ相應に藝子幇間も涌て出て遊所の道具皆備りたり女郎は堀江の落鹽町の仕替など往來し近き南方の茬郷を引受け木津難波のおし逹入

り込つゝこんで遊びかけ間夫の立引退狀のせりふまだ日も暮切らぬ內から筑後の紋の附た手拭類かぶりにして久兵衞や七兵衞やと呼つどひ草履下駄かまびすし中にも素人藪入などいふて一段佗しき呼屋もあり婆樣どふじやといふて這入と誰でも近附の挨拶して置屋へ呼びに走る傳手(ツイデ)に肴もいふて來る女郎綿服仕出しに紫紬の帶燒桐の引ずりぐわらつかせ若きはびいどろに綿糸の入つたかんざしやうの物天窓に餝り座に著て八文粉くゆらせ手荒ふない客と見れはお前方はこんな所へほんの氣で來やなさらぬとおかしひ所でのぼしかける手管は相應に覺へたり素人といふもの折にはあり近頃けしからず色里めきて繁昌の所也

男色

男色は女の道よりも勝れていさぎよく面白さも格別に見へて唐書にも若衆遊びせし人多く史記に佞幸の傳あれば太平通載に權幸の編あり晉書に西晉の武帝咸寧太康の年より男寵の事大ひに起りて女色よりも甚し我朝の上代をいはんも古めかし御治世の後三都ともに男色昌んなる頃は若衆の色情も深く當代京の宮川町浪華江南の野良若衆がた制外子(制外子の事末巻かぶきの條に委し)を寵愛するとは大ひに異也西鶴が大鑑に云

正保慶安の頃世上鷄合はやりし時峰の小ざらしとて其頃時めきし若衆小判に似せてよき鷄を三十七羽求め庭籠に入て樂しみけるに惜からぬ人の尋給ひ添臥しける其頃は我內へ客も來りし事にて最早八つならば歸らんとあるに小ざらし別れを惜み八つにはまだ間ありといふうち三十七羽の鷄はたゝきを揃へ聲々にひゞき渡れば客は取急ぎ歸りぬ小ざらし其明けの日戀の妨なりとて金に似せし鷄をみな放ち捨させしとなん此一條にても其頃の男色思ひやるべし京大阪にて太夫子といふもの七德備はらねば其器にあらず七德とは器量、行儀、嗜み、酒合、諸藝、手迹、無欲也貞享四年京都に太夫子三十一人と大鑑に見へ太夫子なりとて總役者中を振舞弘めをなし諸役者得心の上ならでは此號を附る事相成らざるよし男色衰へし當代とても若衆子供帽子懸といへる事はむづかし或書の中に往古の若衆歌舞妓子の指紙あり(草紙の題號忘却す棠大門屋敷にや再考すべしいづれ元祿年間のものと覺たり)

一花山藤之助　年十四

色白にして目附よく〳〵嘉太夫ぶしかたり申候
一岩瀧猪三郎　年十六
踊り上手投ぶしうたひ申候風儀其まゝ女の中にや
わらかに生れ附申候
一夢川太六　年十五
酒ぶり幾人樣のお相人にも成申候文作さみせんよ
くひき申候旅子の内では衣裳あつぱれきせ申候
一松風琴之丞　年十七
影人形よく遣ひ申候此外口から水を吹出し壁に文
字を寫し申候品玉鹽の長次郎増りに候
一深草甚九郎　年十七
ものいひ此已前の鈴木平八生うつしに候何も藝な
く候床達者に候
一雪山松之助　年十九
野良也座に附たる所本子と取違候程に候
同書に
萬年町藤の棚のあたり路次の中に闇屋(くらや)ありて女郎
も上中下の品有之六分八分一匁と定め六分女郎は
本綿物を著し八分は餘程器量自慢面も服たいを著
し一匁女郎はのつしりとしてよし

一匁　熊野ごけ　本名せき
一八分　紀州ごけ　たつ
一八分　和歌の浦ごけ　げん
一八分　はしもとごけ　はな
一匁　かたきごけ　本名ゆり
一六分　やくしごけ　とら
一匁二分　京ごけ　らん
一匁　名じほごけ　るい
凡此通りは名代もの古狐のこつちやう也詰袖ふり
そでの覺
一匁　一期のらん
一八分　かうしのきは
一　としまのしげ（ふりそでにて二十四五とぞ）
一八分　なき手のはな
一六分　湊のまつ
一八分　髪切のよし
一六分　のり合のしな
一六分　たかのくら
一八分　白酒いのはる
一八年　縫入花のよし
一八分　ちよこの小ゆき
一匁二分　しさいのまと
一八分　丸太のさよ
一六分　うたゝねのろく
一八分　はげ山のさよ
一匁　かはらけのしゆん
一匁　しかけのぎん
一六分　山ごしの長
一八分　松虫のかん
一八分　雪ぬけのゆき
一八分　こんにやくのせき
一八分　一せんのけん

六分　一うつかりの　はる

難波鑑巻の一春の部に

道頓堀初芝居

初芝居といふよりも其名めづらしく心もうき立ものは道頓堀江の川波うちはやす太鼓のをと唐土はしらず日本橋のはしのうへ老若男女きせると火繩に辨當提重箱のうへに毛氈繪むしろをからみつけさせとしや遲しとはせ來る粧ひは雲のごとく霞に似たり抑役者の名は知らぬども年の内の顔みせの比よりそんじやうそれとかたりつたふるを聞よりもなつかしく鼠戸のあたりに徘徊して爰に來る人々のなりふり品かたちの異樣なる有さまを見るにわがしれる人多くこなたよりはそれと思へど予が姿を見附られじとしのぶの山の山守も人目のあみの繁きにもれ更にとがむる人もなしたゞ芝居の見もの見むよりはまされる物をと思へど物の音に心うつりはやくも内に入らんことを思ふされば樂器をとれば音をたてんことをといへるも餘所ならず内に入侍りてこゝらの人に案内してゐけるにいま

だ狂言も初まらず其中に人々とありかゝりと四方やまの間はすがたりをなしけるが側なる人のいひけるをきけば此所を道頓堀といふは人みな此地に來りて歌舞妓若衆の遊興に入事の頓きがゆへにかく名づけ侍ると也其むかし若衆かぶきのありし時は僧俗によらず貴となく賤となく價をもつて情をかけしゆへ錢あれば此市に立んこと易しと御寺法師は布施のつゝみかねをば花代とさゝげ町の一番子は親の讓りの巾着のかねごとに添寢の床の袖枕口よりかねを吸とられ或は家財をうしなひ或は所を立去りて身を亡す人多し是みな此道の長じぬる媒なれば天に口なし人をもつていはせよと誰か披露はなけれども去し承應元年初秋の比かぶき若衆の額髮をとらせことごとく野郎となし旅芝居をかける子どもまでさがし出させ給へば普天の下いづくにかゞまり住べきにあらねばおのが生緣に立かへりえもいはれぬことわざのみにて落穂ひろふありさま見るめもいと堪がたししかしより此道すこしことさめてけりしかれども芝居の事はとゞめさせ給はねば其後能狂言と品をかへ右近左近が海道

くだりを舞しより人また二人靜の舞ぶりもかくやともてはやして群集しぬと語るがうちにはじめよはじめよとの丶しれば追つけはじめぬ扨はしが丶りの方を見やれば年のよはひは二八計りの粧ひにてなよ〳〵と楊柳の春風にしたがふ風情にて出るといなや是々おでやつたあつた物ではない妙音菩薩の御來迎かと譽ればこなたにむかひ袖打か丶げて目くばせして一たび笑める顏ばせはさながら李花の一枝春雨にほころぶるかと思はる又二九ばかりにもあまりたると見へしがつゞひて出ければ洞庭の秋の月これ〳〵とほむるもおかしふゝるもよしといふことにや其外色をあらそひ品を分ちいづれもおとらぬ中に霜葉は二月の花よりもくれなゐなりといはまほしきもあれど其名をいはず凡人間百にみたず常に千年のうれひをいだく世の中に何ぞ男色にめでゝ遊興を催し侍らんやされども狂言の其品々を見るにざれめきたる事どもにておさなき事ども多しいにしへは佛神の本縁をもとりまじへうたひ舞ければ人もおもしろがりあはれがりしにいつしか今やうは昔にをとりきのふ大阪の内にありしことをけふははや取組戀慕密通せしことを狂言にして其人の名をさしてそれといひければ人また是をおもしろがりぬされば大阪のうちはいふに及ばず國々遠き縣までも聞傳へ其親に恥をあたへける事いか計りの歎ならずやかくつたなき事をよしと思ひて人の親の娘なんど引つれ來りて物見し侍ること心得られずけふは人のうへあすのわれらが身を知らでうか〳〵と役者にはかられける淺猿さよとふと思ひ出るよりいざ〳〵立んとしけるを傍なる人のまたしめよと膝を押へて尤と感じつ丶仰のごとくさにて候總じて娘なんど持たる人の心づかひあるべきは此見物也其人にはよるべけれども戀慕の手だてを見るよりも心なきも心をつけ我もまたしやせまじ忍びても見まほし情もかけてもやと色のなきもをのづから色をつくるは此見物ならんと答して立別れぬいとおかしかりけり

色駕籠

女郎の乘れるを色駕籠といへばいと艶に聞ゆ重井筒道行の文中に

おくりむかひの色駕籠もしばしとだへば何國にも

馴染〴〵の寐入ばな

此里のならひとて送迎必乘ニ駕籠ーと月花餘情にも書きひなぶりの唱歌に戀の重荷の十島の內送り迎ひに舁駕籠の云々煙華漫筆に

擔子（カゴ）

此所の名物きはめて下手也此地の遊君隣家といへども歩行をゆるさず矩規なるや窮屈なるやよつて是がもうけ也又客を送るに至りてははい〳〵の聲更て生醉の伽と成りちやうちんのぶらつき加減いさましく見所あり晝夜をわかず暑を厭はず寒天またさら也機山先生哀憐の餘りぬぎて綿入羽織をゆるす其謂にて今も冬は羽織を著てかく者多しおほけなくも寒夜の御衣ともいふべき機山が仁心也されば冬ばかり是を著す定法也又駕籠のくさりは家々の口傳あり三百度乘れば此祕訣をゆるすとなん安き程の事ならんかし

茶屋駕籠のいさましきは正月十日の戎參りと初天神也

　えびす駕十かへりもする松のうち

浪華名物富貴地座位に云

あてなる物は初天神の竹輿舁人のせわしさは橋の上にて顯はるれど蒲團の裏に朱を爭ひしやうの直ならびに遊女の贖心に天滿宮の庭さへせはしと云

公界の中の又公界ながらも

色道大鑑に色駕籠を勘當箱と書るもおかし根なし草後篇に

これ廓通ひの風流なる宿の出入に人目を忍び家業のいとまに我身を竊む或は兜籠（かご）或は船黃帝車を製すれ共四つ手の輕き案じは出ず梶原逆櫓を爭へ其猪牙の早きに心付ず末世の手まはし浮世の才覺腰のすはり櫓の手練などいづれ花街色里の景物と成たり

　格子いはひ

娼家の女郎に格子祝ひといふ事をなすは馴染の客も知るしらぬ客の呼出しもなくて淋しき夜は近邊などをちよと歩行ば必その夜に客來るとて往古の女郎はかゝる事をなしたりと見へて重井筒中の卷にお房がいふ

　あんまり餘處が賑やかさに格子祝ひに出ました

　　囃子淺物

浪華の諸社水無月の神事に氏地の色里より邌もの或は囃子を出して祭禮の賑はひとするに坤中を最上とし崎陽これにつぎ堀江阪町北の新地には坤中崎陽の上にたゝん事難し就中江南の地は歌舞妓役者の住所ゆへ妓婦歌妓の化粧もおのづから妙手に至り殊更邌もの囃子などを催す時は劇場の藿ちからを添て日頃の艶色に百倍の美を顕はし衣裳の物數寄は年々歲々打扮の趣向新なりといへども往古は麁なるもの也こゝに

未の年
嶋の内ねりもの番組

足曳の兼題

ふたご山　宇治ふろ百
音づれ山　ふし武たみ
かゞみ山　岸本やまつ
戸隱山　南　岸本やみち
たかい山　同　岸本やいと
鎌倉山　よし田やなる

茶うす山　京井筒や小まん
あたご山　さくらや小いと
かうり山　千とせぶろ小蝶
こいの山　桔梗ぶろ小たき
伯母捨山　天滿や梅
さなだ山　天滿やもん
龍田山　ぬしや小春
三輪山　大黒ぶろ岩
石山　京扇やとよ
熊の山　京扇やいと
甲山　大平とさ
まつ山　もりたやとわ
三かさ山　わた治ひな
春日山　北わたや長
待かね山　北わたやまんよ
おとこ山　大長龜
大内山　やわたやたつ
八わた山　柏ぶろにし
箱根山　大九ひな
ひえの山　大伊だい

すゞか山　さつまややひな
はやし
よしの山
太皷　さか喜亀
もり新ちか
もり新なか
かね　春田や万
京市こと
さつ喜市
三絃　さくらやいわ
もり田やかめ
藥師ぶろひな
京扇や金
笛　三人
見送りやまざくら
千秋万歳樂

圖するは寳暦元未の年の島の内邌ものゝ番組にして半切一ひらの摺紙也この邌物の内第十一に出る伯母捨山に打扮天滿屋梅といへる妓婦此時の噂にせんとて價五兩にて鼈甲の櫛を求め髮の餝りとして出ければ外の邌子の粧ひは花のかたはらの深山木とけをされ諸人の目を驚かしけるにや其頃の流行歌に

梅は北野の天神さまの御神木見事に咲たとさ

と諷ひしは此天滿屋梅が端手なる櫛をさしたるを彼が名によせて梅の花の咲たといひなせし也寳暦末の年はわづかに七十年を過ずといへ共其頃の髮の餝り此歌にても思ひやるべし衣裳の物數寄とても大抵これに准ずと老婆の物語也（近頃此唄歌に替りた數種の作りて又もや流行せし事あり）

一年邌ものゝ見送りを神馬に製し土神三津八幡宮へ奉納せし事有しが例と成て近世島の内邌ものゝ見送りは八幡の神馬と定まれり前に圖する寳暦の頃までは其趣向にもとづきけるにや足曳の篭題ゆへ山櫻の見送りとす寳暦九年卯六月三津八幡宮の神事に道頓堀役者中より御輿太皷を出せし事あり

中山文七　中山來助　三枡大五郎
市野川彦四郎　松山三十郎　染川此兵衛

藤川半三郎	坂東岩五郎	三桝貫藏
小川吉太郎	市川桝藏	嵐吉三郎

其外中通り表方若き者等數多出る夜分は灯燈に火を點じて近邊所々を昇廻る依之茶屋方には見物夥し老分の役者は世話方にて附添其荒增

中山新九郎	櫻山四郎三郎	竹中兵吉
坂東國五郎	山下又太郎	

神輿太鼓の跡より若女形の囃子あり

中村富十郎	嵐雛助	山下金作
嵐松之烝	山下宇源太	

各紫絹に白揚げにし八橋杜若總模樣の彩帶は緋天鵞絨にて有しとぞ

俄の辨

俄といふもの三都に限らず都て渡御のあとさき神輿の通り筋山鉾或は邌もの荷ひもの地車等の通る事古代よりもありて今も尾州津島祭、紀州和歌祭などにも其古例おびたゞしく美麗を盡せり其間々に笑ひと名附て老たる身に前髪かづらを著て子供遊びの體をなして通り又は女かづらなど著てさがなき妬みの體など或は手習ひ子の姿にて師に折檻にあひて迯行風情是等の類ひを都鄙共に今も昔もかはらず俄といひ今見る時は古雅なりとて賞翫なし明和安永の頃まではいまだ一度〳〵思ひ出した俄じや思ひ出した〳〵といひ〳〵歩行し也享保の頃住吉祭の參詣群をなせるうち其歸るさ飲盡したる酒樽をみやげの竹馬にくゝり附て灯籠のごとくなし銘々持添て高く指上げてうさや〳〵千歳樂萬歳らくなどゝいひて通りたる醉すがたのおかしくも又めづらしくも思ひしにや同じ道なる人々是に付て俱に踊りし事となん其人歸りしより存の外人のおかしがりたるを自身も悅び翌年ははや鬼おふくの面などを袂にして行て歸るさを樂しみ〳〵たるがいつとなく趣向をなすやうに成りて今のすがたと成ぬ京都は元文年中より始り其頃より譬などを專らとして或はかたちも作らずやはり住吉參りの歸るさの姿にて俄じや思ひ出したとて通るを所望せんとて袖に縋れば扨去年も此歸るさは別しても無い事ながら思ひ附てお目に懸ましたが當年はとんと智恵が出ませぬゆへ無念ながらもとらへられた所で一度〳〵かやうにお斷りを申上ます其かはりにはよく〳〵顏を見知り置れ被下ませい來年は乾度思ひ

附て笑はせますぞとこんな事いふて行過ると其跡より鬼の面を被て大手をひろげてハヽヽヽと大笑ひして行してい是等は餘程の奇妙なる趣向也とてどよみたる事也又其比より狂言の聲色を失はずして太郎冠者あるかやいといふ出端にて色々のはねを付て笑ひを取し處に竹田の芝居おどけ狂言に猿が島の敵討をして大に當りし時其助太刀の銘々罷出たる某は鉄みでござる罷出たる者は臼でござるなどヽいひしをかたどりて罷出たる某はの俄始れり其後罷出たる某はと計りも淋しくや思ひけんいつとなく耳のあたりよりむく／＼と雲の峯の昇るやうなる身ぶりとは成れり又それより遙のちにこりやなんじやと問ふてはねをとるの一ト風あり是はかの太郎冠者の俄の氣短に成たるより出たる也たとへば四五人同じ色なるものを著て立並び居る一人かるさんはいたる勇小手を持て彼立ならびし脊中の所を蹴ぬる體にて其味ひしばらくありて並び居るもの一時に尻をまくるとこりや何じや腰張じやと是等は延享の比よりの例となるまた寛延の比外科膏藥箱の心にて五色に染たる頭巾をすつぽりと著て五人並び居る病人來りて療治を乞ふにかの頭巾の垂を上げへらにて鼻を撫で膏藥延すにかの膏藥鼻を撫られクッサメといひければ醫者南無三風引たといひし俄は歌舞妓狂言作者の名人並木正三の思ひ附にて非情のものにものをいはせし始めとぞ又前々より一人歩行俄あり或は奴の形にて上下著たる人形をつかひつヽ供なしたる風情にて折節ネイ／＼と答へる體にて通る計りあり是は凡京都に多くして寛保の比此類流行せし是等は八十年餘り以前の古風の俄也其比は六月十三日十四日十五日難波祭りの宵宮より八幡祭へかけて芝居側住九より角丸芝居までの間を俄の本舞臺として流し俄を初め口合俄あぶら俄なえこ俄出たらめ俄物眞似俄拍子違ひの俄など其風儀さま／＼又配りものとて俄の趣向を配りあるくたとへば狐釣りの罠を持て狐を釣ふと思ふなどヽて罠を置て行と何ぞ出るで有ふと思はせ實は見物を釣ふといふが趣向にて一軒／＼かくのことし又花火線香などを發句書たる紙に包みて配り通る計りを趣向とするもあり夫より今古俄の變風委しくは古今俄選を見るべく猶近世の俄は目前に見て知るべし

古今参考南水漫遊初編三の巻終

今古参考南水漫遊初編

四の巻

今古參考南水漫遊初編四の卷

颯々亭南水主人著

三勝半七墓

大和國宇智郡五條赤根屋半七大阪におゐて心中の節撿使の趣正德三巳年辻彌五左衛門樣控帳に有之候を寫取置候也（原本長文なりといへども實說なるゆへ本の云々に著す）彌五左衛門樣大阪へ御出被成候節攝州西成郡下難波村御代官所也

右の節撿使役人御同人樣御手代

關戸條左衛門
渡邊爲右衛門

覺

一攝州西成郡下難波村領墓所南側石垣の根畑にて年頃三十四五の男年頃二十四五計の女咽を切二人共相果居申候

一男の疵咽二寸計腹はその上一寸計突疵に相見え申候

一女咽四寸計突疵くり候に相見え申候

一男の衣類

一郡内島南面綿入　一つ　一つむぎ茶帶　一筋

一羽二重下帶　一筋　一かはたひ　一足

一じゆず　一連但し手にかけ罷在候

一脇　差拵燒付金具長二尺一寸糸づか　一腰

一小刀　但し脇差のさやに御座候銅づか　一本

一女の衣類

一日野すゝ竹小紋わた入　一つ
但し日野茶裏

一郡内縞綿入　一つ
但し同嶋紫色裏

一京洛冬帶　一筋

一日野ゆく　一つ

一もめん足袋　一足

一ちりめんふくさ　一つ
但しもみうら

右の通男女著し居申候

一封し狀上書（三勝はゝみのや平左衛門樣）　半七一通

一木綿茶色布子　但し是は二人の者下に敷居申候

右の通吟味仕候所相違無御座候以上

元祿八年亥十二月七日

下難波村庄屋
　甚左衛門印
同村年寄
　源左衛門印
同　七兵衛印
同　九郎兵衛印

辻彌五左衛門　御內
　關戸條左衛門殿
　渡邊爲右衛門殿

口上

一攝州西成郡下難波村領墓所石垣の根畑にて年比三十四五計の男年比二十四五計の女胴を切結果居申候處墓所ひじり幷乞食垣外の者難波村庄屋方へ申來候に付早速右の通御注進申上候處關戸條左衛門殿渡邊爲右衛門御出死骸衣類等御改の上當村中幷に近所の者何の覺もあやしき事も無之哉と御吟味被成候へ共右の義に附少しもあやしき儀無御座候

一右二人の者死骸番人附置候處上本町八丁目庄屋安右衛門三丁目大和屋八郎右衛門見申候て右の女は長町四丁目みのや平左衛門娘にて御座候由申候

右の外別條も無御座候に附彌死骸番人附置申候御撿使相濟候上者右死骸大切に仕置候て御下知次第可仕候爲其口上書指上申候以上

　年月宛名庄屋年寄の名前同斷

指上申口上書

一下難波村領墓所石垣の根畑の內に拙者女房の妹幷男自害仕候の由風聞承り候に附早速罷越見申候處拙者女房の妹さんと申女に紛れ無御座候尤男は存不申候女の親は長町四丁目美濃屋平左衛門と申候平左衛門儀は御番所へ罷出候右女相果候樣子は曾て不奉存候

右の通御尋被成候に附申上候趣相違無御座候以上

元祿八亥年十二月七日

　上本町八丁目札之辻町
　　安右衛門印

差上申口上書

一下難波村領墓所石垣の根畑の内に拙者娘并に男相果罷在候由承り候に附御番所へ御斷申上則死骸見屆け申候處拙者娘さんに紛れ無御座候男女相對にて右の仕合に御座候へば何の申分無御座候間右女の死骸申請度奉存候以上

元祿八亥年十二月七日

長町四丁目荒物屋市兵衛かしや

美濃屋半左衛門印

口上

一私方常々宿仕候に附參候處大和國五條赤根屋半七と申もの當月五日に參罷在候處昨晩町へ罷出候由にて私方罷出申候然處今朝下難波村領に相果罷在候由の趣死骸見屆申候處女と相對にて相果候體に相見え申候右相果候儀私申分少も無御座候宿に書置一通御座候故大阪御番所へ御斷申上候處則右書置大和へ遣し候樣被仰附候故差越申候相果候樣子は曾て不奉存候拙者宿仕候儀に御座候間半七死骸受取申度奉存候以上

元祿八亥年十二月七日

大阪長町一丁目近江屋庄右衛門

かしや

中村屋安右衛門印

右の書狀五通并半七書狀一通御番所へ渡邊爲右衛門關戶條左衛門持參にて玄番頭殿へ申達候處則鶴見與五兵衛を以て被仰渡候は被入御念見分御申附候書御見せ候此方よりも見分役人遣候處相違の儀も無之右の譯にて候へば下難波村の者共にも仔細無之候女は長町の者男は大和の者に候へ共長町宿仕候者の儀に候へば男女共町人方へ爲受取候て下難波村の百姓に相渡し候樣御申候樣にと玄番頭殿被仰渡候に附庄屋甚左衛門年寄共に右の通申渡右口書五通御返し半七書置はさん親方へ直に御渡し候由尤男女死骸相渡候はゞ先より受取手形取の注進申來候樣にと申渡也

亥十二月七日

尙々御袋樣にはいつぞやくれ／＼申置候事も皆いつはりと成り今更に恥し／＼候へどもしかし過去のごうなりと思召し御あきらめ

たのみぞんし候事以上

今度三勝私かく相果候事嘸々にくしと思召候事はんなれども互に捨がたき一命にかけかく成行候事くどく具にかゝず候へども戀のせつなる事御推量可被下候各樣にも身上の大事成娘我身もしとりのはゝと申ことはしんしよの事もわきまへず人口にかゝる死をとげ申候めい〳〵うは氣なりとはおぼしめし被下まじく候とにも角にも筆にはいはせがたく候まゝなからん跡ふびんと思召ようしくたのみぞんじ候次第に跡にてしれ申候間筆をとめ申候以上

十二月　　　　　　　　勝　邊　半　七

三勝どの

御袋さま

平左衛門樣

右書置封のまゝ御番所へ差上候處御番所より三かつ親方へ直に被遣候由親方に有之を寫し候寫し

覺

一和州赤根屋半七死骸

一半七衣類道具

一長町四丁目美濃屋平左衛門娘さん死骸

一さん衣類同斷

右の外に封狀一通上書

三かつはゝさま
みのや平左衛門樣　　半七

右の通御番所にて我々共へ請取申樣にと被仰附候に附右書附の通我々共方へ慥に請取申候爲其如此候以上

元祿八年亥十二月七日

長町四丁目みのや

さん親　平　左　衛　門印

平左衛門家主

市　　兵　　衛印

家主市兵衛五人組

かきや　市　左　衛　門印

長町一丁目近江屋庄右衛門

かしや

中村屋安右衛門印

半七宿安右衛門家主

近江屋庄右衛門印

庄右衛門五人組
かめ屋藤兵衛印

御番所様

三勝養父平左衛門へ書置の寫し

かやうに成行候事にはならじと思召候悔みの程もかなしく又御身の御行衛いまだおさなきおつうの事一かたならぬ思ひ有身としてかやうのふるまひ親兄弟世間の取沙汰其方様御うらみの程も御尤有べく候得どもいかなる過去のいんぐわ悪縁かは半七どの一入私たいせつに何とぞ御身様手前事宜しくはからひ一生添たきよし内々被申候へ共とやかく相談いたし何とぞ當年の内にもかたづき申候にと存じ候へども半七母様成ほど合點に候へどもあの方の一門衆よりかうした事と知らず是非〳〵急に半七殿に女房もたせい持ずは勘當せんと一門みな〳〵申さるよしたとへ親のめいに背きても大阪へ參り其方様と相談いたし可申と此八月より談合にて候へ其左様に成り暮せばと

て又いかやうの事有て御氣に背き候事一方ならず左様の時ぞ世間からもあれみよ夫にほだされ又實の親兄弟有ゆへ平左衛門様に不孝なるはと我身をよき事とは申まじ殊に未おさなきおつゑ事生れ出るより他人の手にかけ親とも子ともしらせず又もや他人の手に渡し不便の有様見るならば生かひあらじと存じ兎角死ぬる儀ならばあいさつ切て下されと急て申候得共半七事はとかく縁を切ならば我等男立まじ出家に成候左なくばひとり自害せんと御申被成候故いかに私思ひの有身と云ながら左様にせつなる心ていをむげになさば後の世迄も義理しらずといはれん事もはづかしく殊に我ゆへ一門中の命に背き男を立させずしては我身世に住かひあらじなまじひ此身有ゆへと存じ箇様に思ひ立候事は八月よりの談合にていつぞや半七和歌山より池田へ御遣ひ候事箇様の事に附ての折からは其方様へも少々の金も用意して池田迄よびに參り候へ共また高田へも參りそれも不叶只今迄相のびさりとは箇様

になり果候事も其方様母様へたいしても不孝なる事又おさなきおつま事行末こしかたいかならんと思へばよみぢのさはりと成候へども孝を立れば義理立ず義理を立れば道にはづれとやせん角と存じ参らせ候へどもよく／＼思へばたとへ世にながらへ有とてもおつともつ事もなるまじく候我身ながらへある故に人の恨みも有と思ひ所詮しがいなり共と思ひ候得どもとてもはつべき命なら半七殿諸共に行べきと存候へば未來の程も思はれ候へどもこれみな過去の因果とあきらめ我身なき跡にてまさかの時とても頼すくなく御身の上嘸やたよりなくおぼしめし候はんと是のみ又二つには西も東もわきまへぬおつま事もよしなきものゝたい内、生れきていかなるうきめにあひ申さんとくさかげまで不便に存候これみな前の生のかたきどしにて有やらんと御あきらめ可被下候扨御身様事もまさの助をたよりとなされ何とぞ／＼御身立やうに只今の御心をひるがへし被成何とぞ人にあざけられぬやう

に御身たて頼上候又おつま事とても他人の手にかけるより母様と御そうだん被成姉様かたへ御あづけ候様に態々願上まゐらせ候かやうに成行候事は露ほどもいとひなく候へ共跡の事ばかりあんじ候へば只よみぢのさはりと成まゐらせ候扨まさの助へ申候何事も過去のえんと思ひとゝ様へ能々孝行にし給へわれなく成ては其方より誰有て親様といたはるものもあらざれば随分／＼おや様御事頼置まゐらせ候何事も／＼御ゆるし可被下候おつま事よく／＼頼上まゐらせ候扨あさましやせめてかやうに成とても御身様見ぐるしからぬやうにしておつま事もおとなしう成候をも見てしなば箇程までは有まじき物をと存候へ共よしなき色に取むすむるかひなく何事もじせつと思ひまゐらせ候私事は何とぞ命惜くぞんじいろ／＼留て見候へ共半七どのせひにと申され候へば義理にせまりて命を捨まゐらせ候無間ならくへしづむ法もあれ御身の行末みらい迄も御いとをしく是のみよ

みぢのさはりと成〳〵八郎右衛門様とも御相談成され御身の行衛さりとは〳〵頼上〳〵一かたならず思ひ有身が色にまよひかやうのふるまひ淺ましやと思召の程も御はづかしく候へども義理といひ情といひしなねばならぬ義理とせまりかやうに成行〳〵何事も〳〵過去の因果と御あきらめ被成御うらみをはらし頼上候書たき事つきなく候へ共胸ふさがり筆も手もなへ候て殊にしのびて書候へば定てわけも見え申まじく候あら〳〵書置のしるしばかりかへす〴〵御身の事おさなきものを御見そだて頼上〳〵あら名殘おしや〳〵思へば〳〵をしき筆をとめ〳〵南無あみだ佛〳〵〳〵

元祿八年極月　日

いつかまたきて見る事もかたからめ

今をかぎりと思ひとゞめん

大阪宿所中村屋安右衛門方より五條半七母へ送り來り候半七書置の寫し

誠や過去のごうのがれがたき此身とて箇樣に人目はづかしき死をとげ〳〵いまははや申上候事も不孝のうへの不孝ながらしかし親子のちぎりを受かなしさのまゝ書送り〳〵まへかた書しんじ候通りおやなり子じやと思ひなされては御身の置所もなくかなしき口をしく思召なされ候はん間たゞ〳〵しゆらのけんぞく子と成り來りかやうのうき事見するとおぼしめし切てとかく五郎八其外妹衣とをちからとなされ候て世渡りのいとなみ頼上候一旦私も身體はてまして所へかほだし候も氣のどく千萬にぞんじ候てかくなりはて〳〵何分〳〵萬助樣へ申上候間御きゝ可被下候くどくはわざと不申上候間にくしと思召被下まじく候

極月　半七

母さま

もとへ

尙々ずいぶん小長どのおさがどのおよねどの

五郎八殿母樣事よく／＼賴申候我等くわこの
ごう何のいんぐわとかくなりはて申候まゝよ
く／＼母樣御いたはり賴上ぞんじ候

亦もや申上候事も大きなる馬鹿とは氣ものと
思召入候程もはづかしく候へども戀も無常も
知人ぞしる貴公樣より外に又と申さんかたも
なく／＼賴みまいらせ誠やきらん十七とう樂師
とて天下に名をはつしはくがくの人さへ色の
もだしがたきはせんなく候私事もかくならん
とは露計りぞんじよらざる人口にかゝる死を
とげ申候事は先書に賴まし送り候通身請さの
どくの身となり候故かねて御噂申候女房さん
これさいはひと緣をも切候てしんみ心やすく
住候て江戸などへも參候はんと存大阪へ越候
てくれぐ＼我身の噂語り候て最早とまでの
いとまごひのよし語りきかせ候へばさりと
は／＼思ひよらざる事に申引にひかれぬ戀路
に命捨候いければもとより大切なりし妹脊の
けいやく＼も御座候により是非なくかゝる死を

とげまいらせ貴公樣などにも夫程の事なりせば
と思召被下候はんされどももと此女房つれま
しては親一門中にもきらはれ候はん事又しん
しよもおとろへ候へばおもふかひもなく成ま
しおさん事も此たびわたくしゝんだいおとろ
へ候事皆々わが身ゆへと金もとにもおぼしめ
し候はん然ばとかくなくしてむじつの恨みを
うけながら年來の思ひ立も叶はぬ事はいな
く／＼人口にかゝるうき身と罷成候くどく書
しるし申には及ばず互にせつなる一命はたし
候事思ひわけられ不便と思召可被下候わがみ
かゝ成果候事慈母兄弟共なげき候はん間ふつ
とあきらめ申樣に被成候てしんしよの儀は前
かた申上候通に御座候とにつけかくにつけて
も是迄のよしみとおぼしめし被下候て成はて
候跡の事偏によき樣に賴上まいらせ私もしんし
よしはたし候て我所にて曉さし出し候事近頃
はづかしく何事も／＼戀とひんとの二つから
かく淺ましく死をとげまいらせ併かばねは野外
にさらし名は五畿内のうはきものと呼るゝ共

心はあしの都に至らんとやいばにかゝりながらもまさかのりんじう正念成佛あびらうんけん〳〵と涙ながら書のこしり〳〵
慈母方はくどくはつたへず候間くれ〴〵是迄の御よしみとはゝ樣兄弟共事偏に賴上候いかにとゝふ人樣には心ざしのせつなる事かたらせ給へ候て一遍の御念佛もと御申可被下候一門中傍輩中へはわざと控へ申候申上度事つきあえず候へ共胸せかれ候からあら〳〵
　如此御座候以上
極月六日
　　勝　邊　半　七
甲屋隱居さま
尙々御內室樣へもあはれはかなく成まし候と賴上り〳〵くれ〴〵はゝ樣兄弟共事賴上り〳〵書たき事千日にもつきなく候へども思へば〳〵むかしゝのばれ涙に目も見えず候からあら〳〵申り〳〵かはらやふくの人々へも乍慮外よく〳〵たのみ上り〳〵

三勝半七がうへに附言の說多し小子が渉獵せし書の眞僞を考へ其實說を附錄すといへども前文にて事足りぬべし

松の落葉に云
　三勝心中　蔦山四郎兵衛作
いざや最期を急がふといふて火屋の東のさいたら畑露かしぐれか身をしる雨か(中略)晴過しいのとし霜月七日霜と消行夜明の烏かはい〳〵と啼こゑによいの口舌もみなあだしのゝ露も此身も同じゆめ
　千日の火屋の東をサイタラ畑といへる異名古くいひ傳ゆる事と見えたり

浪華靑樓志に云
三勝の唱歌は元祿の頃ひやうだん町住吉屋某踊りの音頭に作りしがよき歌なりとて其頃某撿校手を附て艶歌とは成しぬ(唱歌は糸のしらべによしの山さらへ端其外絃曲の書に出て世人よく知るゆへこゝに略す)廓后前の廣橋勾當妙音によつて上品に成り世に廣橋の三勝と賞翫なし近代の玉閫その抄を傳えていよゝ彈はやらす

近世東武曲亭馬琴の紀行簑笠雨談に云
みの屋三勝が墓は大阪難波新地法善寺金毘羅堂のこなた茶店のむかひにあり世俗この寺を千日寺と

呼べり七月二十七日この地の友とゝもにこゝに遊びて三勝が古墳を見る石塔には南無阿彌陀佛の名號を彫附て外に法號なし予がかねて思ひしにたがへばこの外にも彼ものゝ墓ありやと問ふになしといふ墓のかたはらに新しき塔婆を建て寛政十三辛酉二月日(みのや三勝 茜屋半七)爲百回忌追善也と記せり今もそのゆかりの人あるにこそといへれば道しるべせし人のいへるはさにはあらずかゝる徒は俳優家より追福いとなむといふ寛政辛酉年百回忌にあたれば歿年は元祿十五年二月也石塔婆は角缺てありしれるものゝ云癆瘵を患るものこの石を末にして飲めば治すといふ又この寺の門前にある乞丐女六が墓もしかすれば酒量すゝむとて俗子往々かゝる殺風景をなすとなんこゝに疑はしきは嵐雪句集に(一名玄峰集ともいふ玄峯は嵐雪が別號なり寛延三庚午年百川旨原校訂す)

あかねやみのやと聞えたるなき名のながれとゞまるところは千日寺の露と消かへりぬ盆の頃は夜毎に群集し逆縁とぶらふ人あまた侍りけり戒名嵐雪照と石の塔婆に彫入たりあるまじきことならねどおもひがけず思ひはべりければ

夢によく似たるゆめかな墓まゐり　嵐雪

かゝれば予が見しは後に作りかへたるもの歟又別に嵐雪月照と戒名彫入たる墓あるか序あらばふたゝびたづぬべし

と書り是なんつれ〴〵草といふ八幡山に詣んとて麓の高良明神の社を拜みて歸りし類ひならん歟三勝半七の墓は千日與の火屋の前東側西向に十基計りの石塔婆南より第一にあり

南向

和州五條新町俗名 あかねや半七
元祿八歳乙亥十二月七日
大阪長町四丁目 みのや三かつ

正面西

嵐雪月照信士
一蓮月雪妙霜信女 託生

寛政辰四月再建
江戸住 五代若女形 岩井半四郎
施主 杉山勘左衛門 花井おつま
座本 岩井半四郎

此面に追善の發句あり

二ぼさつのうてなにならぶ袖の雪

死顔の猶うつくしき朝の霜

元祿の頃は岩井半四郎、嵐三右衛門南芝居を大阪名

代の座元とし其外大和屋甚兵衛、片岡仁左衛門座繁昌なす（委しくは末巻顔見世の條に記す）此岩井座にて右の心中を狂言に仕組て大當りなし三勝に打扮たる花井あづま茜屋半七を勤たる杉山𢪸左衛門など施主と成り追福の爲に營みし石碑と見えたり（此石碑の角を缺しもことはり前文に同じ）臺石は寛政八辰年四月江戸住五代目若女形岩井半四郎再建すこれは元祿年中先代の半四郎座元を勤し時に建たる石碑なれば成べし

寛政八辰年岩井半四郎江戸より上り正月十日より中の芝居中山一德座春かほみせ岩井入舛春戲場二のかはり正月二十七日より增補うす雪物語を勤む此年大阪出勤中に右石碑の臺石再建せし也

享保年間大阪の圖に千日の墓所火屋の邊に三かつ墓あり

曲亭主人は東都の旅客浪華遊覽の日嚮導せし人の不知案内ゆへ此墓を敎へざるこそ意恨なれ豐竹座にて笠屋三勝二十五年忌といへる淨瑠璃を享保元年に勤む（三勝半七歿後二十二年に成）其後中の芝居にて寛延元年十月二十日より浪華茜染五十年忌女舞劍紅葉（歿後五十四年に成）簑笠老百回忌の塔婆を見て元祿十五年二月に相對死せしと思ふは年月を記す古墳を見ざる故也しかし前文にも記す松の落葉の文中に「過しいのとし霜月七日霜と消行夜明の烏」と書たる此書に寄らば考も有べきものを戲場の追善はおくれ先だちあながち正當とも治定あらねば是を證とせば年月も齟齬すべし百回忌の正當は寛政六寅年にて寛政十三年は歿後百七年に成れり

馬琴云、大阪長町といふ處は傘張多く住り三勝が家なりしといふ傘屋長町東側中程にありみのやは藝子の店の名也故に一名を笠屋といふよしいへりこれ全く附言の說なるべし雜劇にて笠屋三勝と作りかえたるは慶長の頃女舞大頭の座元なりし笠屋三勝を擬したる也事迹合考といふものに女舞は白拍子の事也慶長の頃桐屋大藏、笠屋三勝女舞大頭の座元也云々これは平家物語盛衰記等の趣をうたひものに作り太皷にあはせてこれを舞ふ舞の打扮は天冠を戴き狩衣をつけ大口をはくこれを女舞大頭と名づくこの舞に岩戸開天地拍子羅生門などいふ傳受の舞ありしとぞ永祿の頃室町家より祿給はりたる舞女に夏といふものあり夏が事室町殿物語に見えたりこれ笠屋と名づく

圖中竹林寺の前に水茶屋七軒あり此頃いまだ自安寺妙見の境内見えず

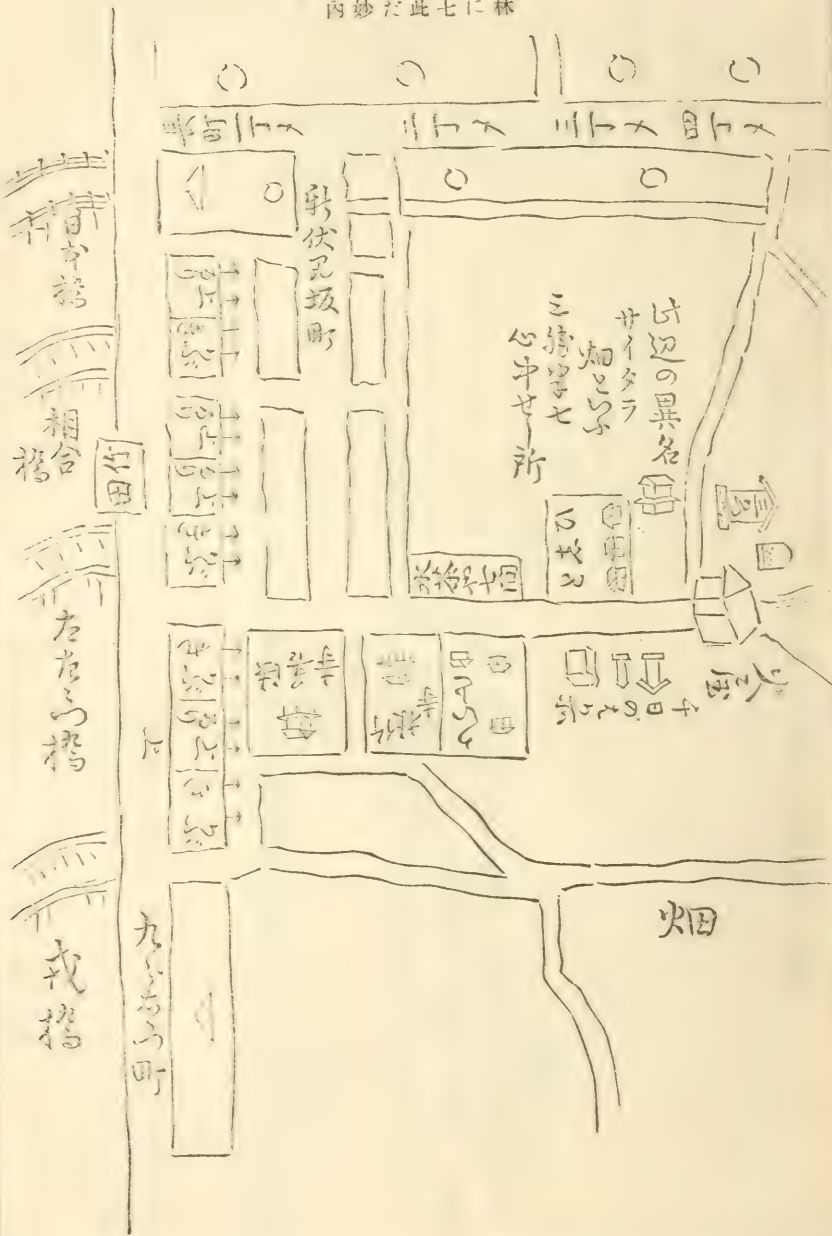
新伏見坂町

相合橋

戎橋

九郎右衛門町

此辺の異名
サイタラ畑といふ
三勝半七心中せし所

畑

るのはじめ歟その子孫に笠屋新勝同じく萬勝春勝などいふ女ありみな寛文頃までの女舞也三勝もこの門より出たる女にて由緒あるもの也かぶき狂言作者並木五瓶といふもの三勝がいたゞきし天冠をおさむるよし聞り天明四年十一月桐長桐芝居興行免許の時馬揃とやらん狂言をしたり天冠狩衣大口のいでたちにて太皷一挺にてうたひ舞へりこれいにしへ女舞の遺風なるべし三勝が寛永の頃既に老女にて京に住せしといふこの一條醒世子の說なり亦茜屋半七といふものと不義の死をなせしといふ三勝は大阪籠屋町額風呂次郎左衞門がかゝえなりし小さんと時を同くせしお三といへる湯女也といふ此說は前卷小三金五郎の條に委し然るを歌舞妓狂言にはむかしの笠屋三勝が高名をかりて笠屋にみのや對もよく其名も倶に三勝といへば狂言作者のはたらきにてかくは作りなしたるを後人笠屋三勝が家は長町の傘屋なりしなどゝいふ附言の說をなすにこそあらめ

正德三年巳十二月京大阪名代御改の節

一女舞　　大頭柏木

寛文七未年十一月四日佐渡守樣御屋敷へ罷出女舞仕度旨御願申上候處願の通御赦免被成候其後元祿十一寅年八月十三日駿河守樣御番所にて娘れんに柏木と申名代讓り申度旨御願申上候處御赦免被成候唯今れんを柏木と申候柏木をはつと名を改申候

一同　　笠屋三勝

寛文六丑年佐渡守樣御番所にて名代御赦免被成候

一同　　笠屋新勝

同斷

或人大和遊覽の序同國五條なる赤根屋半七が事迹を探らんと彼所に至る赤根屋の子孫今に相續して豆腐を商ふ其家に往古より傳へる招牌あり左に摸寫す

（招牌寫略之）

今古參考南水漫遊初編四の卷終

今古参考南水漫遊初編

五の卷

古今參考南水漫遊初編五の卷

颯々亭南水主人著

高名石碑

前卷に三勝半七が古墳を著す都て此墓の邊りには名高き力士（ズマイトリ）或は俳優家妓婦歌妓の類ひの墓多しそが中にわきて名高かりし人の墳に其事迹をもいさゝか著す竹林寺の墓所に寛延四年（寶暦と改元）辛未七月二十八日相對死せし重兵衞おりくの墳あり碑の表に釋了清俗名重兵衞釋妙清俗名おりくと彫附け年月をも記し辭世二首あり此心中七月二十八日夜の事なりしを八月一日より角の芝居中村歌右衞門座に一夜附の狂言に仕組三人組染貫摸樣の切に出す作者爲永千蝶

おりく十兵衞 雨防紅莞莚（あまやどりくれないのはなござ）

同所に俠夫朝比奈宗兵衞の墓有延享三年寅八月八日死法號釋玄俊此墓は歿後寶暦十年辰十一月うつぼより建之此宗兵衞俠氣ありし事迹を戯文に取組寶暦十年竹本座のあやつりにて極彩色娘扇に朝比奈藤兵衞と變名なし世人よく知れり宗兵衞沒後十五年目に院本の出しを見れば其比迄も宗兵衞が行狀は毎々いひ出て口碑に殘りしと見へたり法善寺境内には南無三寶正三の墳を初め（並木正三の傳は末卷かぶきの部に著す）吉田文三郎男德齋其餘數基ありかぶき役者やつし役の名人小川吉太郎の墓もあり

春月院了相日仙信士（京都一ヶ年 大阪十ヶ年 座本）

安永十丑二月十九日　行年四十五才

よはひ身も今は石なり此つよさほんにまあ〳〵是

英子塚

同所に義童勘太郎の碑あり延寶の頃船場安土町に永來彦兵衞といふ者あり其子彦太郎八歳にて死す勘太郎は幼き心にも主從の別れを悲しみ延寶五年丁巳四月二十二日十一歳にして殉死す明和六年丑四月四日に石碑を建しかど又候や昨年文政二卯閏四月四日新に小墳を營み碑の銘土州刈谷季恭識して其義死をあはれむそれには引かへ寛延二年の春の頃浮名を殘せ

しおその六三の石碑は自安寺境内西の墓あり彼が事迹は世人の翫ぶ院本八重霞浪花濱荻に仕組たり寛政九年の秋上町追手すし江戸櫻といふ鬢附屋の主人と淀川に浮名を流せし島の內歌妓京扇屋の小傳の墓も當寺にあり寛政九年八月五日不退院妙地信女俗名小でんと記す其外影繪の名人藤江大次郎の墓明和の頃評判にて名高かりし京都近江屋治郎右衛門墓もあり

明和九年壬辰九月二十日秋松院一峯信士

誰が氣にもよくもあふみやあふみやと　もてるたいこのよに鳴し人

宇賀のみたまの浪郎右衛門と呼びしにや忠臣講釋の五つ目の茶屋場に近江屋治郎右衛門の事を取組たり俳優家にては中村のじほ嵐小六の墓もあり

五人男

永祿の末千日におゐて梟木に懸りし浪華の五人男といふものもと無賴のあぶれ者也元祿十四年巳六月六日の夜大坂南久寶寺町四丁目河內屋五兵衛が雇人喜兵衛といふ者同町三木屋勘兵衛下人五郎といふ者と西横堀の濱側に納涼し家に歸らんとて北久太郎町の濱側を過ける時上難波町に住す木挽庚申の勘兵衛同町の板屋三右衛門が下人市兵衛といふもの喜兵衛五郎に喧嘩を仕かけ互につかみ合ふ所へ博勞町のあぶれもの庵の平兵衛來かゝりて懷劍を以て喜兵衛が腹を突破り立去ける是より事起りて翌年午八月二十六日さしも虎狼のごとく人もおそれたる五人男等終に法場に屍をさらせり（雁金の文七を七組の頭とす）又此外にかいたての吉右衛門喧嘩や五郎右衛門とんび勘右衛門からくり六兵衛なんどいふあぶれもの川船水手の飛乘して牢俠牢賊の惡徒なりしがこれも同時に路傍の霜と消ぬ又讃岐屋町道具屋與兵衛といふもの異名を親仁の三郎といふ元あぶれ者にあらね共彼等に脇差を貸て是をきゝせ其恩をもて群集の場所のうしろ楯とせしゆへ追放仰附らるゝ

巳六月十九日入牢二度入　奈良屋町雁金屋七兵衛後家同家悴
元祿十五年午八月二十六日　死罪獄門　雁金文七　生所大阪年二十八

巳六月二十二日入牢　立賣堀中之町今津屋七兵衛借家極印屋正三郎悴
元祿十五年八月廿六日　死罪獄門　極印ノ千右衛門　生所大阪年二十三

博勞町河內屋吉右衛門借家
同斷　庵ノ平兵衛　年三十歲

同　斷　　坂本町加島屋太兵衛借屋　雷ノ庄九郎　年三十一歲

午六月二十二日入牢二度入　宿なし　死罪獄門　ほてノ市右衛門　年二十九歲

巳十二月二十二日牢死　西横町樋屋吉右衛門借屋 中仕吉左衛門同家の弟　かいたて吉右衛門

巳十二月三日牢死　喧嘩屋五郎右衛門　年三十七歲

午八月二十日牢死　社町增田屋衛門借家 次兵衛後家悴　とんびノ勘右衛門　年二十四歲

午四月二十九日牢死　宿なし　からくり六兵衛

元祿十六年未七月八日 攝河兩國御追放　讃岐屋町播磨屋市兵衛借屋 六兵衛養子　親仁ノ與兵衛　年二十七歲

前文の通り元祿十五年午八月二十六日五人男御仕置に相成同九月九日初日にて岡本文彌座のあやつりにて雁金文七といふ外題にて出し宇治嘉太夫には難波五人男と題し竹本座にも雁金文七の淨瑠璃を出す其後寬保二年戌七月二日初日竹田出雲作にて男作五雁金といふ戲文五人男歿後四十一年目のあやつりより其名今に人口に殘れり天王寺の塔中に雁金文七が奉納せし八島合戰の繪馬ありしが享和年中伽藍回祿の時うせて今はなし浪華靑樓志に云佐渡島町備前屋某抱の女郎淸川は五人男達の魁主雁金文七より名を發す實は淸瀧といふ上品の妓也（名を作り當て芝居きやうげんに用ゆ）元祿年中の妓なりとぞ

五人斬

元文二年巳七月八日の夜曾根崎新地におゐて五人切といふ事ありし事世人よく知れり

曾根崎新地三丁目糸屋忠兵衛借屋　大和屋重兵衛　當巳四十八歲

同　女房　とめ　五十一歲

同　下女　くら　十七歲

同　きよ　十二歲

被切殺人

同町櫻風呂有馬屋喜兵衛抱　菊野　當巳二十二歲

右切殺人段々御吟味有し處薩州松平大隅守樣家來早田八右衛門成よし露顯に及び早速入牢被仰附翌年午

二月十六日千日に於て獄門に相成候捨札の寫

武家方家來 早田八右衛門

此もの儀去年七月八日の夜曾根崎新地三丁目大和屋重兵衛方にて同所櫻風呂有馬屋喜兵衛抱の髮洗女菊野切殺し剩自分の科を爲可隱十兵衛夫婦幷同人下女二人迄切殺し候段重々不屆至極に附獄門にかくるもの也

二月

泥龜屋裏

伏見阪町に泥龜屋裏とて名高き有り寬延の頃川魚を商ふ者此裏に住て日每に川魚を賣歩行一日道頓堀にて泥龜を賣ける內に數一つ不足せり彼商人疑心を生じて定めて此中の人盜み隱したる成べしと思ひ夫ぞといはぬ計りに罵りければ元來聞ぬ氣がさの土地なるゆへ皆々大きに立腹なし其邊を尋ね其更に知れず紛失の泥龜もしも逃たるならば今爰へ出よたとへいか程高直成とも我々買取て放ち助くべし疑はれし一言中々金錢に換がたしと口々にいふ時に不思議や以前の泥龜何方よりかは這出て逃る氣色もなく多勢の中に蹲り首を出して人々の顏を詠め居る風情虫魚の類すら命を惜むは生あるものゝならひにして無理ならず直段いか程なるぞと問ふに商人心裏に思ふやう此泥龜何程に高直にいふとも買取べき仕宜なるゆへ利分は爰ぞと價一貫文也といひて一錢も負ざれども何れも是非なく其直段に買取てすぐさま道頓堀へ放さん太儀ながらと彼商人に放させけるに川端へ持行亦々惡心萠し放す體になしつゝ傍に有合ふ石を川中へ投込み泥龜は己が懷に隱し歸り其餘又餘人へ五百文に賣渡し料理に懸りけるに泥龜首を出して持たる出刄庖丁に喰附をこぢ放し首打落して何の苦もなく料理なしけふは思ひも寄らぬ利分を得たりとて寢酒なんど心よく飮みて臥けるが夜半の頃頻りに苦しむ聲聞へけるゆへ隣家のもの大きに驚き戶を押破りかけ入見れば咽のあたり血に染て死し居たり早速家主へ知らせ其由訴へしかば檢使其疵口を御吟味あるに泥龜の切首商人の咽ぶえを喰傷りたる儘にして不思議に思はれけれども外に仔細も無之ゆへ死骸取片付けを仰附られ相濟ぬ誠に非道の欲に耽り忽ち泥龜の爲に一命を失ひ後世に至る迄泥龜屋裏と綽號を殘せ

り

幇間

蚕舟軒箕山が色道大鑑に云

太鼓持といふは傾城買の客に附したがふものをいふ此名目の起りは紀州の雑賀踊に始る鐘を持たるものは首にかけて踊る其中に鐘を持たぬ者に太鼓を持する也是によつて此名目とす

といへり又同書にたいこ持の異名を昔は行證人あかばおひやなど云又跡附沓持惟光ふんせき末社など丶もいひたるよししるせり惟光は光源氏の君の心しりの若ものにて源氏の君の忍びありきの供をして常に附したがひ奉りし事源氏物語に見へたり其心にて名附たる物成べしされど昔も太鼓持を惟光といふことは筑紫がたにいひ馴て上がた筋にはこれを用ひざりしといへりぶんせきは慶安のころ大阪邊にていひならはせし名目にて本客とは席をわかつといふ心にて分席といふよしかの書に見えたり

浪華青樓志に云牽頭といふものは昔は座料といふ事もなく客より鐰給はりしに近世は揃ぬによつてならぬやうに成り是非なく座切の花代を記得するやうに成て古格を失へり廓中往昔の牽頭に名高かりしは

一　九郎（花木屋喜八と云）　二　九郎（法名了喜）

此両人說經がたり也

あふむの吉兵衛　だまれの茂右衛門

すいの左四郎　宇治屋喜八

雪踏屋春日　筆屋藤兵衛

正　卜　元　方

脇師忠左衛門　柳吉兵衛

竹本頼母　筑後ふし

千　二　左馬太夫

板屋喜右衛門　同彦右衛門

あやめ八郎兵衛　筒井山城

是等物眞似に名高かりしとぞ

浪華色八卦廓中の條々陽氣一へんの判官辨慶揚屋入りの高調子ヤッアコリヤ〳〵〳〵ナントカナアと門口から鳴こめば花車仲居きよろりとした顔でていねいな挨拶此拍子には合ぬ所也それにもこりず座に著いて物眞似、身術、輕鶴と出懸れば南でするやうな事なはると仲居が興を醒す太鼓持は大かた菊太夫、須

磨太夫と正風体な名を附て座敷淨瑠璃宿替する程本を持て來て只今小栗の三の詰を語りますとていねいな挨拶して眞顔で語れば愁ひの所に成て一座の女郎仲居ほろりした顔腹をかゝへる事也同所島の内の條々外里の幇間はむしやうに拍子つき檀扉嚢を見るごとく鳥さしも仕かねぬ勢ひこれは幇間の下品也此所は幇間の上水にして仕うちばたつかずせりふに穴なく夫々の客の氣にあてがひ森田幸助を初め平助、喜六、宗助、與八、松治、晋太夫、伊勢太夫其外數も知らず利八隱居して日養坊となりたるも與なる煙華漫筆に云幇間無分別の仲人也と又幇間の名目の事舊記に見えたればしるさず畢竟茶亭かゝは肝煎にて口ぬ所をかさ高に取もつ役にて無評のものなりされど名物のひとつにて棄捨にする物にはあらず既に筒井山城數年の功莫大なりとて從五位下に叙す其外名高きも多し尤當所の規摸といふべし大やうかたち大盡に似て強欲のものよく酒をのむあり呑ぬあり俺腹なる有文才ある有おほくは一文不通にて辯舌いづれも立派なれどたゞ口とく囀りて踊りさはぎ聲色または役者のしかたをす折にふれての興筆に盡し難しわけもなきものといふ人あり機山はかならずしばらくもなくては叶はず堪忍のならぬ事も大盡がいへばよくこらへ勇氣あるに似たりといへり此徒に聲色物眞似をなす事寶暦の末明和の頃より盛んに成行京都河東には大津屋友吉此道の妙を得て明和壬辰の春初めて物眞似狂言盡鸚鵡石といふ小冊を著し近世も折々あふむ石とて役者物まね當り狂言のせりふ附を出す事あり其初めは明和七寅どし浪華江南葭雄といへるもの聲色指南歌しらべといふ小冊を著す序文に

抑役者の聲色をうつし物眞似と賞することはそのかみ神代より傳りて遠くは磯邊の鸚鵡石ちかくは犬の幸助石場宗助などその名を得し輩あり妓色のさはぎあるは月待日待の翫ぐさとなりて淨るり景ごとの長々しきより文七八藏の身ぶりものまねたゞひとくちに社中の耳をおどろかし一献をすゝむる一助と成ぬ此道もはら世におこなはるゝといへ共部屋住の小子息全盛の若ものその師を求るにたよりなくむなしく口を閉の輩少からずあはれ此道に入たらん近道もがなそのかたはしかいつけよとある人のもとめいなみがたくかけ合のせりふをい

さゝかしるしいでそれがはしにその役者のいきごとをあらましあらはし侍るといへども九つのうしのたゞ一筋のけうのこと共也見る人そのいたらざる所はゆるし給へかししかはあれどとくしよ千べん意をのづから明らかなりとかやそのせりふの文句をひたすら口ならし口中鼻のあんばい舌の置處くちびるの出入に心をつけ數遍に及ばゝをのづからその佳境に至らざらんや鶯の附子は親鳥の囀りを聞知よく啼音をうつす事感ずるにたへたり今歌しらべと賞する鳥ありそれこれをかよはして此ふみの名にかり用ひ侍るものならし

時明和七年のと、　　葭　雄

みづから題

文七 左りの肩をあげる心にておとがいを延し少し鼻へかけしりくちを早ういふ心持にて　これは又あほうめが、船の出た跡で、待て居るで有ふ。わしがいて取てくるがちか道、どりやいかうか

歌右衛門 随分〳〵きばりてたゞ口先で物を早ふいひしりくちを延す心持にて　これやい〳〵

文七　これと呼んだは何處からじや

歌右衛門　アイヤこゝからじや

文七　見りやそちは異形の出立、此あたりに年ふるうすむ。ぬしといふやうなものか

歌右衛門　アイヤそうでない、北川惣左衛門マア待ちやれ

文七　北川惣左衛門と我名を知つたは

歌右衛門　キノニノヤノハノモノ

文七　して右一色は、サなんと〳〵

歌右衛門　こウれ爰にある

文七　味方の人數はいかに

歌右衛門　およそ八千四人、此桑名の渡し守を味方につけ、いやといはゞ叡山に立籠り疫病をもつてみな殺し。則合圖の。ちやうちんこれ見られよ〳〵

此外中山一蝶、淺尾奥山の懸合、鯉長、獅々吼、関子、里虹、慶子、八市なんどの癖を記しせりふの長短開口の傳受を委しく著す、本鸚鵡石も歌しらべに同じ

嵐吉三郎　唇をそらし喉に物のつまるあんばいにてせゝらし聲はり上ケとん〳〵の拍子にて聲を出すべし

淺尾爲十郎　口をいがめ胴聲を出しうなりを付又せりふの間々に聲を張り又聲を鎮めていふ也

中村次良三　喉よりせゝりをまぜてせりふの間に顔を跡へよせるやうにする又せりふの間にサイナさふじやわいなといふ事を胴こゑとせゝりと一ッにして早口にいふ也

芳澤あやめ　隨分中なる甲聲を出し口の先にてせりふをいふウントいふせりふやサイナトいふせりふの間を息を下へ引やうにしてせりふを隨分早口にいふべし

嵐雛助　喉と鼻との間から聲を出し鼻へ息の出ぬやうにして聲を出し隨分甲と胴とをまぜて眼をつるやうにして調子あげていふべし

芳澤いろは　喉と甲と乙と一ッにまぜ餘り高からぬ調子にて鼻より息の出ぬやうにしてせりふをいふべし

尾上新七　舌を卷しなに甲聲を出し口を大がいに明きせりふの間を向ふへ付込みせりふにして一ッ〳〵せりふを切ていふべし

澤村國太郎　隨分可愛らしきと思ふ聲を出しせりふの間に嚙ちぎるやうにして又息を引やうにして又嚙ちぎるやうにして隨分口にてはつし〳〵いふべし

小川吉太郎　おとがい突出し口の先にて是はしたりといふせりふを喉と舌の先と一處にして輕う聲を出し甲と乙と一所にして聲を出すべし

藤川八藏　喉と胴と口の先きとから聲を出しせりふの間にへゝといふ笑ひをくはへ又せりふの間をかぶせていふべし

三枡大五郎　胴聲とせゝりと甲を少しまぜ首を少しぎくつかす鹽梅にてせりふの間すこし吃るやうにしていふべし

中山新九郎　喉より胴ごゑを口こゑと一處にして餘程うなりを付首振やうにしてせりふをいふせりふの間に喉に痰の出るやうにしてせりふをいふべし

坂東岩五郎　胴より聲を出しせゝりをまぜ舌を卷き突込みせりふにて左りへ口をいがめてせりふをいふべし

尾上菊五郎　喉と舌との間より聲を出し甲をまぜ

せりふの間に少しうなりを付ヶ首をふりませゝりをませてせりふをいふべし

嵐三五郎　鼻へ息を出さぬやうにして甲と乙とをませせりふの間喉へ聲のこもるやうにして口の先にていふべし

中村十藏　ひたいで人を見るやうにして甲こゑを出し眉毛を上ヶ下ヶして下唇を少し出すやうにして歯を喰しばりめにしてせりふをいふべし

山下金作　口をすぼめ随分可愛らしき甲聲を出し口の先にてせりふをいひ又せりふの間々に少し胴へ懸るやうにしてせりふをいひ又間には喰しばるやうにしてせりふをいふべし

中村富十郎　左りの鼻を押へ甲と乙との聲をはなのつまるやうにして口の先にて息を引き舌を卷鹽梅にしてせりふをいふべし

女髪結

女の髪結といふもの近世盛んに成れり其初めは明和のはじめ江南俳優家の金剛と呼なすものゝ妻が妓婦の髪を結ひしより始れり享保十二年未正月竹本座のあやつり敵打未刻の太皷下の卷に

なんぼ大阪じやといふて姫ごせの髪ゆひと男の取揚婆はござんせぬ

と書たりしに四十年も過ざるうち男の取揚婆は知らず女の髪結ひは出來ぬ明和七年寅九月豐竹座のあやつり源平鵯越四の口に

女中の髪を由井の濱お花といふて當世にもてはやされて鬧しき襷(タスキ)蔽膝(マヘダレ)かけまくもちよこ〳〵走りの向ふより亂れし鬢の後れをもつい撫附にヲヽお花様お前の内へ行ところ

此頃はいや盛んに成しと見へ安永六年の戯作浪華名物富貴地座位に富てせわしきものは虎屋の饅頭切手、竹田のからくり、女の髪結

未刻太皷といへる狂言の比までは極てなかりし物なるに今は遊所はもとより町々にも群て住町の女は遊所めきて心ときめかし或は長町どまりの旅人の珍しがりて茜裏ながらつぶり計りの土地に馴たるも鵺をや思ひ出ていとおそろしげ也

茄子田樂

何事も便利を考へ其速なる事を要とす夏日茄子田樂を焼に中古までは串一本さして焼たるゆへともすれ

ば返りて焼やうあしかりしに安永の頃より今のごとく串二本さして其利多しと古老の夜話を思ひ合せば安永三年午八月豐竹座のあやつり花襷會稽掲布染道行の文に

茄子田樂にあらねども鬢にとろりと油ぬり二本さしたる身なりしが

と書り然れば此頃の事にや夫までは鬢刷毛にて油を塗る事もなく割鋏みにつぎきれをはさみて油を塗など甚不便なる事ども也

和國辨當

往古は茶屋より芝居へ運ぶ辨當は提重亦は重箱にて有しが寶曆の頃道頓堀側に和國屋といふ方にて今のごとぎ割籠を初めしが通ひの下女も見物の男女も勝手宜しきとてこれを和國辨當と名附け安永の頃に至りては一統に此割籠を用ゆるやうに成たり

水舟

往古やつし形の開山坂田藤十郎は飯米を一粒選りにさせ大阪へ出勤の內も日々に京都加茂川の水を取り寄せて飲たり世人坂田藤十郎は高給を取るといへども身の程を知らざる榮曜者なりといひあへり藤十郎其由を聞ていふやう我全く榮曜にて飯米をえらせ加茂川の水を取寄るにあらず高給を取て出勤の身なるゆへもしも飯米の中に石ありて歯を損ずるか大阪にて飲馴ざる水にて腹痛せば芝居へ出勤相成らずさある時は銀主方へ相濟ざるゆへなりとかや實一理ある事にして往古の俳優家はかくのごとく其身を大切に養生を專一とせり近世嵐小六は平日淀川の水を汲せて飲みたり其始めは渠に乳房をあたへし乳母なる者の弟ありしが小六方に食客同前にして居る內毎日の役目として天王寺逢坂の清水を一荷づゝ汲に行たり一日小六偶々思ふやう一荷の水に逢坂までの勞をなすほど小船に竿さして淀川の水を汲なば飲水も澤なるべしとて頓て小船に水桶を乘せかの食客に日々淀川の水を汲せたりしかば近邊よりも茶の水計りは道頓堀の悪水を飲んより淀川の水を所望せんとかの水を遣ひ覺えしより島の內の大茶屋二軒三軒いひ合せて同じく小舟にて淀川の水を汲せける此はじめは漸天明の頃の事なりしが今は道頓堀はいふに及ばず諸方の濱々にも水船出來て淀川の水を汲取り剰其仲間を極め株ものゝ一つと成れり

江南通稱

島の内の異名を陽臺、南陽、江南、崎陽、南昜、南江などゝ呼び坂町道頓堀邊より指て島の内を向ひ側といひたゞ南と計り呼ぶは島の内に限りたり元伏見坂町を坂亭、バンテウ、トライチ、難波新地をナンチ在所ともいひしが今は此里大ひに繁昌なし猶近邊に髭剃ありおとがい新地といひ新祇園町などゝいふ一世界も出來ぬ島の内の娼家も往古はから風呂を焚て其功能宿酒を醒し體をゆるくす又何風呂といふ在名ばかりにて風呂を業とせぬあり日を定めていり人を招き垢掻女、茶立女といふを抱置しが今は總名伯人とのみいへり崎陽英華に云

白刄の名誠に白刄のごとしよく守ればよくうつかりとすれば其身を害するのみならず人にまで難儀を懸る事當もなき借錢をして人を倒す理り眼前なりよつてしらはの名あり鐵漿をつけざる計りを白はと心得たるは非也その名を顯にして勤るゆへ是をうつかりとする人に咎ありて白刄に咎なしたとへば人をきる刀に科はなくて人を殺せば其人の罪科のがれたき道理也隨分分限相應に道具好はして錺どめの心得肝要也又垢掻茶立皆風呂屋の下仕也いつの頃よりか混じてひとつになる今は白刄はなくてみな風呂女と見へたり歎くべし風俗少ゞゝ據どころはあれど大やう婆其見へず娘とも見へず妾共見へず格外のものにして何國を何國とも云がたし

と書たるを見れば垢掻茶立女の外に伯人と稱するもの有し歟

錢屋饅頭

道頓堀の名物錢屋饅頭を片意地形といひしは饅頭の最上高麗橋の虎屋めかさず錢屋は已が一家をなせしゆへ片意地形と呼しは安永頃の事也其頃此邊の名物には堺筋菩薩が筆樋の上昆布道頓堀燒といふ樂燒大正のうなぎ和らかみは忘れがたき風情ありて此匂ひにこたへかねる鼻いつとなく木の葉天狗の芽出しにも成なんとて夏の暮猶一と間をせきたり富てせわしきものと富貴地座位にも書り

異圖産物啓發

昇平の時にあひて江南の遊所に洒々落々の風流多く並木正三の逆さま座敷或は二階を庭に作りなし築山

泉水樹木を植させ井戸の釣瓶より山海の珍肴を汲あげし趣向もおかしく難波新地吉田屋の庭には春秋をたくみ在邊の溜池堤を商つらひ麥飯を商ふ是等も物數寄のひとつ成べし右の趣向はかぶき狂言作者奈河龜介の趣向也一年此處におゐて唐の開帳といふ事をなす

異國産物啓發趣意

抑唐の開帳と名附け御覽に入たてまつるは當吉善亭の主吉田屋卯兵衛奈河龜助の兩人厚き懇意なるが近來拂底不仕合の由來を尋るに先年中の芝居興行の續き此處に店を開き春の花盛り夏は螢の光りつよく秋も燈籠赫々として日毎夜ごとに繁昌なりしが冬枯の時なる哉重き病に臥長々心神悩亂して渡世難出來奈河共に內談の狂言底を擲いて相談の折しも去々年の火災に奈河が家屋敷燒失によつて互ひに印形押かはせし中々に段々の難澁かさなれり兩人此處にひつそくの同行と成て今更損失いはん方なくしんぶてんぶに祈誓をかけしに御贔負の老翁借金横寢の枕上に立せ給ひ庭木の櫻の厚皮を削り利銀口錢を空しくする事なかれ時に繁昌なきにしもあらずと墨ぐろに書附給ふと見て夢覺ぬ不思議なるかな其日に當て諸方の名高き雅先生より當時難澁をあはれみ給ひ異國外國の産物數品あづけてのたまはく汝等やせ顏はる事なかれ身上からの開帳を顯し御見物の他力を受なば家業繁昌御ひいきの種ならんと憐愍の御告によつて諸方の御所持御秘藏の品々或は借り受或は貰ひ預りものは半分の主と御大切の物ながら暫らく家が物にして富貴ひつてんに任せ扱こそ唐の開帳と名附て披露の趣あら〳〵如斯に御座候恐々

追段

奈河の住所永長堂建立吉田聚螢庵大破に及び新宅座敷も金の敵に質どうたらん身上破損修覆の爲め開帳でムり升す兩方御執立と思召此上ながら四方の雅君御所持御祕藏の雅物珍物しばらく御かし被下ませふならば追々番附に書記し御ひいき御惠みにて唐物段々ふゑまするやう偏に奉希候

天明五年巳三月廿六日か　　吉田聚螢庵

奈河永長堂

雅會目錄

一鄭成功尺牘摸本
一永勝伯鄭彩書關摺
一來朝僧南源之墨跡
一明朝時代之春畫
一清朝略暦
一同涼帽
一同單掛
一同短衫
一同管衫
一同腰帶
一同鞋子
一同卓圍
一天后祭之圖南京畫
一北京戲場畫圖
一南京機捩偶人
一同香嚢丸
一同春畫臥屏
一同半面鼓
一同短棨
一浙江普陀山之鑼子

一同寄附之皮袍
一來朝僧木庵之墨跡
一同悦山之墨跡
一清朝時憲書
一同福壽牌
一同縐纊縵
一同長衫
一同汗衫
一同褌子
一同襪子
一同方襦花布
一同僂子帽
一天后佛前燈籠
一同板行畫
一同花雲片糕
一同木㮇珠數
一同佳文席坐圖
一同火鐮
一同手爐
一同杵鈴

一沈南蘋書畫之扇面
一清朝出身保券
一同殺舗行簿故紙
一福建省官升
一同秤子
一同箬笠
一同筅帚
一同柳子匙
一同如燈明兩燭
一同安南國倍牌
一朝鮮國扑慶後書
一琉球國鮑皮三絃
一太泥國損多羅葉笠
一占城國象骨
一同纖蓋
一同吊桶
一同烟包
一同皮鞋
一同ストロイス之卵大トリノタマゴ
一同遠視之畫圖

一同所持之夾帒
一同典當舗帳故紙
一江南正税納券
一同算盤
一同竹擔
一同探衫
一同探帚
一同廣東祭禮鼓
一同彩織簑席
一同潤節竹
一同黄質黒章金皮
一同夜久貝之内肉皿
一與臥爾國花布
一阿蘭陀國諸候會帖
一同規尺
一同肉鑵
一同芬吹
一同青鷺之羽
一同銅人之畫圖

一紅毛畫地球摺屏
一韃靼襪袍
一廣東夢菩
一清東瑇蛸匾梳
一同木匾梳
一同甁桶
一暹羅國大綺席
一紅毛テイシンメイル
一紅毛畫渡海之圖
一同臘酉
一琉球縢
一南天竺蛇黄
一清朝童羅衫
一同輕羅裾襖
一同石紋腰帶
一同紋綖座方
一同設色春畫
一同宦署提燈
一同鏡架
一同粧器
一同銀篦
一玉スダレ
一萬國畫屏風二枚
一キセ・ル
一太刀一腰
一蠟石屏風
一ヱレキテル
一比翼鳥

通計一百八種

今古參考南水漫遊初編五の卷終

今古參考南水漫遊拾遺

一の卷

今古參考南水漫遊拾遺一の卷

颯々亭南水主人著

淨瑠璃濫觴

夫淨瑠璃とは音曲の總名にしてすべて文に節あるは何にても淨瑠璃といへり三箇津淨瑠璃の名目といへるは

土佐ぶし（江戸土佐少掾）、外記ぶし（薩摩外記）永閑ぶし（虎屋永閑）半太夫ぶし（半太夫）喜元ぶし（虎屋喜元）、文彌ぶし（岡本出羽掾）、義太夫ぶし（竹本筑後掾）角太夫ぶし（山本土佐掾）嘉太夫ぶし（宇治加賀掾）治太夫ぶし（松本治太夫）市郎太夫ぶし（大森市郎太夫）一中ぶし（都太夫一中）宮古路ぶし（宮古路國太夫）道具ぶし（道具屋吉左衛門）表具ぶし（表具又四郎）

此餘數流ありといへども浪華の人淨瑠璃と覺居るは義太夫ぶしなり京都にては今に於て此唱を分てり

雍州府志に云、芝居四條河原にあり大凡傀儡場歌舞妓田樂猿樂並に狂言舞々の類衆人こぞつて見る所の場倭俗すべて芝居といふもと原野を芝といふ故に人々芝に座して之を見るの義なり一説に芝居の號はもと南都南大門薪の能より起る者なりと人形芝居或は操りといふ其式は中央正面に舞臺をまふけ横の長さ五間矮欄を搆へ其上下幕を設けて偶人をあやつるもの幕の内に居りて人形を上下幕の間より出す上段の幕を顏かくしと稱す人形を操る者此幕を以て顏面を隱すの謂也幕の内をすべて幕屋といひしかど近世舞樂の樂屋に准ひて樂屋と稱す中略扨其淨瑠璃を說く人を太夫と稱す倭俗に諸藝毎に其の一部を一座といひ其一座の長を太夫と稱す其次を脇太夫と云太夫を胴に比し其次を脇に比するの謂也凡淨瑠璃の詞は始め源義經の愛妾淨瑠璃御前の事よりいづ其詞は織田信長公の夫人の侍女小野のお通是を作るしかして太夫樂屋幕うちに座し高聲に曲節作文して之を談り說くもことごとく淨瑠璃と稱すとぞ三美線その曲節を助

く木偶人は男女老少その事に應じて是を出し舞臺の上下幕の間にて是を操る故に操といふまた人形を舞はすといひ或は人形を使ふともいふ淨瑠璃の間に又狂言をなす是また木偶人俳優の事をなす淨瑠璃太夫は文祿年中より慶長に及て監物某幷次郎兵衞某なる者攝州西の宮の傀儡師をまねきて相共に之を經營す監物幷次郎兵衞淨瑠璃を談り西の宮の人は人形をまはす其始は纔に幕を兩楹の間に張人形を其上に舞はす河内の介といふ人は淨瑠璃太夫受領の始なり次郎兵衞後に上總介と稱すこれより左内宮内相續て盛に行はる常芝居もと五條の橋の南に在り豐臣秀吉公伏見の城より京師に入せらるゝの路なりしかば其喧雜なるを嫌て今の四條河原に移さる傀儡の外雲舞幷に幻術連飛輪脫緒小桶水操および珍禽奇獸或は矮人長女など雜品の藝術をなす者各々場を開く是近世の流風なり下略

淡路座秘書に云、西宮に道薰といふ人御神の御心をなぐさめけると是より海上波風靜にして獵舟多くの魚を得る事久し時に道薰しばらくいたみて身まかりければまた風起り波高ふして猶更獵もなかりしかば百太夫といふ人人形を作りて神の御前なる箱のかたはらに身をひそめ人形を以て我は道薰なり尊の御機嫌を窺はん爲參りたりとて御心をなぐさめける是よりまた波風靜りて獵もありけるとなり其後時の帝此事を聞し召れ禁庭の政に出勤すべきよし勅諚有けるゆへ百太夫都に登りて此儀をつとむ是によつて

大日本者神國故以下慰二神慮一者上爲二諸伎藝者一

かくのごとき號を下され諸國諸社の神いさめの事勅免ありしより胸に箱をかけ人形を以て神をいさめしなり是傀儡師の始也百太夫は諸國を巡りて淡州三原郡三條村といふ所にて身まかりけるに何某の四人百太夫に傀儡師の業を習ひて此後傀儡のわざをなせり是淡路座操の權輿なり右淡路座の操凡四十餘座あり當時諸國へ聞へて名高きは上村日向掾を最上とす往來帶刀御免にして芝居の表口に『大日本諸藝首』といふ額を懸る

傀儡師唱歌

「伊吹山おろしサア不破の關守 ハンヤ戶ざゝぬ御代こそ目出度けれ

戀しきヤレおもひサアふるさと近づき山城の井出

の里ハアゴザレ〳〵たうからゴザレ朝の嵐に誘はれござれサンヤぼんちはくゞりやうてくゞるかたく門やはたそがれ時よハア春戸は八重垣大戸はくゞり明てたもれば閨洩る月よハア五郎左衛門が心がこゝろうかれてくる〳〵やヒヨツクリヒヨツクリ〳〵ヒヨイトサンテ目出度イナ

近世寛延寶暦の頃西の宮より傀儡師來りしが今は絶て見へず當時の首かけ芝居といふもの其類ひなるべし百太夫の社は武庫郡西の宮恵美須の北に小祠あり内におさめる像は三歳計なる小兒の座したる人形なり是神にあらず毎年正月に白粉を以て厚さ三四歩計に顏に塗おく也此邊にその年生れたる小兒宮參りをなす時此人形の顏を撫て其白粉を小兒の顏にぬるなり是疱瘡惡病を除くといふ又曰是日本人形の初めにして此木偶ある故に西の宮に笠井氏といふ人形芝居の株有この木偶百太夫と稱する其由緣にて淨瑠璃を談るものを太夫と呼び來れりとぞ歌道に遊女を傀儡といふ事往古の遊女は客人の席にいたりて歌を諷ひ舞を能し人形を遣ひなどせしとあり故に傀儡の名を呼なるべしまた唐土にて傀儡棚といふは我國の糸あやつりなり依て是を南京操ともいへり

小野阿通古蹟

文祿の頃より世に行はれて今專流布なす淨瑠璃の權輿は織田信長公の侍女阿通といへる女源牛若丸と矢矧の長者の女淨瑠璃姫の事を作文して長生殿十二段と號す是藥師の十二神に表し十二因緣の道理をさとすゆへ十二段とはなしぬ此艸紙に瀧野澤角節譜して語り初しより淨瑠璃の一藝なれり阿通自筆の十二段の卷は大阪内本町島田某といへる人持傳へしかど元祿の初めに燒失すおしむべき事なり此阿通は織田家の亂をさけてより津の國長柄の里に纔かなる艸庵を結びて住けるが元來和歌を好みて數首の秀歌あり中にも世人よくしれる歌は

つれ〳〵とふりにし跡をおもふにも
袖こそぬるれ五月雨の空

阿通の下女みひろげの女の事近世畸人傳に委し阿通の手鑑といふ板本世上に流布すれども信じ難し河内國觀心寺の内中院の什物に自筆の文あり行年五十八歳にして元和二年三月五日此庵室におゐて卒す其舊記は長柄の町より西に當る畑の中にしるしの松あり

て里俗おつうの松と呼びしかど正德年中にくちたりしとぞ

大阪操芝居起原

大阪あやつりの最初は京都より左内宮内といふ淨瑠璃太夫折々大阪へ下り定日五日づゝ興行なし勝手よき時は日延をして勤しが其後淨瑠璃太夫段々多く相成操芝居繁昌に及びしゆへあやつり名代を定められしは歌舞妓狂言今より十箇年ほど後の事なり夫より東西の芝居盛なりし頃の操座は夜七つ頃より見物詰懸明六つ時に大序を開き五段の淨瑠璃晝の八つ頃には打出せしが不繁昌になり行に付ては次第〳〵に初り遲き故をのづから打出しも夜に入樣になれり寶曆年中堀江の阿彌陀池門前の新芝居にて初めて操を十文にてみせたり十七太夫淀太夫信濃太夫など出しが是より淨瑠璃の風儀おとろへ初め道頓堀東の芝居も明和二年八月晦日限にて相續難相成同四年豐竹座再興の爲四月八日より古淨瑠璃一段づゝ札錢十文宛の追出し芝居となり同六年には筑後芝居にて竹本豐竹打込みの座組を初め東西をあらそひし浪華氣質の風儀を失ふ翌七年また〳〵豐竹一座再興におよぶといへどもいつしか兩座混雜に及び筑後の芝居も大西と呼びなし若太夫も芝居の名のみにて當代は專ら歌舞妓にて興行す扨亦稽古淨瑠璃といふものは寶永四亥年二月大阪生玉の社内におゐて竹本豐竹の稽古場を發起せしより其後座摩稻荷または北野お初天神社内等に稽古場をしつらひ太夫にならんとおもふ者は先づ稽古場へ出て修行なす其中に評判よきは兩座の内より呼出し又一座太夫の内より推擧するとも一座の太夫人形つかひ迄打寄先日見へを聞よければ抱惡敷はかゝへず抱るに於ては鼻紙代として金子拾兩と定め役場は序中を勤むかくのごとく其頃は卒爾に出勤する事なり難かりしが今は甚心安く先見習ひと名付て至て初心なるは役場なし勿論無給金にて出勤する太夫多しかゝる時節ゆへ稽古場も名のみにして修行の爲ならぬ慰み場になり或は席錢を出して語たり聞たりなどいへる事を初れば殺風景の族金太郎が呼びなすもの揷語り仁王語り蒲團かたり田葉粉かたりなどいふ曲語をなしてたわけを盡し出語には居も動かざりしと或故人の風義を忘却なす誠に後世おそるべきは此道の行末ぞかし

竹本筑後傳

淨瑠璃といふもの數種あるが中に義太夫節は浪華を根本として此地の名物とす竹本義太夫は攝州天王寺村の農夫にて五郎兵衞と云し人なり生得音聲世人に勝れ大丈夫にしてさわやかなり貞享二年丑二月より道頓堀にて芝居興行ありて最初は宇治加賀掾の古物世繼曾我藍染川いろは物語井上播磨掾の古もの賢女手習鑑賴朝七騎落以上五替り同三年寅の春より近松門左衞門京都より新物を作り越され其第一は出世景清是近松氏義太夫座の淨瑠璃作の初とす元祿十四年巳五月

勅許受領して竹本筑後掾藤原博教と號す貞享の初めより古物五十番餘新作百番餘を操りにかけて相勤正德四年午九月十日行年六十四歲にて歿す法號釋道喜興行の初めより三十二三箇年相續なし元祿年中に竹田出雲竹本氏の座元となり人形道具に至る迄華美を盡しければ繁昌なす事以前に百倍せり

鸚鵡が杣序に云、いろはにほへとは尊圓親王の御筆も七才の太郎松がかけるも點畫替る事なくいの字はいの字に讀ろの字はろの字に極まれ共よしあしの階級は千重萬段こゝろこと葉の及ぶ所にあらずからにしき晋元の王羲之趙子昂敷島の大和には道風佐理行成などあまたの名筆の工に書なせる文字の形品々なれど筆法は十二點にはじまりて十二點の外を出ず韻會字彙玉篇に二十餘萬の鳥の跡絕せぬ寶なりけりと物書人の語り給へるにかたえなる萬に心得たる人の申されしは六藝の道何れか替る事の有べき文武の樂は美盡し善盡しつくさずのたがひ目こそあらめ樂に於て五音十二律にもるべからず申樂を見侍るに上手のさし扇下手のさし扇さす所に違ひなく引取更に變らず太鼓また然り上手の笛にて笙篳篥の聲もふかずひいやひやりを能々吹覺る計りなり立出て峰の雲は誰か舞ても遊谷四海波靜にては誰が諷ふても高砂平家のふしに諷ふたる名人もなけれどもよしあしの雲泥なるはいかにぞや萬の藝かくのごとし定まりたる事を能すべし但その中の曲節は時に從ひ折にふれて臨機應變まゝ有べきにや然あれど利休紹鷗宗和などの變りし物數寄目を驚すといへども湯の上へ茶を入て香煎ふるやうなる無理なる物數寄もなし名にあふ歌人のさまざまの狂歌の雜體はあれども五七五七

七の外は詠給はず諸々の藝能師傳を受て定りたる事を能々切瑳琢磨して時に應じて略變の用捨こそ達人の業とも名人の藝ともいふべけれと語給ひしを僕末座に有てつら〳〵承るに我淨瑠璃の道におもひ合ていさゝかも違はず淨瑠璃始りて百十餘年瀧野澤角南檢挍平家に委敷琵琶の妙手たりしより淨瑠璃物語といふ雙紙を綴り直して藥師の十二神をかたどり十二段といふふしを語り出せり其時は三味線にあはするといふ事もなく扇を開き左に持右の手の爪先にて骨と地紙とを掻ならして色々の拍子を取たる事なり其十二段の目錄さへ今は知りたる淨瑠璃語もなし此外に都巡りといふもの一段はこれは檢挍の門弟京東洞院目貫屋長三郎と云し人の作なりかけまくも賢き慶長の帝是を興ざせ給ひて人形にかけさせ叡覽度々有しより淨瑠璃太夫受領に拜し世に行はれて安口の判官。弓繼。鎧がえ。戸井田。五輪碎是を五部の本ぶしと傳へ侍る岷江の濫觴絶ずはびこりて音曲の海波靜かなる時つ風民安き御代のたのしみ淨瑠璃といふ一ふしの定りぬこそ淺からね何の道も古をあふぎて今を戀ざらめやは此音曲も格に入て格を離れ格をはなれて格に入といふ事第一の習ひなるべし古播磨太夫は淨瑠璃の中へ謠をいるゝさへまんざらの謠に聞ゆるはあしと申されし謠にても歌にても淨瑠璃に打そひて淨瑠璃の格にはれぬやうに謠と申されし肝要の詞なりけり僕が門弟には淨瑠璃の文句の中ならば謠も歌も謠ふとはおもふべからず語といふべしとこそ敎へ侍れいはむや時々の流行歌木やり音頭の類ひ面かげはさも有なん淨瑠璃の正體は眼をはづすべからす世の流行歌とて半年流行は稀成事にて上方の流行こと遠國にしらず田舍の流行もの都路にしらず上京の事下京に聞へず天滿の噂難波にしらぬ事のみ多し異國には大きなる御敎ひとつの内にさへ一日の間氣候ひとしからずといへり流行事さのみ好ずともあらまほし世間のはやり事聞出し淨瑠璃に入んよりは手前の淨るり世間に流行やうに稽古有たきもの也世繼曾我の道行に馬方いやよとおどり歌入し事相應せず一番の瑾いま聞に汗を流すと三十年前を後悔ある作者の心藝道の執心さも有べき事なり實にも文言章段の品に依ていかなる名人も語り得難きことあるべし堅からんとすれば太平記のごとく艶ならんとすれ

ば源氏物語のごとく派手ならむとすれば當世好色艸紙の轡口に似て各淨瑠璃にあらず詩人の平仄を分ち韻字を押も律呂に懸てうたはん爲とかや此國の謠ひもの我駒貫川伊勢の海などのゆふなるさわらび吉々利々老鼠などのおかしげなるも呂律に違ぬこそ有難けれそのごとく文句にもはこひはかせおよぎ等程拍子ある事なればそれに心を付て文字移り音聲開合甲乙の位を練磨すべき事なり申もはゞかりあれども道遙院入道内府公は御日待の夜尺八皷三味線などの遊びの中にいで我も一藝せんとて箒木の品定の卷を素讀遊ばせしにあやしの下部迄聞人感に堪て外の歌三味線もけをされしとかや源氏の讀曲堂上の御傳受には清濁文字移りは勿論御聲になまりをかけさせ給ふところ節をつけさせ給ふ所も有とかや傳へ承る是等をこそ音曲の龜鑑とも申べかめれ夫迄は恐有とも一藝の本意をしらんとはげむべしまして拙き辻藝門音曲を大事有げに語りませて淨瑠璃本ふしの立所を失ふ下劣の甚敷本心を外にうばゝるいかなる狂人ぞやと宇治加賀掾の批判尤成べし若聞人外のませ事を擧る時は扨は我淨瑠璃は是にをとりたると返り見ていよ〳〵たしなむべき事なり名醫の調合ある益氣湯も藪醫者の合する敗毒散も藥味はかはらねども大きに人を傷ひ又大きに人を助く淨瑠璃に變りたる節古今なき事也雖趣向年代せりふ風景時宜にそむかず無理ならぬ樣に地色ふし詞迄心を加えて精を深く語りなす事彼病根病因に依て配劑加減有がごとし外の事まぢゆるは一味二味の加藥のごとく本方の爲の加藥にて加藥の爲の本方にあらずと知るべしかくあればとて本式に脇目もふらず作りつけたるごとくなるは佛藝とて嫌ふ事なり其内の意味は聲とふしとの和に有て言語道斷天然の所なるべし萬葉の書を誦じても面授口傳なくしては萬の道成難しとかや峯の藥師の淨瑠璃の本方相傳の上に年を重ねて口傳の上に工夫をつみて加減の修行あらまほしく四十餘年來寢語にも是をわすれずといへども今に淵底をつくさず是ぞ語り得たりとおもふ事のなきは我身ながらいかなる事ぞやと申侍りし詞の中より正本屋山本治重その座に有てあふむが柚の板行なりて末序とするものなし幸に只今の敎訓しるしてよと硯をならして口移しの頓て紙上に移りけるはむべもあふむが囀りなりけら

し今此もてあそび隆盛にして雲の上には大宮人の櫻かざし給ふ頃諸侯は御在國の御つれ〴〵淨瑠璃をうつさしめ給ひて僕が墨譜の仰をかうぶるも多かり板行の書なりては富家の深閨もてあそばれ遠國波濤の樵歌にもまじりて道の廣く布きわたれる事のあらたのしいかな只されども重板類板まち〳〵にて或は七行に書替予にことはりもなく奥書名乘を似せて直本正本といつはり世を欺きしかも文字をあらけ紙數を重ねて價を昇し藝の道を輕蔑にし直傳を打消んとする意路の惡るき類ひ傳々寫々として節頌墨譜にいたり毫末の誤大なる相違なる事我猶是をやめりたとへば唐人參の見ば能よりも朝鮮の鬚人參の功能はるかに增るが如しそれがゆへにはやくよりせしがごとく予が名の下に靑赤の二印を加へて直傳とあらはすは山本九右衛門一家に限りて外になしといふ事を爰にしるして是を序とする者しかなり

正德元辛卯年　筑後掾藤原博敎

初秋吉日

此文淨瑠璃の故實または藝道の便りとなるべきものゆへ著し置ぬまた陸奥茂太夫の傳書といふものあり

凡音曲の道上平去入四機開合假名清濁を本とする事いふに及ばず就中淨瑠璃と云藥師如來の寶號を申事淨瑠璃御前の事より起りたる而已にもあらず平判官康賴入道平家物語を作り生佛に敎て節附は臺家の稱名より出たるゆへ稱名に二重三重あり平家にまた二重三重あり龍野澤角の語り始し十二段の古き節も扨こそ淨瑠璃と號する事讃佛稱名の心も籠るよし傳々承り候然ればおろそかに語るは藥師如來の冥感も恐れ有にあらずや予が若年の昔竹本先生の門下に遊び口授を請秘傳を得餘力ある時は他門の音曲をも潛に窺ひ年來心を碎て右の流義を語る事いさゝか予が私にあらず程用の位長短の裳譜其外程拍子地はこび寄せ字戻り響移持合當るさはる等の違を知ず皆々口傳あらずしては難至者なり其外の吟味もなくして我こそ習ひ得たり顏に語る人はたとへば蛤の殼を夫とおもひて中の實を捨るといふ山家の者のたとへに似たり予が門に遊ぶ人々此心を得て稽古修行あらば秘事のこらず傳授すべきものなり口傳は華鳥風月にあり常々神祇釋敎戀無常人倫生類畜類山類水邊降物植物

聳物述懐哀傷祝言等に心を寄せ怠りなく稽古可有者なり穴賢　陸奥茂太夫

享保十九寅正月日　藤原淨慈　在判

陸奥一呼殿

古代に虎屋喜太夫次に陸奥茂太夫二ッ井彦太夫永島重太夫竹本源太夫辰松八郎兵衞等大阪表にて芝居興行ありしかども何れも井上竹本の淨瑠璃を語られしゆへ別に新作の院本を不見聞

豐竹越前傳

豐竹越前は大阪南船場の產なり元祿十二年の頃井上宇治竹本等の先師達の淨瑠璃を學びて此道の達人と成十八歲の時竹本釆女といひ後に竹本若太夫と改めしばらく竹本同座なれども程なく道頓堀にて芝居興行なし傾城懷內子是新作の初めなり京都堺紀州南都にても芝居を興行せられ其後元祿十五壬午年より定芝居と成享保九年辰三月二十一日大阪大火類燒の後今の芝居地面を買求同年十月十六日より新造の芝居にて興行其後享保十六年亥九月勅許受領

豐竹越前少椽藤原繁泰祝儀出語蓬萊山を勤む延享二年丑十一月三日より一世一代を勤む六十五歲

北條時賴記　雪のだん

翌三年寅五月京都にて一世一代条仙人吉野櫻を務め延享五年辰十月堺にて一世一代東鑑御狩卷惡源太平治合戰を勤め明和元年申九月十三日行年八十四歲にて卒す天王寺西門納骨堂の後に墓あり一音院眞覺隆信日重居士

安永五年申七月十三回忌追善として音曲八の卷といふふし事を勤む此太夫、麓太夫、房太夫、八重太夫、時太夫、賴太夫、湊太夫

此翁生涯に戲文の作多し作名は梁塵軒といふ寶曆年中桂井蒼八の戲作古文鐵砲に云

諫三筑豐居士成二作者一序

淨瑠璃風流而評判通衆人贔者何謂也廢二其古一鉤二其新一張二其工一矣財主不レ言胸中喜座中服者何謂也鍛二其文一配二其操一鳴二其才一矣是知財主逸二於上一作者勞二於下一法二手理一也古巧二淨瑠璃一者自二近松出雲一至二阿紋觀並木一可レ數也是不三獨鳴二其才一亦皆務二于勤一耳況夜寢夙起登レ櫓擊レ鼓者猶然況作者乎一朝有二怪異一揮レ筆喜レ耳掛レ操樂目是皆主二頓作勤行一也至若夫大城戶向レ曙東方未レ明好操道路連レ跟傾二評判贔

負ニ而來ニ乎櫓鼓末レ響ニ傀儡摩レ驗太夫座レ牀謹是皆不レ厭ニ其勞ニ悞ニ其的ニ也矣其或文拙趣向不レ巧最者爲閉レ口甕レ額走奔太夫將レ語心不レ悅三絃失レ律撥摩レ皮表勇欠伸商宮律肘疲也嗚呼一作之可否財主之得失也財主之得失者座中之得失歟知輔ニ相於君ニ撫ニ養於萬民ニ一國之政萬人之命懸ニ于宰相ニ譬君爲ニ財主ニ宰相爲ニ作者ニ民總座中也見物者餘國也往昔仲尼攝ニ行相事ニ出ニ無用之作者少片卯ニ與レ聞ニ國政ニ三月魯國大評判善於茲四方見ニ物之ニ其政也所謂淨瑠璃也然淨瑠璃佳作置ニ財主於泰山之安ニ封ニ座中於榮旋之富ニ澤ニ蒙表勇ニ引ニ卒乎見物ニ是所下以作者爲ニ作者ニ能其逸才遇上知於主君ニ壯ニ威氣於柴居ニ者也雖ニ事不レ同理相似余友筑豐今屬レ之因以諫レ之以レ辭

院本大意

淨瑠璃は小野の阿通の作文淨瑠璃物語十二段を始とし此物語聞ふるしたる 後瀧野澤角の 兩檢校大職冠、八島、高館等の舞の章雅に節を附け是を淨瑠璃節といひならはせしより惣名とは成れり其後薩摩治郎右衞門新作を綴り曲節を語出るしかし其文句何れも短かくして今の世の景事道行などの類ひなり其上三絃に合するといふ事もなく右の手の爪先にて扇のほねを抓鳴らして拍子をとり語たるよし其後角澤檢校三絃に合し始ぬ此角澤の門人京都東洞院二條の住人目貫屋長三郎といふ者都巡り見物左衞門といふ外題の五段續を作り夫より相續き好者の遊人或は俳諧師など次第〳〵に新作を編出せり西鶴宇治嘉太夫錦文流近松門左衞門紀海音村上嘉助西澤一風松田和吉長谷川千四竹田出雲爲永千蝶並木宗輔同丈助等より當時の作者連綿せり扨又京都の山本土佐椽宇治加賀椽大阪に井上播摩椽竹本筑後椽豐竹越前椽等の芝居にて語り來りし淨瑠璃段々に繁昌なし井上氏の華山院を宇治加賀椽方にては弘徽殿嫉妬打と外題を替また井上氏の日向景清を松本治太夫方にては鎌倉袖日記と替山本氏方の都志王丸を岡本文彌にて山枡太夫と變じ加賀椽方の團扇曾我を筑後方にて百日曾我と變題せし斯樣の例多し前々は不流行なる淨瑠璃は板行には成らざるよし勿論井上氏山本氏の時代には綸入細字の讀み本計りにて稽古本といふは曾てなし貞享二丑年七つ伊呂波の淨瑠璃五段を大字八行に板行させ宇治加賀椽章を指し直の正本と號して出す是稽古本

の最初とす其後寶永七庚寅年竹本筑後掾の語られし吉野都女楠の時より大字七行となし初む是より前々の當り淨瑠璃をも改め七行に再板せられしとなり然るに寶永年中京都二度の大火次に享保辰年大阪大火の節古來の正本板木燒失して傳はらざるも多しとぞ宇治嘉太夫は紀州和歌山宇治といふ所の人にて元來謠曲に妙を得たりまた伊勢島の弟子と成淨瑠璃の道に入て名人の聞へ高く貞享の頃芝居を興行して勅許受領宇治加賀掾藤原好澄と號す大字の正本に謠本のごとく節附を加へ初めて是を出す夫より九行八行六くだり今大字五行を用ひて外に床本といふ書本もあり中頃住太夫此太夫など淨瑠璃節附の小本を出せし事もあり往古出板の稽古本といふものなき頃は此一曲を學ばんとおもふ輩戯文を自分に寫し師に便りて節附を乞ひしとなり其頃の寫本萬歳壽賴政といふを閲せしが當世聞馴ざるふし附數種ありけり

ヲダギフシ　トヨノフシ　キリヤマ
サナイ　馬方ブシ　リヨ
歌ナヤシ　アフミコムスビ　アイカン
ハヤナゲ　ヤツシ　下ゼメ
シヲリ　サヾナミ　シグレ

此外三十種餘見へたり當代詞と計ある所も

實詞　惡人詞　かん詞　色詞

など丶記せり此道日毎に流行に及びしより正本といへる板行出來て太夫の節頌墨譜奥書に青赤の二印を加て直傳とし人の心をなぐさむる業となりて七本骨の拍子扇貴人の御手にもふれ給ひ末々迄も月待日待小風呂の内にて此一ふしの止事なく若き者はいふもさらなり歯拔親仁も老樂に何をがなとおもへども鞠に足弱く揚弓に眼定まらず時に一口の淨瑠璃を語りて興を催しけるそが中に藤戸の先陣待宵時雨の道行の枕こと葉

おもひ川ほさぬ袂にゆくみづのうき名ながさんはづかしや人ははたちの花ざかり戀にくちなばおしからぬちりのあくたの身をしれば

此口眞似をせざるはなし此時より道行の節事大いに流行なし道行の拔本とて市中を賣歩行やうになりたり延寶の頃町淨瑠璃に名高かりしは

播磨風

とんどは 三郎兵衞　すけた町 長兵衞　すゝや町 まとり惣兵衞
近江町 粉屋佐兵衞　内本町 魚屋小左衞門　内大工町 勘兵衞
文彌風
ときは町 烟草屋三右衞門　南谷町 かせ屋吉兵衞　彌兵衞町 八百屋三右衞門
彌兵衞町 八郎兵衞　岡田市兵衞　北谷町 小間物屋九郎三郎
北谷町 權四郎
二郎兵衞風
すけいた町 めいや六兵衞　同町 塚本又左衞門
本出羽風
谷町 ときや四郎兵衞
だうけ
北くわや二町目 理兵衞　ひよろま　五郎ま 小兵衞
北新町三丁目 ばゝの庄兵衞　兵內
かくのごとく難波雀にみへたり其後寶曆の末明和安永の頃迄は大阪に素人淨瑠璃とて語る者は

ウツボ 南金　堂島 髭久　順慶町 半助　今はし 塚五　今橋 ひら八
纔に四五輩にて至極珍らしく人の用ひも強かりしが今は素人淨るり盛に成たり

○受領口宣免狀

淨瑠璃太夫勅許受領の口宣并淨瑠璃歌舞妓その外からくり說經語等の芝居名代御改ありし正德年間の帳面を左に著す

名代改帳表書

正德三年巳十二月

上

四條河原　歌舞妓 物眞似盡 舞 からくり 淨瑠璃 說經　名代改帳

淨瑠璃　河内

慶長十八年正月十五日口宣頂戴行
河内掾と申名代

口宣案

上卿中御門大納言

慶長十八年正月十五日　宣旨

藤原吉次

宣任　河内目

藏人頭左大辨藤原孝房　奉

甥山本彌三五郎と申者に讓り申度旨元祿十五年午十一月二十六日名代主妙印と申者奉願駿河守樣御番所にて願之通御赦免被成候其後正德元卯年六月三日駿河守樣御番所にて右彌三五郎弟勘左衞門に讓申度旨奉願候所御赦免被成候

說經

高砂嵐々鈔に云、說經といふは昔釋氏の屬に說經師といふもの有て佛菩薩の緣起などを詞に綴りて稱名念佛に加へて俗人に佛道を勸めけるより始り其後異國本朝古人の事跡あはれに悲しきをいひ又名僧などの傳をとりて世の無常なる事をしめし人に菩提をすゝめしなり本は鉦鼓を鳴らし拍子とせしを今は三絃に和する事になりぬ正德三年名代改帳に

一　日暮小太夫

右小太夫と申名代古來より蒙御免所持仕來候處三十六年以前親より讓受相續仕來候

說經

一　日暮八太夫

右八太夫と申名代古來より蒙御免所持仕來候處三十六年以前親より讓り受相續仕來候

關清水大明神蟬丸宮
別當近松寺
山城國愛宕郡京日暮八太夫
本久
右以本久依願繼目所補太夫號
依而如件
正滿講師
淨密講師
淨榮講師
正德二壬辰年
九月二十八日
說經者日暮八太夫本久

高砂颯々鈔に云、祭文といへるも本は其人一生の善事懲をあげてその人を弔ふ文なり悲哀を主として人を泣しむる事なれども哀聲を過るはその勢ひ自然と諸聲となる今俗間の祭文といふものは色欲に溺れ淫亂放蕩にして家を亡し身を失ひし賤敷者ゝ事を作るゆへに其鄙俗悖亂言べからず云々
祭文は說經節の和らかきものゝ樣に聞ゆ

今古參考南水漫遊拾遺一の卷終

今古參考南水漫遊拾遺

二の卷

今古參考南水漫遊拾遺二の卷

颯々亭南水主人著

平安堂近松氏の傳

淨瑠璃の作文歌舞妓狂言作者名人と世に聞へたる近松門左衞門姓は杉森名は信盛平安堂巣林子と號す越前の人（一説に三州人ともいふ）壯年にて肥前唐津近松禪寺に遊學し義門と改僧侶を數多門人となせしが所詮一寺の主と成ては衆生化度の利益薄しと大悟を開き雲水に出しが肉縁の舍弟に岡本一抱子といふ大儒の醫師京都にありけり是に寄宿して還俗なし堂上方へ勤仕の間有職を記憶し其頃京師都万太夫の歌舞妓芝居または淨瑠璃芝居宇治加賀掾井上播磨掾岡本文彌山本角太夫などの淨瑠璃狂言を著作せしが貞享三年大阪竹本義太夫座より頼まれ出世景淸といふ新作を出されしが竹本の戲文の書初にて夫より生涯數百番の出作ありて英名海内に發し看板または板本に作者の名を記す元祖とす近松氏は元來衆生を化度せん爲の信念より出作する戲文ゆへ平常の草紙ものとは變り俗談平話を鍛練して愚痴闇昧の俗中の人情を貫き神儒佛の奥義も殘る所なく著する俗文は古今名人道一流の文者ともいひつべし俚俗いふ近松の淨瑠璃本を百冊讀ば學ばずして三敎の道を悟り上一人より下万民に至るまで人情に通じ乾坤の間に森羅萬象あらゆる事辨へざるといふ事なし實に人中の龍なるべし年耳順を過て享保九辰年十一月廿二日歿す墳墓は八丁目寺町法妙寺にありまた久々知廣濟寺の過去帳にも法名有

　阿耨院穆矣日一具足居士

此の戒名は近松氏在世より設置たるとぞ辭世二首詠草中にみゆ

　それ辭世去ほど扨（にカ）もそののちに
　　のこるさくらか（のカ）花し匂はゞ
　殘る（れカ）とはおもふもおろか埋火の
　　けぬま仇なる朽木書して

浪華金屋橋熊野屋某の家に近松の墨跡二幅あり一は美人の畫賛一は辭世の詠草也

　樂天が意中の美人は夢のむつごと僧正遍昭の詠中の戀は繪にかける女とりかたにはたれかこれか作

歴去

物いはずわらはぬ代にりん氣なく
衣裳表具にものごのみせず
平安堂近松七十一歳狂讃

浪華の狂言作者近松半二故人門左衛門が遺ふ所の硯を傳ふその硯の蓋に漆して

事取二凡近一而義發二勸懲一

九字を記す是は笠翁傳奇玉掻頭の序に

昔人之作二傳奇一也事取二凡近一而云々

といふ語を取れり近松氏小說に心をよせし事是にてしらる此人は實に本邦の李笠翁也翁草にいふ八文字屋自笑が浮世雙紙の編者江島其磧は能世の情をのぶ筆勢おさ／＼近松に並ぶ所謂曲三味線色三味せん傾城禁短氣はた諸々の容儀るいなどは今の世の人も是を翫ぶされども淨瑠璃を書事はならず近松はまた雙紙を作る事を得ずその差別をいかにといふに其磧が作文にては人形の働き薄く近松雙紙を綴れば文勢過て人情くわしからずおのれ／＼が得たる處古今もつて同じ後の南嶺は其磧を欺く計りに作意巧なれども其情淺くして其磧が上にたゝむ事難し夫より下つかた擧ていふべき作者なし

或人いふあやつりを見るには當世にしくはなし本を讀て樂しむには近松が作宜しとはむべなるかな近松が作文道行のつゞけがらは伊勢源氏の俤を移ししかも俗間の流言をおかしくつらね佳言妙句多し近松文段に精神を入られし事を聞に淨瑠璃は木偶にかゝるを第一とすれば外の草紙とは違ひて文句みな働きを肝要とす正根なき木偶にさま／＼の情を持せて見物の感をとらむとする事なれば大方にては妙作とはいひ難し某若き時大内の草紙を見るに節會の折ふし雪いたう降つもりけるに衞士におほせて橘の雪はらはせられければ傍なる松の枝もたはゝなるが恨めしげに刎返りてと書り是心なき草木を開眼したる筆勢なり其ゆへは橘の雪をはらはせらるゝを松が羨ておのれと枝をはね返してたはゝなる雪を刎落してうらみたる氣色さながら活て働く心地ならずや是を作例として戯文を綴れりとぞ近松氏の作文多き中にも元錄十六年未三月四日初日竹本座の操りにて最明寺殿百人上臈といへる院本（後年豐竹座の操りにて大當せし北條時賴記雪の段の原本是なり）おほけなくも靈元法皇叡覽まし／＼其頃歌人の聞へある公

卿を召せ給ひいづれも秀才なりといへども近松とそらんには劣れりとて彼院本をとり出し給ひ最明寺が道行ぶりに蝶の羽のおしろひを草にこぼして梢には鶴の霜毛をぬぎかくる雪は花より花おほきと書けり是なん圓機活法雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を出して書る處石曼卿が雪を詠せし詩に

　蝶遺二粉翼一輕難レ拾鶴墜二霜毛一散未レ轉

といふ此句を和語に移せしならずやかゝる才智を以て和歌を詠じなば秀逸數多有ぬべしと御感ならせ給ひけるとなん

靈元法皇は萬乘の君の御身として下賤の事をもよくしろし召れ

　清十郎聞け夏が來て啼郭公

　早稲中手晩稲かるたの一二三

かゝる玉句も遊ばされしとぞ

近松氏の戯文大あたり多き中にも元祿十年丑七月十三日より竹本座に於て團扇曾我は百日の間勤めけり夫ゆへ百日曾我と變題なす其頃は百日勤る事は稀なるゆへかく名付たり然るに國姓爺合戰の戯文は世人今に賞美なす近松氏生涯第一の秀作なり正德五未年十一月朔日より三年越十七箇月大當りなし二度目は享保五年子正月二日より勤め三度目は同十六年亥五月に勤め四度目は寛延三年午七月に勤め其後數度興行に及ぶといへどもいつとても大當りならざるはなし是全く近松の文段古今の人情に通ずるゆへにこそ門左衛門國姓爺の戯文を作り大當りの後猶も珍らしき世界もがなと肝膽を碎かれしに其頃の芝居主竹田近江といふ作者の穿ち尤にはあれどかゝる妙鏡の出たる跡はたゞさら／＼としたるものよし此上は其上をと趣向に趣向を重ねたらば果は我業も盡ぬべしと申されしは一道の格言なり此戯文海内に流布するのみならで崎陽の譯司周文二右衛門なる人國姓爺第三回樓門の段を譯して彼地へ送れり其文次に著す

　國姓爺第三回

說話老一官既已再來二唐山一要丙攻二打滿洲王一與乙復明祚甲招二募義旗之士一一夜陪二從老娘一同二和藤内一到二五常軍甘輝住領的獅子城下一看見城門緊閉只擺二着强弩硬弓砲石一敲レ鑼巡哨好生防備和藤内高聲叫道只要回拜二謁五常軍甘輝公一說話三須要開レ門聽得城内當値的人員回報道主公甘輝公只蒙二大王

釣旨昨日起身出城却不知幾時回來更兼邏夜到來要見主公甚是得罪若有說話就在城外說等他主公囘來替儞稟報一官低聲便道不好與儞轉報如若甘輝公不在對奶々說自從日本來的人只要當面說話他必有會意聽得軍卒倒也驚慌大有喧閙愈加隄防甘輝的夫人錦祥女却早聽這風聲直跑上門樓對軍卒道儞等不要噪閙且等我指揮又轉向城外道奴家就是五常軍甘輝的賤室名喚錦祥女如今天下人民都歸降滿洲大王我丈夫也屬他麾下守防城子更且文夫不在只要求見奴家不解其意有話須要說知一官道儞是大明鄭芝龍的女兒娘是早喪爺是當初蒙明朝不遇躱在日本那時儞年及二歳和儞分別之后諒必聽過就哩我是儞爺鄭芝龍也前在日本平戸地方名作老一官娶了後室生一個兒子名喚和藤内現在這里只爲要緊求扢的話須要開門錦祥女聽得已知阿爺意欲跑出城外相見只恐軍卒不伏抹了淚眼便道如有親爺的表證說把我聽一官道今所說的就是證兒並無別故軍卒聽見叫道沒有憑據難道聽信開門可知尶尬的人要瞧開城門之計說了將要放砲排頭而殺了軍卒尙兀是不住口定要證兒證兒一官舉手高叫道儞說的證兒應該在儞手裏我前在唐山逃去之時留我的畫像在後寄在乳母等儞長大之後方做遺送把那畫樣比看面貌休爲疑惑錦祥女聽見這話就將畫樣攤開把鏡子照月亮之下比看父親之面已經年老雖然變些容貌及至細看額上些微有一個黑子父女正像越看越像並不差錯便道果知阿爺親身到來娘是起初已到泉下去了只聞阿爺在甚麼日本地方寤寐心焦要見之念爭奈無有便人那有信息每晨只向東邊推起太陽來拜爲父親從此隔了三千里有餘的路休說陽世相見若在陰世撞見也未可知今經二十來年不期就在這里撞見天與其便慚愧不過一官聽見這話深感孝順之心不覺帶淚氣嗽和藤内同軍卒共爲悽慘垂淚一官道我等特來此間要見女婿求扢要緊大事預先與儞說知望乞開門叫我入城錦祥女道理應開門迎接爭奈播亂之際更蒙滿洲王的釣旨縱令雖親眷自他鄉來客不許入城之諭雖然如

ヲ此非レ比ニ其他一儞等会生理會軍卒執意不レ從並不レ肯開門娘走近前去說道已蒙ニ大王鈞旨一不ニ肯開ヲ門也怏不得但是看ニ這老母一会地要レ做隄防只乙叫ニ我一人一進去甲要下對ニ錦祥女一說話上望ニ乞方便一軍卒道恁地是我等主張叫ニ儞綁縛進來一繫ニ在城內一然則滿洲大王得レ知也主公好ニ去說開一我等也並無ニ干礙之理一須(ベシ)要レ受レ縛若不レ肯時早回去罷和藤內睜レ眼覰ニ他軍卒一罵道我的尊大人鄭芝龍的妻是我的母親錦祥女也雖レ不ニ是同胞之母一也是乾娘那々由レ儞犬猫一般被レ縛牽去娘道今所レ扯的此爲ニ大事一應下有ニ千般苦楚一也不上妨休レ說受レ縛須ニ要枷杻一也只得レ依レ他日本雖ニ然小國一不レ論ニ男女一總不レ背レ義只要ニ依レ儞受レ縛聽得軍卒就把レ索來綁縛牽去各々面々相覰分別而去錦祥女包ニ著悲哀之容一安ニ慰父子一說道此葉ニ一時之國紀一設作ニ權度一雖レ然如レ是令堂是已經寄ニ在我身上一不レ要費心掛念今所レ扯的話悄々地聞ニ過令堂一纔得通ニ知文夫一能勾ニ得大事完備一却好此城濠壍的溜頭是奴家梳粧艶飾的房下泉水通流以レ此說ニ與他文夫一聽應做做得レ是解ニ了揸粉一下レ水爲レ號若有ニ水面帶レ白此乃泰兆就請歡喜進レ城倘或做不レ成是解ニ了脂臙一流ニ下來看ニ那水面一帶レ紅此乃否兆就到ニ門外一來要ニ取母親一萬望留心看々說罷口稱ニ失陪一將要ニ別去一就把ニ扇門一關了老娘進ニ到城內一實(マコトニ)爲ニ生死之關一錦祥女聽ニ見把レ擾關門之聲一哽咽啼哭端得是唐山軟弱女流之氣象和藤內同ニ一官一看ニ這景況一强爲レ不レ啼此乃學ニ成日本武辨之風一原來滿洲規式及レ至ニ城門開關一未丙免放乙了一砲甲當時聽ニ一聲砲一遞相分別而去必竟等(イカンゾ)ニ他甘輝歸來一說下懇ニ求協助一的話上不レ知甘輝会生答應且聽ニ下文分說一

右崎陽譯司　同文二右衞門

因に云當時日本にては國姓を賜はる事多し諸侯各松平と稱せざるは少し國の風にや中華にては國姓を賜はるは太抵の事にてはなし大明亡びて後鄭芝龍日本へ渡り肥前に住し其子鄭杉字成功中國へ渡り崇禎の子孫を尋て位につけ年號を立て永曆といひて順治帝と合戰し餘程きりとり韃兵をなやまし明の遺民を賑はせし其功莫大なるにより永曆帝是に國姓朱氏をたまふ至てとふとき事ゆゑ時の人朱成功といはずして

國性爺といふ俗語に爺といふは至てあがむることばなり此國にて樣と云位なり國姓樣といふ意なり老爺とは旦那樣といふがごとし時の天子を萬暦爺嘉靖爺などゝ云國姓爺一旦勢猛なりしが終には貝勒王なんどが謀略順治開國の大德には及びがたくや打負て夏門といふ所へ逃かくれたり暫く餘程の人數にて中國をさわがせしと見へたり其頃俚俗のはやり詞に或は人のふるまひなどの席にて飯の遲き時は客同士空腹にはなきやと尋ぬる時は肚裏餓了といへば亭主へ聞ゆるゆゑ隱語にていふなり此國の跡に寄たなどゝいふ所を國姓爺脱落夏門といふなり是國姓爺が中國をさわがせし間は中國に人數が多かりしが夏門へ落てよりは人が減りてひつそりと成りしといふこと腹中のすきたるたとへにいふなり然ればよほどの人數にてありしと見へたり

紀海音略傳

紀海音は近松同時の人にて淨瑠璃の作文多く其名高し姓は榎並貞峩と呼俗稱は善右衞門後善八と改む初め黄檗山悦山和尚に屬して僧と成高節とよびたより醫道を業とし契冲翁の門に遊びて契因鳥路觀と號し淨瑠璃の作名紀海音といへり元文元年辰の夏には法橋に叙し寛保二年戌十月四日行年八十歳にて歿す委しくは油烟齋貞柳の傳にみへたり墓は八丁目寺町寶樹寺紅葉の寺といふにあり

清潮院海音日法

臺石にたいや忠七と彫付たり忠七は貞峩の息にて貞風といへり道頓堀太左衞門橋筋八幡筋にて鯛の看板をかけ菓子を製して業とす

柳翁の家集に

鳥路觀貞峩より年頭の禮に團扇をこしければ

物ずきにていがよければ夏の物を
春にもつかふうちはゆゑなり

鳥路觀七十賀に

十ばかり千世の餘りの吾におほき
つらなる枝は花も身もあり

かく兄弟ともに風流の道に遊びてその名世に高し享保七年寅十一月一日より豐竹座の操りにて東山殿室町合戰といふ戯文すなはち紀海音の作にて第四だん目座鋪八景といふふし事の文中に油烟齋貞柳翁の狂歌を綴り入たり

東山殿室町合戰

第四　　　作者　紀海音

王元之が竹樓も是れんけつのよらくとかやされば細川勝元は繁榮日々にいやまして何おもふ事夏もくれ秋をもてなす下屋鋪西の京に地を轉じ遊亭閑所とり〳〵に奇石をたゝむ築山は諸木こもつて枝をたれ月をむかへる池水はおしかも所得がほにて風をふくめるぶどうの棚さゞ波よする如くなり頃しも盛りの百日紅花にゑいずる書院先き障子開かせ勝元は近臣諸共汲酒にさかなはちくら撿挍が調妙なる物の音は萩の葉わたる風よりも身にしみ增る計り也勝元ほとんど興に入あつぱれ手くだの音曲に此間のうつ病もやゝ忘られて面白ししかし朗詠平家など耳ふれて氣が替らず當世めきたる一ふしを所望なりとすゝむればハア何をがな申たら御心に入候はんヱヽ幸ひかな幸ひかな樂人達の戯れに座鋪まはりの道具をば八景に准らへて一々狂歌によまれしを某ふしづけ仕る憚ながら御聞とひやうしをとりて語りける

ざしき八景

實に海山の風情をもこゝにうつせばおのづから座鋪に浮ぶ八景の中にかゞやく名所はまづ鏡臺の秋の月蒔繪に見ゆる松の枝にくもらぬかげはまん丸ござるまん丸ござる十五夜の月の輪の如くいつも最中の詠めなり

鏡臺の蒔繪にみゆる松のうへに

くもらぬ月のかげはまん丸

次に扇の晴嵐をたとへもよしや暑き日の光りも頓てうす物の扇に薫く山かせは昔たかさごや相生のあつき日のひかりも頓てうすものゝ

扇やえがくまつかぜの聲

妹背も遠く待宵にきけばせはしき時計こそこひしらぬ身や造り初けんいづれ逢瀨は秋ざれも短き夏の夜の霜おもりの糸のむすぼれず時計の晩鐘響なり

むつ言もまだつきなくに打時計

戀しらぬ身やつくり初けむ

扨また臺子の夜の雨ふりみふらずみ定めなき身にし昔をおもひ出す大黑庵もよるの雨臺子のならひ音にきく

釜のにえきけばさながら夜の雨
　大黒庵のむかしをぞおもふ
されば高きも卑しきも交りむすぶ中立は雪の口切春雨の花より色も香もこひちや品あつてまたやはらかに人つき合も綿ぞとはいざしら雪のかきくれてはらへど袖にぬり桶の暮雪と是を申べき
綿ぞとはいざしら雪のゆふべかな
　はらへど袖につもるけしきは
明暮きやしやな手にふれて聞や琴柱の落雁は詠し歌もゆふひなり
ふきといふも草ばの露の玉ごとを
　手ならす袖に冥加あらせ給へ
「ふきといふも草葉の露の玉琴を手ならす袖にめうがあらせ給へ」吟じ返せばかうばしき梅か枝組や須磨明石君が引手にさそはれて時しもわかぬ酒のかんあい〳〵の長返事遊び過して花の枝に入日をのこす行燈のかげ夕照とおしまるゝ
花の枝にかけて詠めんくれおしき
　夕日をのこすあんどんのかげ
緑樹かげ沈んでは魚木にのぼるけしきありしやくに梢を汲上てさつとたばしる手水鉢風のかけたる手拭は丸にやの子の帆がみゆるひたすしぼりの文字が闕入江もこゝにほの〴〵と手拭かけの歸帆ぞと
手水鉢風のかけたる手ぬぐひは
　丸にやの字の帆のみゆるかな
三十一文字を淨瑠璃へ移り三重引よせてつゞり寄たる八景とさもあり〳〵と述ければ勝元を初めとし皆々興に入給ふ

淨瑠璃作者略傳

一千前軒
竹田出雲掾といふ操り師趣向の名人なり竹田近江大掾藤原清一の親也竹田筑後兩芝居主並金主なり立慶町吉左衛門町兩町の年寄役をも勤む

一文耕堂
初め松田和吉といふ千前軒門人筋立頓作の高弟なり

一千柳
並木宗輔といへり是並木氏の元祖にして今に作者の苗氏に並木の枝葉多し紀海音を合して以上四人を淨瑠璃作者の四天王と呼ぶ

一錦文流　西鶴同時の人
一櫻塚西吟　攝州池田俳人
一西澤一風　正本屋九左衛門といふ書林
右三人は趣向筋立はさしたる事もなけれども古今文者の三傑とす
一竹田小出雲　千前軒悴
一三好松洛　北の新地の茶屋
一吉田冠子
人形づかひ吉田文三郎といふ此悴二代目文三郎おやま遣ひ名人の聞へ高し
一並木丈助　醫を業とす
一竹本三郎兵衛　竹本筑後掾悴
一近松半二　穗積伊助と云醫師の悴
一爲永太郎兵衛　始は竹田庄藏後に千蝶
一春艸堂　高田瑞庵と云醫師俳名
一菅專助　笛十醫師の悴豐竹光太夫
一長谷川千四
和州長谷寺の僧侶能化まで勤めしか還俗して作者と成
一安田蛙文　有馬玄蕃侯御抱の色子

一近松東南　東南伊助と云
老後法體して綾子播磨と改景事道行端唄を作しまた三絃の調に妙手たり
一淺田一鳥　京地町の住森野長三郎と云謠師
一中村阿契　始中村閏助
一八民平七　坂町大阪屋太郎兵衛悴
一若松笛軌　若竹藤九郎といふ人形遣ひ後作者となり
一紀ノ上太郎　本名三井治郎右衛門仙果亭嘉栗と云始八五郎といひし人なり
一福内鬼外　江戸平賀源内と云風來山人と云
博學にして火浣布エレキテルを本朝にて造る
一黒藏主　一並木和助　一二壽軒
一淺田可啓　一但見仙鶴　一近松景鯉
一小川半平　一寺田兵藏　一寺田外記
一竹田伊豆　一北脇素人　一岩瀨左門
一安田安桂　一松田才二　一豐竹珍平
一北窓後市　一戸田不鱗　一戸田吾文
一松岡千助　一東勇助　一但見彌四郎
一豐春助　一若松勇助

一豐竹應律　若太夫芝居主甚六と云
一松田はゝ　俳諧師岡本蘭古後麥隣
一笛躬　二代目鱸屋治兵衞後松隣
一男德齋　竹本咲太夫といふ本名堺三
一榮善平　道頓堀いろは茶屋
一七才子　岡本原一と云御城入醫者
一川四郎　長町分銅河内屋と云宿屋四郎兵衞
一中村魚眼　難波新地中村屋と云茶屋
一近松やなぎ　始並木柳後太郎作
一司馬芝叟　獨笑庵悴
一梅下風　一千葉軒　一湖水軒
一佐藤太

夫戯文の作者の作意はその名の猛く聞ゆるをば其故人善人にても丑淨としその名の優に聞ゆるはたとへ事跡はよからぬ人も正生とす何れ虛を實と見するも勸善懲惡の一助とし音曲の秘傳戯作の大意とても殊更初段口傳にして大かた緞幕に寄する大序の内ヲロシまでは一番の内の式三番なり或は謠より出地より出節より出る事もあり調子は大やう一越可也いかにも鮮かに亂れたる糸をさばくやうに語る是見物の氣をしむるならひなり段切は五段ともに大事なれども初段の段切殊に大事也初日の初段は別て仔細あり二段案傳大かた修羅三段秘傳大かた愁歎作文はもちろん淨瑠璃のこなしあやつり迄も三段目を眼として能ならば曲舞なり口說物語過去目前感淚等の差別あり四段相傳大かたは道行五段明傳大かた問答壹番のくゝりなればむつかしきものなり初段は絹二段目はうら絹三段目は摸樣染色上繪縫箔四段目は糸綿五段目は仕立なり一日の世界の納りなれば至て大せつなる物なるに近年の戯文に五段目なし適々五段目あるは紙半丁計りに何の譯もなき事を書き夫も本出し迄はなく正本を出板するに付て據なく書りまた當世は芝居も見物も氣短くはや合點して五段目は惡人退治見いでもよしせいでもなしなれども正本は作者の寸尺あらわれ不智不文の惡名のがれがたし

今古參考南水漫遊拾遺二の卷終

今古参考南水漫遊拾遺

三の巻

今古参考南水漫遊拾遺三の巻

螺々亭南水主人著

出語出遣木偶

浄瑠璃の太夫出語りといへるものは名ある太夫始めて出勤するか又は遠國へ出て久々にて歸國なし目見得として出語なす或は師父の追善祝儀事都て諸客へ厚く禮儀をなすためなれは行儀正しくすべき事なり昔有隣太和椀久ゆかりの十德または河内通振分髪邯鄲なとを出語りせられしに口も動かさりしは行儀正しく誠にかく有べき事と諸見物感稱せり又西口政太夫用明天皇職人の段を出語りの時首少し右へ傾きければ見物の評判大和におとりしといひあへり纔に頭少し傾きてさへ斯の如し然るに當世は二段目三段目四段目の差別もなく出語にて勤め[illegible]は太夫座といふもの床に御簾を懸る事故實ありて芝居の規模とす近年の如く出語りをよき事とすれば後々には床も無用のものとなり京都の宮地音ふり芝居同然になるべし往古の床は正面に在しを上手の横へ直せしは竹本座にては享保十三年甲五月加賀國篠原合戰の時なり又豐竹座は六年の後享保十九寅年正月二度目に勤し北條時頼記の時なり然れども大切雪の段は太夫豐竹越前掾出語ワキ河内太夫三絃竹澤藤四郎人形藤井小三郎同小八郎中村彌四郎出遣にて勤めたり

（繪一枚略）

往古のあやつりは前に圖する如く人形は首計にて著物を打著せ手も足も遣ひ人の手にて仕たる事にて近世まで子供の翫びにデクのボウといへるもの是なり當代の如き木偶を用ゆるその權輿は大阪の細工人石井飛彈といへるものおとなの手を人形の袖へさし込み遣ふ事甚見苦敷とて工夫なし人形に手を拵へ附たり夫より是にならひて足を附或は一の指を働かし眼を遣ひ眉を働かすなど近世さま〴〵自由に作る是石井氏の工夫なれどあやつり芝居にて尊み申さねばならぬ人なり外題年鑑に云、松本治太夫座にて源氏烏帽子折といふあやつりに藤九郎盛長瀧谷金王丸二つの人形に初めて足を附たり其後宇治加賀掾のあやつりにて世繼曾我のとき朝比奈の人形に足を付る夫よ

り諸流共に立者の人形計りに足を附る事とは成りぬ扨又享保十五年戌八月豊竹座にて楠正成軍法實錄に和田七の人形に眼の働く事を仕初め又元文五年申九月同座にて武烈天皇艤の時佐手彥の人形眉毛働く事を仕初め享保十九年寅十月竹本座にて蘆屋道滿大内鑑に與勘平の人形腹ぐあゐふくるゝやうに仕初む延享二年丑七月同座にて夏祭浪華鑑の時人形帷子衣裳を著せ初め同四年卯七月豊竹座にて惡源太平治合戰四段目にてあやつり仕組の大踊を初めぬ扨又出遣ひといふ事は寶永二年酉三月竹本芝居竹田出雲掾の座元となりし時用明天皇職人鑑三段目鐘入のだん太夫竹本筑後掾出語りおやま人形辰松八郎兵衛出つかひにて勤めしを權輿とす其頃の出遣ひは手摺を離れ長上下をちやくし人形をつかひ又手妻などをもせし也近世伊藤彌八がなしたる手妻人形水からくりの類なりあやつりにて女形を遣ふをおやまといゐる事往古小山次郎三郎といふもの女の人形を能遣ひ誠に生るが如し近世吉田文三郎妙ありし人形つかひの苗字吉田氏と號する事元來あやつり芝居は西の宮道薫坊より發りて神道を主る故に洛東吉田の流れを慕ひて吉田を氏とすと淡州あやつり家の秘書道薫坊由來に見へたり前文にも著す如く石井氏より當代に及んで人形の好みむつかしく成行當時用る所の數品名目あり其荒增を爰に記す

人形品目

検非違使　素盞嗚　文七　由良之助
樋口　天神　實盛　鬼一
蛇羅助　與勘平　團七（ママ目ト云ツ）　一寸
六部　釣船　白太夫　正宗
源太　役行者　日蓮上人

女方の頭

むすめ　女房　傾城　かさね
御臺　老女　おふく

胴の部

丸胴　裂胴　片手擢　懸羽擢

手の部

杜若　袴手　抓み手　草鋏（屛風手とも）
差込手（ちセ手とも）　招き手　ゆび手　弓手
扇の手　鞍の手　琴手　三味線手
太鼓手　杖手

操曲評書

淨瑠璃の評書は今昔操年代記に著せしを權輿とし延享の初め操曲浪華の蘆といふ評書これに次ぐ近世音曲闇の礫といふ評判もあれとも浪華の蘆出板の延享前後は東西のあやつり昌んにして其頃の太夫の俗姓などを知る便りあれば評書のまゝをこゝに載す

操曲浪華蘆序

いつ見ても煙のふとき牽頭庵とよみしは難波の大寺天王寺を出て西北にあゆむこと五丁餘りにして庵あり名を西照庵といふ此所に休らひ酒ひとつたべんと二三人づれにてあがり飲かけしが襖一重あなたに若い者四五人集り芝居の噂とり〳〵評判ひとりは竹本の門流と見へ筑後芝居贔負今一人は豐竹門弟と見へ上野の肩を持出るまゝの打答へつ今日なぐさみ是ならんと耳の垢を取て聞とも云らず竹本方今世にもてはやす此太夫どの去る元文の頃美濃太夫といふて筑後芝居へ初めて出られしが太政入道の四段目のうた淺黄に駒かた紅粉鹿子の大あたり〳〵夫より段々町中に贔負まし其後行平の四段目のふし事此兵衛の場の大當り〳〵其名を直に此太夫と御改夫より替りの度々あたらずといふ事なし別して此度菅原傳授念佛の段の語り内去とふは〳〵御上手今天が下に此君ならで有まじといへば〇上野方つゝと出いや〳〵夫々大きなすこたへじやこちの上野どのならで太夫といふはなし左程自慢の菅原傳授の四郎九郎の場正本にもない事迄口から出るまゝの嘘語何のあれが名人芝居にて語るを鑑とする音曲を本にもなき嘘言を語るもの中々太夫の内へは入がたし正本を鑑としてすなほに語り給ふ上野どのこそ名人なり既に粂の仙人の四段目のふし事同五段目の祭文の所古今の大出來夫より替りの度々當らずといふ事なし別て酒呑童子の四段目の諷ひのふし附過行れし播磨どのも及ばずとの取沙汰それに何ぞや菅原の念佛を鼻にかけてやかましいおけ〳〵と疊を叩き腕まくり額に血筋を張て既に喧嘩と見へし所へ七十餘りの老人立出これ〳〵若い衆聊爾めさるな此出入拙者貰ひます雙方一理屈有之おもしろき評判上野此太夫身に取ての滿足去ながらそれは皆々贔負の沙汰にて評判に成がたし此太が語らるゝ白太夫の場の語

り内大きにさみし給へども此場の文句櫻丸の出る迄大きにめいり見物も氣の盡ざらん所を却て笑を催し大きによろこび夫より櫻丸が切腹刀を渡され介錯に泣く／＼念佛のおもひ入の語り内よし何れを何れといひがたし去ながら某も七十年來此道を好み心懸しが幸ひ是に段々を書たるを持合せし是見給へ左の如くに見立たり

大上上吉　豐竹上野少掾藤原重勝

上野少掾初めは三和太夫とて豐竹芝居に住れしが元來若き頃よりの心懸ゆへ段々淨るり上達致され内匠太夫と名を改め夫より竹本座へ出られしがます／＼淨瑠璃實のり功者と成西の座で巻頭いたされしが越前どのも老年に及び誰か跡目に成べき太夫もあらんとおもはれしに此人ならではと思ひ入られ跡目相續を賴れ則上野少掾を付られしは日頃音曲に心がけ不淺ゆへと諸人賞美する事御手柄／＼此人の藝をたとへば瀬川菊之丞に同じなせといへば小兵なれども取廻りりゝ敷濡事やつし詰め所作事の名人かゆひ所へ手の行が如し別して段切を大事に懸らるゝは上手藝のなす所去に依て瀬川どのとの見立尤音聲の非力は是非なし身の持やう銀持氣質第一諸藝器用にして筆道の達人心すなほにして淨瑠璃に位あり豐竹の跡目と成しはあやかり物お手柄／＼

大上上吉　竹本此太夫

此人の聲を玉子酒といふ心は下手ほど味みがある

此太夫初めは美濃太夫といひ内の名は合羽屋伊兵衛とて若年より此道を好みつひに商賣もせんくわとなりもみぬいたは合羽より淨瑠璃第一聲は下の強ひを受合かつぱ三重の聲の織目ものり地強ふつやなきに油を引きなりうつくしうかち合羽修羅段切の手しぶきに木澁をませて織目やう語給へば流石にも愁ひの段は見物も袖合羽を絞りつゝ終に織目もはなるゝ程見物もじゆくするは適功者名人なり去に依て此人を市山助五郎と見立しなせといへば先藝の一體が功者にして何を語られても間に合ぬといふ事なし先地事ふし事所作やつし修羅段切詰などの味ひ餘り功者にて仕過る事多し去によつてふし附細かにして新ふしおほし夫ゆへ町方にても此人の通りは語り難し其人は面白く名人なれども眞似の出來ぬは難澁／＼

上上吉

此人の淨瑠璃を珊瑚珠といふ心は大きければ　　陸竹佐和太夫

ゃ大銀になる

佐和太夫は佐兵衛とて元は旅芝居の三絃ひき成しが發明にして終に淨瑠璃を語習ひて諸國修行せられしが別て尾州などでは殊の外當り夫より段々上達いたされて當地朝日の宮にも少しの内稽古淨瑠璃に出られしが程なく陸竹芝居に住給ひつき出しより評判よく見物の御意に入るはづ先音聲能とりまはり發明にしてふし附面白ふ語り今の淨瑠璃を開にをとし一流替りおもひ入にあてんと第一に語らるゝゆへ見物の請よし此人をたとへていはゞ嵐新平仕出しに同じ何處やらびら付て又しやんとして美しう地事ふし事藝に應じ愁ひ有あはれにまたおかしき筋もあり是其身其音曲の備はりし名人なりしかし聲の非力は是非もなし此うへに聲丈夫ならば箱入の小判道具と見物どつと譽たり

上上吉　　竹本政太夫

此人を兵庫渡海といふ心は播磨迄はゆかぬ

政太夫はざこば重兵衛とて元來魚屋の鮎より出て猶愛深し播磨どのへ弟子入りして此道を鱗の見入れし如く毎日稽古に飛魚と心に誓ひ立魚の長う短かうふし附の細かき事は江鮒子の如し段々出世の名を上られ次第に味みもつき臼を腹にたがへて飛ぬけの出世は今で小ざらしや播磨どのは鰡なれや同じ姿でも大小の違ひしかし芝居へ出られし頃より餘程聲も大きに成淨瑠璃の一體風も替り功者なれども少しくせあり第一淨瑠璃を練る事あたかも鯨の百ひろほど長し夫ゆへ人形三味線の間も折にははづれ安し此人をたとへば岩井半四郎におなじなせといへば當世藝にて何事も面白ふ致され別してやつし世話事の達人なれば半四郎どのに釣合せしは先師匠播磨どのもみこみ給ひし故ぞかし此上は少しづゝの癖を御たしなみ有て氣を付給はゞ次第に名人の部に入給ふべしといへり

上上吉　　竹本志摩太夫

此人の淨瑠璃を鞍馬の春嵐といふ心は上より下へとる

志摩太夫は八百屋平右衛門とて青物商賣なりしがまだ前髪の三つ葉四つ葉の頃より筑後ぶしになづみう

き身をやつし商內片手に一口淨瑠璃を語りし頃はまだ青のりやねぶか淨瑠璃の節なしなるが夫より座摩稻荷の稽古場へ入込み稽古本に節附を芥子の如く附て飮込もよし柏次第にむまみもつるし柿鐵漿も嫁菜も打まじりて聞きにあつまる折しも竹本へ抱られ自然と音聲備り語り出しの大きさは倉橋の大根强ふ働れしが節附も生姜も長崎迄も贔負よく替りの度々當りめおほし殊に修羅詰荒事は大丈夫なりたとへば中山新九郎に同じ藝者にて一體を崩さず語り開く事すさまじく御聲の分は誰にか劣り給はん此上はふし附味みのたんれん氣を附たまへ夫さへ調へばおそらく恐るべき事も有まじ肝要〳〵

上上吉　　　豐竹陸太夫

此人の聲を郡內縞といふ心は地がようて美しい

陸奧太夫はよしあしの難波の江州邊に色めきたる商人其名を平太といひしがついに商賣も徵屋となりたゞ藝子のみに心をよせ君とねじめの絲竹の調子もやさし胡弓音・節切かや豐竹の立物となりたまひしは誠に音曲の德ぞかし此人を芳澤あやめといふなせならば音曲おとなしうして下劣ず開合さつぱりとしてせりふよし其外萬事取まはりりゝ敷發明先づ當時のあたり役者御仕合〳〵

上上吉　　　竹本錦太夫

此人を太夫年寄といふ心は淨瑠璃の事知り

錦太夫內の名は綿屋武兵衞といふ初めて筑後に出られし名は和佐太夫其頃より上手なりしが暫く休足有てまた〳〵竹本座に住時改めて古鄕へは錦を餝れといふ義をとりて錦太夫と號く淨瑠璃はおそらく誰にか劣り給はねど何分聲拗わるくして殘念なりしかし淨瑠璃は川中での事知りたとへば姉川新四郎に同じといへば脇よりソリヤどふして見立ぞと問ふ中々此人はすい方へ取る淨瑠璃去に依て新四郎殿と見立しは張强きとの事なるかや

上上吉　　　豐竹上總太夫

ヤツチヤ〳〵しばらく此御方を及ばずながら紋盡しにて興中そこ始て京より御下りなされ竹本芝居に住給ひし御名は紋太夫といへり其頃はまだ葵じやと世上で人の惡口は逆おもだかゝ聞てのきつい輪違ひじや聲花やかに花菱やひらく扇の手拍子も幕を打ぬく

朝嵐朝顏よりも語り出しひるまぬ嵐の丈夫さは巴の丸のくる／＼と巡り出したる水車淀の川瀨の川嵐三重郎に見立しは違ひ有まじ武道一まきせりふ聲色さつぱりとしてよししかし是迄は上達が出來安けれども是からが上りにくし氣をつけ給へ吉の字がまそつと白し

上上吉　豐竹元太夫

此人の淨瑠璃勝間木綿といふ心は器用なれど地がよわい

元太夫は京の産なるが生立より越前風に心をよせ明け暮稽古に雪の段夜中におらす書中に小家の軒もつか／＼とたどりまばらに語られしが終に此道に入り豐竹座に下りしが頼まれし役は時頼記四段目殊の外あたり評判よく此人をたとへば嵐小六と同じ事音曲綺麗にして面白し京よりちよとお下り有て早々よりあたり目あるはお仕合／＼是からが大事なるべしといふなり

上上吉　竹本文字太夫

此人の音曲雪降といふ心はしつぽりとして面白い

此人音曲になづみ雨の夜も風の夜も通ひ小町なんなく淨瑠璃の間にむふむ小町片時も早く芝居へ出んと明け暮心闇寺小町ついに床に直つて語らるゝ尤淨瑠璃に兵なれども氣を附給ふ德にはふし事地ごとよし修羅語の類ひちとかひなき音聲此人を山下又太郎と同じ藝といふ仕うち手弱けれども取まはし功者に一見物のうけもよし／＼

上上吉　豐竹駒太夫

此人を昔の紅絹といふ心は初めは裏がよふて今はさめた

當地炭屋町の人なり駒太夫といひしを越前芝居につなぎとめまだ其頃は土佐駒でちいさかりしがうつくしく夫より段々功も行次第に贔負も奧州駒鞭はうたねどいさぎよふはんなりとせし一節はさながらさへたる月毛の駒元來此人器用にて我が一流を語出し第一聲の裏を遣ふが名人にて町中にも此風を學ぶ人多し然かれ共御病氣ゆへ御聲の裏もかれはてゝ曾我殿原の痩駒となられしは殘念／＼此人山下金作に同じ初めはよかりしに今は少しめいりしゆへ此所に直しおくべし

上上吉　豐竹宋女太夫

此人をかん竹の杖といふ心は第一ふしがこまかい

彥太夫といふ名も早くさる澤の宋女太夫と美しき御名に秀し音曲なれどすこし地もかよはきなり尤景事道行の類は美しけれど修羅せりふ段切の飲み込はうすしゑかし近頃は床なれ給ふかげんかのつしりとせりたとへば芳澤崎之助仕出の音曲なり段々に上達いたさるべし今が藝の堺なるべしや

上上士カ　竹本百合太夫

此人の聲を星月夜といふ心は上が賑はしい

此人生國丹州なり爺打粟の頃より專ら語出されしが淨るりもよほど上達致されたりゑかし律義なる音曲にて餘りとんだ節を語らず夫故さほど當り目も少なしなれども一體淨瑠璃に無理はなきなりたとへば三保木七太郎藝に同じ功者なれどもあたらぬは何の故ぞや

上上士　陸竹伊豆太夫

此人の淨瑠璃上手の將棊といふ心は詰がよい

此客人の淨瑠璃町中のおもわくよりも功者分の淨瑠璃夫ゆへするいの悅ぶ音曲なり元來ふし附よく語り口おとなしく地事節事修羅段切も分相應にこなし給へど何分小兵也しかし上手ゆへあたりめ多し中村富十郎に對せり

上上士　陸竹富太夫

此人の淨瑠璃を間夫といふ心は震〱もむまい

此人いなり六兵衞とて前方は稲荷の稽古場にては殊の外當てたる淨瑠璃也御年ゆへにか近年は少し音聲下落いたされしが併しつるしのやうで皺が有ても味したとへば民屋四郎五郎に同じ藝音曲おとなしくて爪はづれに氣の附は年來の心がけゆへ面白し今少し若ければ末の程たのもしかろふのに

上上吉　豐竹伊勢太夫

此人の聲を富の札といふ心は二より一がよい

此人酢屋清左衞門といふ音曲に身を入られ朝夕學ぶ德にや終に豐竹氏の門に入り芝居へ出られてまだ間もなきが夫にしては淨瑠璃床馴し功者なり次第に上達有べし此人三枡大五郎と同じ藝中々氣のつく仕打急に名も出し尤端々足らざる所もあり氣を付給へ今

がかんじん

上上士　陸竹桐太夫

此人の聲水晶の玉といふ心はちいさふても美しい

此人はもと箒商賣なりしが好る道とて終にまんまと淨るり語りに成しが商賣がらとさつぱりと掃た坐敷で聞けば綺麗なれどもまさか床にては左程にもなく此上は見物の贔負をとり箒と願ひ給へ此人をたとへば坂東豊三に似たる音曲なりすなほにしてよし此上修羅段切詰等をよく考へらるべし末々は名も出べし

上上士　豊本鐘太夫

此人を年の明た女郎といふ心はハチ町へ引

此人釣鐘町より出られしゆへ鐘太夫といふ商賣は硯屋なるが豊竹座へ出しがまご肴とおもひしが中々聲のかたきは虎石を擂如しさかし床なれぬゆへか人中では顔も赤間が關音曲よく出來る事もあり悪敷事もありとかく淨瑠璃にむらさき石ありとおぼしめして能氣を附給へ今が淨瑠璃の學文硯と心得らるべし此人たとへば村山平九郎と同じ事出てから間もなきに町中の贔負が強い

上上士　竹本友太夫

此人をいかのぼりといふ心は空でやうなる

友太夫は音曲に心を盡しもみ込たるゆへ今竹本座へ出やうに成たるは誠に音曲の精に入し徳ぞかしさかし偖といふても出られてより間もなき事なれば滞る事あり隨分氣を附て語り給ふべし此人をたとへは吉田万四郎藝ぶりにひとしそは／＼としてさながら藝のやうなりといふ

上上士　竹本春太夫

此人の節をうどんの粉といふ心はちと震へどこまかい

此人うどんの粉の商賣いたされしが商賣に似て淨瑠璃語り口も細かにして美う尤遠音はさゝねどそば切で面白し折には聲の切れる事もあれど三絃で引ぬき蕎麥にすればさながらけんどんにもなしたとへば中村次郎三仕出しの藝に似たる音曲なりなぜならば少し上調子なる事はよけれどさつぽりとしたる事今少しかひないといふ

上上　陸竹常太夫

此人を宮の前の細漬といふ心は細ふてもはぎ

れがする
常太夫は音曲功者なれどももとざしき淨瑠璃にして床にては幕通しがたく去ながら節事景事の類ひ面白し修羅段切に修行被成かしたとへば嵐勘三に同じ事ちよつこりとして利巧なれども兎角上へは行にくし

上上　陸竹美和太夫

此人を天王寺から移す相庭といふ心は平野へとる

美和太夫は道六とて平野より出し人なり道具の商賣なりしが元より淨瑠璃を好みて次第〳〵ににじり上りに成り芝居へ出ぬ先きは今とくらひも違ひ棚なるがしかしいろりと仕た長ひ淨るりと水さしの言てがあらば釜はずに置ずと茶碗と直すべし此人たとへば杉山藤五郎と同前出た所はがらも能けれど何所やらよみかこまぬ

上上　陸竹初太夫

此人を小米淨瑠璃といふ心はかみしめると甘みがある

陸竹の芝居に今が初太夫音曲小兵一體淨瑠璃器用はだに聞へて随分氣をつけもみ給へ聲も次第に床なる〵べし此仁はたとへば坂田文重郎に對せり今では名も出ねど修行の後は御名も出るべし精出したまへ精の一字が肝要〳〵

上上　陸竹島太夫

此人を奈良縞といふ心は同じ縞でも薄ふてよはひ

島太夫と紛らわしくはおもへども是は奈良縞こまかふて聲まで細き千筋島いともかしこき音曲なれども何分修行が足りませぬ尤地はうつくし京縞より修羅の強さは辨慶縞今がよしあしのさい目縞と心得らるべしたとへば泉平三郎と同じ花車方にしてせりふ口跡よかるべし

上上　陸竹左馬太夫

上上　陸竹桝太夫

右兩人はいまだ評判しか〳〵しれず

三味線の部

極上上吉　無類　鶴澤友治郎　　大上上吉　立　野澤喜八

上上　ワキ　鶴澤平五郎　　上上　立　竹澤彌七

上上　ワキ　野澤善四郎　　上上　スケ　鶴澤伊右衛門

上吉　スケ野澤文五郎　上吉　スケ鶴澤万三郎
上吉　ワキ竹澤正五郎　上　スケ竹澤乙五郎
上　三重鶴澤太四郎　上　三重野澤喜助
上　三重竹澤平七

人形遣ひの部

極上上吉　吉田文三郎　上上吉　桐竹助三郎
上上吉　吉田才治　上上吉　桐竹門三郎
上上　桐竹源十郎　上上　山本伊平次
上上　桐田甚六　上上　辰松源助
上上　土佐市十郎　上上　吉田清次郎
上上　淺田太四郎　上上　桐田千藏
上上　北松文十郎　上上　吉田八太郎

右竹本座

上上　淺田元三郎　上上　土佐幸助

豐竹座

大上上吉　若竹東九郎　上上吉　若竹東五郎
上上吉　若竹伊三郎　上上　瀬川平助
上上　藤井小三郎　上上　藤井小八郎
上上　三浦新三郎　上上　植松半四郎
上上　笠井源十郎　上上　若竹淺五郎
上上　豐松祐次郎　上上　山本彦五郎
上上　中村源三郎　上上　喜代竹喜四郎
上上　豐松平五郎　上上　豐松半七

陸竹座

大上上吉　中村勘四郎　上上吉　淺田祐十郎
上上　松本治郎七　上上　出來嶋安兵衛
上上　大野又四郎　上上　芳川龜十郎
上上　中村吉三郎　上上　笠井音十郎
上上　笠井源三郎　上上　芳川藤吉
上上　芳川勘之丞　上上　田中平治郎
上上　玉川又三郎　上上　淺田祐九郎
上上　笠井藤四郎　上上　芳川龜次郎

文正翁曲帯塚

享保十九年寅二月竹本政太夫事二代目義太夫と改名
同二十年卯十一月勅許受領上總少掾藤原喜教祝儀出
語

天神記冥加松

元文二年巳正月播磨少掾と變名なし其後延享元年子
七月廿五日歿す行年五十四同年霜月追善

八曲僊掛繪　　編者　竹田小出雲

此懸物揃の節事は井上播磨掾に始り竹本筑後掾に盛にして竹本播磨少掾に傳りぬ先師二十五回忌の折柄懸物揃の出語いと殊勝なりしが今ははや其人の事となりぬ此人初床の時傾城懸物揃の淨瑠璃成ければ夫に始め是かれ語り置し節に懸物に畫き八幅一對の新なる節事八曲僊の懸繪と號くは功德池の緣に寄八人出語仕候

島太夫　政太夫　此太夫　百谷太夫
紋太夫　錦太夫　紬太夫　其太夫
三絃　鶴澤友治郎　鶴澤平五郎

此翁が生涯肌に纏ひし曲帶を政太夫讓受故師の紀念と大切に所持なせしが亡師十七回忌追福の節大乘妙典一部と俱に荒陵の西門納骨堂の後に納め曲帶塚といふ石碑を建たり左に記す

北向正面奉納大乘妙典
東面　宿坊　法幢院恩順
南面　故師　竹本播磨少掾
西面　銘あり
文正奇興帶塚

僕成童ノ頃ヨリ翁ノ淨瑠璃音曲ノ奇ナルヲ慕ヒ門ニ入テ嗜メリ寬保癸亥ノ秋藝閣ニ入テ此曲ヲ續ンコトヲ示ス予微曲ナリト言𪜈師命辱ク其意ニ隨ヒ且政太夫ノ曲名ヲ戴ク翌甲子ノ秋老師病間藝床ノ儘終焉ニ至ル迄纏ヒシ肌帶ハ翁ノ澤物因後ニ請テ紀念ト拜ス今ニ於テ師跡ニ止ルコト全此名帶ノ餘誠ナリ今年翁ノ十七回忌ニ予寸悃ヲ發シテ此靈場ニ大乘妙典ヲ奉脩シテ其追善ヲ仰グ又彼綿帶ヲ附藏シ陰ニ翁ノ曲帶塚ト唱ン是師恩ノ厚キコトヲ後世ニ止メント欲スル而已

寶曆十庚辰七月廿五日
拜主　薩摩屋十兵衛有保謹誌

天王寺の塔中にも石碑ありて
不聞院乾外孤雲居士
と彫付たり

今古參考南水漫遊拾遺三の巻終

今古参考 南水漫遊拾遺

四の巻

今古參考南水漫遊拾遺四の巻

颯々亭南水主人著

忠臣藏權輿

忠臣藏の趣向は其始めいろは評林に云
元祿十五年東武なる俳諧師寶晋齋其角の許より浪華の何某へ來りし文中に
此ほどの一件も二月四日に片附候て甚噂とりどり華やかなる說も多く候て世上忠臣との取沙汰此節其事計りに候堺町勘三座にて十六日より曾我の夜討にいたし候て十郎に少長（少長は元祖中村七三郎傳吉は二代目宮崎也）五郎に傳吉いたし候得ども當時の事遠慮もあるべきよしとて三日して相止候（前後略）
是ぞ此趣向の始めとして大阪にては寶永七寅年篠塚庄松座におゐて吾妻三八作にて則篠塚次郎右衛門大岸宮内の役力彌は中興までつとめし佐野川萬菊若衆形の時是を勤めしめ歌舞妓狂言にての始として此狂言大當りなるよしとて中寺町正法寺日親堂へ繪馬に此圖をあらはし次郎右衛門悅びの餘りに是を奉納なし今にのこれりとぞ其後京大阪にて數度勤むるうち延享四卯年京都中村粂太郎座本の時大矢數四十七本と外題して澤村宗十郎大岸の役にて六月朔日より初日を出して大入を取しなり其矢聲大阪に響き同じ外題にて市山助五郎宮内の役にて狂言勤たり今の假名手本七つ目は此時の澤村宗十郎が形となりて凡其俤を手本と成來れり其後歌舞妓狂言にも寶暦十一年巳十二月廿二日より角の芝居中山文七座にて泰平いろは行列明和八京四條北側西の芝居尾上粂助座にて小袖藏いろは配安永六酉年十二月八日より大阪角の芝居小川吉太郎座にて日本花赤穗鹽竈是等も追々出て各當りを取といへども兎角忠臣藏出て後は此狂言を第一として仕打も是にこそ工夫物好を入大きに委敷なりたり
一操り淨瑠璃狂言にては其頃近松門左衛門作にて寶永三戌五月五日より竹本座にて兼好法師物見車といへる切りに碁盤太平記と外題し此趣意を出したり尤此淨るりには高師直鹽谷判官また大星由良之助と出し初たりまた豐竹座にては享保十八丑年十

月朔日より忠臣金短冊と外題を出したり此時は小栗横山の時代にて大岸由良之助の名で出たり其後寛延元辰八月十四日初日として竹本座にて初めて假名手本忠臣藏と外題を出して大當りの評判強く有しが其頃太夫方のもめ合出來て此太夫島太夫など半端にして豐竹座へ入替りて大和掾上總太夫入來りて暫く勤といへ共自分の節附なせし程にもあらぬばおのづから勢ひ薄くなりて思ひの外に其年十一月中頃迄にして蘆屋道滿に替りたり最初の役割は

大序　竹本文字太夫
二ツ目　竹本島太夫
三ツ目　竹本信濃太夫
　竹本百合太夫
四ツ目　竹本政太夫
五ツ目　〃　竹本百合太夫
六ツ目　竹本島太夫
七ツ目　かけ合　此太夫　百合太夫　友太夫
　政太夫　文字太夫　信濃太夫

八ツ目　道行　竹本文字太夫
　竹本友太夫
九ツ目　竹本此太夫
十段目　竹本友太夫
　竹本政太夫
　竹本島太夫
十一段目　竹本信濃太夫

大星由良之助 與一兵衛女房　文三郎　かほよ御前 おいし　源介
力彌　文吾　小なみ　甚六
桃井若狹助 寺岡 早野勘平　才治　鷺谷判官 天川屋 與一兵衛　助三郎
おかる おその　伊平次　高師直 十太郎　清次郎
本藏 九太夫　門三郎　となせ　小八
定九郎　彦三郎　伴内　甚九郎
藥師寺　千藏　伊吾　文十郎
了竹　太四郎　郷右衛門　源十郎
喜太八　市十郎

大切敵討惣座中不殘相勤む

されども始にいふごとく此狂言の譽れつよくして始の大岸宮内の名は是にて消て是よりして大星由良之

助にぞあらたよりたり故吉田文三郎此大星の人形を遣ふ由彼細手が風儀をあらはし並木宗輔の作意に丸で七つ目を其儘にて用ひ入たりとぞ假名手本操りにて賑ひし其翌年寛延二巳の春江戸森田座に此狂言を出せしは二月六日なり大ひに繁昌有て大入を取しは山本京四郎由良之助を勤たり時に市村座五月五日より初日出せば中村座續ひて六月十六日に初日出す三座共評よく賑ひしなり京都は中村松兵衛座元にて同年三月十五日初日出す大阪はその暮間のものにて十二月朔日より嵐三五郎座にて初日を出せり此五軒いまだ人形の移しのみにて銘々の思ひ入少しづゝ替りし計りにて左のみ思ひ入性根などゝいふ氣持事はなかりしに近來次第〳〵に仕内細かく成て見物も少しにても脇目などすれば見はづすゆへ氣苦勞に成行ぬ先最初大阪の役割を左に記す

由良之助　二代目 嵐三十郎　　本藏　片岡仁左衛門
天川屋　姉川新四郎　　寺岡　山本小平次
鹽谷　市の川彦四郎　　勘平　嵐三十郎
若狭之助　山本小平次　　石堂　姉川新四郎
郷右衛門　山本小平次　　彌五郎　市の川彦四郎
與一兵衛　市村三甫右衛門　　伊吾　嵐勘三郎
師直　右同人　　九太夫　片岡仁左衛門
定九郎　民屋十三郎　　藥師寺　民屋十三郎
伴内　右同人　　了竹　片岡仁左衛門
與一兵衛女房　片岡仁左衛門　　となせ　富澤喜代崎
おいし　芳澤崎之助　　おその　芳澤あやめ
おかる　吉田萬四郎　　かほよ　小の川かめ菊
小なみ　山下六三郎　　力彌　嵐三五郎

其後三都はいふに及ばず諸國の歌舞妓芝居にて忠臣藏を出す事年々歳々その數算へがたしといへども古今無類の大當りなし由良之助の最上と稱するは尾上梅幸にとゞめたり大阪に於て大當せし安永天明年間に兩度の役割を左に記す安永三年午十二月三日より中の芝居嵐松次郎座にて

ゆらの助　尾上菊五郎　　本藏　中村歌右衛門
義平　藤川八藏　　寺岡　嵐吉三郎
鹽谷　嵐吉三郎　　勘平　嵐ひな助
桃の井　藤川柳藏　　石堂　藤川八藏
郷右衛門　市山助五郎　　彌五郎　坂東市松

與一兵衛　市川宗三郎　　伊吾　右同人
師直　坂東岩五郎　　九太夫　坂東岩五郎
定九郎　藤川柳藏　　藥師寺　市川宗三郎
伴内　中村友十郎　　了竹　坂東岩五郎
與一兵衛妻　嵐七三郎　　となせ　尾上菊五郎
おいし　姉川大吉　　おその　嵐雛助
おかる　尾上粂助　　かほよ　三枡德次郎
小なみ　市川吉太郎　　力彌　生島柏木

其後天明三年卯正月十五日より中の芝居嵐德人座にて

ゆらの助　尾上菊五郎　　勘平　嵐文五郎
義平　右同人　　石堂　三保木儀左衛門
本藏　三保木儀左衛門　　千崎　山下又太郎
寺岡　右同人　　伊吾　嵐文五郎
鹽谷　嵐三五郎　　九太夫　坂東岩五郎
桃の井　中村京十郎　　小なみ　嵐三右衛門
郷右衛門　嵐文五郎　　藥師寺　嵐七五郎
平右衛門　嵐七五郎　　了竹　坂東岩五郎
師直　右同人　　となせ　三枡德次郎
定九郎　加賀屋歌七　　おその　山下八百藏
伴内　嵐三八　　かほよ　嵐三右衛門
與一兵衛妻　嵐三五郎　　力彌　嵐村次郎
おいし　姉川大吉　　おかる　山下八百藏

梅幸集明和二酉の年江戸市村座の條に云

此秋久しぶりにて京都へ登る相談あるとて江戸一統に殘念がりしが程なく談合極り暇乞狂言は暇名手本忠臣藏にて大星由良之助と本藏女房となせとの二役何か彼のこり多がるのと狂言の仕打と近年めき／＼と沙汰よくなりする程の事をよい／＼といはるゝ事を合體しての大入のすさまじさはたとへるに物なし元來此由良之助狂言は

△去る寛延二巳年江戸森田座へ山本京四郎（諱名可中）下り來りて此狂言大にあたりしが始め也其以前故澤村宗十郎大岸右内にて此仕打ありて京にても此人此狂言を出せしなり其仕打をよく覺へ大阪あやつり芝居竹本座にて人形に名を取し吉田文三郎此忠臣藏をつゞらせ彼助高屋の姿をよく寫し遣ひしとは芝居好見功者のよく覺へ褒美せし事なり其頃江戸中村座に彼調子住込居たり大阪より可中森田座へ下りて此假名手本にての大當りをとりし事なり

根元の詞子に此狂言をさせなば當りを取るは極めし事なれば張合て同じ狂言を出すべしと贔負連中の勸めにより一座一决して出せしなり其時に至り市村座に故薪水珍らしからんとて此座も相談極りて江戸ゝ續此假名手本にて三座とも勤めしもとより薪水由良之助役は少し堅きとはいへども堅き所にはもやうを工夫して此由良之助狂言は阪東彦三郎に鬮を上げたり（此時梅幸におかる勘平二役）されども詞子の和らかみに理屈あり薪水の堅き中に風情を込可中の醉中の仕打に差別もありて此三つを合體して梅幸彌工夫をこらし今十七八年の後にあしきとよきを身に合せ勿論人品に據を得狂言の榮合もよくもとより以前の持前の女方に屋敷風俗のりゝしき取合もよく今此時に至りては此梅幸が狂言ともなりし程の事にて九月節句より十月廿日前迄は十日も前に場の吟味もせずしては見物のならぬとて見ぬを耻とすといひ云はれして首尾能大入續きにて連中の見立もますゝ賑ひしはきつい大手柄／＼（中略）明和五三の替りに忠臣藏を出して彼暇乞の時の二役の儘にて大に當りを取詞子よりは姿見よきとて京にても同じ取沙汰安永二巳の春三月名所曾我に祐經勿論祐成の和事大に沙汰よく重忠の三役に切にかさねにての所作事も評よくありしが此前年辰の暮大阪中村歌右衞門座へ登らるゝとて看板も出たれどもいかゞ間違ひしや市村座の居なりと聞て大阪も力を落せし計されども顏見世の外題に尾上菊五郎不登噺といふ間違たるゆへ趣向となる程の間への勢ひなりしが漸此巳の暮大阪登りの相談かたまりしとて先例に任して暇乞狂言に又も忠臣藏にかはらぬ二役に早野勘平との三役やつぱり沙汰よくて前年にかはらず大に入を取名殘も愈々惜まれつゝも旅立て（中略）待兼山の人群て大木戸のヱイトッ／＼顏見世狂言は京へ來たりし時に變らぬ田原武者之助始の小幕の間拍子には大に手ごたへし次に公家姿にての世話事の混雑も和らかにてはつきり事のあざやかに分りし仕打と人柄のよいに大きにうけよく綠上上吉となり次の狂言表方も町方も待兼しすゝあの忠臣藏を間（アイ）の物として由良之助となせの二役江戸京を鳴らして洗ひすぎも足りし此藝幾度でも飽のない狂言に人品仕打にいひ分なけ

れば末の敵討迄もぬけ目なくて何度も〳〵見に行が又大阪賃氣にて中略其秋京都へのおもひ立ありて九月九日より改めて中村座におゐて暇乞として是も吉例の假名手本に由良之助と戸奈瀨の二役皆人名殘を惜み先年にましてかはらぬ繁昌の大入にて十月十七日まで首尾好勤め安永十丑年京都山下八百藏座へすみ中略天明三卯年大阪嵐他人座にすみ寅の霜月顔見世は伊藤祐清にて雪の傘さして若黨奴連出しは去々年京都にての楠正成と同じく猶雷子嵐三右衞門など同道にての同じ役當地にてもかはらず此上下姿を皆悅ぶ事にて春二の替り又雷子相手に細川勝元にて左官に日雇の狂言當地にては少し倸堅過るともいひいかゞや此狂言不繁昌にて不入ゆへ間もなく替りて假名手本由良之助はいつとても申迄もなき事此度は珍らしく天河屋義平役甚手強くせられての其中の和らかみに場棧敷とも一統聲をあげて悅ぶ事日々中略惜ひかな師走の廿日過時季に障られて病臥十日とも立たで醫療盡ていかんともする事を得す終に此小晦日なる日黃泉の旅立も餘りといへば思ひよらずもして息子丑之助の爲にせめては今三四年もあらばとも行も殘るも心のほどぞ思ひやり且は當時ならび人もなき三箇津にての大立者に名殘を惜む計行年六十七歲にして法名則解脫院清譽淨薫信士とぞ往事江戶を勤めし事年數中村座に三年森田座に二年市村座に以上二十五年の勤合て三十年始め古新水聟となり後十町始め大谷廣治事娘に緣を組依之此二人の緣を以て東武にある間は日蓮宗旨にて淺草大專寺に妻と倶に逆修の石碑を建置たり此戒名還濺院永持日實とぞ聞へし右にいへる京地を古鄕として親音羽屋半平の宗旨なれば京大阪に在る間は淨土宗なり是にて生れ附のすなをなる事も猶思ひやりつゝ誠に三佛乘の因緣ともいはんもの歟此人京都にありし間樂屋入の行儀といひ棧敷の客を見舞ふ事はいふに不及惣稽古足揃などにも下袴を着し人の場の仕打を見るにも謹で寒暑に姿を崩さすなすゆへ其出入にも心を附る人こそ多し平生諸事を學び鞠は無地の肌濃ながら誰を友といふ事もなく夫婦連にて垣ある方を尋ね求めて休みなる日は蹴て遊び俳諧も少しづゝ學び將棊は手直りを定め茶は石川流と見

へて折々は釜もかゝりし閑舞は勿論折しも聞へる事多く誠に物に嗜みてしほらしき生れ附なり手跡は拙くもありしと思ひしや息子丑之助へ幼稚の時より敎へ込しとぞいひなせり立物といふものは斯こそありがたきものともいふ人ありてや其響にていひはやすにはあらねども自然と上方役者の行儀もよくなりし事なり梅幸四季發句

梅咲てたより嬉しき吾妻潟
冠を着せても見たし白牡丹
月更て猶々わかき十三夜
此枝にけふも御意あり御口切

梅幸を悼に數句を申出すもくだ〳〵しけれど渠が名譽一句に盡すべからず就中秀たることの三つを擧て是を手向とす

西宮　青魚

寥氣に凝たる雲のたえまかな
大石か忠も名のみの寒かな
かたみには蹇下坂とし暮ぬ

天明五年巳九月京都四條北側東の芝居にて師匠尾上梅幸三回忌追善として尾上新七忠臣藏を出しける時由良之助役は近年追々工夫思ひ入を付ての仕打あるゆへ此度は何もせず正本の通りを勤めんとありしを贔屓それも然るべき歟しかし忠臣藏狂言毎々大入を取大當なるは其役々色々と物好あるゆへなり此度はどふするぞといふて諸見物群集する事なればやはり新意をくわへたる方も然るべしと相談有しよし聞傳へたり是は芙雀の心持も面白く又贔屓は新らしき思ひ入は宜しからざる事を知りながら芝居繁昌を祈る志ありていやみをしつてする所は英雄人を欺く場有て此ヶ簡も可なるべし

歌舞妓狂言本

歌舞妓狂言本の事は前編にもいへるごとく往古は定りたる作者といふものなし俳優家の立者寄合筋立してせりふは出合にいふて見るをならしと云其内に定るゆへ根本といふ物なし一日の狂言とても短き物にて今のごとくむづかしき仕組は役者の心にある事なり夫より後には役者も記臆薄く昔の立物の勤めしを見覺心覺に書て置しが古代と當代とに少々宛は風儀の違ふ所を書添て本とせしが根本の權輿なり其後實

暦十二年午の春東武の作者堀越菜陽淺草塔中にて本讀會といふ事を初めまた明和四年亥の秋深川汐濱にて興行す大阪にては天明の初め永長堂奈河龜助歌舞妓講釋と號て根本の本よみを初め天明四年辰の秋角の芝居藤川菊松座にて思花街容性といふ狂言並木五瓶作にて大あたりせしより舞臺造物の圖を畫きせりふ附の讀本を出し其後役者假顏流行に及び年毎に畫入の根本出板なす事となりその以前寶暦七年丑の四月大西芝居にて四天王寺伽藍鑑並木正三作にて六月迄の大入其節讀本淨瑠璃とて右の院本出板其後安永四年未四月中の芝居嵐松次郎座にて競伊勢物語奈河龜助作にて大當なし同じく淨瑠璃本二冊出板なせり猶又寫本のせりふ帳といふもの當代大ひに流行に及びござりますと書べき所を一夜附狂言など仕組の節畧字にて厶り升と書しも素人目にも讀得て女子の文通にもけふしも長閑なる天氣にて厶り升と書る樣に成たりしもおかし

都風流大踊權輿

明曆の初め洛東祇園の邊に風流の法師あり初秋の頃吾友をかたらひ踊をはじむ夫より元祿の末に至り京祇園町にて昌んに此遊をなし劇場にも毎年秋毎には風流の仕組踊を催し都名物のひとつとなり大阪にても盆替りの大切に踊を勤むいつとても都風流大おどりと記す今絃曲にて翫ぶ三勝心中の唱歌も元來は踊りの音頭にて蔦山四郎兵衞の作なりくわしくは前篇の三勝半七の條に著す永祿の頃京都にて踊うたの作者音頭の名人と聞へしは

八百喜太郎　木地九郎左衞門　種間源三郎
道念仁兵衞　小豆庄兵衞　古今新左衞門
蔦山四郎兵衞　扇屋九左衞門　都源兵衞
都一中

元祿年中京祇園町踊の唱歌番組

翁千歳　奈須與市　さゝらおどり
唐笠おどり　だんじり　競馬おどり
唐獅子踊　鹽釜踊　蘆苅踊
大福帳　鑓の權三　手綱おどり
六法出端　さつまぶし　手鞠おどり
御幣おどり　文七おどり　殺生石
しがらみ　鑓之團助　甲斐脅
三つ車　樽おどり　難波の梅

須磨名所　神垣　福太郎おとく
浮世法師　太郎助𠯁　道念𠯁
おさん茂兵衛　三勝心中　山庄太夫
さねもり　德西𠯁　虫づくし

此唱歌の內鑓の權三といふ男おどり御幣といふ女樽桶などは大阪出羽の芝居にて大あたりせし踊なるよし

古來中興當流踊歌百番目錄

山崎與次兵衛踊　こんぎやう　天滿出づる坊
おしも　ごんごり　ござうつ
與作丹波　都よね助　馬かた
さんがらが　阿部川紙子　ぢゆつちやら
づんがらもんがら　君ちり　さらしうり
難波長吉　一ばん鳥　伽羅板橋
棟あげ　源五兵衛　長刀
小野村彥三　山谷土手道　おさき鈍助
ふくの田　大小けん　外六藤六
丸ふく頭巾　福助買初　有卦初
順禮　次郎冠者　さい鳥さし
鵜の羽かさね　八重垣　ぶん介孫左

髮結小五郎　からかさ　いせき
しんしよのや　楊弓　先陣宇治川
なんほゝ　竹馬　しらかし
ふなさし　七つ道具　はんじよの市
山の手奴　早咲梅　管笠
權の介　金山間夫　岡山通ひ
馬場さき　すま山　しとゝん
四季花笠　櫓拍子　つり舟
三番叟　地ふく　君はしんそ
ゑてゝん奴　世つぎ　糸屋娘
珍內花笠　春ごま　荒木の弓
ぞんぞりこ　午窓　三國玉屋
彌之助　てしやこ　とふらゝ
唐人　ゑしま　暦
但馬小女郎　もんつくつ　都の町靑物屋
揣借　堺の濱　梅の木
手合すまい　藤內太郎冠者　蠏川
しゆんせう坊　伊勢宮巡　せうぶがり
いもの子　小川　ていこや
ほい〳〵　のんやほ　二木

まんまな　　こんどや　　ふ丶とん
さ丶ら

樂家通言

操り芝居歌舞妓の樂屋にて用る隱語其詞際限あらず
殊更あやつりの樂家古傍折々唱へ替れる事あり歌舞
妓にて當代用ゆる通言思ひ出るまゝをこゝに記す

操方の古傍

しんてんとは　男の事
わこす　女の事
ゐこ　子ども
がり　娘
よりと　年寄
ちやうけい　後家
そくかけ　妾
たしわこと　下女
りやうたつ　惣髮
やん　おやま
づるかぢり　藝子
どん　たいこ持
おかのしろ　顏

しろざ　鼻
こつぱり　目
ちく　口
ゐんかう　手
すそく　足
せけん　不見
やつかひ　大きひ
しのき又いも　坊主
金太郎　あほう
ぐるり　帶
かんど　脇差
西の宮　鯛
たつほ　酒のさかな
西國　飯
ぢんだい　汁
しのぎ　鮪
赤馬又せいざ　酒
きら　香の物
おしくすり　唐がらし
しんたら　錢

むき　著物
たけ　物買ふ
こだれる　泣事
まかる　借事
助右衞門　よき事
助四郎　あしき事
善惡は一切の事に用ゆるたとへば見目よき女の事を助右衞門十八と云又目くるしき男ならばしんでん助四郎といふ斯のごとく詞を取合せて遣ふなり
歌舞伎樂屋通言
玄んしやう　給金の事
わたり　拂
さがりが出來た　借金
さがり　拂ひの金を待事
ほり込　少し拂わたす
さげ　日々に渡す賃錢
拂もの　ちん錢
日立　毎日拂の給金
おんりやう　借錢乞
ヒン　かすり取

うかす　物買ふ
ぼろひ口　ものもらふ人有事
からけつ　錢のない事
どろ／＼くわす　駈落
どんちきぐわん　人に損かける事
ほはる　錢遣ふ事
あてる　人に損をかける事
お好き　欲な人
削る　直切る事
壹本　金百兩
ねか　金の事
わや　うそ
ナマ　金の事
わやひん　似せ金
かくすけ　南鐐一片
のふかう　賃の事
埋んで置　かくす
卷物開く　太平らくいふ
とめてをく　かくす
因緣とく　利害とく事

手まへてをく	ちやつと用意する
段取	成行を咄す
紐かつく	尋物の手がゝり
ほとき付る	いひわけ
足がつく	尋物の手がゝり
こみ引	せりふする
だめさす又ためが殘る	念押す
捻りこむ	惡告する
落合附る	落着
調伏	わる口
どけはく	物をはき出す
誰の畑かれの畑	他人の眞似
やり付け	ぶだらくな事
どろ場	わるいくせ取
ソレまく	不通にする事
向づらへ直る	相手に成事
はみはづす	あほうつくす事
ぶい／＼	小ごといふ
首落ち	いとまの出る事
ひに／＼	機嫌取にくいいやな人

ぬつとして居る	うかめている
居直る	後に利強ふなる事
しら似せ	そんな事はわしやしらぬといふかほ
がうしやくもる	惡告する
ボンつく	太平いふ
いきごむ	はら立る
堅と成る	はら立る
エイ／＼ハア、でゆく	大せいつれて行事
立ち眉毛	いかる
さそ	けんくわ
銀の目	南無三にてじゆつなき事
ひらひ子	けんくわの紛れにくるはすかせい
邪人	底心惡い人
車輪王	りきむこと
しろ惡	底心惡い人
事くはし	物をさくじる
金太郎	あほうぬつとしていふ
むきなし	心なし
のろんけつ	氣のない人
たをしもの	不吉もの

うんてれがん	氣のない人
たらすぼゝ	あほうじやなといふけつかう人
なまたれ	たわいのない事
油とる	付目取事
づらす	物を打捨おく事
ゑらたい	すゝどい事
かす喰ふ	呵られる事
てれまく	てらされる
ずぼる	錢遣ふ事
ぼはする	あほう遣ひする
こせ	物をこせつく事
お先き松明	先に遣はるゝ人
しやり引く	のぞく事
糸引く	手すじを引事
ぐらす	種を明す
手を引て行	いつでも一所の芝居へ住事
附けもの	立ものに引附て居る下廻り
ビタ	旅
アゴ	はたご

雜用	宿屋の事又三度の朝夕の事
あて	飯のさい
ほやきもの	喰もの
顔やく	頭立つ人
ゑんかまり	新參
よりと	老人
おか	顔
めんつなぐ	顔見覺る
つぶして居る	色事して居る
せぶる	寢る
ぱれ	果
二軒目	宿なし
貫目がある	上手功者の修業のみへる事
入れ込む	物を拾ふ事又ぬすむ
ワウハづめ	能事多き事
端とる	大勢の中のかしら
ジヤ	見物感心のこゑ
音〆が出た	上手がみへる事
聞かけ	都ての刻限の來た事
叩き込である	修業の達た人

とちる	遅なわる
ずんばた	惣嫁
もみ消し	何所やらでなくする
いがみ	盗人
大筋	大ていの事いふ
長さとる	大勢のかしら
筋右衛門	そこら似た事いふ
さくら	客にうらぬ太郎桟敷
筋うる	成行を咄す
親かた	一座の頭
納る	得心
うは置	旅芝居の立もの
ごんすけ	やつこ
極楽とんぼ	親がゝりの小息子
太夫	若女形
クリ上ケ	サア／＼
がだ	若女形
しんか留つた	狂言の先が留る
色縮	狂言のいろ事
紋合	物の似た事

大くるわ	いろ／＼のかせある狂言
つらはり	最初の出
吹かえ	死かいなとのかはり
狂言かく	嘘を作るいつわりいふ
つるみ	みな／＼といふ大勢
若いもの	役者食間又表方の木戸をもいふ
中働き	役者の下男

今古参考南水漫遊拾遺四の巻終

今古参考南水漫遊拾遺

五の巻

今古參考南水漫遊拾遺五の巻

颯々亭南水主人著

觀弄場雜事

俳諧道頓堀花道に云初芝居其外愛にも錢は戻りといふ句あり延寶の頃は正月二日より初芝居とて賑はしきにつれて此川竹に珍禽奇藝の類ひ錢は戻り〱とて小家がけの見世物も有しと覺ゆれども古老の日記に見へたるは漸六十年以前寶暦九年卯四月四國地より達摩男といふもの來りて大評判のよしまた明和八年卯の春吉田玄水といふ盲人八人藝といふものを初めて大入せしかど寛政の頃には川島柳枝江戸表より來りて十五人藝に妙なり安永三午年には曲屁福平同七年戌の春初音里四郎出たり安永八亥年東武の武人平賀源内といへる人戯作の表德は福内鬼外また風來山人など呼べるその名高し此人の工夫にて我國にヱレキテルを製してみせたり明和五年子の春轉多獨樂大ひに流行なし其後天明七年未の秋江戸より轉田榮藏といふもの來り轉多獨樂に妙手を盡し其曲名數種ありしより又もや市中に獨樂まはし流行して素人にも名人多く出來たり

曲陀螺番組

扇車	忘の渡り	窓の月	鼠ごま
四つ重ね	刎釣瓶	風車	蔦かづら
皿返し	皿もんどり	瀧落し	放し鳥
紐どめ	蟻通	釣舟	見返り
烟管そせい	玉すゝき	きせる下り藤	蟬まる
木曾の棧	谷渡り	木の葉たち	要どめ
雲の棧	この手拍	谷の月	こてかへし
手車	峰の月	蛍返し	そせい
かげの月	綾車	三本杉	合せ鏡
四季朝顔	三光松	てうちんごま	重ね菊
衣紋ながし	白玉	二重玉子	八重かされ
やげんどり	春の緋櫻	筆の先	やうりうの輪拔
豆腐の上	友千鳥	ふじざんしゆう月	要ごま
此浦船	扇子かんせき落	鷲づかみ	眞田ごま
股のこま	袖の露	面かぶり	三番叟
七軒渡り	地摺ごま	女なみ男波	とまりごま

浪まくら　菊流し　せい月　殘る月
桂　川　田毎の月　糸渡し（左右の）　虎の子わたし
通小町　相生獅子　つまどり　宮　參
一本竹　たすきごま　皷が瀧　御祓こま
武藏野　源氏ごま　笠おどり　藤　霞
野かけごま　をだまき　松　風　道成寺
時がね　雲がくれ　三國・　金閣寺
足く留め　子持ごま

寛政三亥年の春は俗の曲ふき同四年子の夏火喰坊主などいへる珍らしきもの出たり扨また珍獸の類は明和二年酉五月に甲州よりかばちや馬來り明和三年戌の春紀州熊野浦にてとりたる大鯨を見せる其後寛政元年同七年の頃も見せたりしが此年は此鯨をみれば風邪におかさるゝとて不評なり最初取たる鯨の大きさ長さ七間半高さ一間半口の濶さ四尺三寸鰭の長さ六尺目方三百貫目餘とぞ中にも大あたりにて今に人口に膾炙するは安永頃の豪島山嵐天明頃の駝鳥寛政三年の水豹近來の熊子丈を卷首とす

安永元辰年阿蘭陀より薩摩國へ傳來なし翌二年巳の春より夏に至り大阪道頓堀へ出せし和名山あらしといふもの疫病疫難魔除疱瘡の愁ひを除くといひ傳へて見物大ひに群集す

（繪　一　枚　畧）

前に圖する駝鳥は寛政元年酉七月阿蘭陀船に乘せ長崎に來る同二年戌五月より道頓堀にて見世物に出す

餌飼一日握飯一升五合惣身重サ拾八貫目ウシロ姿土佐駒ノ如シロ勿論小通ル也

本草綱目曰駝蹄鷄食火鷄骨托禽載諸書云其說有不同實皆一物也雁身駝蹄蒼色擧頭高七八尺張翅丈餘食大麥或食鐵石火炭足二指利爪能傷人腹死日行七百里其飛不高卵大如甕此鳥出波斯國三佛齊安息等西南天竺

屎氣味無毒主治人誤吞鐵石入腹食之立消

此鳥阿蘭陀國にて加豆和留といひ和名駝鳥或は火喰鳥と呼ぶ和漢無比の奇鳥なり波斯三佛齊安息等の西南天竺より出るものなり常に米麥を喰ひ悴なる時は鐵石死火炭などを喰ひその儘糞に出す鳥にして鳥にあらず使穴二穴にして鳴聲地に響き雷のごとく惣毛逆立おそろ敷事いふ計なし一々其謂のべがたし

或好古家の所藏に法眼春卜の畵卷あり半百人一句と題し延寶の頃より寛延に至り浪華に名高き藥商人または放下師の類ひを集て四季に分ち五十句の發句を添たり名人物の畵圖あれどもこゝに略すかの畵まきの序に云

古今のかうかつ成ものをあつめて發句を加へ半百人一句と名付傳る七十歳の異人前後せるは始に業あるものを出し次に浪人の類ひ次に出家坊主勸化の類ひ次に町々の門にたつ或は人寄の場處に床筵をかまへ辻打の類ひ迄を書のせ侍るこんざつは辨へ見るべきなり

寛延二己巳とし八月廿五日　法眼春卜　一翁書

春の部

椀　久　松山を引そこなひも子日かな
源　六　わらんずは堺が安し春の風
箒　賣　霞々八賣物ではく見せの端
順氣丸（かちや）　京遊ぶ小兒のはらのうらゝかに
作兵衞　歯簪に物まね添て梅の花
粂　康　ぬく太刀に人を集て乙鳥の巣
伊勢神樂 兵太夫　あちらから守りありくや若菜摘
くわいてつ　青柳に小西つのがみ一味いれ
鹽屋長次郎　からき世や鹽賣爲にのむ白馬
勅使川原 源　内　見物を呵るが華のすみれかな
三佐ふし　江戸なけを名に附男何櫻
獨　舞　身は風にうごくほと出し古柳

夏の部

太平記　楠は米になりよしあふち陰
道心 かうこう　大津かみは回向のちがふ衣がへ
代　待　庚申の寢ぬ夜を蟬のいびきかな
手筋の勘倉　夏山のきやう場もしらずそみかくた
すた〳〵坊　納涼やどこへ裸の代參り
はぐろ山 かけ出　たゝかねとひるの水鷄やほらの貝
地獄い ゑとき　極熱や陰へ地ごくの所がへ
鐘鑄奉加　繪のかねの鳴らぬ間を瓜のつる
淡島代參　紙ひなや餝るでもなし土用干
西の川原　六道の辻主や汗の入處
日暮林清　よき聲の自慢を餘花の單衣

万六　口笛や是もさいどのけし坊主
開山　方便の太夫すがたや櫻の實

秋の部

どうその坊　人音と萩の葉おとはどうその坊
傀儡師　山猫やそつと野分の門の口
竹田甚右衞門　こらうじませ雲のあしもと月の貌
女祭文　生玉やおそめをそしる女郎花
一ツ綱久米之助　夕顔の花の壽みかや繩の上
はしごさし　星にうす姿やはしご雲の下
万歳勘七　すり出せば河鹿も笑ふさゝら哉
間の山　ふし付て夕あしたのかせぎかな
江邊守　守名つくいつも無射くしや天窓哉
高麗五郎兵衞　品玉や下手のみなかみ下り簗
今慌久　編笠の錢をしやん〳〵くつわ虫
八人座頭　いゐ〳〵の音を鳴虫や艸ぶたい
鐵輪　ひづみあり輪には手めあり後の月
オデヽコ　味噌こしのよれする場所や芋の月

冬之部

鼻の下九市郎　まいにくゐ寒さはじめやうまひもの
舞太郎　坊主でも太郎と名乘る歸り花
鹽汲老人　ふり袖のなりをしはすの月夜哉
荷作七右衞　荷作が昔がたりを佛の名
阿波坐島　追出されやはりおどるや氷鮒
してこいかゝ　雲わたを賞翫せるやかゝが聲
毛唐人　からに似て唐にもあらぬ納豆汁
三本足銀の竿指　庭先に下女のまねくやつばの花
おみつ　三つ足の火鉢をおもふ夜寒かな
二文に米澤彦八　顔みせは年のはなしの冬ごもり
三つ奴　寒籠まけぬ寒さや大相撲

うや〳〵敷も小倉黄門百人一首になぞらへ五十韻の發句を並べ半百人一句と名附るはお月さまにすつぽんをくらぶるたぐひ恐れ多かれどいやしきも高位にまじはるは和歌の德なればゆるしとやあらん俳諧ほくの野語を面にして歌にいひ殘せることの葉をひろふたぐひともなしたらんや是に圖をはさみて童蒙の目をよろこばしめふる事のかたり草とも成ねかしと庵筆に書ながしつれば

寛延己巳年秋九月上旬になりぬ

葉箒賣考諺略雜記一名それ〳〵草三冊ばせを翁門人乙州撰享保四己亥年上木大和繪師川島叙清圖あり略す

難波の葉箒賣は常に酒を好みて瓢を腰につけつゝ長日箒を賣ありきけるが懷より土の人形ふたつとり出し太郎兵衛新兵衛と名を呼び酒の相手にしてたのしむ或人面白き曲者と覺て酒のませんとて呼び入ければ箒賣あざ笑て我汝等を相手にしてたのしむ心曾てなしこなたの新兵太郎兵我心に隨ひ來り我心に隨ひのみ我心に隨ひ歸るなりと唯一口にいひ捨行しとなり這老翁が心ばせは彼今宮の來山が道にておやま人形を求めて生涯愛せられ折こと も高根の花を見てばかりと口すさみありしと同日の論ならんかし

かゝる一奇人なるゆへ其行狀を操りに摸したるは世人よく知れる戲文義經腰越狀三だん目の目貫師五斗兵衛に打扮木偶これなり其文段諺略雜記と合考すべし

酒といふ世のくせものにうかされて軍師も今はちりほこりほうきのさきに二升樽くゝりつけヤアヱイ〳〵ヤアヱイ〳〵目拔師がななんでもせ箒々と賣たる親仁店の端にもしばしがほどは休め土の人形や肴をよせて二つ三つ四つ五つも六つもたべつ押へつあいしよとおしやる脇より人がみるならばかゐまた〳〵をかしかゐまたけなりかゐ

街衢撲若之助傳古文鐵砲に云

大關若之助といふ者あり天地を以て相撲場とし東西南北を以て四柱とす煙雲を水引とし山岳を土俵とす我國の城郭は皆棧敷たり郡縣の來往は皆見物たり關脇小結前頭は我一人にそなへしと大手を振て力足年老て若之助みどりの前髮濾紙の周身腹空うして日曝し或人の云夫角力は力士東西に並ぶを以て是が名とす今汝自ら角力といふは如何答ていは我に對すべきものは酒なり以て一方の關とす我常に是に勝然といへども酒力はなはだしき時は是がために弓を取らるゝ今酒力至て薄し故に投錢を乞ふといふ爰に於て見物四方へ散亂す餘が曰是角

力の果ぐらか鳴呼是相撲のはてぐらか

名代之走坊傳同書に云

老僧不レ知ニ何人一亦不ニ其詳ニ所レ出寺院一蓋陰陽之踏脉厚而終日騁ニ翔於浪速之名區一足遍ニ驚世一因以稱ニ走坊一久聞レ之日甚善名レ我商當文以自當號ニ名代走坊一性躁而多レ言歷ニ行乞ニ錢一曾廢ニ饑餘一不好ニ灑酒一不レ婚ニ女慾一假令雖レ好可ニ誰敢其ニ閨房一哉慰ニ志於佛門一能釋ニ街說法一衆人開レ口頗淡笑於レ是乘ニ其賞一而曰止ニ寂々之論辨一而轉至レ操ニ狂言一乎路光無間鐘慶子石橋仙魚雲絕間各委ニ其所レ好一亦請ニ孔一方見者羅レ彌而投錢如下因ニ孫子之孝心一天感雨中於金錢上受レ笠包レ袂後坐不レ言衆人瞋レ臍猶然抱腕坊曰訛レ人賣僧之常褻レ衣奮レ杖飛行如レ風

頓阿雜事

前に著す十卷とこの拾遺の前文に載せざる雜事を古老の日記より拔萃なしその外世上に流行せし洒々落々の風流なる事どもの年月を記して一笑に備ふ

一延寶五巳年高津新地九丁南瓦屋町人家建
一元祿三年午十月十八日元祖嵐三右衛門死
一同十四年巳十一月二代目嵐三右衛門死
一同十五年午八月高津茶屋堀江新地へ引く
一同十六年未三月玉造伏見坂町四丁目千日前へ引く
一同年四月七日天滿屋お初平野屋德兵衛梅田堤にて心中委敷は攝陽落穗集にあらはす
一享保七年寅十月十四日紙屋治兵衛紀伊國屋小春網島大長寺にて心中
一同年お千代半兵衛生玉にて心中
一同八卯年京橋一丁目道頓堀へ引難波新地と云
一同十一年午四月豐竹座北條時賴記大當其後道頓堀に北條藏といふ土藏建
一同十四年酉七月十五日芳澤あやめ死

末代にも有まじき不可思議の上手既にねはんの砌は芝居主名代金元座元立役實惡敵役道外花車親仁方はいふに不及女形は敎主女形の入滅をかなしみ枕元に立寄足元にひれふし口上言はお經とふれ紙を取違へ二十五の菩薩の迎はせ給ふか如く木戸番は極樂の通り切手をさし出し芝居茶屋賣物商人はみづからを花鬘にむすび場敷中茶屋にいたる迄二わり調錢の群類千軒棧敷の幡天蓋の編笠をならべ新部子みな〳〵歎き騷ぎけるに天より不思議の樂

下りけれども二の替りの櫻の枝にとまり定業ちから及ず
一同十八年丑六月晦日道頓堀火
一寛保元年酉の春大西芝居にて瀬川菊之丞傾城今様道成寺を勤む
笛　嵐七五郎　小鼓　山本京四郎
太鼓　笠屋又九郎　たいこ　中村富十郎
一同三年亥十月竹本座大内裏大友眞鳥三度目の興行の時竹本政太夫初床
一延享元子年高津新地開地
一同三年寅九月角の芝居にて岩井半四郎江戸下り暇乞として傾城淺間嶽をつとむ
一寛延元辰年淨るり祕曲錢といふ小冊出板
一同二年巳三月十八日十九日兩日の事にや北野新家しらしの一件並神寄の船渡し場にて船越十右衛門馬士の喧嘩おその六三心中をも一部の戯文に取組とりあへず八重霞浪花濱荻といふ外題を廿日に出し同月廿六日初日五六日の間に出來作者並木丈助及び豐竹一座の出精にて古今の大當り翌三年午三月十八日より物草の切々しらし追善惣太夫出語にて勤む
一同年夏鶴澤友次郎死
一寳暦三年酉の春〔こゝ〕に京町大文字屋のかぼちやとて其名は市兵衛と申ますといふうた流行
一同四年七月十日三代目嵐三右衛門死
一同年冬より中の芝居嵐座にて道中千貫樋亥二月晦日迄大あたり作者並木正三
一同年十月竹本座にて小野道風青柳硯染太夫此時初めて出座
一同八年寅七月竹田石井龜吉三座の子供役者追々成人におよび候に付十五歳以下計りのものにて相勤む身切狂言に成三切狂言とも見切狂言とも此年より竹田吉三郎嵐と改め同九年卯八月より中の芝居の座元を勤む
一同九年卯五月四日道頓堀火
一同十年辰の春より手鞠うた十二月世上に流行す元來は絃曲家の祕曲作物のうち也
一同年狐が三疋尾が七つのうた流行
一同十一年巳二月四日夜道頓堀火
一同年高い山から谷底見ればお万可愛や布さらすといふうた流行

一同年七月四日藤川平九郎死中の芝居姉川新四郎座にて夏祭浪華鑑團七九郎兵衛平九郎の代り役藤川八藏一寸德兵衛八藏の又代り坂東國五郎勤む

一同十三年未正月九日道頓堀火

一明和二酉年高津新地增地難波新地三町人家建出す

一同年三月九日角の芝居中山文七座こぼち同年冬より若太夫操り芝居にて歌舞妓興行翌戌年顏見世座元姉川菊八酉十一月十一日より花櫓鬪書太平記

一明和三戌年北堀江市の側豐竹此太夫芝居建

一同四年亥の春道頓堀樋の上藥屋の飼熊主八を嚙む

一同年三月天王寺寺町生龍山天鷲寺に於て東都梅柳山木母寺開帳有之同四日中の芝居中村歌右衛門座三の替りに興行乍憚略縁記

抑此新狂言は人皇六十二代村上天皇の朝に初冠せし吉田の少將雅房といへる和漢の才人家に一子なきを愁ひて夫婦日吉の神へ參籠し丹城をなし一子を生ず故ありて父におくれ大津の浦にさまよふを信夫の藤太といへる人商人買とり東に來り彼藤太が杖に死す一首の和歌に

尋來てとはゞこたへよ都鳥
隅田川原の露と消ぬと

詠じ殘せし詠を岡本竹本の淨瑠璃に綴り是迄度々御覽に入候得ども此度天鷲寺におゐて開帳あるのゑときにならひ三卷の歌舞妓に添削し忠圓禪師の開闢せし梅柳山木母寺の古事迄を取組三の替りの外題に成すと云々

座本　中村歌右衛門

糀柳塚　三鳥三卷

一同年夏道頓堀岩井風呂人殺し團七の茂兵衛とて今に毎々切狂言につとむ

一同年北堀江市の側此太夫座染摸様妹春門松大あたり

一同六丑年千日前黑船新地なる

一安永三午年角の芝居小川吉太郎座にて心中野邊の書殘淺尾爲十郎傳海の役にてちよんがれを初て勤む

一同年冬役者評書梨園顊話といふ小冊出板委敷は前篇に著す

一同四年冬中の芝居三桝松之丞座翌申とし顏見世よ

り京都嵐雛助立役と成八枚の表付書出しに直る
一同年より濱芝居宮芝居にて五段續の狂言を初む並宮芝居にて顔見世初む
一同年冬角の芝居にて中山文七留筆 藤川八藏 書出し 兩人花がたにて雙蝶々大當
一天明元年丑三月十三日夜道頓堀火
一同年冬より角の芝居藤川山吾座中の芝居山下金作座兩座とも天下茶屋の敵討大あたり
角の芝居
殿下茶屋娶　作者　並木五兵衛
　　　　　　　　　奈河龜助
中の芝居
連歌茶屋譽文臺　作者　增山金八
　　　　　　　　　　　奈川七五三助
一同三年卯三月二日尼寺月江寺にて土器投會催主二斗庵下物奉納笠着之風土器といへる文あり此會の終りに富士川百八といふ牽頭子ほうろく投をして輿を執たり
一同四年辰の夏楊弓大ろうじの歌堀江より流行出す
一同五年巳四月廿三日夜道頓堀火
一同年春より北の新地芝居大歌舞妓座にて切落しの見物を入るゝ事を初む
一同年七月九日大雨大雷道頓堀にて三女雷に打れ死す千日法善寺に墓あり　施主河きの
妙玄十六歳妙圓二十歳妙西二十八歳
一同六年午の春入歯師の名人日下泰山役者似顔の面を吐出す
一同年七月廿七日前の嵐小六死去嵐ひな助叶と改め悴秀之助初舞臺何れも同年なり其後大西芝居にて櫓脇東西へ歌舞妓の外題を兵附のごとくになし相撲場の表同樣にこしつらひ
前狂言　國性爺合戰　三段目まで
切狂言　毎日替り乍憚口上
一私親嵐潮六御贔負御取立に預り一世一代を仕夫より世を遁れ暮し候も誠に各々樣方の御蔭と難有奉存朝暮罷在候當七月廿七日に故人と相成候夫ゆへ京都の約束も御座候得共何卒御當地に於て亡父追善旁々御目見へ仕度打寄相談の上先年竹本大和掾趣向淨瑠璃外題相撲の儀は則當芝居にて仕候得共其古例を以て往古より仕來り候歌舞妓外題を東西へ分時代世話歌舞妓狂言を二段三段づゝ日々に相改奉御覽に入候間御取立の親共追善のため賑々敷

御來駕の程偏に奉希上候

月日　　　　叶　雛　助

一天明七年未三月法善寺に於て曾我兩社荒人大明神開帳

一同八年甲の夏珍らしくも堀江市の側此太夫芝居にて座元淺尾爲吉を初の十歳前後のおさな子計りを集め淨瑠璃に合せ人形の身振をうつさせ口もせりふをいはさず不殘太夫より語り道具建もあやつり仕立にして町中一統に沙汰よく夫より道頓堀若太夫芝居へ引越七月一日より興行猶々評判よく日増の大入にて役者うない子と云評書出る 委しくは略す

至極上上吉　花桐德三郎 花桐富松子十一歳
大上上吉　加賀屋福之助
切上上吉　藤川音松 藤川音松子十一歳
上上吉　淺尾友藏 淺尾爲子
上上吉　坂田龜藏 坂田助五郎子十一歳
上上吉　中村久吉 中來子
上上士　中村德次郎 中村次郎三子八歳
上上　藤川岩松 藤若子八歳
上上　柏井藤四郎 柏森孫
上　中村八藏 うらや弟子十一歳
上　嵐卯之松 嵐紋松弟子七歳
上　嵐伊之助 嵐役弟子八歳
上　三桝民之助 三大子六歳立役至巻軸
上上吉　淺尾菊次郎
眞上上吉　中山一德 中他子十歳
上上吉　三桝德之助 三大弟子九歳
上上吉　澤村龜松 澤吉弟子
上上士　小川市松 小吉弟子七歳
上上　豐松熊二郎 豐牛子九歳
上　中村金藏 中富孫

惣巻軸淺尾爲吉座元

一寛政元年酉九月角の芝居にて叶ひな助一世一代相勤め同年十一月中の芝居にても一世一代を勤る

一同二年戌の夏難波新地にて阿蘭陀陰繪はやる

一同三年亥四月中旬高入道出るといひふらし町々にはまじないの歌とて張る

誰そやたそ我名もしらて呼聲は　いつくのたそやこゝは神宿

一同年高津新地御藏所替
一同年三月十二日夜道頓堀火
一同四年子の春勢州關の地藏三津寺にて開帳
一同五年二月十九日坂町にて心中あり男女の死骸を
千日墓所に於てさらせし處女の陰門の毛多き評判
にて見物おびたゞしく其後心中のさらしもの止
む
一同年四月法善寺にて三百疊餘恕の大字
一同年五月座摩社內にて長さ二尺の鼠を見せる
一今年蘆手繪口合流行
一寛政七年難波村の農家にいたら貝に南無阿彌陀佛
の六字あらはるゝ同時に上町には南無妙法蓮華經
の文字あらはるゝ
一同年妙々といふ事をいひはやらす
一同年長町五丁目迄を日本橋通と改む
一同八年辰三月三日より生玉にて紀州なもで踊りみ
せる
一同年秋座摩社內にて唐の芝居あり夫よりチン／＼
ホウ／＼といふ事專ら流行
一同年四月大阪中に頓死する人多くまじなひの歌
水神の教に命たすかりて
六部の內へ入そ嬉しき
一同年四月廿四日廿五日兩日坂町天神社內にて金屋
永次郎といふ四歲の男子千字を書す
一同年夏下寺町に涼みあり新清水に音羽の瀧を作り
是に打るゝ人一人廿四文づゝ
一同年十一月東在より新川出來るとて方々へ杭を打
玉造より道頓堀へ水を落し新大和川と名附るとの
事なりしが不出來
一同九年巳二月角の芝居藤川八藏座に於て二の替り
新狂言百千鳥鳴門白浪傾城買指南所の景事を舞臺
納として嵐三五郎西國順禮に出立す
一同十年午三月三日より七日の間天滿天神きしん芝
居願主嵐來芝
一同十一年未五月住吉松原におゐて寄進芝居同年座
摩社內寄進芝居
一享和元酉五月高津新地に於て大佛壽像かけ地拜見
一同二年戌の春京都祇園町より十二三歲計りの女義
太夫下り大流行
一同年九月ばくろう町稻荷社內にて寄進芝居

一同年十月角の芝居にて尾上鯉三郎一世一代勤む
一同三年亥の春江戸女義太夫芝のおでん座摩社内にて大當り
一同年五月二日嵐來芝死去行年七十二歳
一同年十月中の芝居姉川熊次郎座にて淺尾爲十郎一世一代病氣にて狂言つとまらず口上ばかり
一文化元年子三月尾上鯉三郎一世一代の後亦々中の芝居へ出勤
一同年四月四日淺尾爲十郎死行年七十歳同年夏難波橋の詰にて太夫あま酒流行
一同年冬北堀江東側芝居町家となる
一同二年丑の春角の芝居にて森田勘彌上り江戸狂言ゑばらくといふものを勤む浪華の土地に應せず
一同年四月角の芝居にて澤村國太郎一世一代として壽關寺小町相勤む
一同年九月廿九日夜道頓堀火
一同三年寅の春世上に福助折といふおり形はやる
一同年七月廿九日夜道頓堀火
一同四年卯七月六日より三日が間故人竹田近江百回忌に付角の芝居にて追善ちう役者一日操り一日又中役者一日替りに歌舞妓大芝居役者は名前計にて出勤なし
一同五年辰の春二の替り新狂言角中兩座とも江戸山東京傳戲作名古屋山三不破伴左衛門稻妻表紙といふ稗史を種として
角の芝居　傾城輝草紙　作者　近松德三
中の芝居　傾城品評林　作者　奈河篤助
一同六年巳の春竹田大からくり四天王寺大伽藍細見打出し庚申堂万燒見事〳〵
一同年サヽよし〳〵節のうた流行
一同年いろはうたよみ賣流行
一同年六月高津新地御藏跡夕涼み
一同七年午の春竹田大からくり高野山獨案内
一同年唐のナアぶし流行
一同年紙の頭巾はやる
一同八年午の夏菊麻呂といふ者鞠の曲流行
一同年呑龍おとけ開帳緣記
一同年十一月道頓堀火
一同九年申の夏角の芝居にて天王寺鼓樓再建のため

寄進芝居興行
一同年八月難波新地新川に切店といふ長家建此邊に
茶屋多く出來新祇園町といふ
一同十年丙の夏難波新地夕涼み宇治橋はやる同年七
月廿三日先々中山文七釋淨光京都岡崎にて歿す年
八十二
一同年九月二月夜道頓堀火
一同十四年丑の夏投扇流行
一同年八月天滿天神社寄進芝居
延寶の初めより百四十餘年の雜事九牛が一毛なり
委敷は南江年代記に讓りてこゝに略す

今古參考南水漫遊拾遺五の卷終

今古参考南水漫遊續編

一の巻

今古参考南水漫遊續編一の巻

颯々亭南水主人著

歌舞妓芝居起原

道頓堀歌舞妓芝居は寛永年中京都より段介といふ者大阪へ下り下樋渡領の領城に踊りをさせたり大阪にては是をお國かぶきといへり（段介座大阪へ下り義人といふ女太夫を仕立これを太夫義人といふ）其後女藝を禁じ給ひ鹽屋九郎右衛門同九左衛門大和屋甚兵衛河内屋與八郎松本名左衛門大阪太左衛門両京都にて申合大阪表へ下り芝居興行仕度願ひによつて御赦免あり右の者ども多くは濱側にて小芝居を初めたり夫より次第に人數をくわへ若衆子供五十人計り入替て踊らせたり其頃は太夫元芝居名代も極りなく勝手になせし事也然るに慶安五年に至りて左の通り名代改りたり

一大阪名代道頓堀吉左衛門町中の芝居　鹽屋九郎右衛門

一同　立慶町角の芝居　大阪太左衛門

（但し寛保二年の頃は福永ともいへり）

一同　吉左衛門大西芝居　松本名左衛門

（此芝居は戎橋角に仕しゆへ大西といへり今は無之ゆへ豊竹筑後座のあやつり芝居を大西と呼ぶ）

いづれも宅町家の御扶持人也同年（承應と改元）六月十日鹽屋九郎右衛門芝居にて口論有しより其後芝居中へ無錢にて見物人申間敷御制法の御書附出たり今芝居の内にある衛後書是也同年七月に總かぶき芝居御停止に成承應二巳年右歌舞妓太夫元狂言盡の御願申上候て御赦免有しは鹽屋九郎右衛門同九左衛門大和屋甚兵衛右三人也夫より少し程ありて松本名左衛門御免あり大阪太左衛門は其ころ江戸にあり年あつて登り御願ひ申上御赦免を蒙りしと也（正德三年十二月京大阪名代御改寛保二年二月十一日宮地芝居抱子供年數十五以下に改む）

女藝御停止の後小姓を以て女形と

なさしむるに是又女子に紛ふゆへ振袖を禁じ給ひしが小舞所作を勤る時見へ悪敷に困り其趣御願申上しより寛文年中其役者の手のひら程に額髪を剃り振袖に換給ひ右御制禁御改として毎年一度づゝ芝居の舞臺におゐて御吟味ありしが其後十二月二十日南組總會所へ總芝居役者共御呼出し有て先年仰渡されたる箇條を彌慎み相守可申旨屹度御渡さるゝ是を役者總判とも二十日判とも唱へ來りしが近來は御公邊繁多に付十二月六日に役者ども住處の家主五人但年寄の印形を取給ふ其掟は役者たるもの穢はしき異族と交はる事叶はず都て行儀正しきを本とし第一色欲を愼み第二樂家にて酒宴を禁ず第三喧嘩口論勝負事第四舞臺の姿にて棧敷へ廻り行附合事第五舞臺へ任する身なれば遠歩行を禁じ脇差さす事は其長に至る者か太夫元ならでは常に差事無用もし此掟を違背する時は役者仲間を省き可申となり右總判の砌女形の額をわづかに剃たるは咎らるゝ事也又幼年にていまだ帽子かけといふ事をせざる内は制禁に洩るゝゆへ制外子といへるをいつの程よりかセイガイ（セイガイとも）と誤れり

或書に、權現樣江戸御入國の後遊女町を御覽遊ばされ葭原の場所を拜領被仰附候ゆへ四方に堀をあて地形を築立家作を調へ遊々どもを數多集め置候を以て晝の内は諸人參候へ共其道筋左右共に葭原の中にて物騷に有之候に付日ぐれにも及び候へば人通り無之故渡世も難仕旨にて葭原町より願ひ上候間女かぶきを御免被遊被下度との儀に付願の通被仰附候に付町中に舞臺を立て棧敷を構へ踊芝居を初候處珍敷見物事とて貴賤共に入込に殊の外繁昌に及び細道左右に有之候葭をも切拂ひ江戸中より出店を仕茶屋なども多く立續き候ゆへ已後葭原町より願上候て今程は泊人も多有之渡世も仕安く相成候間女かぶきの儀相止め其芝居跡をも町家に仕度と申候に付願の通被仰附候也其の後猿若彥作と申狂言御師願申上京都大阪にても古來より有之儀に御座候へば芝居を御免被下候に於ては葭原を切開き町家に取立若衆かぶきを初め申度との儀に付是又願の通被仰附唯今の堺町を取立踊り子を集め狂言芝居を初め其弟子猿若勘三郎の子孫今に相續して中村座といふ扨又右の踊子どもいづれも前髮だちにて有之候所に右谷將監殿町奉行の節

何方へやらん振舞に被越候所其の兄におゐて浪人小姓のよしにて罷出酒の相手と成り殊の外利發なる立廻りに相見へ候に付將監殿相客へ被申候はあの浪人小姓は何者の悴に候哉我等心易方に兒小姓を被尋候間肝煎可遣との儀に付相客衆密に被申候にはあの者は堺町に罷在候歌舞妓子にて候へば其許などの口入あられ候やうなる者にては無之候との儀を將監殿被聞歸宅被致候と其儘與力同心を堺町へ被差越名主方へ被申付今夜中に踊子共不殘前髪を剃落させ可申候但し元來若衆かぶきと有之御免の事に候へ共踊子共の中にて太夫分の者一人は前髪を立置候樣との御申渡しにて其夜中に悉く只今の通に野良頭とはなし被申候よし同役神尾備前守殿へも翌日御城におゐて將監殿右の段御申達被成候となり

物眞似狂言盡名目

承應元年六月かぶき御停止仰附られ役者共皆々難澁におよび候に付段々御願ひ申上候處翌二年三月役者物眞似狂言盡といふ名目にて京大阪とも免許ありしより芝居木戸口の上に將棊の駒の如く成る札に物まねと書記したり是櫓免許の札にして外の芝居に上る事叶はず物まねとは聲色(こゑいろ)を似するにあらず老若男女貴賤僧俗それ〴〵の物を眞に似する事也

眞似とはまねぶといふ事を略したる語にて學の字也源氏物がたり品定の所にまねき出といふ詞もまねをして聞すといふこと也俗に眞似と書は後世おしあてたる字也

歌舞妓の元祖於國始て京都北野にて芝居興行の時は白幣を櫓の四隅に立たり天正年中より慶安の頃まで幣にて有しが承應二年歌舞妓の名目物眞似狂言盡と改りしより南部和光同塵の心にて明暦年中に至り京大阪共今の如く塵に轉じて是を梵天といへり總じてかぶき物眞似の本義とするは勸善懲惡の道にして惡魔障化を除く心にて梵天王を祭る旨趣也永祿年中京北野の軍用の人桝を於國に給はり五奉行の指圖を以て四方を圍ひ天下太平の爲神慮をすゞしめんと麾を以て老若男女を招き賑はふ今芝居の櫓に掲し鑓五本の形なすものは右五奉行の鑓の餘風也猶又櫓にて太皷を打に見物を入る時早めて打は陣太皷の古例也人寄せの内樂屋にて鐘太皷を交へ拍子をとるこれを含來留(シヤギル)(やどりきたりとめるといふ心なり)といひしが今はシヤギリと唱

へ幕明けに近づけば甲(カン)太鼓を交て勇ましくなせり往古は人寄にしころといふ物を木戸口にて打しが今は二の替りの打出し計りに打つ

當時此しころを打もの川竹の兒童十五以下の者集りて勤る例と成りこれをシコロ連中と唱へ小兒の中にも頭たちたる者ありて嚴重なり

同時に見物を出さん爲果太鼓を打これを打出しといふ昔は總はてに反鐘を鳴らせし事あり

當代京都四條の芝居にては打出し夜に入時は禁庭を恐れて櫓太鼓を不打顏見世の初り太鼓は寅の刻に打夜中ながら明に近ければ赦されたり

大入札櫓幕

櫓の向ふへ大入札とて圖の如き(編者曰圖略之)札を揚る事往古はなし按るに是は夜顏見世と成たる時櫓太鼓の一番二番三番を知らせん爲角なる行燈に火を點じ一番より二番三番と取替て群來る見物の目じるしとす三番の行燈を揭れば夫より式三番叟を勤む平日は未明に三番叟を勤る

樂屋の定例にいまだ三番叟を勤ざる以前に樂屋にて狂言に用ゆる刀脇差の類ひを拔は其日喧嘩口論のあやまち出來るといひ傳へて堅くこれを禁ず又三番叟濟む土場に飛かふ蠶人に付すとこれも芝居の一奇事とす

次に脇狂言二番目狂言を勤む(ワキ狂言二番目の故實奥に記す) 右二番目の狂言の終りに舞臺の大幕を引き樂屋にて合來留を打つ

ぶたいの上にて淨瑠璃床の下をはやし方の樂屋とす此處を囃かけ場とも唱へ都て狂言中古はやしの鳴物此所にて勤め合來留も爰にて打

是れを合圖として櫓のむかふへ大入札を揭る也たとへ櫓ありても濱芝居には大入札を揭る事不叶これ大歌舞妓の權を見するもの歟

中古まで竹田座龜谷座は濱側に在しゆへ中の芝居お濱芝居といふ宮地芝居は岡島元右衛門竹本濱太夫享保年中京北野におゐて初たり

往古の櫓幕(編者曰櫓幕圖略之)は白布に座元の定紋を付しゝがいつの頃よりか雜喉場魚問屋仲間より例年顏見世毎に送れり茜染に白にて座元の定紋を附け天地は白の岸岐取也四隅に座元と名代の名を墨にて記す往古は鹽屋九郎右衛門松本名左衛門など座元

名代を兼帯せし事も有しが近世は名代計りと相成嵐三右衛門岩井半四郎片岡仁左衛門大和屋甚兵衛座元を勤し後も安永の末天明の頃迄は中山文七中村歌右衛門三桝大五郎小川吉太郎など歴々の大立物勤しが近年にては子役又は若衆形を座元となし自然と一座の尊敬も薄く成たり此格式の嚴重なるは江戸三座のみ（京都には名代両人ありて座元なし太夫元と称するは銀主をいふ）大阪にても座元を太夫元とはいへども昔の如く其人の下知は主君の仰と心得作者の指揮は軍師の法令と守りし禮儀今は絶たり

さこば　座元　名代　座元の定紋
座元　名代　同断
同断

木戸

往古の芝居は假家建にて万事手軽く表も櫓の下に鼠木戸二所ありて見物は鼠の穴へ入が如く肩脊を屈曲て越るゆへに鼠木戸といふ當代は一箇所に成れり北野の人桝の時陣中の出入に相言葉を以て通路なすゆへ相言葉口といふ此處より見物を入し其餘風なるよし又大木戸を往古は乗物木戸といふ（當代小屋芝居の御用口に同じ）其證とするは風流色芝居（正徳年間上木江戸山村座の一件を戯作せし冊子也）物さはがしき中に取交へて櫓太鼓のひびきすさまじく木戸の外にはあらおのこ共諸はだぬぎになりてわれ一と何やらんのゝしりよばふその中をおしわけかの山伏小太郎を伴ひのり物木戸あけさせ誰恐るゝけしきなく小太郎さじきへのぼりつゝと書り扨又往古は道頓堀側芝居の近邊とても今の如く寸尺の地を爭ふ事もなく建家まばらなるゆへ炎天或は俄雨の節見物の諸人難澁に及び候に付元祿十二年卯十一月立慶町役高二十八役吉左衛門町役高二十役都合四十八役右両町へ役に水茶屋一軒づゝ御免にて濱側におゐて板圍ひの内に床几をかまえ茶店を出す事とは成たれども其頃は萬事手輕き事にて右茶店四十八軒出來しゆへ世俗呼んでいろは茶屋といふ寛

保の始め東都市川海老藏大阪出勤の時高津より眺望
して

　高臺(すき)にのぼりて見ればいろはに帆

と口號みしよし栢莚句集に見へたり此の茶店にても
木戸札を賣り是へ立寄る見物客を芝居へ誘ふに茶店
の女(今チヤコといふ)丸盆に茶飲茶碗湯補に茶を入て通ふ圖
人倫訓蒙圖彙にあり今も通り札し招牌を出すは往古
の餘風歟明和の末までは三重の手提に握飯煮しめあ
ん餅を詰て商ひしが當時は美肴さまぐ\に成行ぬ又
一種連中の通り札とて圖のごとき紙牘あり中古まで
は芝居の連中とても嚴重に通り札を證として木戸口
を入しと見へたり

連中通札
三人座本三桝大五郎

此通り札は寶曆明和年間中の芝居の連中札也

鴈金文七といふ戯文の中に配り札といふ事ありもし
や此連中札の事にや鴈金の戯文は元祿十五年壬午八
月十六日御仕置に成たる五人男の事を綴り松平治太
夫座に同年九月九日初日出すその文中に

五人仲間が手を揃へ付ておりてとぼして進ぜふそ
のだいに配り札を澤山に下されよ云々

招牌名目

端看板は元祖名古屋山左衛門が興行せし時より辻々
に張札を出せし事なり然れども今の端看板とは異に
して屹度したる格式也

從五月八日於北野名古屋山左衛門在所京遊女之所
作成之一覽念望之人須來見

と斯の如く記せり又承應の頃の表招牌は杉板に圖の
如く外題を書たり

ゆどのさんかいちゆう

女人成佛

後年緣を拵へ大形にせしかど畫をかく事もなかりし
が表淋しきとて一枚紙に繪をかきて上に張る事を初
めしは元祖榊山小四郎の工夫也夫より庵看板といふ
もの始り當代にては江戸看板所作かんばん或は總畫

添看板など丶數品に及び書面の圖取外題の書法に故實あり

庵招牌の圖

しさり

書仕切といふ

書面の故實與に記す

割外題 角外題 大外題

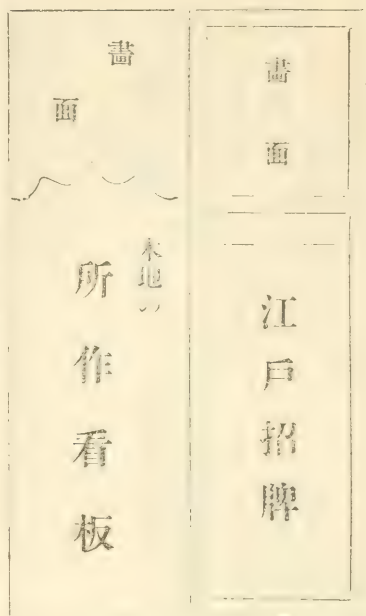
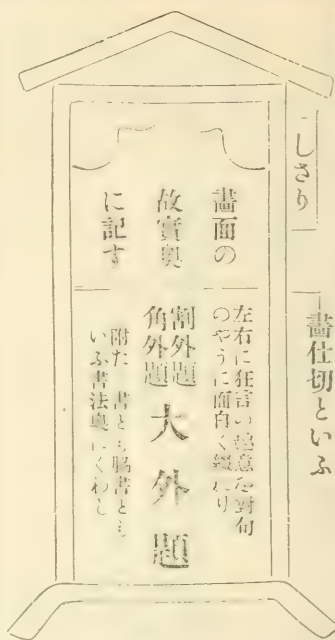
左右に狂言の趣意を對句のやうに面白く綴たり

附たり書とも脇書ともいふ書法與にくわし

書面

江戸招牌

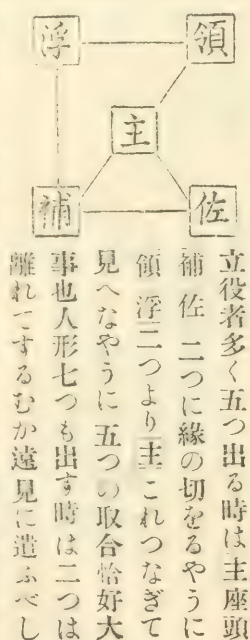
書面

本地の所作看板

一枚招牌とて華美に成ても庵の形を造れるは往古の遺製なるか今もいほり看板といふ又一種江戸看板といふは江戸三座に出す看板の形ちにて通言お江戸と呼び近世専ら此招牌を用ゆ一枚看板の書面は大體三つに限る定法は二つを立役の一筆留筆一つは女がたの留筆か一筆か見合なりこれ外題看板の恰好なり置

天　人　地

やうは天地人の見合肝要也四か六の偶數に成時は牛馬鳥虫其外何にても生數を添て奇數に合す添看板ならば九か十一にても苦しからず

領　主　佐　浮　補

立役者多く五つ出る時は主座頭補佐二つに縁の切をるやうに領浮二つより主これつなぎて見へなやうに五つの取合恰好大事也人形七つも出す時は二つは離れてするむか遠見に遣ふべし

斯の如く一枚看板には大立物ならでは載る事を赦さず別種添看板といふものには八枚の役者を不淺書面に著せり一枚看板に書面一つ出す事あり譬ば菅原にて丞相天拜山のあれの段或は忠臣藏の由良之助城渡

しの類ひ其權輿寶暦十三年豐竹座のあやつりにて番場忠太紅梅箙に官女の姿にて蜑の籠を戴き魚賣さまを畫きしを諸人珍らしき畫面ならといひあへり其外三十石艠始に島原の大門口にて神道源八闇口平太の試合を御船か仲居姿にて見る躰或は秋葉權現廻船噺に日本馱右衛門玉島幸兵衛が川こし姿是等い畫面其頭大ひに評よくいづれの狂言とても一枚看板は繪そらごとゝて狂言外の無理を目あたらしく畫けり又惣畫とて一日の狂言を一段〳〵畫きて出すなど近來の事也所作かんばんといへるは京上り江戸下りの暇乞或は師父の追善などに所作事を勤る時に出す大かた欅の木地を用ひ所作事の外題に發句を添しは寶暦九年卯の十二月二十二日より角の芝居にて中村富十郎九州釣鐘岬の大切江戸みやげとして娘道成寺の所作を勤る時

　　唉からに龍頭へとゞけ山ざくら

といふ自句を書しより始む以來暇乞の所作かんばんの風流とす大外題の文字は奇數を用ゆ奇數は半にて陽物の起り始る形也偶數は長にて陰納り終る形ち也外題に用ゆる文字扁なきは陽扁あるは陰と定め止りの文字扁ある文字にて留め終り納る緣儀を取又文字の留りの恰好居りよろしく成物也大外題の文字五字七字九字の奇數を用ゆ昔より偶數を用ゆる事もあれども果して不當りか又は不時の災ひ有ゆへ偶數に成文字の外題は作字寄せ字にて奇數にする法とは成ぬたとへば三十石艠始の夜船の文字を作り日記を謎記文章を璋などゝ寄せ字にて數を合せ妹脊山婦女庭訓ををんなに婦女と文字を延す奇好は起り陽氣を動き聚るの道理なれば也又角外題割外題といふは

源八渡　　濡髮長五郎　　いづれも對の人物な

平太濤　　放駒長吉　　つの外題といふ

去し噂の　　聚樂の館に

　青江下坂　　賤女の愛妾　　此如く書を

十人切子の　　大佛前に　　割外題といふ

　大座敷　　官女の姿宅

其外三十一文字の和歌或は流行うたの唱歌などを書事ありこれを笠といふ脇書は附たり書ともいひ一日の狂言の趣意を左右へ對句のやうに書き其の中に曲言を交へて文の長短は定りなし又五言七言の詩句と歌を見合せる趣向もあり中古以來かふきの脇書は長

文にてあやつりは短しいづれ長短に寄らず作意の面白きをよしとす外題の風流割書の（脇書とも附り書ともいふ）面白く書納しは江戸の堀越菜陽浪華にては並木正三也

今古参考南水漫遊續編一の巻終

今古參考南水漫遊續編

二の卷

今古参考南水漫遊續編二の巻

颯々亭南水主人著

傾城外題

夫經論書籍の外題を附るに七種の立題といふ事あるよし台家四敎集註に委し芝居の外題も狂言になき事を外題に作るも本據に寄所あるをよしとす往古島原かぶきの頃は髮切島原、坂田島原、八島島原、安宅島原などいふ外題なりしがいつの頃よりか傾城といふ文字を冠むらしむるも京島原傾城買の狂言をなせしより初り二の替りにはかならず傾城事を勤る事江戸三座にて曾我狂言を出す例の如く成りしは京都都万太夫座より初め兎角理屈ばらぬやふに和らかになくては春めきし二の替りの詮なし往古の離れ狂言の時傾城買の狂言といふは先づ其場に口上出で只今けいせい買の始りと觸れて仕舞へば村山八郎兵衛といふ立役買人にて此の打扮白加賀の衣裳に銀箔にて鹿の角を鋒のさしたる所を總身の摸樣として一尺七寸の

脇差を向ふへ落る計りにぬきさし左を張り右の手に扇の要をつまみ楷懸りよりゆらり〳〵と出て正面に立ながらせりふ八幡これが買人でやすと扇にて脇差の柄を叩けば見物一同にソリャ買人の名人が出たは〳〵と聲々に譽る事しばらく鳴りも鎮まらず時に奥屛口より揚屋の亭主古き淺黄袴の腰をねぢらせ手拭を腰に差し貝杓子を持出てヱヽ旦那お出かといふ聲の內諸見物ソリャ亭主が出たはアノ顏を見よおかしやと笑ふ聲次のせりふもいひ出されぬ程也漸笑ひ鎮れば八郎兵衛なんとまだ太夫は見へぬかイヤもふあれへもふ追附是れへ御出と橋懸りを打詠めアレ〳〵今是へ見へますといへばヤレ傾城が出て來るはと見物みな腰を立直し物をもいはず揚幕を詠め居る時にけいせいの姿おかしき衣裳金入なり其頃は女形のかづら懸るは稀にして多くは花紙を兵庫髷につゝみ只一人出て大盡樣お出かへといふを偖もと悅び大盡と互に手を取れば又笑ひ座敷の挨拶一つ〳〵こなしをどよみを作りて擧たり偖亭主盃を廻らし酒の肴に太夫樣一曲の舞所望〳〵とせりふの內頻て囃子方出てならべて女形舞の所作ありこれが狂言一番の仕

組也後世は太夫の出はそれ／＼に位を分ちぬめり十三段ありといへ共はやし方の秘曲とす

今古狂言趣意

往古寛永の頃の歌舞妓能の狂言をやつし又は新たに作りて狂言盡と號し一幕づゝの離れ狂言は前文の傾城買の趣なりむかし當りを取し狂言と聞及ぶ浪人盃といふもの富永平兵衛といふ作者が著たる藝鑑に何事も時に隨ふ習ひなるにわきて狂言の風は時代の品變れりむかし狂言盡の時當りしと承り傳へ侍る浪人盃といへる狂言を左に記するもの也

萩山の家中高坂釆女といふ武士馬上にて使者に赴て道の景色を稱し旦那より小性家來までせりふ渡り釆女が曰むかふの館は聟君のお國なれば國境より行儀正しく何れも麁相なきやうにと申さるれば皆領掌の答ありて謠ひに成る也馬を廻らし玄と／＼行向ふへ深編笠著たる浪人者あゆみ來て玄ほ／＼と平伏すれば家來咎めて何者なれば慮外もの笠を取て片附ろといへども更に答へなしイヤ推參なと侍共立寄らんとする所を主人ヤレ待て／＼彼者我に向ひて平伏の體と見ゆれば是全く慮外にあらず去ながら笠を取らぬは心得ずコレそな男某に向ひ用ありげに見へたるはいかなる人にて何の用事仔細聞んと有ければ彼男謹んで釆女殿には御堅固の體先以て大慶至極以前御懇意の拙者なれども年經たれば聲も聞わすれ給ふべし今日此道筋を御通りと承はり餘りなつかしく最前より待受け御馬の先きに平伏致しながら御勘氣を蒙りし身なれば顏を貴殿に見せ申も恐れあり又面目なく存じ慮外の編笠眞平御免と詞の內釆女つく／＼思入有てム、扨は貴殿こそ以前の傍輩轟辨右衛門殿ナ此方もなつかしく存る某は御用の道すじ馬上は御免編笠を慮外と申にあらず御顏が見たいお斷の段何か苦しかるべきさあ／＼笠を取給へ辨右殿に違ひはあらじと詞かけられ扨々能こそ御推量いかにも辨右衛門がなれの果てお耻かしやと笠取れば先は御無事でお久しやと互にふりにし物語いさゝかの事にて勘氣を得られ貴殿申出さぬ日とてもなし何と暮し給ふやと問はれて辨右衛門ア、忝ひお詞浪人の身なれば朝夕の煙もかつ／＼習ひ置し謠の袖乞無念とは存じながらもと諫言過て御勘當かならず時節を待れよと其元の御詞を賴みて今日迄命ながらへ候也御上使とあれば殿の御名代御目見へ致す心地仕るこれを浮

世の思ひ出と致す了簡随分御無事にお勤あれお急ぎの妨げ名殘は盡ずお暇と涙ながらに立行を𛀙ばしと留め仰の如く今日殿の御名代追附御勘氣御赦免有と所領安堵のしるしの盃を致さんハツア是はありがたしと又手をつけば釆女扇を開き途中の馬上取あへぬ心ざしの大盃イザ〳〵つげと小性にいひ附れば同じく扇を銚子としつぐ思ひ入飲むこなしサアいざ參れと辨右衛門にさす此お盃といひ志しの深切いつは飲ずと丁どたべんと三度いたゞき飲む思入有て時刻うつると立ざまに御志しの御酒に醉ひたりと足元ひよろ〳〵國を祝ひ禮をいふに舌廻らず小歌ぶしこなたは馬上に涙ぐみおさらば〳〵と別れ行此一段にて大當りせしとなり其の後二番續き三番づゝきと成女形を入れて勤る事江戸にては市村座より初め大阪にては寛文四年の頃今に用ゆる狂言非人敵打の作者彌五左衛門より二番續き三番つゞきの狂言とは成たれども聊の趣向也其頃の外題は

室寺開帳　岩井座
龍女つやおしろい　同座
南都十三鐘　同座
船岡山御幸の車　同座
御評番の平野ほん樣　同座
鎌倉正月買　嵐座
おばせ心中　同座
名殘の盃　同座
信田妻後日　同座
女郎二河白道　同座
丹後國成相觀音　竹島座
大和室の綱引　同座
よめかゞみ　松本座
大和國ちごの文珠　荒木座
當座中將姫二代記　同座

延寶年中元祖市川團十郎より江戸表にては京かと時代事の狂言を取組其後三番四番五番續とす其頃の狂言は才牛の作多し（才牛は元祖團十郎俳號）其中にも不破名古屋鳴神の狂言は自作也其比は俳士又は遊人の作にて別に作者といふものはなかりしが元祿の頃作者と極りしは京都村山又兵衛座に杉三安部万太夫座に近松門左衛門大阪鹽屋九郎右衛門座に近江屋久四郎といふ作者ありしより段々上手出て江戸續狂言の中にも元祿の

頃より津打治兵衞といふ者出て手柄をなせし二河白道の狂言を初にて江戸狂言の筋時代事に世話事を取組珍らしき趣向を初め是より當時の四番續と成たり京大阪の往古は先ず式三番叟を勤め次に脇狂言夫より第二番目三番目四番目五番目と離れ狂言なりしが其後上中下三番續の狂言に成し時ワキと二番目は離れ狂言にてワキ狂言は大體踊りをなす脇おどり共いへり其角の句に

花誘ふ桃やかぶきの脇おどり

右の踊りは若き女がた子供紅絹の着附に花笠を着て踊り次に小詰打揃ふて鑓踊を勤たり脇踊の唱歌には

春霞踊　さし本調子

長閑なる世にいざ打つれて春の野山を分つゝゆけば立そろ／＼のふ春霞のどかにめぐる日の本の千代のかげそふゑいにゑひ若みどり子の日の松も君が世は久しかれとぞいわふためしや

チドリ

松のよはひと我君がよと／＼共に千とせの末かけて千とせの共にともに八千代の末かけて

同

幾世かはらぬ我君が世は／＼ともに千とせの末かけて千年のともにともにちとせの末かけて

同

若い衆は落よ／＼と袖を引／＼袖ハヤアおつともヤア此みやおちそろか

同

紫の色に心はあらねども／＼ふかくヤア人をばヤア思ひそめつるか

同

十七が親にかくしてかねつけて／＼笹にヤアふる雪ヤアノ扨はをかくす

ちらし

ヤンレめでたいは千世の初めの壽きをいわふためしの色々はヱイ春のあしたの若水を君にさゝげてまいらしよのふかずのみこたち打つれて蓬萊山の舞の袖かへす／＼も梅のかほり香

此餘四季踊京鹿子踊君が羅漢の唱歌は松の落葉集に出て江戸伊勢田舍芝居には古來より今にあれども京大阪はなしと書り此書元祿十七年甲申三月に上木す最早其頃に脇踊はなかりしと見へたり江戸三座脇狂言

中村座　酒呑童子　壽大おどり

市村座　七福神　梅が枝大おどり

森田座　福神遊　花おどり

扨又二番目には一趣向ある其頃のはやり事を短き狂

言に取組若手の立役女がた衣裳を餝り三番續也劣らじとはげみし事にて中興迄は中通りより勤めし也夕霧の狂言は元來京都にて二番目に若手の役者勤たる狂言の趣向なりしが殊の外大當りにて三番續の狂言悪しく見へしゆへ銀主方の望にて右の趣向を續狂言へ取組色事仕の開山と呼れし坂田藤十郎藤屋伊左衛門の役を勤めしが原來よく出來たる狂言を名人上手にこなせし事なれば京都はいふに不及諸國へ大評判の聞へありて前代未聞の大當り今に傳へて相勤る狂言とは成ぬ其頃の根本を見る心得とも可成は續狂言上二場なれば上の口明上の中入と名附け中の狂言二場を中の口明中の中入といふ然るに中を四番目といふは上の狂言に中入二つありても上一段の内中も又同じ上より算へる時は中は二番目なれどもワキ狂言を一番目とし二番目の離れ狂言を其次とし上を三番とし中を四番目とする義也中古以來脇踊止んで能狂言の萩大名又は薩摩守などを勤め脇狂言といひしが寛政の頃より其儀も止しゆへ二番目を脇狂言と心得たる人多し二番目に一趣向ある離狂言江戸三座は今に中通りより勤れ共京大阪にては小詰出て（小詰は部屋といふ）二の替りは壬生のシャデン／＼の鳴物にて物いはぬ花盗人三の替りはかつこほうろくおれがするのをコレ見をれヒッヤヒウにて濟し盆替りは井戸堀又は俵盗人其餘駕籠ぬけ師匠釣りなど前狂言といひて數種あれ共當代は目をとめて見るべき程の上手なし昔はワキ第二と濟て幕を引やいなや長上下いため附てさつぱりと讀立る役割が一日の初めなるゆへ屹度なしたるものにて勿論口上役は大阪にて柳武兵衛、水島四郎兵衛京都に角平宇右衛門、元海庄兵衛、松川六郎左衛門など口跡よく遠音さしてあやよく聞へ役人替名のいひたてつまづきなく適の聞ものなりしが今は二番目の幕引と甲（カン）大皷の音かしがましく早朝より見物は大序の幕の早ふ鳴かしと苛つゆへ外題脇書の風流役者替名附の觸紙を讀とも聞人なし（口上役携へ出る役割附を觸紙といふ）口上役幕外へ出て二役觸れ或は聲ふれ病氣ふれ打出しの切口上まで嚴重に勤るを大かぶきの格式とし濱芝居にては此事なし

評書

古今著聞に云、春はさくらをもて第一とす秋は菊をもて第一とすと宇治殿仰られければ公任卿梅の候は

んには櫻第一とてはいかゞ候べき（中略）猶春の曙に紅梅の艶なる色すてがたしと申されけるはいにしへの粹なることぐさにしてこれらをやよき品定の權輿ともいひつべし年毎の評判記はかの梅さくらの沙汰にひとしく技藝の功拙を論じて春秋の花實のあざやかなるが如し技藝の評書は西鶴團水の頃より昌んに成行其磧自笑に移り其後其笑瑞笑など其意を續ぎし時は評判記といふもの京都を本阿彌のやうに思ひしかど浪華の二斗庵下物酒屋隣馬宿其外魚丸泊鶯など評して今猶年毎に出板なし當代にては大阪を本家とす評判記に著す位附の昇進は明暦萬治の頃より粗見へたり夫より物に准へ出せる事年々に其數不知といへ共位は上上吉を頭とす其後元祿の末より寶永正德享保の頃に至り位を六品にわかつ

三が津總藝頭　無類　　極上上吉（至極上上吉 大至極上上吉）

大上上吉　　眞上上吉　　功上上吉　　至上上吉

外に盡の白字褒美附等の故實は好士の知れる所なれば爰に略す評書五つの傳の內に寸延尺墮の傳と號して一寸づゝ延て行人に逢ては行船の岸は跡へさがるやうに見ゆる段ありて次第に出世すると老こむ役者の見合には細評祕事ある事也一年江島其磧八文舍自笑と確執の事あり正德四年午正月出板の評云役者同利講の序に江島其磧その趣意を書り

東西〳〵扨わけて御斷りを申ますは役者評判本は中比出水通和泉屋八左衛門と申草紙屋板行致し年々古板に書加へて或は役者舞臺鑑又は機關帶などゝ外題を替て出し候所に此役者同利講の作者其磧と申好者三箇津を三番にわけ一切づゝの序をつけ御慰に上中又は白字の上など申位附をいたして役者口三味線と題號をつけ麩屋町通八文字屋八左衛門へ遣はし申せば早速板行にいたしぬそれより每年せがまれ乍斟酌年々仕り遣候所に又二條通正本屋九兵衛方より一とせ餘儀なく賴まれやむ事を得ずして役者一挺皷と申を仕遣候然ども八文字屋と正本屋兩方かけ持に同じ事も成がたく正本屋方は團水と申好人へたのみ八文字屋方は例年たへず仕遣候五六年以來は評判の所計は先格を以て其年の狂言の當りを見て自分にも可成事と評判の仕方をおしえ八左衛門にいたさせ外題目錄三箇津の序を仕り遣候然るに此作者其磧一所の江島屋市郎左衛

門と申新本屋と役者評判本は向後八文字屋相仕に致され末々迄入魂にせらるゝ樣にと作者色々申せども八文字や一人していつ迄も可仕由事切不同心にて都て江島や方をさして似せ本又はまぎらはしき草紙など出し候と八文字やより斷書出候段作者身に仕候ては心外の至りに存候抑々八文字や八左衞門と申草紙屋は何にて世間へ廣く名を發し候哉二條正本屋おなじく鶴やは古來より上るり本にて名を取八文字やは京芝居の歌舞妓本を板行仕候外さのみ家名を世間に御存知にても無之候然る所に此作者其磧松本治太夫方へ淨るりを作り遣し其語り本を八文字やへ遣し板行させ候てより年々の評判本は申に及ばずけいせい色三味線又は曲三味線禁短氣傳受紙子色情雨ひいな形御前曾我傾城の懸書數多作り遣はし候處に各々樣の御意に入八文字屋〳〵と是より浮世本評判本の名取のやうに罷成候事八文字やの功にて候や作者其磧が功にて候や此段憚ながら世上の人さへ御了簡被成可被下候樣更作者の實名を出さず作者八文舍自笑と致させ候程の深切をかへり見ず今にては八文字やと名を取

申上なればたとへば烏が母と書て板行仕出候ても八文字やと申名にて賣申との所存高鳥盡て良弓藏るとやらんにて功を立遣候作者の申分も用ひず作者一所の江島屋をけづり一人の功に可仕存念是によつて當年より江島方に役者評判本板行仕候以來は毎年出し候間御求可被下候八文字屋には今迄八文字やと名を取らせ候作者の功を奪ひ自分の功に仕度存念有之候へば右の品世間へ披露いたす事氣の毒に存じかぶき本配りかんばん等に此方似せ本の或はまぎらはしき本のなどゝ小書をして八文字やより出し候右之通に少にても違ひたる事をかく長々敷書顯し板行に被成ものに候やまぎらはしきと申小書仕る手間にて眞實まぎらはしき事にて候はゞ此長口上をとめ申が眞にて候總じてまぎらはしきの似せ本のと申もたとへば八文字や八良左衞門板などゝ仕出し候はゞまぎらはしき共可申あの方は八文字や板此方は江島屋板と仕候にまぎらはしきと申わけは無御座候八文字屋抑々の評判本又は當世本の作者は其磧と申に紛れ無之候を其まゝ其作者の仕りたるふりにて新作出し候八文字や

こそまござのはしきことは申べけれ近頃片腹いたいせんさく此方のは數年御なじみの作者御佳例の評判本新規の作の八文字や評判と御見まがへ不被遊御求御覽可被下候扨京しばゐの評判は一座元づゝ座分に仕候間御しんべうに御一覽奉願上候追附評判のはじまりさやうに御心得なされませふ

ゑじま屋市郎左衞門

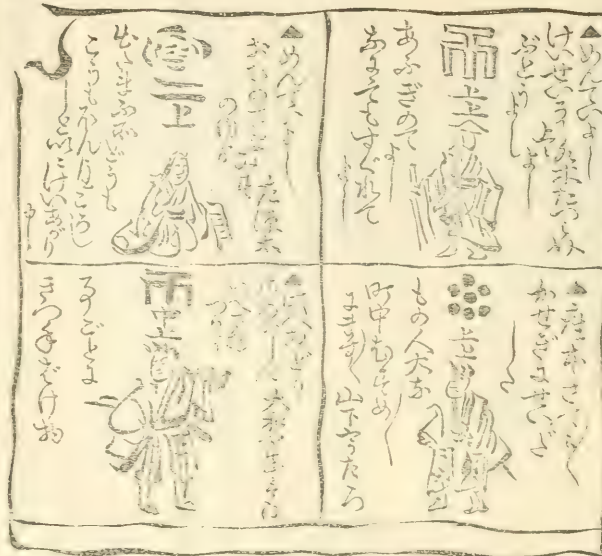
其碩の傳は古老云、京都京極通誓願寺は淨土宗の本山にして本尊は春日神の御作の大佛也此等の門前に昔餅を賣る家あり大佛餅とて世にもてはやし繁昌して富巨萬の財主と成厥后豐太閤洛東六波羅の南に方廣寺大佛を建立せらるゝゆへ又他家の餅屋大佛餅とて新に店を開きて繁昌連綿たり京極通の初めの餅屋は業を轉じ誓願寺通柳馬場へ變宅なし子孫自然と奢に募り遊里に巨萬の財を費し酒に落たる風流家にて傾城禁短氣の類數百部の書を著して自笑にあたふ衣德は其碩といひ通稱江島や市郎左衞門此家を大佛餅の根元とす

八文舍自笑は京都麩や町の書林八文字や八左衞門といひ性は安藤氏也延享一年丑十一月十一日歿す年八十餘京都二條寺町本覺寺に墓あり

むかしは折々半切摺にせし役者附に藝風の評を書加へ位付を冠らしめてこれを賣たりはなはだ危なるものなれども一座の魁首或は其比の花がたならでは載ざるゆへ此評判に洩ざるを譽とす其圖を左に摸寫す

（圖組版の都合にて次頁に入る…………編者誌す）

往古の評書に位附の外にその人物の品目を分ちたる書あり役者目利講といふ評書の目錄に正德四年上木 思入片岡仁左衞門、本實柴崎林左衞門當世音羽太郞、三郞、やつし大和山甚左衞門、りかう阪東彥三郞、こなれ桝山小四郞、根生藤川武左衞門、評ばん三浦義左衞門、一風村山平十郞、當風片山小左衞門、根ぬけ山田甚八、きれい百八一首源三郞、人相澤井甚右衞門、功者竹島瀧三郞、名取山本歌右衞門、なじみ荻野長太夫、愛敬かつらぎ常世、思入野崎和歌浦、こなれ佐野川花妻、娘風水木染之助、里から花井小山三、一種梨園顛話とて安永三年の雜評あり

梨園顰話首題

維此册子細論劇場標題初挂姓字終揚圖黑船使示姉
川腸褒貶不笑巧拙賞詳昔時自笑簡易何當

浪華　斜旋子識

標題

南雅置酒　漁江吹笙　珉子借面
里蟬奏箏　華曉花圃　三蝶蘭亭
讃多夜雨　睦友晨風　慶子湖柳
鯉長丹楓　虎宥藥鑄　平久酒池
孤立浦灘　岩止怪奇　四聲燕子
棣石海棠　富尾輕薄　朱連濃粧
奧山紅畵　其答白衣　伯子俠蚓
都舟盆魚　歌七貧士　一光官厨
丸手脩婦　黑稻博徒　八甫高低
英子風流　可慶茗話　志山花談
由男大商　雷子少年　杉鳥周鼎
里環般盤　舍柳園圃　梅幸雪梅
梨園顰話

顚顚逸人撰

余暇日遊二子書肆一偶看三架插二小册子一乃採讀レ之
所レ謂評二死舍衆伎一者也其辭固鄙俚無二足レ見者一

且視其所評隲者似未必盡當稱技或過其實然至瑕庇一不論之矣今夫俳伶之於道大槩有三日技曰貌曰聲然技有工拙貌有妍醜聲有清濁苟至其美於三途者寥々乎無幾矣是故雖山男梅幸微瑕猶不能無之況其碌々者乎而今特擧其長而不謂其短則爲論之偏矣夫評者能褒貶其長短之謂也今評而無褒貶豈得謂評焉乎于玆余有意補其向未盡者雖然余亦自幼不甚好雜戲故所見者固寡今擧其所識者一二而聊戲評隲之爾甲午冬日記

南雅(櫻山四良三)

如窮措大置酒雖不至腥羶粗極雅致

漁江(三桝德二郎)

如月下吹笙風韻淸爽氣格高朗

珉獅(嵐雛助)

如英雄欺人又似樹牡丹於百畝富麗不可及若其作愁貌似借面弔喪雖勉學痛哭原非出于肺腑

里橙(尾上粂助)

如少女奏箏雖非大雅音情致有餘

華曉(中村喜代三)

如藝花圃雖爛熳悅目如總雜何

三蝶(嵐三十郎)

如癡子日臨蘭亭積功久而終不似然還優黃米者流縱逸破法

讃多(姉川大吉)

如蕉窓夜雨雖風致有餘恨景物蕭條

睦友(嵐文五郎)

如晨風體小而伉健適利雖鴻雁能當之又似駿馬馳郊一瞬千里亦別無雅觀

慶子(中村富十郎)

如西湖烟柳綽約近人情又似西施毛嬙無論才藝却扇一顧粉黛無色

鯉長(中村粂太郎)

如霜後丹楓惜其景在秋冬之際然却優于桃李多媚而少風致又若聾者彈琵琶初似不可甚聽者然至其妙處使人酸鼻

虎宥(中村十藏)

如二欒鑄鼎一雖二燦爛鑠一レ眼素非二三代物一

平久（坂東三八）

如二酒池肉林一直是豐饒耳又似三武人弄二三絃一抗浪中時見二癡態一

孤立（生島柏木）

如二清流短棹一復瀟灑一一覽而已

岩止（坂東岩五郎）

如二覇王樹一怪々奇々見者無レ不レ解レ顔

四聲（花桐豊松）

如二燕子花一雖二復嫣然一不レ作二空谷幽蘭之清雅一

棣石（山科甚吉）

如二雨中海棠柳陰鶯語一

富尾（藤川柳藏）

如二輕薄少年一頗有二才氣一然不レ免二疎率一

朱連（嵐七三郎）

如二醜女濃粧強顰笑一

與山（淺尾爲十郎）

如二紅毛畫一雖二精工驚一レ目惜乏二雅色一

其答（澤村國太郎）

如二白衣大士一似二嬌艶一而乏二媚態一又似二雨後聞鶯一

幽艶閑雅恨微有二濊音一

伯子（市川吉太郎）

如三夜蛙伏蚓聲振二月露一非レ無二清致一然不協レ律

都舟（三桝宇八）

如二盆池金魚一粗足二清翫一耳不非二江湖中物一

歌七（中村歌右衞門）

如二貧士一表二鮮衣一座語則可也若起行則時露二襤褸一

一光（三桝大五郎）

如二太官舊厨一雖レ有二大牢一時不レ能レ無二宿味一

凡子（中村治良三）

如二孀婦衣二繡羅二復華整一不レ堪二動止一

黒稻（三桝他人）

如下博徒家無二擔石一一擲百萬上又似二貧寺啓龕一雖二復臚列一不レ堪二優詐一

八甫（藤川八藏）

如二孔北海一志大而才疎又似二吃人勉作二雅言一乍高乍低

莫子（小川吉太郎）

如ニ風流少年一凡百伎藝無レ不レ通獨不レ涉ニ世務一
可慶（市野川彥四郎）
如ニ書生茗話一非レ無ニ淸致一然亦興易レ盡
志山（市山助五郎）
如下父老入ニ少年場一强滑稽劇談上雖レ出ニ一二笑話一
不レ堪ニ陳腐一
由男（中山文七）
如ニ都下大商一錢帛米穀俱足獨法書名不レ眞
雷子（嵐三五郎）
如ニ千金少年一銅山金埒口不レ言ニ米鹽一
杉鳥（嵐三右衛門）
如ニ商彝周鼎一敦古可ニ貴重一而不レ便ニ于世用一又似ニ
殘荷帶ニ疎雨一雖ニ衰落一亦自有レ態
里環（嵐吉三郎）
如ニ老婆茗話事々皆實際一又似レ讀ニ周誥殷盤佶屈聱
牙一
舍柳（中山來助）
如ニ園圃假山池一大費ニ人力一而竟不レ及ニ眞者一
梅幸（尾上菊五郎）
如ニ雪裡寒梅一風骨勁雄氣韻淸雅又似ニ宋儒註ニ經籍
レ文貴レ質惜終墮ニ于理窟一

書梨園顧話後

此書也細ニ論舞伎一而盡矣更世之論ニ舞伎一也從ニ已之所ニ好而論レ之然十之七八多不レ當也凡論ニ舞伎一者以レ士士農々工々商々之能彷ニ彿于彼一而爲レ工矣士不レ士農不レ農工不レ工商不レ商則爲ニ之拙一亦不レ可哉今世若ニ梅幸英子鯉長慶子一者意用任ニ其能一細心竭ニ其巧一使ニ視者自酸感一矣是伎之爲レ工者也若ニ由男八甫珉子其答一者滿腔盡ニ其情一而忽理戾ニ其性一矣加之僻錯懸情還而至レ敗與是爲ニ之拙一亦不レ可哉余好ニ雜劇一故知ニ此書之能辨ニ工拙臧否一矣余亦私謂島梅兆鯉慶於レ伎獨質也由八珉其於レ伎猶文也此之輩子弟使下少年徒好ニ其文一而暫極中耳目之美上矣彼是歟非歟吾與質矣甲午蒲月望後三日

北窓散人書

其頃時代の評書には三都の序文に各一趣向ありしが近來は書林丁數を厭ひて其事止みぬ元祿寶永正德頃の序文を集めて役者萬人かつらと題せし小冊ありこれを見れば八文舍の草紙氣質もの、作意にひとしく面白きもの也淨瑠璃太夫の評判は今昔あやつり年代

記浪華の蘆間の礫といふ三本の外はいまだ閲せず是を思へばあやつりよりは歌舞妓芝居に華あればこそ元祿の頃より百三十餘年の今に至り年毎に出板して役者評判記は俳書の春の部正月の季にも入べきものを

今古參考南水漫遊續編二の卷終

今古參考南水漫遊續編

三の卷

今古参考南水漫遊續編三の巻

颯々亭南水主人著

劇場顔見世

歌舞妓芝居の顔見世といへる事往古京都村山又兵衛（中興芝居の祖なり）若き時明暦萬治の頃までは一座みな我抱にて興行なしもし新參の役者出勤する時は正月二日の初芝居より五日の間諸見物へ目見へをさする是を今年は村山座に顔見世が幾人り有とて群集して見に行たる事也又兵衛六十八歳の時京都に芝居三軒大阪にも三軒出來て役者も數多に成りけるゆへ毎年同じ顔計りにて興行するもいかゞとて互ひに入替て座を組たり然れども其役者に暇を遣すにおよず約束ほど勤めて又元へ戻りたるに其後松本名左衛門座より一年抱といふ事を初め京大阪新抱の分は一年ならでは住ざるやうに成たり嵐三右衛門太夫元をせし時より一座の役者十月晦日切に暇を遣はし霜月朔日より新抱の役者計りにて顔見世を初む其頃東都の俳士寶晋齋其角大阪に下り居合されしにや五元集に霜月朔日の例をと前書にて

　諸人や嵐芝居を冬ごもり

と繁昌を賀して送られたり嵐座の芝居大入にて遅く行かば場處も有まじとて見物夜中より群集して後には初夜頃よりも詰かけゝるゆへ是を嘉例となし顔見世には夜芝居興行する事とは成りぬ其後寶暦八寅年十一月二日より翌卯年顔見世角の芝居におゐて

座元中山文七

（江戸）市川竹十郎　中山新九郎　中山東助
松山三十郎　中村四郎五郎　阪東岩五郎
山下治兵衛　三桝大五郎　中山文七
嵐　松之丞　三名川才藏　山下金作
姉川大吉　中村小伊三　中村喜代三郎

これ迄夜分七日の仕來りの所此年奉願上日數十日夜顔見世と成り又明和元申年十一月二日より翌酉年顔見世角の芝居にて夜十日又晝十日の顔見世を初む

尾上七三郎　藤川八藏　中山來助
市の川彦四郎　中山新九郎　桐の谷權十郎
淺尾爲十郎　桐島儀左衛門　中山文七

中村千藏　太夫中山與三郎　佐野川花妻
中村粂太郎　桐の谷秀松　芳澤崎之助

顔見世棧敷の直上りせしは寶暦九卯年十一月二日より翌辰年の顔見世に角の芝居へ江戸表より中村富十郎罷上り福源氏壽卷（ふくはるげんじことぶきのまき）といふ顔見世狂言古今例なき大入にて夜十日の内棧敷直段一間分十五貫文までせしを昔より聞も及ばぬ事にて全く慶子一人の手柄といひあへり

市川枡藏　市の川彦四郎　中山來助
中山新九郎　中山文七　坂東岩五郎
山下次郎三　坂東國五郎　三桝大五郎
三條浪江　中村花咲　嵐松之丞
山下金作　嵐小伊三　中村[illegible]らし
江戸中村富十郎

又珍らしき趣向せし顔見世は明和四亥年十一月五日より翌子年角の芝居中山來助座にて

源平藤橘男女相性鑑

といふ外題にて

坂東滿藏　中山來助　市の川門三郎
坂東豐三郎　桐の谷權十郎　笠屋又藏
嵐七五郎　桐島儀左衛門　市の川彦四郎
澤村國太郎　姉川きく八　花桐豐松
嵐雛治　芳澤あやめ

座附の役者に縁引の綱を取らせて即座に顔見世狂言とす則狂言作者の口上招牌に

乍憚口上

一何がな御なぐさみにと存じ當顔見世は男女の相性にて狂言の儀お目通りにて座附の役者に縁引の綱を取らせ引合し立役女形の相性にて善惡を定め直に取組御覧に入候不都合なる芝居お目まだるく思召可被遊候へ共お取立の程總座中共奉願上候以上　作者　並木正三

其後明和七寅年閏六月十二日より角の芝居にて

蚊追店（てんが茶屋の敵打）催馬樂踊始（すみよしおどりのはじまり）

といふ外題にて右の狂言未明より初め式三番座附引合有て大切天下茶屋の場にて座中殘らず風流大おどり見物人の場のうへに大きなる鬮を釣りておをぐ仕かけなど其餘年毎に珍らしき趣向あり又寛保三年亥

年かほみせ大西芝居中村十蔵座に外題を初る
工藤祐經大磯通、夫形萬葉故郷通、伊達與作龜山通、
寶曆十三年未十一月一日より翌申年顏見世中の芝居
三枡大五郎座
嵐 七 五 郎　嵐 三 五 郎　坂東岩五郎
嵐　小　六　三 枡 貫 藏　染川此兵衛
中村吉右衛門　三枡大五郎　山 下 金 作
中村富之助　嵐　雛　助　桐の谷秀松
中村粂太郎
右の一座顏見世狂言に淨瑠璃もの源平時代を取合三
場とすいづれも諸見物よく知れる當り狂言
上の巻　冬籠紅梅續
中の巻　艶源平躑躅
下の巻　嫩駒千本櫻
明和二年酉の十一月朔日より翌戌年顏見世中の芝居
三枡大五郎中村歌右衛門合座元にて狂言は六番續初
日後日と一夜替りに勤めし事あり
三枡大五郎一座
坂東三八　嵐三五郎　嵐藤十郎
中村十藏　中村國藏　山下若五郎
坂東岩五郎　桐島儀左衛門　三枡大五郎
姉川大吉　中村千藏　市川萬九郎
三枡長太郎　山下爲太郎　生島金作
三條浪江　嵐　雛　助
中村歌右衛門一座
中村吉右衛門　嵐吉三郎　嵐七五郎
市川彦四郎　三枡貫藏　山下次郎三
染川此兵衛　坂東豊三郎　中村歌右衛門
山下金作　桐の谷秀松　坂東豊吉
嵐松之丞　中村玉柏　嵐三勝
嵐　小　六
鶴の丸の軍勢は伊豆源氏の出陣
祇園守の弓勢は篠馬源氏の門出　大座附灘凱歌
酉十二月五日より中村歌右衛門一座の役者は北の新
地中村龜菊座へ引こし同十二月一日より三枡大五郎
一座ばかりにて初鎧源氏譜といふ狂言を勤む寶曆七
年丑の十一月二十日より翌寅どし顏見世を竹田石井

龜谷三座の子供役者打寄角の芝居にて興行す座元嵐粂松竹田座

竹田德次郎　同　太吉　同　金才
同　元市　同　槌松　同　米松
同　門吉　同　鳴五郎　同　伊勢松
竹田與市
竹田嘉吉　玉川大次郎　中村吉次
中村繁藏　花桓豐松　市川萬五郎
大和川金道　中村松右衞門

石井座

竹田吉三郎　同　岩松　同　万德
同　百松　嵐　七藏　同　元二
同　春藏　同　小三郎　同　德松
石場音松
姉川みな二　同　外山　阪東菊松
嵐　豐松　市川源三郎　桐の谷山吾
姉川ときわ　萩野千藏

龜谷座

柏井森藏　中村國藏　阪東喜藏
龜谷喜吉　十木菊松　龜谷次郎吉
同　松八　同　梅八　同　彌大郎
同　竹八
山下龜松　十木市松　玉川富瀧
市村さの八　嵐辨之助　淺尾十次郎
龜谷鶴八　嵐國市

竹田座狂言

鬼一法眼三略卷　二の切
おはつ徳兵衞　浮名曾根崎　よどや橋のだん

石井座

假名手本忠臣藏　四つ目　九つ目
大塔宮曦鎧　四の切

龜谷座

御所櫻堀川夜討　四の切
戀女房染分手綱　勘當
源平布引瀧　二の切

其後ちうかぶき役者にて又候や寅の年顏見世興行に及ぶ其一座は

柏井森藏　花桐喜太郎　中村國藏
大和川元藏　淺尾爲十郎　中村次郎藏
澤村竹八　嵐七五郎　十木升藏
中村松兵衛　山下龜松

顔見世狂言　翁艸五色英

夫より二の替り雙子綱浪華濱荻五月替り加賀國篠原合戰七月替り琵琶湖王代文集大切都風流大おどり相勤顔見世より打續き興行せし處竹田石井龜谷三座の子供役者追々成人に付十五歳以下より相成不申様此一件元祖中山新九郎頭取にて度々奉願上指留に相成候春顔見世の初りは天明四年辰の正月角の芝居藤川菊松座におゐて市川團藏市川友藏大谷廣右衛門江戸登り延著に及び夫ゆへ顔見世を正月に勤む

蓬萊山御慶顔見世

天明八年申の十月十九日より北の新地芝居にて歌舞妓役者あやつりと一座にて顔見世を勤む
座元坂東岩吉
人形　吉田文吾　同　吉田文藏
同　吉田三吉　同　吉田清七
淨瑠璃　竹本岩太夫　同　竹本美和太夫
淨瑠璃　竹本岡太夫
人形　豐松定藏　同　吉田新吾
同　吉田岩五郎　人形　吉田文三郎
立役　關三十郎　敵役　坂東岩右衛門
立役　中村京十郎　若女形　三桝德次郎
同　市山太次郎　同　淺尾富三郎
若女形　山下金作　敵役　山村友右衛門
立役　坂東岩五郎　實惡　山村儀右衛門

顔見世狂言　難有御徽島帽一折

四季人情の差別冬は人氣陰に落入寒氣にとぢられ他出を好まぬゆへ新參の役者を抱て顔見世といふ儀式をなし表に花麗を餝り大挑燈炭薪の積物にて人氣を動かせ陽氣を専一として狂言も理屈のかすさら〳〵となし立もの〻役者を異形なる化物につかひ又は其頃の流行もの風説事或は樂家の縁儀を祝しおかしみを趣向の種とし見物の肩のつかへぬやうにざわつきたる方をよしとし上の卷はお定りの三番叟座附手打三社にて見物少し勞る〻ゆへ狂言はおかしみを第一

として腹をよぢらせさへすれば見所すくなく狂言くさき事はなくても濟たり化物變化を其場の頭となし人間を次へ廻すたとへば海中に住む猩々が上使に來り女房の人魚が跡追ふて來ての濡事人魚の油を敵役に呑せば後室や親仁が俄に子供と成るといふやうなる噓を趣向とし中の卷は見物役者を見る心に成ゆへたゞ役者に曲のある業をさせ下の卷は夜更て人氣勞れる時分なれば鳴物の笛皷賑はしき合方にて眠りを覺させ狂言もさら／＼とたゞ景樣を第一としおかしみに理屈を附く女がた立役の心得て有る事也顏見世狂言はねぢ合事あしく段取は引上げ／＼およぐやうにすべし少しにても下に置ば狂言めいりて見物寢むたく成もの也顏見世は座並によるといへども京下り江戸登りなどの新參の役者に分に過たる役を附け古參は立者にても新參の方へ讓りて役をするが大法也上の卷は古參の若手陽氣なる立者の場とし中の卷は古參の立者女役のふけ役など登り役者か花がたの新參あらば座頭此場に出る下の卷は下り役者花がたの新參色女形などの場也もし新參に立者なく中役者の新參なれど座頭出て新參の役者を助けて目出度和歌幕にて打出す

戲子乘込

梅幸集に云（尾上菊五郎藝評の書）安永三午年大阪へは三十二年ぶり十月二十六日の乘込の勢ひ花々しく川船のかざりも幟おびたゞしく座頭並に所の若手／＼も別舟にて出迎ひに迎ひ出る船は前以て云ひ合せ船幕の染立て艫には吹貫幟など餝り立てはやし物して賑ひしに船陸とも人群集いふもさら也此後大阪乘込の迎ひ船は凡此幕幟なども用ひて是を賑ひの例の始ともなりし程の事ぞかし兎角此仕合男どもいひ立やぐら太皷の勢ひも高々とひらきて三番も鳴やならず待兼山の人群て大木戸のヱイトウ／＼（下略）近來文化十二亥年霜月七日江戸表より登り役者中村歌右衞門市川市藏改名鰕十郎藤川友市市川門之助乘込の賑ひ是又前代未聞の大群集せし事は諸人よく知れり乘込の夜舞臺にて太夫元と一座の役者盃あり又樂屋大部屋と云ふ所に於て堂島大連中判中大判形りとて盃事の儀式あり

極り番附

顏見世役者極り番附は芝居の表餝り八枚の表附に同じ往古の座組といへるは立者の立役一人中位の實事

仕の立役一人やつしがた一人やつしの替りにも遣ふべき若立役一人實惡一人中老の敵役一人若き敵役一人立もの丶女形一人けいせいに遣ふ若き女形一人上手の道外一人若き道外一人親仁方一人花車形一人上手の若衆がた一人又若衆がた一人斯の通りの座組にて興行するにもし一座の内に不快の者出來ても一座にて格別をとらぬ代り役の勤まる樣を第一と心がけ置し也然るに享保以後元文の頃より故實を失ひ近頃にては一向僻風もなくよき役なれば道外方を立役より勤め親仁がた花車形は敵役より勤め若衆方は女形より勤るの丶往古の座組はなくても事濟やうに成來れり中興より表八枚とて立役八人女がた四人と定め今に八枚の役者といひ四枚の女形に入しと出世を悦べり此外に中通り八人これは八枚の役者に病氣ある時の代り仕也誰が代りは誰々と年中極り有て初日出ぬ先より其の後々の狂言を覺悟事也此内に親仁方花車形道外方の三人は別也今は女形より花車形に廻り敵役より親仁方を兼色事仕より道外方を廻るなど混雜して右三人の別ものなし中女形は何人とも定りなし皆制外と名附け女形の代り又は娘がた丹前の若衆方を勤めしにて四枚の女形に出世する事也部家は小詰といひて十二人あるもの也

立役　花がた
立役　色事仕
立役　つまし
敵役　中軸
實敵
實惡
立役　座頭
若女形　四　若女形　二
若女形　三　若女形　一

近來は役者多く相成八枚の立役は十枚十二まいにも成り四枚の女形は六枚八枚にも成て制外も女形と混雜なし立役も中通りと八枚との間に役附の中通りといふものは出來たり

立役　花方役がらに構はず
立役　色立役又は色事仕
立役　見合

立役　小サマつまし爰を四枚目のくゝりと云

實悪｝
立役｝此間を中軸といふ座頭も居はる事あり
　時によつて甲乙あり

實敵　おくれし方年功の者か若過ぎたるか

敵役　見合

實敵　實敵の本座

實悪　定りの役者を置

立役　座頭中に居ても別座の者すはる

（時に寄り二枚目に成女形を爰に置ば兩方を細く書也）

若女形　五　（二枚目色女がた若手の若けいせい事は二枚目の役也）

若女形　　若女形

若女形　六　若女形

若女形　　若女形（女形の座頭の所なれば下の女がた同様に若過たる時は中々太く書て兩脇を少し細く書く大ていふけ女形の座也）

若女形　四

右の座ならび表看板を表附といふは角紙に大關關脇小結前頭の順を兵附（ツハモノヅケ）といふに准て芝居にても表附と呼ぶにや一說其昔は今の如く八枚看板は無之狂言の役割を書記して木戸口に張り見物の評判をなしゆへ評附といふとも顔見世極り番附當時にては京大阪は趣き同じ（江戸番附の事奥に著す）立役といふは全體女形の外は實事仕てき役道外まで一統の號なれども自然と其頭に立のへ實事仕の事のみに成たり其中にも色事仕荒事仕和實などゝ分れ大阪にてやつし役と呼ぶもの江戸にて濡事仕といふ江戸のやつしとは勤る所の役は貴賤老若の隔なく樣々に打扮もの當代兼といふ字を冠しむ中村歌右衛門などをやつしといふべき歟荒事は元祖市川團十郎より初りたり立役の長たるさばき役は役者の甲乙に因といへども先づ大切にて實悪を取て押へ萬事家國を納めるを役とし又辛抱立役は世話場にて隨ひ者又は何角を身に引受るを役とし跡は見合たるべし色事仕は大序にて女形をとらへ放埒なる體を專一としいづれの場にても色女形を相手に和らかき事を役と見て道行景事を受取場とし甲乙によらず目うへの女形にさへ相手になれば自然と役柄よく見ゆる也

敵役元は悪人がたといへり元祿の中頃より敵役と書ててき役と呼しがいつの程よりか敵役と定まり實悪

といふは染川十郎兵衞其身實事仕にて初て山椒太夫の三郎の役を勤しより實惡の號起れり其後篠塚治郎左衞門といふ名人敵役より立役實事仕のだめを指て一座の助けと成しより此仕內を飲込みしは山中平九郎早川傳五郎藤川武左衞門片岡仁左衞門などしつとりとなし笑はせて當りを取事なきは實惡といふ所へ魂を居たる故也昔の敵役は惡にのみ心をそめて仕打も憎てい也當世は兎角上手だてをして當たがり敵役と實役の仕打に差別見へず狂言は敵の役なれどもわざと實事仕のやうなる事多し昔の敵役にも惡人方といふものと佞人方といふ仕分けあり惡人方といふは見懸よりおそろしく作りなし惡を顯はしてするをいふ佞人方といふはぬつぺりとして能き人のやうに見せ底心に惡工みある仕樣也此佞人の仕打今いふ實惡と成れり又本心は實儀あれどもわざと惡と見せて狂言の詰りに實を顯はすは實惡には非ず實方が狂言の迫りにて斯の如し是を實惡と心得たるは非也死際に惡心發起して實心に成て死するは敵役が善心にひるがへすといふ迄にて是も實惡の號には叶ひ難し色惡は江戶にて水木竹十郎といふものもと女形にて後に立役と成り又享保五子どし市村座にて色惡といふ事を初たりおどけ敵といふは三代目大谷廣右衞門はなつたらしと異名取りたる役者より初まり安永の末江戶より中島三津右衞門大阪へ登り中の芝居にて大惡と記させし事あれ共前にもいふ如く當時の敵役は惡に手薄きゆへ大惡などゝいふ事稀也其外戲臺の通言に世話敵手代敵伯父敵平敵といふ事あり公家惡といふもの山中平九郎を祖とす

東武の柳樽に公家惡は一段高く無理をいふ伯父敵をエンデン敵といふは燕手とてつばめのはねをひろげたる如きかつらをきるゆへ也燕手をよこ訛りてエンデンと呼びならはせり

實惡の役者甲乙に寄といへども大方大序二つ目（中入といふ）役場とし實敵は伯父敵が本役にて二つ目あたりにて亡び後々は外役にて出る實惡は切迄の通り役也敵役は定りなし道外を兼たる者は小幕をば役場と見るべし道外古書には道化道戲とも書たり往古女かぶきの時は道外といふもの舞の間におどけ事をなして見物を笑はせしより始まり其後物眞似狂言盡の續き狂言に成りては猶々見物の退屈すべき理屈めきたる仕組

の中へ出て笑はしたる事ゆへ狂言の筋へ道外を取込んで高給の者を抱たる事也夫ゆへ道外一通りを修行して名人上手と呼れしも多し又半道とて實事仕の內より人を笑はする仕內ありしが今は色事仕の當が半道のやうに成り誠の道外は有ても無てものやうに成ぬ當時も江戶三座にも昔の通り道外を急度立て笑ひを催さす事古風に叶へり或書に齋藤道三が從者に道家菜といふ者半額の異躰也道外の名これより起れりといへり淨瑠璃あやつり芝居にても正德の頃迄は五段の淨瑠璃短きゆへ間の物にのろま人形といふ道外或はからくりなど有しが正德五年竹本義太夫座にて國性爺合戰の時より此事なく其後豐竹座にも止みたり（のろま人形といふは能の間語りの如くなる物ゆへ能の眞似人形といひしをノロマ人形と略せしにや我もしらず）扨又おどけたる場をチャリ場といふ事享保二十一年三月豐竹座にて和田合戰四の口河內太夫の場にて鶴ヶ岡の別當阿闍梨手負の眞似して追人を欺く其文節配りおかしく大當りせしより阿闍梨場〳〵と稱し其後阿の字を略してシャリ場〳〵といひしがいつしかチャリ場と轉じかぶきにては敵役の小幕チャリ場とす

女形の初めは承應元年江戶市村座へ上方より右近源左衞門といふ役者下りて練絹の浴衣をかぶり女形といふ事を初め其後万之助といふ若衆勝れて女に似たりとて其頃堺の平井卜養の狂歌に

　女かと見れば男の万之助
　　ふたなり平のこれも面影

たそがれの日記に糸縷權三郎女形の始り也とあり名古屋山左衞門の糸捻の所作を傳へたる者かかぶき物眞似名代の中に糸縷權三郎といふ者見へたり女形を太夫と號する事は往古女かぶきの故實を失はざる也江戶三座にては櫓下に立女形の名を記し是を櫓三枚の女形と稱し大阪にては女形を櫓の左右に揚てこれを四天と呼ぶあやめ草に曰四十過ても若女形といふ名ありたゞ女形とばかりもいふべきを若といふ字の備はりたるにて花やかなる心の失ざるやうにすべしわづかなる事ながら此若といふ一字女形の大事の文字と心得べしと教ぬ女形の習ひは先づ手の突やうにも十九通り有といふ傾城事家老の妻町人の女房娘その役々に寄り仕打は勿論萬事心得有べし手の突やうだに心懸ずは況や仕打の差別有べきや色女形は大躰色事仕に同じ併し富士郎粂太郎などの大立者にても

振袖を著る女形には口傳あり女形の受取場といふ極りはなくけいせいと外題を出し役者の甲乙に依て女形を狂言の筋につかふゆへいづれが役場とも定め難しいか程の立者にても女形は男に隨ふと云女の情によるゆへ我意を出さぬ定法にて立役によつて附迫れり譬ば前文七にいろは、皆立役の役がらより女形の役も代目文七に一鳳あやめ、前の三五郎に國太郎、二附て出る女房は男の善惡に隨ふ道理也然れども女形にて一座の魁首と成たるは古今に芳澤あやめ中村富十郎兩人にて評書にも三箇津總藝頭といふ位を冠らしむ丹前の名目（嵐三右衛門傳にくはし）若衆方といふは半立役にして敵役をきめお姫樣をかばふ類ひ千本櫻の小金吾などの役がらを勤しゆへ大かた立役へ拔たり近世の若衆方は武門の小姓立には仕立ずべたつくやうに成て大方女形と成れり今の角皆といふ名目を附る半立役は其昔の若衆方に近し

子役といふ事は元祿十年市川柏莚十歲の時九藏とて初めて堺町中村座へ出しより初む其以前は若衆形より勤し也右あらましの名目は當時表附に顯はし又は極り番附に記せるのみにて此餘花車がた親仁等の名は其勤る趣にて別に仔細なし顏見世役者附今古のけぢめを知らしめんが爲左に著す番附は貞享元子年の顏見世なるゆへ天和三年の暮の役者附にて離子方狂言つくり及び六十五人と記せしも古雅に覺ゆ

大和屋甚兵衛は大阪にて嵐三右衛門に續き年久しき名

大和屋甚兵衛　役者附

ねのとしかほみせ

わか女がた
一松本三四郎
同
一大夫市彌

立役
一藤田小平次
同
一山下半左衛門

立やく
一孫藤義兵衛
同
一山本源十郎
同
一富川岩右衛門

こうた
一ゑと權左衛門
同
一いせ九郎二郎
同
一濱松里兵衛

一同　藤田鶴松
一同　桐山三之丞
一同　岩井小源次
一同　吉川勘彌
一同　高濱勘三郎

一同　座本甚兵衛
一同　岩倉萬右衛門
一同　阪田銀右衛門
一悪人がた　服部二郎右衛門

一同　岡本左五衛門
一同　村山勘七郎
一同　袖川辰右衛門
一同　いづみ三左衛門
一同　むめづ小右衛門
一同　おの山宇次衛門

一同　長島庄左衛門
一しやみせん　田宮八郎左衛門
一同　太左衛門
一同　二郎兵衛
一小つゞみ　源七
一同　源左衛門
一大つゞみ　次左衛門

太夫　上村辰彌
　　　上村吉彌

袖嶋市彌

一わか衆がた　上村數馬
一同　竹中半三郎
一同　上村千之介
一同　荒川左近
一同　入江花之丞
一同　山下いつれ
一同　尾上源太郎

一半だう　齋藤新八
一同　田坂戸平
一おやかた　川上三郎左衛門
一同　竹本庄左衛門
一同　小舞六郎兵衛
一どうけ　最上藤八
一同　南部兵六

一立やく　大西森右衛門
一同　大澤團七
一同　柳原平右衛門
一同　小林小左衛門
一かしかた　小勘太郎次
一同　原田傳助
一同　松井勘四郎
一同　松永宇兵衛
一子やく　大和屋牛松
一きやうげんつくり　富永平兵衛

一大つゞみ　九郎兵衛
一同　喜右衛門
一ふへ　新介
一同　六左衛門
一たいこ　大介
一同　仁兵衛
一地うたひ　茂右衛門
一同　左兵衛
一同　五郎兵衛
一同　市兵衛

合六十五人

代にて其子藤吉は京都にて座元を勤め後の甚兵衛左のみ上手とも呼ばれざりしが三代目甚兵衛は水木辰之助（水木辰之助寛延元年顔見世大阪中の芝居にて大和屋甚兵衛と改名）弟子水木染之助より出て水木竹之助とて若女がた京にて座元なりしが辰之助と改め其後立役と成大阪にて大和屋甚兵衛と改めたり前の甚兵衛に由縁有ゆへの事にや

座本の紋　座本

来る霜月吉日より何の年顔見世極り役者附

子役　丹前　角鬘　若衆方

八枚の　表附

長うたつゞみうた　はやしかた

部屋　小詰の事　十二人　極り

ふり附　口上　後見　紋附の中通り

此所へ太夫名書事もあり

若女がた　若女がた　若女がた

中通り　花車親仁方

上るり太夫三味せん　狂言方　立作者　頭取

千秋萬歳樂叶吉祥日　角の芝居　内茶屋

扨又狂言作りを極り番附に載る事延寶八申の年暮の顔見世役者附に富永平兵衛きやうげんつくりと出せしが權輿にて近世は番附の居所その甲乙むづかしく成たり

狂言方といふは作者に非ず狂言に附事諸事を支配する役也然れ共番附にはやはり狂言作者と記す

狂言作者　二枚目作者
同　狂言方　二
同　同　四
狂言作者　三枚目作者
同　同　三
同　同　一
狂言作者　立作者

右中
狂言作者
狂言作者
狂言作者　立作者
左吉

兩方二枚目三枚目の差別なき同樣の時は如斯書く併ながら左の方少しよろし

狂言方にて少々狂言も書る人
狂言作者
狂言作者
狂言作者
狂言作者

狂言作者　立作者
二枚目なしに三枚目の居所
狂言作者　狂言作者　二枚目
狂言作者　狂言方
狂言作者　同
狂言作者　立作者
客座にて跡よりスケに入れば爰に置く

是は何れも京大阪の式法にて江戸三座は番附の書法違ふゆへ左に記す

寶曆六年子の顏見世中の芝居坂東豐三郎座極り役者附江戸番附に仕初め近世專らこれを用ゆ女形立役作者等場所不定箱の廣きと狹きとにて甲乙を分ち座頭の所計り立役に定まり女形櫓下は別也總面は鱗形の内へ少しにても多く出たるをよしとす建ものゝ繪は手に寶物の類ひを持つ畫法に故實ある事也

江戸番附を大阪の八枚へ引附見れば

江戸　大阪
座頭　留筆
男二　實惡
男三　一筆
同四　中軸
同五　實敵
女一　留筆
同二　一筆
同三　中軸
同四色女形

中村座

○女　二○立　三○　七◇十一○十　五
○女形一□立役一○　五□　九○　十三
此所を下駄箱と云
◇仔細有所也
○女　二○立　二□　六○　十○十　四
○女　四○立　四○　八○十二○十　六

紋番附の表紙居所の甲乙如此此裏にも又紋と名あり
中通り中女形也若太夫の箱は長し
大阪役割番附の甲乙左の如し

客座
別座
座頭ノキ
座頭
上下見合同位といへども下の段を本座とし上の段劣りたるか

役者の甲乙にて見るべし左もなくば通例の順並びにて上下見合にするもあり上の段を細字にて下の段太字に書もあり別座客座の有は臨時の事にて又年かさの者若手の花がたへ座を讓る事もありて一決なしがたし

今古參考南水漫遊續編三の卷終

今古参考南水漫遊續編

四の巻

今古參考南水漫遊續編四の巻

颯々亭南水主人著

小夜嵐

小夜嵐とは狂言の外題にて元祖三右衛門家の藝とす大阪の昔は嵐三右衛門岩井半四郎兩座を常太夫元として片岡仁左衛門大和屋甚兵衛も久敷座元なりしか其嵐岩井の如くは續かず（岩井半四郎大阪根生の役者なれ共當時にては江戸役者とのみ心得し人多し）其頃は他國の人大阪へ來りても嵐三右衛門芝居と天王寺の塔を見ねば歸國して土産に成らざりしとぞ（或書に嵐三右衛門芝居往古の鹽町難波藥師の邊にて興行せし事ありとぞ）元祖嵐三右衛門といふは攝州西宮にて西崎新平とて屹度したる浪人の子其父江戸へ下り魚問屋をして其子を三右衛門といへり元來有德者にして生質芝居を好み役者交りより終に太夫元と成り西崎三右衛門といへり其弟も役者を好み是を勘右衛門といひ嵐勘四郎父なり三右衛門一年小夜嵐といふ狂言をして大當りせしより其後町を通れば小夜嵐が通る嵐々と呼しより嵐三右衛門と改名なし其子孫大阪三代の座元いづれも上手と呼はれ大阪根生の名物となれり當代かぶき役者に嵐苗氏を名乘るものみな三右衛門勘右衛門兩家より分れざるはなし三右衛門一流を仕出せし丹前六法といふものよしや風ともいひて江戸三茶通ひの風俗をうつしたるを起原とし江戸にては丹前といひ京にて六法大阪にて出端ともだんじり共いひて高股立を取て振出せり承應明曆の頃は東都の祭禮ねり物にも此風俗をうつし長き白柄大小卷羽織深編笠の打扮これを多門庄左衛門初めて勤め續て村山四郎次元祖中村七三郎これに工夫の振りを付て立髮丹前とて今に傳へて中村一家の藝とし口傳あるよし中村傳九郎奴丹前芝垣丹前といふ事を初め市村何江が狸々丹前てくない丹前其外さゝや九兵衛鎌倉團右衛門など六法を振りしは剃さげかづらほう髭の田夫野人の姿にて舞臺中をうなり歩行しが元祖嵐三右衛門衣裳立派に著なし袴股立長羽織立髮かづらにて笛つゞみ大鼓三味線に合し風流に品を附て勤しより六法の龜鑑とす丹前の出端の唱歌則嵐三右衛門が勤たる藤内だんじりの出端

二上り

藤内次郎殿わいの笛ふきのや役で紫竹漢竹のや

つこのほこりをさつ〳〵ともはろふてのとうらいの〳〵笛人の物はとらいの我が物はやらいのと合ふいたるはさつてもふいた笛ふきとどつとほめてとをしただんじり打てはやしただんじりうつたみさいな藤内三郎殿は小つゞみの名人であろふのどふにかゞがわくれくれないのしらべをちんどりかけにかけさせちゝつちちふつほ〳〵たつほゝつたつた〳〵〳〵〳〵合うつたるはさつてもうつた小鼓とワッと譽て通しただんじりうつたみさいなだんじりうつた見さいな藤内四郎殿はいの大鼓の役でしつたんにしつたん〳〵〳〵しつたんつゝなおん百姓明年は八たんじや三明年は十六たん〳〵丹波の國の御百姓と合打たるはじやくらい上の町下の町ドッと譽て通した藤内五郎殿はいな大鼓打の役で大まいの太鼓をあそこらもとにおかせてきんのばちを手にもちつゝ〳〵〳〵つてん〳〵てれつゝにはづんでんどんてれつゝ〳〵づゝてん〳〵とんからつとんとうつぽれたなるかならぬか戀の中の町なかの〳〵中の町を通り給ふはなけれどなまだ

こつかんだあたゝを見たかくまの小びぐにんがちとくわん〳〵〳〵〳〵くわんともなるは夜明のかねはつん〳〵つらいかづんでんとふから櫓太鼓の音によりくる

此唱歌に合せたも六法の振りを諸見物よろこびしが當世にてはさばかりの名人なきや又世上の人氣に應ぜざるにや只所作の内に六法のふりを用ゆるのみにして丹前の名目は若衆方か子役に冠らしめ極り番附と殘れり

嵐の家の紋に角に小の字を附たるは小夜嵐の小の字を用ひしなるべし好古家永田其道嵐座の木戸札を藏す其頃は大かぶき芝居にも木戸札を嚴重に用ひたりしが今は通り札の紙札を買ふ人も稀に成れり

（木戸札一枚圖略之）

因に云、元祖嵐小六やんごとなき御方尾州侯なるよしより鋏細工にて叶といふ字を彫りて給はりしより叶の丸を紋に附たりしが[illegible]女がたの紋には強からしゆへ◎かくの如く三つ廻せり然其寶暦十四年より又もとの角に小の字に戻りたるよし眼獅撰に見へたり近世にては嵐家又叶の丸を用ゆ

市川柏莚登阪

寛保元年酉十一月朔日より翌戌の年顔見世道頓堀戎橋角大西芝居佐渡島長五郎座へ江戸市川海老藏同團十郎罷上り顔見世目見へ狂言を勤む柏莚上阪の儀に附一條の奇話あり佐渡島長五郎江戸在住の時市川海老藏いふやう其許大阪へ歸られ太夫元を致さるゝならばいつにても登るべしといひける事有しゆへ一年大阪表道頓堀にて座元の時柏莚を相談に書狀下せし時返狀に給金二千兩にて手附金五百兩被下べしと申來る歌舞妓芝居初りて以來給金二千兩取たる役者聞も不及稀なる事を申越たりと甚面白く手附金五百兩調達して差下したりあの方にもよもやと思ひ居たりしにや大阪へ參りて其うつり挨拶有しに長五郎答に二千兩の給金取らるゝ役者古今になしそれを押出して申越るゝゆへ定めて夫程に格別の事有べしと存也と申けり扨々物數寄也と思ふのみ顔見世はうゐらう賣のせりふ先珍らしく大入にて二の替り曾我を出せし處散々不當りにて子息團十郎病氣を幸ひ十日餘りにて相休み扨三の替りの相談何をがなと樂屋表とも彼是申合けれ共思案に落す時に柏莚申候は此次は鳴神を出さんといふ鳴神なれば狂言案じるにも不及とて古き狂言を序へ繼合せて綴り四番目にて鳴神上人を奴傳內役の山本京四郎が殺すといふ仕組にて諸に鳴神の亡靈雲の絶間に附したひがいこつの所作を思ひ附しに柏莚は生得狂言に切殺さるゝ事を忌みて勤ず夫ゆへ四番目のがいこつの所影法師にて長五郎勤べしといふに付きさあらば殺さろべしと相談極り稽古いひ合濟て初日出せし處に粂寺禪正といふ侍と成り使者に來りての仕打適誠の武士と見へ外に此眞似するなしと大阪中の評判にて扨々上手也と感じさせ四番目は二役鳴神上人の段家の藝なれば手に入たる仕打鳴神の閙き近國は不及申遠國よりもいざ海老藏の鳴神見物せんと態々大阪へ來る人數おびたゞしく押も分られぬ大入にて京都の好人も大阪へ下りて見物したる人多し然共終に京都へ出勤なく是のみ殘念也海老藏は不思儀なる生質にて顔にさまざゝの藝ありいづれ妙の字は適れ難ししかし歌舞妓狂言に殺さるゝ役を嫌ふもいか成事にやこれらも奇とすべし浪華の好古家其時の根本を藏す予借得て傳寫せり

来る霜月朔日より　内ちや屋

戌のとし　かほみせ極り役者つけ

座本　佐渡島長五郎

一若女がた　佐渡島幾世
一同　山下吉彌
一同　勝山清太郎
一同　袖岡笹尾
一同　竹島善七郎
一同　桐谷房次郎
一同　三保木常六
一同　山下鶴松
一同　花桐豐松
一若女形京　藤井花千世

一立役江戸　市川海老藏
一立役江戸　市川團十郎
一立役江戸　坂東豐三郎
一敵役　中村次郎三
一實敵　山中平十郎
一實惡　嵐七五郎
一立役　山本京四郎
一立役　佐渡島長五郎

一立役　中山四郎五郎
一同　富岡金藏
一同　三條幸助
一同　大谷彦四郎
一同　澤村民五郎
一同　花桐伊助
一同　成川十五郎
一同　藤川佐四郎
一同　藤川善藏

一小うた　中川不四郎
一同　花谷又七郎
一小うた　西川甚九郎
一三みせん　瀧岡六三郎
一同　松本清七
一さみせん　瀧井平七
一小つゞみ　市川佐七
一同　花桐嘉七
一小つゞみ　竹中平吉

若女形京　大和川明石

若女形　尾上菊五郎

太夫　佐渡島幾世

若女形　柴崎民之助

若女形　山下金作

一若衆方江戸　竹島幸十郎
一同　松山小式部
一同　竹島平太郎
一同　嵐三郎四郎
一子供丹前　嵐三五郎
一同　竹島幸松
一同　嵐甚藏
一若衆方　山下宇源太

一敵役江戸　市川金三郎
一立役江戸　市川助五郎
一敵役京　中村儀五郎
一敵役　中島藏右衛門
一親方　山中猶十郎
一花方　阪田文十郎
一道外　市山七十郎
一敵役京　嵐秀五郎

一立役　大谷源三郎
一同　三原大吉
一同上　中村文左衛門
一大つゞみ　早瀬喜左衛門
一ふへ　瀬尾新助
一たいこ　古川佐助
一狂言作者　安田蛙文
一狂言作者　中田万助
一頭取　石井喜六

鳴神上人物語

いつのむかしの帝にか有けんこの御宇に雷神上人と申有驗の聖おはしき帝このひじりにみことのりして后の御はらに太子あれませといのらせ給ふ上人おほせをうけたまはりかたじけなくして大聖不動明王の祕法をおこなはせ給ひければまことに明王の感應有がたく太子めでたくむまれさせ給ひて帝の御悦はたとへん物なしかねて御約束に御太子降誕あらば法師の身さらによの望みなし吾すむ山に戒壇をきつかせ給へさらずばいのらじと勅答ありしかばすしやうのとにものし給ひかたくうけがはせ給ふしかれども太子はや三とせにならせ給ふにかつて戒壇の御さたなしゆくりなく上人せめせち給へども帝もみこゝろにまかせたまはぬものは山法師と加茂川の水にて叡山のいきどほりをおぼしもだされ給ひ天氣鬱々としてのち／＼はしかしか御かへりごともなかりしかばもとより普通のいなか法師の荒行者なればはらあしくいきまきてよし／＼吾修業にて太子をまた／＼とりかへし奉るはやすかんなれどもさすれば朝敵のつみよんどこ

ろなし所詮天下國土に雨ふらさじと祈り民を苦しめば御心をだやかならずこりさせ給ひなば吾願望なりぬべしといなかうどの一圖に思ひさだめ猶山ふかくわけのぼり壇上をかまへあかの水香花のたすけに一老黒雲坊白雲坊二人ばかりめしつれ一心不亂にいのりすまいて世界にあらゆる龍神龍女を壇上の弓手の瀧つぼに祕封しをさめぬれば四海大きにかんばつして春花咲ず秋實のらず草木こがれて鳥はねぐらなく水かれて魚は陸にふためき民のなげきいふべからず帝大きになげかせ給ひ色々となぐさめ給へど上人のいかりいとゞつよくいまはせんかたなし此うへはとて諸卿をあつめ色々とさたし給ひぬれど戒壇をゆるさるゝの外は上人の心をやはらぐる事なしと各々一とうに勅もん有時に文屋の豐秀卿の申さるゝには臣ひとつのかしこきはかり事あり女房の内にみめよくかたちうるはしき女をつかはし酒と色とをもつて心をとらかさば破戒せん事やすかるべしいかんと思ふにかの上人いまだ十二因のかけたる事あればこそいかる心あれ然らば肉身の上人などおちざらんとのたまへば此儀もつともしかるべしさてたれか上臈をつかはしてんとり〳〵さたし給ふ天那かすめ雲の絶間こそ當時すぐれたる女なれちゑさとくかほよく詩歌はづかしからずこれにきはむべしと父にしかしか勅諚あれば天下への忠義民の爲とごめにもみことのりのおもむきなく〳〵のたまひやがて此山へのぼるよういぞ有ける

雷神不動北山櫻四段目

雲の絶間　尾上菊五郎
一老　佐渡島長五郎
白雲　市川助五郎
同　大勢
雷神上人　市川海老藏

道具建

本舞臺一面に岩山と成正面に高さ五尺の壇上なだれ七八尺の土手山上方上に四本柱七五三引うしろ山見す松かゝり嶮岨なる岩組大瀧あり瀧の本に大竹二本しめふと繩にて蛇形のしめ也

幕上ると一老白雲坊玉だすきにてはな道より聞たか聞たぞ〳〵聞たか聞たぞといひながら

出ぶたい先へ立やむ　初幕あけ
一らう 聞いたか〳〵
白うん 聞いたぞ〳〵
一らう 何を聞たぞ
白 本堂のうしろで鶯を聞た
一らう たはけもの其やうな事ではない師の坊なる神
上人の此度の行法のわけを聞たかといふ事じや云
々ツリヤ師匠どのがござつた　トおどろく
一セイ有り皷笛
上るり 去ほどに鳴神上人昔をうらみ奉り龍神龍女
の飛行をふうじ國土の雨をとぢこもる此北山の
山ふかく露なめらかの岩づたひ壇上さしてのぼ
りける
上人だん上に打のぼりいかれる顔色柄香爐のけ
ぶりと共に立のぼる下には兩僧おそれをなし右
と左にすわりゐる鳴神上人大音上げ
海老 磐石垂蘿只是家いにしへより雲井市朝（異本雲林市朝とあり）
にとをざかる
世間に公道たるは唯白髪くろき筋なき瀧のいと岩
にくだかる水聲風聲清淨觀のゆかの上に感應のま
なじりをたれ大願成就なさしめ給へ南無大聖不動
明王〳〵（咒あれど其はこゝにもらす）
此段にて上るりになり雲のたへ間はな道より
出る着ながしひつしごき片袖ぬぎかけ手に撞
木をもち首にしやうこをかけ花道幕の内にて
鳴らし念佛あり肩に衣かけ
上るり いたはしやたへま姫國土の爲夫の爲供人ひ
とりあらばこそさもおそろしき深山路のすそは
いばらにとぢられてあゆみかねつゝ行なやみや
う〳〵として北山の瀧のもとにぞ着にける
此間兩僧いねぶり居る
海老 鳥不啼山さらにかすかにて人跡まれなる深山に
遙か瀧つぼのもとにて女のこゑして念佛のこゑの
きこへるはハテあやしやな
ト下をみれば兩僧たわいなく寢むり居る
是一らうこれ白雲黒雲坊〳〵兩僧だじや〳〵千萬
と中けいにて壇上をたゝけば兩人きもをつぶし
ハツとおどろき目をさまし
兩僧 イヱもつたいないねぶりは致しませぬ
あれほどねぶつたじやないか

わたしはねぶりはいたしませぬ云々あんまりたはぶれがあまつてナついくせつになつたわいな
△あつさわするりやかげわするゝじやの
△エ、づんとおかしやんせ
おくまいがなんとした
つめるぞへたゝくぞへ
たゝいて見や
たゝかいでか

　と殿子のつぶりをぴつしやり

　一老白雲坊があたまをたゝく白雲いたがりさする思ひ入有

一老よいはかんにんせい〳〵
△そのいひ上りがこうじておもしろうないわしやもういぬる
イヤいなす事はならぬ
イヤいなにやおかぬとつゝと立ていのふとしたればわしがたもとをじつとひかへてそりやあんまりむごいぞやといふてまた古歌を吟じさんしたその歌は
○あすはまたたがなからんもしらぬ世に
二人あすはまたたがなからんも知らぬ世に
○あれ又下の句をわすれた○ア、なんとやらいふたか明日はまたたがなからんもしらぬ世に
上人ともあるけふの日こそおしけれといふてとめたであろの
ほんにそれ〳〵そういふてとめさしやんしたわいな
上人して〳〵どうじや
ヤなんぼそういふてとめさんしたとてもいのふといふてはもういなにやおかぬとはしつて出よふとしたればたもとを取てイヤやる事はならぬとひかしやんすイヤいぬるイヤやらぬいぬるやらぬいぬるやらぬとひかふるたもとふり切てついと

　上人咄しにうつり壇上よりまつさかさまに落きをとりうしなふ

ヤアこりや師匠がおちられたは云々
△扨は我行法をやぶらんために雲のたへまといふ官女をもつてこゝに來りしよなあゝア、、、

　そのたへまめをと髮逆のぼりいかれるまなこは月日の如く大地もさけとふみとゞろかし飛まは

りさがすうしろに
みな〳〵あとにつきてまはる此内始終かみなりなる
やあら無念くちおしやなあ寸善尺魔のせかけみつ法を破りしよなあよしわれ破戒の上からはいきながらなるいかづちと成てかの女めを引さかんになんじやうかたき事かある天は三十三天地はこんりんならくのそこ雨となり風となり
うたい太鼓あり　風の神のみそらの雲〳〵てん〳〵なるいかづちの上人の念力かれをおつかけんに　上るりかけ合ひ
西はちんぜいきかいが島
上人 南はくまのなちの瀧
北は越後のあら海まで
上人 人間の通はぬ所
千里もゆけ
上人 萬里もとべいで△おつかけゆかん
此内壇上へあがり四方をのびあがり見てあれるなげ岩も有弟子坊主もさし上げなげるとあとをしたふて大三重

かみなり大雨はな道へとび上り〳〵かけ入同宿共みな〳〵師匠樣〳〵と跡より入る引幕
右此狂言古今秀魁好士爲群前代未聞也夜雨庵歡喜而終自一章書畢　夜雨庵栢莚
寶來や龜の背中の一世帶
鳴神の狂言は元祖市川團十郎工夫にて貞享元年東都堺町中村座にて門松四天王といふ名題にて初めて勤る栢莚これを受得て猶萬國に響かせ大阪表にても古今の大當りをなせりされば此仕打を大阪豐竹座にて爲永千蝶太郎兵衛事粂仙人吉野櫻といふ淨るりに仕組寛保三年亥八月朔日初日栢莚大西芝居にて大當りせし三年目に出し此戲文も大當りにてその譽を殘す此仕打をやつし女鳴神とて女形の藝とするは元祿年中市村座にて弘徽殿后諍といふに狂言に袖岡政之助とて名代の女形初めて勤しより瀨川路考其外名人の女がた當りを取れり元祖市川團十郎本國下總國成田山新成寺の不動尊を祈りて栢莚を設ぬよつて栢莚九藏の昔より信心ふかく開運を祈りしに果して上手名人と呼れ諸人に秀し稀者と成れり成田山の寶前に奉納の神鏡今に存すとぞ故に家號も成田屋十兵衛といひ一

世の内に不動の役を數度勤めしにて大當りならずといふ事なしこれ他の役者の及ばざる處いさゝか仕打もなくして見物を悦ばす事誠に奇妙とやいはんこれひとへに明王の加護にや正身の尊像とも見まがひ眼中すがうしてひとみをすゆる事時を移す正に精といひつべし元祖團十郎は推本才磨が門に遊び俳道に心ざし深く才牛と呼び栢莚も幼年より此道を好み寶井其角の門葉と成りて才牛翁三升といひ享保のころ海老藏と成て俳號も栢莚と改む委しくは栢莚句集に著す其書の中に

大阪へはじめて上りし時雜衣へ申遣しける

難波津にさくや着仕る

道頓堀の賑ふけしき芝居の櫓數をならべしは餘の國にまさりて誠に歌舞の地なりけらし

歌舞の地や爰も蕪地や天王寺

栢莚大阪出勤中狂言の外題は

萬國太平記 顔見世狂言此狂言切にて市川團十郎病氣に附江戸へ歸國す
八的勢曾我 十二月十二日初日不當り
雷神不動北山櫻 戊正月十六日より七月六日迄古今の大入
星合榮景清 七月十六日より
土佐次郎妹脊鑑 八月二十六日より
東山殿旭扇 九月十六日より

大切景事關羽を勤むこれを大阪の名殘狂言として日出度歸國に及び後年寶暦八年寅九月二十四日死去法譽栢莚隨性

因に云、尾上菊五郎傳梅幸集といふ追善の句集の附錄に一代の狂言記あり寬保二戌年は佐渡島長五郎座にて江戸より市川海老藏登り來り同座にて鳴神の雲の絶間は就中の大評判にて其暮海老藏江戸へ歸る時ともに附添行しが江戸への初下り也(下略)同四東の春隅田川に班女と雲の絶間の役ます／＼出かし(下略)安永四未年京都藤川山吾座午霜月顔見世は津守常陸之助やつぱり和らかみを專らにしてしつかりとし武道に和事仕の衣裳ののるは此人ならでとて悦ぶ事もかはらず爰を以て華實對して役者也と京中の悦び殊更當年此座は尾上新七尾上松助倶に登り來りし同座各弟子にて補助心も有りしや聞の物粂寺彈正使者の場から鳴神上人もよく(下略)安永六酉年此暮又も江戸へ歸るとて粂寺彈正と鳴神上人を勤む

最負

膾餘雜錄に云㝡負其形龜に似たり好んで重きを負ふと字義は力を起し力を助てと訓りこれ則㝡負の文字の本源にして四民㝡負の力によりて身を立家を齊へ名を後世に傳ふるの本也俳優家に於ては殊更㝡負を願ふ享保十六年亥の十月豐竹若太夫越前少掾藤原繁泰と勅許受領して祝儀の出語蓬萊山を勤む此時祝儀として天滿橋三右衛門といへる人より初めて幟一本送りしにヒイキよりと記したり同十八年丑の二月豐竹要太夫初て出勤の節豐竹座の表に進物を餝り初め同二十一年（元文と改元）辰の二月二代目竹本義太夫上總少掾と受領の祝儀に進物を表に餝るこれ淨るり芝居㝡負連の權輿とするか其後寶暦九年卯の春竹本座にて日高川入相花王狂言半に當芝居より出火に及びしが其頃は東西のあやつり昌んの時にして義太夫がたの㝡負より材木莚繩竹なんど思ひ／＼に送りしゆへ日ならず假家芝居成就して用明天皇鐘入のだん吉例として相勤む右ふし事の正本に

乍憚口上

此度當芝居燒失仕候所町中樣御ひいきの御力を以て人形衣裳小道具迄つゝがなく殊に芝居ふしんの立具等下し給はり候によつて早速假家芝居成就仕候事難有奉存候右御禮の爲且は御ひいきの厚き次第を遠國までも風聽仕度候に付假家芝居興行の圖を爰にしるし申候尚御心がはりなく打つゞきはんじやう仕候樣に奉願上候以上

かやうに書記して假家芝居進物の圖あり

用明天皇　鐘入のだん

此ふし事は元祖竹本筑後當芝居興行の時語り置れ候其後竹本播磨相勤候此度門人竹本政太夫人形吉田文吾相勤申候淨るり人形共に前々とは遙におとり候へ共假家芝居興行のしるし昔のまねびと思召御見物に御來駕奉希候以上

寶暦九年卯五月

因に云江南の里俗日高川の狂言を勤ればかならず舞馬の災ひ有といひ傳へて忌み嫌ひ日高川にて出火なし人丸萬歳臺にて火留るといふ併し人丸の淨るりは豐竹座第一の不當りにて漸四の口箱かぶりの端場のみ殘たり作者豐竹應律福松藤助

俗又歌舞妓芝居に㝡負手打連といふものあり享保五年に笹瀨連初り同二十年に大手連明和七年に藤石連

（此藤石連は寛政年中に絶たり）安永四年に花王連始りこれを歌舞妓の四連中といひ例年霜月顔見世の夜は年々に新作の唱歌珍らしき一趣向ある事世人よくしりて浪華の壯観のひとつと成たり寶暦年中いまだ笹瀬大手のみにて有しが其頃より手打といふもの專ら昌んに成りあやつり座の趣向にさへ取組たり寶暦十三年未の十二月八日初日豐竹座番場忠太紅梅箙の四の切に
跡に附添ふ以前の連中左右にならぶ染頭巾笹瀬大手の紋じるし揃への腹卷かいぐ〵敷義經公の味方といふ印に附た笹りんどう清和源氏の世の字をすぐに合印生田の大手の二度のかけ景季樣の高名をすぐに附たる紅梅箙（下略）
古老のいふ此文中には左右に並ぶ染頭巾とありて其頭までは手打連の頭巾笹瀬大手の合紋を染込たるをかぶりしが明和の末安永の頃には一樣に着附て黑き金巾木綿に帶は白絖いさゝか金糸にて霞に靚せ水の類ひの縫箔を置き染込の頭巾と誂毛羽と變じ笹瀬大手の合紋を切附たり當世より見れば甚麁服なれども諸見物これを見て華美なる事といひあへり藤石花王の連中初り四連中と成しより互ひに手打の巧拙を爭ひ天明の頃より手打の曲に合打といふ事を初め或は琴三絃を交へ近來は種々の造り物をせり出し釣もの遠見などゝ仰山に成行その趣向に應じて繫人の着附に引糸の仕かけありて目ざましき事筆紙に述がたしかゝる浮たる一群れの中にも老年の魁首ありて笹瀬大手は享保巳來九十餘年の法令を亂さず其規摸とするは本舞臺の大幕棧敷の高欄幕破風の鱗水引幕など年毎に新調して角中兩芝居へ送れり里俗女夫連中と呼び都鄙の見物笹瀬大手兩引の大幕を見ざれば大阪の歌舞妓芝居とは思はぬやうに成たり其外堂島の大連中は顏見世座附引合の砌り舞臺に一座の役者名苗氏定紋を書たる水引挑燈といふものを送り雜喉場連中よりは櫓の茜染幕ぶたい階懸りの切幕顏見世表餝りの大釣挑燈を送るこれ昔より今に替らぬ定例とす其餘に贔負連中あれ共恒例なし京都に大笹さゝ木みなと連といふ物ありて趣き大阪に同じぶたいの大幕は故實ある事にて大幕の上に永引幕を引初しは享保二年竹本座のあやつりより起り顏見世に譽詞といふものありこれはもと役者の出端を譽る狂言の仕組を見ならひたるもの歟往古のかぶき狂言には立役にて

も女がたにてもあれ出端を譽たり若立役を女形の譽
詞に
ヨウ〳〵立髮姿に伊達風流股だち袴すそ高く龍田
の川にあらね共紅葉の顏に薄化粧淺黃羽織の紐き
やしやに結ひ留たる戀のくゝり目は在原の業平も
あんまり餘處にはごさんすまいやりたい命切たい
小ゆびかはるな替らじ二世までもとかはす枕に憎
まれて浮世も後世も後の日も思ひの淵に身はしづ
む扨も〳〵見事な御器量では有わいな
又見渡しはやしに景色をつらねるせりふあり
向ふに見ましたは鞍馬山でござりますあの山へ不
淨なる者參りますれば大小の天狗怒りをなし惡風
魔風しきりにして俄に引裂き梢にかけ置まするま
つた心ある侍は僧正坊に願を懸け是を祈る輩は異
國のはんくわい張良もあざむく程のゐせいあり何
ぼう恐ろしき御山なれば是より遙に御拜禮被成ま
して然るべう存ます
箇樣のせりふにて當りを取たり見物の場より役者を
つらね詞にて譽る事は江戸より初り京都の昔は譽る
事なく面白き時は感じ入たる聲何處ともなくジャジ
ャ〳〵といひて暫し感聲止ず是も狂言の間は鎮り居
て幕を引と感聲の聞へたり大阪はャッチャお出やり
申たとほうかぶりして扇をかざして譽たる物は天和
三年二月十一日九郞右衞門芝居にての八兵衞といふ
もの岩井歌之助を櫻によそへて譽しより譽詞といふ
事發れり京は物やさしく初の程は譽たき詞をゐにし
たゝめ樂家へ持たせやりたる事なるに寶永の比より
江戸大阪の風儀うつり暫らく〳〵ちくとん計りと思
ひの外長〳〵とせしむだ言で譽て貰ふ役者の迷惑顏
見附の座附のみならず狂言半端は猶更也
東武のやなぎ樽に

幽靈が消傘て居る譽詞

元祖嵐小六は初日に見物の譽し所は拔き又二日目に
譽る處は拔して幕を引てより嗚呼と感じさせ見ざめ
のせぬ工夫せり又淨るりの太夫有隣大和は度々見物
の譽る日は床よりおりて立腹なし扨々不作法なる見
物なりといひしとあれども見物の高聲に譽るも贔負
の餘れる故なれば忌み嫌ふべき事にあらず

今古參考南水漫遊續編四の卷終

今古参考南水漫遊續編

五の卷

假頭
一千秋萬歲樂（吉祥日）

今古參考南水漫遊續編五の巻

颯々亭南水主人著

舞臺造物

京都北野の人桝にて出雲の於國が興行せし時は神樂殿の如く家造りし四本柱は多門持國廣目增長に表し是を芝家といひ國が舞の臺とせしより舞臺といふ其後處々にて興行するに芝居の中央に舞臺を方三間に立るゆへ名附て三間の間といふ爰にて藝をなす處也元は二間に四間の間にして四本柱を立し也其後破風造御免有しより大臣柱といふ陣中大將の座にして四方八方へ往來の人此處より明らかに見ゆる處なるゆへ鏡の間といふ又松の間ともいへり其次を梅の間といひ後の板を鏡板といふ是に松櫻を畵き今の能ぶたいの鏡板といふ處也橋がゝりは（今ぶたいの下手をいふ）陣中にて武者走りといひ枡形への通ひ道也奥屏口は（ぶたいの上手をいふ）臆病口と思へるは非也着物の衽形りに附たるゆへ衽やう口也ともいふ是一日の計策を廻らし萬事舞臺へ此口より出て會釋する處也當代は舞臺の建やう異なりといへども三間の間（定三間といふ）大臣柱橋懸り奥屏口の舊名を用ひ其餘襖通り紋板迫り切穴幕走り開懸け場表ふだい裏ぶたいなどゝ轆轤場などゝいふ名目數種あり然れ共假家建の芝居の時は舞臺には床几をならべ桟敷といふ事もなく高場といふべき處あり舞臺へ行かよふ幅せばき道を附け兩方に竹にて高欄のやうなる埒を結び見物より役者へ色々の送り物をするに時時の花を折添て遣はしけるゆへ今に役者の送り物を花といひ通ひの道を花道といふと古き名にしていつの頃よりか幅も廣く成し兩方の埒も取拂ひ役者の出這入をなす事と成り向ふを戸屋といへるは戸板にて圍ふゆへ也一說鳩の鳥屋に似たるゆへかく名附共いへり當時は附ぶたいをも本ぶたいといひて此處より向ふの鳥屋まで花道のあいだ十三間あり大歌舞妓の役者は三方正面むかふ十三間といふ事を心得ざれば一座の魁首に至り難し天和年中今の如く本舞臺に建てたれ共能舞臺の如く大臣柱かぎりなりしに本ぶたいの前へ附ぶたいといふもの出來たり砂ぶたいといふは又遙に後年の事也其頃は上桟敷計りにて下桟敷

は小佐川十右衛門京登り殊なふ繁昌せし時桟敷を懸出す其時桟敷の下畳場を下桟敷とせしより大阪の芝居も其通りになし新桟敷孫桟敷といふもの追々に出來たるを見ても芝居の繁昌思ひやるべし二の替りを一年中の曠とし衣裳に縫箔の手を盡し表の看板舞臺の造物に華美を餝る其權輿は舞臺の前に作り花の櫻の大木を植て是を二の替りの櫻とて見物の目を驚かせしが例と成て今に釣枝の櫻はまた漸に梅の綻ぶ頃より彌生の空の長閑き景色を顯して人の心をなぐさめ花の頃には藤山吹の盛りを見せ初秋より萩すゝき菊の花壇など都て時候の魁をなす事戯場の祕事とす扨又舞臺の造物は寶永年中樋口半右衛門といふ者せり出し道具を工夫せしより正德享保の頃江戸狂言作者中村傳七引道具押出し引返しぶんまはしなど珍敷道具を仕出したり中にも堺町中村座にて嫁入角田川といふ狂言に兩國橋より三圍の堤まで凡一里餘の川岸を引道具になす大形なる事古今の珍景なりとて大入せしかど張骨に書割せし計りにて當代に思ひ合せば手輕き事ども也大阪芝居にて舞臺の道具替りに黑幕といふ物を用ゆる事佐渡島長五郎の工夫にて其後

安永四年竹本座のあやつりにて東海道七里艇梁といふ新淨るりの時近松半二同東南浪幕といふものを工夫し出し夫より山幕雪幕などいふ物を仕出し都て是を道具幕と呼ぶ其外山中谷間などの景色を見するに往古は山すだれとて山の書割計りなりしが享保六年丑八月三日初日竹本座にて信州川中島合戰に張貫の本山を作り初め江戸のぶんまはしといへる物も大阪にて舞臺の下へ（ぶたいの下をならくといふ）人數を入て廻り道具とせしは寶暦八年寅十二月廿二日初日角の芝居にて三十石艠始大切の幕明け造物二重舞臺金襖中門の外に高札建て白梅の盛り總一面雪降りにて狂言色々有て後中山來助淀與三右衛門役三枡大五郎河村瑞軒役姉川大吉みゆき役遠攻にて見へに成りし其まゝ舞臺中一面に廻り道具にて淀の城の景色雪ふりのてい水車廻りあり眞中に天道船有て此中に中村次郎三熊本辨三作役白き繻絆すはうに成り山下金作けいせい揚世役中村喜代三郎源八女ぼうみふね役立廻りしてゐる兩方に三十石の船二十計り繋ぎ附け侍大勢取まき皆々弓張でうちんにて闇ふ目ざましき趣向は狂言作者の名人並木正三獨樂まはしより思ひ寄たり此廻り道具

の錺り附より裏ぶたい表ぶたいといふ通言始り當世の新狂言はいづれの場にても返し道具とて造物を錺り替るに多く此廻り道具役者の見へよく利て舞臺にはえあるゆへ一日の狂言に數度用ゆるやうに成れり羅上げ道具は寶暦三年酉十二月二十八日初日大西芝居にてけいせい天羽衣の大切茶屋場中山新九郎（此時仔細有て中山を和歌山とす）虎屋金助本名北川惣左衛門役にて家根の上に大わらはに成中山文七與五郎役松島喜代藏女房お高役にて兩人死る此見へのまゝにて羅上る下座敷には中村歌右衛門赤松四郎役中村四郎五郎奴關内役中村十藏佐々羅三八本名細川勝元役にて皆々りゝしき形り樋よりしたゝる血汐を受て座元三條定助傾城浮島おしの役に右の血汐を呑し居る見へ則並木正三の工夫也此羅上げ道具初りしより其後寶暦七年丑の冬豐竹座のあやつりにて祇園祭禮信仰記四段目の切金閣三重をせり上げせり下げ道具とす中村阿契淺田一鳥の工夫なり又寶暦九年卯の四月十五日初日大西芝居にて奈良都大佛供養の大切に舞臺一面跡せり上しかけつくりの道具と成す竹田治藏の工夫寛政三亥正月十一日より角の芝居にてけいせい誰伏水寛政十一年未八月八日初日中の芝居にて北國嫁威谷にもはすにせり上げ道具をなす中にも見物の目を驚かす目ざましきものはがんどう也（箱天神ともいひて小兒の翫ぶはこ天神の仕かけ也）其はじめは寶暦十一年巳十二月廿四日初日中の芝居二の替り新狂言秋葉權現廻船噺大切の幕明は造物二重ぶたい一面の金ぶすま奥屏口中二階屋敷のていにて段々狂言有て後此家體東西へ引込み本ぶたい一面の土手に成中村佐野八儲役にて嘉藤次役の庄五郎を追て出て立に成戶屋へ追込むト嵐雛助傾せい花月の役船岡軍次役の東九郎を追て出て立てあつて同じく戶屋へ追込むト岩田染松姚松がえ役にて春山丹下役の染川此兵衛と立しながら出て戶屋へ追込む都て簡樣なる立て幾度もあるは大道具拵への間也右大土手一面に返し道具八間のあいだ結搆なる御殿黑塗高欄附金襖眞中に中村四郎五郎奴佐賀内本名月本圓秋役にて吹替の祐明をおさへ居る三桝大五郎玉島幸兵衛役藤川八藏德島五兵衛役にて中村歌右衛門の日本駄右衛門役を取まき居る嵐三五郎月本始之助役竹中兵吉松岡監物役にて詰かけ居る向ふの襖左右へひらく奥打拔きの大座敷中村粂太郎三津姫役雛助佐野八其外一座

殘らず夜討の出立にて奥深ふならび居る是大切打出しの道具也扨又竹田近江が工夫せし見物の場を引割せり上げ道具を出せしは明和三年戌の春竹本座にて本朝廿四孝四の切雲霞の如く詰り居る見物を左右へ引わけて丁の字形りの御殿をせり出して奇妙がらせしかど此道具も近年は數度に及びて左のみ珍らしくも覺へず又無造作にして目新らしく見物の評よく當りを取し田樂返しといふものは寛政元年堀江市の側此太夫芝居にて有職鎌倉山四つ目城外殿中の道具かはりまた一種引拔襖也寛政三年亥の四月五日初日角の芝居にて開發廓歩尺に尾上新七城山の三次郎狐にて正體を顯はす處襖の畵面亂菊計り殘して襖の地を引拔たり其後寛政五年丑正月十七日初日中の芝居二の替りけいせい揚柳櫻の序切揚屋の奥ざしき造物六間の間一面の二重廻りやたい向ふ見附の襖總金地に雪柳の畵此襖一面に仕かけあり舞臺見(つの字脱か)き上みの方返し幕にて雪の庭に成り色々狂言有て後チヨン／＼にて返し右揚屋の道具二重ぶたいはやはり其儘にて見附の襖一面に金地引ぬき取るト書きし雪の柳一面に殘り柳の枝悉くひら／＼と向ふへ出る仕かけ此後奥深ふ白木綿の雪幕を張り雪の景色椽がわ蹴込み返ると雪の上手に成り都て柳谷の道具と成れり其外ドンデン返し打拔の遠見中遠見中引などゝ數種の造物を用ゆるやうに成ぬ

狂言作例

夫狂言といふ事原俳優(ワザヲギ)にして八雲御抄に十名を出したまふ諷ひものゝ類ひにて催馬樂細男の舞田樂の曲能狂言等の種々品かはれどもみな神を和め人をなぐさむる德は同じ今の歌舞妓といへるものも文獻通考に假婦妓(カブキ)と見え日本後紀桓武天皇延暦十八年秋七月癸卯朔云々。己酉停二伊勢齋宮新甞會一但以二歌舞妓(カンワザ)一供二九月祭一かゝれば歌舞妓といへるはいと古き神事によべる名なり今の狂言の趣向善を勸め惡を懲らし他の爲に耳目を喜ばしめ自の爲に氣血をめぐらしむ劔は筐に入れども武を磨く實事あり弓は嚢に納れども亂を忘れぬ立入なすわざをぎなれば豐かなる時もて遊ぶ萬歳の聲ともいひつべし扨又役者の仕打に實をして見せるは功者になくては成らず然れ共歌舞妓狂言と看板を出してする事ゆへ面白き事を次にして本の事をして見せるはたとへば學問は十分に足りた

る僧の説法の下手なるが如し佛の本意と思へ其聽衆そろ〳〵寢むたげが來れば參詣も遠ざかりされば何を以てか衆生を濟度せんや機によりて説るべし面白からず工夫なきを下手役者とす芝居に華實のふたつありてこれを相對する事かたし操り淨るりは陰に屬すれば實を以て結ぶを可也(ヨシ)とし歌舞妓は陽氣の器なるゆへ實は薄くとも狂言の花あつて趣向は目ざましきを好とす又役者の藝風にも華實のふたつありて花とするは見物の大入を取りて舞臺賑はしく棧敷の贔負多きをいひ實とは狂言をそゝらず評判よりも見て面白くしまりあるをいふ狂言の趣向は陰陽和合なさゞれば見物大入を取事かたしたとへば美しき女形に難儀の體の狂言をさせ二の替りは春めきし櫻の木などの下に雪の肌くゝり附られ居る粧ひ見物の受よきもの也櫻の咲しは陽の至つて盛んなる處美しき女のいましめられし姿は陰の凝しかたちにて其中には詞にも筆にも盡されぬ甚深微妙の色情は可愛らしさとむごき體の面白さと有て見る人の氣を動かす事貴賤老若男女みな一同也此心得なき狂言作者はたとへ和漢の書籍に眼を晒し螢雪の勞を積とも詮なし芝居を見に行は欝情を散ずる爲なれば慰みに成趣向よし既に松といふ物はいつも緑の色をもちて眞實なる物なれども生けて慰みにはならず珍らしき椿はたつた二輪を金二歩出して生けをき二日も立ぬに花は落ても生けて樂しむ方は此方にあり彈正左衞門でもなき人が彈正左衞門と替名を附け武士でもない身が兩刀を帶し顏に白粉を塗て出るからは是が實の仕打と思はれんより見物の心を引立るこそ肝要なれ往古は新狂言の相談極りて後一場づゝ仕組立る時其役人を呼寄せ圓居してせりふを口寫しに敎へ一旦這入る所迄立て又小返しとて再返稽古し又次を作者せりふ工夫して口寫し立る事也其座の立者出る場は其立者狂言を仕組し也中興狂言の趣向六ヶ敷成てより執筆に頭書せよとてせりふ附のいひ出しを一とくだり程づゝ書しが當時にては書拔とて端役が心得ましたといふ一口の知れたせりふまで書て渡すやうに成ぬ狂言本は大阪にて根本江戸にて臺帳といふ今の如く委しく書事は金子一高より初むといへ共近來迄は此間思ひ入などゝせりふ附の外はト書といふ事さつとせしもの成しが當代は手を取て敎ゆる如く書り昔は一座の立

者の宅にて荒立より稽古なし總稽古といふ事計り舞臺へかけて見物を禁じ仕組御目に不懸と木戸口へ張札を致せし也敵役のせりふ數は少なければ强く見へ多言なるは惡し立役女がた總體のせりふ早かろ惡かろ大事なし遲かろ惡かろ猶わるしとてせりふのいひ廻し早きはこらへらるゝ遲きは惡き中にも惡きと也吃のせりふはカキクケコサシスセソ此文字計りを吃り其餘は吃るべからず猶又心得べきは吃りおのが心に我は吃りなりと思ふゆへ人の聞を恥しく思ひ嗜み〳〵吃る然れども嬉しき時腹の立時又はおかしき時は我を忘れて吃る也初中後吃りは口の中にて吃るべしとぞ昔の狂言は役者の肌を見せるといふ事なく大肌を脱ぐ心の時は上着を脱て白むくと成り腹切とても白むく越しに刀を引廻す此事は今もありて白むくを肌として昔より傳へ見馴たる事ゆへ自然と見物も承知なしねりぐりとて赤き綿糸を以て血汐とす然るに近來は正眞の殺刹の如く物すごく見せんとて蘇坊を用ひ渾身を朱に染る事とは成りぬ都て正眞をよしとすれども非人乞食の姿ばかりは奇麗に有たし非人敵打の狂言は中古姉川新四郎を當りを取る往昔荒木

與次兵衛手負の名人にて此狂言の元祖とす其時の打扮病かづらにて隨分黑々と油を附け顏の作りも白粉濃く塗りて手足も美しくなす衣裳は白小袖の無地大廣袖紅絹裏花色の丸ぐけ帶を前にて結びたり役者舞臺にて尻からげる事は小佐川十右衛門より初め片岡仁左衛門との立合に兩人よき男ゆへ見事なりしより其時白絖の三里紙を當て足の餝りと成す事を初めしより當代にても奴の役を勤る時はかならず三里紙を用ゆ昔の狂言は當代の如く少しの見へにもかげ打といふ事なし龍を遣ふか又は鬼神などの出るには物の蔭より打しゆへかげといひ太刀打にも打事なかりしが次第に立廻りも大形に相成其うへ四人詰八人詰などの大だてには數種の名目有宙がへり、手ばひ、猿がへり、杉たち、ぎはつりふね、跡返り、胸返り、やなぎ、五段返り、あごつき、詰よせ、天地、ひざ詰、そつ首落し、千鳥、引廻しなどゝて目ざましき事共をなすに附け蔭打にも兩三人出て添蔭といふ事を仕初め柏子木二三挺にて打立る事とは成りて蔭といふ本意を失ふ明和の頃あやつり舞臺の趣向にて並木正三後見に出られし時黑き着附上下にて勤められし事ありかく有

べき事也狂言一場の終りに幕を切るといふ事は染川十郎兵衞より初め拍子まくゑら幕などに各々とたんの見へあり又淨瑠璃狂言には口幕は三重幕切は段切幕といふ三重の幕に品々あり天皇立の大序の幕はかならず大三重也大三重は眞の三重ともいひて是は初段の中入より外にはなし其餘は行草の三重也狂言の摸樣の寄りて猛三重愁三重中愁ひ三重樂にていづれも口まく也序切二の切三の切四の切は段切まくといふ「譽を世々に殘しけりなどゝきつぱりと留る也大切五段目は打出し幕といひて往古は「仁義正しきものゝふの弓矢の家こそ久しけれと此文を諷ふ當代顔見世下の卷打出しに謠の和歌を揚るこれを和歌幕といへり延寶年中の頃迄は京大阪とも狂言の大切には其むかし出雲のお國が舞し時の打扮の如く天冠をいたゞき白き衣を着し八人づゝ舞けるこれを天冠舞といふ則神道は乙女の祕事にしてこの舞を頌する時は一切の諸神微妙の妓樂の德によりて感應なし給ふとぞ其祕文は

まんだらふれりとみふれりありやのゑやうどのとみなればまいてもゝつきもせず

元祿年中に至りては或は佛道によせ天人などに打扮ても勤しゆへ是を天人踊といひしが此儀も寶永年中に止みたり田舍芝居銚子の浦方などにては何の狂言にても大切に張子の赤鬼を出さねば見物の歸らざる所もあり是等も往古の天冠舞天人踊などの餘風ならん

舞臺衣裳鬘の論

往古女形の帶は幅三寸五分四寸ほどなりしが荻野澤之丞といふ女がた鳴神の狂言に帶の見へあしきゆへ幅廣の帶を仕初しより今に專ら是を用ゆ吉彌むすびといふ事は延寶の頃上村吉彌といふ女がたむすび初めしより其風儀市中にうつりて今に用ゆ又男子の如く四角にするを輕留多結びといふ平十郎結びといふは三代目村山平十郎といへる立役立に結び出たるより初る扮又染色に小太夫鹿子といふものあり京大阪にては江戸鹿子といふ貞享より元祿に至りて江戸若女がた伊藤小太夫が好みにて其後專ら流行すまた宇源太染といふは小野川宇源太といひし若衆方の好み初め市松染は佐野川市松が思ひつき文彌染は若女形中村文彌はじむ享保二年江戸中村座へ下り其節木

戸若い者などへ遣す紫色にして大しぼり也小六染は嵐小六左まきの染もやうを着て出たるより初り小六紐といふもの菅笠の紐を糸組打を附たり町方にても專ら用ゆ龜藏小紋は濁水の摸樣にて江戸市村座の若太夫市村龜藏より初む總じて衣裳の端手なるを着る事染川十郎兵衞より發り其頃の衣裳といふは紅絹の無地に同糸にて大きなる燕を只二つ縫たるなどを物好きといへり又袖の火打(カ)をば鱗形に縫せたり又女がたのよき衣裳を着初しは峯の小ざらしより發り是迄は唐織は着ざりしよし西鶴の大鑑に見へたり後世二の替り衣裳とて縫箔手を盡すといへ共當世の如き華美なる事にあらず既に明和の初め山下金作薄雪姫を勤めし時の衣裳に緋ぢりめんに金糸にて歌がるたの摸樣なりしが見物見事なりとて目を驚かせしとぞ扨又承應の頃の歌舞妓は立役てきやく何れも茶筅髮に結ひ女がたは今の如く野郎帽子女鬘などゝいふ物もなく月代の上に手拭を置き女の身振を寫せり是を古の太夫の代りに立て興行せしが鳥居庄七といふ女がた幅子を仕出しひらりと提て着たりしを皆々眞似び色は好み次第にて有しに玉川千之丞より黑き帽子を上にて折込み兩方へさがらぬやうにしけるを風流の物ずきといへり又一種澤之丞帽子といふは元祿の頃澤之丞といふ女形かづき始とおもの帽子共いへり其頃迄はふつゝかなる木綿衣裳をゆき短かに着なせし風俗に老若男女うつゝをぬかしぬ其後加茂川野鶴の兄に傳兵衞といふものやでんぼうしといふ物を工夫仕出し四角なる絹の四隅に鉛りにて鎮りを付て落ぬやうに拵へ出せしを其後水木辰之助加茂川のしほと申合せ(かも川のしほは角の芝居の座元なるよし初編金屋金五郎道行の文中に見へたり)色は紫に極め縮緬にて風流の帽子を作り水木ぼうし共あやめぼうしともいひ今の野郎帽子とは成りぬ扨また鬘の好みは其時代にて樣々と變れり辰松風は卷たてながく高く上げて結ぶ幸助撫といふは立役桐の谷權十郎始め差髷は若女がた瀨川菊之丞始め三つ髷は中村八重桐調子丸といふ髷は四天王寺伽藍鑑の狂言の時嵐三五郎の風也勝山は勝山仙州初めはらげ髮といへる事は樂屋入の急ぐより思ひ寄たる髷なりしがいつとなく專ら用ゆるやうに成れり鬘に紐を付たる事は水木辰之助かづらに光澤を出しうつくしくなしたるは荻野八重桐也附髮は姉川新四郎ぶしやうかづら鬢かづら

は元祿より正德頃の立役笹尾音十郎始む當無用ゆる髱に數品の名目あれどもくだ〳〵しければ爰に省く勢州古市中の地藏などの芝居にて髱をクツトウと呼ぶは假頭のよび訛れる也宛委編に吳婦女盛んに粧ひて膳ひて風流をなす翟きびしく其髮を束ね其下へ角の系なへて入る時は兩耳を過す時はその鬢左右へ覆ひて見事なりと見それが後々かうじもて歷々の公王の婦女も緩鬢(ユルビン)に髮をゆひ又髻もの自ら傾てゆうにするを風流となせり又髢(タカツラ)をも多く入れんとすれ共さかんに餝りをなすうへ思ふやうにも入られず常にはおもくして戴くも不自由ゆへまづ木や籠を頭のなりにして其うへに髮を裝ひ名附て假髻(カケイ)といひ或は假頭(カトウ)とも名づく天寶の始め楊貴妃も常に假鬢をもつて首の餝りとすといふは是なり

千秋萬歲樂

雅樂一たび流れて猿樂と成り猿樂又流れて歌舞妓成るみな樂の流れなるゆへ劇場のならひにて都て物の納りに千秋萬歲樂といふ事を用ゆ樂說記閑曰千秋樂盤涉調の曲漢の文帝の作也民百性畜田を作りて秋に緣有故に千秋樂に民を撫と撫育の心也萬歲樂平調の曲隋の煬帝の作也又日本にては用明天皇故作之給ふと根源抄に出す萬歲は命をのぶるに緣あるゆへにかくいふ也西峯松下氏云日本紀私記に云今俗曰阿良禮走師說此歌曲之終必重稱萬年阿良禮今故曰萬歲樂是古語之遺也

梁塵愚案抄　神樂歌

本　せんざい〳〵せんざいや千とせのせんざいや

末　まんざい〳〵まんざいやよろづよのまんざいや

說文に云秋は米穀熟する也とありてもの〻成就する時を秋といふ也麥が熟するゆへに四月をも麥秋といふ類也故に千秋も千年といふに同じ韓非子に云君をして千秋萬歲の聲を聽しめんといふ事あり王維の詩にも萬歲千秋聖君に奉ずと作りて目出度事に用る詞也また吉祥日といふ事を書るも 說苑に云吉祥及ニ子孫一とありてこれもめでたき事也

今古参考南水漫遊續編五の卷大尾

新群書類從第二 終

黑川眞道
水谷不倒 校訂

明治三十九年七月二十日印刷
明治三十九年七月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會代表者
編輯兼發行者　市島謙吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
印刷者　本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
印刷所　東京活版株式會社

大正十四年二月

喜代郎拝